レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

⑧

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

レーニン10巻選集のしおり

No. 2
1970. 4. 28
大月書店

レーニン10巻選集
第八巻(第二回配本)について

岡本博之

この文章は、レーニン10巻選集第八巻におさめられている著作について、それらがどのような条件のもとで、どういう実践的課題を解決するために書かれたのか、その内容の要点はどういうことなのか、またそれは現在どんな意義をもっているだろうか、などという点について私が学びあるいは感じたことを簡単に記したものです。読者のみなさんが、レーニンの著作について学習されるにあたって、なんらかの参考として役だてていただければ幸いだと思います。

この第八巻には、一九一七年八月から一九一八年八月までの一年のあいだにレーニンが書いた著作がおさめられています。これらの著作は、大きくわけて二つのグループに属しています。

第一のグループに属するものは、十月革命の前夜に書かれた『国家と革命』をはじめとする一連の著作です。レーニンは、これらの労作のなかで、労働者階級とその党の権力を掌握する準備の活動を指導しながら、マルクス主義の国家論と革命論を発展させ、プロレタリアートの国家の政策の基本を明らかにし、その最初の実践的諸方策の輪郭をしめしました。

第二のグループは、十月革命勝利の日にひらかれたソヴェト第二回全ロシア大会における『講和についての報告と結語』と『土地についての報告』や、社会主義建設に着手するレーニンの計画である『ソヴェト権力の当面の任務』、その他の、ソヴェト権力の初期の時期におけるソヴェト大会や党大会でのレーニンの報告やかれの書いた宣言やアピールおよび論文からなっています。これらの文献は、この時期において党とソヴェト国家を指導したレーニンの活動を反映しており、そのなかでかれは、十月社会主義革命の意義を明らかにし、国際帝国主義の包囲のなかで、ロシアの労働者階級と貧農の強力な同盟をかため、国際プロレタリアートの連帯の立場を堅持しながら、帝国主義戦争から離脱し、つづいて成功裡に社会主義建設を推進する計画について述べています。

* * *

すでに読者のみなさんが、この選集の第七巻について学習されたように、一九一七年の二月革命ののち、臨時政府に代表されるブルジョアジーの独裁と労働者兵士代表ソ

ヴェトに代表されるプロレタリアートと農民の独裁という二重権力がうまれました。この年の四月に外国より帰還したレーニンは、党の集会で『四月テーゼ』とよばれる報告をおこない、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命へ移行する明確な方針をしめしました。ボリシェヴィキ党の四月協議会はこのテーゼを採択し、「全権力をソヴェトへ！」のスローガンをかかげました。このスローガンは二重権力を終わらせ、エス・エルやメンシェヴィキが多数をしめていた当時のソヴェトが全権力をにぎることを意味しましたが、しかしレーニンは、政府の交替は全権力をにぎったソヴェト内部での平和的闘争をつうじておこなわれ、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化は、平和的な道をとおっておこなわれることができる、という見とおしをもっていました。これが革命の平和的発展の方針でした。ボリシェヴィキは四月協議会の決定にもとづいて、大衆を獲得し、戦闘的に教育し組織するための大きな活動を展開しました。

しかし臨時政府が全権力をソヴェトに渡せと要求するペトログラートの労働者・兵士・水兵のデモに一斉射撃をくわえて鎮圧し、さらにボリシェヴィキにおそいかかった七月事件ののち、国内の政治情勢は急角度に変化しました。臨時政府は、公然と帝国主義と反革命の側にうつりました。二重権力は終わり、全権力は臨時政府の手にうつり、ブルジョアジーの独裁が樹立されました。

革命の平和的発展の時期は終わりました。ボリシェヴィキは戦術を変更して地下にうつり、七月末から八月はじめにかけて第六回党大会をひらいて、貧農と同盟したプロレタリアートの手に権力を掌握するための武装蜂起を準備せよというスローガンを提出して、社会主義革命の準備にかかりました。

以上のような情勢のなかで、レーニンは、はじめのうちはペトログラード市内にかくれ、その後、郊外のラズリフ湖のほとりにかくれ、八月にはフィンランドのヘルシングフォルスにうつりましたが、日夜臨時政府の追及にさらされながら、この年の八月から九月にかけて、かれの有名な著書『**国家と革命。マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務**』を仕上げました。

ロシアで社会主義革命が成熟しつつある条件のもとで、革命の根本問題である国家権力の問題を明確にし、プロレタリアートの社会主義革命の国家にたいする関係の問題を定式化することは、理論的にも、実践的にもきわめて重要な意義をもっていました。

レーニンがこの著作の第一版序文に述べているように、労働運動が比較的平穏に発展した数十年の間に蓄積された日和見主義の諸要素は、第一次世界大戦が始まると、世界の公認の社会主義政党を支配する社会排外主義の潮流をつくりだしました。この潮流の特徴は、「社会主義の指導者」たちが、市場、原料資源、植民地という獲物の分配と再分配のための帝国主義戦争を支持して、「自分の」国のブルジョアジーの利益だけでなく、「自分の」国家の利益にい

やしい従僕的な仕方で順応しているということにありました。だから、レーニンは「一般にブルジョアジーの影響から、とくに帝国主義ブルジョアジーの影響から、勤労大衆を解放するための闘争は、『国家』についての日和見主義的偏見と闘争することなしには不可能である」という立場にたって、日和見主義による歪曲と俗悪化からマルクスとエンゲルスの国家学説を擁護し、復活させ、この歪曲の主要な代表者であるカウツキーの理論を徹底的に批判することをかれの著作の主要な任務と考えました。しかしレーニンは、この任務をみごとに果たしたばかりでなく、一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験にもとづいて、マルクス＝エンゲルスの国家とプロレタリアートの独裁の理論をさらに発展させました。

レーニンは、国家はさまざまな階級の利益を融和することを使命とする超階級的な機関であると説くブルジョア的また日和見主義的見解を反駁し、「国家は、階級対立の非和解性の産物であり」「階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関」であることを明らかにしました。

レーニンは、労働者階級は、資本のくびきからみずからを解放するプロレタリア革命の過程で、古いブルジョア国家機構を粉砕して、自分たちの国家、すなわちプロレタリアートの独裁をつくりだし、打倒された搾取階級の反抗を鎮圧し、新しい社会主義社会の建設を組織しなければならない、と書いています。かれは、すべての日和見主義者、改良主義者がプロレタリアートの独裁を否定するあわれむべき俗物や小ブルジョア民主主義者であることを明らかにしながら、マルクスの学説の主要なものはプロレタリアートの独裁の学説であり、階級闘争を承認するにすぎないものはまだマルクス主義者ではない、「階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認に拡張する人だけが、マルクス主義者である」と言っています。

レーニンは、プロレタリアートの独裁は、新しい最高の型の民主主義であり、プロレタリア民主主義は、大多数の勤労者が真に国家の統治にくわわることを保障するものであることを指摘しました。かれは、ブルジョア民主主義は、ブルジョアジーの独裁の政治形態の一つであり、どんなに民主的な共和制でも、形式的、欺瞞的であり、少数者のための民主主義にすぎないことを明らかにしましたが、同時に、ブルジョア民主主義は労働者階級が解放闘争をおこなううえでの最上の条件をつくりだすものであるから、労働者階級はつねにブルジョア民主主義を擁護し、これを拡大するためにたたかわねばならないことをしめしました。

レーニンは、国家権力の新しい政治形態としてのソヴェトの世界史的な役割を強調しましたが、ソヴェト形態のみを唯一の可能な、また唯一の妥当なものとみなしていたわけではなく、さまざまな国におけるプロレタリアートの独裁の国家形態は、それぞれの国の具体的歴史的諸条件におうじて多種多様でありうることを予見していました。かれは次のように述べています。「資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数の、多種多様な政治形態

をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避的にただ一つ、プ、ロ、レ、タ、リ、ア、ー、ト、の独裁であろう。」この指摘の正しさは、プロレタリアートの独裁の政治形態としての人民民主主義の国家制度をとっている国々の経験によって検証されました。

レーニンは、社会主義と共産主義とは、一つの共産主義社会の二つの段階であり、その差異は生産力の発展水準、その経済的、政治的および文化的成熟度によって規定される、というマルクス＝エンゲルスの学説を発展させて、それぞれの段階の基本的様相を特徴づけ、国家は共産主義の高い段階で死滅することを明らかにしました。

七月事件で全権力を奪取したブルジョアジーは、すでに無力化されたソヴェトをうちくだき、むきだしの革命独裁を樹立する準備を始めました。臨時政府が最高総司令官に任命した帝政派のコルニーロフ将軍が八月二五日軍事独裁政府をつくりだすために軍隊をペトログラードに集結しました。ボリシェヴィキ党中央委員会は、反革命にたいする積極的な武力反撃を首都の労働者と革命的な部隊によびかけました。このような措置がとられたために、コルニーロフの陰謀は粉砕され、革命を圧殺しようとするブルジョアジーと地主のくわだては失敗に帰しました。

コルニーロフ陰謀の粉砕は、国内の階級の力関係を大きく変えました。帝国主義戦争がつづけられ、経済的崩壊が破局的なものとなっている情勢を背景として、革命の波はいよいよたかまっていき、人民大衆のあいだでのボリシェヴィキの権威と影響力は日ごとにつよまり、全国にわたってプロレタリアートの圧倒的多数が、党の影響下にはいり、農村でも軍隊でも党の影響がつよまりました。ソヴェトはよみがえり、ふたたび大衆の戦闘的、革命的な機関となりました。九月のはじめには、ペトログラードおよびモスクワのソヴェトはボリシェヴィキの手にうつり、他の諸都市でもボリシェヴィキがソヴェト内の少数派から多数派に変わりはじめました。党は、七月事件いらい一時とりさげていた「全権力をソヴェトへ！」のスローガンをふたたびかかげました。こんどはこのスローガンは、ブルジョアジーの独裁にたいして蜂起し、プロレタリアートの独裁を樹立せよ、というよびかけを意味していました。

九月のなかば、レーニンは、党中央委員会、ペトログラードおよびモスクワ委員会にあてた手紙『ボリシェヴィキは権力を掌握しなければならない』『**マルクス主義と蜂起**』を書きました。この二つの手紙のなかで、レーニンは国際情勢と国内情勢の分析にもとづいて、蜂起の技術的準備に即時着手することを党に提案しました。レーニンは、いまでは労働者階級の多数が党のスローガンの正しさを確信してボリシェヴィキを支持しており、両首都のソヴェトでボリシェヴィキが多数をしめたので、われわれは国家権力をにぎることができるし、またにぎらなければならない、蜂起の情勢は完全に成熟しているのだから、党の任務は、蜂起を技術として取り扱い、それを組織的、技術的に十分に準備しなければならない、と蜂起計画の概略を示しています。

この手紙は、九月一五日の中央委員会で審議され、これを指令として地方党組織に送ることがきめられました。中央委員会は蜂起の準備にとりかかりました。反革命の側でも革命を阻止する方策をとり、首都にはカザック部隊が集結され、第二回目のコルニーロフ陰謀が準備されていました。メンシェヴィキとエス・エルは革命的高揚をよわめるために、「全ロシア民主主義会議」なるものを招集し、その構成人員のなかから「共和国臨時評議会」（「予備議会」）を選出して、ロシアにおいて議会制度がおこなわれているかのような外観をつくりだし、ブルジョアジーとの協調政策を新しいよそおいのもとでつづけようとしました。

レーニンは、これにたいして民主主義会議は革命的人民の多数を代表してはおらず、協調主義的な小ブルジョア的上層を代表しているにすぎないものであるから、ボリシェヴィキはこの会議によって選出された予備議会をボイコットすべきであると主張し、もしボリシェヴィキが短期間でも予備議会に参加するようなことがあれば、それは大衆にこの機関が革命の課題を解決するものであるかのような幻想をいだかせるであろうと述べています。

党中央といっそう緊密な連絡をとるために首都に近いヴィボルクに移ったレーニンは、予備議会にたいする対策を理論的に基礎づけるために『**政論家の日記から——わが党の誤り——**』を書きました。このなかでレーニンは、ボイコット問題をどのようにとりあげるべきかということはロシア革命の経験が明らかにしめしているとして、かつてブルィギン国会や第三回国会にたいして党がとった戦術を検討しています。それにもとづいて、レーニンは議会にたいするボイコット戦術なり、参加戦術なりをマルクス主義的にみちびきだそうとする場合に最も主要な、そして客観的な根拠は、「諸階級の客観的な相互関係、現存の型の代議機関の内外でかれらが果たしている役割（経済的および政治的）、革命の成長と衰退、議会外の闘争手段と議会的闘争手段との相互関係」であることを明らかにしました。

レーニンは、このような基準にもとづいて、予備議会に参加するという戦術は、諸階級の客観的な相互関係に、現在の時機の客観的な諸条件に照応していないから誤っており、これをボイコットして、ソヴェトのなかで、労働組合のなかで、大衆のなかで闘争をよびかけねばならないことを強調しています。

しかしカーメネフを先頭とする予備議会のボリシェヴィキ議員団は、予備会議をプロレタリアートが権力を獲得するまでの一種の民主主義議会であるとして、これに積極的に参加することを主張してボイコット戦術に反対しました。党中央は、議員団の誤りを正し、かれらを予備議会から脱退させるとともに、そのなかで多数を獲得することを期して第二回ソヴェト大会の招集を準備しました。

レーニンは、このような状況のなかで一方では武装蜂起の準備を説きながら、他方では、革命の平和的発展のどんな機会をものがすまいとする周到な配慮をしています。

九月の末に書いた『**革命の任務**』のなかで、次のように

述べています。いま、ソヴェトにとって、エス・エルとメンシェヴィキにとって革命の歴史のうえできわめてまれにしかみられない革命の平和的発展を保障する可能性がひらけている。もしいまソヴェトが、諸国民に平和を、土地を働くものへ、飢餓と崩壊にたいするたたかい、など即時とるべき具体的方策を実行するために国家権力を完全に掌握するならば、ロシア住民の一〇人中九人までですなわち労働者階級と圧倒的多数の農民の支持が保障されるであろう。だから、ソヴェト自身が動揺しないかぎり、ソヴェトに反抗するなどということは問題にならないであろう。したがって、「もしソヴェトが全権力をにぎるなら、それは……革命の平和的発展を」すなわち「人民が自分の代表を平和的に選挙し、ソヴェト内部で諸党が平和的にたたかい、さまざまな党の綱領を実地にためし、一つの党の手から他の党の手へ平和的に力をうつすことを保障するであろう。」そして、おそらく、これがその最後の機会であろうと。

だが、エス・エルやメンシェヴィキの指導者たちは、レーニンの提案を検討してみようとさえしませんでした。

レーニンが武装蜂起を説いたのは、当時のロシアの実情に即してであり、レーニンの言ったことをそのまま機械的にわが国にあてはめることのできないのは当然です。しかし、そのロシアについてすらかれが労働者階級の手への権力の平和的移行の可能性について書き、またその実現を望んだことは、意義ふかいことです。

あらゆる情勢は、ボリシェヴィキが単独で国家権力を掌握することがまったく現実的であるばかりか緊急の問題であることをしめしていました。しかしブルジョアジーとそれに追随するエス・エルとメンシェヴィキは、ボリシェヴィキには単独で国家権力を掌握しても、ごく短時日しかそれを維持できないだろうという中傷をわめきたてました。

レーニンは一〇月一日に脱稿した**『ボリシェヴィキは国家権力を維持できるか?』**において、これら反革命派のすべての論拠に一つひとつ理論的な反論をおこないました。

レーニンは、プロレタリアートは国家権力を掌握できないという立論にたいして、プロレタリアートは、古いできあいの国家機関をそのままひきついで権力を維持することはできないが、旧国家機関のなかにある抑圧的なもの、因襲的なもの、ブルジョア性のぬきがたいものをすべて打ちくだいて、かれら自身の新しい国家機関をつくりだし、これによって権力を維持することができる。労働者・兵士・農民代表ソヴェトとはまさにそういう機関であり、ブルジョア議会制度にくらべて民主主義の発展のうえで世界史的な意義をもつ一歩前進である、ことを明らかにしました。

レーニンは、さらに、資本主義国家には、主として「抑圧的な」機関のほかに、できあがった形で資本主義からひきつぎ、もっと巨大な、もっと民主主義的なものにつくりかえて、社会主義のもとでの経済生活の組織にあたらせるべき国家機関がある。それは、国有にうつされ、ソヴェトに従属させられた銀行、シンジケート、郵便、消費組合、職員組合のような記録＝記帳を果たす機関である。こうい

う「国家機関」は資本主義のもとでは完全に国家機関であるわけではないが、社会主義のもとでは完全に国家機関となるであろうし、労働者階級はこれを十分に掌握することができるであろう、と述べています。

レーニンはこのように労働者権力とは実際にはどんなものであり、それはなにを基礎としており、なにをおこなわなければならないかを明らかにし、ロシアには、社会主義革命勝利の経済的・政治的前提がすべてそなわっている——それは、大工業、銀行、鉄道、そして広範な人民大衆の支持のもとに権力をその手ににぎって社会主義的生産を組織する能力をもったところの、ボリシェヴィキに指導される革命的プロレタリアートである、と述べて反革命派に壊滅的な打撃をあたえました。

『党綱領の改正によせて』は一〇月六—八日に執筆されました。四月の全国協議会で「せまりつつある社会主義革命と結びつけて帝国主義と帝国主義戦争の時代を評価する」という方向で綱領を改正することがきめられており、九月二〇日の中央委員会で綱領を採択するために一〇月一七日に臨時党大会を招集することが予定されました。レーニンは、大会の成功のために、この論文を準備しソコリニコフ、ブハーリン、スミルノフらの改正意見を検討しています。

総論部分についての主要な問題は、帝国主義の問題です。レーニンは『帝国主義論』のなかでかれが述べている帝国主義の五つの主要な標識にもとづいて帝国主義の規定や特徴づけの定式化についてのかれとソコリニコフの意見の相違を的確に指摘しています。この部分は、『帝国主義論』の正しい理解のために役だつとおもいます。

最小限綱領の部分についてはレーニンは、最小限綱領と最大限綱領とに分けるやり方は古くさくなった、社会主義への移行が問題となっている以上、最小限綱領はもはや不要であり、じかに社会主義への過渡的方策の綱領をだすべきであるというブハーリンやスミルノフの一見きわめて急進的だが、きわめて根拠のない提案を批判しています。レーニンはまた、多民族国家の党の綱領のなかには民族自決権の問題をとりあげることがきわめて重要であり、自決権の新しい定式化をあたえるのみならず、それについての宣言をとりいれることが必要であることを強調しています。

一〇月七日レーニンは非合法にペトログラードに到着し、翌日**『一局外者の助言』**を書きましたが、これは一〇月一〇日のボリシェヴィキ党中央委員会会議にあてた、蜂起についての実際的な助言でした。

レーニンは「権力をソヴェトにうつすということは、いまでは実際上、武装蜂起を意味する」ことを強調し、「武装蜂起は、政治闘争の特殊の形態であって、特殊の法則にしたがう」ことを明らかにし、マルクスによって定式化された武装蜂起の主要な法則にボリシェヴィキの注意をうながしました。そしてマルクスの学説を指針とし、ロシアの情勢を考慮にいれて、具体的な蜂起計画を指示しています。

一〇月一〇日の党中央委員会の会議は、武装蜂起の即時

準備という問題の討議にあてられました。レーニンは当面の情勢について報告をおこない、決議案を提案しました。中央委員会はこの決議案を採択しました。それは『**ロシア社会民主労働党中央委員会会議決議**（一〇月一〇日）』と題して本巻におさめられていますが、そのなかには、武装蜂起が避けられないものとなり、機は完全に熟していること、党の全活動は武装蜂起を組織し実行する任務に従属させられなければならないことが指示されています。

この決議に反対したのは、ジノヴィエフとカーメネフだけでした。かれらは労働者階級はまだ権力をにぎるところまで成長していないことを論証しようとして、メンシェヴィキの立場におちこみました。トロツキーは決議に直接反対はしませんでしたが、蜂起を失敗させてしまうにちがいないような修正案を出しました。

一〇月一六日に中央委員会拡大会議がひらかれスターリンを長とする蜂起指導のための軍事革命委員会がえらばれました。この会議でもジノヴィエフとカーメネフは武装蜂起に反対し、かれらの意見が否決されると、メンシェヴィキの新聞で党が武装蜂起を準備していることをあばきました。臨時政府はすぐさま革命を鎮圧するための方策を講じはじめましたが、しかし反革命派には革命勢力の動員をおしとどめる力はありませんでした。党は蜂起の実践的準備をますます精力的にくりひろげました。

一〇月二四日ボリシェヴィキ党の指導のもとに武装蜂起が開始されました。その夜レーニンは蜂起の司令部であるスモーリヌイに到着し、蜂起の指導を直接自分の手ににぎりました。二五日朝、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト軍事革命委員会はレーニンの書いた檄文「ロシアの市民へ！」を発表し、臨時政府が打倒され、国家権力がソヴェトの手にうつったことを人民大衆に知らせました。この日の夜スモーリヌイで第二回ソヴェト大会がひらかれ、中央と地方の全国家権力がソヴェトの手にうつったことが宣言されました。

ソヴェト権力の最初の歴史的な布告は、二六日の夜第二回ソヴェト大会でレーニンの提案によって採択された「講和についての布告」と「土地についての布告」でした。大会で労働者・農民のソヴェト政府――人民委員会議が創設され、その議長にレーニンがえらばれました。

本巻にはレーニンが二六日の夜ソヴェト大会でおこなった『**講和についての報告**』『**講和についての報告の結語**』および『**土地についての報告**』がおさめられています。レーニンは、第一の報告と結語において、講和の問題が、今日の切実かつ焦眉の問題であることを指摘し、すべての交戦国の国民と政府にたいして、無併合・無賠償の公正な民主主義的講和を即時締結するための交渉を即時ひらこうという提案を出しました。

レーニンは講和交渉をおこなうために、すくなくとも三ヵ月の即時休戦を締結することを各交戦国に提唱しました。

レーニンは、ソヴェト政府が秘密外交を廃止し、ツァーリ政府や臨時政府が西ヨーロッパの帝国主義者とのあいだ

に締結した秘密条約を廃棄すること、併合と賠償にかんする条項を廃棄すること、強奪と暴力にかんするすべての条項を拒否するが、友好的な約定や経済協定をふくむ条項はすべて歓迎することを宣言しました。
報告は、ロシアのプロレタリアートが、「平和の大業と勤労被搾取住民大衆をあらゆる隷属とあらゆる搾取から解放するという大業を、成功裡に最後まで遂行するのをたすけるであろう」ことをイギリス、フランス、ドイツの労働者階級にうったえるよびかけで結ばれています。
レーニンの報告とそれにもとづく布告によって、帝国主義戦争からの革命的離脱の道がひらかれ、平和と安全、諸民族の同権と友好の要求にもとづく社会主義国家の外交政策の基礎がすえられました。
レーニンは、大会の日程のうえでのもう一つの重要議題である土地の問題について報告し、かれが書いた「土地についての布告」を読みあげましたが、この布告にもとづいて、土地私有権は永久に廃止され、全人民的・国家的所有に変えられました。農民は宿望を実現しました。全農民は、地主、ブルジョアジー、皇族、修道院、教会の所有していた一億五千万ヘクタール以上の土地を手にいれ、年々約五億ループルの小作料支払いから解放されました。
レーニンの土地についての報告とそれにもとづく布告とは、ロシアの農民を終局的に労働者階級の同盟者に獲得し、社会主義革命の勝利をかためるための党のたたかいのなかで、きわめて重要な意義をもっています。
十月革命の勝利ののち、レーニンは、きわめて複雑で困難な情勢のもとでソヴェト国家を建設し強固にするための、社会主義建設をおしすすめるための、革命の成果を内外の敵から守り、他の国々のプロレタリアートとの連帯をつよめるための、党と政府の全活動を指導し、組織しました。
レーニンは、労働者階級と勤労農民との同盟が、ソヴェト権力の確固とした土台であると考えて「ロシア共和国では、今後は、国家機構と国家統治の全体は、上から下までこのような同盟のうえに立てられなければならない。このような同盟だけが……社会主義の勝利を保障するであろう。」と書いています。かれは、このような同盟の可能性と必然性は、両者の根本的利益の共通性からくることを明らかにし、「賃金労働者の利益と労勤被搾取農民の利益には根本的なくいちがいはない……社会主義は、両者の利益をみたすことが完全に可能である。社会主義**だけ**が、両者の利益をみたすことができる」と述べています。
このような立場にたって、レーニンは、一九一七年一一月に執筆した論文『**労働者と勤労被搾取農民の同盟**』のなかで、いま多くの農民から信頼されているエス・エル左派とボリシェヴィキ派労働者の同盟は「誠実な連合」でありうること、そして社会主義革命が勝利し、ソヴェト権力が確立されているもとで、エス・エル左派とかれらに味方する農民が、工場の労働者統制、銀行の国有化などのボリシェヴィキ的政策に同意する場合、プロレタリアートは、勤労被搾取の小農民が提案する均等な土地用益などのエス・

エル的な過渡的方策にたいして、それが社会主義の大業に害をもたらさないかぎり、これに同意する義務があること、そうすることによって労働者と勤労農民の同盟を強化すべきことを強調しています。

この論文は、労農同盟の実現と強化にあたって、労働者階級とその党は、農民にたいしてどのような態度をとらなければならないかということについての深い教訓をあたえています。

当時、党が直面していた中心的問題の一つに憲法制定議会の問題がありました。憲法制定議会の選挙は、一九一七年の一一月におこなわれました。この選挙は、人民のかなり多数のものがまだ社会主義革命の規模と意義を完全には知ることができなかったという事情のもとにおこなわれたために、首都や工業中心地から離れた地方や県ではソヴェト権力の敵である右翼エス・エルが圧倒的多数の議席をしめ、このことを利用して権力をにぎろうと企てました。しかし一二月にはいるとエス・エルは分裂し、勤労農民は右翼エス・エルから完全にはなれてしまいました。こうして憲法制定議会の構成は、国内の階級的な力関係の実際を反映しないものになっていました。

一九一八年の一月のはじめ、レーニンは、『**勤労被搾取人民の権利の宣言**』を書きました。これは十月いらいソヴェト権力がおさめた基本的な成果を条文化したものであり、最初のソヴェト憲法の基礎となったものです。

『宣言』は、「ロシアを労働者・兵士・農民代表ソヴェト共和国と宣言する。中央および地方におけるすべての権力は、このソヴェトに帰属する」と述べ、つづいてこの「ロシア・ソヴェト共和国は、各民族ソヴェト共和国の連邦として、自由な諸民族の自由な同盟にもとづいて創設される」ものであることを声明しています。

『宣言』はさらに、ソヴェト権力の基本的任務を、人間による人間の搾取の根絶、社会の階級分裂の撤廃、搾取者の反抗の鎮圧と社会主義的社会組織の確立と規定し、平和の布告、土地についての布告、労働者統制、すべての銀行の国有化、全般的労働義務制、労働者と農民の社会主義的赤軍の編成などについての布告を承認し、ソヴェト政府の実行している外交政策に賛成しています。

『宣言』は、十月革命前にブルジョアジーの支配のもとで作成された政党名簿にもとづいて招集された憲法制定議会は、ブルジョアジーにたいして社会主義革命をはじめた勤労被搾取諸階級の意志と利益とに不可避的に衝突しており、したがって革命の利益は、憲法制定議会の形式的権利に優先することは当然であるという見地から、この議会がソヴェト権力と人民委員会議の法令を無条件的に支持しながら、自らの任務を、社会を社会主義的に改造するための根本原則をうちたてることに限定すべきであることを強調しています。

全ロシア中央執行委員会は、一九一八年一月にひらかれた憲法制定議会に、この『宣言』の採択を提案しました。しかし憲法制定議会で多数をしめる反革命派は、それを審

議し採択することを拒否しました。こうしてソヴェト権力と人民の大多数の意志に公然と敵対してその反革命的な本質を暴露した憲法制定議会は、一月六日全ロシア中央執行委員会の布告によって解散されました。

レーニンと党は、ソヴェト国家制度を創設しながら、それと同時に、社会の社会主義的改造をめざす労働者階級の闘争を強力に指導しました。

レーニンは、一九一七年一二月に書いた論文『**競争をどう組織するか？**』のなかで、農民が土地を得たことと工業をはじめすべての企業で労働者による統制が実施されたことにもとづいて「何世紀にわたる他人のための労働、搾取者のための強いられた労働ののちに、いまやはじめて、自分のための労働、しかも最新の技術と文化のあらゆる成果に立脚する労働の可能性が現われ」たこと、そして勤労者が「企業心、競争、大胆な創意を発揮する可能性がいまやっと、ひろく真に大衆的につくりだされ」たことを指摘しています。

新しい社会主義社会を建設するための創造的な活動は、広範な勤労大衆の積極的参加をまってはじめて成功をおさめることができます。だからレーニンは、社会主義社会の建設に自主的にとりかかろうとしはじめたばかりの勤労被搾取者の自主的創意をできるだけ発展させることがなによりも必要であると考えました。

資本の桎梏から解放された労働者大衆にとって、いま必要なことは、新しい仕方で生産を組織し管理することを学び、みずから経済の組織者となることでした。そしてかれらが当面していたなによりも重要な任務は、国民経済で生産されるものを記帳し、全生産物の消費を統制することでした。このことなしには単一の計画経済をうちたてることはできません。だからレーニンは、「社会主義的な記帳と統制の一時期がなければ、共産主義の低い段階にすら到達することは不可能である」ことを強調して、労働者、農民、勤労大衆にたいして「生産物の生産および分配の記帳と統制に自分でとりかかれ――ここにのみ社会主義の勝利の保障がある！」とよびかけています。

この記帳と統制は、ものわかりがよい労働者、農民ならだれでも十分にこなせることですが、しかしそれを組織するためには、大衆のなかから生まれてくる組織的人材を必要とします。そのためにレーニンは、組織者としての成功をめざす競争、すなわち、生産の改善、労働生産性と生産量の不断の向上を目標とする社会主義競争を全国家的規模で組織することをよびかけ、この競争をつうじて、労働者と農民がその天分をのばし、自発性と創意性を発揮し、自己を社会主義的に再教育して新しい労働規律をつくりあげるとともに、とくにかれらのなかからすぐれた組織者、管理者をつくりだすことの必要性を説いています。

この論文でレーニンが提唱した社会主義競争は、ソ連や人民民主主義諸国における社会主義建設においてひろく実践され、その重要な原動力となっています。

国の社会生活のすべての分野で革命的改造がおこなわれ

たことによって、ソヴェト権力はいちじるしく強化されましたが、これを決定的に強化するためには、ドイツとの戦争状態を終結させねばなりませんでした。
ドイツとの交渉は一九一七年一一月二〇日、ブレストーリトウスクで始まりました。当時の国内および国際情勢のもとでは、ソヴェト政府は、祖国と革命を救うためには、ソヴェト権力を強化し、侵略者から国を守る力のある新しい赤軍をつくるための平和の息つぎを得るために、ドイツ帝国主義の苛酷な講和条件にも応じなければなりませんでした。しかし、メンシェヴィキやエス・エルから帝政派とカデットにいたるまでのすべての反革命派は、講和の調印に反対しました。かれらは、講和交渉を決裂させ、まだかたまっていないソヴェト権力をドイツ帝国主義との戦争におしやることによって、革命の息の根をとめようとしました。
トロツキー一派と「共産党左派」と自称するブハーリン一派も講和条約に反対しました。「共産党左派」は、革命的言辞で偽装した挑発政策「ドイツとの革命戦争」を呼号しました。トロツキーは、ドイツ革命は成熟しているから、ドイツ人が攻めてこられるはずはないという投機的観測に固執しました。ブレストでのソヴェト側の講和代表団議長であったトロツキーは、党中央の指令にそむいて講和条約に調印することを拒否しました。ドイツ軍は攻勢に転じ、おそるべき危険がソヴェト共和国にせまりました。
しかし、ソヴェト権力を打倒してロシアを自国の植民地にすることを目的とするドイツ帝国主義の武力干渉は、国内に強力な革命的高揚をよびおこしました。党とソヴェト政府の発したよびかけ「社会主義の祖国は危険にさらされている！」にこたえて若い赤軍の部隊は、ドイツ軍の攻撃を勇敢に撃退しました。ドイツ政府は講和に調印することに同意しましたが、その条件は最初のときよりもはるかに苛酷なものでした。一九一八年三月三日ドイツとの講和条約が調印されましたが「共産党左派」は、党にたいする攻撃をさらにつよめ、ブレスト講和をぶちこわすよう公然とよびかけました。
講和の問題を最終的に解決するために第七回党大会が三月六日から八日にかけて招集されました。この大会では、トロツキーと「共産党左派」にたいするはげしいたたかいがくりひろげられました。レーニンは『**中央委員会の政治報告**』(「戦争と講和についての報告」)をおこないました。レーニンは、ロシアの国内情勢とロシアをめぐる国際関係についての深い分析のうえに立って、現在の条件のもとでは、ソヴェト権力をかため、国の経済をととのえるためには、ドイツ帝国主義との苛酷な講和条約の締結が必要であることを立証するとともに、ソヴェト共和国は講和条約の調印によって息つぎをえて、その間に自己の立場を強化し、社会主義をめざしてさらに前進するであろうという展望をしめしました。
大会はブレスト講和問題におけるレーニンの方針の正しさを確認し、トロツキーとブハーリンの立場をはげしく非難しました。

ソヴェト権力は、ブレスト講和を結び、息つぎをかちとったので、国民経済を復興し、社会主義建設を展開することにとりかかりました。一九一八年の前半期には、銀行、鉄道、外国貿易、商船隊、ついですべての大企業が国有化されて、社会主義経済の基礎がきずかれました。党の前には、国を統治し、国民経済を社会主義の原則にもとづいて再編成するという新しい任務が現われていました。一九一八年の四月に、レーニンは、党中央委員会の委託をうけて『ソヴェト権力の当面の任務』を書き、そのなかで、資本主義から社会主義への過渡期におけるプロレタリア国家の経済政策の基本原則を述べ、国の経済構造を社会主義の原則にもとづいて再編成するための科学的かつ具体的な計画を明らかにしています。

ロシアは、小農民の国であり、国内では小商品生産が優勢をしめて、資本主義を復活させる基盤となっていました。したがって党とソヴェト権力は、「一つの非常に危険な多くの公然たる反革命派以上に危険な、目にみえない敵」である「小所有者の自然成長性」を克服し、社会主義経済制度を強化して、これを支配的な制度にし、ついでその全一的な支配をかちとるという任務に当面していました。

レーニンは、社会主義の経済建設の分野では、物資の生産と分配にたいする厳重な全人民的な記帳と統制を組織することが、当面もっとも重要な任務であることを強調しました。かれによれば、これなしには、経済の管理と計画的指導、国民経済の全部門における整然とした活動と労働の生産性のたゆみない向上を保障することはできません。レーニンは、ソヴェト権力は資本家を収奪する活動を中絶せずに、記帳と統制を組織することに重心をうつさねばならないとし、記帳と統制の実行を労働者・兵士・農民ソヴェト、消費組合、工場委員会の主要な経済的任務としています。

レーニンは、記帳と統制の組織とともに、社会主義への移行のきわめて本質的な条件となるのは、全国民的な規模での労働生産性の向上であると考えていました。「どの社会主義革命でも、プロレタリアートによる権力獲得という任務が解決されたのちには、そして収奪者を収奪して彼らの反抗を弾圧するという任務がだいたい解決されるにしたがって、資本主義よりもいっそう高度な社会的経済制度をつくりだすという根本的任務が、かならず首位におしだされるようになる。すなわち、労働生産性の向上、およびそれと関連した(またそのための)いっそう高度な労働組織がそれである」とかれは書いています。

ロシアは工業の発展のおくれた国でしたので、高度の生産性を確保するためには、機械制大工業とそのなかで決定的な地位をしめている重工業と大工業の物質的基礎の生産の発展の保障を必要とする、とレーニンは指摘しています。レーニンはロシアには社会主義建設に必要なものはすべてそなわっており、膨大な天然資源を最新の技術をつかって開発するならば、生産力の空前の進歩の基礎がえられるであろうと述べています。

帝政時代のロシアでは普通教育が普及しておらず人民の大部分が文盲の状態にありました。レーニンは文盲の絶滅からはじめて人民の教育と文化を向上させることは、労働生産性をたかめる重要な条件の一つであると考えました。

レーニンは、労働生産性をたかめるその他の条件として勤労者の規律の向上をあげていますが、当時、生産の弛緩と工業における労働規律の欠如があらわれており、党はこれにたいして精力的にたたかっていました。すべての労働者が新しい労働慣習に同化するにはひまがかかりました。かれらのあるものは、すでに人民の財産となった工場での労働に、昔どおりの態度をとり、ぶらぶらなまけたり、仕事を避けようとしたり、国家からすこしでも多くをかすめとろうとしました。だからレーニンは、労働規律の向上をめざすたたかいをこの時期の中心任務の一つとして、労働者とすべての勤労者の新しい労働規律、同志的な結合の規律をつくりあげ、かれらの自主的活動と責任感を高めることにとくに大きな注意をはらっています。

レーニンは、社会主義競争を、共産主義教育の最も重要な手段の一つであり、勤労大衆を社会主義社会の建設と労働生産性の向上にみちびきいれる強力な手段であるとしてそれを組織してすぐれた成果をあげた企業や農村の経験を新聞、雑誌をつうじて広く大衆のものとすることを指示しています。

レーニンは、また、大工業においては、知識、技術、経験のいろいろな部門における専門家の指導を必要とすることを強調しています。しかし当時のロシアの専門家は大部分がブルジョア専門家でした。レーニンはかれらを辛抱づよく再教育し、かれらが専門知識を広く応用できる場所をあたえ、最もよい物質的条件を保証してやらねばならないと指示しました。

レーニンは、国の経済にたいするプロレタリア国家の指導の問題を究明し、経済建設と統治の基本原則としての民主集中制の原則を仕上げています。経済の分野での民主集中制とは、国家の中央集権的計画指導と企業における生産指導者の単独責任制が経済管理にたいする大衆の積極的参加や下からの多種多様な統制と結合していることを意味しています。

レーニンが提起した社会主義建設の計画は、「共産党左派」のはげしい攻撃をうけました。ブハーリン一味はあいもかわらぬ左翼的な空文句にかくれながら、勤労規律の実施と企業における単独責任制の採用、独立採算制の実施とブルジョア専門家の利用に反対し、このような政策はブルジョア的秩序への復帰であると主張してレーニンをそしりました。

一九一八年五月に発表された論文**『「左翼的」幼稚さと小ブルジョア性について』**は「共産党左派」に鋭い批判をくわえ、かれらは、革命におそれて狂乱する小ブルジョアの利益を代弁して小ブルジョア的自然成長性と無政府主義的放らつを擁護するものであり、大きな空文句をやたらにつかうのは階級から脱落した小ブルジョア・インテリゲン

ツィアの持ちまえであることを明らかにしました。

レーニンはかれらが「小ブルジョア革命性」にみちびかれて、講和の問題では革命戦争を主張して、客観的には帝国主義的挑発の道具となったこと、経済建設の問題では、資本主義から社会主義への過渡期の任務をとびこえて一挙に高度の社会主義を実現することを要求するが、じつは規律に反対し、経済生活にたいする国家的調整や、記帳統制に抵抗することによって小ブルジョアジーをたすけ、それに奉仕しており、富農、投機者、なまけものを激励していることをあますところなく暴露して、かれらに決定的な打撃をあたえました。

この論文は、われわれが国際的なまた国内の左翼日和見主義、小ブルジョア的革命性、トロツキズム、などを克服するためのたたかいをすすめるにあたって、有効な思想的武器として役だつと思います。

ドイツ帝国主義の手によってロシアの革命を圧殺しようとする国際帝国主義者のもくろみが失敗に帰したので、連合国諸国はロシア国内の反革命派、打倒された資本家、地主、ツァーリの将軍たちと結んで公然たる武力干渉を始めました。党とソヴェト政府は労働者階級と全勤労者を外国干渉軍とブルジョア・地主的反革命にたいする祖国防衛戦争に立ちあがらせました。

レーニンは、国防を指導するとともに国際情勢の動きを注視し、国際労働運動の発展を注意ぶかく研究しました。かれは何回も西ヨーロッパやアメリカの労働者に手紙でよびかけ、十月革命の本質やソヴェト人民のたたかいの解放的な性格を説明し、帝国主義者の反ソ武力干渉に反対するようによびかけました。本巻には一九一八年八月二〇日に書かれた**『アメリカ労働者への手紙』**がおさめられていますが、このなかでレーニンは、力づよい筆致でアメリカ帝国主義が反ソ干渉のおもな組織者のひとりであり、実際上の鼓舞者、積極的な参加者であることを明らかにして、世界の支配権をにぎるためには弱小民族の絞殺やヨーロッパ文化の破壊をも躊躇しないアメリカ帝国主義の正体をばくろしています。

レーニンは、アメリカ、イギリス、フランスのブルジョア新聞がロシアについてのうそと中傷をばらまき、自国の侵略的なロシア進攻を弁護しようとする卑劣で偽善的なくわだてをくつがえすためにソヴェト権力がおこなった偉大な革命的改造についての明快な解明をおこない、独立戦争と奴隷解放戦争という革命的伝統をうけついでいるアメリカのプロレタリアートがソ連の真実を正しく理解してソ連を支持することを訴えています。

レーニンの期待したようにソヴェト・ロシアについての真実は、全世界の勤労者の理解と共感をかちとり、多くの国々でソヴェト・ロシア支持の強力な大衆運動がくりひろげられました。創立直後のわが党が、日本帝国主義の反ソヴェト干渉に反対して立ちあがり、「労農ロシアからの即時撤兵」「労農ロシアの承認」「ロシアとの通商開始」などを要求し、大衆運動を組織してたたかったことは、日本に

おける解放運動の歴史をかざる輝かしい出来事となっています。

＊　＊　＊

本巻におさめられたレーニンの著作の学習によって、わたしたちは、十月革命を準備しかつ達成し、樹立された革命権力の擁護と社会主義建設の着手を指導したレーニンの活動を目のあたりにみながら、人類の歴史の新しい時代をつげた十月革命の本質を正しくつかむことができると思います。

さらに、わたしたちは、レーニンの活動をみちびいたところの、マルクス＝エンゲルスがうちたて、そしてレーニン自身がかれの時代とロシアの現実にあてはめて発展させた、マルクス・レーニン主義、すなわち科学的社会主義の革命理論を、レーニンの実践と結びつけて深く学ぶことができます。

しかし、わたしたちは、十月革命の経験をそのまま日本における革命の青写真とするものではありませんし、レーニンの一言一句を無謬のものとして金科玉条のように絶対化する教条主義の立場に立つものでもありません。

あらゆる国は、経済的、政治的、文化的発展のそれぞれ異なる段階にあり、多くの歴史的・民族的特殊性と伝統をもち、さまざまな具体的歴史的条件のもとにおかれているのですから、それぞれの国はマルクス・レーニン主義によってみちびかれながらも、その社会主義への移行の道に独自のもの、特殊なもの、独創的なものをもたらさざるをえません。レーニン自身も、十月革命の経験における普遍的なものと特殊的なものを研究するようよびかけ、「基本的な革命原則を、さまざまな国の特殊性に適応させなければならない」ことを強調しています。

また、マルクス・レーニン主義そのものも科学なのですから、諸科学の新しい達成や労働者階級のたたかいの経験をとりいれてその内容を豊かにしながら、新しい歴史的条件におうじ、またたたかいのいろいろな段階で党が当面する任務におうじて発展させなければならないものです。

わたしたちは、レーニンの革命理論を、十月革命後半世紀にわたる世界の革命運動の経験によって検証しながら、これを現代に、またロシアとはちがう日本の現実と日本革命の実践のなかで創造的に発展させ、わが国における社会主義への独自の、特殊な道を明らかにしなければなりません。

日本共産党綱領は、まさに、このような努力の所産です。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第8巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン十巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から、久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

＊　＊　＊

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』（第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号㈠㈡……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』（全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目次

国家と革命㈠

マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務

第一版への序文

国家の問題は、現在、理論上でも、実践的・政治的にも、特別な重要性をもつようになっている。帝国主義戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化過程を異常に速め、激化させた。全能の資本家団体とますます緊密に融合しつつある国家が勤労大衆にくわえている法外な抑圧は、ますます法外なものになっている。先進諸国は――その「銃後」のことを言っているのだが――、労働者にたいする軍事監獄に変わりつつある。

長びいている戦争がもたらす前代未聞の惨禍と災厄は、大衆の状態を耐えがたいものにし、彼らの憤激を強めている。国際プロレタリア革命は、明らかに成長しつつある。この革命の国家にたいする関係の問題は、実践的意義をもつようになっている。

比較的に平穏な発展をおこなった数十年のあいだに蓄積された日和見主義の諸要素は、全世界の公認の社会主義諸党を支配している社会排外主義の潮流をつくりだした。ロ先では社会主義、実際には排外主義であるこの潮流（ロシアではプレハーノフ、ポトレソフ、ブレシコフスカヤ、ルバノーヴィチ、それからほんのすこし隠蔽されたかたちでツェレテーリ、チェルノーフ氏らの一派、ドイツではシャイデマン、レギーン、ダーヴィットその他、フランスとベルギーではルノデル、ゲード、ヴァンデルヴェルデ、イギリスではハインドマン、フェビアン派㈡、等々）の特徴は、「社会主義の指導者たち」が、「自国」のブルジョアジーの利益だけでなく、まさに「自国の」国家の利益に、卑しい、従僕のような態度で順応している点にある。というのは、いわゆる大国の大多数は、ずっとまえから幾多の弱小民族を搾取し隷属させているからである。そして、帝国主義戦争は、まさにこの種の獲物の分配と再分配のための戦争である。一般にブルジョアジーの、とくに帝国主義的ブルジョアジーの影響から勤労大衆を解放するための闘争は、

しには不可能である。

われわれは、はじめに、マルクスとエンゲルスの国家学説を考察し、この学説の忘れさられた側面、または日和見主義的歪曲をこうむっている側面を、とくにくわしく論じよう。つぎに、この歪曲の主要な代表者であるカール・カウツキー、現在の戦争中にみじめな破産をとげた第二インタナショナル（一八八九―一九一四年）の最も著名な領袖であるカウツキーをとくに検討しよう。最後に、一九〇五年の、またとくに一九一七年のロシア革命の経験から引きだされる主要な結論をまとめてみよう。この一九一七年の革命は、明らかに、いま（一九一七年の八月はじめ）その発展の最初の段階を終わろうとしているが、全体としてのこの革命は、帝国主義戦争によって引きおこされるプロレタリア社会主義革命の連鎖の一環としてこれをとらえてこそ、はじめて理解できるのである。だから、プロレタリアートの社会主義革命の国家にたいする関係の問題は、実践的・政治的意義をもつようになったというにとどまらず、大衆が資本のくびきを脱するために、近い将来になにをなすべきかを、この大衆に説明する問題としても、このうえなく焦眉の意義をもつようになっているのである。

著　者

一九一七年八月

第二版への序文

この第二版は、ほとんど変更をくわえずに印刷する。ただ第二章第三節をつけくわえただけである。

著　者

モスクワ

一九一八年一二月一七日

第一章　階級社会と国家

一　階級対立の非和解性の産物としての国家

いまマルクスの学説には、解放のためにたたかう被抑圧階級の革命的思想家や指導者の学説に、歴史上幾度となく起こったのと同じことが起こっている。大革命家の存命中は、抑圧階級は彼らにたえまない迫害でむくい、その学説を野蛮きわまる敵意、狂気じみた憎悪、うそと中傷の無法きわまる戦役でむかえた。その大革命家が死んでしまうと、被抑圧階級を「なだめ」あざむくために、彼らを無害な聖像に変え、いわば聖列にくわえ、彼らの名まえにある種の栄誉をあたえる一方、革命的学説の内容を骨ぬきにし、その革命的な鋒先をにぶらせ、それを卑俗化しようと試みるのである。いま、ブルジョアジーと労働運動内部の日和見主義者とは、マルクス主義をこのように「加工する」点で一致している。彼らは、この学説の革命的な側面、その革命的な精神を忘れ、抹殺し、ゆがめている。そして、ブルジョアジーが受けいれることのできるもの、あるいは受けいれることができると思えるものを、前面に押しだし、ほめたたえている。どの社会排外主義者もみな、いまでは「マルクス主義者」である――冗談も休み休みにしたまえ！――。そして、きのうまでマルクス主義撲滅の専門家であったドイツのブルジョア学者たちは、略奪戦争をおこなう目的のためにまことにみごとに組織された労働者団体をそだてあげてくれたとかいう「民族的ドイツ人」マルクスについて、ますます頻繁に語るようになっている！

こういう事態のもとで、マルクス主義の歪曲が前代未聞のひろがりを見せているときにあたって、われわれの任務は、なによりもまず、マルクスの真の国家学説を復活させることである。このためには、マルクスとエンゲルス自身の著作から長い引用をたくさんする必要がある。もちろん、長い引用文は、叙述をおもくるしいものにするだろうし、叙述を平易にする役にはまったく立たないであろう。だが、引用文なしですませることはまったく不可能である。読者が、科学的社会主義の創始者たちの見解の総体とこの見解の発展とについて自主的な判断をくだせるようになるためには、また、今日支配的な「カウツキー主義」がこの見解をゆがめていることを文献的に立証し、明瞭に示すためには、ぜひともマルクスとエンゲルスの著作から、国家の問題について述べた箇所の全部、あるいはすくなくとも決定的な箇所の全部を、できるだけ完全な姿で引用しなければ

ならない。

最も広く普及しているフリードリヒ・エンゲルスの著作『家族、私有財産および国家の起原』から始めよう。この著作は、一八九四年にはシュトゥットガルトですでに第六版が出ていた。われわれは引用文をドイツ語の原書から訳出しなければならない。ロシア語訳はたくさん出ているが、たいていは抄訳か、でなければ、はなはだ不出来な訳だからである。

エンゲルスは、彼の歴史的分析を総括してこう言っている。

「国家はけっしてそとから社会に押しつけられた権力ではない。それはまた、ヘーゲルの主張するような、『人倫的理念の現実性』でも、『理性の形象および現実性』でもない。それは、むしろ一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自分自身との解決不可能な矛盾に絡みこまれ、自分ではとりのぞく力のない、和解できない対立物に分裂したことの告白である。ところで、これらの対立物が、すなわち相あらそう経済的利害をもつ諸階級が、無益な闘争によって自分自身と社会を消耗させせないようにするために、外見上社会のうえに立ってこの衝突を緩和し、それを『秩序』の枠内に引きとめておく権力が必要になった。そして、社会から生まれながら社会のうえに立ち、社会にたいしてみずからをますます疎外してゆくこの権力が、国家である。」（ドイツ語第六版、一七七—一七八ページ）[3]

ここには、国家の歴史的役割と意義の問題についてのマルクス主義の基本思想が、まったく明瞭に言いあらわされている。国家は、階級対立の非和解性の産物であり、その現われである。国家は階級対立が客観的に和解させせえないところに、またそのときに、そのかぎりで、生まれる。逆にまた、国家の存在は、階級対立が和解させえないことの証明である。

ほかならぬこの最も重要で根本的な点について、マルクス主義の歪曲が始まるのであって、それは二つの主要な方向をとっている。

一方では、ブルジョア・イデオローグや、とくに小ブルジョア・イデオローグは、——争う余地のない歴史的事実の重みに押されて、国家が存在するのは階級対立と階級闘争のあるところに限られていることを、承認しないわけにはいかなくなったので——国家は諸階級を和解させる機関であるというふうにマルクスを「手なおし」する。マルクスによれば、諸階級を和解させることが可能であるなら、国家は生まれることも存続することもできないはずである。ところが、小市民的で俗物的な教授や政論家たちが言うと

ころ——ご親切にもマルクスをしょっちゅう引合いにだしながら！——によると、国家はまさに諸階級を和解させるものだということになる。マルクスによれば、国家は階級支配の機関、一階級が他の階級を抑圧する機関であり、この抑圧を公認し、諸階級の衝突を緩和することによってその抑圧を強固なものにする「秩序」を創出することである。小ブルジョア政治家の意見によれば、秩序とは、ほかならぬ諸階級の和解のことであって、一階級が他の階級を抑圧することではなく、また衝突の緩和とは、和解させることであって、抑圧者を打倒するための一定の闘争手段と闘争方法を被抑圧階級から奪いとることではないのである。

たとえば一九一七年の革命で、国家の意義と役割の問題がまさに全面的に提起され、即時の行動、しかも大衆的な規模での行動の問題として実践的に提起されたとき、エス・エル（社会革命党）[三]とメンシェヴィキはみな、「国家」は階級を「和解させる」という小ブルジョア理論へ、たちまちすっかり転落してしまった。この両党の政治家の無数の決議や論文には、この小市民的で俗物的な「和解」論が骨の髄までしみこんでいる。国家は、自分の対立者（自分に対立する階級）と和解することのできない特定の階級の支配の機関だということ、——このことが小ブルジョア民主主義派にはどうしても理解できないのである。国家にたいする態度は、わが国のエス・エルやメンシェヴィキが社会主義者ではけっしてなく（これは、われわれボリシェヴィキがつねに証明してきたことである）、社会主義まがいの空文句をもてあそぶ小ブルジョア民主主義者であることの、最も明瞭な現われの一つである。

他方、マルクス主義の「カウツキー主義的」歪曲は、もっとはるかに手がこんでいる。国家が階級支配の機関であることも、階級対立が和解させえないことも、「理論的には」否定しない。しかし、次の点を忘れるか、あるいはあいまいにするのである。すなわち、もし国家が階級対立の非和解性の産物であるなら、また国家が社会のうえに立ち、「社会にたいしてみずからをますます疎外してゆく」権力であるなら、明らかに、被抑圧階級の解放は、強力革命なしには不可能なばかりでなく、さらに、支配階級によってつくりだされ、この「疎外」を体現している国家権力機構を廃絶することなしには不可能であるということ、これである。この結論は、理論的には自明なものであるが、マルクスは、あとで見るように、これを革命の諸任務の具体的＝歴史的分析にもとづいてこのうえなく明確に引きだしている。しかも、ほかならぬこの結論を、カウツキーは——以下の叙述でそれをくわしく示すことにするが——……「忘れ」、ゆがめたのである。

二　武装した人間の特殊な部隊、監獄その他

エンゲルスはつづけてこう書いている。

「……古い氏族（ゲンス）」（氏族（ロード）またはクラン）「組織[3]とくらべてみた国家の特徴は、第一に、国民を地域にしたがって区分することである……。」

この区分は、われわれには「自然なこと」のように思われる。しかし、それには、旧来の親族または氏族別の組織との長いたたかいが必要であった。

「……第二に、みずからを武装力として組織する住民とはもはや直接には一致しない公的強力を打ちたてることである。この特殊な公的強力が必要なのは、社会が諸階級に分裂して以来、住民の自主的に行動する武装組織が不可能になったからである。……こういう公的強力はどの国家にもある。それは武装した人間からなりたっているばかりではなく、さらに氏族社会」（クラン社会）「のまったく知らなかった物的な付属物、すなわち監獄やあらゆる種類の強制施設からなりたっている。……」

エンゲルスは、国家とよばれる「権力」、すなわち、社会から生まれながら、社会のうえに立ち、社会にたいしてみずからをますます疎外してゆく権力の概念を展開している。この権力は、主としてなににあるのか？　それは、監獄その他のものを自由に処理する武装した人間の特殊な部隊にある。

武装した人間の特殊な部隊、とわれわれが言うのは、根拠のあることである。なぜなら、あらゆる国家に特有な公的強力は、武装した住民や、住民の「自主的に行動する武装組織」とは「直接には一致しない」からである。

すべての偉大な革命的思想家と同じように、エンゲルスは、今日はびこっている俗物根性からみれば注意に値しないと思え、ごくありきたりの事柄と思えるもの、たんに根づよいというだけではなく、いわば石のようにこりかたまった偏見によって神聖視されているもの、ほかならぬそういうものに、自覚した労働者の注意を向けることにつとめている。常備軍と警察は国家権力の主要な強力の用具である。だが、——いったい、それ以外でありうるのか？

エンゲルスが話しかけている一九世紀末のヨーロッパ人——大革命を体験したこともなければ、それを目のあたりに観察したこともなかったヨーロッパ人——の大多数の見地からすれば、それ以外ではありえなかった。彼らには、「住民の自主的に行動する武装組織」とはどんなものか、まったく理解できない。社会のうえに立ち、社会にたいしてみずからを疎外してゆく、武装した人間の特殊な部隊

（警察、常備軍）がどうして必要になったのかという質問にたいしては、西ヨーロッパやロシアの俗物どもは、スペンサーやミハイロフスキーから二、三の文句を借りてきたり、社会生活の複雑化とか、機能の分化などを引合いにだして答えるのが好きである。

このような引証は「学問的」なもののように見え、非和解的に敵対する諸階級に社会が分裂したという、主要な、基本的な事柄をあいまいにすることによって、俗物をみごとに眠りこませる。

この分裂がなかったとすれば、「住民の自主的に行動する武装組織」は、複雑さや、技術の高さや、その他の点で、棒をもつ猿の群や、原始人や、あるいは氏族社会に結合された人々や原始的な組織とは違ったものであったろうが、とにかくそういう組織はありえたであろう。

そういう組織がありえないのは、文明社会が敵対する諸階級に、しかも非和解的に敵対する諸階級に分裂していて、もしこれらの階級が「自主的に行動する」武装をもっていたとすれば、これらの階級のあいだに武装闘争が起こったにちがいないからである。そこで、国家が生まれ、特殊な力、武装した人間の特殊な部隊がつくりだされる。そして、あらゆる革命が、国家機構を破壊することによって、あからさまな階級闘争をわれわれに見せ、支配階級が、自分に奉仕する武装した人間の特殊な部隊を復活させることにどんなに努力するものであるか、被抑圧階級が、搾取者にではなく、被搾取者に奉仕する能力をもったこの種の新しい組織をつくりだすことにどんなに努力するものであるかを、われわれにまざまざと見せているのである。

エンゲルスは、右に引用した考察のなかで、あらゆる大革命がわれわれに実践的に、明瞭に、しかも大衆行動の規模で提起するまさにその問題、すなわち、武装した人間の「特殊な」部隊と「住民の自主的に行動する武装組織」との相互関係の問題を、理論的に提起しているのである。ヨーロッパとロシアの諸革命の経験がこの問題をどのように具体的に例証しているかは、あとで見ることにしよう。

だが、エンゲルスの叙述にかえろう。

彼は、ときには、たとえば北アメリカのそこここの地方のように、この公的強力が弱いこともあるが（ここで論じられているのは、資本主義社会としては稀な例外であり、帝国主義以前の時代の北アメリカで、自由な植民者が優勢であった諸地方のことである）、一般的に言えば、公的暴力が強化しつつあることを指摘している。

「……国家内部の階級対立が激しくなるにつれ、またたがいに境を接する諸国家が大きくなり、その人口がふえるにつれて、公的強力は強化する。——まあ、今日の

わがヨーロッパを見るがよい。そこでは、階級闘争と征服競争とが公権力を極度に強化して、この権力がいまにも全社会を、それどころか国家をすら呑みこみかねないほどにしてしまった。……」

これが書かれたのは、遅くも前世紀の九〇年代のはじめである。エンゲルスの最後の序文は、一八九一年六月一六日の日付になっている。当時、帝国主義への転換は、——トラストの完全な支配という意味でも、巨大銀行の全能の権力という意味でも、大がかりな植民政策等々という意味でも——フランスではようやく始まったばかりであり、北アメリカとドイツではいっそう微々たるものであった。そのとき以後、「征服競争」は一大前進をとげた。二〇世紀の一〇年代のはじめに地球がこれらの「相競争する征服者たち」すなわち強大な強盗諸国家のあいだに最後的に分割されてしまったので、これはますます激しくなった。そのとき以後、陸海の軍備は信じられないほどに増大したし、イギリスとドイツと、そのどちらが世界を支配するかをめぐって、獲物の分配をめぐって起こった一九一四—一九一七年の略奪戦争は、貪欲な国家権力が社会のすべての力を「呑みこむ」過程を、完全な破局間ぢかまで押しすすめたのである。

エンゲルスが、すでに一八九一年に、大国の対外政策の最も重要な特徴の一つとして「征服競争」をあげることができたのに、社会排外主義のならずものどもは、まさにこの競争が何倍も激化して帝国主義戦争を生みだした一九一四—一九一七年に、「自国」ブルジョアジーの強盗的利益の擁護を、「祖国擁護」とか、「共和制と革命の防衛」などといった空文句でおおいかくしているのである！

三　被抑圧階級を搾取する道具としての国家

社会のうえに立つ特殊な公的強力を維持するためには、租税と国債が必要である。

エンゲルスはこう書いている。

「……いまや官吏は、公的強力と徴税権をにぎって、社会の機関でありながら、社会の**うえ**に立っている。氏族」(クラン)「制度の諸機関にはらわれていた自由な、自発的な尊敬では、たとえ彼らがそういう尊敬をえられるにしても、これらの官吏には十分でない。……」そこで、官吏の神聖不可侵性についての特別な法律がつくられる。「どんなに貧弱な警察官でも」、クランの代表者より大きな「権威」をもっている。だが、文明国家の軍事力の長官でさえ、社会の「強制されざる尊敬」をうけているクランの首長をうらやんでよかろう、と。

国家権力の機関としての官吏の特権的地位の問題が、ここで提起されている。基本的な点として指摘されているのは、官吏を社会のうえに立たせるものはなにかということである。この理論上の問題が、一八七一年にパリ・コミューンによって実践的に解決されたこと、そして一九一二年にカウツキーによって反動的にあいまいにされたことを、われわれはあとで見るであろう。

「……国家は階級対立を抑制しておく必要から生まれたものであるから、だがそれと同時にこれらの階級の衝突のただなかで生まれたものであるから、それは、通例、最も勢力のある、経済的に支配する階級の国家である。この階級は、国家の助けをかりて政治的にも支配する階級となり、こうして、被抑圧階級を抑圧し搾取する新しい手段を手にいれる。……」古代国家と封建国家が奴隷と農奴を搾取する機関であっただけでなく、「近代の代議制国家も、資本が賃労働を搾取する道具である。しかし、例外として、相たたかう諸階級がほとんど力の均衡をたもっているため、国家権力が、外見上の調停者として、一時両者にたいしてある程度の自主性をもつようになる時期がある。……」一七世紀と一八世紀の絶対君主制、フランスの第一および第二帝政のボナパルティズム、ドイツのビスマルクがそうである。

われわれのほうでつけくわえて言えば、革命的プロレタリアートの迫害に移ったのちの共和制ロシアのケーレンスキー政府、すなわち、ソヴェトが小ブルジョア民主主義者の指導のおかげですでに無力となっており、ブルジョアジーがまだソヴェトをまっこうから解散させることができるほど強くはなかった時期のケーレンスキー政府がそうである。

エンゲルスはつづけてこう書いている。

民主的共和制のもとでは、「富はその権力を間接に、しかしそれだけにいっそう確実に行使する」。すなわち、第一には、「直接に官吏を買収する」（アメリカの場合）ことによって、第二には、「政府と取引所の同盟」（フランスやアメリカの場合）によって、行使する。

今日では、帝国主義と銀行の支配とが、どんな民主的共和国でも、富の全能の権力を守り実現するこの二つの方法をなみなみならぬ技能にまで「発達させ」ている。たとえば、ロシアに民主的共和制が成立した当初の数ヵ月に、つまりエス・エルおよびメンシェヴィキの「社会主義者」とブルジョアジーとが結婚して連立政府をつくっていたいわば密月に、パリチンスキー氏が、資本家と彼らの略奪行為、軍需品納入による彼らの官金横領を抑制する措置をいっさいサボタージュしたのは、そしてその後内閣を去ってから

（別の、パリチンスキーと瓜二つの人間がその後釜にすわったことは、いうまでもない）このパリチンスキー氏が年俸一二万ループリというちょっとした地位を資本家から「褒美にもらった」のは、いったいなんなのか？　直接の買収か、それとも、間接の買収か？　政府とシンジケートとの同盟か、それとも「ただの」友人関係か？　チェルノーフとツェレテーリ、アウクセンチエフとスコベレフといった連中は、どんな役割を演じているのか？　彼らは、官金私消者の百万長者の「直接の」同盟者なのか、それとも間接の同盟者にすぎないのか？

民主的共和制のもとで「富」の全能の権力がいっそう確実なのは、この全能の権力が政治機構の個々の欠陥や、資本主義の不出来な政治的外被に左右されないからである。民主的共和制は資本主義のありうべき最良の政治的外被であり、したがって、この最良の外被を（パリチンスキー、チェルノーフ、ツェレテーリの一派をつうじて）手に入れると、資本の権力はきわめて確実な、きわめてしっかりとした基礎のうえにすえられるので、ブルジョア的民主的共和制のもとでは、人物や制度や党派のどのような交替も、この権力をゆるがせることがないのである。

さらに注意しておかなければならないのは、エンゲルスが、普通選挙権をも、きわめて明確にブルジョアジーの支配の道具とよんでいることである。彼は、明らかにドイツ社会民主党の多年の経験を考慮して、普通選挙権は、「労働者階級の成熟度の計測器である。それは、今日の国家では、それ以上のものとはなりえないし、またけっしてならないであろう」と言っている。

わが国のエス・エルやメンシェヴィキのような小ブルジョア民主主義者や、さらに彼らの血をわけた兄弟である西ヨーロッパのすべての社会排外主義者、日和見主義者は、まさに「それ以上のもの」を普通選挙権に期待している。彼らは、普通選挙権が「今日の国家で」実際に勤労者の多数者の意志を表明し、その実現を確保できるかのような、誤った考えを自分でもいだき、人民にも吹きこんでいる。

ここでは、われわれは、この誤った考えを注意しておくことしかできないし、また、エンゲルスのまったく明白で、正確で、具体的な言明が「公認の」（すなわち日和見主義的な）社会主義諸党の宣伝・扇動のなかでたえずゆがめられていることを、指摘することしかできない。エンゲルスがここでしりぞけているこの考えがまったく誤っていることは、あとで「今日の」国家についてのマルクスとエンゲルスの見解を述べるさいに、くわしく解明しよう。

エンゲルスは、彼の最も広く読まれている著作のなかで、自分の見解を次のことばで総括している。

「だから、国家は永遠の昔からあるものではない。国家なしにすませていた社会、国家や国家権力のことなど夢にも考えなかった社会が、かつてはあった。諸階級への社会の分裂を必然的にともなった経済的発展の一定の段階で、この分裂のために国家が必要物となったのである。いまわれわれは、これらの階級の存在が必要でなくなるばかりか、かえって断然生産の障害となるような、そういう生産の発展段階に急歩調で近づいている。階級は、かつてその発生が不可避であったように、やはり不可避的に消滅するであろう。階級が消滅するとともに、国家も不可避的に消滅する。生産者の自由で平等な協同関係（アソツィアツィオーン）にもとづいて生産を組織しかえる社会は、国家機構全体を、それがそのとき当然所属すべき場所に移すであろう、——糸車や青銅の斧（おの）とならべて、古代博物館へ。」

今日の社会民主党の宣伝・扇動文書のなかで、この引用文に出くわすことはめったにない。また、この引用文に出くわす場合でも、たいていは、聖像に礼拝でもするような調子で、すなわちエンゲルスに公式に敬意を表するために引用しているだけであって、この「国家機構全体を古代博物館に移す」ことが革命のどれほど広範で奥深い発展を前提しているかを、よく考えようとすることなどまったくない。エンゲルスが国家機構とよんでいるものすら、たいていは理解されていないのである。

四　国家の「死滅」と強力革命

国家は「死滅する」というエンゲルスのことばは、きわめて広く知られていて、きわめて頻繁に引用され、マルクス主義を日和見主義につくりかえる普通の手口の要点がどういうものかをきわめてあざやかに示しているので、これについてくわしく論じる必要がある。このことばの出所となっている考察を全文引用しよう。

「プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまずはじめには国家的所有に転化する。だが、そうすることで、プロレタリアートは、プロレタリアートとしての自分自身を廃絶し、そうすることであらゆる階級区別と階級対立を廃絶し、そうすることでまた国家としての国家をも廃絶する。階級対立のかたちをとってうごいてきたこれまでの社会には、国家が必要であった。つまり、そのときどきの搾取階級が自分たちの外的な生産諸条件を維持するため、したがって、とくに現存の生産様式によって規定される抑圧の諸条件（奴隷制、農奴制または隷農制、賃労働）のもとに被搾取階級を力ずくで抑えつけておくためにつかう組織が必要であった。国家は全社

会の公式の代表者であり、目に見える一団体に全社会を総括したものであった。しかし、国家がそういうものであったのは、それがそれぞれの時代にみずから全社会を代表していた階級の国家——すなわち、古代では奴隷所有者である国家市民の、中世では封建貴族の、現代ではブルジョアジーの国家——であったかぎりにすぎなかった。国家がついにほんとうに全社会の代表者となるとき、それは自分自身をよけいなものにしてしまう。抑圧しておかなければならない社会階級がもはや存在しなくなったそのときから、階級支配や、これまでの生産の無政府状態にもとづく個人間の生存闘争とともに、それらのものから生じる衝突や暴行ざたもまたとりのぞかれたそのときから、特殊な抑圧力である国家を必要とするような、抑圧すべきものはもはやなにもなくなる。国家が真に全社会の代表者として現われる最初の行為——社会の名において生産手段を掌握すること——は、同時に、国家が国家としておこなう最後の自主的な行為である。社会関係への国家権力の干渉は、一分野から一分野へとつぎつぎによけいなものになり、やがてひとりでに眠りこんでしまう。人にたいする統治に代わって、物の管理と生産過程の指揮とが現われる。国家は『廃止される』のではない。それは死滅するのである。『自由な人民国家』という文句は、この点に照らして評価しなければならない。すなわち、それが扇動の見地からみて一時的な正当性をもっていることをも、また科学の立場からみて終局的には不十分であることをも、評価しなければならない。国家をきょうあすにも廃止せよという、いわゆる無政府主義者の要求も、やはりこの点に照らして評価しなければならない。」(『反デューリング論』、ドイツ語第三版、三〇一—三〇三ページ)[8]

エンゲルスのすばらしく思想ゆたかなこの考察のなかで、今日の社会主義諸党で社会主義思想の真の財産となっているのは、国家はマルクスによれば——無政府主義者の国家「廃止」説とは違って——「死滅する」、ということだけだと言っても、まちがうおそれはない。だが、マルクス主義をこんなふうに剪み切ることは、マルクス主義を日和見主義にしてしまうことである。なぜなら、こういう「解釈」によれば、緩慢で、むらのない、漸次的な変化がありはするが、飛躍や激動はなく、革命はないかのようなぼんやりとした観念しか残らないからである。通例の、ひろく流布している、大衆的な——こう言ってよければ——理解による国家の「死滅」とは、疑いもなく、革命をあいまいにする——たとえ否定しないまでも——ことを意味する。

ところが、このような「解釈」は、ブルジョアジーにだ

け有利な、マルクス主義のはなはだしく乱暴な歪曲であって、理論的には、右に全文引用したエンゲルスのあの同じ「総括的」考察のなかにも指摘されているきわめて重要な事情や考慮を忘れたことにもとづくものである。

第一に、この考察の冒頭で、エンゲルスは、プロレタリアートは国家権力を掌握し、「そうすることで国家としての国家を廃絶する」と言っている。これはどういう意味なのか、それについて考えることは「一般の習わしではない」。普通、それは完全に無視されるか、でなければ、エンゲルスのある種の「ヘーゲル主義的弱点」だと見なされている。実際には、これらのことばには、最大のプロレタリア革命の一つである一八七一年のパリ・コミューンの経験が、簡潔に言いあらわされているのである。この経験については、おいおいにもっとくわしく述べよう。実際には、ここでエンゲルスが言っているのは、プロレタリア革命によるブルジョアジーの国家の「廃絶」のことである。他方、死滅ということばは、社会主義革命のあとのプロレタリア国家組織の残存物について言われたものである。エンゲルスによれば、ブルジョア国家は「死滅する」のではなく、革命をつうじてプロレタリアートによって「廃絶される」のである。この革命のあとで死滅するのは、プロレタリア国家または半国家である。

第二に、国家は「特殊な抑圧力」である。エンゲルスは、彼のこのみごとな、きわめて深遠な定義を、ここでこのうえなくはっきりとあたえている。ところで、この定義から出てくることは、ブルジョアジーがプロレタリアートにたいし、ひとにぎりの金持が数百千万の勤労者にたいして用いる「特殊な抑圧力」は、プロレタリアートがブルジョアジーにたいして用いる「特殊な抑圧力」(プロレタリアートの執権(ディクタツーラ))とおきかえられなければならない、ということである。「国家としての国家を廃絶する」というのは、まさにこのことである。社会の名において生産手段を掌握する「行為」とは、まさにこのことである。そして、一つの(ブルジョア的な)「特殊な力」ともう一つの(プロレタリア的な)「特殊な力」とのこのような交替が、「死滅」というかたちではけっして起こりえないことは、おのずから明らかである。

第三に、エンゲルスが「死滅」と言い、それどころか、いっそうくっきりと、いっそうあざやかに「眠りこみ」と言っているのは、「国家が全社会の名において生産手段を掌握した」あとの、すなわち社会主義革命のあとの時期についてであることは、まったく明白、かつ明確である。この時期の「国家」の政治形態が最も完全な民主主義であることを、われわれはみな知っている。だが、したがってエ

ンゲルスがここで問題にしているのは民主主義の「眠りこみ」と「死滅」なのだということ、このことには、恥しらずにマルクス主義をゆがめている日和見主義者のだれひとり、思いあたらないのである。これは、一見してはなはだ奇妙なことに思われる。しかし、このことが「理解できない」のは、民主主義もまた国家であり、したがって、国家が消滅するときには民主主義もまた消滅するということを、よく考えたことのない人だけである。ブルジョア国家は、革命によってこれを「廃絶する」ほかはない。国家一般、すなわち最も完全な民主主義は、「死滅」するほかはない。

第四に、「国家は死滅する」という有名な命題をかかげたのち、エンゲルスは、すぐさま、この命題が日和見主義者と無政府主義者の双方に鋒先を向けたものであることを、具体的に明らかにしている。そのさいエンゲルスが第一の重点をおいているのは、「国家は死滅する」という命題から出てくる結論のうち、日和見主義者に鋒先をむけた結論のほうである。

国家が「死滅する」ということを読むなり聞くなりしたことのある一万人のうち九九九〇人までは、この命題からエンゲルスが引きだした結論が無政府主義者だけに鋒先を向けたものではないことを、まったく知らないか、あるいは覚えていないことは、賭けをしてもよい。また、残りの一〇人のうちおそらく九人までは、「自由な人民国家」とはなにか、なぜこのスローガンにたいする攻撃が日和見主義にたいする攻撃を意味するのかを知らない。こういうやり方で歴史を書くのだ！　こういうやり方で、偉大な革命的学説を、今日はびこっている俗物根性に合わせてこっそりつくりかえるのだ。無政府主義者に鋒先を向けた結論は、千回も繰りかえされ、卑俗化され、このうえなく平板化されたかたちで頭にたたきこまれ、先入見の根づよさをもつようになった。ところが、日和見主義者に鋒先を向けた結論はあいまいにされ、「忘れさられた」！

「自由な人民国家」というのは、一八七〇年代のドイツの社会民主主義者の綱領的要求であり、流行のスローガンであった。このスローガンには、民主主義の概念を小市民的な誇大な仕方で記述したほかは、政治的内容はなにもない。それが民主的共和制を合法的に暗示していたかぎりで、エンゲルスは、扇動の見地から、このスローガンの「一時的な」「正当性を認める」ことをこばまなかった。しかし、このスローガンは日和見主義的なものであった。なぜなら、それは、ブルジョア民主主義の美化をあらわしていただけでなく、あらゆる国家一般にたいする社会主義的批判の無理解をもあらわしていたからである。われわれは、資本主義のもとでのプロレタリアートにとって最良の国家形態と

して、民主的共和制に賛成である。だが、どんなに民主的なブルジョア共和国においても賃金奴隷制が人民の運命になっていることを忘れる権利は、われわれにない。つぎに、国家はすべて、被抑圧階級にたいする「特殊な抑圧力」である。だから、国家はすべて不自由であり、非人民的である。マルクスとエンゲルスは、七〇年代にこのことを彼らの党の同志たちに再三説明した。[8]

第五に、そのなかの国家の死滅にかんする考察のことはだれでも覚えているエンゲルスのこの同じ著作に、強力革命の意義についての考察がある。強力革命の役割の歴史的評価は、エンゲルスにあっては、強力革命にたいする本式の賛辞になっている。このことは、「だれも覚えていない」。この思想の意義について語ること、いや、それについて考えることとすら、今日の社会主義諸党では一般の習わしではない。大衆のあいだでの日常の宣伝・扇動のなかで、この思想はなんの役割も演じていない。ところが、この思想は、国家の「死滅」と不可分に結びついていて、まとまりのある一体をなしているのである。

次にあげるのが、エンゲルスの考察である。

「……強力は、歴史上でもう一つ別の役割」（悪をおこなう者という役割以外の）、「革命的な役割を演じるということ、強力は、マルクスのことばを借りれば、新しい社会をはらんでいるあらゆる古い社会の助産婦であるということ、[8]強力は、社会的運動が自己を貫徹し、そして硬直し麻痺した政治的諸形態を打ち砕くための道具であるということ、――このことについては、デューリング氏はひとことも語らない。彼は、搾取経済を転覆するためにはおそらく強力を用いる必要が起こるかもしれないということを、溜息をついたりうめいたりしながら、やっと認めているだけである。――残念なことに、である！　なぜなら、どんなものでも強力の使用は、それを使用する者を堕落させるからだというのだ。勝利に終わったどの革命からも、つねに大きな道徳的、精神的な高揚が生じたという事実を前にして、こういうことを言うのだ！　しかも、人民に実際に強力的衝突が押しつけられる可能性があり、[9]そしてそういう衝突が、すくなくとも、三十年戦争の屈辱の結果国民の意識にしみこんだ下僕根性を一掃するという利益をもたらすにちがいないこのドイツで、こういうことを言うのだ！　それなのに、この気のぬけた、ひからびて無力な説教師的な考え方が、おこがましくも、歴史上に知られた最も革命的な党に、あえて自分を押売りしようとするのか？」（ドイツ語第三版、一九三ページ。第二編第四章の終り）。[10]

エンゲルスが、一八七八年から一八九四年まで、つまり

その死にいたるまで、ドイツの社会民主主義者にむかって根気よく語りつづけた強力革命へのこの賛辞と、国家「死滅」論とを、どうすれば一つの学説のなかで結びつけることができるだろうか？

　普通この両者は、折衷主義の助けをかりて、無思想的に、あるいは詭弁によって、勝手気ままに（または権力者のご機嫌とりに）、あるときはまえのほうの議論、あるときはあとのほうの議論をとりだすというやり方で、結びつけられている。しかも、一〇〇回のうち九九回――それ以上でないにしても――までは、ほかならぬ「死滅」のほうが前面に押しだされている。弁証法を折衷主義におきかえること――これが、今日の社会民主党の公式の文献でマルクス主義にかんして見られる最も普通な、最も広くひろがっている現象である。もちろん、こういうおきかえは新しいことではなく、ギリシア古典哲学の歴史上にさえ見られたことであった。マルクス主義を日和見主義につくりかえる場合、弁証法を折衷主義につくりかえることがいちばん大衆をあざむきやすく、外見上の満足をあたえるのであって、これは、あたかも過程のすべての側面、すべての発展傾向、たがいに矛盾するすべての影響、等々を考慮しているかのように見えながら、実際には、けっして社会発展過程のまとまりのある革命的な理解をあたえないのである。

　強力革命の不可避性についてのマルクスとエンゲルスの学説がブルジョア国家についてのものであることは、すでに前述したところであり、またあとのほうの叙述のなかでもっとくわしく示すであろう。ブルジョア国家からプロレタリア国家（プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ））への交替は、「死滅」によっては不可能であって、通例は、強力革命によってのみ可能である。エンゲルスが強力革命にささげた賛辞は、マルクスのたびたびの言明と完全に一致しているのだが――（強力革命の不可避性を誇らかに、公然と言明している『哲学の貧困』および『共産党宣言』の結び(二)を思いおこそう。また、それからほとんど三〇年後の一八七五年に書かれた『ゴータ綱領批判』(三)――そこでは、マルクスはこの綱領の日和見主義を容赦なく糾弾している――を思いおこそう）――、この賛辞は、けっして「熱中」ではなく、けっして大言壮語ではなく、論戦上の激語でもない。強力革命についてのこのような、まさにこのような見解で大衆を系統的に教育する必要が、マルクスとエンゲルスの全学説の根本になっている。今日支配的な社会排外主義の潮流とカウツキー主義の潮流とがマルクスとエンゲルスの学説を裏切っていることは、両者ともにこのような宣伝、このような扇動を忘れている点に、とくにあざやかに現われている。

ブルジョア国家からプロレタリア国家への交替は、強力革命なしには不可能である。プロレタリア国家の廃絶、つまりあらゆる国家の廃絶は、「死滅」の道によらなければ不可能である。

マルクスとエンゲルスは、それぞれの革命的情勢を研究し、それぞれの革命の経験の教訓を分析することによって、この見解を詳細に、具体的に発展させていった。彼らの学説のなかで無条件に最も重要なこの部分に、われわれも移ることにしよう。

第二章　国家と革命。一八四八―一八五一年の経験

一　革命の前夜

成熟したマルクス主義の最初の著作である『哲学の貧困』と『共産党宣言』とは、一八四八年の革命の前夜に書かれたものである。この事情のため、これらの著作には、マルクス主義の一般原則が叙述されているとともに、当時の具体的な革命的情勢がある程度反映している。だから、これらの著作の筆者たちが、一八四八―一八五一年の経験から結論を引きだす直前に国家についてなにを語ったかを調べてみるのが、おそらく適切であろう。

マルクスは、『哲学の貧困』のなかでこう書いている。

「……労働者階級は、その発展の過程で、諸階級とその敵対関係とを排除する一つの協同社会をもって、古い市民社会におきかえるであろう。そして、本来の意味の政治権力はもはや存在しなくなるであろう。なぜなら、政治権力は、まさしく市民社会内部の敵対関係の公的な表現だからである。」（一八八五年ドイツ語版、一八二ページ）(三)

階級が廃絶されたあとでは国家は消滅するという思想のこの一般的な叙述と、その数ヵ月後に――すなわち、一八四七年一一月に――マルクスとエンゲルスが書いた『共産党宣言』のなかの叙述とを比較対照してみると、教えられるところが多い。

「……われわれは、プロレタリアートの発展の最も一般的な諸段階を略述して、現存の社会の内部における多かれ少なかれ隠れた内乱のあとをたどり、ついにそれが公然たる革命となって爆発し、プロレタリアートがブルジョアジーを力ずくで打倒して自分の支配を打ち立てるところに到達した。……

……すでにまえのほうで見たように、労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級に転化させるこ

と」（文字どおりには、支配階級の地位に高めること）、「民主主義をたたかいとることである。

プロレタリアートは、その政治的支配を利用して、ブルジョアジーからつぎつぎにいっさいの資本を奪いとり、いっさいの生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、生産力の量をできるだけ急速に増大させるであろう。」[24]（一九〇六年、ドイツ語第七版、三一、三七ページ）

ここには、国家の問題におけるマルクス主義の最も注目すべき、そして最も重要な思想の一つ、すなわち「プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）」（パリ・コミューン以後マルクスとエンゲルスはこういう言い方をするようになった[25]）の思想が定式化されており、ついで、これまたマルクス主義の「忘れられたことば」の一つである、きわめて興味ぶかい国家の規定が見いだされる。「国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」。

国家のこの規定は、公認の社会民主諸党の広く流布している宣伝・扇動文書のなかで、一度も解明されたことがないばかりではない。それだけではない。この規定は、まさに忘れられてしまったのである。なぜなら、この規定は改良主義とは全然和解できないものだからであり、「民主主義の平和的発展」というありきたりの日和見主義的先入見や小市民的幻想に平手打ちをくらわせるものだからである。

プロレタリアートには国家が必要である、——日和見主義者、社会排外主義者、カウツキー主義者はみなこう繰りかえして言い、これがマルクスの学説だと断言しているが、それに次のようにつけくわえて言うのを「忘れている」。第一に、マルクスによれば、プロレタリアートに必要なのは、死滅してゆく国家、すなわち、ただちに死滅しはじめ、また死滅せざるをえないように仕組まれた国家だけであるということ、第二に、勤労者に必要なのは、「国家」、「すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」であるということ、これである。

国家は、特殊な力の組織であり、なんらかの階級を抑圧するための強力組織である。では、プロレタリアートはどの階級を抑圧しなければならないのか？　もちろん、搾取階級つまりブルジョアジーだけである。勤労者に国家が必要なのは、もっぱら搾取者の反抗を抑圧するためである。だが、この抑圧を指導し、それを実行することができるのは、ただひとつ徹底的に革命的な階級であり、ブルジョアジーとたたかい、ブルジョアジーを完全に一掃するために、すべての勤労被搾取者を団結させる能力をもった唯一の階級であるプロレタリアートだけである。

搾取階級に政治的支配が必要なのは、搾取を維持するた

め、すなわち、人民の圧倒的多数に対抗して、とるにたりない少数者の貪欲な利益をはかるためである。被搾取階級に政治的支配が必要なのは、あらゆる搾取を完全になくすため、すなわち、とるにたりない少数者である現代の奴隷所有者、つまり地主と資本家に対抗して、人民の圧倒的多数の利益をはかるためである。

小ブルジョア民主主義者、階級闘争を階級協調の夢想とおきかえたこれらの自称社会主義者たちは、社会主義的改造をも夢想家ふうに考えて、搾取階級の支配を打倒することとは考えずに、自分の任務を理解した多数者に少数者がおだやかに服従することだと考えた。超階級的な国家を認めることと不可分に結びついたこの小ブルジョア的ユートピアは、実践上では、勤労諸階級の利益を裏切る結果になった。これは、たとえば一八四八年と一八七一年とのフランス革命の歴史がまさに示したところであり、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのイギリス、フランス、イタリア、その他の国々のブルジョア内閣に「社会主義者」が参加した経験が示したところである。

マルクスは、今日ロシアでエス・エル、メンシェヴィキの諸党によって復活させられているこの小ブルジョア社会主義と、全生涯にわたってたたかった。マルクスは、階級闘争の学説を、政治権力の学説、国家学説にいたるまで、首尾一貫して展開した。

ブルジョアジーの支配を打倒することは、自己の経済的生存条件からしてこの打倒をおこなう準備をもつようになり、この打倒をなしとげる可能性と力をもつようになる特別な階級としてのプロレタリアートだけがおこないうることである。ブルジョアジーは、農民やすべての小ブルジョア層をばらばらにし、分散させる一方で、プロレタリアートを結束させ、結合し、組織する。プロレタリアートだけが——大規模生産のなかで彼らが果たす経済的役割のおかげで——すべての勤労被搾取大衆の指導者となる能力をもっている。これらの大衆は、ブルジョアジーによって、しばしばプロレタリアートにおとらぬほど、いやそれ以上にひどく搾取され、抑圧され、圧迫されているのだが、自分の解放のために自主的にたたかう能力をもっていないのである。

マルクスによって国家の問題と社会主義革命の問題とに適用された階級闘争の学説は、必然的に、プロレタリアートの政治的支配、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）、すなわち、だれとも分有することなく直接に大衆の武装力に依拠する権力を承認するところまでゆく。ブルジョアジーを打倒することは、プロレタリアートが支配階級——ブルジョアジーの不可避的な必死の反抗を抑圧し、新しい経済制度のため

にすべての勤労被搾取大衆を組織する能力をもった支配階級に転化することによって、はじめて実現できるのである。

プロレタリアートは、搾取者の反抗を抑圧するためにも、社会主義経済を「組織する」仕事で膨大な住民大衆、すなわち農民、小ブルジョアジー、半プロレタリアを指導するためにも、国家権力、中央集権的な力の組織、強力組織を必要とする。

マルクス主義は、労働者党をそだてあげることによって、プロレタリアートの前衛――権力を奪取し、全人民を社会主義へみちびき、新しい制度を方向づけ組織する能力をもち、ブルジョアジーぬきで、ブルジョアジーに対抗して自分の社会生活を建設する仕事で、すべての勤労被搾取者の教師となり、指導者となり、首領となる能力をもった前衛をそだてあげる。これに反して、今日支配的な日和見主義は、労働者党を、大衆から遊離した高給の労働者の代表者にそだてあげる。この高給の労働者は、資本主義のもとでかなりうまく「身をおちつけ」、アジ豆のあつものと引き換えに自分の長子権を売り渡すのである。つまり、ブルジョアジーに反対しての人民の革命的指導者という役割を放棄するのである。

「国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」――マルクスのこの理論は、プロレタリアートが歴史上で演じる革命的役割についての彼の学説全体と不可分に結びついている。この役割を完成するものが、プロレタリア執権（ディクタトゥーラ）、プロレタリアートの政治的支配なのである。

だが、もしプロレタリアートには、ブルジョアジーに対抗する特殊な強力組織としての国家が必要であるとすれば、そこからひとりでに生まれてくる結論は、次のものである。そういう組織をつくりだすことは、ブルジョアジーが自分のためにつくりだした国家機構をまえもって廃絶せずに、それを破壊せずに、はたして可能であろうか？『共産党宣言』は、この結論のまぎわまで近づいている。そして、マルクスは、一八四八―一八五一年の革命の経験を総括するさいに、この結論について述べている。

二 革命の総括

いまわれわれの関心をひいている国家の問題について、マルクスは、その著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』のなかの次のような考察で、一八四八―一八五一年の革命の総括をおこなっている。

「……しかし、革命は徹底的である。それはまだ煉獄を通る旅の途中にある。革命は手順を追ってその仕事をなしとげる。一八五一年一二月二日」（ルイ・ボナパルトがクーデタをおこなった日）「までに、革命はその準

備の半分を完了した。いまそれはあと半分の完了にかかっている。革命は、はじめに議会権力を完成して、それを転覆できるようにした。この仕事をやりとげたいまでは、革命は執行権力を完成し、それをその最も純粋な表現につきつめ、それを孤立させ、それを唯一の標的として自分に対立させ、こうして自分の破壊力をことごとく執行権力にたいして集中できるようにする。」（傍点は引用者）「そして、革命がその準備作業のこのあと半分をなしとげたとき、ヨーロッパは席からとびあがって歓呼するであろう。あっぱれ掘りかえしたぞ、老いたもぐらよ！と。

膨大な官僚・軍事組織をもち、複雑多岐で精巧な国家機構をもったこの執行権力、五〇万の軍隊とならぶもう五〇万の官吏軍、網の目のようにフランス社会の肉体に絡みついて、そのすべての毛穴をふさいでいるこの恐ろしい寄生体、それは、絶対君主制の時代に、封建制度の没落のさいに発生したものであって、この没落を速める助けをした。」フランス第一革命は政府権力の中央集権化を発展させたが、「それと同時に、またこの政府権力の規模、権能、属吏の人数を拡大せざるをえなかった。ナポレオンがこの国家機構を完成した。」正統王政と七月王政[20]は、「分業を拡大したほかは、なにひとつつけくわえなかった。……

……最後に、議会制共和制は、革命とたたかうなかで、弾圧措置を強めるとともに、政府権力の手段を増大させ、その中央集権化を強めざるをえなかった。すべての変革は、この機構を打ち砕かずに、かえってそれをいっそう完全にした。」（白丸は引用者のもの）「かわるがわる支配権を争った諸政党は、この巨大な国家構築物を自分の手におさめることを、勝利者のおもな獲物と見なした。」（『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』[21]第四版、ハンブルク、一九〇七年、九八―九九ページ）

この注目すべき考察では、マルクス主義は、『共産党宣言』にくらべて一大前進をとげている。『宣言』では、国家の問題は、まだきわめて抽象的に、ごく一般的な概念と表現で提起されている。ところが、ここでは、問題は具体的に提起され、きわめて正確で明確な、実践的に明瞭な結論がくだされている。これまでのすべての革命は国家機構をいっそう完全なものにしたが、この国家機構は粉砕し、打ち砕かなければならないのだ、と。

この結論は、マルクス主義の国家学説のなかで主要なもの、基本的なものである。しかも、まさにこの基本的なものが、支配的な公認の社会民主諸党によってまったく忘れさられているだけでなく、さらに、第二インタナショナル

の最も著名な理論家であるK・カウツキーによって、（あとで見るように）あからさまにゆがめられているのである。『共産党宣言』では、歴史が総括されており、その総括によれば、国家は階級支配の機関であると見ざるをえないし、また、そこから次のような必然的な結論が出てくる。すなわち、プロレタリアートは、まずはじめに政治権力をたたかいとらなければ、政治的支配権を手にいれなければ、国家を「支配階級として組織されたプロレタリアート」に転化しなければ、ブルジョアジーを打倒することはできない、そして、このプロレタリア国家は、勝利するとただちに死滅しはじめる、なぜなら、階級対立のない社会では、国家は必要でなく、また存在しえないからである、と。ここでは、ブルジョア国家からプロレタリア国家へのこの交替が――歴史的発展の見地からみて――いったいどういうふうにおこなわれるはずかという問題は、提起されていない。

ほかならぬこの問題を、マルクスは一八五二年に提起し、そして解決しているのである。マルクスは、自分の弁証法的唯物論の哲学に忠実に、偉大な革命期――一八四八―一八五一年――の歴史的経験を基礎にしている。マルクスの学説は、ここでもまた――いつものように――深遠な哲学的世界観と豊富な歴史的知識とによって解明された経験の総括である。

国家の問題は具体的に提起されている。ブルジョア国家、ブルジョアジーの支配に必要な国家機構は、歴史上どのようにして発生したか？　この国家機構はどんな変化をこうむったか、ブルジョア諸革命の過程で、また被抑圧諸階級の自主的な行動に直面して、この国家機構はどのような進化をとげたか？　この国家機構にたいするプロレタリアートの任務はどういうものか？

ブルジョア社会に特有な中央集権的国家権力は、絶対主義の没落期に発生した。二つの制度が、この国家機構の最も大きな特徴となっている。すなわち、官僚制度と常備軍である。これらの制度が幾千もの糸でほかならぬブルジョアジーと結びついていることは、マルクスとエンゲルスの著作のなかで再三述べられている。どの労働者の経験も、この結びつきをきわめて明瞭に、あざやかに説明してくれる。労働者階級は、自分の肌でこの結びつきを認識することを学ぶのである。――だからこそ労働者階級は、この結びつきが不可避なものだという教えをたやすく把握し、しっかりと身につけるのである。ところが、小ブルジョア民主主義者は、この教えを、無知に、軽々しく否定するか、でなければいっそう軽々しく「一般的には」承認しながらも、それにふさわしい実践的結論をくだすことを忘れるのである。

官僚制度と常備軍、これは、ブルジョア社会の肉体にやどる「寄生体」、この社会を引き裂いている内的諸矛盾によって生みだされた寄生体、だがまさに生体の毛穴を「ふさいでいる」寄生体である。今日公認の社会民主党内で支配的なカウツキー主義的日和見主義は、国家を寄生体と見る見解をもっぱら無政府主義だけに特有な属性だと見なしている。もちろん、マルクス主義のこのような歪曲は、「祖国擁護」の概念を帝国主義戦争にあてはめて、この戦争を正当化し美化するという、前代未聞の恥を社会主義にかかせた小市民たちにとっては、きわめて好都合なものであるが、それでもやはり、無条件に歪曲である。

封建制度の没落以来ヨーロッパが見てきたかずかずのブルジョア革命のすべてをつうじて、この官僚・軍事機構の発展、完成、強化がすすんでいる。とくに、ほかならぬ小ブルジョアジーは、この機構を媒介として、大ブルジョアジーの側へ引きつけられ、彼らに強く従属させられている。この機構が農民、小手工業者、商人などの上層に、比較的快適で安穏で、名誉あるささやかな地位、それについている人間を人民のうえに立たせるような地位をあたえるからである。一九一七年二月二十七日以後の半年間にロシアで起こったことを考えてみたまえ。以前には優先的に黒百人組[二]にあたえられていた官吏の地位は、カデット[三]、メンシェヴィキ、エス・エルの獲物となった。人々は、真剣な改革のことは実質上なにひとつ考えずに、そういう改革を「憲法制定議会まで」引き延ばすことにつとめ、――しかも、その憲法制定議会を、ずるずると戦争の終りまで引き延ばすことにつとめたのだ！　ところが、獲物の分配や、大臣、次官、総督等々の地位にありつく段になると、ぐずぐずしてはいなかったし、憲法制定議会など待ちはしなかった！内閣の顔ぶれの組合せ遊びは、実質上、上でも下でも、全国にわたって、中央および地方行政全体をつうじておこなわれるこういう「獲物」の分配と再分配の現われにほかならなかった。一九一七年二月二十七日から八月二十七日までの半年間の総括、客観的な総括が、次のようなものであることは、疑いをいれない。すなわち、改革が延期され、官吏の地位の分配がおこなわれ、分配上の「誤り」が若干の再分配によって是正されたこと、これである。

しかし、種々のブルジョア政党や小ブルジョア政党のあいだで（ロシアの例をとれば、カデット、エス・エル、メンシェヴィキのあいだで）官僚機構の「再分配」がおこなわれればおこなわれるほど、被抑圧諸階級とその先頭に立つプロレタリアートには、自分たちが全ブルジョア社会にたいして和解できない敵対関係にあることが、ますますはっきりわかってくる。そこで、すべてのブルジョア政党に

とっては、「革命的民主主義」政党をもふくめた、最も民主主義的な政党にとってさえ、革命的プロレタリアートにたいする弾圧を強め、弾圧機構、すなわちほかならぬ国家機構を強化することが必要になってくる。諸事件がこのような成りゆきをとるため、革命は、国家権力にたいして「破壊力をことごとく集中」しないわけにはいかなくなり、国家機構を改善するのではなくて、それを破壊し、廃絶することを任務としないわけにはいかなくなる。

　この任務がこのような仕方で提起されるにいたったのは、論理的な考察によるものではなく、諸事件の現実の発展、一八四八―一八五一年の生きた経験にもとづくことである。マルクスが歴史的経験という事実的基盤をどんなに厳格に守っているかは、彼が、この廃絶すべき国家機構をなにとおきかえるべきかという問題を、一八五二年にはまだ具体的に提起していないことでわかる。経験は、当時まだこのような問題のための材料を提供していなかったのである。歴史がこのような問題を日程にのぼせたのは、もっとあとの一八七一年のことであった。一八五二年に、自然史的観察の正確さで確認できたことは、プロレタリア革命が、国家権力にたいして「破壊力をことごとく集中」する任務、国家機構を「打ち砕く」任務にたどりついたということだけであった。

　ここでこういう疑問をもつ人があるかもしれない。マルクスの経験、観察、結論を普遍化して、それを一八四八―一八五一年の三年間のフランスの歴史よりも広い範囲に及ぼすことは、正しいだろうか？　と。この問題を検討するために、まずエンゲルスのある一つの意見を思いおこし、ついで事実資料に移ることにしよう。

　エンゲルスは『ブリュメール一八日』第三版の序文にこう書いている。

　「……フランスは、歴史上の階級闘争がつねにほかのどの国よりも徹底的に、決着までたたかいぬかれた国であり、したがって、つぎつぎに交替する政治的諸形態――それらの内部でこの階級闘争がおこなわれまた階級闘争の結果がそれに総括されてゆくのであるが――が最も明確な輪郭をとってきた国である。中世には封建制度の中心であり、ルネサンスこのかた統一的な等族君主制の模範国であったフランスは、大革命で封建制度を粉砕し、ヨーロッパの他のどの国にも見られないほど古典的なかたちで、ブルジョアジーの純粋な支配を打ち立てた。そして、支配の地位についたブルジョアジーにたいする台頭しつつあるプロレタリアートの闘争も、フランスでは、他の国では見られない鋭いかたちをとって現われている。」（一九〇七年版、四ページ）[三]

この最後のことばは、一八七一年以来フランス・プロレタリアートの革命的闘争に中断が生じているという点で、古くさくなっている。もっとも、この中断がどんなに長期にわたるにせよ、だからといって、フランスがきたるべきプロレタリア革命で階級闘争が決着までたたかいぬかれる古典的な国という本領を発揮する可能性がないということにはけっしてならない。

だが、一九世紀末と二〇世紀初頭における先進諸国の歴史を概観してみよう。そうすれば、同じ過程が、これより緩慢にではあるが、いっそう多様なかたちで、はるかに広い舞台で進行していることがわかるであろう。すなわち、一方では、共和制の国々（フランス、アメリカ、スイス）と君主制の国々（イギリス、ドイツ（ある程度まで）、イタリア、スカンディナヴィア諸国等々）とを問わず、「議会権力」がつくりあげられており、他方では、さまざまなブルジョア政党や小ブルジョア政党が、ブルジョア制度の基礎はそのままにしておいて、権力を争って相たたかい、官職の「獲物」を分配し、再分配しており、最後に、「執行権力」とその官僚・軍事機構がいっそう完全なものになり、強化されている。

これが資本主義国家一般の最近の進化全体の一般的な特徴であることは、まったく疑いをいれる余地がない。資本主義世界全体に固有なこの同じ発展過程が、フランスでは、一八四八―一八五一年の三年間に、急速な、鋭い、集中的なかたちで現われたのである。

だが、とくに帝国主義、すなわち銀行資本の時代、巨大な資本主義的独占体の時代、独占資本主義が国家独占資本主義に成長転化する時代には、君主制の国々でも、最も自由な共和制の国々でも、プロレタリアートにたいする弾圧の強化にともなって、「国家機構」の異常な強化、その官僚・軍事機構の前代未聞の拡大が現われる。

いまや世界史は、一八五二年よりはるかに広範な規模で、国家機構を「破壊する」ためにプロレタリア革命の「力をことごとく集中する」点に近づきつつあることは、疑いをいれない。

プロレタリアートはこの国家機構をなにとおきかえるだろうか、このことについてきわめて教えるところの多い材料を提供したのは、パリ・コミューンである。

三　一八五二年におけるマルクスの問題提起[三]

一九〇七年に、メーリングは『ノイエ・ツァイト』[三]（第二五年、第二巻、一六四ページ）に、一八五二年三月五日付のマルクスのヴァイデマイアーあての手紙の抜粋を発表

した。この手紙の一節に、次のような注目すべき考察がふくまれている。

「私について言えば、近代社会に諸階級が存在していることを発見したという功績も、それらの階級相互の闘争を発見したという功績も、私のものではない。私よりもずっとまえに、ブルジョア歴史家たちが諸階級のこの闘争の歴史的発展を述べていたし、ブルジョア経済学者たちは諸階級の経済的解剖学を叙述していた。私が新しくやったことは、次の点を証明したことである。(一)階級の存在は、生産の特定の歴史的発展諸段階(historische Entwicklungsphasen der Produktion)だけに結びついたものであるということ、(二)階級闘争は必然的にプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)にみちびくということ、(三)この執権(ディクタツーラ)そのものは、すべての階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎないということ、これである……。[三]」

以上のことばで、マルクスは、第一には、ブルジョアジーの先進的で最も深くものを考える思想家たちの学説と、彼の学説との主要な根本的な相違点を、第二には、彼の国家学説の核心を、驚くほどあざやかに言いあらわすことができた。

マルクスの学説のなかで主要なものは階級闘争である。こう言ったり、こう書いたりしている場合が非常に多い。しかし、これは誤りである。そして、この誤りから、マルクス主義の日和見主義的な歪曲が、ブルジョアジーに受けいれられるようにしようという精神でのマルクス主義のつくりかえが、ひっきりなしに生まれてくるのである。なぜなら、階級闘争の学説は、マルクスではなく、マルクス以前にブルジョアジーがつくりだしたものであって、一般的に言えば、ブルジョアジーにとって受けいれることのできるものだからである。階級闘争を認めるだけの者は、まだマルクス主義者ではない。それを認めていても、ブルジョア的な考え方とブルジョア政治の枠からまだぬけでていない場合もありうる。マルクス主義を階級闘争の学説に限定することは、マルクス主義を切りちぢめ、ゆがめ、それをブルジョアジーにとって受けいれることのできるものにすることを意味する。階級闘争の承認をプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の承認にまでおしおよぼす者だけが、マルクス主義者である。この点に、マルクス主義者と月なみの小ブルジョア(ならびに大ブルジョア)との最も深刻な相違がある。この試金石にかけて、マルクス主義をほんとうに理解し承認しているかどうかをためさなければならない。だから、ヨーロッパの歴史が労働者階級を実践的にこの問題に当面させたとき、すべての日和見主義者や改良主義者ばかりで

なく、すべての「カウツキー主義者」（改良主義とマルクス主義のあいだを動揺している連中）もまた、プロレタリアートの執権を否認するあわれむべき俗物であり小ブルジョア民主主義者であることがわかったのも、驚くにはあたらない。一九一八年八月、すなわち本書の第一版よりはるかあとに出たカウツキーの小冊子『プロレタリアートの執権』は、マルクス主義を小市民的に歪曲し、マルクス主義を口先では偽善的に承認しながら、実際には卑劣にも否認している見本である（私の小冊子『プロレタリア革命と背教者カウツキー』、ペトログラードおよびモスクワ、一九一八年、を見よ）。

元マルクス主義者K・カウツキーをおもな代表者とする今日の日和見主義は、右の引用中でマルクスのおこなっているブルジョア的立場の特徴づけに、そっくりあてはまる。なぜなら、この日和見主義は、階級闘争を承認する範囲をブルジョア的諸関係の範囲に限っているからである（ところで、この範囲内では、この範囲の枠内では、教養ある自由主義者はだれも、階級闘争を「原則的に」承認することを拒まないであろう！）。日和見主義は、階級闘争の承認を、まさに最も肝心な点まで、すなわち資本主義から共産主義への過渡の時期まで、ブルジョアジーを打倒し、彼らを完全に一掃する時期まで、おしおよぼすことをしない。現実には、この時期は、不可避的に、未曽有に激しい階級闘争の時期であり、階級闘争が未曽有に鋭いかたちをとる時期である。したがって、この時期の国家もまた、不可避的に、新しい仕方で民主主義的な（プロレタリアと無産者一般とにとって）、また新しい仕方で執権的な（ブルジョアジーにたいして）国家でなければならない。

つぎに、一階級の執権は、あらゆる階級社会一般にとってだけ必要なのではなく、またブルジョアジーを打倒したプロレタリアートにとってだけ必要なのではなく、さらに、資本主義を「無階級社会」から、共産主義からへだてる歴史的時期全体にとっても必要なことを理解した者だけが、マルクスの国家学説の本質を把握したのである。ブルジョア国家の形態はきわめてさまざまであるが、その本質は一つである。すなわち、これらの国家はみな、あれこれの仕方で、しかし結局は、かならずブルジョアジーの執権なのである。資本主義から共産主義への過渡は、もちろん、きわめて多数のさまざまな政治形態をもたらさざるをえないが、それにもかかわらず、その本質は、不可避的にただひとつ、プロレタリアートの執権であろう。

第三章　国家と革命。一八七一年のパリ・コミューンの経験。マルクスの分析

一　コミューン戦士の試みの英雄精神はどういう点にあるか？

周知のように、コミューンにさきだつ数ヵ月前、一八七〇年の秋に、マルクスは、政府を打倒しようと企てるのはむこうみずな愚挙であることを立証して、パリの労働者に警告を発した。(三三) しかし、一八七一年三月に、労働者が決戦を強いられて、それに応じ、蜂起が事実となったとき、マルクスは、悪い前兆があったにもかかわらず、最大の感激をもってこのプロレタリア革命を歓迎した。マルクスは、悪名をはせたロシアのマルクス主義の背教者プレハーノフがしたように、「時期尚早の」運動にたいする学者ぶった非難を固執したりはしなかった。プレハーノフは、一九〇五年一一月には労働者と農民の闘争を激励する趣旨のことを書きながら、一九〇五年一二月以後には、「武器をとるべきではなかった」と、自由主義者流にわめきたてたのである。(三六)

けれども、マルクスは、コミューン戦士の――彼の表現によれば――「天をもおそおうとする」英雄精神(三七)に感激しただけではなかった。この大衆的な革命運動は、目的を達しなかったとはいえ、非常に重要な歴史的経験であり、世界プロレタリア革命の一定の一歩前進であり、数百の綱領や議論よりも重要な実践的一歩であると、彼は考えた。この経験を分析し、そこから戦術上の教訓を引きだし、この経験にもとづいて自分の理論を再検討すること――マルクスが自分の課題としたのはこのことであった。

マルクスが必要だと認めて『共産党宣言』にくわえた唯一の「訂正」は、パリ・コミューン戦士の革命的経験にもとづいてなされたものであった。

『共産党宣言』のドイツ語新版への序文で、両著者が署名した最後のものは、一八七二年六月二四日付になっている。この序文のなかで、著者カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは、『共産党宣言』の綱領が「今日では、ところどころ時代おくれになっている」と言っている。

それにつづけて彼らはこう言っている。

「……**とりわけコミューンは、『労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま掌握して、自分自身の目的のために行使することはできない』ということを証明した**……。」

この引用文のなかで二重括弧に入れたことばは、両著者がマルクスの著作『フランスにおける内乱』からとってきたものである(二八)。

だから、マルクスとエンゲルスは、パリ・コミューンの基本的で、主要な一教訓がきわめて大きな重要性をもっていると考えたので、この教訓を『共産党宣言』への本質的な訂正としてとりいれたのである。

きわめて特徴的なことは、ほかならぬこの本質的な訂正が日和見主義者によってゆがめられてしまい、この訂正の意味が、『共産党宣言』の読者の一〇〇人中の九九人でないまでも、一〇人中の九人には、おそらくわかっていないことである。この歪曲については、あとで、さまざまな歪曲を特別に取り扱った章で、くわしく述べることにする。ここでは、次のことを指摘しておくだけで十分であろう。すなわち、右に引用したマルクスの有名なことばの当世流行の卑俗な「理解」によると、マルクスがここで強調しているのは、権力の奪取とか、そういったふうのこととは反対の、漸次的発展の思想だ、というのである。

実際には、まさにその逆である。マルクスの考えは、労働者階級は「できあいの国家機構」を粉砕し、打ち砕かなければならず、それをそのまま奪取するにとどまってはならない、ということなのである。

一八七一年四月一二日、すなわち、まさにコミューンが存在していたさなかに、マルクスはクーゲルマンにあてた手紙に次のように書いている。

「……私の『ブリュメール一八日』の最後の章を見てもらえば、そこで私が、フランス革命の次の企ては、もはやこれまでのように官僚・軍事機構を一つの手から他の手に移すことではなくてそれを打ち砕く」(白丸はマルクスのもの。原文では zerbrechen)「ことである、という意見を述べていることに気づくでしょう。これこそ、大陸におけるあらゆる真の人民革命の前提条件なのです。われわれの英雄的なパリの党同志たちが試みていることも、またこれなのです」(『ノイエ・ツァイト』(二九)、一九〇一－一九〇二年、第二〇年、第一巻、七〇九ページ)(マルクスのクーゲルマンあての手紙は、ロシア語ではすくなくとも二種類の版で出版されている。その一つは私が編集したもので、私の序文がついている(三〇))。

この「官僚的・軍事的国家機構を打ち砕く」ということばに、革命のさいの国家にたいするプロレタリアートの任務の問題にかんするマルクス主義の主要な教訓が、簡潔に表現されている。ところが、ほかならぬこの教訓が完全に忘れさられているばかりか、広くおこなわれているカウツキー主義的なマルクス主義「解釈」によって、ろこつにゆ

がめられているのである！

マルクスが『ブリュメール一八日』を引合いにだしていることについていえば、われわれはまえのほうに該当する箇所を全文引用しておいた。

前掲のマルクスの考察のうち、とくに二つの箇所が興味あるものとして注目をひく。第一に、彼は自分の結論を大陸に限っている。これは、まだイギリスが、純資本主義国ではあるが軍閥をもたず、官僚制度もあまりなかった国の典型であった一八七一年には、当然であった。だから、マルクスはイギリスを除外したのである。そこでは、当時は、「できあいの国家機構」の破壊を前提条件とせずとも、革命が、人民革命でさえが、可能であると思われたし、また実際に可能だったのである。

一九一七年の今日では、最初の帝国主義的大戦の時代には、マルクスのおこなったこの限定はなくなる。軍閥と官僚主義が存在しないという意味でのアングロ－サクソン的「自由」の最大かつ最後の――全世界をつうじて――代表者であるイギリスとアメリカの双方ともに、あらゆるものを自分に隷属させ、あらゆるものを抑圧する官僚・軍事制度の一般ヨーロッパ的な、いまわしい、血なまぐさい泥沼に完全にころげおちてしまった。いまでは、イギリスでもアメリカでも、「できあいの」（これらの国で一九一四年から一九一七年までにできあがって、「ヨーロッパ的」、一般帝国主義的な完成度に達した）「国家機構」を打ち砕き、破壊することが、「あらゆる真の人民革命の前提条件」である。

第二に、とくに注意をはらうに値するのは、官僚的・軍事的国家機構の破壊が「あらゆる真の人民革命の前提条件」であるという、マルクスの非常に深遠な意見である。こういう「人民」革命などという概念をマルクスが口にするのは、奇異に思われる。そこで、ロシアのプレハーノフ派やメンシェヴィキ、すなわちマルクス主義者と認めてもらいたがっているこれらのストルーヴェ追随者たちは、おそらく、マルクスのそういう表現は「言いそこない」だと、主張することであろう。彼らは、マルクス主義をゆがめて、貧弱な自由主義的なものにしてしまったので、彼らにとっては、ブルジョア革命とプロレタリア革命との対立以外にはなにも存在せず、しかもこの対立でさえ、ひどく硬直したかたちで理解しているのである。

二〇世紀の革命を例にとるなら、ポルトガル革命も、トルコ革命[三]も、もちろんブルジョア革命と認めなければならない。だが、そのどちらも「人民」革命ではない。なぜなら、どちらの革命の場合にも、人民大衆、人民の大多数者が、積極的、自主的に、自分自身の経済的および政治的要求をかかげて、きわだった行動をとってはいないからであ

る。これに反して、一九〇五—一九〇七年のロシアのブルジョア革命は、ポルトガル革命やトルコ革命にときおりさずけられたような「輝かしい」成功をおさめなかったとはいえ、疑いもなく「真の人民」革命であった。なぜなら、人民大衆、人民の多数者、抑圧と搾取に押しひしがれた社会底辺の最「下層」が、自主的に立ち上がって、自分たちの要求の刻印を、破壊される古い社会のかわりに自分たちの流儀で新しい社会を建設しようとする自分たちの企ての刻印を、革命の経過全体に押したからである。

一八七一年のヨーロッパ大陸では、プロレタリアートが人民の多数者を占める国は一つもなかった。現実に多数者を運動に引きいれる「人民」革命となることができるのは、その革命がプロレタリアートと農民の双方をまきこんだ場合だけであった。この両階級こそ、当時「人民」を構成していたのである。この両階級は、ともに「官僚的・軍事的国家機構」によって抑圧され、圧迫され、搾取されている点で、一つに結ばれている。この機構を粉砕し、それを打ち砕くこと——これが、「人民」の、人民の多数者の、労働者と大多数の農民との真の利益であり、これが貧農とプロレタリアとの自由な同盟の「前提条件」であって、このような同盟がなければ、民主主義は強固でなく、社会主義的改造は不可能である。

周知のように、パリ・コミューンは、まさにこのような同盟への道をひらこうとしたのであるが、内外の幾多の原因のために、その目的を達しなかったのである。

したがって、マルクスが「真の人民革命」について語ったとき、彼は、小ブルジョアジーの特性（これについては、彼は多くのことを、たびたび語っている）をいささかも忘れることなしに、一八七一年のヨーロッパ大陸の大部分の国家における諸階級の実際の相互関係をきわめて厳密に考慮していたのである。他方では、彼は、国家機構を「粉砕する」ことが労働者の利益のためにも、農民の利益のためにも必要であって、このことが両者を一つに結合し、両者の前に、「寄生体」をとりのぞいて、それをなんらかの新しいものとおきかえるという共通の任務を提起する、ということを確認したのである。

では、いったいなにとおきかえるべきか？

二　粉砕された国家機構をなにとおきかえるか？

この問いにマルクスが一八四七年の『共産党宣言』であたえた解答は、まだまったく抽象的であった。もっと正確に言えば、任務を指示してはいたが、その解決方法を指示していなかった。それに代わるべきものは、「プロレタリ

アートを支配階級として組織すること」、「民主主義をたたかいとること」である――これが『共産党宣言』のあたえた解答であった。

マルクスは、ユートピアにふけることなく、プロレタリアートを支配階級として組織するといぅそのことがどういう具体的な形態をとって現われるか、そのように組織することと、最も完全に、また徹底的に「民主主義をたたかいとること」とが、いったいどのように結びつくのか、という問題にたいして、大衆運動の経験が解答をあたえてくれるのを期待したのである。

コミューンの経験はささやかなものではあったが、マルクスは、『フランスにおける内乱』でこの経験を非常に注意ぶかく分析している。この著作の最も重要な箇所を引用しよう。

中世に由来し、「常備軍、警察、官僚、聖職者、裁判官という、いたるところにゆきわたった諸機関をもつ」「中央集権的な国家権力」が、一九世紀に発達をとげた。資本と労働の階級敵対が発展するにつれて、「国家権力は労働者階級を抑圧するための公的強力、階級支配の機構という性格をますますおびてきた。すべて階級闘争の一前進をあらわすような革命のあとでは、国家権力の純然たる抑圧的な性格がますます公然と現われてくる。」一八四八―一八四九年の革命のあとでは、国家権力は「労働にたいする資本の全国的な戦争用具」となった。第二帝制はこれを強固にした。

「帝制の正反対物がコミューンであった。」「それは、階級支配の君主制形態ばかりでなく、階級支配そのものをも廃止するような共和制」の「明確な形態であった。……(三)」

プロレタリア的、社会主義的共和制のこの「明確な」形態は、いったいどういう点にあったか？　それが創造しはじめた国家は、どんなものであったか？

「……コミューンの最初の政令は、常備軍を廃止し、それを武装した人民とおきかえることであった。……」

この要求は、今日では、社会主義政党とよばれることを願っているすべての党の綱領にはいっている。だが、それらの党の綱領にどれだけの値うちがあるかは、二月二七日の革命の直後に、この要求の実現を実際上放棄してしまったわが国のエス・エルやメンシェヴィキの行動を見れば、なによりもはっきりする！

「……コミューンは、パリの各区での普通選挙によって選出された市会議員で構成されていた。彼らは責任を負い、いつでも解任することができた。コミューン議員の大多数は、当然に、労働者か、労働者階級の公認の代

表者からなりたっていた。……

……これまで国の政府の道具であった警察は、その政治的属性をただちに剝ぎとられて、責任を負う、いつでも解任できるコミューンの道具に変えられた。行政府の他のあらゆる部門の吏員も同様であった。コミューンの議員をはじめとして、公務は労働者なみの賃金で果たされなければならなかった。国家の高官たちの既得権や交際費は、高官たちそのものとともに姿を消した。……旧来の政府の物質的権力の道具である常備軍と警察をいったんとりのぞいてしまうと、コミューンは、精神的抑圧の道具、すなわち坊主権力を打ち砕くことにただちにとりかかった。……司法官はあの見せかけの独立性を失った。……彼らは、今後は選挙され、責任を負い、解任できるものとならなければならなかった。……」

こういうわけで、コミューンは、粉砕された国家機構をいっそう完全な民主主義――常備軍の廃止、すべての公務員の完全な選挙制と解任制――とおきかえた「だけ」のように見える。ところが、実際には、この「だけ」が意味するものは、ある制度から、原則的に異なった他の制度への壮大な交替なのである。ここに、まさに「量から質への転化」の一事例が認められる。民主主義は、およそ考えられるかぎり最も完全に、最も徹底的に実行されると、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義に転化し、国家(＝一定の階級を抑圧するための特殊な力)から、もはや本来の国家ではないあるものに転化するのである。

ブルジョアジーと彼らの反抗を抑圧することは、いまなお必要である。コミューンにとっては、これはとくに必要であった。そして、コミューンの敗因の一つは、これを十分断固としておこなわなかった点にある。だが、ここでの抑圧機関は、すでに住民の多数者であって、奴隷制のもとでも、農奴制のもとでも、賃金奴隷制のもとでもつねにそうであったように、住民の少数者ではない。ところで、人民の多数者自身が自分の抑圧者を抑圧するのであるから、抑圧のための「特殊な力」はもはや必要でない！　この意味では、国家は死滅しはじめる。特権的な少数者の特殊な機関(特権的な官吏、常備軍の首脳部)ではなくて、多数者自身が直接にそれを遂行することができる。そして、国家権力の諸機能の遂行そのものが全人民的になればなるほど、この権力の必要性がますます少なくなる。

この点でとくに注目に値するのは、マルクスが強調しているコミューンの諸方策、すなわち、交際費や官吏の金銭上の特権の全廃、すべての国家公務員の俸給の「労働者なみの賃金」水準への引下げである。まさにこの点に、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義への、抑圧者の

民主主義から被抑圧階級の民主主義への、一定の階級を抑圧するための「特殊な力」としての国家から、人民の多数者である労働者と農民の総力による抑圧者の抑圧への急転換が、最も明瞭に現われている。ところが、まさにこのとくに明瞭な点、国家の問題についておそらく最も重要な点で、マルクスの教訓がいちばんひどく忘れられているのである！　通俗的な注釈書――それは数えきれないほどあるが――には、この点についてなにも述べていない。まるで時代おくれの「素朴な考え」でもあるかのように、このことを黙殺するのが「一般の習わし」である。――ちょうどキリスト教が国教の地位を得たのちは、民主主義的・革命的精神をもった原始キリスト教の「素朴な考え」が、キリスト教徒によって「忘れられ」てしまったのと同じである。

国家の高官の俸給の引下げは、素朴な原始的民主主義の要求に「すぎない」ように見える。最新の日和見主義の「創始者」のひとり、元社会民主主義者エドゥアルト・ベルンシュタインは、幾度となく、「原始的」民主主義にたいする卑俗なブルジョアの嘲笑の受け売りをこととした。すべての日和見主義者と同様に、また、今日のカウツキー主義者と同様に、彼には次の二点がまったく理解できなかったのだ。第一に、資本主義から社会主義への移行は、「原始的」民主主義へのある程度の「復帰」なしには不可能なこと（なぜなら、そうしないとすれば、いったいどのようにして住民の多数者、いな一人のこらず全住民が国家機能を遂行するようになれるのか？）、第二に、資本主義と資本主義的文化とを基礎とする「原始的民主主義」は、原始時代あるいは資本主義以前の時代の原始的民主主義と同じものではない。資本主義的文化は、大規模生産、工場、鉄道、郵便、電話その他をつくりだした。そして、これを基礎とすれば、旧来の「国家権力」の機能の圧倒的部分は非常に単純化されて、登録、記入、点検といった、きわめて単純な作業に帰着させることができるので、これらの機能は、読み書きのできる者ならだれにでも十分にやりこなせ、普通の「労働者なみの賃金」で完全に遂行できるものとなるであろうし、特権めいた、「上からの指図」めいた色合いをすっかりこれらの機能からとりのぞくことができるであろう（またとりのぞかなければならない）。

例外なくすべての公務員が完全に選挙で選ばれるようにし、また彼らをいつでも解任できるようにすること、彼らの俸給を普通の「労働者なみの賃金」に引き下げること――これらの簡単で「自明な」民主主義的措置は、労働者の利益と大多数の農民の利益とを完全に一つに結びつけると同時に、資本主義から社会主義にいたるかけ橋として役だつのである。これらの措置は、社会の国家的、純政治的

な改造にかんするものである。しかし、それらの措置は、「収奪者の収奪」の実現または準備がそれにともなうとき、すなわち生産手段の資本主義的私有から社会的所有への移行がそれにともなうとき、はじめてあますところのない意味と意義とを獲得することは、いうまでもない。

マルクスはこう書いている。

「コミューンは、二つの最大の支出源――軍隊と官吏制度――を廃止することによって、すべてのブルジョア革命のあの合言葉、安あがりの政府を実現した。」

農民のなかから、また小ブルジョアジーの他の諸層のなかから「成りあがって」、ブルジョア的な意味で「出世する」のは、すなわち、金持に、ブルジョアになったり、地位の保障された特権的な官吏になったりするのは、とるにたりない少数者にすぎない。およそ農民のいるあらゆる資本主義国（大部分の資本主義国はそうであるが）で、大多数の農民は政府に抑圧されていて、政府が打倒されるのを待ち望み、「安あがりな」政府を待望している。これを実現できるのはプロレタリアートだけであり、そしてプロレタリアートは、これを実現することによって、同時に国家の社会主義的改造への一歩を踏みだすのである。

三　議会制度の廃止

マルクスはこう書いている。

「コミューンは議会ふうの機関ではなくて、同時に執行し立法する行動的機関でなければならなかった。……

……普通選挙権は、支配階級のどの成員が議会で人民を代表し、そして踏みにじる（ver- und zertreten）べきかを、三年ないし六年に一度きめるのではなくて、そこいらの雇い主がその事業のために労働者や監督や簿記係をさがすさいに個人的選択権が彼の役に立つのと同じ仕方で、コミューンに組織された人民の役に立たなければならなかった。」

一八七一年になされたこの注目すべき議会制度の批判もまた、社会排外主義と日和見主義の支配のおかげで、いまではマルクス主義の「忘れられたことば」の一つになっている。大臣や職業的議員、プロレタリアートの裏切者や当の「功利的」社会主義者は、議会制度の批判をすっかり無政府主義者にまかせてしまった。そして、この驚くべくもっともな根拠によって、議会制度のあらゆる批判を「無政府主義」だと宣言したのだ‼「先進的な」議会主義諸国のプロレタリアートが、シャイデマン、ダーヴィット、レギーン、サンバ、ルノデル、ヘンダソン、ヴァンデルヴェルデ、スタウニング、ブランティング、ビッソラーティらの一派のような「社会主義者」を見てあいそをつかし、ア

ナルコーサンディカリズム(三三)が日和見主義の血をわけた兄弟であるにもかかわらず、ますます頻繁にそれに共鳴するようになっているのは、不思議ではない。

しかし、プレハーノフ、カウツキーその他が革命的弁証法を空疎なはやり文句、おもちゃのがらがらにしてしまったとはいえ、マルクスにとって、革命的弁証法はけっしてそんなものではなかった。マルクスは、ブルジョア議会制度の「家畜小屋」をさえ利用する――とくに革命的情勢が存在していないことが明白なときに――能力をもたないという理由で、容赦なく無政府主義と手を切ることができたが、同時にまた、議会制度を真に革命的、プロレタリア的に批判することもできたのである。

支配階級のどの成員が議会で人民を踏みにじり、押しつぶすかを数年に一度きめること――議会制立憲君主制のもとだけでなく、どんなに民主的な共和制のもとでも、ブルジョア議会制度の真の核心はまさにここにある。

だが、われわれが国家の問題を提起するとき、この分野におけるプロレタリアートの任務という見地から、国家の一制度としての議会制度を考察するとき、議会制度からぬけだす道はいったいどこにあるのか？　どうすれば議会制度なしにやっていけるのか？

かさねて、かさねて言わなければならない。コミューンの研究にもとづくマルクスの教訓はすっかり忘れさられてしまったので、今日の「社会民主主義者」(今日の社会主義の裏切者と読め)には、無政府主義的な批判か反動的な批判以外の議会制度批判は、まったく理解できないのである。

議会制度からぬけだす道は、もちろん、代議機関と選挙制を廃止することにあるのではなく、代議機関をおしゃべり会議から「行動的な」機関に転化することにある。「コミューンは、議会ふうの機関ではなくて、同時に執行し立法する行動的機関でなければならなかった。」

「議会ふうの機関ではなくて、行動的機関」――このことばは、今日の議員たちや社会民主党の議会主義的「狆(ちん)」どもの急所をついている！　アメリカからスイスまで、フランスからイギリス、ノルウェーその他まで、どの国でもいいから、議会制の国を見てみるがよい。ほんとうの「国家」活動は舞台裏でおこなわれ、各省や官房や参謀本部によって遂行されている。議会では、「庶民」をたぶらかすという特別の目的でおしゃべりをしているだけである。これは実際のことであって、ブルジョア民主主義共和国であるロシア共和国においてさえ、ほんとうの議会をつくりだすひまのないうちに、はやくも議会制度のこれらすべての弊害がさっそく現われたほどである。スコベレフとツェレテーリ、チェルノーフとアウクセンチエフといったような、

腐った小市民根性の勇士たちは、醜悪きわまるブルジョア議会制度の型にならって、ソヴェトまでもけがしてしまい、まんまとそれを空疎なおしゃべり会議に変えてしまった。ソヴェト内では、「社会主義者」の大臣諸公が、美辞麗句と決議で信じやすい小百姓をたぶらかしている。政府内では、一方では、順ぐりにできるだけ多数のエス・エルやメンシェヴィキを実いりのよい栄職の「ピローグ」にありつかせるために、他方では、人民の「注意を引きつけておく」ために、カドリール・ダンスがはてしなくつづけられている。ところが、官房や参謀本部では、「国家」活動が「実施されている」！

支配党である「社会革命党」の機関紙『デーロ・ナローダ』[22]は、最近その社説で、――「だれもがみな」政治的売春に従事している「上流社会」の人間にもちまえの無類のあけすけさで――こう告白した。「社会主義者」（というのもおこがましいが！）の手ににぎられている諸省でさえ、全官僚機構は実質上もとのままであり、もとどおりのやり方で執務し、革命的企画をまったく「勝手気ままに」サボタージュしている！と。いや、こういう告白がなかったとしても、エス・エルとメンシェヴィキが政府に参加してきた実際の歴史がそのことを証明してはいないだろうか？ただここで特徴的なことは、カデットとともに大臣仲間にはいっているチェルノーフ、ルサーノフ、ゼンジーノフその他の『デーロ・ナローダ』の編集者諸君が、羞恥心というものをまったくなくしてしまって、まるで些細なことでもあるかのように、「自分たちの」省では万事がもとのままだと、臆面もなく公言してはばからないことである！村の百姓を愚弄するためには革命的民主主義的な空文句、資本家を「よろこばせる」ためにはお役人式のだらだらした役所仕事――これが「誠実な」連立の本質なのだ！

コミューンは、ブルジョア社会の金しだいの腐敗した議会制度を、意見と審議の自由が欺瞞に堕することのない機関とおきかえる。なぜなら、議員は、みずから活動し、自分がつくった法律をみずから執行し、実際の結果をみずから点検し、自分の選挙人にたいしてみずから直接に責任を負わなければならないからである。代議機関は残っているが、しかし、特殊な制度としての、立法活動と執行活動との分業としての、議員に特権的地位をあたえるものとしての議会制度は、ここにはない。民主主義は、プロレタリア民主主義でさえ、代議機関なしには考えることができない。だが、ブルジョア社会にたいする批判がわれわれにとって空文句でないなら、またブルジョアジーの支配を倒そうという願いがわれわれのまじめな、心からの願いであって、メンシェヴィキやエス・エルの場合のように、シャイデマ

ンやレギーンら、サンバやヴァンデルヴェルデらの場合のように、労働者の票を獲得するための「選挙用の」文句でないなら、議会制度なしに民主主義を考えることはできないし、また考えなければならない。

マルクスが、コミューンにも、またプロレタリア民主主義にも必要なような、そういう官吏制度の機能を述べて、比較のために「そこいらの雇い主」の使用人をあげていること、すなわち「労働者、監督、簿記係」を雇う普通の資本主義企業をあげていることは、たいへん教えるところが多い。

マルクスには、「新しい」社会を考案し、それについて空想をめぐらすという意味でのユートピア主義は、毛筋ほどもない。そうではなく、彼は、古い社会からの新しい社会の誕生、古い社会から新しい社会への過渡的諸形態を、自然史的過程として研究している。彼は、大衆的なプロレタリア運動の実際の経験をとりあげて、そこから実践的な教訓を引きだすことにつとめている。すべて偉大な革命的思想家たちは、被抑圧階級の偉大な運動にたいして、学者ぶった「道徳説教」(プレハーノフの「武器をとるべきではなかった」とか、ツェレテーリの「階級は自制すべきである」とかいったたぐいの)でのぞむことはけっしてなく、そういう運動の経験から学ぶことを恐れなかったのだが、マルクスも同様にコミューンから「学ぶ」のである。

官吏制度を一挙に、いたるところで、徹底的に廃絶するなどということは、問題にならない。それはユートピアである。だが、旧来の官僚機構を一挙に粉砕すること、そしていっさいの官吏機構を徐々になくしてゆく可能性をあたえる新しい官吏機構の建設にただちに着手すること――これはユートピアではない。これはコミューンの経験である。これは革命的プロレタリアートの直接当面の任務である。

資本主義は「国家」統治の諸機能を単純なものにする。それは、「上からの指図」を一掃すること、万事をプロレタリア(支配階級としての)の組織――社会全体の名において「労働者、監督、簿記係」を雇うところの――に帰着させることを可能にする。

われわれはユートピア主義者ではない。われわれは、どうしたら一挙にいっさいの統治、いっさいの服従なしにやっていけるか、などと「夢想」しはしない。プロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)の任務の無理解にもとづくこうした無政府主義的夢想は、マルクス主義とは根本的に無縁なものであり、実際には、人間がいまとは違ったものになるまで社会主義革命を延期するのに役だつだけである。いや、われわれは、いまのままの人間によって、すなわち服従なしには、統制なしには、「監督と簿記係」なしにはやっていけない人間

によって、社会主義革命をおこなうことを望んでいる。

しかし、服従すべき相手は、すべての被搾取勤労者の武装した前衛、プロレタリアートである。国家官吏に特有な「上からの指図」についていえば、これはいますぐ、きょうあすにも、「監督と簿記係」の単純な機能——一般都市住民の知識水準でいまでもすでに完全にやりこなすことができ、「労働者なみの賃金」で完全に遂行できる機能——とおきかえはじめることができるし、またそうしなければならない。

われわれ労働者は、すでに資本主義によってつくりだされているものから出発して、労働者としての自分の経験にたよりながら、またこのうえなく厳格な鉄の規律をつくりだし、武装した労働者の国家権力によってそれを維持しながら、自分で大規模生産を組織するであろう。われわれは、国家官吏の役割を、われわれの委託のたんなる遂行者、責任を負い、解任でき、ほどほどの俸給をもらう「監督と簿記係」（ならびに、もちろんのことながら、あらゆる部類、種目、等級の技術者）の役割に引き下げるであろう。——まさにこれがわれわれのプロレタリア的任務であって、プロレタリア革命を遂行するにあたっては、まさにここから始めることができるし、また始めなければならない。大規模生産の基盤のうえで、このような仕方で始めれば、あらゆる官吏制度がしだいに「死滅」し、括弧つきでない秩序、賃金奴隷制とは似ても似つかない秩序がしだいにつくりだされるように、おのずからなってゆく。その秩序のもとでは、監督と報告の機能がますます単純化されてゆき、すべての人によって順番に遂行され、やがて習慣となり、おしまいには、特殊な人間の層の特殊な機能としては消えてなくなるのである。

前世紀七〇年代のドイツのある機知に富んだ社会民主主義者は、郵便事業を社会主義経営の見本とよんだ。まことにそのとおりである。今日の郵便事業は、国家資本主義的独占の型にしたがって組織された経営である。帝国主義は、すべてのトラストをしだいにこのような型の組織に転化させている。ここでは、山のような仕事をになっている、飢えた「普通の」勤労者のうえに、同じブルジョア的官僚制度が立っている。しかし、ここには、社会的経済運営の機構がすでにできあがっている。資本家を打倒するがよい、武装した労働者の鉄腕でこれらの搾取者の反抗を粉砕するがよい、近代国家の官僚機構を打ち砕くがよい、——そうすれば、「寄生体」から解放され、高度の技術で装備された機構がわれわれの前に現われる。そして、結合された労働者は、技術者、監督、簿記係を雇い、彼らすべての労働にたいして、一般にすべての「国家」官吏の労働にたいす

ると同様に、労働者なみの賃金を支払うことによって、この機構を自分で運用してゆくことが十分にできる。これは、すべてのトラストについていますぐ実行でき、しかも勤労者を搾取から解放する具体的、実践的な任務である。それは、すでにコミューンによって（とくに国家建設の分野で）実践的に開始された経験を考慮にいれた任務である。

国民経済全体を郵便事業のように組織し、技術者、監督、簿記係が、武装したプロレタリアートの統制と指導のもとで、すべての公務員と同様に、「労働者なみの賃金」をこえた俸給をもらわないようにすること——まさにこれが、われわれの当面の目標である。われわれに必要なのは、まさにこのような経済的基礎のうえに立つこのような国家である。まさにこれこそ、議会制度の廃止をもたらすとともに、代議機関を存続させるものであろう。まさにこれこそ、ブルジョアジーがこれらの代議機関を金で自由にしている状態から、勤労諸階級をまぬがれさせるものであろう。

四　国民の統一の組織

「……コミューンがそれ以上仕上げる余裕をもたなかった全国的組織の簡潔な見取図には、小さな村にいたるまで、コミューンがその政治形態とならなければならないこと……が、はっきり述べられている。」……パリの「全国代表機関」も、もろもろのコミューンによって選出されることになっていた。

「……そのときにもなお中央政府には、少数の、だが重要な機能が残るであろうが、それらの機能は、故意にゆがめて伝えられたように、廃止されるのではなく、コミューンの吏員たち、したがって厳格に責任を負う吏員たちに、ゆだねられるはずであった。……

……国民の統一は破壊されるのではなく、反対に、コミューン制度によって組織されるはずであった。みずから国民の統一を具現するものと称しながら、国民から独立し、国民に優越するものであろうと欲していた国家権力を廃絶することによって、この統一が現実となるはずであった。この国家権力は、そのじつ、国民の身体に寄生する肉瘤にすぎなかったのである。……旧来の政府権力の純然たる抑圧的な諸機関は切りとられなければならなかったが、他方、その正当な諸機能は、社会に優越する地位を要求した一権力からもぎとって、社会の責任を負う公僕に返還されるはずであった。」

今日の社会民主党の日和見主義者たちが、マルクスのこの考察をまったく理解しなかった——理解する気がなかったというほうが、たぶん、より正しいであろう——ことは[三三]、背教者ベルンシュタインのヘロストラトス的に有名な著書

『社会主義の前提と社会民主党の任務』がなによりもよく示している。まさに右にあげたマルクスのことばについて、ベルンシュタインはこう書いている。この綱領は、「その政治的内容からすれば、すべての本質的な特徴において――プルードンの連邦主義に酷似したものを示している。……マルクスと『小ブルジョア』プルードン」（ベルンシュタインは、「小ブルジョア」ということばを括弧にいれているが、これは、彼の考えでは、皮肉のつもりなのだ）「とは、他の点ではいろいろと意見を異にしているにもかかわらず、右の諸点では両者の思考の道すじはこのうえなく近い。」もちろん、――と、ベルンシュタインはつづけて言う――自治体の重要性は増大しているが、しかし、マルクスやプルードンが考えているような近代国家の廃止（Auflösung――文字どおりには、解散、解消）や、その組織の完全な変更（Umwandlung――転換）――国民議会を州議会または県議会の代表で構成し、州議会や県議会を、これまたコミューンの代表で構成すること――が「民主主義の第一の任務であるというのは、したがって、国民代議機関の従来の形態が完全に消滅するというのは、私には疑問だと思われる。」（ベルンシュタイン『前提』、一八九九年、ドイツ語版、一三四、一三六ページ）

「寄生体である国家権力の廃絶」というマルクスの見解とプルードンの連邦主義とを混同するとは、まったくとんでもない！　だが、これは偶然ではない。というのは、マルクスはここで中央集権制に対立するものとしての連邦制について論じているのではけっしてなく、すべてのブルジョア国に存在する旧来のブルジョア国家機構の粉砕について論じているのだということは、日和見主義者には思いもよらないことだからである。

この日和見主義者が思いつくのは、彼が自分の身辺に、小市民的俗物根性と「改良主義的」停滞との環境のなかに見いだすもの、すなわち「自治体」だけなのである！　プロレタリアートの革命のことなど、この日和見主義者は考えることさえ忘れてしまったのだ。

これはこっけいである。しかし、この点についてベルンシュタインと論争した者がいないのは、注目すべきことである。ベルンシュタインに論駁をくわえた者は多い。――とくにロシアの文献ではプレハーノフが、ヨーロッパの文献ではカウツキーが、彼に論駁をくわえている。ところが、ベルンシュタインがこの点でマルクスを歪曲したことについては、前者も後者もなんら語るところがない。

この日和見主義者は、革命的にものを考えたり、革命について思いをこらすことなどすっかり忘れてしまったので、マルクスと無政府主義の創始者プルードンとをごっちゃに

して、マルクスの考えを「連邦主義」だとしている。ところが、正統派マルクス主義者でありたいと望んでおり、革命的マルクス主義の学説を守りたいと望んでいるカウツキーとプレハーノフが、これについては口をつぐんでいるのだ！　ここに、マルクス主義と無政府主義との差異についての見解が極端に卑俗化されていることの根源の一つがある。こういう卑俗化は、カウツキー主義者にも日和見主義者にも固有なものであるが、これについては、なおあとで述べるおりがあろう。

右に引用したコミューンの経験についてのマルクスの考察には、連邦主義の痕跡もない。マルクスとプルードンの意見が一致しているのは、まさに日和見主義者ベルンシュタインが見おとしている点においてである。マルクスとプルードンの意見が違っているのは、まさにベルンシュタインが両者の意見の一致を見いだしているその点においてである。

マルクスとプルードンとの意見が一致しているのは、両者ともに近代国家機構の「粉砕」に賛成している点である。この点でマルクス主義が無政府主義と（プルードンとも、バクーニンとも）意見が一致していることを、日和見主義者もカウツキー主義者も見ようとしない。なぜなら、彼らはこの点でマルクス主義から離れているからである。

マルクスがプルードンともバクーニンとも意見を異にしているのは、（プロレタリアートの執権の問題については言うまでもない）まさに連邦主義の問題においてである。無政府主義の小ブルジョア的見解からは、原理的に連邦主義が出てくる。マルクスは中央集権論者である。また、右に引用したマルクスの考察には、中央集権主義からの逸脱はなにもない。ブルジョア国家機構の廃絶を中央集権制の廃止ととりちがえることができるのは、国家にたいする小市民的な「迷信」にすっかりとらえられた人間だけである！

ところで、プロレタリアートと貧農が国家権力を掌握して、まったく自由にみずからをコミューンに組織し、すべてのコミューンの活動を統合して資本に打撃をくわえ、資本家の反抗を打ち砕き、鉄道、工場、土地その他の私有財産を全国民、全社会の手に移すとすれば、これは中央集権制ではないだろうか？　これは、最も徹底した民主主義的中央集権制、しかもプロレタリア的な中央集権制ではないだろうか？

自発的な中央集権制が、もろもろのコミューンが自発的に統合して一国民を形成すること、もろもろのプロレタリア的コミューンがブルジョア支配とブルジョア国家機構とを破壊するために自発的に融合することが可能だとは、ベルンシュタインのまったく思いもよらないことなのだ。す

べての俗物と同じように、ベルンシュタインは、中央集権制とは、もっぱら上から、もっぱら官吏と軍閥の手で押しつけ維持するほかはないものだと考えているのである。

まるで彼の見解が歪曲されるおそれがあるのを予見していたかのように、マルクスは、コミューンが国民の統一を破壊し中央集権制を廃止しようと望んだという非難は故意の捏造だと、わざわざ強調して言っている。マルクスは、自覚的、民主主義的、プロレタリア的な中央集権制を、ブルジョア的、軍事的、官僚的な中央集権制に対置するために、わざわざ「国民の統一を組織する」という表現を用いているのである。

だが、……聞こうとしない人間は、どんなつんぼよりも始末がわるい。ところが、今日の社会民主党の日和見主義者は、国家権力の廃絶とか、寄生体の切り取りとかいうことについては、まさに聞こうとしないのだ。

五　寄生体である国家の廃絶

このことに関係したマルクスのことばはすでに引用したが、なおそれを補足しなければならない。

マルクスは次のように書いている。

「……新しい歴史上の創造物が、それにいくらか似ているように見える、より古い、それどころか滅んでさえいる社会生活の諸形態の写しと思いちがいされることは、その通常の運命である。こういうわけで、近代的国家権力を打ち砕く（bricht）この新しいコミューンは、……中世のコミューンの復活だと、思いちがいされた。……小国家の連邦（モンテスキューやジロンド党員）[36]……のように、……過度の中央集権に反対する昔の闘争の誇張された形態のように思いちがいされた。……

……コミューン制度は、社会に寄食してその自由な運動を妨げている寄生体、『国家』のためにこれまで吸いとられていた力のすべてを社会の身体に返還したことであろう。この行為ただ一つによって、それはフランスの再生の発端となったであろう。……

……コミューン制度は、農村の生産者をその地区の中心都市の精神的な指導のもとにおき、都市の労働者というかたちで、彼らの利益の本来の代表者を彼らに確保してやったであろう。コミューンが存在することそれ自体が、当然のこととして、地方自治をともなっていたが、しかし、それは、いまやよけいなものとなった国家権力にたいする対抗物としての地方自治ではもはやなかった。」

「寄生する肉瘤」であった「国家権力の廃絶」、それの「切り取り」、それの「破壊」、「いまやよけいなものとなった国家権力」――マルクスは、コミューンの経験を評価し

分析するさい、まさにこういう表現をつかって国家について語っている。

これらすべてが書かれてからまだ半世紀にもならないのだが、今日では、歪曲されていないマルクス主義を広範な大衆に知らせるためには、いわば発掘をやらなければならないのである。マルクスが、彼の経験した最後の大革命の観察から引きだした結論は、プロレタリアートのその次の大革命の時期がやってきたちょうどそのときに、忘れられてしまったのである。

「……コミューンがさまざまな解釈をうけたこと、またさまざまな利害がコミューンのなかに自己の表現を見いだしたことは、従来のすべての政府形態が本質上抑圧的なものであったのにたいして、コミューンがあくまで発展性のある政治形態であったことを示している。コミューンのほんとうの秘密はこうであった。それは、本質的に労働者階級の政府であり、横領者階級にたいする生産者階級の闘争の所産であり、労働の経済的解放をなしとげるための、ついに発見された政治形態であった。……

この最後にあげた条件がなければ、コミューン制度は不可能であったろうし、迷妄であったろう。……」

ユートピア主義者たちは、そのもとで社会の社会主義的改造がおこなわれるべき政治形態の「発見」を事とした。無政府主義者は、おしなべて政治形態の問題など押しのけてしまった。今日の社会民主党の日和見主義者は、議会制民主主義国家のブルジョア的政治諸形態を、踏みこえることの許されない限界と見なして、額(ひたい)を床(ゆか)にこすりつけてこの「お手本」に礼拝し、これらの形態を打ち砕こうとする願望をすべて無政府主義だときめつけた。

マルクスは、社会主義と政治闘争との歴史全体から結論を引きだして、国家はかならずや消滅せざるをえない、国家消滅の過渡形態(国家から非国家への過渡)は「支配階級として組織されたプロレタリアート」であろう、と述べた。しかし、マルクスは、この将来の政治形態の発見にとりかかりはしなかった。彼はただ、フランスの歴史を精密に観察し、これを分析し、一八五一年がもたらした結論、すなわち、事態はブルジョア国家機構の破壊にむかって動いている、という結論をくだすにとどまった。

そして、プロレタリアートの大衆的革命運動が勃発すると、マルクスは、この運動が不成功に終わったにもかかわらず、またそれが短期間のもので、明白な弱点をもっていたにもかかわらず、この運動がどんな形態を発見したかを研究しはじめた。

コミューンは、労働の経済的解放をなしとげるための、

プロレタリア革命によって「ついに発見された」形態である。

コミューンは、ブルジョア国家機構を粉砕しようとするプロレタリア革命の最初の企てであり、粉砕されたものにとってかわることのできる、またとってかわらなければならない、「ついに発見された」政治形態である。

一九〇五年と一九一七年のロシア革命が、異なった情勢と異なった条件のもとでコミューンの事業を継承して、マルクスの天才的な歴史的分析を確証していることを、われわれはあとで見るであろう。

第四章　つづき。エンゲルスの補足的な説明

マルクスは、コミューンの経験の意義という問題について、基本的な点を示した。エンゲルスは、この同じ主題に再三立ちかえって、マルクスの分析と結論を説明し、ときにはこの問題の別の諸側面をきわめて力づよく、あざやかに解明しているので、これらの説明にとくに立ちいって論じる必要がある。

一　『住宅問題』

エンゲルスは、住宅問題についてのその著作（一八七二年）(三)のなかで、はやくもコミューンの経験を考慮にいれて、幾度も国家にかんする革命の諸任務に立ちいって論じている。興味ぶかいのは、一方では、プロレタリア国家と今日の国家との相似点——どちらの場合にも、国家について語ってよい根拠をあたえている諸点——が、他方では、両者の相違点、つまり国家の廃絶への過渡ということが、具体的な一論題を例にとって明瞭に解明されていることである。

「では、住宅問題はどうすれば解決できるか？　それは、今日の社会では、他のどの社会問題ともまったく同じように解決される。つまり、需要と供給の経済的均衡がしだいになりたつことによって解決されるのである。だが、これは、問題そのものをたえず新たに再生産する解決であり、したがって解決でもなんでもない。また社会革命がこの問題をどう解決するかは、そのときどきの事情にかかっているだけでなく、さらに、はるかに広範な諸問題に依存している。なかでも、都市と農村の対立の廃絶は、最も根本的な問題の一つである。将来の社会の構造についてユートピア的な学説を編みだすことは、われわれの仕事ではないから、この点に立ちいってくわしく述べることは、まったくの時間つぶしであろう。だが、次のことだけは確かである。すなわち、大都市には、

合理的に利用しさえすればいかなるものであれほんとうの『住宅難』をすぐに解決するのに十分なだけの住宅が、いまでもすでに存在していることである。もちろん、これは、今日の所有者から収用するか、あるいは、彼らの家に、家をもたない労働者や、これまで過密住宅にすし詰めになってきた労働者を住まわせる場合にだけ実行できることである。そして、プロレタリアートが政治権力を獲得するやいなや、公共の福祉の命じるこの種の方策は、今日の国家がやっている他の各種の収用や宿舎割当と同じくらい容易に実行できるようになるであろう。」（一八八七年ドイツ語版、二二ページ）

ここでは、国家権力の形態の変化を考察するのでなく、国家権力の活動の内容だけをとりあげている。収用や宿舎割当は、今日の国家の命令によってもおこなわれている。プロレタリア国家もまた、形式的な面からみれば、宿舎割当や家屋の収用を「命令する」であろう。しかし、旧来の執行機構、すなわち、ブルジョアジーと結びついた官吏では、プロレタリア国家の命令を実行するのにまったく役に立たないことは、明らかである。

「……確認しておかなければならないのは、労働人民がいっさいの労働用具を『現実に奪取し』、全産業を掌握することは、プルードン主義者のいう『償却』とはまったく反対のものだということである。後者では、個々の労働者が住宅、農民圃、労働用具の所有者になるのだが、前者では、『労働人民』が家屋、工場、労働用具の総体的所有者となったままであり、それらのものの用益権は、すくなくとも過渡期のあいだは、費用の補償なしに個々人または協同組合に引き渡されることはおそらくないであろう。それは、土地所有の廃止が地代を廃止することではなく、かたちを変えてではあるが、地代を社会に譲渡することであるのと、まったく同様である。だから、労働人民がいっさいの労働用具を現実に奪取することは、賃貸借関係の維持をけっして排除するものではない。」（六八ページ）

この考察のなかでふれられている問題、すなわち国家死滅の経済的基礎の問題は、次の章で考察することにしよう。エンゲルスは、きわめて慎重な表現を用いて、プロレタリア国家は「すくなくとも過渡期のあいだは」、住居を無償で分けあたえることは「おそらくない」であろう、と言っている。全人民のものである住居を個々の家族に有料で貸し付けるには、家賃を徴収し、ある種の監督をおこない、さらになんらかの住居割当基準を設けることが、前提となる。すべてこうしたことのためには、一定の国家形態が必要であるが、しかし、公務員の特別の特権的地位をともな

う特殊な軍事・官僚機構は、けっして必要ではない。だが、住居を無料で貸し付けることができるような状態への移行は、国家の完全な「死滅」と結びついている。

コミューンのあとで、ブランキ主義者がコミューンの経験に影響されてマルクス主義の原則的な立場に移ったことを述べたさい、エンゲルスは、ことのついでにこの立場を次のように定式化している。

「……プロレタリアートの政治活動が必要であり、また、階級の廃止、それとともに国家の廃止にいたる過渡として、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が必要である……。」（五五ページ）

字句の批判の愛好者や、ブルジョア的「マルクス主義撲滅家」は、おそらく、このように「国家の廃止」を承認するのは、『反デューリング論』の前掲の箇所でこのような公式を無政府主義的なものとして否認していることと矛盾している、と考えるであろう。日和見主義者がエンゲルスをも「無政府主義者」のなかにいれたとしても、異とするにはあたらないであろう。——いまでは、国際主義者を無政府主義だと言って非難することが、社会排外主義者のあいだにますます広くゆきわたっているからである。

階級の廃止とともに国家もまた廃止されるということは、マルクス主義がつねに教えてきたことである。『反デューリング論』のなかで「国家の死滅」について述べた周知の箇所で無政府主義者を非難しているのは、彼らが国家の廃止に賛成しているというそれだけの理由によるものではなく、彼らが「きょうあすにも」国家を廃止できるかのように説いているからである。

今日支配的となっている「社会民主主義的」教義は、国家の廃絶の問題にかんするマルクス主義の無政府主義にたいする態度をまったくゆがめているので、マルクスとエンゲルスが無政府主義者にたいしておこなったある論戦を思いおこすことが、とくに有益である。

二　無政府主義者との論戦

この論戦は一八七三年におこなわれた。マルクスとエンゲルスは、イタリアのある社会主義的論集に、プルードン主義者、「自治主義者」、あるいは「反権威主義者」に反対する論文を寄稿した。これらの論文は、一九一三年にはじめてドイツ語に訳されて、『ノイエ・ツァイト』に掲載された。(三七)

マルクスは、無政府主義者が政治を否認しているのをあざわらって、こう書いている。

「……労働者階級の政治闘争が革命的な形態をとり、労働者がブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）を自分たちの革命的

執権とおきかえるなら、彼らは恐るべき原理侮辱罪をおかすことになる。なぜなら、彼らは、武器を捨て、国家を廃止しようとはしないで、自分たちのあわれな、世俗的な日常的必要をみたすために、またブルジョアジーの反抗を打ち砕くために、国家に革命的、過渡的な形態をあたえるからである。……」(『ノイエ・ツァイト』、一九一三―一九一四年、第三二年、第一巻、四〇ページ)

つまり、無政府主義者を論駁したさいにマルクスが攻撃を向けたのは、もっぱらこのような国家「廃止」論にたいしてなのだ！ 彼は、国家は階級の消滅とともに消滅するとか、国家は階級の廃止とともに廃止されるとかいう主張に反対したわけではけっしてなく、労働者は武器の使用を、組織された強力を、すなわち「ブルジョアジーの反抗を打ち砕く」目的に役だつべき国家を拒否すべきだという主張に反対したのであった。

マルクスは、――無政府主義にたいする彼の闘争の真の意味がゆがめられるのを防ぐために――プロレタリアートの必要とする国家の「革命的、過渡的な形態」をわざわざ強調している。プロレタリアートに国家が必要なのは、一時のことにすぎない。国家の廃止を目標とする問題では、われわれと無政府主義者とのあいだにけっして意見の違いはない。われわれが主張するのは、この目標を達成するためには、搾取者にたいして国家権力の道具、手段、方法を一時的に用いる必要があるということであって、これは階級を廃絶するためには被抑圧階級の一時的執権が必要なのと同様である。マルクスは、無政府主義者に反対するのに、このうえなく鋭い、このうえなく明瞭な問題の立て方を選んでいる。すなわち、労働者は、資本家のくびきをふりおとすさいに「武器を捨てる」べきか、それとも、資本家の反抗を打ち砕くために彼らにたいして武器を行使すべきか、と。ところで、一階級が他の階級にたいして系統的に武器を行使するということ、それは国家の「過渡的な形態」でなくてなんであろうか？

社会民主主義者は、各自自問してみるがよい。自分は無政府主義者との論戦で、国家の問題をこういうかたちで提起したかどうか？ 第二インタナショナルの公認の社会主義諸党の大多数は、この問題をこういうかたちで提起したかどうか？ と。

エンゲルスは、これと同じ考えを、はるかにいっそう詳細に、また平易に述べている。彼は、まず第一に、「反権威主義者」と自称していた、すなわちいっさいの権威、いっさいの服従、いっさいの権力を否認していたプルードン主義者の思想の混乱を嘲笑している。エンゲルスはこう言っている。工場、鉄道、大洋上の船をとってみよ。一定の

服従がなければ、したがって一定の権威あるいは権力がなければ、機械の使用と多数の人々の計画的協働とにもとづくこれらの複雑な技術的施設はどれ一つとして機能できなくなることは、明らかではなかろうか？

エンゲルスはこう書いている。

「……私がこのような論拠を最も熱狂的な反権威主義者たちに提出すると、彼らは私に次のように答えることしかできない。なるほど、そのとおりだ。だが、その場合に問題になっているのは、われわれが代表たちに権威をさずけることではなく、委任をさずけることなのだ、と。この諸君は、物事の名まえを変えればその物事自体をも変えることができると信じているのだ。……」

こうして、権威と自治とは相対的な概念であること、これらの概念の適用範囲は社会発展の段階が異なるにつれてさまざまに変わること、これらの概念を絶対的なものと考えるのはばかげていることを指摘し、また機械の使用と大規模生産との領域がますます拡大しつつあることをつけくわえて述べたのち、エンゲルスは、権威についての一般的な考察から国家の問題に移っている。

彼はこう書いている。

「……もし自治主義者たちが、将来の社会組織は生産の諸条件によってやむをえないものとされる限度内でのみ権威を認めるであろう、と言うにとどめていたなら、われわれはたがいに了解をとげることができたであろう。ところが彼らは、権威を必要とならせるあらゆる事実に目をとざし、このことばに激しくくってかかるのである。

なぜ反権威主義者たちは、政治的権威にたいし、国家にたいして反対を叫ぶだけにとどめないのか？　きたるべき社会革命の結果として、国家が、それとともに政治的権威が消滅するであろうという点では、すなわち、公的諸機能がその政治的性格を失って、社会の利益のために心をくばる単純な管理機能に変わるであろうという点では、社会主義者はみな意見が一致している。だが、反権威主義者たちは、政治的国家を生みだした社会的諸関係がまだ廃止されないうちに、一挙に政治的国家を廃止するように要求する。彼らは、社会革命の最初の行為が権威の廃止であることを要求する。

これらの紳士諸君は、革命というものを一度も見たことがないのだろうか？　革命は、たしかに、およそあらゆるもののなかで最も権威的な事柄である。革命は、住民の一部が、小銃や銃剣や大砲、つまりきわめて権威的な手段を使って、住民の他の部分に自分の意志を押しつける行為である。そして、勝利した党派は、その武器が反動どもに呼びおこす恐怖によって、自分の支配を維持

しなければならない。パリ・コミューンが武装した人民のこの権威をブルジョアジーにたいして行使しなかったなら、それはただの一日でももちこたえたであろうか？　それどころか、われわれはコミューンがこの権威を行使しなさすぎたことで、それを責めてよいのではなかろうか？　だから、二つに一つである。反権威主義者たちは、自分がしゃべっていることの意味さえ知らないか。そうだとすると、彼らは混乱をまき散らしているだけである。それとも、彼らはそれを知っているか。そうだとすると、彼らはプロレタリアートの運動を裏切っているのだ。どちらにしても、彼らは反動に奉仕しているだけである。」（三九ページ）

この考察では、国家が死滅するさいの政治と経済との関係という論題（次章はこの主題にあてられている）と関連させて考察すべき諸問題にふれている。公的諸機能が政治的機能から単純な管理機能に変わる問題や、「政治的国家」の問題がそれである。このあとのほうの表現は、とくに誤解をまねきやすいものであるが、これは国家死滅の過程をさしているのである。つまり、死滅しつつある国家は、死滅の一定の段階では、これを非政治的国家とよぶことができるのである。

エンゲルスの右の考察のなかで最も注目すべき点は、ここでもまた、無政府主義者にたいする問題の立て方である。エンゲルスの弟子でありたいと望んでいる社会民主主義者は、一八七三年以来、何百万回も無政府主義者と論争した。しかし、この論争は、まさにマルクス主義者がなしうる仕方で、また当然なすべき仕方でおこなわれたわけではなかった。国家の廃止についての無政府主義者の観念は混乱しており、非革命的である――これが、エンゲルスの問題の立て方であった。無政府主義者は、ほかならぬ革命をその発生と発展において見ようとせず、強力、権威、権力、国家にかんするその特殊な諸任務において見ようとしない、と。

今日の社会民主主義者が通常おこなう無政府主義批判は、「われわれは国家を認めるが、無政府主義者はそれを認めない！」という俗論に帰着する。もちろん、こういう俗論は、いくらかでもものを考える革命的労働者を反発させずにはおかない。エンゲルスが言っているのは、それとは違っている。すなわち、彼はこう強調する。社会主義革命の結果として国家が消滅することは、社会主義者がみな承認していることだ、と。つぎに彼は、革命の問題、つまり、社会民主主義者が日和見主義のために通常回避し、その「究明」をいわば無政府主義者にすっかりまかせてしまっているまさにその問題を、具体的に提起する。そして、この問題を提起するさい、エンゲルスは事の核心をつく。

コミューンは、国家すなわち支配階級として組織された武装したプロレタリアートの革命的権力を、もっと行使すべきではなかったのか、と。

支配的な公認の社会民主党は、革命におけるプロレタリアートの具体的諸任務という問題を、たんに俗物的な冷笑でかたづけるか、でないまでも、せいぜい、「それは、そのときになればわかることだ」という詭弁で逃げるのが常であった。そこで、無政府主義者はこのような社会民主党を、この党は労働者を革命的に教育する任務を裏切っている、と言って攻撃する権利をえたのであった。エンゲルスは、まさに、プロレタリアートが銀行や、さらに国家にかんしてなにをなすべきか、またどのようになすべきかをこのうえなく具体的に研究するためにこそ、最近のプロレタリア革命の経験を利用するのである。

三　ベーベルあての手紙

国家の問題についてのマルクスとエンゲルスの著作のなかで、最も注目すべき考察ではないまでも、きわめて注目すべき考察の一つは、エンゲルスが一八七五年三月一八―二八日付でベーベルあてに書いた手紙のなかにある次の箇所である。ついでに言っておけば、この手紙は、われわれの知るかぎりでは、ベーベルが一九一一年に出版された彼の回想録（『わが生涯から』）の第二巻にはじめて発表したものである。つまり、この手紙を書いて送ったときからみて三六年後である。

エンゲルスは、ベーベルにあてた手紙で、ゴータ綱領草案――マルクスも、ブラッケにあてた彼の有名な手紙のなかで批判しているあのほかならぬゴータ綱領草案――を批判し、とくに国家の問題にふれてこう書いている。

「……自由な人民国家が自由な国家に変えられています。文法的にいうと、自由な国家とは、国家がその市民にたいして自由であるような国家、したがって専制政府をもつ国家のことです。国家にかんするこういうおしゃべりはいっさいやめるべきです。ことに、もはや本来の意味の国家ではなかったコミューンのあとでは、なおさらそうです。すでにプルードンを批判したマルクスの著作[80]や、その後の『共産党宣言』が、社会主義的社会制度が実現されるとともに、国家はひとりでに解消し（sich auflöst）、消滅する、とはっきり言っているにもかかわらず、われわれは『人民国家』のことで、無政府主義者からうんざりするほど攻撃されてきました。けれども、国家は、闘争において、革命において、敵を強力的に抑圧するために用いられる一時的な制度にすぎないのですから、自由な人民国家をうんぬんするのは、まったく無

意味です。プロレタリアートがまだ国家を必要とするあいだは、自由のためにではなく、その敵を抑圧するために必要とするのであって、自由について語ることができるようになるやいなや、国家としての国家は存在しなくなります。だから、われわれは、国家と書いている箇所はどこでも、『共同社会』(Gemeinwesen) ということばとおきかえるように提案します。このことばは、フランス語の『コミューン』にじつにそっくり相当する、昔からのよいドイツ語です。」(ドイツ語原書、三二一―三二二ページ)(二三)

ここで心にとどめておかなければならないのは、この手紙は、マルクスがこれよりわずか数週後の日付の手紙(マルクスの手紙は一八七五年五月五日付)のなかで批判した党綱領にかんするものであること、また当時エンゲルスはマルクスとともにロンドンに住んでいたことである。だから、エンゲルスが最後の句で「われわれ」と言っているのは、彼とマルクスの名においてドイツの労働者党のこの指導者にたいして、綱領から「国家」ということばを削除しそれを「共同社会」ということばとおきかえるように提案したものであることは、疑いをいれない。

もし、日和見主義者に都合のよいように偽造されている今日の「マルクス主義者」の巨頭たちにたいして、綱領をこういうふうに訂正するよう提案したとすれば、彼らはどんなにか「無政府主義」だと言ってわめきたてることであろう!

わめかせておこう。さぞかしブルジョアジーからお褒めのことばを頂戴することだろう。

だが、われわれは自分のなすべきことをしよう。わが党の綱領を改訂するさいには、真理にいっそう近づき、マルクス主義からその歪曲をとりのぞいて、元の姿にかえし、労働者階級の解放闘争をいっそう正しくみちびくために、エンゲルスとマルクスの忠告をぜひとも考慮にいれなければならない。ボリシェヴィキのあいだには、たしかに、エンゲルスとマルクスの忠告に反対する者はいないであろう。難点は、おそらく、用語だけであろう。ドイツ語には、〔ロシア語の〕《община》〔共同体〕にあたることばが二つある。(二四) エンゲルスはそのうちで、個々の共同体ではなくて、その総和、すなわち共同体の体系を意味することばのほうを選んでいる。ロシア語にはそういうことばがないから、おそらくフランス語の「コミューン」を選ばなければなるまい。もっとも、これにもやはり、それなりにぐあいの悪い点がある。

「コミューンは、もはや本来の意味の国家ではなかった」――これこそ、理論的にきわめて重要なエンゲルスの主張

である。まえのほうであたえた説明のあとでは、この主張は十分に理解できる。コミューンが抑圧しなければならなかったのが住民の多数者ではなくて、少数者（搾取者）であったかぎりで、それは国家ではなくなりつつあった。コミューンはブルジョア国家機構を粉砕した。特殊な抑圧力にいれかわって、住民自身が登場してきた。すべてこうしたことは、本来の意味の国家からそれたことである。もしコミューンがしっかりと確立されたなら、そのなかの国家の痕跡はひとりでに「死滅した」であろうし、コミューンが国家の諸機関を「廃止する」までもなかったであろう。それらの機関は、なにもすることがなくなるにつれて、その機能を停止したであろう。

「われわれは、『人民国家』のことで、無政府主義者からうんざりするほど攻撃されてきました。」こういうときエンゲルスの念頭にあったのは、なによりもバクーニンであり、ドイツの社会民主主義者にたいして彼がくわえた攻撃である。エンゲルスは、「人民国家」が「自由な人民国家」と同じように無意味で、同じように社会主義からそれたものであるかぎりで、この攻撃を正当と認めている。エンゲルスは、無政府主義者にたいするドイツの社会民主主義者の闘争を是正し、この闘争を原則的に正しいものとし、「国家」についての日和見主義的先入見をそれからとりのぞこうとつとめている。悲しいかな！　エンゲルスの手紙は三六年間もにぎりつぶされていたのだ。この手紙が発表されたあとでも、カウツキーが、実質上、エンゲルスから警告されたのと同じ誤りをしつこく繰りかえしていることは、あとで見ることにしよう。

ベーベルは、一八七五年九月二一日付の手紙でエンゲルスに答え、そのなかで、とりわけ、自分はエンゲルスの綱領草案批判に「完全に同意見」であって、リープクネヒトの弱腰を自分は非難したのだ、と書いている（ベーベルの回想録、ドイツ語版、第二巻、三三四ページ）。ところが、ベーベルの小冊子『われわれの目標』をとりあげてみると、そこでは国家についてのまったく誤った考察に出あうのである。

「国家は、階級支配にもとづく国家から、人民国家に転化されなければならない。」（『われわれの目標』、ドイツ語版、一八八六年、一四ページ）

ベーベルの小冊子の第九版（第九版だ！）に、こう書かれている！　こんなにもしつこく繰りかえされた国家についての日和見主義的考察が、ドイツ社会民主党の体内に吸収されたことは、異とするにあたらない。ことに、エンゲルスの革命的な説明がにぎりつぶされてしまい、また、生活環境全体が長いあいだ革命なしにすませることに「慣れさせた」だけに、なおさらそうである。

四　エルフルト綱領草案の批判

一八九一年六月二九日にエンゲルスがカウツキーに送り、ようやくその一〇年後に『ノイエ・ツァイト』に発表されたエルフルト綱領草案の批判は、[22] マルクス主義の国家学説を分析するさいには見のがすことのできないものである。なぜなら、それは、まさに国家制度の諸問題における社会民主党の日和見主義的見解の批判に、主としてあてられているからである。

ついでに注意しておけば、エンゲルスは経済問題についても一つのすばらしく貴重な指示をあたえている。この指示は、エンゲルスがほかならぬ現代資本主義の変化を注意ぶかく、慎重に注視していたこと、そのおかげでわれわれの時代、帝国主義時代の諸任務をある程度予見できたことを示している。その指示とは次のようなものである。綱領草案に資本主義を特徴づけるためにつかわれている「無計画性」(Planlosigkeit) ということばについて、エンゲルスはこう書いている。

「……また株式会社からすすんで、幾多の産業部門を支配し独占するトラストに移るなら、そこでは私的生産がなくなるだけでなく、無計画性もなくなる。」(『ノイエ・ツァイト』、第二〇年、第一巻、一九〇一—一九〇二年、八ページ)

ここでは、現代資本主義つまり帝国主義を理論的に評価するうえで最も基本的なこと、すなわち資本主義が独占資本主義に転化しつつあることが、とりあげられている。この点は強調しなければならない。なぜなら、いちばん広くゆきわたっている誤りの一つに、独占資本主義あるいは国家独占資本主義はもはや資本主義ではなく、すでに「国家社会主義」とか、なにかそういうふうによんでさしつかえないものだというブルジョア改良主義的な主張があるからである。いうまでもなく、トラストは完全な計画性をもたらさなかったし、いまなおもたらしてはいないし、またもたらすはずもない。計画性をもたらすものがトラストであるかぎり、生産の大きさをあらかじめ全国的な規模で、さらには国際的な規模で計算するものが大資本家であるかぎり、また生産を計画的に規制するものが大資本家であるかぎり、われわれはやはり資本主義のもとにとどまるのである。その新しい段階であるにせよ、やはり、疑いもなく、資本主義のもとにとどまるのである。このような資本主義が社会主義に「近い」ということは、プロレタリアートの真の代表者にとっては、社会主義革命が迫っており、おこないやすく、実現可能で、猶予を許さないことの論拠となるべきものであって、あらゆる改良主義者がやっているよ

うな、この革命の否定と資本主義の美化とを大目にみる論拠となるべきものではけっしてない。

だが、国家の問題に立ちかえろう。エンゲルスはここで三つのとくに貴重な指示をあたえている。すなわち、第一は、共和制の問題について、第二は、民族問題と国家制度との関連の問題について、第三は、地方自治の問題について。

共和制についていえば、エンゲルスは、彼のエルフルト綱領草案の批判の重点をここにおいている。そして、エルフルト綱領が国際社会民主主義全体のなかできわめて大きな意義をもつにいたったこと、それが第二インタナショナル全体にとっての手本となったこととと思い合わせれば、エンゲルスはここで第二インタナショナル全体の日和見主義を批判しているのだと言っても、言いすぎではあるまい。

エンゲルスはこう書いている。

「草案の政治的諸要求には一つの大きな欠陥がある。本来言わなければならなかったことが、そこには書かれていない。」（傍点はエンゲルスのもの）

それにつづけて、ドイツ憲法はもともと一八五〇年のきわめて反動的な憲法の敷き写しであること、帝国議会は、ヴィルヘルム・リープクネヒトが言ったように、「絶対主義のイチジクの葉」にすぎないこと、もろもろの小邦とドイツ諸小邦の連邦とを適法化した憲法にもとづいて「いっさいの労働手段の共同所有への転化」を実現しようとするのは「明らかにばかげている」ことが、説明されている。

「この点にふれるのは危険である」

と、ドイツでは合法的に共和制の要求を綱領のなかにかかげることが不可能なのをよく承知しているエンゲルスは、つけくわえて言っている。しかし、エンゲルスは、「すべての者」が承服しているこの明白な理由で、あっさりあきらめてはいない。エンゲルスはつづけて次のように言っている。

「それでも、この問題はなんとかしてとりあげなければならない。そうすることがどれほど必要かということは、社会民主党の大部分の新聞雑誌に根をはっている（einreissende）日和見主義が、まさに現在立証しているところである。社会主義者取締法(四)が復活されはしないかという恐れから、またこの法律が施行されていた時期になされたいろいろな早まった言明が記憶にあるところから、いまや突然、党がそのいっさいの要求を平和的な道によって達成するにはドイツの現在の法的状態で十分であると見なすのである。……」

ドイツの社会民主主義者が例外法の復活を恐れる気持をいだいて行動していたこと、この根本的事実をエンゲルスは第一に強調し、これをためらうことなく日和見主義とよ

び、ドイツに共和制と自由がない以上、「平和的な」道を夢みることはまったくばかげている、と言明するのである。エンゲルスは、自分の手を縛らないように十分用心している。彼は、共和制の国々や、非常に大きな自由がある国々では、社会主義への平和的発展が「考えられる」（「考えられる」だけだ！）ことを認めている。だが、ドイツで——と彼は繰りかえして言う、

「……政府がほとんど全能で、帝国議会その他すべての代議機関に実権のないドイツで、そういうことを、それもなんの必要もないのに宣言することは、絶対主義からイチジクの葉を取りさって、その裸身のまえに自分をつくりつけるというものである。……」

これらの指示を「棚あげした」ドイツ社会民主党の公式の指導者の大多数は、実際に絶対主義の守護者となった。

「このような政策は、結局は自党を邪道にみちびくことにしかなりえない。一般的、抽象的な政治問題を前面に押しだし、そうすることで当面の具体的な問題を陰に隠すのだが、しかも、なにか大事件が起こりしだい、なにか政治的危機が起こりしだい、ひとりでに日程にのぼってくるのは、そういう具体的な問題なのである。こういうやり方をすれば、決定的な瞬間に党が突然にとほうにくれてしまい、最も決定的な諸点で、まだ一度もそれについて討議したことがなかったという理由で、不明瞭と不一致がみなぎるという結果にしか、なりえないではないか。……

このように当面の目前の利益のために重大な根本観点を忘れること、このように後日の結果を考えずに一時の成功を追いもとめること、このように運動の現在のために運動の未来を犠牲にすることは、『正直な』気持でやっているのだとしても、やはり日和見主義であり、また今後もそうであろう。そして、『正直な』日和見主義こそ、おそらく、あらゆる日和見主義のうちで最も危険なものである。……

もしなにか確かなことがあるとすれば、それは、わが党と労働者階級とが支配権をにぎることができるのは、民主的共和制の形態のもとにおいてだけだ、ということである。この民主的共和制は、すでに偉大なフランス革命が示したように、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のための特有な形態ですらある。……」

エンゲルスは、ここで、マルクスの全著作を赤い糸のようにつらぬいている根本思想を、とくにあざやかなかたちで繰りかえしている。すなわち、民主的共和制はプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）へのいちばんの近道だということである。なぜなら、このような共和制は、資本の支配を、したがっ

てまた大衆の抑圧と階級闘争をいささかもとりのぞくものではないが、不可避的に階級闘争のいちじるしい拡大、展開、露呈、激化をもたらすので、ひとたび被抑圧大衆の根本的利益を満足させる可能性が生まれてくれれば、その可能性は、かならずや、もっぱらプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をつうじて、被抑圧大衆にたいするプロレタリアートの指導をつうじて、実現されるからである。このこともまた、第二インタナショナル全体にとってマルクス主義の「忘れられたことば」であって、これを忘れてしまったことを異常にあざやかに示したものは、一九一七年のロシア革命の最初の半年間におけるメンシェヴィキ党の歴史であった。

住民の民族的構成との関連でみた連邦共和制の問題については、エンゲルスは次のように書いている。

「今日のドイツ」（反動的な君主制憲法をもち、同じように反動的な小邦分立状態――「プロイセン主義」の特殊性が全体としてのドイツのなかで解消せずに、永続させられたのは、この分立状態によるものであった――のもとにあったドイツ）「に入れかわってなにがくるべきなのか？　私の考えでは、プロレタリアートが用いることができるのは、単一不可分の共和国の形態だけである。連邦共和制は、広大なアメリカ合衆国の地域では、いまでもまだだいたいにおいて必要物である。もっとも、その東部では、これはすでに障害物になっている。二つの島に四つの民族が住んでいて、議会は一つなのに、いまでも三種の法律体系がならんでおこなわれているイギリスでは、連邦共和制は一つの進歩であろう。小国スイスでは、それは、すでに久しい以前から障害物になっており、ただスイスがヨーロッパの国家体系のまったく受動的な一環であることにあまんじているからこそ、なんとかがまんしていられるのである。ドイツにとっては、スイス型の連邦化ははなはだしい後退であろう。連邦国家は二つの点で統一国家と違っている。すなわち、連邦を構成する各分邦、各州がそれ自身の民法および刑法と裁判制度とをもっていること、つぎに、国民会議とならんで連邦会議が存在し、この連邦会議では、各州は、大小にかかわらず一州として投票することである。」

ドイツでは、連邦国家は完全な統一国家への過渡である。そして、一八六六年と一八七〇年とにおこなわれた「上からの革命」[22]をあともどりさせるのではなく、「下からの運動」でそれを補足しなければならない。

エンゲルスは、国家形態の問題にたいして無関心でないばかりか、反対に、まさに過渡的諸形態をきわめて注意ぶかく分析し、こうしてそれぞれの場合の具体的＝歴史的特殊性におうじて、その過渡的形態がなにからなにへの過渡

であるかを確かめることにつとめている。

エンゲルスは、そしてマルクスもまた同じであるが、プロレタリアートとプロレタリア革命との立場から、民主主義的中央集権制、単一不可分の共和国を主張している。連邦共和制については、彼はこれを例外で、発展の障害物たるものか、でなければ、君主制から中央集権的共和制への過渡で、一定の特殊な条件のもとでの「一歩前進」であるか、そのどちらかだと見ている。そして、そういう特殊な条件のうちでとくにとりだされているのは、民族問題である。

エンゲルスも、マルクスも、小国家の反動性や、特定の具体的な場合にこの反動性を民族問題でつつみかくすやり方を容赦なく批判しているにもかかわらず、二人には民族問題を避けようとする願望は、どこにもみじんも見られない。ところが、オランダやポーランドのマルクス主義者は、「自分たちの」小国家の偏狭な小市民的民族主義にたいするきわめて正当な闘争から出発して、しばしばこういう願望を示す罪をおかしている。

イギリスでは、地理的諸条件によっても、言語が共通なことによっても、また何百年もの歴史によっても、イギリスの個々の小区域の民族問題は「かたづけられて」いそうに思えるが、そのイギリスでさえ、エンゲルスは、民族問題がまだ克服されていないという明白な事実を考慮にいれており、したがって連邦共和制を「一歩前進」と認めている。もちろん、そうしても、連邦共和制の欠陥にたいする批判をやめたり、単一の中央集権的な民主的共和制の断固たる宣伝や、そのための闘争をやめようとする、ほんのわずかな気配も見られない。

しかし、エンゲルスは、民主主義的中央集権制という概念を、ブルジョア・イデオローグや、無政府主義者をふくむ小ブルジョア・イデオローグがこの概念を用いる場合のように、官僚主義的な意味に理解しているのではけっしてない。エンゲルスの考えでは、中央集権制は広範な地方自治制――「コミューン」と州が国家の統一を自発的に擁護するとともに、官僚主義や、上からの「命令ざた」がいっさい絶対的にとりのぞかれているような――を排除するものではけっしてないのである。

エンゲルスは、国家についてのマルクス主義の綱領的見解を展開しながら、次のように書いている。

「……だから、統一共和国ということになる。けれども、今日のフランス共和国のような意味の共和国ではない。これは、一七九八年に創立された帝国から皇帝をとりのぞいただけのものである。一七九二年から一七九八年まで、フランスの各県、各市町村（Gemeinde）は、アメリカ型の完全な自治をもっていた。われわれもまたこ

れをもたなければならない。自治制をどう組織すべきか、どうすれば官僚なしにやっていけるかは、アメリカとフランスの第一共和制とがわれわれに示したし、また今日でもオーストラリア、カナダその他のイギリス植民地がこれを示している。そして、このような州」（地域）「および市町村の自治制は、たとえばスイスの連邦制などよりもはるかに自由である。スイスでは、なるほど州は連邦」（すなわち、全体としての連邦国家）「にたいしてきわめて独立的だが、また県（ベツィルク）や市町村にたいしてもきわめて独立的である。州政府は県長官（シュタットハルター）や知事を任命しているが、こういうものは英語系の国々では全然知られていないものであって、われわれもまた将来は、プロイセンの郡長や参事官」（政府委員、郡警察長、県知事、一般に上から任命された官吏）「と同様に、こういうものもつつしんでおことわりしたいと思う。」そこで、エンゲルスは、綱領の自治制にかんする条項を次のように定式化することを提案している。「普通選挙権で選ばれた官吏による州」（県または地域）、「郡、市町村の完全な自治制。国家の任命にかかわるすべての地方および州官庁の廃止。」

ケーレンスキーその他の「社会主義者」の大臣たちの政府によって閉鎖された『プラウダ』（一九一七年五月二八日付、第六八号）で、私はすでに、自称革命的自称民主主義のわが自称社会主義代表者たちが、この点で――もちろん、この点だけではけっしてないが――民主主義からはなはだしく逸脱したことを指摘したことがあった。[三六] 帝国主義的ブルジョアジーとの「連立」で自分を縛った連中が、この指摘に耳をかさなかったことは、いうまでもない。

非常にひろまっている――とくに小ブルジョア民主主義派のあいだに――先入見、すなわち、連邦共和制はかならず中央集権的共和制よりも大きな自由を意味するという先入見を、エンゲルスが、事実をあげて、きわめて正確な実例で論駁していることを指摘しておくのは、たいへん重要である。この先入見はまちがいである。一七九二―一七九八年の中央集権的なフランス共和国と連邦制のスイス共和国とについてエンゲルスがあげている諸事実は、それを論駁している。真に民主主義的な中央集権的共和制は、連邦共和制よりも大きな自由をあたえていた。言いかえれば、歴史上に知られた最大の地方、州等々の自由は、連邦共和制によってではなく、中央集権的共和制によってあたえられたのである。

この事実にたいしても、総じて連邦共和制と中央集権的共和制の問題や、地方自治制の問題全体にたいしても、わが党の宣伝・扇動ではこれまで十分な注意がはらわれてい

なかったし、いまもはらわれていない。

五　マルクスの『フランスにおける内乱』への一八九一年の序文

『フランスにおける内乱』の第三版への序文――この序文は一八九一年三月一八日の日付になっていて、はじめ『ノイエ・ツァイト』に発表された――のなかで、エンゲルスは、ことのついでに国家にたいする態度に関連した諸問題について興味ぶかい意見を述べるとともに、コミューンの教訓をきわめてあざやかに総括している。(四三)この総括は、著者をコミューンからへだてる二〇年間の全経験によって深められたものであり、またドイツにひろくゆきわたっていた「国家にたいする迷信」にとくに批判の鋒先を向けたものであって、ここで考察している問題についてのマルクス主義の最後のことばとよんでさしつかえない。

エンゲルスはこう指摘している。フランスでは、どの革命のあとでも労働者は武装していた。「そこで、国政の舵(かじ)をにぎったブルジョアにとって第一に必要なことは、労働者の武装を解除することであった。こういうわけで、労働者の力で革命がかちとられたあとでは、きまって新しい闘争が起こり、労働者の敗北に終わるのであった。……」

もろもろのブルジョア革命の経験のこの総括は、簡潔でもあれば、含蓄ふかくもある。ここでは、事柄の核心が――とりわけ国家の問題の核心もまた(被抑圧階級が武器をもっているかどうか?)――みごとに把握されている。ブルジョア・イデオロギーの影響をうけた教授たちや、さらに小ブルジョア民主主義者が、なによりも第一に回避しているのは、ほかならぬこの核心である。一九一七年のロシア革命のさいに、ブルジョア革命のこの秘密をしゃべる名誉(カヴェニャクふうの名誉)をになったのは、「メンシェヴィキ」の「でもマルクス主義者」ツェレテーリであった。ツェレテーリは、六月一一日の彼の「歴史的」演説のなかで、ピーテル〔ペトログラード〕の労働者の武装を解除しようとするブルジョアジーの決意をうっかり洩らしたのである。もちろん、彼は、この決意が彼自身の決意であり、また一般に「国家的」必要事であるというふうに見せかけたのであった!(四四)

六月一一日のツェレテーリの歴史的演説が、一九一七年の革命を研究するすべての歴史家にとって、ツェレテーリ氏に率いられるエス・エルとメンシェヴィキのブロックが、革命的プロレタリアートに反対してブルジョアジーの側に寝がえったことの、最も明らかな例証の一つとなるであろうことは、いうまでもない。

エンゲルスがことのついでに述べたもので、やはり国家の問題に関係のあるもう一つの意見は、宗教にかんするものである。周知のように、ドイツ社会民主党は、党が腐敗してますます日和見主義的になるにつれて、「宗教は私事であると宣言する」という、あの有名な定式の俗物的曲解へ、ますます転落していった。すなわち、この定式は、宗教の問題が革命的プロレタリアートの党にとっても私事であるかのように解釈されたのである!! エンゲルスは、プロレタリアートの革命的綱領にたいするこの完全な裏切りに反対したが、一八九一年には自党内に日和見主義のごくわずかな萌芽しか認めなかったので、非常に慎重な言い方をしている。

「コミューンに席を占めていたのは、ほとんど労働者か定評ある労働者の代表者だけだったので、その決定も断然プロレタリア的性格をおびていた。それらの決定が命じたのは、共和主義的ブルジョアジーが怯懦なためにのみ実行を怠ったもので、労働者階級の自由な行動のための欠かしえない基礎であるような改革——たとえば、宗教は国家にとっては私事にすぎないという原則の実施のような——であったか、あるいは、コミューンは直接に労働者階級の利益になり部分的に旧社会秩序に深く切りこむような決定を公布したか、どちらかであった……。」

エンゲルスは、「国家にとっては」ということばにわざわざ傍点をつけて、宗教は党にとって私事であると宣言し、こうして革命的プロレタリアートの党を卑俗きわまる「自由思想家的」俗物根性の水準に引きおろしていたドイツ日和見主義の急所を突きさしたのである。この俗物根性は、無信仰状態を認めることはこばまないが、しかし、人民を愚昧にする宗教的アヘンにたいする党の闘争という任務を拒否するものであった。

ドイツ社会民主党の歴史を研究する将来の歴史家は、一九一四年における同党の恥ずべき崩壊の根源を調べるさい、この問題についての興味ぶかい材料——党の思想的指導者であるカウツキーの諸論文のなかの、日和見主義にひろく門戸を明けはなすあいまいな言明に始まって、一九一三年の《Los-von-Kirche-Bewegung》(教会離脱運動)[四九]にたいする党の態度にいたるまでの——を大量に見いだすことであろう。

だが、われわれは、コミューンから二〇年たったのちにエンゲルスが、たたかうプロレタリアートのために、どうコミューンの教訓を総括したかという問題に移ることにしよう。

エンゲルスが第一に強調している教訓は次のものである。

「……従来の中央集権的政府の抑圧力、すなわち軍隊、政治警察、官僚は、ナポレオンによって一七九八年につくりだされ、それ以来歴代の各政府が便利な道具として受けついで自分の反対者にたいして用いてきたものであるが、ほかならぬこの抑圧力こそ、パリですでに倒されたように、どこでも倒されなければならないのであった。

コミューンは、そもそものはじめから、次のことを認めないわけにはいかなかった。すなわち、労働者階級はいったん支配権を獲得したなら、古い国家機構を用いてものごとを運営してゆくことはできないということ、この労働者階級は、いま獲得したばかりの自分の支配権をまたもや失うまいと思えば、一方では、これまで彼ら自身にたいして用いられてきた古い抑圧機構をすべてとりのぞかなければならず、他方ではまた、彼ら自身の議員や役人をすべて例外なくいつでも解任できるものと宣言することで、この人々から自分の身を守らなければならないということである。……」

エンゲルスは、君主制のもとだけでなく、民主的共和制のもとでも、国家はやはり国家であること、すなわち、公務員、「社会の従僕」、社会の諸機関を社会の主人に転化させるというその基本的特徴をたもっていることを、繰りかえし強調している。

「……国家と国家機関とが社会の従僕から社会の主人に変わるのは、これまでのどの国家でも避けられないことであったが、コミューンは、そうならせないために二つの確実な手段を用いた。第一に、行政、司法、教育上のいっさいの地位につく者を、関係者の普通選挙権によって選び、しかもその関係者がこれをいつでも解任できるようにした。また第二に、地位が高かろうが低かろうが、あらゆる職務にたいしてほかの労働者なみの賃金しか払わなかった。*総じてコミューンが払った最高の俸給は、六〇〇〇フランであった。こうして地位争いや立身出世主義をしめだす閂がしっかりとかけられたのだった。なおそのうえ、いろいろな代議機関への代表にたいする拘束委任制さえつけくわえられたが、そうするまでもなかったのである。……」

* これは、名目的には約二四〇〇ルーブリであるが、今日の相場では約六〇〇〇ルーブリとなる。国家全体をつうじての最高額を六〇〇〇ルーブリ——十分な額である——とするように提案せずに、たとえば市議会で九〇〇〇ルーブリの俸給を提案しているようなボリシェヴィキは、まったく許しがたい行動をとっているわけである。

ここでエンゲルスは、徹底した民主主義が、一方では社会主義に転化し、他方では社会主義を要求する、興味ぶか

い限界にせまっている。なぜなら、国家を廃絶するために は、国務の諸機能が住民の大多数者にとって、またのちに は一人のこらず全住民にとって、たやすくとりつくことが でき、やりこなすことのできる統制と記録の単純な作業に ならなければならないからである。ところで、立身出世主 義を完全にとりのぞくためには、最も自由な国をふくめて、 あらゆる資本主義国でたえず見られるように、国務上の「名誉」職が、たとえそれが無給の職でも、銀行や株式会 社内の高給をともなう地位への飛び台の役をするというよ うなことが起こりえないようにする必要がある。

しかし、エンゲルスは、たとえば一部のマルクス主義者 が民族自決権の問題についておかしている誤り、すなわち、 民族自決は資本主義のもとでは不可能であり、社会主義の もとではよけいごとであるとするような誤りは、おかして いない。この、一見機知に富んでいるように見えるが実際 には誤った議論は、どの民主主義的制度にも、官吏の控え 目な俸給にも、おしおよぼすことができるだろう。なぜな ら、資本主義のもとでは首尾一貫した徹底的な民主主義は 不可能だし、社会主義のもとではあらゆる民主主義が死滅 するだろうからである。

これは、髪の毛が一本少なくなったら禿頭になるかどう かという、古いおどけた問答に類する詭弁である。

民主主義を徹底的に発展させること、そういう発展の諸 形態をさがしだすこと、それらの形態を実践によってため すこと等々、すべてこうしたことは、社会革命のための闘 争を構成する任務の一つである。どんな民主主義も、一つ ひとつ別々にとりあげてみれば、社会主義をもたらしはし ない。だが、実生活では、民主主義は、けっして「一つひ とつ別々にとりあげられる」ものではなく、「いっしょに とりあげられる」ものである。それは経済にたいしても影 響を及ぼし、経済の改造をうながし、経済的発展の影響を うける、等々。これが生きた歴史の弁証法である。

エンゲルスはつづけてこう言っている。

「……コミューンがこうして従来の国家権力を破砕し (Sprengung)、それを新しい、真に民主主義的な国家権 力とおきかえた次第は、『内乱』の第三章にくわしく述 べられている。しかし、その権力の二、三の特徴をここ でもう一度簡単に説明しておくことが必要であった。と いうのは、ほかならぬドイツでこそ、国家にたいする迷 信が、哲学からブルジョアジーの一般意識のなかに、そ れどころか多くの労働者の一般意識のなかにさえ、もち こまれているからである。哲学的な考え方からすれば、 国家は『理念の実現』である。すなわち、哲学的な用語 に翻訳された地上の神の国であり、永遠の真理と正義が

実現されているか、あるいは実現されるはずの領域である。そして、そこからつぎに、国家と国家に関係のあるあらゆる事物とにたいする迷信的崇拝が生まれてくる。そして、人々は子供のときから、社会全体の共同事務や共通の利害は、これまでやってきたようなやり方でしか、つまり国家とみいりのいい地位をさずかった国家官吏[3]との手でしか処理することができないものだと考えることに慣れているだけに、なおさらそういう迷信的崇拝が生じやすいのである。そこで、世襲君主制にたいする信仰を捨てて、民主的共和制を信奉するようになりでもすれば、それだけでまったくたいした大胆な一歩をすすめたように思いこむ。しかし、実際には、国家は、一階級が他の階級を抑圧するための機構にほかならないのであって、しかもこの点では、民主的共和制も、君主制になんらおとるものではない。いちばんよい場合でも、国家は、階級支配をめざす闘争で勝利したプロレタリアートがひきつぐ一つの害悪であって、プロレタリアートは、コミューンがやったのと同じように、その害悪の最悪の側面をすぐさま、できるだけ切り取らないわけにはいかないであろう。そのうちに、新しい自由な社会状態のもとで成長してきた一世代が、ついに国家のがらくたをすっかり投げすててしまえるときがくるであろう。」

エンゲルスは、君主制を共和制とおきかえるさいに、国家一般の問題についての社会主義の原則を忘れないようにと、ドイツ人に警告したのである。彼の警告は、今日では、ツェレテーリやチェルノーフの諸君への直接の教訓のようにひびく。この諸君は、その「連立」の実践において、国家にたいする迷信と迷信的崇拝とをさらけだしたからである！

ここでなお二つのことを注意しておこう。(一) エンゲルスが、国家は民主的共和制の場合にも君主制の場合に「なんらおとらず」依然として「一階級が他の階級を抑圧するための機構」である、と言っているにしても、だからといって、どこかの無政府主義者たちが「教える」ように、抑圧の形態はプロレタリアートにとってどうでもよいものだということにはけっしてならない。階級闘争と階級的抑圧とのより広い、より自由な、より公然たる形態は、プロレタリアートが階級一般の廃絶のためにたたかうのを非常にやりやすくする。

(二) なぜ新しい世代だけが国家のがらくたをすっかり投げすてることができるのか？——この問題は、民主主義の克服の問題と関連がある。そこで、われわれはその問題に移ることにする。

六　民主主義の克服についての エンゲルスの見解

この問題については、エンゲルスは、「社会民主主義者」という名称が科学的に正しくないという問題に関連して、意見を述べるおりがあった。

主として「国際的な」内容をもったいろいろな主題について一八七〇年代に書いた自分の論文を集めた刊行物(『「フォルクスシュタート」国際問題論文集』)への序文——この序文は一八九四年一月三日の日付になっている、つまりエンゲルスの亡くなる一年半前に執筆されたものである——のなかで、彼はこう書いている。どの論文でも「共産主義者」ということばをつかって、「社会民主主義者」ということばをつかわなかったが、それは、当時フランスではプルードン派が、ドイツではラサール派が、社会民主主義者と自称していたからである、と。

「……だから」と、エンゲルスはつづけて書いている、「マルクスと私にとっては、われわれの特有な立場をあらわすのに、このような、いろいろなものをふくみうる表現を選ぶことは、まったく不可能であった。今日では事情が違っているから、このことば」(「社会民主主義者」)「は大目に見てよいだろう(mag passieren)。もっとも、一般に社会主義的であるだけではなく、はっきりと共産主義的な経済綱領をもち、あらゆる国家を克服すること、したがってまた民主主義をも克服することを、その政治上の終局目標とする党にとっては、このことばはやはり不正確(unpassend 不適当)である。しかし、現実の」(傍点はエンゲルスのもの)「政党の名称が、完全に実体に適合することはけっしてない。党は発展するが、名称はもとのままだからである。(三)」

弁証家エンゲルスは、晩年にいたるまで弁証法に忠実であった。彼は言う。以前マルクスと私はりっぱな、科学的にみて正確な党名をもっていたが、現実の党、すなわち大衆的プロレタリア党をもたなかった。いまでは(一九世紀末)現実の党はあるが、その名称は科学的にみて正確でない。だが、これはたいしたことじゃない。「それは大目に見てよいだろう」——ただ党が発展しさえすれば、党名の科学的不正確さが党に隠されることなく、党が正しい方向に発展するのを妨げることさえなければ！と。

きっと、どこかのひょうきん者が、エンゲルス流に次のように言って、われわれボリシェヴィキをもなだめようとするだろう。われわれは現実の党をもっており、それはみごとに発展しつつある、「ボリシェヴィキ」ということばは、われわれが一九〇三年のブリュッセル＝ロンドン大会

で多数を占めた(三)というまったく偶然の事情以外には、絶対になにもあらわしてはいないが、そのような無意味でぶざまなことばでも「大目に見てよいだろう」、と。……ところで、共和派と「革命的」小ブルジョア民主主義派が〔一九一七年〕七月と八月にわが党にくわえた迫害のおかげで「ボリシェヴィキ」ということばがこのように全人民の尊敬をかちえたいまでは、そのうえまた、それらの迫害が、現実の発展においてわが党がなしとげたじつに巨大な歴史的前進を表示しているいまでは——おそらく私も、わが党の名称を変更せよという、四月に自分でおこなった提案(三)を固執するのをためらうであろう。おそらく私は、党名を共産党とするが、ボリシェヴィキということばを括弧に入れて残しておこうという「妥協」を、同志諸君に申しいれることになろう。……

だが、党名の問題は、国家にたいする革命的プロレタリアートの関係の問題にくらべれば、はるかに重要性の少ないものである。

国家についての通常の議論では、エンゲルスがここで警告しており、そしてわれわれがこれまでの説明のなかでことのついでに注意してきた誤りが、たえずおかされている。すなわち、国家の廃絶は民主主義の廃絶でもあり、国家の死滅は民主主義の死滅であることが、たえず忘れられているのである。

こういう主張は、一見して、きわめて奇妙で不可解なもののように思われよう。おそらく、次のような懸念をいだく人さえ出てくるであろう。君たちは、少数者が多数者に服従するという原則が守られないような社会制度がやってくるのを期待しているのではないのか？　なぜといって、民主主義とはまさにこの原則の承認ではないか、と。

そうではない。民主主義は、多数者への少数者の服従と同じものではない。民主主義は、多数者への少数者の服従を認める国家——つまり、一階級が他の階級にたいし、住民の一部が他の部分にたいして系統的に強力を行使するための組織——である。

われわれは、国家の廃絶を、すなわちあらゆる組織的、系統的な強力の廃絶、一般に人間にたいするあらゆる強力の廃絶を、終局目標としている。われわれは、少数者が多数者に服従するという原則が守られないような社会制度がやってくるのを期待しているのではない。しかし、われわれは、社会主義をめざしながらも、社会主義が共産主義に成長転化すること、またそれにともなって、一般に人々にたいして強力を行使する必要、ある人間が他の人間に服従し、住民の一部が他の部分に服従する必要がいっさい消滅することを確信している。なぜなら、人々は、強力なしに、

従属なしに社会生活の基礎的諸条件を守る習慣を身につけるだろうからである。

エンゲルスが新しい世代について述べているのは、まさにこの習慣という要素を強調するためである。新しい世代、「新しい自由な社会状態のもとで成長してきた一世代が、ついに国家」――民主的共和制の国家をもふくむあらゆる国家――「のがらくたをすっかり投げすててしまえるときがくるであろう」と。

このことを明らかにするためには、国家の死滅の経済的基礎の問題を検討する必要がある。

第五章　国家の死滅の経済的基礎

この問題の非常にくわしい解明が、マルクスによって、彼の『ゴータ綱領批判』(一八七五年五月五日付のブラッケあての手紙。これは一八九一年にはじめて『ノイエ・ツァイト』第九年、第一巻に発表されたもので、ロシア語では単行本として出版されている)のなかにあたえられている。この注目すべき著作の論戦的な部分は、ラサール主義を批判したものであるが、この部分のために、この著作の積極的な部分、すなわち共産主義の発展と国家の死滅との関連を分析した部分が、いわば陰にかくされてしまっている。

一　マルクスの問題提起

一八七五年五月五日付のマルクスのブラッケあての手紙と、まえのほうで考察した一八七五年三月二八日付のエンゲルスのベーベルあての手紙とを表面的に比較すると、マルクスはエンゲルスよりもはるかに「国家主義者」で、二人の著者の国家観のあいだにはきわめて大きな相違があるように見えるかもしれない。

エンゲルスは、国家にかんするおしゃべりをいっさいやめ、国家ということばのかわりに「共同社会」ということばをつかい、国家ということばを綱領から完全に追放するように、ベーベルに勧告している。エンゲルスは、コミューンはもはや本来の意味の国家ではなかった、とさえ言明している。ところが、マルクスは、「共産主義社会の未来の国家組織」とさえ言っている。すなわち、共産主義のもとでさえ国家が必要であることを認めているかのようである。

だが、こういう見方は、根本的に誤りであろう。くわしく検討すればわかるように、国家とその死滅についてのマルクスとエンゲルスの見解は完全に一致していて、マルクスの前記の表現は、まさにこの死滅しつつある国家組織をさしているのである。

将来の「死滅」の時点をきめるなどということが問題に

ならないのは、明らかである。この死滅は明らかに長期にわたる過程であるから、なおさらそうである。マルクスとエンゲルスとのあいだの外見上の相違は、彼らがとりあげた主題の相違、彼らがとりくんだ課題の相違によるものである。エンゲルスは、国家についての世間一般の先入見(ラサールもすくなからずこの先入見を分かちもっていた)がまったくばかげていることを、はっきりと、鋭く、大まかにベーベルに示すことを課題としていた。マルクスは、この問題にはことのついでにふれているだけである。というのは、彼の関心は、共産主義社会の発展という別の主題にあったからである。

マルクスの全理論は、発展の理論――最も首尾一貫した、完全な、考えぬかれた、内容ゆたかなかたちでの――を近代資本主義に適用したものである。当然に、マルクスは、この理論を資本主義のきたるべき崩壊にも、また将来の共産主義の将来の発展にも適用する問題に当面した。

では、将来の共産主義の将来の発展の問題は、どういう資料を基礎として提起することができるのか?

その基礎は、共産主義が資本主義から生まれ、歴史的に資本主義から発展してくるものであり、資本主義の生んだ社会勢力の行動の結果であるという点にある。マルクスには、ユートピアを創作したり、知ることのできないことについてむだな臆測をめぐらしたりする試みは、みじんも見られない。マルクスが共産主義の問題を提起する仕方は、たとえば生物学上の新しい変種がこれこれの仕方で発生し、そしてこれこれの特定の方向に形態変化をおこないつつあることを知ったときに、自然科学者がこの変種の進化の問題を提起する仕方と同じである。

マルクスは、まず最初に、ゴータ綱領が国家と社会との相互関係の問題にもちこんだ混乱を一掃する。

彼はこう書いている。

「……『今日の社会』とは資本主義社会である。それは、中世的なまぜものから多少とも解放され、それぞれの国の特殊な歴史的発展によって多少とも修正され、多少とも発展した状態ですべての文明国に現存している。これに反して、『今日の国家』は国境とともに移りかわる。それは、プロイセン=ドイツ帝国とスイスとでは違っており、イギリスとアメリカ合衆国とでは違っている。だから、『今日の国家なるもの』は一つの擬制である。

けれども、さまざまな文明国にあるさまざまな国家は、その形態が種々さまざまであるにもかかわらず、近代ブルジョア社会の基盤のうえに立っている点でみな共通しており、ただこの社会の資本主義的発展の度合に大小の差があるだけである。だから、それらの国家はまた、あ

る本質的な性格を共通にもっている。この意味で、われわれは、その今日の根底をなすブルジョア社会が死滅してしまった将来と対比させて、『今日の国家組織』について語ることができる。

つぎに問題になるのは、共産主義社会では国家組織はどんなふうに変わるのか、言いかえれば、そこでは今日の国家機能に似たどんな社会的機能が残るのか、ということである。この問題にはただ科学的に答えることができるだけであって、人民ということばと国家ということばを千度も結びつけたところで、蚤（のみ）の一跳（は）ねほども問題に近づきはしないのである。……」[40]

このようにマルクスは、「人民国家」についてのあらゆるおしゃべりを嘲笑して、問題提起をおこない、この問題に科学的に答えるためには、科学的にしっかりと確定された資料のほかは用いられないと、いわば警告している。

発展理論全体によって、また一般に科学全体によってまったく正確に確立されている第一のこと――ユートピア主義者が忘れていたこと、また社会主義革命を恐れる今日の日和見主義者が忘れていること――、それは、資本主義から共産主義への過渡の特殊な段階、または特殊な時期が、歴史上に疑いもなく存在するにちがいない、という事情である。

二　資本主義から共産主義への過渡

マルクスはつづけてこう書いている。

「……資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的執権（ディクタツーラ）以外のなにものでもありえない。……」

マルクスのこの結論は、近代資本主義社会でプロレタリアートが演じている役割の分析と、この社会の発展についての、またプロレタリアートとブルジョアジーとの相対立する利害の非和解性についての資料にもとづいている。

以前には、問題は次のようなかたちで提起されていた。プロレタリアートは、自分の解放をかちとるためには、ブルジョアジーを打倒し、政治権力を獲得し、みずからの革命的執権（ディクタツーラ）を打ち立てなければならない、と。

いまや問題は、いくらか違ったかたちで提起されている。共産主義にむかって発展しつつある資本主義社会から共産主義社会への移行は、「政治上の過渡期」なしには不可能であり、そして、この時期の国家はプロレタリアートの革命的執権（ディクタツーラ）でしかありえない、と。

では、この執権（ディクタツーラ）と民主主義との関係はどのようなもの

か？

すでに見たように、『共産党宣言』では、「プロレタリアートを支配階級に転化させること」と、「民主主義をたたかいとること」という二つの概念が単純に並置されていた。以上に述べてきたすべてのことにもとづいて、資本主義から共産主義への過渡期に民主主義がどう変化するかを、いまやもっと正確に規定することができる。

資本主義社会では、この社会が最も順調に発展している場合には、民主的共和制というかたちで多少とも完全な民主主義がある。しかし、この民主主義は、つねに資本主義的搾取の狭い枠に押しこめられており、実質上は、つねに少数者のための民主主義、有産階級だけのため、金持だけのための民主主義にとどまっている。資本主義社会の自由は、つねに、古代ギリシアの諸共和国における自由、すなわち奴隷所有者のための自由と似たりよったりのものである。近代の賃金奴隷は、資本主義的搾取の諸条件のために、いまなお窮乏と貧困に押しひしがれているので、「民主主義どころではなく」、「政治どころではない」のであって、事態が型のごとく、平穏無事にすすんでいるときには、住民の多数者は公共生活、政治生活への参加から締めだされているのである。

この主張の正しさをなによりも明瞭に確証しているのは、おそらくドイツであろう。というのは、この国では、憲法上の合法性が驚くほど長期間、しっかりと、ほとんど半世紀にわたって（一八七一年から一九一四年まで）維持され、またその期間に社会民主党が、「合法性を利用する」面で、また世界のどこにも見られないほど高い比率の労働者を政党に組織する面で、他の国々にくらべてはるかに多くのことをなしとげることができたからである。

では、これまでに資本主義社会で見られた最高の比率だという、この政治的に自覚した活動的な賃金奴隷の占める比率は、いったいどれだけか？　社会民主党の党員は、一五〇〇万人の賃金労働者のうちで一〇〇万人である！　労働組合に組織されている者は、一五〇〇万人のうちで三〇〇万人である！

とるにたりない少数者のための民主主義、金持のための民主主義——これが資本主義社会の民主主義である。資本主義的民主主義の仕組みをすこしくわしく調べてみれば、どこでも、いたるところで、選挙法の「瑣末な」、瑣末と言われる細目（居住資格、婦人の除外等々）においても、代議機関の運営方法においても、集会の権利にたいする事実上の障害（公共の建物は「こじき」に使わせるためにあるのではない！）の点でも、日刊新聞の純資本主義的な組織、その他等々においても、民主主義が制限のうえにも制

限をうけていることがわかるであろう。貧乏人にたいするこれらの制限、除外、排除、障害は、瑣末なもののように思える。とくに、自分ではかつて窮乏を味わったことがなく、被抑圧階級の大衆の生活に接触したことがない者（ブルジョア政論家やブルジョア政治家の一〇〇人中九九人ではないまでも、一〇人中九人まではそういう連中である）の目にはそう映る。——しかし、これらの制限をいっしょに合わせると、貧乏人を政治から、民主主義への積極的な参加から排除し、押しのけることになるのである。

マルクスがコミューンの経験を分析したなかで、被抑圧者は抑圧階級のどの代表者が議会で彼らを代表し、そして踏みにじるかを、数年に一度きめることを許されると、言ったのは、資本主義的民主主義のこの本質をみごとに把握したものであった！

しかし、自由主義的教授や小ブルジョア日和見主義者が考えているように、この資本主義的民主主義——不可避的に狭く、貧乏人をこっそりと突きのけている民主主義、したがって骨の髄まで偽善的で、いつわりの民主主義——から、「ますます広い民主主義へ」と、単純に、まっすぐに、すらすらと前への発展がおこなわれるわけではない。そうではない。前への発展、すなわち共産主義への発展は、プロレタリアートの執権をつうじておこなわれるのであって、それ以外の進み方はありえない。なぜなら、搾取者である資本家の反抗を打ち砕くことは、ほかのだれにも、ほかのどんな方法によってもできないからである。

ところで、プロレタリアートの執権、すなわち抑圧者を抑圧するために被抑圧者の前衛を支配階級に組織することは、たんに民主主義の拡大をもたらすだけではありえない。プロレタリアートの執権は、民主主義をすばらしく拡大して、はじめて金持のための民主主義ではなしに、貧乏人のための民主主義、人民のための民主主義にならせるが、それとともに、抑圧者、搾取者、資本家にたいして一連の自由の除外例を設ける。人類を賃金奴隷制から解放するためには、われわれは彼らを抑圧しなければならず、彼らの反抗を強力によって打ち砕かなければならない——抑圧のあるところ、強力のあるところに、自由がなく、民主主義がないことは、明らかである。

読者は思いだされるであろうが、エンゲルスは、ベーベルあての手紙のなかでこのことをみごとに表現して、こう言っていた。「プロレタリアートがまだ国家を必要とするあいだは、プロレタリアートは自由のためにではなく、その敵を抑圧するためにそれを必要とするのであって、自由について語れるようになるやいなや、国家は存在しなくなります」、と。

人民の大多数者のための民主主義と、人民の搾取者、抑圧者にたいする強力による抑圧、すなわち民主主義からのその排除——これが、資本主義から共産主義への過渡にさいして民主主義がこうむる形態変化である。

共産主義社会においてはじめて、すなわち、資本家の反抗がすでに最終的に打ち砕かれ、資本家が姿を消し、階級がなくなった（すなわち、社会的生産手段にたいする関係の点で、社会の成員のあいだに差異がなくなった）ときにはじめて、「国家は消滅し、自由について語ることができるようになる」。そのときにはじめて、ほんとうに完全な民主主義、ほんとうになんの除外例もない民主主義が可能となり、実現されるであろう。また、そのときにはじめて、民主主義は、次の単純な事情によって死滅しはじめるであろう。すなわち、資本主義的奴隷制から解放され、資本主義的搾取の数かぎりない恐怖、野蛮、不合理、醜さから解放された人々は、はるか昔からよく知られ、何千年ものあいだあらゆる格言のなかで繰りかえされてきた共同生活の基礎的な規則を守る習慣、強力がなくても、強制がなくても、従属がなくても、国家とよばれる特殊な強制機構がなくても、これらの規則を守る習慣をしだいに身につけるであろうということ、これである。

「国家は死滅する」という表現は、まことに適切に選ばれたものである。なぜなら、この表現は、過程の漸進性をも、その自然成長性をも示しているからである。習慣だけが、このような作用を及ぼすことができるし、また疑いもなく及ぼすであろう。なぜなら、もし搾取がなければ、また人々を憤激させ、抗議や反抗をよびおこし、抑圧の必要を生みだすものがなにもなければ、人々が自分たちに必要な共同生活の規則を守る習慣をいかにたやすく身につけるか、われわれはそれを自分のまわりに何百万回も目撃しているからである。

こういうわけで、資本主義社会にあるのは、制限された、かたわな、にせものの民主主義、金持だけのため、少数者だけのための民主主義である。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が、共産主義への過渡期がはじめて、少数者、搾取者にたいする必要な抑圧とともに、人民のため、多数者のための民主主義をもたらすであろう。ただひとつ共産主義だけが、ほんとうに完全な民主主義をもたらすことができる。そして、民主主義が完全になればなるほど、それだけ急速に民主主義は不必要になり、ひとりでに死滅するであろう。

言いかえれば、資本主義のもとには、本来の意味の国家がある。すなわち、一つの階級が他の階級を抑圧するための、しかも少数者が多数者を抑圧するための、特殊な機構がある。少数者である搾取者が多数者である被搾取者を組

織的に抑圧するということをうまくやってのけるためには、抑圧がきわめて狂暴で残忍である必要があり、血の海が必要であるのは、いうまでもない。またじっさい、人類は、奴隷制、農奴制、賃金労働制の状態のもとでは、そういう血の海を渡るのである。

つぎに、資本主義から共産主義への過渡には、まだ抑圧が必要であるが、しかし、それはすでに多数者である被搾取者が、少数者である搾取者にくわえる抑圧である。抑圧のための特殊な機関、特殊な機構である「国家」はまだ必要であるが、しかし、それはすでに過渡的な国家であり、もはや本来の意味の国家ではない。なぜなら、多数者であるきのうまでの賃金奴隷が少数者である搾取者を抑圧することは、比較的にいって、きわめて容易で、簡単で、自然なことなので、奴隷や農奴や賃金労働者の反抗を抑圧する場合よりも、はるかに少ない流血しか要しないだろうし、人類にとって犠牲ははるかに少なくてすむだろうからである。しかも、この抑圧は、抑圧のための特殊な機構の必要がなくなりはじめるほど圧倒的多数の住民への民主主義の拡大と両立するのである。当然のことながら、搾取者が人民を抑圧することは、そういう任務を遂行するためのきわめて複雑な機構なしには不可能であるが、人民が搾取者を抑圧することは、ごく簡単な「機構」によっても、それどころか、ほとんど「機構」がなくても、特殊な機関がなくても、たんなる武装した大衆の組織（さきまわりして言えば、労働者・兵士代表ソヴェトのような）によっておこなうことができる。

最後に、共産主義がはじめて国家を完全に不必要にする。なぜなら、抑圧すべき者がだれもいない——階級という意味で、また住民の一定の部分との組織的な闘争という意味で、「だれも」いない——からである。われわれはユートピア主義者ではないから、個々人が非行をおかすことがありうること、また避けられないことをけっして否定しないし、また、そういう非行を抑圧する必要があることをも、同様に否定しない。しかし、第一に、そのためには、抑圧のための特殊な機構、特殊な機関は必要でない。武装した人民自身がきわめて簡単にそれをおこなうであろうことは、ちょうど今日の社会ですら、だれであろうと文明人の群衆ならば、簡単に、また容易に、けんかをしている者を引きわけ、婦人への暴力を制止するのと同様であろう。また第二には、共同生活の規則を侵害する非行の根本的な社会的原因が、大衆の搾取、大衆の窮乏と貧困であることを、われわれは知っている。この主要な原因がとりのぞかれるとともに、非行は不可避的に「死滅し」はじめるであろう。われわれは、それがどれだけ速やかに、ま

たどんな順序で死滅するかを知らないが、しかし、それが死滅することは知っている。それが死滅するとともに、国家もまた死滅するであろう。

マルクスは、ユートピアにふけることとなしに、この将来にかんして現在規定できることを、すなわち共産主義社会の低い段階(階梯、時期)と高い段階との区別を、いっそうくわしく規定している。

三　共産主義社会の第一段階

『ゴータ綱領批判』のなかで、マルクスは、社会主義のもとでは労働者は「削減されない労働収益」あるいは「労働の全収益」を受け取る、というラサールの思想を詳細に論駁している。マルクスは、全社会の社会的総労働のうちから、予備積立(フォンド)、生産拡張用積立、さらに「摩耗した」機械の補塡分その他を控除し、つぎに消費資料のうちから管理費のため、学校、病院、養老院その他のための積立を控除する必要のあることを示している。

ラサールのぼんやりした、不明瞭な、一般的な文句(「労働の全収益を労働者へ」)とはちがって、マルクスは、社会主義社会はまさにどのように業務を運営せざるをえないかを、冷静に計算している。マルクスは、資本主義がもはや存在しない社会の生活条件の具体的な分析にとりくんで、次のように述べている。

「ここで」(労働者党の綱領を検討するさいに)「問題にしているのは、それ自身の基礎のうえに発展した共産主義社会ではなくて、反対に、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、この社会を生みだした母胎である旧社会の母斑をまだおびている。」

マルクスが、共産主義社会の「第一」段階または低い段階とよんでいるのは、まさに、資本主義の母胎からこの世に出てきたばかりで、あらゆる点で旧社会の母斑をおびているこの共産主義社会のことなのである。

生産手段はもはや個々人の私有財産ではなくなっている。生産手段は社会全体のものになっている。社会の各成員は、社会的必要労働のある部分を遂行して、これこれの量の労働を遂行したという証明書を社会から受け取る。この証明書で、彼は消費資料の社会的貯蔵のうちから、それに相当する量の生産物を受け取る。したがって、労働者はそれぞれ、社会的積立にふりむけられる労働量を控除したうえで、彼が社会にあたえただけのものを社会から受け取るのである。

「平等」がひろくおこなわれているかのようである。

しかし、ラサールがこのような社会制度（普通は社会主義とよばれているが、マルクスによって、共産主義の第一段階とよばれているもの）を念頭におきつつ、これは「公正な分配」であり、「平等な労働収益にたいする各人の平等な権利」である、と言うとき、ラサールは誤りをおかしているのであって、マルクスはラサールのこの誤りを説き明かしている。

マルクスは言う。たしかに、ここには「平等な権利」がありはする。しかし、これはまだ「ブルジョア的権利」であって、あらゆる権利がそうであるように、不平等を前提としている。すべて権利というものは、実際には一様でない、たがいに平等でない相異なる人間に、一様な尺度をあてがうことである。だから、「平等な権利」とは、平等の侵害であり、不公正である。じっさい、各人は、他の人々と等しい量の社会的労働を遂行すれば、社会的生産物（前述の控除をおこなったうえで）の平等な分けまえを受け取る。

ところが、個々人は平等ではない。ある者は力が強いのに、他の者は弱いとか、ある者は結婚しているのに、他の者は独身だとか、ある者には子供がたくさんいるのに、他の者には少ないとか、等々。

マルクスは次のように結論する。

「……労働の給付は等しく、したがって社会的消費元本にたいする持ち分は平等であっても、ある者は他の者より事実上多く受け取り、ある者は他の者より富んでいる、等々。すべてこういう欠陥を避けるためには、権利は平等ではなく、不平等でなければならないだろう。……」

したがって、公正と平等とを、共産主義の第一段階はまだあたえることができない。富の差異、しかも不公正な差異は残るであろう。しかし、人間が人間を搾取することは不可能であろう。なぜなら、生産手段、すなわち、工場、機械、土地その他を占取して私有財産とすることはできないからである。「平等」、「公正」一般についてのラサールの小ブルジョア的な不明瞭な文句を粉砕して、マルクスは、共産主義社会の発展の道すじを示している。この社会は、最初は、個々人が生産手段を占取しているという「不公正」だけを廃止するにとどめざるをえないのであり、消費資料を「労働に応じて」（欲望に応じてではなしに）分配する点に見られる、もう一つの不公正をもただちにあわせて廃止することはできない。

「わが」トゥガンをもふくむブルジョア教授連をはじめとして、俗流経済学者は、社会主義者が人間の不平等なことを忘れ、この不平等をなくすことを「夢みて」いると言って、社会主義者をたえず非難している。ごらんのとおり、このような非難は、ブルジョア・イデオローグ諸君の極端

な無知を証明するにすぎない。

マルクスは、人間の避けがたい不平等をきわめて正確に考慮しているばかりではない。彼はまた、生産手段を社会全体の共有財産に移した（普通の用語法による「社会主義」）だけでは、まだ分配の欠陥や、「ブルジョア的権利」の不平等はとりのぞかれず、生産物が「労働に応じて」分けられるかぎり、「ブルジョア的権利」がひきつづきおこなわれることをも考慮している。

マルクスはつづけてこう言っている。

「……しかし、こうした欠陥は、長い生みの苦しみののち資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会の第一段階では、避けられない。権利は、社会の経済構造およびそれによって制約される文化の発展よりも高度のものであることはけっしてできない。……」

こうして、共産主義社会の第一段階（これが普通には社会主義とよばれている）では、「ブルジョア的権利」は完全に廃止されるのではなく、ただ部分的に、すでに達成された経済的変革の度合に応じてのみ、すなわち生産手段にかんしてのみ、廃止されるのである。「ブルジョア的権利」は、生産手段を個々人の私有財産として認める。社会主義はこれを共同所有にする。そのかぎりで——そのかぎりでのみ——、「ブルジョア的権利」はなくなるのである。

しかし、「ブルジョア的権利」は、この権利の残りの部分にかんしては、やはり残っている。すなわち、社会の成員のあいだでの生産物の分配と労働の配分との規制者（規定者）として、残っている。「働かざる者は食うべからず」——この社会主義的原則はすでに実現されている。「等しい量の労働には等しい量の生産物を」——この社会主義的原則もまたすでに実現されている。けれども、これはまだ共産主義ではない。これはまだ、不平等な人々の不平等な（事実上不平等な）量の労働にたいして等しい量の生産物をあたえる「ブルジョア的権利」をとりのぞくものではない。

マルクスは言う。これは「欠陥」である。しかし、それは、共産主義の第一段階では避けられない。なぜなら、資本主義を打ち倒せば、人々はたちまちいっさいの権利の基準なしに社会のために働くことを学ぶ、などと考えることは、ユートピア主義におちいらずには不可能であり、しかも資本主義の廃止は、このような変化の経済的諸前提をただちにあたえるものではないからである、と。

しかし、「ブルジョア的権利」以外の基準は存在しない。そして、そのかぎりで、生産手段の共同所有を保護しながら、労働の平等と生産物分配の平等とを保護する国家の必要がなお残っている。

資本家がもはや存在せず、階級がもはや存在せず、したがって、およそどんな階級をも抑圧するわけにはいかないというかぎりでは、国家は死滅する。

しかし、国家はまだ完全に死滅したのではない。なぜなら、事実上の不平等を神聖化する「ブルジョア的権利」が、依然として保護されているからである。国家が完全に死滅するためには、完全な共産主義が必要である。

四 共産主義社会の高い段階

マルクスはつづけて言う。

「……共産主義社会の高い段階で、個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立が消滅したのち、労働がたんに生きるための手段であるだけでなく、それ自体第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にともなって、また生産力も増大し、協同の富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧きでるようになったのち——そのときはじめて、ブルジョア的権利の狭い視界を完全に踏みこえることができ、社会はその旗にこう書くことができる。各人はその能力に応じて、各人にはその欲望に応じて！」

いまやはじめてわれわれは、「自由」ということばと「国家」ということばを結びつけることのばかばかしさを容赦なく嘲笑したエンゲルスの批評がまったく正しかったことを、評価することができる。国家があるあいだは、自由はない。自由があるときには、国家は存在しないであろう。

国家の完全な死滅の経済的基礎は、精神労働と肉体労働との対立が消滅するほどに、したがって現代の社会的不平等の最も重要な根源の一つ——しかも、生産手段を社会的所有に移しただけでは、資本家を収奪しただけでは、一挙にとりのぞくことのけっしてできない根源——が消滅するほどに、共産主義が高度の発展をとげることである。

資本家の収奪は、生産力の巨大な発展を可能とするであろう。そして、資本主義がいまでもすでにこの発展をはなはだしく阻止していることを考え、また、すでに達成されている現代技術を基礎にすれば長足の進歩が可能であることを考えれば、われわれは、資本家の収奪がかならずや人類社会の生産力の巨大な発展をもたらすであろうと、完全な確信をもって断言してはばからない。しかし、この発展がどれだけ速やかにすすむか、それがどれだけ速やかに分業と手を切り、精神労働と肉体労働との対立を廃絶し、労働を「第一の生命欲求」とならせるまでになるか、われわれは知らないし、また知ることもできない。

だから、われわれは、国家が不可避的に死滅することを

述べ、この過程が長期にわたること、それが共産主義の高い段階の発展速度にかかっていることを強調するだけにとどめて、死滅の時期や、死滅の具体的形態の問題は、まったく未決のままにしておいてさしつかえないのである。なぜなら、このような問題を解決するための材料がないからである。

社会が「各人はその能力に応じて、各人にはその欲望に応じて」という準則を実現するとき、すなわち、人々が共同生活の基本的な規則を守る習慣を十分に身につけ、彼らの労働がいちじるしく生産的なものとなり、その結果、彼らが自発的にその能力に応じて労働するようになるとき、そのとき国家は完全に死滅することができるであろう。他人より半時間でもよけいに働くことのないように、他人より少ない給料をもらうことのないようにと、人々にシャイロック流の冷酷さでそろばんをはじかせる「ブルジョア的権利の狭い視界」――この狭い視界は、そのとき踏みこえられるであろう。そのときには、生産物を分配するさいに、各人の受け取る生産物の量を社会が規制する必要はなくなり、各人は「その欲望に応じて」自由に取るであろう。

ブルジョア的見地から、このような社会組織を「純然たるユートピア」だときめつけ、社会主義者は、個々の市民の労働をなんら統制せずに、松露や自動車やピアノ等を好きなだけ社会から受け取る権利を各人に約束する、と言ってせせら笑うのは、たやすいことである。ブルジョア「学者」の大多数は、いまでもこういうせせら笑いで問題をかたづけているが、彼らはそれによって自分たちの無知と、自分たちの欲得ずくの資本主義擁護とを、みずからさらけだしているのである。

彼らが無知だというわけは、社会主義者のだれひとり、共産主義の高い発展段階がやってくることを「約束し」ようなどと思いついた者はいないのであって、そういう段階がやってくるだろうという偉大な社会主義者たちの予見は、今日の労働生産性を前提とするものでも、また、社会的富の貯蔵を――ポミャロフスキーの作品中の神学生(三五)のように――「おもしろ半分に」だいなしにしたり、不可能なことを要求したりするようなことのやれる今日の俗物を前提とするものでもないからである。

共産主義の「高い」段階がやってくるまでは、社会主義者は、労働の基準と消費の基準にたいして社会の側から、また国家の側から、きわめて厳重な統制をくわえるように要求する。ただし、その統制は、資本家の収奪から、資本家にたいする労働者の統制から始められなければならず、そして官吏の国家ではなく、武装した労働者の国家がそれをおこなわなければならないのである。

ブルジョア・イデオローグ（およびツェレテーリ氏、チェルノーフ氏一派のようなその腰巾着ども）の欲得ずくの資本主義擁護は、ほかでもなく、彼らが、今日の政治の切実な焦眉の問題――資本家を収奪し、すべての市民を一大「シンジケート」、つまり全体としての国家の労働者と職員に変え、このシンジケート全体の全活動を真に民主主義的な国家、労働者・兵士代表ソヴェトの国家に完全に従属させるという問題――を、遠い将来についての論争やおしゃべりとすりかえている点にある。

博学な教授が、そのあとについて俗物が、さらにそのあとについてツェレテーリ氏らとチェルノーフ氏らが、とりとめもないユートピアだとか、ボリシェヴィキのデマゴギー的な約束だとか、社会主義を「導入する」ことは不可能だとかと言うとき、彼らが念頭においているのは、実質上、ほかならぬ共産主義の高い段階なのであって、そういう段階を「導入する」ことなど、だれも約束しなかったばかりか、考えたことさえないのである。なぜなら、この段階を「導入する」ことは、およそ不可能だからである。

ここでわれわれは、社会主義と共産主義との科学上の差異の問題にたどりついた。これは、エンゲルスが「社会民主主義者」という名称の正しくないことを論じた彼の前掲の考察のなかでふれている問題である。政治的にみれば、共産主義の第一段階すなわち低い段階と、高い段階との差異は、おそらく、時とともにきわめて大きなものとなるであろう。しかし、現在、資本主義のもとにあってこの差異を見きわめようとするのはこっけいであろうし、それを第一に強調するようなことをやれるのは、個々の無政府主義者だけであろう（これは、クロポトキンら、グラーヴら、コルネリッセンら、その他の無政府主義の「明星」が「プレハーノフ式に」社会排外主義者、または――節操と良心をたもっている少数の無政府主義者のひとりであるゲーの表現を借りれば――無政府塹壕主義者に転落したあとでもなにも学びとらなかった人間が、無政府主義者のあいだにまだいるとしての話であるが）。

しかし、社会主義と共産主義との科学上の区別は明白である。普通に社会主義とよばれているものを、マルクスは共産主義社会の「第一」段階または低い段階とよんだ。生産手段が共同所有になるかぎりで、これが完全な共産主義でないことを忘れなければ、この場合にも「共産主義」ということばを用いてさしつかえない。マルクスの説明の大きな意義は、彼がここでも唯物弁証法、発展学説を首尾一貫して適用し、共産主義を資本主義から発展してくるものと見ている点にある。マルクスは、スコラ哲学ふうに頭で考えだされ、「創作された」諸規定や、ことばについての

不毛な論争（社会主義とはなにか、共産主義とはなにか）ではなしに、共産主義の経済的成熟度の諸階梯とよぶべきものの分析をあたえている。

共産主義は、その第一段階、第一階梯では、経済的に完全に成熟したもの、資本主義の伝統や痕跡から完全に脱却したものではまだありえない。第一段階の共産主義のもとでは「ブルジョア的権利の狭い視界」が残るというような興味ぶかい現象は、ここから生まれてくるのである。消費用生産物の分配についてのブルジョア的権利は、もちろん、不可避的に、ブルジョア国家をも前提する。なぜなら、権利は、権利の基準の順守を強制できる機構がなければ、ないにひとしいからである。

だから、共産主義のもとでは、ある期間ブルジョア的権利が残っているばかりでなく、ブルジョア国家――ブルジョアジーのいない！――さえも残っているということになる。

これは、逆説か、たんなる弁証法的な観念の遊戯と思われるかもしれない。マルクス主義のなみなみならぬ深遠な内容を研究する労をほんのすこしもとったことのない人々はよく、マルクス主義をそういう観念の遊戯だと言って非難する。

だが実際には、自然でも、社会でも、現実の生活はことごとに、新しいもののなかにある古いものの残存物を示している。そして、マルクスは、「ブルジョア的権利」の断片を勝手気ままに共産主義のなかに押しこんだのではなく、資本主義の母胎から生まれつつある社会で経済的、政治的に不可避なものをとりあげたのである。

民主主義は、資本家にたいする労働者階級の解放闘争において、非常に大きな意義をもっている。しかし、民主主義は、踏みこえることのできない限界ではけっしてなく、封建制度から資本主義への、また資本主義から共産主義への途上の一段階にすぎない。

民主主義は平等を意味する。平等をめざすプロレタリアートの闘争と平等のスローガンとがどれほど大きな意義をもっているかは、平等ということを階級の廃絶という意味に正しく理解するならば、明らかである。だが、民主主義は形式的な平等を意味するにすぎない。そして、生産手段の所有にかんして社会の全成員の平等、すなわち労働の平等、賃金の平等が実現されたあとでは、人類は、すぐつづいて、形式的な平等から実質的な平等にむかって、すなわち「各人はその能力に応じて、各人にはその欲望に応じて」という準則の実現にむかってさらに前進してゆくという問題に不可避的に当面する。人類がどんな段階をとおって、どんな実践的措置をつうじて、このより高い目標にむ

かってすすんでゆくか、われわれは知らないし、知ることもできない。しかし、重要なことは、社会主義を、なにか死んだ、硬直した、一度できたらそのまま永久に変わらないもののように考えるありきたりのブルジョア的観念がとほうもなくまちがっていることを、理解することである。実際には、社会主義のもとではじめて、社会生活と個人生活のすべての分野で、住民の多数者が、ついで全住民が参加した、急速な、ほんとうの、真に大衆的な前進運動が始まるのである。

民主主義は国家形態であり、国家の一変種である。したがって、それはまた、あらゆる国家と同じように、人々にたいして組織的、系統的に強力を行使することである。これが一面である。しかし他面では、民主主義は、市民の平等の形式的な承認、国家の組織を決定し国家を統治するうえでの万人の平等な権利の形式的な承認を意味する。だが、このことは、それ自体、次のような結果をともなう。すなわち、民主主義は、そのある発展段階で、まず第一に、資本主義にたいする革命的階級であるプロレタリアートを団結させ、この階級に、ブルジョア国家機構――たとえそれがブルジョア共和制の国家機構であろうと――、常備軍、警察、官僚制度を粉砕し、こっぱみじんに打ち砕き、地上から一掃して、武装した労働者大衆という、やはり国家機構ではあるが、いっそう民主主義的な国家機構をもってそれにおきかえる可能性をあたえる。そして、この武装した労働者大衆は、人民を一人のこらず民兵に参加させることにとりかかるのである。

ここで、「量は質に転化する」。すなわち、民主主義のこのような段階は、ブルジョア社会の枠からの脱出と結びついており、この社会の社会主義的改造の開始と結びついている。もしほんとうにすべての者が国家の統治に参加するなら、もはや資本主義はもちこたえられないであろう。だが、資本主義の発展は、他方で、ほんとうに「すべての者」が国家の統治に参加できるための前提条件をつくりだす。このような前提条件の一つは、一連の最も先進的な資本主義諸国ではすでに実現されていることだが、だれでも読み書きできることであり、つぎには、郵便、鉄道、大工場、大規模商業、銀行業その他等々の大規模で複雑な社会化された機構によって、幾百万の労働者が「教育と訓練」をうけていることである。

このような経済的前提条件がそなわっていれば、資本家と官吏を打倒したのち、生産と分配を統制する仕事でも、労働と生産物を記録する仕事でも、武装した労働者、一人のこらず武装した人民が資本家と官吏にとってかわることに、ただちに、きょうあすにもとりかかることが十分に可

能である。(統制と記録の問題を、技師、農業技師その他の科学的素養のある要員の問題と混同してはならない。これらの諸君は、きょうは資本家に服従して働いているが、あすは武装した労働者に服従して、いっそうよく働くであろう。)

　記録と統制――これが、共産主義社会の第一段階を「軌道にのせる」ため、それを正しく機能させるために必要とされる主要なものである。ここでは、すべての市民が、武装した労働者からなる国家に雇われた勤務員になる。すべての市民が、一つの全人民的な国家「シンジケート」の職員と労働者になる。必要なことは、彼らが仕事の基準を正しく守って、平等に働き、平等に受け取ることにつきる。それの記録と統制は、資本主義によって極度に単純化されて、観察と記入、算術の四則の知識と適当な受領証の発行といったような、読み書きのできる者ならだれにでもできる、ごく簡単な操作になっている。*

* 国家の機能の最も主要な部分が、労働者自身によるこのような記録と統制に帰着するようになれば、そのときには、国家は「政治的国家」ではなくなる。そして、「公的諸機能は、政治的な機能から、単純な管理機能に変わる。」(前掲、第四章第二節、エンゲルスの無政府主義者との論戦を参照せよ)

人民の多数者が、資本家(いまでは職員に変わっている)や、資本家的習癖をもちつづけているインテリゲンツィアの紳士諸君にたいして、このような記録、このような統制を自主的に、いたるところでおこないはじめるなら、そのときには、この統制は真に普遍的、全般的、全人民的なものとなるであろう。そのときには、どんなにしてもこの統制をのがれることはできず、「どこにも隠れ場がなくなる」だろう。

　社会全体が、平等に労働して平等に支払をうける、一つの事務所と一つの工場になるであろう。

　しかし、資本家に勝利し搾取者を打倒したプロレタリアートが全社会におしおよぼすこの「工場」規律は、けっしてわれわれの理想でもなければ、われわれの終局目標でもなく、社会から資本主義的搾取の醜悪さ、いとわしさを徹底的に清掃するため、そしてさらに前進してゆくために必要な一小階梯にすぎない。

　社会の全成員、あるいはすくなくともその大多数者が、国家を統治することをみずから学びとり、この仕事をみずからその手に引き受け、とるにたりない少数者である資本家や、資本家的習癖をもちつづけたがる紳士諸君や、資本主義のためにひどく堕落させられた労働者にたいする統制を「軌道にのせた」とき――そのときからあらゆる統治一般の必要が消滅しはじめる。民主主義が完全になればなる

ほど、それが不必要になる時機がますます近づいてくる。武装した労働者からなりたっていて、「もはや本来の意味の国家ではない」「国家」が民主主義的になればなるほど、あらゆる国家がますます急速に死滅しはじめる。

なぜなら、すべての者が社会的生産を自主的に管理することを学びとり、また実際にそれを管理するようになり、徒食者や、お坊っちゃんや、ぺてん師や、それに類する「資本主義の伝統の保持者たち」にたいする記録と統制を自主的におこなうようになったとき――そのときには、全人民によるこのような記録と統制をまぬかれることは、かならずや、とほうもなく困難になり、きわめてまれな例外となり、おそらくは、たちどころに厳重な処罰をまねくだろうし（なぜなら、武装した労働者は実際的な人間であって、感傷的なインテリ女性ではなく、おそらくばかにされて黙ってはいないだろうから）、人間のあらゆる共同生活の単純で基本的な規則を守る必要は、きわめて速やかに習慣となるだろうからである。

そしてそのときには、共産主義社会の第一段階からその高い段階に移行し、それとともに国家の完全な死滅に移行するための扉がひろくあけはなたれるであろう。

第六章　日和見主義者によるマルクス主義の卑俗化

社会革命にたいする国家の関係および国家にたいする社会革命の関係という問題は、およそ革命の問題全体がそうであるように、第二インタナショナル（一八八九―一九一四年）の最も著名な理論家や政論家たちからほとんど注意をはらわれなかった。しかし、一九一四年に第二インタナショナルの崩壊をもたらした、あの日和見主義の徐々の成長過程において最も特徴的なことは、彼らがこの問題のまぢかまで接近したときにさえ、それを回避することにつとめたか、あるいはそれに気づかなかったということである。

国家にたいするプロレタリア革命の関係の問題を回避する態度――日和見主義にとって好都合で、日和見主義をはぐくんだこの態度から、マルクス主義の歪曲とその完全な卑俗化とが生じたと、だいたいにおいて言ってさしつかえない。

この悲しむべき過程をたとえ簡単にでも特徴づけるために、マルクス主義の最も著名な理論家であるプレハーノフとカウツキーをとりあげてみよう。

一　プレハーノフと無政府主義者との論戦

プレハーノフは、一八九四年にドイツ語で出版された単行の小冊子『無政府主義と社会主義』で、無政府主義と社会主義の関係の問題をあつかっている。

プレハーノフは、無政府主義との闘争においていちばん切実で、焦眉で、政治的にいちばん肝要なもの、すなわち国家にたいする革命の関係を、また総じて国家の問題を完全に回避しながら、この主題を論じるという芸当をまんまとやりとげた！　彼の小冊子では二つの部分がはっきり分けられる。その一つは文献史的な部分であって、シュティルナー、プルードンその他の人々の思想の歴史についての貴重な資料をふくんでいる。もう一つの部分は俗物的な部分であって、無政府主義者はギャングと区別がつかないといった、おそまつな議論をふくんでいる。

この主題の組合せははなはだこっけいであるが、これこそ、ロシア革命の前夜と革命期におけるプレハーノフの全活動の特徴をきわめてよくあらわしている。プレハーノフは、まさに一九〇五年から一九一七年までのあいだに、政治上ではブルジョアジーに追随する半空論家、半俗物という正体を暴露したのであった。

すでに見たように、マルクスとエンゲルスは、無政府主義者と論戦したさい、国家にたいする革命の関係について自分たちの見解をなによりも詳細に説明した。エンゲルスは、一八九一年にマルクスの『ゴータ綱領批判』を公表したさい、次のように書いている。「当時は（第一）インタナショナルのハーグ大会からやっと二年たつかたたないかのころで、われわれ」（すなわちエンゲルスとマルクス）「は、バクーニンや彼の一味の無政府主義者たちときわめて激しく闘争していた。」(三三)

無政府主義者は、ほかならぬパリ・コミューンを、いわば「自分たちのもの」だと、つまり彼らの学説を裏書きするものだと言い立てようと企てたが、そのさい彼らは、コミューンの教訓とマルクスによるこの教訓の分析とをまったく理解しなかった。旧来の国家機構を粉砕すべきかどうか、またそれをなにとおきかえるべきか、という具体的な政治問題については、無政府主義は、真実にほぼ近いものすら、なにひとつあたえなかった。

しかし、国家の問題をまったく回避し、コミューンの前後におけるマルクス主義の発展全体に注意をはらわずに「無政府主義と社会主義」を論じるということは、不可避的に、日和見主義に転落することを意味していた。なぜなら、日和見主義にとっていちばん必要なことは、まさにわ

れわれがいまあげた二つの問題がまったく提起されないということだからである。それだけでも、すでに日和見主義の勝利なのである。

二　カウツキーと日和見主義者との論戦

カウツキーの著作は、疑いもなく、ロシア語の文献には、他のどの国の文献におけるよりも格段に大量に翻訳されている。カウツキーはドイツよりもむしろロシアで多く読まれている、と一部のドイツの社会民主主義者が冗談を言うのも、理由のないことではない（ついでに言っておけば、この冗談は、それを口にした人々が気づいているよりもはるかに深い歴史的内容をふくんでいる。ロシアの労働者は、一九〇五年に、世界でいちばんすぐれた社会民主主義文献のうちのいちばんすぐれた著作にたいして、なみなみならぬ強い、未曾有の需要を示し、そして、他の国々では聞いたこともないほど大量に、それらの著作の翻訳や刊行物を手に入れたが、彼らはそれによって、いわばわが国のプロレタリア運動の若い土壌に、より先進的な隣国の巨大な経験を急速に移植したのである）。

わが国では、カウツキーは、彼の通俗的なマルクス主義の解説書によるほか、日和見主義者たちやその先頭に立ったベルンシュタインとの論戦によって、とくによく知られている。だが、一九一四—一九一五年の最大の危機の時期にカウツキーが信じられないほど恥さらしな呆然自失ぶりを見せ、社会排外主義を擁護するまでに転落した事情を究明するという課題をわれわれがとりあげる場合、どうしても避けてとおることのできない一つの事実が、ほとんど知られずにある。それはほかでもなく、カウツキーが、フランスとドイツにおける日和見主義の最も著名な代表者（フランスではミルランとジョレス、ドイツではベルンシュタイン）にたいして反対を表明するまえに、非常に大きな動揺を示したという事実である。一九〇一—一九〇二年にシュトゥットガルトで発行され、革命的・プロレタリア的な見解を固守していたマルクス主義的な『ザリャー』[28]は、カウツキーと論戦をおこない、一九〇〇年のパリ国際社会主義者大会[29]に彼が提出した中途半端な、あいまいな、日和見主義者にたいして妥協的な決議案を、「伸縮自在な(カウチューコヴィー)」決議案とよばざるをえなかった。ベルンシュタイン征伐にのりだすまえにも、カウツキーがこれにおとらず動揺したことをあからさまに示す彼のいくつかの手紙が、ドイツ語の文献には印刷されている。

しかし、それよりもはるかに大きな重要性をもっているのは、次の事情である。それは、いまマルクス主義にたい

するカウツキーの最近の裏切りの歴史を研究してみて気がつくことは、カウツキーの日和見主義者にたいする論戦そのもののなかに、彼の問題提起と問題の取扱い方のなかに、ほかならぬ国家の問題について日和見主義への一貫した傾斜があることである。

カウツキーの日和見主義反対の最初の大著、彼の著書『ベルンシュタインと社会民主党の綱領』をとってみよう。カウツキーはベルンシュタインを詳細に論駁している。しかし、次のことは特徴的である。

ベルンシュタインは、そのヘロストラトス的に有名な著書『社会主義の前提』のなかで、マルクス主義を「ブランキ主義」だと言って非難している(これは、それ以来、ロシアの日和見主義者や自由主義的ブルジョアが革命的マルクス主義の代表者ボリシェヴィキにむかって何千回となく繰りかえしてきた非難である)。そのさい、ベルンシュタインは、マルクスの『フランスにおける内乱』をとくに詳細に論じ、コミューンの教訓についてのマルクスの見地とプルードンの見地とを同一視しようと試みている、――これがまったく不首尾に終わったことは、われわれがすでに見たところであるが。ベルンシュタインの注意をとくにひいたのは、『共産党宣言』への一八七二年の序文のなかでマルクスが強調した結論、「労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま掌握して、自分自身の目的のために行使することはできない」という結論であった。

ベルンシュタインにはこの金言がひどく「気にいった」ので、彼の著書のなかでそれを、このうえなく歪曲された日和見主義的な意味に解釈しながら、三度も繰りかえしている。

マルクスがここで言おうとしたのは、われわれがすでに見たように、労働者階級は国家機構全体を粉砕し、打ち砕き、破砕(Sprengung――エンゲルスがつかった表現)しなければならない、ということである。ところが、ベルンシュタインによると、マルクスはこれらのことばで、権力を奪取するさいに過度の革命熱に駆られないように労働者階級に警告したのだということになっている。

マルクスの思想のこれ以上乱暴で、醜悪な歪曲は、考えることもできない。

さて、カウツキーは、ベルンシュタイン主義をきわめて詳細に論駁したさい、どのようにふるまったか?

彼は、この点で日和見主義がおこなったマルクス主義の歪曲を、徹底的に検討するのを避けた。彼は、マルクスの『内乱』へのエンゲルスの序文から前掲の箇所を引用して、マルクスによれば、労働者階級はできあいの国家機構をそのまま掌握することはできないが、しかしとにかくそれを

掌握することはできるのだ、と言い、それだけでおしまいにしている。ベルンシュタインが、マルクスの真意と正反対の考えをマルクスになすりつけていること、マルクスが、一八五二年以来、国家機構の「粉砕」ということをプロレタリア革命の任務としてかかげてきたこと——こうしたことについては、カウツキーは一言も述べていない。

こうして、プロレタリア革命の諸任務の問題についてのマルクス主義と日和見主義との最も重要な区別が、カウツキーではぼかされてしまう結果になっている！

カウツキーはベルンシュタインに「反対して」こう書いている。

「われわれは、プロレタリア執権（ディクタトゥーラ）の問題の解決を、まったく安んじて将来にゆだねることができる。」（ドイツ語版、一七二ページ）

これは、ベルンシュタインに反対する論戦ではなくて、本質的には、彼への譲歩であり、日和見主義への陣地の明渡しである。なぜなら、日和見主義者にとっては、プロレタリア革命の諸任務についての根本問題をすべて「まったく安んじて将来にゆだねる」以上のことは、さしあたって必要ではないからである。

マルクスとエンゲルスは、一八五二年から一八九一年まで四〇年のあいだ、国家機構を粉砕しなければならないと、プロレタリアートに教えてきた。ところが、カウツキーは、一八九九年に、日和見主義者がこの点でマルクス主義を完全に裏切ったことをまのあたりに見ながら、この機構を粉砕することが必要かどうかという問題を、粉砕の具体的な諸形態の問題にすりかえてしまい、そして具体的な形態をまえもって知ることはできないという「争う余地のない」（そして不毛な）俗物的真理の陰に逃げこむのである！！

マルクスとカウツキーとのあいだには、労働者階級に革命の準備をさせるというプロレタリア党の任務にたいする態度の点で、天と地ほどのへだたりがある。

カウツキーのその次のもっと成熟した著作で、やはり大部分日和見主義の誤りの論駁にあてられた著書をとってみよう。それは、『社会革命』という彼の小冊子である。ここでは著者は、「プロレタリア革命」と「プロレタリア政体」という問題を特別な主題としてとりあげている。著者は、きわめて貴重なものを非常に数多く提供してはいるが、ほかならぬ国家の問題を回避している。この小冊子では、いたるところで国家権力の獲得について語っているが、それだけでおしまいにしている。すなわち、国家機構の破壊なしに権力を獲得する場合をも排除しない点で、日和見主義者に譲歩をおこなった定式が選ばれている。一八七二年にマルクスが、『共産党宣言』の綱領のなかで「時代おく

れになった」ものと言明したまさにそのことが、一九〇二年にカウツキーによって復活されているのである。

この小冊子では、「社会革命の諸形態と武器」に特別の一節があてられている。そこには、政治的大衆ストライキのことも、内乱のことも、「現代の大国の権力手段である、その官僚と軍隊」のことも述べているが、コミューンがすでに労働者に教えた事柄については、一言も述べていない。明らかに、エンゲルスが、とくにドイツの社会主義者にむかって、国家の「迷信的崇拝」におちいらないように警告したのは、理由のないことではなかった。

カウツキーは、勝利したプロレタリアートは「民主主義的綱領を実現するであろう」というふうに事態を描き、その綱領の条項を説明している。ブルジョア民主主義をプロレタリア民主主義とおきかえる問題にかんして一八七一年がどういう新しいものを示したかについては、一言も述べていない。カウツキーは、次のような「もののしく」聞こえる陳腐な文句で、問題をかたづけている。

「今日の状況のもとでわれわれが支配権を獲得できないのは、自明である。革命そのもののためにも、われわれの今日の政治構造と社会構造をすでに変化させるような、長期にわたる、深刻な闘争が前提とされる。」

たしかにこれは、馬はカラスムギを食い、ヴォルガはカスピ海にそそぐといった真理と同じように「自明である」。ただ残念なことに、「深刻な」闘争という大げさな空文句を手段として、これまでの非プロレタリア的諸革命と区別してのプロレタリアートの革命の「深刻さ」は、国家との関係では、民主主義との関係では、どういう点に現われるのか、という革命的プロレタリアートにとって緊要な問題が、回避されていることである。

この問題を回避することによって、カウツキーは、口先では日和見主義にたいして戦争を宣言しながら、「革命の思想」の意義を強調したり（革命の具体的教訓を労働者に宣伝することを恐れるなら、この「思想」にどれほどの値うちがあるだろうか？）、「なによりもまず革命的理想主義を」と述べたり、あるいはまたイギリスの労働者は「今日では小ブルジョアと大差ない」ときめつけたりしながら、実際には、この最も重要な点で日和見主義に譲歩しているのである。

カウツキーはこう書いている。

「社会主義社会では、種々さまざまな企業形態、すなわち、官僚（??）企業、労働組合企業、協同組合企業、個人企業が、……並存することができる。」……「たとえば鉄道のように、官僚（??）組織なしにはやっていけない企業がある。ここでは、民主主義的組織は次のような

かたちをとることができる。すなわち、労働者が代表を選出し、それらの代表がある種の議会を構成し、そしてこの議会が就業規則をきめ、官僚機構の運営を監督する、というやり方である。別のある企業は、労働組合に運営をゆだねることができるし、さらに別の企業は、協同組合的原則にもとづいてこれを組織することができる。」（ロシア語訳、一九〇三年、ジュネーヴ版一四八ページおよび一一五ページ）

この議論はまちがっており、一八七〇年代にマルクスとエンゲルスがコミューンの教訓の実例によって説明したものにくらべて、一歩後退である。

いうところの「官僚」組織の必要という見地からすれば、鉄道は、一般に大規模機械制工業のどの企業とも、どの工場、大商店、資本主義的大農業企業とも、なんら異なるところがない。すべてそういう企業では、各人が割り当てられた仕事を遂行するさいに、きわめて厳格に規律を守り、最大の正確さを期することが、技術上無条件に必要である。さもないと、業務全体が停止したり、機械装置や製品がそこなわれるおそれがあるからである。すべてそういう企業では、もちろん、労働者が「代表を選出し、それらの代表がある種の議会を構成する」ことになろう。

だが、肝心な点は、この「ある種の議会」が、ブルジョア議会主義的機関という意味での議会ではないであろうということである。肝心な点は、この「ある種の議会」が、ブルジョア議会主義の枠のそとに出ない思想の持主であるカウツキーが想像しているように、「規則をきめ、官僚機構の運営を監督する」にとどまらないだろう、ということである。社会主義社会では、労働者代表からなる「ある種の議会」は、もちろん「規則をきめ」、「機構の運営を監督する」であろうが、しかし、その機構は「官僚」機構ではないであろう。労働者は、政治権力をたたかいとったのち、旧来の官僚機構を粉砕し、それを一物もあまさぬように根こそぎ打ち砕いて、ほかならぬ当の労働者および職員からなる新しい機構とおきかえるだろう。そして、この人たちが官僚になるのを防ぐために、マルクスとエンゲルスが詳細に考究した方策がただちにとられるであろう。すなわち、（一）選挙によるだけでなく、いつでも解任できるようにすること、（二）俸給は労働者なみの賃金をこえないようにすること、（三）すべての者が統制と監督の機能を遂行するように、すべての者が一時「官僚」になるように、したがってだれも「官僚」になれないようにすることに、ただちにとりかかること。

カウツキーは、「コミューンは、議会ふうの機関ではなくて、同時に執行し立法する行動的機関であった」という

マルクスのことばを熟考することをまったくしなかった。カウツキーには、民主主義（人民のためのそれではない）と官僚主義（人民に対抗しての）とを一つに結びつけているブルジョア議会制度と、プロレタリア民主主義――官僚主義を根絶する方策をただちにとり、官僚主義が完全に絶滅され、人民のための民主主義が完全に実施されるまで、それらの方策を徹底的に押しすすめることができるプロレタリア民主主義――との差異が、まったく理解できなかった。

カウツキーはここで、国家にたいするあの「迷信的崇拝」、官僚主義にたいするあの「迷信的信仰」をすっかりさらけだしたのだ。

日和見主義者に反対してカウツキーが書いた最後で最良の著作である小冊子『権力への道』に移ろう（この本は、わが国で反動がたけなわであった一九〇九年に出たので、ロシア語では出版されなかったようである）。この小冊子は一大前進である。なぜなら、そこでは、ベルンシュタインに反対して書かれた一八九九年の小冊子におけるように、革命的綱領一般について論じているのでもなく、また一九〇二年の小冊子『社会革命』におけるように、社会革命がいつやってくるかということとは無関係に社会革命の諸任務について論じているのでもなく、「革命の時代」がやってこようとしていることをわれわれが認めざるをえないような具体的な諸条件について論じているからである。

著者は、階級対立一般が激化していること、この点では帝国主義がとくに大きな役割を演じていることを、はっきり指摘している。西ヨーロッパにおける「一七八九―一八七一年の革命期」のあとで、一九〇五年以後、東方に同様な時期が始まっている。世界戦争が恐るべき速度で近づいている。「プロレタリアートはもはや、革命は時機尚早だ、と言うことはできない。」「われわれは革命期にはいった。」「革命の時代が始まろうとしている。」

これらの言明はまったく明瞭である。カウツキーのこの小冊子は、帝国主義戦争のまえにドイツ社会民主党がどんなに行末たのもしく思えたか、そしてこの戦争が勃発したさいに同党が（カウツキーその人をもふくめて）どれほど深く堕落したかを比較する尺度となるべきものである。この小冊子のなかで、カウツキーは、「今日の情勢は、われわれ」（すなわちドイツ社会民主党）「がややもすれば実際以上に穏健に見られるおそれをともなっている」と書いている。ところが、実際には、ドイツ社会民主党は、世間で思っていたよりもはるかに穏健で、日和見主義的だったのである！

それだけに、カウツキーがこのようにはっきりと、革命

の時代はすでに始まった、と言明しているにもかかわらず、彼自身のことばによれば、ほかならぬ「政治革命」の問題の検討にあてたというこの小冊子でも、彼がまたしても国家の問題をまったく回避していることは、ますます特徴的である。

このように問題を回避したり、沈黙を守ったり、あいまいな態度をとったりしたことが積みかさなって、日和見主義への完全な移行が不可避的に生じたのである。われわれは、じきにこの移行について語ることになる。

ドイツ社会民主党は、カウツキーの口を借りて、いわば次のように声明したのであった。私は革命的見解を堅持する（一八九九年）。私は、とりわけプロレタリアートの社会革命の不可避なことを認める（一九〇二年）。私は、新しい革命の時代がやってきたことを認める（一九〇九年）。それでも私は、国家にかんするプロレタリア革命の諸任務の問題が提起されるやいなや、マルクスがすでに一八五二年に述べたことよりも後退する（一九一二年）、と。

カウツキーとパンネクークとの論戦では、問題はまさにこのように端的に提起されたのである。

三　カウツキーとパンネクークとの論戦

パンネクークは、ローザ・ルクセンブルク、カール・ラデックその他をふくむ「左翼急進」的潮流の代表者の一人として、カウツキーに反対した。この潮流は、革命的戦術を堅持しており、カウツキーがマルクス主義と日和見主義とのあいだを無原則的に動揺する「中央派」の立場に移ろうとしていると確信していた点で、一致していた。戦争はこの見解が正しかったことを完全に立証した。この戦争のさい、「中央派」（誤ってマルクス主義的とよばれているが）または「カウツキー主義」の潮流は、そのいまわしいみじめな正体をすっかり暴露してしまったのである。

国家の問題にふれた論文『大衆行動と革命』（『ノイエ・ツァイト』、一九一二年、第三〇年、第二巻）のなかで、パンネクークは、カウツキーの立場を「受動的急進主義」、「無為待望の理論」と特徴づけた。「カウツキーは革命の過程を見ようとしない。」（六一六ページ）このように問題を提起することによって、パンネクークは、国家にかんするプロレタリア革命の諸任務という、われわれの関心をひく主題に近づいた。

彼はこう書いている。

「プロレタリアートの闘争は、たんに国家権力をめざしてブルジョアジーに反対しておこなう闘争であるだけではなく、また国家権力に反対する闘争である。……プ

ロレタリア革命の内容は、プロレタリアートの権力手段によって国家の権力手段を絶滅し駆逐（文字どおりには、解散 Auflösung）することにある。……闘争は、その最終の結果として国家組織の完全な破壊が起こったときに、はじめて停止する。多数者の組織は、少数支配者の組織を絶滅することによって、自分の優越性を証明する。」（五四八ページ）

パンネクークが自分の思想をあらわすのに用いた定式には、非常に大きな欠陥がある。だが、それでも、その思想は明瞭である。だから、カウツキーがそれをどう反駁したかは興味あることである。

彼はこう書いている。

「これまで、社会民主主義者と無政府主義者との対立は、前者が国家権力をたたかいとろうと望み、後者がそれを破壊しようと望んだところにあった。パンネクークはその双方を望んでいる。」（七二四ページ）

パンネクークの叙述が不明瞭で、具体性に欠けているとしても（彼の論文のうちの、いま検討している主題と関係のない他の諸欠陥には、ここではふれない）、カウツキーは、まさにパンネクークの指摘した原則的な核心をとりあげながら、しかもこの根本的な原則問題について、マルクス主義の立場をまったく捨てて、完全に日和見主義に移ったのである。彼にあっては、社会民主主義者と無政府主義者との差異がまったく誤った仕方で規定されていて、マルクス主義が徹底的に歪曲され、卑俗化されている。

マルクス主義者と無政府主義者との差異は次の点にある。（一）前者は、国家の完全な廃絶を目標としながらも、社会主義革命によって階級が廃絶されたのちに、国家の死滅にみちびくべき社会主義が確立される結果としてはじめて、この目標が実現可能になることを認める。後者は、この廃絶が実現可能になる諸条件を理解せずに、きょうあすにも国家を完全に廃絶することを望む。（二）前者は、プロレタリアートが、政治権力をたたかいとったのち、旧来の国家機構を完全に破壊し、それを、コミューンの型にならった、武装した労働者の組織からなる新しい国家機構とおきかえることが必要だと認める。後者は、国家機構の破壊を主張しながらも、プロレタリアートがそれをなにとおきかえるのか、彼らが革命権力をどう利用するかについては、まったく不明瞭な考えしかもっていない。無政府主義者は、革命的プロレタリアートによる国家権力の利用を、プロレタリアートの革命的執権（ディクタトゥーラ）を、否定さえする。（三）前者は、今日の国家を利用してプロレタリアートに革命の準備をさせることを要求するが、無政府主義者はそれを否認する。

この論争では、ほかならぬパンネクークが、カウツキー

に反対してマルクス主義を代表しているのである。なぜなら、プロレタリアートは、旧来の国家機構を新しい手に移すという意味で国家権力をそのままたたかいとることはできず、この機構を粉砕し、打ち砕き、それを新しい機構とおきかえなければならないということを教えたのは、ほかならぬマルクスだからである。

カウツキーは、マルクス主義を捨てて日和見主義者のもとにはしっている。なぜなら、彼にあっては、日和見主義者にとってまったくうけいれることのできない国家機構の破壊というまさにそのことが完全に姿を消しており、「たたかいとる」ことをたんなる多数者の獲得と解釈する点で、日和見主義者のために逃げ道が残されているからである。

カウツキーは、自分がマルクス主義をゆがめているのを隠すために、経典注釈学者のようにふるまって、マルクスその人からの「引用」をもちだしてくる。一八五〇年にマルクスは、「強力を最も徹底的に国家権力の手中に集中する」必要があると書いた。[20] そこで、カウツキーは勝ちほこって質問する。パンネクークは「中央集権制」を破壊したいのではないのか、と。

これは、まったくのぺてんであって、ちょうどベルンシュタインが、中央集権制を連邦制とおきかえるべきだという意見をもっている点で、マルクス主義とプルードン主義は同じだ、と言ったのに類するものである。

カウツキーがもちだした「引用」は、全然おかど違いである。中央集権制は、旧来の国家機構のもとでも、新しい国家機構のもとでも、ともに可能である。労働者が自分の武装力を自発的に統合するならば、それは中央集権制であろう。しかし、この中央集権制は、中央集権的国家機構、常備軍、警察、官僚の「完全な破壊」に基礎をおいたものであろう。カウツキーが、コミューンについてのマルクスとエンゲルスの天下周知の考察を避けて、問題に関係のない引用をもちだしているのは、まったくぺてん師的なふるまいである。

カウツキーはつづけて言う。

「……もしかすると、パンネクークは、官吏の国家的諸機能を廃止したいのであろうか？　しかし、われわれは、国家行政はさておき、党でも、労働組合でも、役員なしにはやっていけない。われわれの綱領が要求しているのも、国家官吏の廃止ではなく、人民による官吏の選挙である。……われわれの現在の討論で問題になっているのは、『将来の国家』では行政機構がどんな形態をとるかということではなく、われわれが国家権力をたたかいとる以前に（傍点はカウツキーのもの）、われわれの政治闘争が国家権力を廃絶する（文字どおりには、解散

する auflöst) かどうか、ということである。どの省をその所属官吏もろとも廃止できるであろうか?」文部省、司法省、大蔵省、軍事省と数えあげて、「いや、現存の省のどれひとつとして、政府にたいするわれわれの政治闘争によって排除されはしないであろう。……誤解を避けるために繰りかえして言っておくが、ここで問題とされているのは、勝利した社会民主党が『将来の国家』にどんな形態をあたえるかということではなく、われわれの反政府運動が今日の国家をどう変えるかということなのである。」(七二五ページ)

これは見えすいたごまかしだ。パンネクークは、まさに革命の問題を提起したのである。そのことは、彼の論文の表題にも、前掲の引用箇所にも、はっきり言われている。「反政府運動」の問題にとびうつることによって、カウツキーは、まさに革命的見地を日和見主義的見地とすりかえている。彼によると、こういうことになる。いまは反政府運動をやる、権力をたたかいとったのちのことは、そうなったときの話だ、と。革命は消えてなくなる! これこそ、まさに日和見主義者に必要なことだったのである。

ここで問題とされているのは、反政府運動のことでもなければ、政治闘争一般のことでもなくて、まさに革命のことなのである。革命は、プロレタリアートが「行政機構」と国家機構全体とを破壊して、それを武装した労働者からなる新しい機構とおきかえることにある。カウツキーは、「省」にたいする「迷信的崇拝」をさらけだしている。だが、それらの省を、たとえば完全な全能権力をもつ労働者・兵士代表ソヴェト付属の専門家委員会とおきかえることが、なぜできないのか?

問題の核心は、「省」が残るか、「専門家委員会」ないしその他なんらかの機関がつくられるか、という点にあるのではけっしてない。これはまったく些細な事柄である。問題の核心は、旧来の国家機構(何千本もの糸でブルジョアジーと結びついており、骨の髄まで因習と惰性がしみこんだ)が維持されるか、それとも、それが破壊されて、新しい国家機構とおきかえられるか、という点にある。革命は、新しい階級が旧来の国家機構の助けをかりて命令し統治することではなく、新しい階級がこの国家機構を粉砕し、新しい国家機構の助けをかりて命令し統治することでなければならない――このマルクス主義の根本思想を、カウツキーはあいまいにしている。でなければ、彼はこのことを全然理解しなかったのである。

官吏についての彼の質問は、彼がコミューンの教訓とマルクスの学説とを理解しなかったことを、明瞭に示している。「われわれは、党でも、労働組合でも、役員なしには

やっていけない……」と。

資本主義のもとでは、ブルジョアジーの支配のもとでは、われわれは、官吏なしにはやっていけない。プロレタリアートは抑圧されており、勤労大衆は資本主義によって奴隷化されている。資本主義のもとでは、民主主義は、賃金奴隷制、大衆の窮乏と貧困という環境全体によってせばめられ、締めつけられ、制限され、不具にされている。われわれの政治組織や労働組合組織の役員が、資本主義の環境によって堕落させられて（もっと正確にいえば、堕落させられる傾向をもっていて）、官僚、すなわち大衆から遊離して大衆のうえに立つ特権的な人間に転化する傾向を示しているのは、このためであり、ただただこのためである。

この点に官僚主義の核心がある。資本家が収奪されず、ブルジョアジーが打倒されないかぎり、プロレタリアの役員でさえ、ある程度「官僚化」することは避けられない。

カウツキーによると、こういうことになる。選挙による公務員が残っているかぎり、社会主義のもとでも官吏が残り、官僚制度が残ると！　これこそ、誤りである。マルクスがまさにコミューンの実例によって明示したように、社会主義のもとでは、公務員は「官僚」、「官吏」ではなくなる、すなわち、選挙制にくわえて、さらに随時の解任制が実施されるにつれ、さらにまた給料が労働者の平均水準に引き下げられるにつれ、さらにまた議会ふうの機関が「同時に執行し立法する行動的機関」とおきかえられるにつれて、「官僚」、「官吏」ではなくなる。

パンネクークに反対してのカウツキーの論証全体、とくに、労働組合組織も、党組織も、役員なしにはやっていけない、というすばらしい論拠は、実質上、カウツキーがマルクス主義一般に反対するベルンシュタインの古い「論拠」をむしかえしていることを示している。ベルンシュタインは、その背教の書『社会主義の前提』で、「原始的」民主主義の思想に反対し、彼のいわゆる「空論的民主主義」、すなわち拘束委任、無報酬の公務員、権能のない中央代表機関等を攻撃している。ベルンシュタインは、この「原始的」民主主義がなりたちえないことの証明として、ウェッブ夫妻の解釈によるイギリス労働組合の経験（二）を引合いにだしている。いわば「完全な自由」（ドイツ語版、一三七ページ）のもとで発展していったイギリス労働組合は、七〇年にわたるその発展のあいだにまさに原始的民主主義が役に立たないことを納得して、それを普通の民主主義、すなわち官僚主義と結合された議会主義ととりかえた、と言うのである。

実際には、労働組合は、「完全な自由のもとで」発展したのではなく、完全な資本主義的奴隷制のもとで発展した

のである。この奴隷制のもとでは、ひろくはびこっている悪弊や暴力や虚偽に、「高級」統治の業務から貧乏人を排除するやり方に幾多の譲歩をせずには「やっていけない」ことは、いうまでもない。社会主義のもとでは、「原始的」民主主義のうちの多くのものが、かならずよみがえってくるであろう。なぜなら、文明社会の歴史上はじめて、住民大衆が、投票や選挙だけでなく、日常の統治にも自主的に参加するまでに高まってゆくだろうからである。社会主義のもとでは、すべての者が順番に統治するであろう。そして、だれも統治しない状態に急速に慣れてゆくであろう。

天才的な批判的・分析的頭脳をもっていたマルクスは、コミューンの実践的諸方策のうちに一つの急転換を見たが、日和見主義者は、臆病なため、ブルジョアジーと決定的に手を切ることを望まないために、まさにその急転換を恐れ、それを認めようとせず、また、無政府主義者は、あるいは性急さから、あるいは一般に大規模な社会的転化が起こるための諸条件を理解しないために、この急転換を見ようとしない。「旧来の国家機構の破壊など考えるべきではない。いったい省や官吏なしにどうしてやっていけよう。」――骨の髄まで俗物根性がしみこんでいて、実質上、革命や革命の創造力を信じないばかりか、革命を死ぬほど恐れている（わが国のメンシェヴィキやエス・エルのように）日和見主義者は、こう論じる。

「旧来の国家機構の破壊だけを考えればよい。これまでのプロレタリア革命の具体的な教訓を探究したり、破壊されるものを、なにと、どのようにおきかえるべきかを分析したりするにはおよばない」――無政府主義者は、こう論じる（これは、もちろん、無政府主義者のなかの最良の分子のことで、クロポトキン氏一派にくっついて、ブルジョアジーのあとをとことこ追っているような連中のことではない）。だから、無政府主義者の戦術は、すてばちの戦術となるのであって、具体的な任務の解決のための、容赦なく大胆な、それと同時に大衆の運動の実践的諸条件を考慮にいれた革命的活動とはならないのである。

マルクスは、このどちらの誤りをも避けるようにわれわれに教えており、旧来の国家機構全体を破壊するにあたってはどこまでも大胆であるように教えると同時に、問題を具体的に提起することを教えている。すなわち、コミューンは、民主主義を拡大し官僚主義を根絶するための前記の諸方策を実施することによって、数週間で、新しいプロレタリア的国家機構の建設をこれこれの仕方で始めることができた。われわれは、コミューン戦士からその革命的大胆さを学び、彼らの実践的方策のうちに、実践的に緊要で、ただちに実行可能な諸方策の概略を見いだそう。そうすれ

ば、この道をすすむことによって、われわれは官僚主義を完全に破壊するところまでゆきつくであろう、と。

このような破壊の可能性は、社会主義が労働日を短縮し、大衆を新しい生活に高め、住民の多数者を、例外なくすべての者が「国家的機能」を遂行できるような条件のもとにおくことによって保障されるが、このことは、あらゆる国家一般の完全な死滅にみちびいてゆく。

カウツキーはつづけて言う。

「……大衆的ストライキの任務は、けっして、国家権力を破壊することではありえず、なんらか特定の問題で政府に譲歩させるか、あるいは、プロレタリアートに敵意をいだく政府を、プロレタリアートに歩みよる（entgegenkommende）政府と交替させることでしかありえない。……しかし、このこと」（すなわち、敵意をいだく政府にたいするプロレタリアートの勝利）「は、けっして、どんな場合にも、国家権力の破壊をもたらすものではありえず、つねに国家権力の内部での力関係のある変動（Verschiebung）をもたらしうるだけである。……この場合、われわれの政治闘争の目標は、これまでと同じである。すなわち、議会内で多数者を獲得することによって国家権力をたたかいとることであり、議会を政府の主人に高めることである。」（七二六、七二七、七三二ページ）

これは、生粋の、卑俗きわまる日和見主義であり、口先で革命を承認しながら、実際にはそれを否認することである。カウツキーの思想は、「プロレタリアートに歩みよる政府」から一歩も出ていない。――これは、『共産党宣言』が「プロレタリアートを支配階級として組織すること」を宣言した一八四七年にくらべて、俗物根性への一歩後退である。

カウツキーは、シャイデマン、プレハーノフ、ヴァンデルヴェルデらと、彼のお好きな「統一」を実現しなければなるまい。この連中はみな、「プロレタリアートに歩みよる」政府をめざしてたたかうことに同意しているからである。

だが、われわれは、社会主義のこれらの裏切者と手を切り、武装したプロレタリアート自身が政府となるように、旧来の国家機構全体の破壊をめざしてたたかうであろう。これは「二つの非常に違った事柄である」。

カウツキーは、レギーン、ダーヴィット、プレハーノフ、ポトレソフ、ツェレテーリ、チェルノーフらの気持のよい仲間にくわわらなければなるまい。この連中は、「国家権力の内部での力関係の変動」をもたらすため、「議会内での多数者の獲得」のため、「また政府にたいする議会の全能権力のために」たたかうことに、完全に同意しているか

らである。——これはきわめて気高い目標であって、これならば、万事日和見主義者にも受けいれることができ、万事ブルジョア議会主義共和制の枠内にとどまるのである。

だが、われわれは日和見主義者と手を切るであろう。そして、自覚した全プロレタリアートは、「力関係の変動」をもたらすための闘争ではなく、ブルジョアジー打倒のため、ブルジョア議会制度の破壊のため、コミューン型の民主的共和制あるいは労働者・兵士代表ソヴェトの共和制のため、プロレタリアートの革命的執権のために、われわれとともにたたかうであろう。

＊＊＊

国際社会主義の内部でカウツキーよりも右に位置を占めるのは、ドイツの『社会主義月刊』[23]の一派（レギーン、ダーヴィット、コルプその他大勢、これにはスカンディナヴィア人のスタウニングとブランティングもふくまれる）、フランスとベルギーのジョレス派とヴァンデルヴェルデ、イタリア社会党のトゥラーティ、トレーヴェスその他の右翼の代表者、イギリスのフェビアン派と「独立派」（「独立労働党」[24]——実際には、つねに自由党に従属してきた）のような潮流、等々である。議会活動と党の論壇できわめて大きな役割、非常にしばしば指導的な役割を演じていることれらの諸君はみな、プロレタリアートの執権をまっこうから否認し、あからさまな日和見主義を主張している。これらの諸君にとっては、プロレタリアートの「執権」は民主主義と「矛盾する」!! 実質上、彼らと小ブルジョア民主主義者とのあいだには、なにもない。

こういう事情を考慮すれば、われわれは、第二インタナショナルの公式の代表者の圧倒的多数は完全に日和見主義に転落した、という結論をくだしてさしつかえない。コミューンの経験は、忘れさられたばかりか、ゆがめられてしまった。労働者大衆が行動に立ちあがって、旧来の国家機構を粉砕し、それを新しい機構とおきかえ、こうして自分たちの政治的支配を社会の社会主義的改造の土台としなければならない時が近づいていることを、労働者大衆にさとらせようとしなかったばかりではない。——大衆にそれと逆のことを教えこみ、日和見主義にたいして何千という逃げ道を残すような仕方で、「権力の獲得」を説明してきたのである。

帝国主義的競争の結果として強化した軍事機構をもつ諸国家が軍事的怪物となって、イギリスかドイツか、イギリスの金融資本かドイツの金融資本か、そのどちらが世界を支配するかという争いを解決するために、幾百千万の人間を皆殺しにしているときに、国家にたいするプロレタリア

革命の関係の問題を歪曲し黙殺したことは、大きな役割を果たさずにはおかなかった。(六四)

第一版へのあとがき

この小冊子は、一九一七年の八月と九月に書いたものである。次の第七章『一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験』のプランを、私はすでにつくってあった。しかし、私は、表題以外には、この章の一行も書けなかった。政治的危機によって、一九一七年の十月革命の前夜によって、「妨害された」のである。このような「妨害」は、喜ぶよりほかはない。しかし、この小冊子の第二分冊(『一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験』にあてられるもの)の発行は、おそらく長いあいだ延期しなければならないであろう。「革命の経験」を味わうことは、それについて書くよりも愉快であり、有益である。

著　者

ペトログラード
一九一七年一一月三〇日

一九一七年八―九月に執筆
一九一八年に単行の小冊子として「ジーズニ・イ・ズナーニエ」出版所から発行
全集、第五版、第三三巻、一―一二〇ページ所収
邦訳全集、第二五巻、四一一―五三三ページ所収

革命の任務

ロシアは小ブルジョア的な国である。住民の大多数者はこの階級に属している。彼らがブルジョアジーとプロレタリアートのあいだを動揺するのは、避けられない。彼らがプロレタリアートに味方するときにはじめて、革命の大業、平和と自由の大業、働く者が土地を受け取るという大業の勝利が、たやすく、平和に、急速に、おだやかに保障されるのである。

わが革命の経過は、われわれにこの動揺を実地に示している。だから、われわれは、エス・エルとメンシェヴィキの諸党について幻想をいだかないようにしよう。自分の階級的、プロレタリア的な道にしっかりと立とう。貧農の窮乏、戦争の惨禍、飢えの惨禍、――すべてこれらは、プロレタリア的な道が正しいこと、プロレタリア革命を支持しなければならないことを、大衆にますます明瞭に示している。

ブルジョアジーとの「連立」や、ブルジョアジーとの協調についての、また「まもなく」憲法制定議会がひらかれるまで「おだやかに」待つことが可能であること等々についての小ブルジョアの「平和的な」期待は、みな革命の経過によって容赦なく、無残に、無慈悲に粉砕されつつある。コルニーロフ反乱[注]は最後のきびしい教訓であった。幾千幾万の小さな教訓、各地で資本家や地主が労働者や農民をだましていることについての教訓、将校が兵士をだましていることについての教訓、等々を補う、大がかりな教訓であった。

軍隊、農民、労働者のあいだに、不満、激昂、憤怒が高まっている。なんでも約束するがなにも実行しないエス・エルおよびメンシェヴィキとブルジョアジーとの「連立」は、大衆をいらだたせ、彼らの目をひらき、彼らを蜂起に駆りたてている。

エス・エルのあいだでも（スピリドーノヴァ、その他）、メンシェヴィキのあいだでも（マルトフ、その他）、左翼反対派が増大しており、この両党の「評議会」と「大会」ではすでに四〇%を占めるまでになった。また、下部では、プロレタリアートと農民、とくに貧農のあいだでは、エス・エルとメンシェヴィキの多数者が「左派」である。

コルニーロフ反乱は人々を教育している。コルニーロフ反乱はたくさんのことを教えた。

いまやソヴェトは、エス・エルやメンシェヴィキの指導者をこえてすすみ、こうして革命の平和的発展を保障することができるだろうか、それとも、またもや足踏みをつづけ、こうしてプロレタリアの蜂起を避けられないものとするだろうか、それは知るべくもない。

それは知るべくもない。

われわれの仕事は、革命の平和的発展の「最後の」機会を確保するためにできるだけのことがなされるよう、助けることである。わが党の綱領を説明し、この綱領が全人民的なものであり、住民の大多数者の利益と要求に無条件に合致していることをわからせるという手段で、助けることである。

以下の文章は、まさにそういう綱領を説明する試みである。

この綱領を、もっと「下層」へ、大衆のところへ、職員、労働者、農民のところへ、われわれの仲間のところだけではなく、とくにエス・エル系の人々、無所属の人々、無自覚な人々のところへもちこもう。彼らが自主的に判断し、自分で決議をおこない、〔民主主義〕会議(六六)やソヴェトや政府に自分の代表を送るよう、彼らを立ちあがらせることにつとめよう。そうすれば、会議がどういう結末になっても、われわれの活動はむだにはならないであろう。そうすれば、われわれの活動は、会議のためにも、憲法制定議会の選挙のためにも、一般にあらゆる政治活動のためにも、役だつであろう。

生活は、ボリシェヴィキの綱領と戦術が正しいことを教えている。四月二〇日(六七)からコルニーロフ反乱まで――「いかにも短い期間なのに、なんと多くのことを見聞きしたことか」。

この期間に大衆の経験、被抑圧諸階級の経験は、彼らにきわめて多くのことを教えたし、エス・エルとメンシェヴィキの指導者は完全に大衆から遊離してしまった。このことは、まさにきわめて具体的な綱領にもとづいてこそ――われわれがこの綱領を大衆のあいだで討議させることさえできれば――、最も確実に示されるであろう。

資本家との協調の有害なこと

一　たとえ少数でもブルジョアジーの代表者を権力の座に残しておくこと、将軍アレクセーエフ、クレンボフスキー、バグラチオーン、ガガーリン、その他のようなあからさまなコルニーロフ派や、ケーレンスキーのような、ブルジョアジーにたいしては完全に無力なうえ、ボナパルティ

ストふうの行動をとるおそれがあることを実証した人間を権力の座に残しておくことは、一方では、飢えと、資本家がわざと促進し悪化させている避けられない経済的破局とに扉をあけはなし、他方では、軍事的破局に扉をあけはなすことを意味する。というのは、軍隊は司令部をにくんでいて、熱情をもって帝国主義戦争に参加することはできないからである。そればかりか、コルニーロフ派の将軍や将校がひきつづき権力の座にとどまるなら、彼らはきっと、ガリチアとリガで実際に起こったように、わざと戦線をドイツ軍に明けわたすであろう。それを阻止するためには、このあとに述べてある新しい原則にもとづいて新しい政府をつくるほかはない。四月二〇日以来あれだけのことを経験しながら、エス・エルやメンシェヴィキが、どんなものであれ、ブルジョアジーとの協調をなおもつづけるということは、誤りであるばかりか、人民と革命とにたいする直接の裏切りであろう。

権力をソヴェトへ

二　国家の全権力は、一定の綱領にもとづいて、完全に労働者・兵士・農民代表ソヴェトの代表者の手に移らなければならず、当局者はソヴェトにたいして完全に責任を負わなければならない。きわめて内容に富んでいた革命のこの数週間に人民がえた全経験を考慮に入れるためにも、またここかしこでまだ訂正されずにあるはなはだしい不公正（選挙が比例代表制でないこと、不平等選挙、その他）をとりのぞくためにも、ソヴェトの改選をただちにおこなわなければならない。

民主的に選挙された機関がまだ存在しない地区や、軍隊内では、全権力は、地方ソヴェトと、このソヴェトによって選ばれた委員その他の機関——ただし、かならず選挙による機関——に、完全に移らなければならない。

労働者と革命的部隊——すなわち、コルニーロフ派を鎮圧する能力をもっていることを実際に証明した部隊——の武装を、国家の完全な支持のもとに、無条件に、いたるところでおこなわなければならない。

諸国民に平和を

三　ソヴェト政府は、すべての交戦国民にたいして（すなわち、それらの国の政府と労働者・農民大衆とにたいして同時に）、民主主義的な条件による全般的講和の即時締結と、さらに休戦協定（たとえ三ヵ月でもよい）の即時締結を、ただちに申し入れなければならない。

民主主義的講和の主要な条件は、併合（略奪）の放棄である。——これは、すべての大国がその失地を回復すると

いう、まちがった意味で言っているのではなく、ヨーロッパにおいてであろうと、植民地においてであろうと、一つの例外もなくあらゆる民族が、分離した国家をつくるか、あるいは他のある国家の構成にくわわるかを、自分で決定する自由と可能性を手に入れるという、ただ一つ正しい意味で言っているのである。

ソヴェト政府は、講和条件を提案するとともに、実際にみずからそれらの条件を実行することにすぐにとりかからなければならない。すなわち、今日にいたるまでわれわれを拘束している秘密条約、ツァーリが締結してロシアの資本家にトルコ、オーストリアその他の略奪を約束している秘密条約を公表し、廃棄しなければならない。そのあとで、ウクライナ人やフィン人の求めている条件をただちにみたしてやり、彼らや、さらにロシア国内のすべての異種族にたいして、分離の自由までもふくむ完全な自由を保障し、これと同じことをアルメニア全土にも適用し、アルメニアやわれわれの占領したトルコ領、その他からの撤退を誓約することが、われわれの義務である。

このような講和条件は、資本家からは好意をもってむかえられないだろう。しかし、それは、すべての国の人民のあいだできわめて大きな共感をもってむかえられ、きわめて大きな、世界史的な熱情の爆発をよびおこし、略奪戦争が長びいていることにたいして全般的な激昂を引きおこすであろうから、われわれは、十中八九まで、すぐさま休戦を獲得し、講和交渉の開始に同意させることができるであろう。なぜなら、戦争に反対する労働者革命が、いたるところでおさえがたく成長しているからである。そして、講和についての空文句(わがケーレンスキー政府をふくむすべての帝国主義政府は、ずっとまえからそういう空文句で労働者や農民をだましてきた)ではなく、資本家と手を切り、講和を申し入れることだけが、この革命を前進させることができる。

もし、最もありそうもない場合が実際におきるとすれば、つまり、一つの交戦国も休戦にさえ応じないとすれば、そのときには、戦争は、われわれについては、真にやむをえない、真に正当な防衛戦争となるであろう。プロレタリアートと貧農がこのことを意識するだけで——そのときには、われわれについてみて戦争が、口先ではなく実際に、すべての国の被抑圧階級と同盟しての戦争、全世界の被抑圧国民と同盟しての戦争となることは別にしても——、ロシアは軍事的にも何倍も強力になるであろう。ことに、人民を略奪している資本家と完全に手を切ったあとではなおさらそうである。

資本家の次のような主張を信じないよう、とくに人民に

警告しておかなければならない。これは、いちばんおびえている人々や俗物たちがしばしばまにうけているものなのだが、こういうのである。われわれとイギリスその他の資本家とのあいだの現在の略奪同盟を破棄すると、彼らがロシア革命に重大な損害をくわえるおそれがある、と。この主張は徹頭徹尾うそである。なぜなら、「連合国の財政的支持」は、銀行家を富ませはするが、ロシアの労働者と農民をそれが「ささえている」仕方は、縄が縛り首になった人間をささえる仕方と変わらないからである。ロシアには穀物、石炭、石油、鉄は十分にあるし、これらの物資を正しく分配するには、人民を略奪している地主や資本家を厄介ばらいしさえすればよいのである。ロシアの人民が、彼らの現在の同盟国から軍事的脅威をこうむるおそれがあるという点についていえば、フランス人やイタリア人が、自分の軍隊をドイツ軍と統合して、公正な講和を申し入れたロシアに向かって進撃させることがありうるなどという想定は、明らかにばかげている。またイギリスやアメリカや日本がロシアに宣戦を布告したとしても(そういうことは、そういう戦争が大衆のあいだでひどく不人気だという理由からも、またアジアの分割、とくに中国の略奪をめぐってこれらの国々の資本家の物質的利害が一致しないという理由からも、彼らにとってきわめて困難なことだが)、ドイツ、オーストリア、トルコとの戦争がひきおこしつつある損害や惨禍の一〇〇分の一もロシアにもたらすことはまずないであろう。

土地を働くものへ

四　ソヴェト政府は、地主所有地の私有を無償で廃止することをただちに宣言して、憲法制定議会の決定があるまで、この土地を農民委員会の管理に移さなければならない。地主の農具や家畜も、ぜひともまず第一に貧農に無料で利用させることを条件として、同じ農民委員会の管理に移さなければならない。

これらの方策は、すでにずっとまえから、農民の圧倒的多数が農民大会の決議や地方からの幾百の委託書(とりわけ『農民代表ソヴェト通報』にのった二四二通の委託書の総括表からわかるように)のなかで要求してきたもので、文句なしに、緊急に必要なものである。農民は「連立」内閣の時期に引き延ばしのためさんざん苦しめられてきたのだから、これ以上引き延ばすことはいっさい許されない。

これらの方策の実行を遅らせるような政府はすべて、人民に敵対する政府と認めるべきであり、労働者と農民の蜂起によって打ち倒し、押しつぶしてしかるべきである。その反対に、これらの方策を実現した政府だけが、全人民の

政府であるだろう。

飢えと荒廃とにたいする闘争

五　ソヴェト政府は、全国的規模で生産と消費にたいする労働者統制をただちに[69]実施しなければならない。そうしなければ、五月六日以来の経験がすでに示しているように、改革の約束や、改革の試みはすべて無力であり、飢えと未曽有の破局が週一週と全国をおびやかすであろう。

銀行と保険事業、さらに最も重要な産業部門（石油、石炭、冶金、砂糖、その他）をただちに国有化し、それとともに、営業の秘密を無条件に廃止し、また国家への物品納入で儲けながら、報告の提出や、自分たちの利潤と財産にたいする公正な課税を回避するような、ごく少数の資本家にたいする、労働者と農民のたゆみない監督を実施する必要がある。

これらの方策は、中農からもカザックからも小手工業者からも、一コペイカの財産も取りあげるものではないが、戦争の重荷を平等に負担させるうえで無条件に公正なものであり、飢えとたたかうために猶予ならないものである。資本家の略奪を抑制し、彼らが故意に生産を停止するのをやめさせるときにはじめて、労働生産性を向上させ、全般的労働義務を実施し、穀物と工業製品との正しい交換を打ち立て、金持が隠匿している幾十億の紙幣を国庫に回収することができるであろう。

このような方策をとらなければ、地主所有地の私有の無償廃止も不可能である。なぜなら、地主所有地は大部分銀行に抵当にはいっており、地主の利益と資本家の利益は切りはなせないように絡みあっているからである。

労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア中央執行委員会経済部の最近の決議（『ラボーチャヤ・ガゼータ』[70]第一五二号）は、政府のとった諸方策（地主や富農(クラーク)を富ませるための穀物価格の引き上げのような）が「破滅的」なものであることや、「政府のもとにつくられた経済生活規制のための中央諸機関の完全な無為の事実」を認めているばかりか、この政府が「法律に違反している」ことをさえ認めているのである。支配政党であるエス・エルとメンシェヴィキの諸党のこの告白は、ブルジョアジーとの協調政策がまったく犯罪的であることを、いま一度示している。

地主・資本家の反革命との闘争

六　コルニーロフとカレーヂンの反乱は、カデット党（「人民の自由」党）を先頭とする地主と資本家の階級全体の支持をうけた。[71]このことは、中央執行委員会の『イズヴェスチヤ』に発表された諸事実によって、すでに十分に証

明されている。
だが、この反革命を完全に鎮圧するために、それどころかそれを調査するためにさえ、なにひとつなされていない。それに、権力をソヴェトに移さずには、真剣なことはなにもやれはしないのである。どんな委員会も、国家権力をもたないなら、十分な調査をしたり、犯人を逮捕したり、等等することはできない。ソヴェト政府だけがそれをやることができるし、またやらなければならない。ソヴェト政府だけが、コルニーロフ派の将軍たちやブルジョア反革命の首魁ども（グチコーフ、ミリュコーフ、リャブシンスキー、マクラコーフの一派）を逮捕し、反革命団体（国会、将校連盟、その他）を解散し、それらの団体のメンバーを各地のソヴェトの監視のもとにおき、反革命的部隊を解体して、ロシアで「コルニーロフ」反乱が不可避的に繰りかえされないように防止することができるのである。
ソヴェト政府だけが、コルニーロフ派の事件や、さらにブルジョアジーによって告発されたものさえふくめて、その他すべての事件を十分に、公開で調査するための委員会をつくることができる。そして、ボリシェヴィキ党は、そのような委員会にたいしてだけ完全に服従し協力するよう、労働者に呼びかけるであろう。
ソヴェト政府だけが、資本家が人民からかすめとった幾百万の金を使って巨大な印刷所や大多数の新聞をその手におさめているというような、目にあまる不正と首尾よくたたかうことができるであろう。ブルジョア的な反革命新聞（『レーチ』[三]、『ルースコエ・スローヴォ』[三]、その他）を禁止し、その印刷所を没収し、私的な新聞広告を国家の独占事業とすることを宣言し、ソヴェトによって発行され農民に真実を語る政府新聞に広告を移すことが必要である。そうしてのみ、罰もうけずにうそや中傷をながすため、人民をあざむき、農民をまどわし、反革命を準備するためのこの強力な道具を、ブルジョアジーの手からたたきおとすことができるし、またたたきおとさなければならない。

革命の平和的発展

七　げんざい、ロシアの民主主義派のまえには、ソヴェトのまえには、エス・エルとメンシェヴィキの諸党のまえには、革命の歴史上きわめて稀にしか見られない可能性、すなわち、憲法制定議会がまたもや延期されずに所定の期日に招集されるように保障する可能性、軍事的および経済的破局の危険から国を救う可能性、革命の平和的発展を保障する可能性がひらけている。[三]
もしソヴェトが、以上に述べた綱領を実行するために、いま国家権力を完全に、独占的にその手ににぎるなら、ロ

シアの住民の一〇人中九人までの、すなわち労働者階級と圧倒的多数の農民の支持が、ソヴェトにたいして保障されるだけではない。さらに、軍隊と人民の多数者の最大の革命的熱情が、それなしには飢えと戦争に打ちかつことのできないあの熱情が、ソヴェトにたいして保障されるのである。

ソヴェト自身が動揺しないかぎり、ソヴェトに反抗することは、いまでは問題にならないであろう。ソヴェトにたいしてあえて反乱をおこすような階級は、一つもないであろう。また、コルニーロフ反乱の経験に教えられた地主と資本家は、ソヴェトから最後通牒的な要求を突きつけられるなら、平和的に権力を譲りわたすであろう。ソヴェトの綱領にたいする資本家の反抗を克服するには、労働者と農民が搾取者を監督し、服従を拒む者には、その全財産の没収と、くわえるに短期間の拘禁というような処罰の措置をとるだけで十分であろう。

もし全権力をにぎったなら、ソヴェトは、いまでもまだ——おそらく、これが最後の機会であろう——革命の平和的発展を保障することができるであろう。すなわち、人民が自分の代表を平和的に選挙し、ソヴェト内で諸党が平和的にたたかい、さまざまな党の綱領を実地にためし、権力を一つの党の手から他の党の手へ平和的に移すように、保障することができるであろう。

この機会をのがせば、そのときには、ブルジョアジーとプロレタリアートとの最も鋭い内乱が避けられないことは、四月二〇日の運動からコルニーロフ反乱までの革命の発展の全経過が示している。避けがたい破局はこの戦いをますます近づけるであろう。人間の頭で理解できるあらゆる資料や考察が示すところによれば、労働者階級が完全に勝利し、貧農の支持をうけて、以上に述べた綱領を実現することが、この戦いの結果でなければならない。しかし、その戦いはきわめて苦しい、流血の戦いとなり、地主や資本家や彼らに共鳴する将校の幾万人もの命を失わせる可能性がある。プロレタリアートは、革命を救うためにはどのような犠牲にもためらわないだろう。そして、以上に述べた綱領によらないでは、革命を救うことは不可能である。だが、もしソヴェトが革命の平和的発展の最後の機会を利用するならば、プロレタリアートはあらゆる方法でソヴェトを支持するであろう。

一九一七年一〇月九日と一〇日（九月二六日と二七日）に、新聞『ラボーチー・プーチ』第二〇号と第二一号に発表
署名——エヌ・カ

全集、第五版、第三四巻、二二九—二三八ページ所収
邦訳全集、第二六巻、四八—五八ページ所収

マルクス主義と蜂起(三)

ロシア社会民主労働党(ボ)中央委員会への手紙

支配的な「社会主義」諸党によるマルクス主義の歪曲のうちでも、最も悪意にみちた、おそらく最もひろまっている歪曲の一つは、蜂起を準備すること、一般に蜂起を技術として取り扱うことが「ブランキ主義」であるかのように言う日和見主義的なうそである。

すでに日和見主義の首領ベルンシュタインが、マルクス主義をブランキ主義だと非難して悪評を買ったが、今日の日和見主義者がブランキ主義についてわめきたてているのは、本質的に言って、ベルンシュタインの貧弱な「思想」を毛筋一本新鮮にしたわけではなく、「ゆたかにした」わけでもない。

蜂起を技術として取り扱うからといって、マルクス主義者をブランキ主義だと非難するとは! これ以上にひどい真実の歪曲がいったいあるだろうか? マルクスこそ、まさに蜂起を技術とよび、蜂起を技術として取り扱わなければならないと言い、まず最初の成功をかちとり、敵にたいする攻勢を中断せずに、敵の狼狽に乗じて、つぎつぎに成功をおさめながらすすまなければならない、等々と言って、この問題についてこのうえなく明確に、正確に、争う余地のないかたちで意見を述べた人(三)であることは、マルクス主義者ならだれひとり否認する者はいないだろうに。

蜂起が成功をおさめるためには、それは、陰謀や政党に依拠するのではなくて、先進的階級に依拠しなければならない。これが第一である。蜂起は、人民の革命的高揚に依拠しなければならない。これが第二である。蜂起は、高まってくる革命の歴史のうちで、人民の前衛の活動性が最大に達し、敵の隊列と、さらに弱腰で、中途はんぱで、不決断な革命の味方の隊列のうちの動揺が最も強まった、そういう転換点に依拠しなければならない。これが第三である。まさに蜂起の問題を提起するためのこの三つの条件の点で、マルクス主義はブランキ主義と区別されるのである。

しかし、いったんこれらの条件がそなわったときに、蜂起を技術として取り扱うことを拒むのは、マルクス主義を裏切り、革命を裏切ることである。

なぜ、まさに現在の時点を、客観的諸事件の経過が蜂起を日程にのぼせたことを党がぜひとも承認して蜂起を技術として取り扱わなければならない、そういう時点だと認めるべきなのか、――このことを証明するには、比較の方法をもちい、七月三―四日と九月とを対比することが、おそらく最もよいであろう。[2]

七月三―四日には、次のように問題を提起したとしても、真実に反することにはならなかった。権力を掌握するほうが正しいのではあるまいか、そうしないでも、どっちみち敵はわれわれに蜂起の罪を問い、われわれに蜂起者として制裁をくわえるだろうから、と。けれども、その当時には、このことから、権力を掌握するほうがよいという結論を引きだすことはできなかった。なぜなら、その当時には、蜂起が勝利ずる客観的諸条件がなかったからである。

(一) 革命の前衛である階級が、まだわれわれのあとについていなかった。

われわれはまだ、両首都の労働者と兵士のあいだで多数派となっていなかった。いまでは、両首都のソヴェト内でわれわれは多数派である。この多数派は、七月と八月の歴史によってはじめて、ボリシェヴィキにたいする「制裁」の経験とコルニーロフ反乱の経験によってはじめて、つくりだされたのである。

(二) その当時には、全人民的な革命的高揚がなかった。コルニーロフ反乱を経たいまでは、そういう高揚がある。地方が、多くの地点でソヴェトが権力を掌握したことが、そのことを証明している。

(三) その当時には、われわれの敵のあいだにも、中途はんぱな小ブルジョアジーのあいだにも政治全体にかかわる規模の重大な動揺はなかった。いまでは、動揺は非常に大きなものになっている。われわれの主要な敵である連合国および世界の帝国主義――というのは、「連合国」が世界帝国主義の先頭に立っているから――は、勝つまで戦いぬくか、それともロシアに対抗して分離講和を結ぶか、この二つのあいだを動揺しはじめた。わが国の小ブルジョア民主主義者は、人民のなかで占めていた多数派の地位を明らかに失って、ひどく動揺しはじめ、カデットとのブロックすなわち連立を拒否した。

(四) だから、七月三―四日に蜂起したなら、まちがいであったろう。われわれは、物理的にも、政治的にも、権力を維持することができなかったであろう。ピーテル〔ペトログラード〕が一時的にわれわれの手中にあったとはいえ、物理的に権力を維持することができなかったであろう。なぜなら、その当時には、われわれの労働者と兵士は、ピーテルを占領するためにたたかい、そして死のうとはしな

かっただろうからである。それほどの「たけりたった憤激」はなかった。ケーレンスキーにたいしても、ツェレーリ＝チェルノーフにたいしても、それほどのにえたぎる憎悪はなかった。われわれの仲間はまだ、エス・エルやメンシェヴィキまでがいっしょになってボリシェヴィキを迫害した経験によって、鍛えられていなかった。

七月三―四日には、われわれは政治的に権力を維持することができなかったであろう。なぜなら、コルニーロフ反乱の起こるまえには、軍隊や地方がピーテルめがけて進撃してくるおそれがあったし、また実際に進撃しただろうからである。

いまでは、状態はまったく違っている。

革命の前衛、人民の前衛であり、大衆の心をひきつける能力をもつ階級の多数者が、われわれのあとについている。人民の多数者がわれわれのあとについている。というのは、チェルノーフの辞職は、農民がエス・エルのブロックからは（そして、エス・エルそのものからも）土地を得られないことを示す唯一の徴候ではけっしてないにしても、その最もいちじるしい、最も明白な徴候だからである。しかも、これこそ、革命に全人民的な性格をあたえる肝心かなめの問題である。

帝国主義全体も、メンシェヴィキとエス・エルのブロック全体も、未曽有の動揺におちいっているのに、われわれには、自分のすすむべき道をしっかりと知っている党という有利な立場がある。

われわれの勝利は確実である。なぜなら、人民は真に絶望のまぎわにいるのに、われわれは全人民に正しい活路を示しているからである。すなわち、われわれは、「コルニーロフ事件の日々に」われわれの指導の真価を全人民に示したし、またその後ブロック派に妥協を申し入れたのに、彼らから拒否されたのであって、その一方、彼らのほうでは、いっこうに動揺をやめていないのである。

われわれの妥協の申し入れはまだ拒否されたわけではないとか、民主主義会議がまだこの申し入れを受けいれるかもしれないとか考えるのは、このうえない誤りである。妥協は一つの党から諸党に申し入れられたのである。それ以外の仕方の申し入れはありえなかった。それを諸党が拒否したのである。民主主義会議は相談会にすぎず、それ以上のものではない。次の一事を忘れてはならない。それは、この会議には、革命的人民の多数者、憤激した貧農は代表をだしていないということである。これは人民の少数者の会議である。――この明白な真実を忘れてはならない。われわれが民主主義会議にたいして議会にたいするような態度をとるなら、それはたいへんな誤りであり、ひどい議会

主義的クレティン病である。なぜなら、たとえこの会議がみずから常設の、主権をもつ革命議会であると宣言したとしても、やはりこの会議はなにものも決定しないからである。決定は会議のそとで、ピーテルとモスクワの労働者地区でくだされる。

われわれには、蜂起が成功するための客観的前提がすべてそなわっている。われわれの目前の情勢はきわめて有利である。いまや、蜂起でわれわれが勝利することだけが、人民を苦しめてきた動揺、この世で最も苦しいものであるこの動揺を終わらせることができ、蜂起でわれわれが勝利することだけが、革命に対抗しての分離講和の策動をぶちこわすこと、しかももっと完全な、もっと公正な、もっと間近な講和、革命に有利な講和を公然と申し入れることによって、それをぶちこわすことができる。

最後に、わが党だけが、蜂起に勝利をおさめたのち、ピーテルを救うことができる。なぜなら、われわれの講和の申入れが拒否されて、休戦さえ得られないとすれば、そのときにはわれわれは「祖国防衛論者」となり、主戦派の諸党派の先頭に立ち、最も「主戦派的な」党となり、真に革命的に戦争を遂行するだろうからである。われわれは、資本家からパンと長靴を全部取り上げよう。彼らにはパンの皮を残してやり、木皮靴をはかせよう。パンと靴は、みな戦線に送ろう。

そうすれば、われわれはピーテルを守りぬくだろう。真に革命的な戦争をやるためにロシアのもっている資源は、物質的なものも精神的なものも、まだ限りなく大きい。ドイツ人は、九分九厘まで、すくなくとも休戦をわれわれにあたえるであろう。ところで、いま休戦をかちえることは、すでに全世界に勝利することを意味する。

＊＊＊

革命を救うには、また両連合の帝国主義者の「分離的」分割からロシアを救うには、ピーテルとモスクワの労働者の蜂起が絶対に必要であることがわかったなら、われわれは、第一に、民主主義会議におけるわれわれの政治的戦術を、高まってくる蜂起の条件に適合させなければならない。第二に、蜂起を技術として取り扱うことが必要だ、というマルクスの思想を、われわれが口先だけで承認しているのでないことを、証明しなければならない。

会議では、われわれは、いたずらに支持者の数の多いことを追いもとめたりせず、動揺者を動揺者の陣営に残しておくことを恐れないで、ただちにボリシェヴィキの代議員団の結束を固めなければならない。動揺者はそこに残しておくほうが、断固たる献身的戦士の陣営にいれるよりも、

革命の大業にとって利益である。

われわれは、ボリシェヴィキ派の簡潔な声明を起草し、いまは長談義をやっているときではないこと、総じて「お談義」をやっているときではないこと、革命を救うためにただちに行動する必要があること、ブルジョアジーと完全に手を切り、現在の政府全体を完全に更迭し、ロシアの「分離的」分割を準備しているイギリス＝フランスの帝国主義者と完全に手を切ることが絶対に必要なこと、全権力を革命的プロレタリアートに率いられる革命的民主主義派の手にただちに移す必要があることを、きっぱりと強調しなければならない。

われわれの声明は、諸国民に平和を、農民に土地を、言語道断な利潤の没収、資本家の言語道断な生産阻害の抑制という、綱領的計画と結びつけて、以上の結論をできるだけ簡潔に鋭く言いあらわしたものでなければならない。

この声明は、簡潔であればあるほど、また鋭くあればあるほどよい。ただそのなかでは、なお二つのきわめて重要な点を明瞭に示さなければならない。すなわち、人民は動揺にうんざりしている、人民はエス・エルとメンシェヴィキの不決断に悩まされている、これらの諸党は革命を裏切ったのであるから、われわれは彼らときっぱり手を切るということ。

もう一つはこうである。併合をともなわない講和をいますぐ申し入れ、連合国帝国主義者およびあらゆる帝国主義者といますぐ手を切るなら、われわれはただちに休戦を獲得するか、あるいは革命的プロレタリアート全体が祖国防衛の立場に移り、革命的民主主義派全体がプロレタリアートの指導のもとに真に公正な、真に革命的な戦争をおこなうことになるか、どちらかだ、ということ。

この声明を読みあげ、しゃべるのでなく決定するように、決議を書くのでなく行動するようによびかけてから、われわれは、われわれの代議員団の全員を工場や兵営に派遣しなければならない。そここそ、彼らのいるべき場所である。そこに生命の中枢がある。そこに革命の救いの源泉がある。そこに民主主義会議の原動力がある。

われわれは、そこに行って、熱烈な、熱情的な演説でわれわれの綱領を説明し、問題をこう立てなければならない。会議がこの綱領を完全に採択するか、それとも蜂起か、どちらかである。その中間はない。待つことはできない。待てば革命は滅びるであろう、と。

問題をこのように立て、代議員団の全員を工場や兵営に集中しておいて、われわれは蜂起開始の時機を正しく判定するであろう。

ところで、蜂起をマルクス主義的に、すなわち技術とし

て取り扱うためには、われわれは、それと同時に、一瞬間もむだにしないで、蜂起部隊の司令部を組織し、兵力を配置し、最も重要な地点に忠実な連隊を派遣し、アレクサンドル劇場を包囲し、ペテロパウロ要塞を占領し、参謀本部と政府の要人を逮捕し、士官学校生徒と猛烈師団(六)にたいしては、敵を市の中心部へ進出させるよりは死を選ぶ覚悟のある部隊をさしむけなければならない。われわれは、武装した労働者を動員し、彼らに死を賭した最後の戦闘をよびかけ、すぐさま電信局と電話局を占領し、中央電話局にわれわれの蜂起司令部をおき、それとすべての工場、すべての連隊、すべての武装闘争地点との電話連絡をつける、等々しなければならない。

もちろん、以上は、いまこの時点で、蜂起を技術として取り扱わなければ、マルクス主義に忠実でありえないし、革命に忠実でありえないことを例証するために、おおよそのところを示したにすぎない。

エヌ・レーニン

一九一七年九月一三—一四（二六—二七）日に執筆
一九二一年に雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』第二号にはじめて発表
全集、第五版、第三四巻、二四二—二四七ページ所収
邦訳全集、第二六巻、七—一三ページ所収

政論家の日記から

わが党の誤り

一九一七年九月二二日、金曜日

いわゆる民主主義会議の意義をよく考えれば考えるほど、わきからこの問題を注意ぶかく見れば見るほど——わきから見ればよく見えると言われているが——、わが党がこの会議に参加したのは誤りであったという確信がますます強まってくる。この会議はボイコットすべきであった。そういう問題を検討してなんの役に立つのか、と言う人がいるかもしれない。もうすんだことはとりかえしがつかないではないか、と言って。しかし、きのうの戦術の問題についてそういう異議をとなえることは、明らかに、根拠のないことであろう。われわれはいつでも「その日ぐらし」の戦術を非難してきたし、またマルクス主義者としてそれを非難する義務がある。われわれには、その時かぎりの成功で

は十分でない。われわれには、総じて、その瞬間なり、その日なりを目あてにした計画では、十分でない。われわれは政治的事件の連鎖を、その総体において、その因果関係において、その結果において研究し、たえず自分を点検しなければならない。きのうの誤りを分析することによって、われわれは、きょうの誤りや、あすの誤りを避けることを学ぶのである。

わが国には、新しい革命、別の（ツァーリズムにたいする革命をおこなった諸階級とは別の）諸階級の革命が、明らかに成長しつつある。さきにおこなわれたのは、ツァーリズムにたいする、プロレタリアート、農民、およびイギリス＝フランスの金融資本と同盟したブルジョアジーの革命であった。

いま成長しているのは、ブルジョアジーにたいする、ブルジョアジーの同盟者であるイギリス＝フランスの金融資本にたいする、ボナパルティスト・ケーレンスキーを先頭とするブルジョアジーの政府機構にたいする、プロレタリアートと、農民の多数者すなわち貧農との革命である。

ここでは、新しい革命の成長を証明するいろいろな事実に立ちいって論じるのはやめよう。なぜなら、わが党の中央機関紙『ラボーチー・プーチ』(注)の諸論文から判断すれば、この点について党はすでに自分の見解を明らかにしているからである。新しい革命が成長しつつあるということは、全党の認めた現象であるように思われる。もちろん、この革命の成長の資料はまだこれからまとめられなければならないが、それは他の論文にゆずらざるをえない。

いまは、古い革命と新しい革命との階級的な差異に、また基本的な現象である諸階級の相互関係の立場から現在の政治情勢とわれわれの諸任務とを評価することに、最大の注意をむけるほうが、いっそう重要である。さきには、最初の革命では、労働者と兵士、すなわちプロレタリアートと農民の先進層とが前衛であった。

この前衛は、小ブルジョアジーのいちばんひどい動揺分子のなかの多くの者を自分に追随させた（共和制の問題をめぐるメンシェヴィキとトルドヴィキ(注)の動揺を思いおこそう）ばかりでなく、君主主義的なカデット党、自由主義的ブルジョアジーをさえ自分に追随させ、彼らを共和主義政党に転化させた。どうしてこういう転化が可能だったのだろうか？

それは、ブルジョアジーにとっては、経済的支配がすべてで、政治的支配の形態はどうでもよいことだからである。ブルジョアジーは、共和制のもとでも支配することができる。そればかりか、この政治体制のもとでは、政府の顔ぶれや、政府党の構成や組合せにどんな変化が起こってもブ

ルジョアジーには影響が及ばないという点で、共和制のもとでのほうが、ブルジョアジーの支配はいっそう確実でさえある。

もちろん、ブルジョアジーは、これまで君主制に賛成であったし、今後も賛成するであろう。それは、すべての資本家や地主にとっては、君主制の諸機関が資本にあたえるいっそう粗野な軍事的保護のほうが、いっそう明白で、「いっそう親しみ」があるからである。しかし、「下からの」強い圧力があるときには、ブルジョアジーは、自分の経済的支配を維持できさえすれば、いつ、どこでも、共和制に「順応」してきた。

げんざい、プロレタリアートと貧農、すなわち人民の多数者と、ブルジョアジーおよび「連合国」帝国主義（ならびにまた国際帝国主義）との関係は、前者がブルジョアジーを自分に「追随させる」ことのできるようなものではない。それどころか、小ブルジョアジーの上層と、民主主義的小ブルジョアジーの裕福な層とは、明らかに、新しい革命に反対している。この事実はきわめて明白なので、いまここでそれに立ちいって論じるまでもない。リーベルダン[三]、ツェレテーリ、チェルノーフらの諸君は、このことを明瞭なうえにも明瞭に例証している。

諸階級の相互関係は一変した。ここに問題の核心がある。

「バリケードの両側に」対峙しているのは、まえと同じ諸階級ではない。

これが肝心なことである。

これが、そしてこれだけが、新しい革命を口にすることのできる科学的な基礎である。純理論的に考察し、問題を抽象的にとりあげるなら、たとえば、ブルジョアジーの招集した憲法制定議会内に、ブルジョアジーに対抗する多数派が生まれれば、すなわち、労働者と貧農の諸党が多数を占めれば、この新しい革命を合法的におこなうこともできるであろう。

諸階級の客観的な相互関係、現存の型の代議機関の内外でこれらの階級が果たしている役割（経済的および政治的）、革命の成長と衰退、議会外の闘争手段と議会的闘争手段との相互関係——これらこそ、われわれがボイコット戦術なり参加戦術なりを、気ままに、自分の「共感」にもとづいてみちびきだすのではなく、マルクス主義的にみちびきだそうと思えば、かならず考慮しなければならない、最も主要な、基本的、客観的な資料である。

マルクス主義的にはボイコット問題をどうとりあげるべきかは、わが国の革命の経験が明瞭に示している。

ブルィギン国会[三]のボイコットは、なぜ正しい戦術であったのか？

それは、この戦術が、発展してゆく社会諸勢力の客観的な相互関係に合致していたからである。ボイコットは、旧権力の打倒をめざす成長しつつある革命のスローガンとなった。旧権力は、人民を革命からそらすために、お粗末な仕方で偽造された協調機関、したがって議会制度へのまじめな「足がかり」となる見こみのまったくない機関（ブルィギン国会）を召集した。プロレタリアートと農民の議会外の闘争手段はいっそう強力になっていた。こういう諸要因から、ブルィギン国会のボイコットという、客観的情勢を考慮に入れた正しい戦術が生まれたのである。

第三国会[23]をボイコットするという戦術は、なぜ誤っていたのか？

それは、この戦術が、もっぱらボイコットのスローガンの「目ざましさ」と、六月三日の「家畜小屋」の粗暴きわまる反動性にたいする嫌悪とに、もとづくものだったからである。しかし、客観的情勢は、一方では、革命が激しく衰退したこと、またひきつづき衰退しつつあることを示していた。この革命を高揚させるためには、議会の支柱（たとえ「家畜小屋」の内部からのものであろうと）がきわめて大きな政治的意義をもつようになっていた。なぜなら、宣伝し、扇動し、組織する議会外の手段は、ほとんどなかったか、きわめて微々たるものであったからである。他方では、第三国会が粗暴きわまる反動的なものであったことは、それが諸階級の現実の相互関係をあらわす機関になること、すなわち、君主制とブルジョアジーとのストルィピン的連合の機関になることを妨げなかった。諸階級のこの新しい相互関係こそ、わが国が克服しなければならないものであった。

こういう諸要因から、第三国会への参加という、客観的情勢を考慮に入れた正しい戦術が生まれたのである。

「民主主義会議」や「民主主義評議会」つまり予備議会に参加するという戦術がまったく誤っていることを確信するためには、これらの経験の教訓を考え、ボイコットか、参加かという問題をマルクス主義的にとりあげるための条件を考えてみるだけで十分である。

一方では、新しい革命が成長しつつある。戦争はたけなわになっている。宣伝し、扇動し、組織する議会外の手段は、巨大である。この予備議会内の「議会的」演壇の意義はとるにたりない。他方では、この予備議会は、諸階級のどんな新しい相互関係をも表現していないし、この相互関係に「役だつ」ものでもない。たとえば、この予備議会に農民が代表を出している割合は、既存の諸機関（農民代表ソヴェト）にくらべて悪い。予備議会の本質は、ボナパルティズム的にせものということにつきる。これがボナパル

ティズム的にせものだというのは、リーベルダン、ツェレテーリ、チェルノーフらの醜悪な徒党が、ケーレンスキー一派といっしょになって、このツェレテーリ版ブルィギン国会の構成を細工し、変造したという意味でそうであるだけではなく、さらに、大衆をだまし、労働者と農民をあざむき、成長しつつある新しい革命から彼らをそらせ、古い、すでに試験ずみの、使いふるしてぼろぼろになったブルジョアジーとの「連立」（つまり、ブルジョアジーがツェレテーリ派の諸君を道化者に、帝国主義と帝国主義戦争とに人民を隷属させるのを手助けする道化者に変えること）に新しい衣裳をまとわせて、被抑圧階級の目をくらますことが、この予備議会の唯一の使命であるという、もっと深い意味ででもそうなのである。

一九〇五年八月には、ツァーリは自分の農奴主的地主たちにむかってこう言った。――いまわれわれは弱い。われわれの権力は動揺している。労農革命の波が高まっている。われわれは「無知な連中」をだまし、彼らを飴で釣らなければならない、と。……

今日の「ツァーリ」であるボナパルティスト・ケーレンスキーは、カデットや、無党派のチート・チートィチ[(61)]らや、プレハーノフら、ブレシコフスカヤらの一派にむかってこう言う。――いまわれわれは弱い。われわれの権力は動揺している。労農革命の波が高まっている。ブルジョアジーに敵対する労農革命の波が高まっている。われわれはブルジョアジーに敵対する労農革命の波をだまさなければならない。そのためには、エス・エルとメンシェヴィキの「革命的民主主義派の指導者」、すなわち、われわれの親友ツェレテーリやチェルノーフらが一九一七年五月六日以来人民を愚弄するためにまとってきた道化服を、染めかえてやらなければならない。「予備議会」の飴で人民を釣るのは、むずかしいことではない、と。

一九〇七年六月には、ツァーリは自分の農奴主的地主たちにむかってこう言った。――いまわれわれは強い。労農革命の波は引きつつある。だが、われわれは古いやり方でやっていくことはできないだろう。欺瞞だけでは足りない。農村で新しい政策が必要である。グチコーフ＝ミリュコーフらとの、ブルジョアジーとの、新しい経済的・政治ブロックが必要である、と。

ボイコット戦術の客観的基礎、この戦術と諸階級の相互関係との関連をわかりやすく説明するために、一九〇五年八月、一九一七年九月、一九〇七年六月という三つの情勢を、右のように言いあらわすことができる。抑圧者による被抑圧階級の欺瞞は、いつでもおこなわれている。だが、さまざまな歴史的時機にこの欺瞞がもつ意義はそれぞれ違っている。抑圧者が人民をあざむいているということだけ

を、戦術の基礎にすることはできない。諸階級の相互関係全体と、議会内外の闘争の発展とを分析して、戦術を決定しなければならない。

予備議会に参加する戦術は、誤っている。この戦術は諸階級の客観的な相互関係に、現在の時機の客観的な諸条件に、合致していない。

われわれは、民主主義会議をボイコットすべきであった。そうしなかったのは、われわれみなの誤りであった。しかし、誤りはいつわりではない。大衆の革命的闘争を支持しようという心からの願いさえあれば、戦術の客観的な基礎を真剣に考えさえすれば、われわれは誤りを訂正することができるであろう。

予備議会はボイコットしなければならない。労働者・兵士・農民代表ソヴェトのなかへ、労働組合のなかへ、総じて大衆のところへ行かなければならない。大衆に闘争をよびかけなければならない。ケーレンスキーのボナパルティスト的徒党と、彼のにせ予備議会、このツェレテーリ版ブルィギン国会とを追いちらせ、という正しい、明瞭なスローガンを大衆にあたえなければならない。メンシェヴィキとエス・エルは、コルニーロフ反乱のあとでさえ、われわれの妥協の申し入れを拒否した。すなわち、権力を平和的にソヴェトに移すのを拒否したのである（その当時には、われわれはまだソヴェト内で多数を占めてはいなかった）。彼らは、カデットとのけがらわしい、卑劣な取引の泥沼にまたしても落ちこんだ。メンシェヴィキとエス・エルを倒せ！ 彼らと無慈悲にたたかえ。彼らをいっさいの革命的組織から容赦なく放逐せよ。キーシキンらの味方、コルニーロフ派の地主と資本家の味方であるこの連中とは、どういう話合いも、どういう交渉もしてはならない。

九月二三日、土曜日

トロツキーがボイコットに賛成した。でかした、同志トロツキー！

民主主義会議に集まったボリシェヴィキ代議員団のなかでは、ボイコットの立場が敗北した。

ボイコット万歳！

われわれは、民主主義会議への参加を断じて容認できないし、また容認すべきではない。一会議の代議員団は、党の最高機関ではない。また、最高機関の決定でも、生活の経験にもとづいて改訂されなければならない。

執行委員会の総会にも、臨時党大会にも、ボイコット問題についての決定をおこなわせるように、ぜひとも努力しなければならない。いまやわれわれは、ボイコット問題を、大会代議員の選挙や党内のすべての選挙のための政綱とし

なければならない。この問題の討議に大衆を引きいれなければならない。自覚した労働者はこの問題をとりあげて、これを討議させ、「上層部」に圧力をくわえなければならない。

わが党の「上層部」に動揺が認められることに疑問の余地はまったくない。この動揺は破滅的なものとなりうる。なぜなら、闘争は発展しているし、ある条件のもとでは、ある瞬間には、動揺が事業を破滅させるおそれがあるからである。手おくれにならないうちに、全力をあげて闘争にとりかかり、革命的プロレタリアートの党の正しい方針を守りぬかなければならない。

わが党の「議会的」上層部では、かならずしも万事がうまくいってはいない。彼らにもっと注意をはらわなければならない。労働者がもっと彼らを監督しなければならない。議員団の権限をもっと厳密に規定しなければならない。

わが党の誤りは明白である。先進的階級のたたかう党にとって、誤りは恐ろしいものではない。恐ろしいのは、誤りを固執することであり、誤りを認めて訂正するのをはばかるまちがった恥じらいであろう。

九月二四日、日曜日

ソヴェト大会は一〇月二〇日に延期された。ロシアの生活のテンポからすれば、これはほとんど無期延期にひとしい。エス・エルとメンシェヴィキが四月二〇—二一日以来演じてきた茶番が、またしても繰りかえされている。

一九二四年に雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』第三（二六）号にはじめて発表
全集、第五版、第三四巻、二五七—二六三ページ所収
邦訳全集、第二六巻、四〇—四七ページ所収

ボリシェヴィキは国家権力を維持できるか？

第二版序文

この小冊子は、本文からわかるように、一九一七年九月末に書き、一〇月一日に脱稿したものである。

一〇月二五日の革命は、この小冊子で提起された問題を、理論の分野から実践の分野に移した。

いまでは、ことばではなく行為で、この問題に答えなければならない。ボリシェヴィキ権力に反対する理論上の論拠はきわめて薄弱である。これらの論拠は粉砕された。

現在の任務は、労働者・農民政府の生命力を、先進的階級——プロレタリアート——の実践によって証明することである。すべての自覚した労働者、すべての活動的で誠実な農民分子、すべての勤労被搾取者は、最大の歴史的問題を実践において解決するために、全力をつくすであろう。

仕事にとりかかろう。みな仕事にとりかかろう。世界社会主義革命の大業は勝利しなければならないし、また勝利するであろう。

ペテルブルグ　一九一七年一一月九日

エヌ・レーニン

一九一八年に小冊子、エヌ・レーニン『ボリシェヴィキは国家権力を維持できるか？』、所収、叢書『兵士・農民文庫』、ペテルブルグ、にはじめて発表

『レーチ』から『ノーヴァヤ・ジーズニ』[85]にいたる、コルニーロフ派のカデットから半ボリシェヴィキにいたるすべての流派、ボリシェヴィキを除くすべての者の意見が一致しているのは、どういう点か？

一致しているのは、ボリシェヴィキは単独で全国家権力をその手ににぎる決心はけっしてつかないか、またたとえその決心をつけて権力を掌握しても、ごく短期間であれそれを維持することはできないだろう、という点である。

もし、ボリシェヴィキが単独で全国家権力を掌握するという問題はまったく非現実的な政治問題であり、これを現実の問題のように考えることのできるのはひどくうぬぼれた「狂信家」だけである、と言う者がいるとすれば、われわれは、さまざまな「色合い」の最も責任ある、最も有力な政党や政派の言明を正確に引用することによって、この意見を反駁しよう。

だがはじめに、右にあげた問題のうち第一の問題、すなわち、ボリシェヴィキは単独で全国家権力をその手ににぎる決心がつくか、という点について、ひとこと述べておきたい。この問題にたいしては、私はすでに全ロシア・ソヴェト大会の席上で、ツェレテーリのある閣僚演説のさいちゅうに私が折りにふれて議席から叫んだことば[86]のなかで、断定的な肯定の答えをあたえたことがある。また私は、ボリシェヴィキが出版物ででも口頭ででも、われわれは単独で権力を掌握すべきでないと言明した場合に、一度も出あったことがない。総じて、権力を獲得する可能性があるのに権力の掌握をあきらめるような政党があるとすれば、そんな政党は――先進的階級の政党ならなおさらのこと――存立する資格がなく、政党と見なされるに値せず、あらゆる意味でゼロに等しいあわれな存在であるという立場を、私はいまでもとっている。

さて、この問題について、カデットとエス・エルと半ボリシェヴィキ（むしろ、四分の一ボリシェヴィキと言いたいところだ）の言明するところを引用しよう。

『レーチ』の九月一六日号の社説は言う。

「……不一致と混乱がアレクサンドル劇場の会議場にみなぎっており、社会主義的新聞雑誌にも同じ情景が反映されている。明確で一本調子な点で目だっているのは、ボリシェヴィキの見解だけである。これは、民主主義会議では少数派の見解である。ソヴェトの内部では、これはますます強まっている潮流である。しかし、口先ではどんなに激烈で、どんなに大言壮語を吐き、自信を誇示していようとも、若干の狂信者を除けば、ボリシェヴィキは口舌の雄にすぎない。彼らは、自分からすすんで『全権力』を掌握しようと試みはしないであろう。彼ら

は、par excellence〔第一級の〕撹乱者、破壊者ではあるが、ほんとうのところは卑怯者であって、心の底では、自分たちの内面の無知をも、自分たちの現在の成功のはかなさをも、よく承知しているのである。自分たちが終局の勝利を得たその最初の日が、自分たちのまっしぐらな没落の最初の日となるだろうということを、彼らは、その本性からすれば無責任な人間であり、その手段や方法からすれば無政府主義者であって、政治思想の一流派──より正確に言えば、むしろ政治思想の一錯乱──としか考えられないものである。今後長期にわたってボリシェヴィズムから解放され、ボリシェヴィズムを放逐する最良の方法は、いちどその指導者たちの手に国の運命をゆだねてみることであろう。そして、こういう実験は許されないものであり、破滅をもたらすという意識がなかったなら、すてばちから、そういう思いきった手段に踏みきったかもしれないのである。幸いなことに、もう一度繰りかえして言うが、これらのあわれむべき現代の英雄自身、実際のところ、けっして全権力の掌握をめざしてはいないのである。建設的な仕事は、彼らの手にはけっしておえない。こういうわけで、彼らの明確さ、一本調子は、すべて政治論壇や集会での空論の域を出ない。

実践的には、彼らの立場は、どういう観点からしても考慮に値するものではない。もっとも、この立場も、一つの点である現実的な結果をもたらしている。すなわち、それは、『社会主義思想』の他のすべての流派を結束させて、彼らの立場にたいして否定的な態度をとらせているのである。……」

カデットはこう論じている。ところで、つぎにかかげるのは、ロシア最大の「支配的な政府」党である「社会革命党」の公式の機関紙『デーロ・ナローダ』九月二一日号にのった、同じく無署名の、つまり編集局の社説の見地である。

「……もしブルジョアジーが憲法制定議会の招集されるまで、民主主義会議の確認した政綱にもとづいて民主主義派と協力することを望まないなら、この会議の構成要素のなかでの連立が生まれなければならない。これは、連立の擁護者の側からみれば大きな犠牲であるが、しかし権力の『純粋路線』の思想を宣伝する人々のほうでも、犠牲をはらうことに応じなければならない。しかし、われわれは、この懸念をいだいている。その場合、合意が成立しないかもしれないという懸念をいだいている。その場合には、会議の参加者のうち、最後の組合せしか残らない。すなわち、第三の、権力の同質性という思想を原則的に主張してきた半数の

人々が、政権を組織する義務を負うことになる。

はっきり言おう。ボリシェヴィキが内閣を組織する義務を負うことになろう。ボリシェヴィキは、全力をあげて革命的民主主義派のあいだに連立にたいする憎悪を植えつけ、『協調政策』をやめれば万事がよくなると約束し、わが国のなめている災厄はすべてこの政策によるものだと説明してきた。

もし彼らに自分のやっている扇動の意味がわかっていたのなら、また彼らが大衆をだましたのでないなら、彼らは、四方八方に振り出している手形を決済する義務がある。

問題ははっきり出されている。

彼らが、自分たちは権力を掌握できないという理論を急ごしらえしてその陰に隠れようという、むだな努力をしないよう希望したい。

民主主義派はそういう理論を認めないであろう。

それと同時に、連立の支持者は、ボリシェヴィキに全幅的な支持を保障しなければならない。以上が、われわれの当面している三つの組合せ、三つの道である。――これ以外の道はない！」（傍点は『デーロ・ナローダ』自身のもの）。

エス・エルは右のように論じている。最後にもう一つ、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の九月二三日号の編集局社説からとってきた、ノーヴァヤ・ジーズニ派の「四分の一ボリシェヴィキ」の「立場」――二股をかける試みを立場とよんでよいものとすれば――をあげよう。

「……もしコノヴァーロフやキーシキンとの連立がまたもや成立するとすれば、それは、民主主義派の新しい降伏と、八月一四日の政綱(八七)にもとづいて責任ある権力をつくるという民主主義会議の決議の廃棄を意味するものにほかならないであろう。……

……メンシェヴィキとエス・エルからなる同質の内閣も、責任を負えるという自信を感じえない点では、連立内閣の責任ある社会主義大臣たちと同じであろう。……このような政府は、自分の周囲に革命の『生きた勢力』を結集できないばかりか、革命の前衛たるプロレタリアートからいくぶんでも積極的な支持をうけることを、あてにすることはできないであろう。

しかし、もう一つの型の同質内閣、すなわち『プロレタリアートと貧農』の政府をつくるということも、現状からのよりよい活路ではなくて、いっそう悪い活路であろうし、本来からいって活路などではなく、失敗でしかないであろう。もっとも、このようなスローガンは、『ラボーチー・プーチ』にときおり、おずおずと、しか

もきまってあとからの『釈明』つきでのせられる論評のなか以外には、だれもかかげている者はいないのだが。……」

(こういうとほうもないうそを、責任ある政論家たちが「大胆に」書いているのだ。彼らは、『デーロ・ナローダ』の九月二一日号の社説さえ忘れたのである。……)

「いまボリシェヴィキは、全権力をソヴェトへ、というスローガンを正式に復活している。このスローガンは、七月事件のあとで中央執行委員会に代表されるソヴェトが積極的な反ボリシェヴィキ政策の道にはっきり立ったとき、いちど撤回されたのだった。ところが、いまでは、『ソヴェト路線』がただされたと見なしてよいばかりか、予定されているソヴェト大会でボリシェヴィキが多数を占めると期待してよい十分な根拠がある。こういう事情のもとでは、ボリシェヴィキが復活した『全権力をソヴェトへ』というスローガンは、まさしくプロレタリアートと『貧農』の独裁をめざす『戦術方針』である。なるほど、ソヴェトといえば、農民代表ソヴェトをも意味しているので、ボリシェヴィキのスローガンは、ロシアの民主主義派全体の圧倒的部分をよりどころとする権力を予想してはいる。だが、そうだとすれば、『全権力をソヴェトへ』というスローガンは、独自の意義を失ってしまう。というのは、ソヴェトは、その構成からみて、民主主義会議がつくる『予備議会』とほとんど同義のものになるからである。……」

(『ノーヴァヤ・ジーズニ』のこの主張は、破廉恥きわまるうそであって、民主主義のにせものや偽造物が民主主義と「ほとんど同義」だと言明するにひとしい。予備議会は、人民の少数者、とりわけクスコーヴァ、ベルケンゲイム、チャイコフスキーの一派の意思を多数者の意思のように見せかけるにせものである。これが第一。第二には、アウクセンチエフやチャイコフスキーらが偽造した農民ソヴェトでさえ、民主主義会議で、連立反対者の非常に高いパーセントを示したのであるから、労働者・兵士代表ソヴェトと合算すれば、連立は無条件に否決されたにちがいない。第三に、「権力をソヴェトへ」ということは、農民ソヴェトの権力が主として農村にひろげられることを意味しているが、その農村では貧農の優位が保障されている。)

「……しかし、もしこの二つが同じものであるなら、ボリシェヴィキのスローガンはただちに日程から引きおろすべきである。これに反して、『権力をソヴェトへ』ということがプロレタリアートの独裁を隠蔽するだけのものであるなら、そういう権力は、まさに革命の失敗と崩壊を意味する。

国の他の諸階級から孤立しているだけでなく、民主主義派の真の生きた勢力からも孤立しているプロレタリアートは、技術的にも、国家機構を掌握して異常に複雑な情勢のもとでこの機構を動かすことはできないであろうし、政治的にも、敵対勢力の全圧力に対抗できないであろうことは、証明する必要があるだろうか？　この圧力は、プロレタリアートの独裁ばかりか、おまけに革命全体まで一掃してしまうだろう。

いま、現在の時機の要求に応じるただ一つの権力は、民主主義派の内部での真に誠実な連立である。」

＊＊＊

長い引用をして読者に申しわけない。だが、これは絶対に必要であった。ボリシェヴィキに敵対するさまざまな党の立場を正確に示す必要があった。ボリシェヴィキが単独で全国家権力を掌握するという問題が、まったく現実的な問題であるばかりか、さしせまった、緊急な問題であることを、これらの党のすべてが認めているという、きわめて重要な事情を正確に証明する必要があったのである。

つぎに、カデットからノーヴァヤ・ジーズニ派にいたるまで「すべての者」が、ボリシェヴィキは権力を維持できないだろうと確信している論拠の分析に移ろう。

堅実な『レーチ』は全然なんの論拠もあげていない。同紙は、よりぬきの、怒りくるった悪罵を滝のようにボリシェヴィキにあびせかけているだけである。ついでながら、われわれがさきほど引用した箇所は、次のことを示している。それは、『レーチ』はこういうやり方でボリシェヴィキを「そそのかして」権力を掌握させようとしているのだ、だから「同志諸君、警戒したまえ、敵が勧めることは、悪いことにちがいないから！」などと考えるのは、はなはだしい誤りだということである。もしわれわれが、一般的な事情と具体的な事情の双方を実務的に吟味することをしないで、ブルジョアジーはわれわれを「そそのかして」権力を掌握させようとしている、などと「信じこむ」とすれば、われわれはブルジョアジーに愚弄されたことになるだろう。なぜなら、ブルジョアジーはきっといつでも、ボリシェヴィキが権力を掌握すれば数かぎりない災難が生じるだろうと、悪意にみちた予言をするだろうし、またいつでも、「いちどボリシェヴィキに権力をにぎらせ、それから彼らをたたきつぶして、一挙に、『今後長期にわたって』彼らを厄介ばらいするのがいちばんよい」と、悪意にみちてわめきたてるだろうからである。こういうわめきたてをも「そそのかし」とよびたければ、そうよんでもよいが、ただこれは、逆の方向への「そそのかし」である。カデット

とブルジョアは、われわれに権力を掌握するように「勧めている」わけではけっしてなく、また一度もそうするように勧めた」こともない。彼らはただ、権力の諸課題が解決不可能なものであると称することによって、われわれをおじけづかせようとしているだけである。

いや、そうはいかない。われわれは、おじけづいたブルジョアのわめき声におじけづいてはならない。われわれが「解決不可能な」社会的課題をとりあげたことはかつてないこと、また、きわめて困難な状態を脱するただ一つの活路として、社会主義をめざす即時の方策をとるという完全に解決可能な課題は、プロレタリアートと貧農の執権(ディクタツーラ)によってのみ解決されることを、われわれは銘記しておかなければならない。もしロシアのプロレタリアートがいま権力を掌握するなら、彼らには勝利が、しかもかつてどこにもなかったほどに安定した勝利が、保障されているのである。

あれこれの時機を不利な時機とする具体的な事情を、われわれは純実務的に討議しようではないか。ブルジョアジーのたけりくるったわめき声におじけづいて、ボリシェヴィキが全権力を掌握するという問題がいま真に緊急の問題となろうとしていることを、かたときでも忘れることのないようにしよう。いまわれわれがこのことを忘れるなら、わが党は、権力の掌握を「時機尚早」と見なす場合よりも、さらにはるかに大きな危険に脅かされるであろう。この点では、現在、「時機尚早」ということはありえない。万に一つ、はずれる気づかいはないのである。

『レーチ』の敵意ある悪罵に答えて、われわれは次の詩句を繰りかえすことができるし、また繰りかえさなければならない。

われわれはわが正しさのたしかめを聞く
称賛の甘いささやきのなかにではなく、
怒りの激した叫びのなかに!(八六)

ブルジョアジーがこのように激しくわれわれを憎んでいることこそ、われわれがブルジョアジーの支配を倒すための手段と道を人民に正しく教えているという真実の、最も明瞭なあかしの一つである。

***

『デーロ・ナローダ』は、今回は珍しい例外として、悪罵をあびせる光栄をわれわれにたまわらなかったが、また、論拠らしいものも、ひとかけらも示していない。同紙は、間接に、ほのめかしによって、「ボリシェヴィキが内閣を組織する義務を負うことになろう」という見とおしで、われわれをおじけづかせようとしているだけである。われわれをおどしているエス・エルが、おびえた自由主義者が見

た幽霊に、自分でも本気に、死ぬほどおびえているということは、大いにありそうなことだと思う。同様に、中央執行委員会のような、とりわけ上級の、とりわけ腐敗したある種の機関や、中央執行委員会に類似した「連絡」委員会(22)（すなわち、カデットとの連絡のための、簡単にいえば、カデットとの親睦のための委員会）で、エス・エルがボリシェヴィキのだれかをおじけづかせるのに成功しているということも、同じようにありそうなことだと思う。というのは、第一に、すべてこういう中央執行委員会や「予備議会」などの空気は、腐敗していて、吐き気をもよおすほど沈滞しており、それを長いあいだ吸うのはどんな人間にとっても有害だからであり、第二に、本気というものは伝染するもので、本気におびえた俗物は、一時、個々の革命家を俗物に変えることができるからである。

　しかし、カデットとならんで大臣となったり、カデットに大臣級の人物と認められたりする不運に見まわれたエス・エルが、このように本気におじけづいていることが、「人間的」にみてどんなに理解できることであろうと、おじけづくことは、政治的な誤りをおかすことであって、プロレタリアートにたいする裏切りと紙一重のものになりかねないのである。諸君、どうか実務的な論拠をあげてくれたまえ！　諸君がおじけづいているからといって、われわれもまたおびえるだろうなどと、期待しないでくれたまえ！

⁂

実務的な論拠は、今回は『ノーヴァヤ・ジーズニ』にしか見いだされない。今回は、同紙は、ボリシェヴィキの弁護人という、どの点からみても気持のよいこの貴婦人にとって明らかに「ショッキング」な役割よりは、もっと同紙にふさわしい、ブルジョアジーの弁護人という役割で登場している。

　この弁護人は六つの論拠を提出している。

（一）プロレタリアートは、「国の他の諸階級から孤立している」。

（二）プロレタリアートは、「民主主義派の真の生きた勢力から孤立している」。

（三）プロレタリアートは、「技術的に国家機構を掌握できないであろう」。

（四）プロレタリアートは、この機構を「動かすことはできないであろう。」

（五）「情勢は異常に複雑である。」

（六）プロレタリアートは、「敵対勢力の全圧力に対抗できないであろう。この圧力は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）ばかりか、おまけに革命全体まで一掃してしまうだろう」。

	連立賛成	反　対
労・兵代表ソヴェト	83	192
農民代表ソヴェト	102	70
計	185	262

第一の論拠を、『ノーヴァヤ・ジーズニ』はこっけいなほど不器用に述べている。というのは、資本主義社会や半資本主義社会では、われわれは、ブルジョアジー、小ブルジョアジー（農民を主要な代表者とする）、プロレタリアートという三つの階級しか知らないからである。そうだとすれば、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの革命が問題となっているときに、他の諸階級からのプロレタリアートの孤立を説くことにいったいどんな意味があるのか？

きっと、『ノーヴァヤ・ジーズニ』は、プロレタリアートが農民から孤立していると言いたかったのであろう。なぜなら、じっさい、ここで地主を問題にしているはずはないからである。しかし、プロレタリアートがいま農民から孤立していると、正確に、はっきり言うわけにはいかなかった。なぜなら、そういう主張がとんでもないうそであることは、だれの目にもはっきりしているからである。

資本主義国のプロレタリアートで、現在のロシアのプロレタリアートほど小ブルジョアジーから孤立していないもの——しかも、注意してほしいが、これはブルジョアジーにたいする革命においてなのだ——は、ちょっと考えられない。客観的な、議論の余地のない資料でわれわれがもちあわせている最新のものは、ツェレテーリ版「ブルィギン国会」、つまり悪名高い「民主主義」会議の選挙「クーリア」〔選挙人団〕別に見た、ブルジョアジーとの連立にたいする賛否の投票にかんする資料である。ソヴェト・クーリアをとってみると、上表のような結果となる。

すなわち、全体として見ると、多数者がブルジョアジーとの連立反対というプロレタリア的スローガンに味方している。またさきほど見たように、ソヴェトの内部にボリシェヴィキの影響力が強まっていることは、カデットでさえ認めざるをえないのである。しかも、ここで問題となっているのは、ソヴェトのきのうの指導者たちによって、すなわち中央諸機関に確実な多数を占めているエス・エルとメンシェヴィキによって招集された民主主義会議である！　ここでは、ソヴェトの内部でボリシェヴィキがえている現実の優位が、実際よりも小さくあらわされていることは、明らかである。

ブルジョアジーとの連立の問題でも、地主の土地をただちに農民委員会に引き渡す問題でも、ボリシェヴィキは、いますでに労働者・兵士・農民代表ソヴェト内の多数者、

人民の多数者、小ブルジョアジーの多数者を獲得している。

『ラボーチー・プーチ』の九月二四日付第一九号は、エス・エルの機関紙『ズナーミャ・トルダー』(32)第二五号から引用して、九月一八日にピーテルでひらかれた地方農民代表ソヴェト協議会についての報道をのせている。この協議会では、四つの農民ソヴェト(コストロマ、モスクワ、サマラ、タヴリーダの諸県の)執行委員会が、限定なしの連立に賛成した。三つの県(ヴラヂーミル、リャザン、黒海の諸県)と二つの軍の執行委員会が、カデットをいれない連立に賛成した。二三の県と四つの軍の執行委員会が連立に反対した。

つまり、農民の多数者が連立に反対しているのだ！

これが、「プロレタリアートの孤立」の実情である。

ついでながら、連立に賛成したのは、賃金労働者を使って経営を営んでいる富農と大地主が比較的にいって非常に多いサマラ、タヴリーダ、黒海の三つの辺境県と、さらにロシアの他の大多数の県にくらべてやはり農民ブルジョアジーの勢力が強い四つの工業県(ヴラヂーミル、リャザン、コストロマ、モスクワ)とであったことに、注意すべきである。この問題についてもっとくわしい資料を集め、最も「富裕な」農民のいる諸県におけるほかならぬ貧農についての資料がないかどうか調べてみるのは、興味ぶかいことであろう。

さらに、「非ロシア民族グループ」では、連立の反対者がいちじるしい優勢を示したこと、すなわち、四〇票対一五票であったことも、興味ぶかい。ロシア国内の不平等諸民族にたいするボナパルティスト・ケーレンスキー一派の併合主義的な、乱暴な強圧政策が、その実を結んだのである。被抑圧民族の住民の広範な大衆、すなわち、そのうちの小ブルジョアジーの大衆は、ロシアのブルジョアジーよりもプロレタリアートのほうを信頼している。なぜなら、ここでは、歴史が、抑圧民族にたいする被抑圧民族の解放闘争を日程にのぼせているからである。ブルジョアジーは、卑劣にも被抑圧民族の自由の大業を裏切ったが、プロレタリアートは自由の大業に忠実である。

民族問題と土地問題は、現在、ロシアの住民の小ブルジョア大衆にとって当面の根本問題である。これは争う余地がない。そして、このどちらの問題でも、プロレタリアートは、けっして「孤立していない」。プロレタリアートは人民の多数者を味方としている。このどちらの問題でも、プロレタリア的国家権力にたいして住民の多数者の支持をただちに保障するだけでなく、大衆のあいだの革命的熱情の真の爆発をも保障するような、断固たる、真に「革命的民主主義的」な政策を実行する能力をもっているのは、プ

ロレタリアートだけである。なぜなら、ツァーリズムのもとで見られたような、地主による農民の、大ロシア人によるウクライナ人の無慈悲な抑圧や、きらびやかな文句に隠れながら共和制のもとでも似たような政策をつづけようとする志向や、言いがかりや、侮辱や、奸計や、引延しや、小股すくいや、言いのがれ（ケーレンスキーが農民や被抑圧民族に贈っているいっさいのもの）でなくて、行為によって証明される熱烈な共感、地主にたいする即時の革命的措置、フィンランド、ウクライナ、ベロルシアのため、回教徒等々のための完全な自由の即時回復を、大衆ははじめて政府からうけとるだろうからである。

エス・エルやメンシェヴィキの諸君は、このことをよく知っているので、大衆に敵対する自分たちの反動的な民主主義政策を応援させるために、協同組合の半カデット的上層部を引きいれている。だから、実践的政策の特定の条項について、たとえば、すべての地主所有地をいますぐ農民委員会に引き渡すべきかどうか、フィン人やウクライナ人のしかじかの要求をみたしてやるべきかどうか、などについて、彼らが、大衆の意見をたずね、人民投票か、あるいはせめてすべての地方ソヴェト、すべての地方組織における投票をおこなう決心をつけることはけっしてないであろう。

ところで、今日の全生活の根本問題である平和の問題について考えてみよう。プロレタリアートは「他の諸階級から孤立している」という。……だが、この問題では、プロレタリアートは、真に全国民の代表者、すべての階級のすべての活動的で誠実な分子の代表者、小ブルジョアジーの大多数者の代表者として、立ち現われている。なぜなら、プロレタリアートだけが、権力を獲得したあとで、ただちにすべての交戦国民にむかって公正な講和を提議するだろうし、プロレタリアートだけが、できるだけ公正な講和をできるだけ急速に達成するために、真に革命的な措置（秘密条約の公表、等々）をとるだろうからである。

いや、プロレタリアートの孤立を叫びたてている『ノーヴァヤ・ジーズニ』の諸君は、そうすることで、自分たちがブルジョアジーの前で主観的におじけづいていることを表明しているにすぎない。プロレタリアートがまさにいま小ブルジョアジーの多数者から「孤立」していないということが、ロシアの客観的な事態であることは疑いをいれない。「連立」のみじめな経験を経たいまこそ、プロレタリアートは人民の多数者の共感をかちえている。ボリシェヴィキが権力を維持するためのこの条件は、現にそなわっている。

＊＊

第二の論拠は、プロレタリアートが、「民主主義派の真の生きた勢力から孤立している」ということである。これはいったいなんの意味なのか、理解できない。フランス人がこういう場合に言うように、これは、きっと「ギリシア語」なのだろう。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』の文筆家たちは大臣級の人々である。彼らは、カデットのもとで大臣をつとめるのにまったく適当だと言えよう。なぜなら、そういう大臣に要求されているのは、まったくなんの意味もない、どんな醜悪事でもつつみかくすことができ、したがって帝国主義者や社会帝国主義者の喝采を博することとうけあいの、体裁のよい、なめらかな空文句をしゃべる能力にほかならないからである。ノーヴァヤ・ジーズニ派が、プロレタリアートは民主主義派の真の生きた勢力から孤立していると主張したことで、カデットや、ブレシコフスカヤや、プレハーノフの一派の喝采を博することは、うけあいである。なぜなら、この主張は、カデットやブレシコフスカヤやプレハーノフやケーレンスキーの一派こそ「民主主義派の生きた勢力」だと、間接に述べたもの――でなくとも、この主張は、そう述べたもののようにとられるであろう――だからである。

これは違う。彼らは死んだ勢力である。それは、連立の歴史が証明したことである。

ブルジョアジーとブルジョア・インテリゲンツィア的なとりまきとの前でおじけづいたノーヴァヤ・ジーズニ派は、『ヴォーリャ・ナローダ』(二二)や『エヂンストヴォ』(二三)などのように、本質上カデットとなんの違いもないエス・エルとメンシェヴィキの右翼を「生きた勢力」と認めている。だが、われわれは、富農とではなく大衆と結びついているものだけを、連立の教訓に学んで連立から離れたものだけを、生きた勢力と考える。小ブルジョア民主主義派の「活動的な生きた勢力」を代表しているのは、エス・エルとメンシェヴィキの左翼である。この左翼が、とくに七月の反革命以後に強くなったことは、プロレタリアートが孤立していないことを示す、最も確かな客観的徴表の一つである。

このことを最近いっそう明瞭に示しているのは、エス・エル中間派の左への動揺である。この左への動揺は、自分のグループはキーシキン一派との新しい連立を支持することはできないという、九月二四日のチェルノーフの声明によって証明されている。エス・エル党は、都市や、とくに農村で同党が集めた票数からみれば、主導的な支配的政党であるが、これまで同党の代表者の圧倒的多数を占めていたエス・エル中間派のこの左への動揺は、ある事情のもとでは民主主義派は純ボリシェヴィキ的な政府に「全幅的な

支持を保障」しなければならないという、さきほど引用した『デーロ・ナローダ』の言明が、とにかくたんなる空文句ではないことを、証明している。

エス・エル中間派がキーシキンとの新しい連立を支持することを拒否したとか、地方の祖国防衛派メンシェヴィキのあいだで連立の反対者が優勢となった（カフカーズのジョルダニア、その他）とかいうような事実は、これまでメンシェヴィキやエス・エルのあとについていた大衆のある部分が、純ボリシェヴィキ的な政府を支持するであろうことを示す、客観的な証明である。

ロシアのプロレタリアートは、現在、ほかならぬ民主主義派の生きた勢力なるものから孤立してはいないのである。

＊
＊＊

第三の論拠は、プロレタリアートは「技術的に国家機構を掌握できないであろう」というのである。おそらく、これが、いちばん普通の、いちばん流行の論拠であろう。この理由からしても、またこれが勝利したプロレタリアートの当面する最も重大な、最も困難な任務の一つを示しているという理由からしても、この論拠は最大の注意に値する。これらの任務が非常に困難なものであることは疑いないが、もしわれわれが、社会主義者と自称しながら、そういう任務の遂行から逃げようというだけの目的でこの困難を指摘するのであれば、われわれとブルジョアジーの召使との違いは実践においてなくなってしまうであろう。プロレタリア革命の任務が困難であることは　プロレタリアートの味方にとっては、この任務の遂行の方法をいっそう注意ぶかく具体的に研究する動機とならなければならない。

国家機構ということばでわれわれがさすのは、なによりもまず、常備軍と警察と官僚である。『ノーヴァヤ・ジーズニ』の文筆家たちが、プロレタリアートはこのような機構を技術的に掌握できないだろうと言っているのは、極端な無知を暴露するものであり、実生活の諸事実をも、ボリシェヴィキの文献のなかでずっとまえから示されているいろいろな考察をも、考慮にいれるつもりのないことを暴露するものである。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』の文筆家たちはみな、マルクス主義者とはいわないまでも、マルクス主義を知っている教養ある社会主義者をもって自任している。ところで、マルクスは、パリ・コミューンの経験にもとづいて、プロレタリアートはできあいの国家機構をそのまま掌握して、それを自分自身の目的のために行使することはできないこと、プロレタリアートはこの機構を粉砕し、それを新しい国家機構とおきかえなければならないことを教えた（この問題

については、私はある小冊子のなかでもっとくわしく論じている。この小冊子の第一分冊は脱稿ずみであり、『国家と革命。マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務』という表題で、近く出版されるはずである(32)。この新しい国家機構はパリ・コミューンによってつくりだされたが、ロシアの労働者・兵士・農民代表ソヴェトも、それと同じ型の「国家機構」である。この事情については、私は一九一七年四月四日以来なんども指摘してきたし、またボリシェヴィキの協議会の決議や、さらにボリシェヴィキの文献のなかでも、このことは論じられている。もちろん、『ノーヴァヤ・ジーズニ』が、自分たちはマルクスやボリシェヴィキとまったく意見を異にしていると言明するのはかまわないが、しかし、ボリシェヴィキが困難な問題にたいしてふまじめな態度をとっていると言って、あんなにもたびたび高慢な悪罵をあびせてきたその新聞が、この問題をまるっきり回避するのは、自分自身に貧困証明書を交付するものである。

プロレタリアートは「国家機構」を「掌握し」て、それを「動かす」ことはできない。しかし、プロレタリアートは、旧来の国家機構のなかにある抑圧的なもの、因襲的なもの、抜きがたいブルジョア的なものをすべて粉砕して、そのかわりに彼ら自身の新しい機構を設けることはできる。労働者・兵士・農民代表ソヴェトは、まさにそういう機構である。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』がこの「国家機構」のことをまったく忘れてしまったのは、まったくとほうもないことと言わなければならない。その理論的考察においてこのようにふるまうノーヴァヤ・ジーズニ派は、実質上、カデットが政治的実践でやっているのと同じことを、政治理論の分野でやっているのである。なぜなら、もしプロレタリアートと革命的民主主義派がどんな新しい国家機構も必要としないとすれば、ソヴェトはその raison d'être〔存在理由〕を失い、その存在権を失うわけであり、コルニーロフ派のカデットがソヴェトの一掃をめざしているのは正しいことになるからである！

『ノーヴァヤ・ジーズニ』のこのとほうもない理論的誤りと政治的盲目さは、国際派メンシェヴィキ（ピーテルの市議会の最近の選挙のさいに『ノーヴァヤ・ジーズニ』がブロックを結んだ当の相手）でさえ、この問題ではある程度ボリシェヴィキへの接近を示しただけに、ますますとほうもないものである。たとえば同志マルトフが、民主主義会議で公表したソヴェト多数派の宣言には、次のように書いてある。

「……革命の最初の数日間に真の人民的創造力の強力

な爆発によってつくりだされた労働者・兵士・農民代表ソヴェトは、旧政体の国家組織のぼろぼろになった織物にとってかわった革命的国家組織の新しい織物をなすものであった。……」

この言い方は、いくらかきれいすぎる。つまり、ここでは、ことばのあやが政治思想の明瞭さの不足をおおいかくしている。ソヴェトは、まだ古い「織物」にとってかわってはいないし、また、この古い「織物」というのは、旧政体の国家組織ではなくて、ツァーリズムならびにブルジョア共和制の国家組織なのである。しかし、いずれにしても、マルトフはここではノーヴァヤ・ジーズニ派にくらべて数等ぬきんでている。

ソヴェトは、第一に、労働者と農民の武装力を提供する新しい国家機構である。そのうえ、この武装力は、旧来の常備軍の武装力のように人民から遊離したものではなくて、最も緊密に人民と結びついている。この武装力は、軍事的には、これまでの武装力とはくらべものにならないほど強力であり、革命の見地からすれば、かけがえのないものである。第二に、この機構は、これまでの国家機構にはそれに近いものさえまったく見られないほど緊密な、切っても切れない、たやすく点検でき更新できる結びつきを、大衆とのあいだ、人民の多数者とのあいだにつくりだす。第三に、この機構は、官僚的形式主義を排して、人民の意志にしたがってその構成員を選挙し解任できるので、これまでの機構にくらべてはるかに民主的である。第四に、この機構は、種々さまざまな職業との強固な結びつきをつくりだし、そのことによって、官僚の手を借りないで、きわめて徹底的なさまざまな改革を実行することを容易にする。第五に、この機構は、前衛の組織形態、すなわち労働者と農民という被抑圧階級の最も自覚した、最も精力的で、先進的な部分の組織形態をつくりだしており、こうして、被抑圧階級の前衛がそれをつかって、これまでまったく政治生活のそとに、歴史のそとにいたこれらの階級の巨大な大衆全体を向上させ、訓練し、教育し、率いることのできる機構となっている。第六に、この機構は、議会制度の長所と直接的民主主義の長所とを結びつける可能性、すなわち立法機能と法律の執行とを選挙された人民代表の一身に結びつける可能性をあたえる。これは、ブルジョア議会制度にくらべて、民主主義の発展のうえで世界史的な意義をもつ一歩前進である。

一九〇五年には、われわれのソヴェトはいわば胎児の状態にあったにすぎない。なぜなら、ソヴェトはわずか数週間存続しただけだからである。当時の事情のもとでは、ソヴェトの全面的発展など論外であったのは、明らかである。

一九一七年の革命でも、まだこれは論外である。なぜなら、数ヵ月の期間ではあまりにも短かすぎるし、またいちばん肝心なことは、エス・エルとメンシェヴィキの指導者たちがソヴェトをけがし、ソヴェトをおしゃべり会議の役割に、指導者たちの協調政策の付属物の役割に引きさげてしまったからである。ソヴェトは、リーベル、ダン、ツェレテーリ、チェルノーフらの指導のもとで生きながら腐敗し、分解していった。ソヴェトは、全国家権力を掌握したのちにはじめて、ほんとうに発展し、その素質と能力を完全に発揮することができる。なぜなら、そうならなければ、ソヴェトは、なにもする仕事がなく、たんなる萌芽か（だが、あまりにも長いあいだ萌芽であることはできない）、たんなる玩弄物か、どちらかでしかないからである。「二重権力」はソヴェトの麻痺状態である。

もし革命的諸階級の人民的想像力がソヴェトをつくりださなかったなら、ロシアではプロレタリア革命は見込みのない事業であったろう。なぜなら、プロレタリアートが旧来の機構によっては権力を維持できないことは、疑いをいれないし、また新しい機構を即座につくりだすことはできないからである。ツェレテーリ＝チェルノーフがソヴェトをけがしたみじめな歴史、「連立」の歴史は、同時にソヴェトが小ブルジョア的幻想から解放されていった歴史であり、ソヴェトが、ありとあらゆるブルジョア的連立の醜さと不潔さをあますところなく実地に研究した「煉獄」遍歴の歴史である。この「煉獄」がソヴェトをそこなわずに鍛えあげたものと、希望したい。

＊
＊＊

プロレタリア革命の主要な困難は、このうえなく精密かつ良心的な記録と統制、生産物の生産と分配にたいする労働者統制を全人民的な規模で実行することである。

ノーヴァヤ・ジーズニ派の文筆家たちはわれわれに反論して、君たちは「労働者統制」のスローガンをかかげることでサンディカリズムにおちいっている、と言ったが、この反論は、よく考えないでストルーヴェ式に棒暗記した「マルクス主義」を、生徒ふうの愚かしいやり方で適用した見本であった。サンディカリズムは、プロレタリアートの革命的執権を否認するか、でなければ、このような執権や、一般に政治権力に、ずっと下級の地位をあたえる。われわれはこれを第一位におくのである。ノーヴァヤ・ジーズニ派の精神で、労働者統制ではなくて、国家統制を、と言うだけにとどめるなら、それは、ブルジョア改良主義的な空文句であり、実質上は純カデット的な公式である。なぜなら、労働者が「国家」統制に参加することには、カデ

ットも別に反対ではないからである。そういう参加は、ブルジョアジーが労働者をだます最もうまい方法であり、あらゆるグヴォズデフ、ニキーチン、プロコポーヴィチ、ツェレテーリなどの徒党を政治的に巧みに買収する最もうまい方法であることを、コルニーロフ派のカデットはよく知っているのである。

われわれが「労働者統制」と言う場合には、いつでもこのスローガンをプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のスローガンとならべて、いつでもそのあとにつづけてかかげるのだが、そうすることでわれわれは、ここで問題となっているのがどういう国家であるかを説明しているのである。国家は、階級支配の機関である。だが、どの階級の支配の機関か？もしブルジョアジーの支配の機関であるならば、それは、すでに半年以上もロシアの労働人民を「コルニーロフ化し、ケーレンスキー化している」カデット＝コルニーロフ＝「ケーレンスキー的」国家組織である。もし、プロレタリアートの支配の機関であるなら、もし、プロレタリア国家、すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が問題となっているのなら、労働者統制は、生産物の生産と分配を、全人民的に、包括的に、いたるところで、このうえなく精密かつ良心的に記録するものとなることができる。

これがいちばん困難な点である。ここに、プロレタリア革命すなわち社会主義革命の主要な任務がある。ソヴェトがなければ、この任務は、すくなくともロシアでは解決できないであろう。ソヴェトは、世界史的に重要なこの任務を解決できる、プロレタリアートの組織活動の輪郭を示している。

ここでわれわれは、国家機構の問題のもう一つの側面にゆきついた。現代国家には、常備軍、警察、官僚という、主として「抑圧的な」機構のほかに、銀行やシンジケートととくに緊密に結びついた一つの機構が、こう言ってよければ、大量の記録＝登録活動を果たす機構がある。この機構を粉砕してはならないし、またその必要もない。この機構を資本家への従属から引き離さなければならない。この機構から、資本家と、資本家の影響をつたえる糸とを断ち切り、切りすて、切りとらなければならない。この機構をプロレタリア的ソヴェトに従属させなければならない。この機構を、いっそう広範な、いっそう包括的な、いっそう全人民的なものにしなければならない。そしてこれは、巨大資本主義がすでに実現した成果をもとにすれば、実行可能なことである（それは、一般にプロレタリア革命が、これらの成果に立脚してはじめてその目的を達成できるのと同様である）。

資本主義は、銀行、シンジケート、郵便制度、消費組合、

職員組合のような記録の諸機構をつくりだした。大銀行がなければ、社会主義は実現できないであろう。

大銀行は、社会主義を実現するためにわれわれが必要とし、しかも、われわれが資本主義からできあがったかたちで引きつぐ「国家機構」である。そして、ここでのわれわれの任務は、ただ、このすばらしい機構を資本主義的にかたわにしているものを切りすてて、それをいっそう大規模な、いっそう民主主義的な、いっそう包括的なものにすることである。量は質に移行する。すべての郷、すべての工場に支店をもつ単一の、きわめて巨大な国立銀行——それは、すでに一〇分の九まで社会主義的な機構である。それは、生産物の生産と分配との全国的な簿記、全国的な記録である。これは、いわば社会主義社会の骨格のようなものである。

こういう「国家機構」（それは、資本主義のもとでは完全に国家機構というわけではないが、われわれのところでは、社会主義のもとでは、完全に国家機構となるであろう）なら、われわれはこれを「掌握して」、一挙に、一片の命令で「動かす」ことができる。なぜなら、そこで簿記や、統制や、登録や、記録や、勘定の実際の仕事をしているのは職員であるが、職員の大多数は、自分でもプロレタリア的または半プロレタリア的な地位にあるからである。

これらの職員は、プロレタリア政府の一片の命令で国家公務員の地位に移すことができるし、また移さなければならない。これは、ブリアンその他のブルジョア大臣のような資本主義の番犬が、一片の命令でストライキにはいった鉄道従業員を国家公務員の地位に移すのと同様である。われわれはこういう国家公務員をはるかに多数必要とするであろうし、またもっと数多く手にいれることができる。なぜなら、資本主義は記録と統制の機能を単純化して、読み書きのできる者にならだれにでもやれる、比較的に簡単な記入の仕事にしてしまったからである。

銀行、シンジケート商業、その他等々の職員大衆を「国家化する」ことは、ソヴェトが統制し監督するという条件のもとでは、技術的にも（資本主義と金融資本主義とがわれわれのために予備的な仕事をしておいてくれたおかげで）、政治的にも、完全に実現できることである。

ところで、人数はごく少ないが、資本家に心をひかれている高級職員については、資本家にたいするのと同様に「きびしく」取り扱わなければならないであろう。彼らも、資本家と同様に反抗するであろう。この反抗は、打ち砕かなければならないだろう。そして、世にもおめでたいペシェホーノフは、ほんとうの「青二才政治家」として、まだ一九一七年六月というのに、「資本家の反抗は打ち砕かれ

た」と片言まじりにしゃべったが、プロレタリアートは、この子どもっぽい空文句、この子どもじみた空いばり、この幼児ふうのとっぴな発言を、真剣に現実のものとするであろう。

われわれはそうすることができる。なぜなら、問題は、住民中のわずかな少数者、文字どおりひとにぎりの人間の反抗を打ち砕くことだからである。職員組合、労働組合、消費組合、ソヴェトは、これらの人間の一人ひとりにたいしてきびしい監督を実施するであろうし、その結果、あらゆるチート・チートィチは、スダンのフランス軍のように包囲されるであろう。[94] これらのチート・チートィチの名まえはわれわれにわかっている。そのためには、社長、重役、大株主、等々の名簿を手にとってみるだけで十分である。全ロシアを合わせても、彼らの数は数百人、せいぜい数千人である。ソヴェトや、職員組合その他の機構をもつプロレタリア国家は、彼らの一人ひとりにたいして一〇人、一〇〇人の監督者をつけることができるから、「反抗を打ち砕く」というよりは、おそらく、（資本家にたいする）労働者統制によってどんな反抗も不可能にすることとさえできるだろう。

問題の「眼目」は、資本家の財産を没収することではなく、資本家と、彼らのありうべき味方とにたいして、全人民的な、包括的な労働者統制を実施することであろう。没収しただけでは、なんにもならない。なぜなら、没収には、正しい分配の組織や、記録という要素はふくまれていないからである。もし報告を回避したり、真実を隠したり、法律をくぐったりする可能性をいっさいなくすことができれば、没収を公正な租税の徴収（たとえ「シンガリョーフ」式の税率[95]によってであっても）に代えることも、容易であろう。だが、この可能性をなくすものは、労働者国家の労働者統制だけであろう。

強制的シンジケート化、すなわち、国家統制のもとで強制的に組合に結合することは、資本主義によって準備されたことであり、ドイツでユンカーの国家が実行したことである。ソヴェトは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、これをロシアで完全に実現することができるであろう。これは、われわれに普遍的な、最新の、非官僚主義的な「国家機構」をあたえてくれるであろう。*

＊ 強制的シンジケート化の意義については、くわしくは私の小冊子『さしせまる破局、それとどうたたかうか』[96]を見よ。

＊＊

ブルジョアジーの第四の論拠は、プロレタ

リアートは国家機構を「動かす」ことができないだろう、というのである。この論拠は、まえの論拠にくらべてすこしも目新しいものではない。もちろん、旧来の機構を、われわれは掌握したり、動かしたりすることはできないであろう。新しい機構、ソヴェトは、「真の人民的創造力の強力な爆発」によって、すでに動きだしている。必要なことはこの機構から、エス・エルやメンシェヴィキの指導者たちの支配によってはめられたかせをとりのぞくことだけである。この機構はすでに運転している。必要なことは、それが全速力で前進するのを妨げているぶざまな小ブルジョア的なお荷物を、投げすてることだけである。

ここで、右に述べたことの補足として、二つの事情を考察しなければならない。その第一は、われわれによってではなく、戦時帝国主義の段階にある資本主義によってつくりだされた新しい統制手段のことである。第二は、プロレタリア型の国家を統治するうえで民主主義を拡大することの重要性についてである。

穀物の専売制とパンの切符制を始めたのは、われわれではなくて、戦時の資本主義国家である。この国家は、すでに資本主義の枠内で全般的労働義務制をつくりだした。これは、労働者にたいする軍事懲役場である。しかし、プロレタリアートは、ここでも、彼らのすべての歴史的創造がそうであるように、自分の武器を資本主義からとりいれるのであって、それを「頭で考えだす」のではなく、「無からつくりだす」のでもない。

穀物の専売制、パンの切符制、全般的労働義務制——これらは、プロレタリア国家の手中にあれば、全能の権力をもつソヴェトの手中にあれば、記録と統制の最も強力な手段となるのであって、資本家や、一般に金持にたいして押しおよぼされるとき、彼らにたいして労働者がそれを適用するとき、それらは、資本家の反抗を克服し彼らをプロレタリア国家に服従させるために国家機構を「動かす」うえで、歴史上にかつてない力をあたえるであろう。この統制と労働の強制という手段は、国民公会[32]の法律やそのギロチンよりも強力である。ギロチンは威嚇しただけであり、積極的反抗を打ち砕いただけである。われわれにはそれでは足りない。

われわれにはそれでは足りない。われわれは、資本家にプロレタリア国家の全能の力を感じさせ、この国家への積極的反抗の考えを忘れさせるという意味で、資本家を「恐怖させ」なければならないだけではない。われわれは、消極的反抗——疑いもなく、いっそう危険で有害な反抗——をも、打ち砕かなければならない。われわれは、およそあらゆる反抗を打ち砕かなければならないだけではない。わ

れわれは、新しい国家組織の枠内で働くことを強制しなければならない。資本家を「追いだす」だけでは十分でない。資本家を（やくざな、どうにもならない「反抗者」を追いだしたうえで）新しい国家の勤務に服させなければならない。これは、資本家にも、ブルジョア・インテリゲンツィアや、職員の一定の上層部等々にも、あてはまることである。

われわれはそのための手段をもっている。戦時の資本主義国家そのものが、そのための手段と武器をわれわれの手にあたえている。その手段とは、穀物の専売制、パンの切符制、全般的労働義務制である。「働かざる者は食うべからず」――これこそ、労働者代表ソヴェトが国家権力となったときに実現することができ、また実現するであろう基本的な、第一義的な、最も主要な準則である。

労働者はだれでもみな労働手帳をもっている。この書類が、現在では、疑いもなく、資本主義的賃金奴隷制の書類であり、働く人間がいずれかの徒食者に所属することを示す証明書であるにせよ、それは労働者をいやしめるものではない。

ソヴェトは、金持にたいして、ついでしだいに全住民にたいしても、労働手帳制を実施するであろう（農民国では、労働手帳は、おそらく農民の圧倒的多数者には、今後長いあいだ不必要であろう）。労働手帳は「賤民」のしるしではなくなり、「下層」身分を示す書類ではなくなり、賃金奴隷制の証明書ではなくなるであろう。それは、新しい社会では、もはや「労働者」はいないが、そのかわり働き手でない者もいないということの証明書に変わるであろう。

金持は、彼らの活動分野にいちばん近い関係にある労働組合または職員組合から、労働手帳を受け取らなければならない。彼らは、毎週、またはある一定の期間ごとに、彼らが良心的にその仕事を果たしていることを、この組合から証明してもらわなければならない。この証明がなければ、彼らはパンの切符、一般に食料を受け取ることはできない。

プロレタリア国家はこう言うだろう。――われわれには、銀行事業や企業連合体のすぐれた組織者が必要であり（この仕事では、資本家はより多くの経験をもっており、そして経験のある人間がいれば仕事はより容易にすすむ）、以前にくらべてますます多くの技師や、農業専門家や、技術員や、科学的教養のあるあらゆる種類の専門家が必要である。すべてそういう働き手にたいして、われわれは、彼らの力に相応した馴れた仕事をあたえるであろう。われわれは、全面的な賃金の平等制を、おそらく徐々にしか実施しないであろうし、過渡期には、そういう専門家により高い給与をひきつづき認めるであろうが、しかし、われわれは、

彼らを全面的な労働者統制のもとにおき、「働かざる者は食うべからず」という準則を完全かつ無条件に実行させるだろう。ところで、この仕事の組織形態を、われわれは頭で考えだすのではなく、できあがったかたちで資本主義から引きつぐのである。銀行、シンジケート、優良工場、試験場、アカデミー、その他がそれである。われわれに必要なのは、先進諸国の経験から最もすぐれた模範をとりいれることだけであろう。

そして、われわれが次のように言うとき、すなわち、全資本家階級はきわめて頑強に反抗するであろうが、全住民をソヴェトに組織することによってこの反抗は打ち砕かれるであろう、そのさいとくに頑強で言うことをきかない資本家は、当然に全財産の没収と投獄とで処罰しなければならないが、その一方でプロレタリアートの勝利は、たとえば本日の『イズヴェスチヤ』に報じられている次のような事例を増大させるであろう、と言うとき、われわれは、もちろん、いささかもユートピア主義におちいったわけではなく、きわめて冷静な実際的計算の基盤を離れたわけではない。

「九月二六日に、工場委員会中央評議会に二人の技師がやってきて、技師の一グループが社会主義技師組合を創立することをきめたと声明した。この組合は、現在の時期を実質上社会革命の端緒であると考えて、労働者大衆の指揮に従うことを申し入れ、労働者の利益を守って、労働者諸組織と完全に一致した行動をとることを望んでいるのである。工場委員会中央評議会の代表たちはこれに答えて、本評議会は、生産の労働者統制についての工場委員会第一回協議会(九八)の基本テーゼをその綱領にふくめた技師部を、喜んで自己の組織のなかにつくるであろう、と述べた。近日中に、工場委員会中央評議会の代表と、社会主義技師組合発起人団との合同会議がひらかれるはずである。」（中央執行委員会『イズヴェスチヤ』、一九一七年九月二七日）

***

プロレタリアートは国家機構を動かすことができないだろう、と彼らはわれわれにむかって言う。

一九〇五年の革命以後にロシアを統治してきたのは、一三万人の地主であり、彼らは、一億五〇〇〇万の人々にはてしない暴力をふるうというやり方で、この人々に限りない嘲弄をくわえ、大多数者に苦役となかば飢えた生存とを強制するというやり方で、統治してきた。

それなのに、ボリシェヴィキ党の二四万人の党員が、貧民の利益のために、金持に対抗して、ロシアを統治するこ

とができないだろう、というのだ。この二四万人は、今日すでに一〇〇万人以上の成人住民の票をかちえている。なぜなら、党員数と党への投票数とのあいだにこういう比率があることは、ヨーロッパとロシアの経験によって確かめられているからである。たとえば、八月のピーテル市議会の選挙がそうである。こうして、われわれはすでに、毎月二〇日にたんまり金をもらうためにではなく、思想上から社会主義国家に献身している一〇〇人の「国家機構」をもっている。

それればかりではない。われわれは、われわれの国家機構をただちに、一躍一〇倍にする「奇跡的な手段」――どんな資本主義国家もかつてもったことがなく、またもつことのできない手段――をもっている。この奇跡的な手段とは、勤労者、貧民を、日常の国家統治活動に引きいれることである。

この奇跡的な手段がどんなにたやすく適用できるものか、その効力がどんなに確かなものかを明らかにするために、できるだけ簡単で明瞭な実例をとってみよう。

国家が特定の家族をその住居から強制的に立ちのかせて、別の家族をそこに住まわせる必要があるとしよう。こういうことは、資本主義国家がたえずやっていることであって、われわれのプロレタリア国家すなわち社会主義国家も、やはりそうするであろう。

資本主義国家は、働き手をなくして家賃を払えなくなった労働者家族を追いたてる。執行吏や、巡査または民兵など、一小隊もやってくる。労働者地区の場合には、立ちのきを執行するのにカザックの一支隊が必要である。なぜか？　執行吏や「民兵」が、きわめて大勢の護衛兵がいなければ、行くのをことわるからである。立ちのきの一幕が、周辺の全住民のあいだに、絶望のふちに追いつめられた何千何万の人々のあいだに、激しい怒り、資本家と資本主義国家とにたいする激しい憎しみをよびおこすので、執行吏や民兵部隊は、いつなんどき自分たちが八つ裂きにされてしまうかわからないのを、承知している。そこで、大きな兵力が必要となり、どうしても遠い辺境から数個連隊を大都市によびよせなければならなくなる。これは、兵士が都市貧民の生活を知らないほうがよいからであり、社会主義に「感染」しないようにするためである。

プロレタリア国家は、極貧の家族を強制的に金持の住居に住まわせなければならない。われわれの労働者民兵の一支隊が、かりに一五人の隊員からなるものとしよう。すなわち、二人の水兵、二人の兵士、二人の自覚した労働者（そのうち一人だけがわが党の党員か同情者であればよい）、つぎに一人のインテリゲンツィア、八人の貧しい勤労者

——かならず五人以上の婦人と、家事使用人、雑役労働者、等々からなる——である。この支隊が金持の住居にやってきて、それを検査し、二人の男と二人の婦人が五室を使用しているのを見つけたとする。「みなさん、あなたがたはこの冬は二つの部屋に詰めて住み、二つの部屋は、いま地下室に住んでいる二家族が住めるようにしてください。われわれが技師の助けを借りて（あなたも技師のようですね？）みんなのためによい住宅を建てるまで、当分あなたがたは詰めて暮らさなければなりません。あなたの電話は一〇家族の共用とします。そうすれば、仕事をしたり、買物に出あるいたりなどする時間が、一〇〇時間節約されるでしょう。それから、あなたがたの家族には、軽い労働を果たす能力のある無職の半労働者が二人、つまり、五五歳の婦人市民一人と一四歳の男子市民一人がいますね。この人たちは、一〇家族のための物資の正しい分配を監視し、それに必要な記帳をするために、毎日三時間ずつ勤務してください。われわれの支隊にいる学生の市民が、いまこの国家命令の正文を二部つくりますから、あなたがたは、どうか、この命令をきちんと守ることを約束した請書を出してください。」

私の考えでは、古いブルジョア的な国家機構および国家統治と、新しい社会主義的な国家機構および国家統治との関係を、明瞭な実例で示せば、こういうふうになると思う。

われわれはユートピア主義者ではない。どの雑役労働者でもどの炊事婦でも、すぐさま国家統治にくわわる能力があるわけではないことを、われわれは知っている。この点では、われわれは、カデットや、ブレシコフスカヤや、ツェレテーリと、同意見である。しかし、われわれは、国家を統治し、日常、毎日の統治活動にあたることができるのは、金持や、金持の家族出身の官吏だけだと考える先入見とただちに手を切るように要求する点で、この諸君と違っている。われわれは、自覚した労働者や兵士が国家統治の仕事の訓練をうけること、この訓練がただちに始められること、すなわち、この訓練にすべての勤労者、すべての貧民をただちに参加させはじめることを要求する。

人民に民主主義を教えることには、カデットもまた同意であることを、われわれは知っている。カデットの夫人たちは、イギリスやフランスの最良の原典によって、召使たちに婦人同権の講義をすることに、同意している。さらに、次の演奏会では、何千もの人々の前で、舞台で接吻劇が催されるであろう。講師の一カデット夫人がブレシコフスカヤに接吻し、ブレシコフスカヤが前大臣ツェレテーリに接吻し、こうして、感謝にみちた人民は、共和主義的平等、自由、友愛とはどんなものかを学ぶことであろう。……

いかにも、カデットや、プレシコフスカヤや、ツェレテーリが、彼らなりの流儀で民主主義に傾倒していて、人民のあいだでそれを宣伝していることは、われわれも認める。しかし、民主主義についてわれわれがもっている観念がいくらか違っているとすれば、いったいどうしたらよいのか?

われわれの考えでは、また戦争が人民に負わせたこのうえなく恐ろしい傷をいやすためには、戦争の前代未聞の重荷と苦難を軽くするためには、革命的民主主義が必要であり、まさにさきほど例にひいた貧民のための住宅の配分のような、革命的な方策が必要である。都市でも農村でも、食糧、衣料、はきもの、等々についても、これとまったく同様な措置をとらなければならないし、農村では土地その他について同じようにしなければならない。われわれは、このような精神による国家統治に、二〇〇〇万人とは言わないまでも、一〇〇〇万人の国家機構を、どの資本主義国家でもまだ見たことのないような機構を、ただちに引きいれることができる。こういう機構は、われわれだけがつくりだすことができる。なぜなら、われわれには、住民の大多数者のあますところのない、心からの共感が保障されているからである。こういう機構は、われわれだけがつくりだすことができる。なぜなら、われわれのところには、資本主義のもとで見習修業をつんだのは、むだではなかった)自覚した労働者がいるからである。彼らは、労働者民兵をつくりだし、それをしだいに全人民的民兵に拡大する(すぐさま拡大しはじめながら)ことができる。自覚した労働者は指導にあたらなければならないが、しかし、勤労被抑圧者の真に広範な大衆を統治の仕事に引きいれる力を、彼らはもっている。

もちろん、この新しい機構の当初の措置に、誤りは避けられない。しかし、農民が農奴制度からぬけだして自由となり、自分のことを自分でやりはじめたときに、はたして彼らは誤りをおかさなかったであろうか? 人民がみずから統治することを学ぶためには、誤りをまぬかれるためには、実践の道以外に、真の人民自治にただちに着手する以外に、いったい他の道がありうるだろうか? 現在、いちばん肝心なことは、その社会的地位全体からみてまったく資本に依存している特別の官吏だけが国家を統治できるように考えるブルジョア・インテリゲンツィアの偏見を捨てることである。いちばん肝心なことは、ブルジョアや官吏や「社会主義的」大臣が、これまでどおりのやり方で統治しようと試みているが、統治できず、七ヵ月もたつのに農民国で農民蜂起に出あっているというような事態に、終止

符をうつことである!!　いちばん肝心なことは、被抑圧勤労者の心に、自分の力にたいする自信をいだかせることであり、また、彼らは貧民の利益のために、パンや、あらゆる食料や、牛乳や、衣料や、住宅等々の、正しい、きわめて厳格に規制された、組織的な分配に、自分でとりくむことができるし、またとりくまなければならないということを、実践にもとづいて彼らに示すことである。こうしなければ、ロシアを崩壊と破滅から救うことはできない。そして、統治の仕事をプロレタリアと半プロレタリアの手に引き渡すことに、誠実に、大胆に、いたるところで着手するなら、歴史上かつて見られなかったような大衆の革命的熱情がよびおこされ、苦難とたたかう人民の勢力が何倍にも増大するであろうし、その結果、わが国の偏狭な旧官僚勢力に解決不可能と思われている多くの事柄が、資本家や旦那衆や役人のために鞭に駆りたてられて働くのではなく、自分自身のために働きはじめている幾千万の大衆の力にとっては、実現可能なものとなるであろう。

＊
＊＊

『ノーヴァヤ・ジーズニ』の九月二七日付第一三八号にのった『ボリシェヴィキと権力の問題』という論文のなかで、同志バザーロフが特別の意気ごみで、しかもとくべつ不出来にとりあげた中央集権制の問題も、国家機構の問題の一部である。

同志バザーロフは次のように論じている。「ソヴェトは、国家生活のすべての分野に適合した機構ではない。」なぜなら、ソヴェトが、多くの地方で実際に「完全な権力」をもっていたにもかかわらず、「荒廃との闘争の分野でいくぶんでも満足すべき結果に達することができなかった」ことは、七ヵ月間の経験が示したところであり、また「ペテルブルグ執行委員会の経済部にある幾十幾百の記録資料」が確証したところだからである。必要なのは、「生産部門別に分けられ、それぞれの部門の範囲内で厳密に中央集権化され、単一の全国的中央機関に下属している」機構である。彼が言うには、「ボリシェヴィキがどれほど計画家を嘲笑しようと……、肝心なことは、古い機構をとりかえることではなくて、ただそれを改良することである……」と。

同志バザーロフのこれらの議論はすべて、まったく驚くほどたよりないものであって、ブルジョアジーの議論の書き写しであり、ブルジョアジーの階級的立場を反映したものである！

じっさい、ロシアのどこかで、いつかソヴェトが「完全な権力」をもったことがあるように言うのは、まったくこっけいである（もしこれが、資本家の利己的な階級的なう

そを繰りかえしているのでないとすれば)。完全な権力というからには、すべての土地、すべての銀行、すべての工場を支配する権力であることが必要である。歴史の経験や、政治と経済の結びつきについての科学上の資料をすこしでも知っている人なら、この「些細な」事情を「忘れる」ことはできないはずである。

ブルジョアジーの欺瞞的な手口は、ソヴェトに権力をあたえず、ソヴェトのあらゆる真剣な措置をサボタージュし、政府を自分の手ににぎり、土地や銀行等々を支配する権力を自分の手ににぎりながら、荒廃の責任をソヴェトに転嫁する点にある!! 連立のいたましい経験は、まさにこの点にある。

ソヴェトはかつて完全な権力をもったことはなく、ソヴェトのとった方策は、一時しのぎの糊塗策と混乱の増大のほかには、なにひとつもたらすことができなかった。

その綱領からみても、全党の戦術からみても、確信ある中央集権論者であるボリシェヴィキにむかって、中央集権制の必要を証明してみせるのは、まったくあいている扉を押しやぶってはいろうとするようなものである。『ノーヴァヤ・ジーズニ』の文筆家たちがこういうつまらないひまつぶしをやっているのは、われわれが彼らの「全国家的」立場を嘲弄した意味と意義が、彼らにまったく理解できなかったためにほかならない。そして、これがノーヴァヤ・ジーズニ派に理解できなかったのは、彼らが階級闘争の学説を口先で認めるだけで、考えたうえで認めているのではないからである。彼らは、階級闘争についての棒暗記した文句を繰りかえしながら、理論的にはこっけいで、実践的には反動的な「超階級的立場」にたえず迷いこんでおり、しかも、こういうふうにブルジョアジーのご機嫌をとるのを、「全国家的」計画とよんでいるのである。

親愛な諸君、国家は階級的概念なのだ。国家とは、一つの階級の他の階級にたいする強力機関あるいは機構である。国家が、ブルジョアジーのプロレタリアートにたいする強力機構であるあいだは、プロレタリア的スローガンはただ一つ、この国家の破壊でしかありえない。だが、国家がプロレタリア国家となるとき、それがプロレタリアートのブルジョアジーにたいする強力の機構となるときには、われわれは、完全に、無条件に、強固な権力と中央集権制とに賛成する。

もっとわかりやすく言えば、こうである。――われわれは「計画」を嘲笑しているのではなく、バザーロフ一派が「労働者統制」を否認し、「プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)」を否認するのは、ブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)に賛成するものであることを、彼らが理解できない点を、嘲笑しているのである。

中間の道はない。中間の道は、小ブルジョア民主主義者のむなしい夢想である。

ソヴェトの中央集権制に反対したり、それの統合に異議をとなえた中央機関は、かつて一つもなかったし、そういうボリシェヴィキはかつて一人もいなかった。生産部門別の工場委員会や、それの中央集権化には、われわれはだれひとり異論がない。バザーロフの攻撃は的はずれである。

われわれがいま嘲笑しており、これまでも嘲笑してきたし、今後も嘲笑するものは、「中央集権制」や「計画」ではなくて、改良主義である。なぜなら、連立の経験を経たあとでは、諸君の改良主義はとくにこっけいだからである。そして、「この機構をとりかえるのではなくて、それを改良する」などと言うのは、改良主義者になることを意味し、革命的民主主義者ではなくて改良主義的民主主義者になることを意味する。改良主義とは、支配階級のあたえる譲歩にほかならず、支配階級を倒すことではなくて、支配階級が権力を自分の手にたもちながらあたえる譲歩にほかならない。

これは、まさに半年間の連立によって試験ずみのことである。

われわれが嘲笑するのはこのことである。階級闘争の学説を考えぬかなかったバザーロフは、ブルジョアジー――「そこだ、そこだ、われわれはまさに改良に反対してはいないのだ。われわれはまさに労働者が参加することにも、われわれは賛成だ。全国家的統制に賛成だ。われわれはまったく同意見である」と声をそろえて歌っているブルジョアジー――のとりこになってしまう。そして、善良なバザーロフは、客観的には資本家のことばの受売り役を演じているのだ。

激しい階級闘争の状況下で「中間的」立場をとろうと試みる人々は、いつでもこうだったし、今後もこうであろう。そして、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の文筆家たちが階級闘争を理解できないからこそ、彼らの政策は、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだをこのようにこっけいに、たえまなく動揺しているのである。

親愛な市民諸君、どうか「計画」にとりかかってくれたまえ。それは政治ではなく、階級闘争の問題でもない。そこでは、諸君は人民のお役に立つことができよう。諸君の新聞には経済学者が山ほどいる。生産と分配の規制の問題にたずさわりたがっている技師その他の人々と力を合わせたまえ。ロシアにおける生産物の生産と分配や、銀行、シンジケートその他についての正確な資料の実務的な調査研究に、諸君の大「機構」（新聞）の付録をあてたまえ。この仕事でなら、諸君は人民のお役に立つことができようし、この仕事でなら、諸君の二股政策もとりたててひどい害を

およぼすことはないであろう。「計画」にかんするそういう活動なら、労働者の嘲笑ではなくて感謝をかちえるであろう。

プロレタリアートが勝利したあかつきには、彼らはこうするであろう。彼らは、経済学者、技師、農業専門家等々に、労働者組織の統制のもとで、「計画」の作成、その点検、集中化によって労働を節約する手段の探求、最も簡単で、安あがりで、便利で、普遍的な統制の方策と方法の探求という仕事にあたらせるであろう。われわれは、この仕事にたいして、経済学者や統計家や技術員にたっぷり金を支払うであろうが、……しかし、もし彼らが勤労者の利益のために誠実に、全幅的にこの活動を遂行しないなら、われわれは彼らに食うものをあたえないであろう。

われわれは中央集権制に賛成であり、「計画」に賛成であるが、それも、プロレタリア国家の中央集権制と計画に賛成なのであり、搾取者に対抗して、貧民、勤労者、被搾取者の利益になるような、生産および分配のプロレタリア的規制の計画に賛成なのである。われわれが「全国家的」ということばで理解することに同意するのは、資本家の反抗を打ち砕くもの、完全な権力を人民の多数者、すなわちプロレタリアと半プロレタリア、労働者と貧農にあたえるものという意味だけである。

＊＊

第五の論拠は、「情勢は異常に複雑である……」から、ボリシェヴィキは権力を維持できないだろう、ということである。

おお、賢人たちよ！　彼らは、どうやら、あきらめて革命を受けいれる用意はあるが、ただそれは、「異常に複雑な情勢」がない場合にかぎるらしい。

そんな革命なぞあるものではないし、そういう革命をあこがれての溜息のなかには、ブルジョア・インテリゲンツィアの反動的悲嘆のほかにはなにもない。革命が一見してそれほど複雑でない情勢のもとで始まったときでさえ、革命そのものが、発展するにつれて、つねに異常に複雑な情勢を生みだす。なぜなら、革命、真の深刻な革命、マルクスの表現によれば「人民」革命は、古い社会制度が死滅し、新しい社会制度、幾千万人の新しい生活様式が生まれる、信じられないほど複雑な、苦痛にみちた過程だからである。革命は、このうえなく鋭い、激烈な、必死の階級闘争であり、内乱である。歴史上の大革命の一つとして、内乱なしにすんだものはない。そして、「異常に複雑な情勢」がなくても内乱が起こりうるなどと考えることのできるのは、箱のなかの男だけである。

異常に複雑な情勢がなければ、革命もないであろう。狼を恐れる者は、森にははいらないがいい。

第五の論拠については、検討を要するようなことはなにもない。なぜなら、ここには、経済思想も、政治思想も、また一般にほかのどんな思想もないからである。ここにあるのは、革命を嘆き革命におじけづいた人々の溜息だけである。この溜息を特徴づけるために、二つのちょっとした個人的思い出を語らせていただきたい。

七月事件のすこしまえに、ある富裕な技師と会話をかわしたことがある。この技師は、かつては革命家であり、社会民主党の、それどころかボリシェヴィキ党の党員だった人である。いまは彼は、荒れ狂って手のつけられない労働者にたいする驚きと怒りにみちみちている。彼（外国にいたことのある、教養のある人）は言う。これがせめてドイツの労働者のような労働者であったなら。自分は、もちろん一般に社会革命が不可避であることを理解している。しかし、わが国のように、戦争のために労働者の水準が低下しているところでは、……これは革命などではない。これは深淵である、と。

もし歴史が、ドイツの特急列車が停車場にすべりこむときのように、おだやかに、静かに、なめらかに、正確に、社会革命にみちびくなら、彼は喜んで社会革命を承認する。ちゃんとした車掌が車室の扉を開いて知らせる。「社会革命駅です。Alle aussteigen！（みなさん、お降りください！）」そういう場合には、チート・チートィチたちのもとでの技師の地位から、労働者組織のもとでの技師の地位に移ってならないわけがどこにあろう。

この人は、ストライキをいろいろ見てきた。ごく平穏な時期にさえ、ごく普通のストライキでさえ、つねにどれほどの熱情の嵐をよびおこすかを、彼は知っている。階級闘争が一つの巨大な国の勤労人民全体を立ち上がらせるときには、また幾百年となく地主に苦しめられ、何十年ものあいだ資本家とツァーリの役人のために略奪され打ちのめされてきた幾千万の人々が、戦争と搾取によって絶望の淵に追いつめられたときには、この嵐がさらに何百万倍も強烈になるにちがいないことを、彼はもちろん理解している。すべてこれらのことを、彼は「理論上」理解している。すべてこれらのことを、彼は口先だけでは認めている。彼はただ「異常に複雑な情勢」におじけづいているだけである。

七月事件のあとで、私は、ケーレンスキー政府が私に特別の心づかいを示してくれたおかげで、地下にもぐらなければならなかった。仲間の私をかくまってくれたのは、もちろん、労働者である。ピーテルの場末の労働者地区のあ

るささやかな労働者住宅で、昼食をごちそうになった。主婦がパンをはこんできた。主人は言った。「ごらん、なんというすばらしいパンだろう。『奴ら』は、きっと、いまでは悪いパンをよこす勇気がないのだ。わしらは、ピーテルでよいパンが手にはいるなどと思うことさえ忘れるところだった。」

七月事件についてのこういう階級的評価は、私を驚かせた。私の思考は、この事件の政治的意義をめぐってはたらき、諸事件の経過全体のなかでのこの事件の役割を測り、歴史のこのジグザグがどういう情勢から生じたもので、どういう情勢を生みだすか、変化した情勢にたいしてわれわれの党機構を適応させるには、われわれのスローガンや党機構をどう変えるべきかを検討していた。困窮を味わったことのない人間である私は、パンのことを考えたことがなかった。パンは、私にとっては、文筆活動の一種の副産物として、いわばひとりでに現われてくるものであった。思考は、政治的分析を媒介として、なみなみならぬ複雑なこみいった道をとおって、あらゆるものの基礎に、パンのための階級闘争に、たどりつく。

ところが、被抑圧階級の一員は、たとえ高給をもらっていて、まったく知識的な労働者の場合でも、私たちインテリゲンツィアとは天地のひらきのある驚嘆すべき単純さと率直さで、しっかりした決断と驚くべき明察で、いきなり問題の核心をつく。全世界は二つの陣営に分かれる。「われわれ」勤労者と、「奴ら」搾取者とである。なにが起こっても、露ほども狼狽しない。つまり、それは、労資の多年にわたる闘争のなかの一戦闘にすぎないのである。木を切れば、こっぱは飛ぶものだ。

「革命のこういう『異常に複雑な情勢』はなんと苦しいことか」――ブルジョア・インテリゲンツィアはこう考え、また感じる。

「われわれは『奴ら』を締めつけてやった。『奴ら』はこれまでのような勝手なまねはできない。もっと締めつけて――そっくりほうりだしてやろう」――労働者はこう考え、また感じる。

＊＊

最後の、第六の論拠は、プロレタリアートは「敵対勢力の全圧力に対抗できないであろう。この圧力は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）ばかりか、おまけに革命全体まで一掃してしまうだろう」というものである。

諸君、おどすのはよしたまえ。おじけづかせようとしてもだめだ。われわれは、コルニーロフ反乱のさいに、この敵対勢力と彼らの圧力とを見た（ケーレンスキー体制も、

コルニーロフ体制とすこしも違わない)。プロレタリアートと貧農がどのようにしてコルニーロフ反乱を一掃したか、ブルジョアジーの味方と、とくに富裕で、革命にたいしてとくに「敵対的な」地方の小土地所有者層の少数分子とが、どんなにみじめでたよりない状態におちいったかは、すべての者が見たし、人民はそれをおぼえている。九月三〇日付の『デーロ・ナローダ』は、憲法制定議会(蜂起した農民を抑える「軍事的措置」の保護のもとに招集されるところの！)がひらかれるまでは、ケーレンスキー体制(すなわちコルニーロフ体制)やツェレテーリ版のにせブルィギン国会を「がまんする」ように、労働者を説きつけようとして、息もきれぎれに、ほかならぬ『ノーヴァヤ・ジーズニ』の第六の論拠を繰りかえして、「ケーレンスキー政府はけっして屈服しないだろう」と声をからして叫んでいる(つまり、ソヴェトの権力、労働者・農民の権力に屈服しないだろう、というのだ。『デーロ・ナローダ』は、ポグロム〔大規模な組織的襲撃〕組織者や反ユダヤ主義者、帝政派やカデットにおくれをとるまいとして、この権力を「トロツキーとレーニンの」権力とよんでいる。エス・エルは、こういうやり方をするまでになりさがったのだ!!)。

しかし、『ノーヴァヤ・ジーズニ』も『デーロ・ナローダ』も、自覚した労働者をおじけづかせることはできない。諸君は言う。――「ケーレンスキー政府はけっして屈服しないだろう」と。これは、もっと簡単に、率直に、明瞭に言えば、コルニーロフ反乱を繰りかえすだろう、ということだ。しかも、『デーロ・ナローダ』の諸君は、それは「内乱」であろうし、「恐ろしい見とおし」が生じるであろう、とあえて言明するのだ！

そうではない、諸君、諸君は労働者をだますことはできないだろう！　それは内乱ではなくて、ひとにぎりのコルニーロフ派のまったく見込みのない一揆であろう。それとも、彼らは人民に「屈服しない」ことを望み、なにがなんでも人民をそそのかして、ヴィボルグでコルニーロフ派に起こったことを大規模に繰りかえさせようと望んでいるのか？　もしこれがエス・エルの望んでいることなら、もしこれがエス・エル党員ケーレンスキーの望んでいることなら、彼は人民を激昂させることはできる。しかし、諸君、そうしても、労働者や兵士をおじけづかせることはできないだろう。

なんという法外なあつかましさだろう。彼らは、新たにブルィギン国会を贋造し、偽造の手段によって反動的な協同組合員や農村の富農を助太刀にかきあつめ、それに資本家や地主(いわゆる選挙有資格分子)をつけくわえた。そして、このコルニーロフ派の徒党によって、人民の意志、

労働者と農民の意志をぶちこわそうと望んでいる。

農民国で農民蜂起がいたるところで大河となってあふれるまでになったのだ！　考えてもみたまえ。人口の八割までが農民からなる民主的共和国で、農民が蜂起をおこすまでになったのだ。……九月三〇日号で、恥しらずにも労働者と農民にむかって「がまんする」ように勧めているこの同じ『デーロ・ナローダ』、すなわちチェルノーフの新聞であり「社会革命」党の機関紙である同紙は、九月二九日号の社説では、次のように告白せざるをえなかった。

「ほかならぬ中部ロシアの農村にいまなお支配している債務奴隷制的関係を廃止するために、いままでのところほとんどなにもなされていない。」

この『デーロ・ナローダ』自身、九月二九日号の同じ社説のなかで、「革命的大臣たち」のやり方には「ストルィピン式の手口がなお強く感じられる」と述べている。言いかえれば、もっと簡単明瞭に言えば、ケーレンスキー、ニキーチン、キーシキンの一派をストルィピン主義者とよんでいる。

「ストルィピン主義者」ケーレンスキーの一派は、農民を追いつめて蜂起までおこさせるにいたったが、いまや農民を抑えるために「軍事的措置」をとっており、憲法制定議会が招集されるということで人民をなだめている（ケーレンスキーやツェレテーリがすでに一度人民をあざむいたにもかかわらず。彼らは、七月八日には、憲法制定議会は期日どおり九月一七日に招集される、とおごそかに発表しながら、そのあとで、前言をやぶって、メンシェヴィキのダンの勧告さえも無視して、憲法制定議会の日取りを延ばし、しかも当時のメンシェヴィキ的中央執行委員会が一〇月末に延ばすよう希望したのに、一一月末まで憲法制定議会を延ばしたのである）。「ストルィピン主義者」ケーレンスキーの一派は、憲法制定議会が近く招集されるからと言って、人民をなだめている。まるで、こういう問題で一度うそをついた人間を、人民が信頼できるとでもいうようであり、また辺鄙な農村で軍事的措置をとっている政府、つまり、自覚した農民の勝手な逮捕や選挙の偽造を明らかに隠しだてしている政府が、憲法制定議会を正規に招集するなどと、人民が信じることができるとでもいうようだ。

農民を追いつめて蜂起までおこさせながら、恥しらずにも農民にむかって、「『がまん』しなければならない、待たなければならない、蜂起した農民を『軍事的措置』によって鎮定している政府を信頼しなければならない！」と言う。

六月一九日以後の攻勢[101]で何十万というロシア兵を死なせ、戦争を長びかせ[102]、ドイツの水兵が反乱をおこしてその上官を海中にほうりこむような事態にまでいたらせながら、た

えず平和についてのおしゃべりをつづけ、しかも、すべての交戦国に公正な講和を申し入れようとはせずに、労働者や農民にむかい、死んでゆく兵士にむかって、恥しらずにもこう言う。――「がまんしなければならない」、「ストルィピン主義者」ケーレンスキーの政府を信頼せよ。コルニーロフ派の将軍たちをもう一ヵ月信頼せよ。その一ヵ月のあいだに、彼らはさらに何十万かの兵士を屠殺場に送りこむかもしれないが、……「がまんしなければならない」と。

これは、恥しらずではないだろうか？？

いや、ケーレンスキーの党同僚であるエス・エルの諸君、兵士は諸君にだまされはしないであろう！

労働者と兵士は、ただの一日も、このうえただの一時間も、ケーレンスキー政府をがまんしないだろう。なぜなら、ソヴェト政府がすべての交戦国にむかってただちに公正な講和を申し入れるであろうし、したがって、一〇中の九まで即時の休戦と早急の講和をもたらすであろうということを、彼らは知っているからである。

わが農民軍の兵士たちは、農民蜂起を軍事的措置によって鎮圧しているケーレンスキー政府が、ソヴェトの意志にさからって居すわるようなことを、ただの一日も、このうえただの一時間も、がまんしないであろう。

いや、ケーレンスキーの党同僚であるエス・エルの諸君、労働者と農民はもうこれ以上諸君にだまされはしないであろう。

＊＊

死ぬほどおじけづいた『ノーヴァヤ・ジーズニ』の断言するところではプロレタリアートの執権を一掃するはずの敵対勢力の圧力の問題には、なおもう一つ、法外な論理的および政治的な誤りがふくまれている。それに気がつかずにいられるのは、おじけづいてすっかりとりみだしてしまった人々だけである。

「敵対勢力の圧力は、プロレタリアートの執権を一掃してしまうだろう」と諸君は言う。よろしい。しかし、親愛な同胞諸君、諸君はみな経済学者であり、教養ある人ではないか。民主主義派とブルジョアジーとを対置するのはばかげており、もの知らずであること、それはちょうど重さと長さとを対置するようなものだということを、諸君はみな知っている。なぜなら、民主主義的なブルジョアジーもいれば、非民主主義的な（ヴァンデ派[103]となりかねない）小ブルジョア層もいるからである。

「敵対勢力」というのは空文句である。これに反して、ブルジョアジー（彼らには地主も味方している）というのは階級的概念である。

ブルジョアジーと地主、プロレタリアート、小ブルジョアジーすなわち小経営主、なによりも農民――これが、三つの基本的「勢力」であって、あらゆる資本主義国と同じように、ロシアもこの三つの「勢力」に分かれている。これこそ、すべての資本主義国で（ロシアをもふくめて）、科学的な経済的分析によってだけでなく、すべての国の近代史全体の政治的経験によって、一八世紀以来のヨーロッパのすべての革命の経験によって、また一九〇五年と一九一七年の二度のロシア革命の経験によって、久しい以前から明らかにされている、三つの基本的「勢力」である。

つまり、諸君は、ブルジョアジーの圧力がプロレタリアの権力を一掃するだろうといって、プロレタリアをおどすのか？　諸君のおどしは、けっきょく、こういうことになるし、こういうことにしかならない。それには、これ以外の内容はなにもない。

よかろう。たとえば、ブルジョアジーが労働者と貧農の権力を一掃できるとすれば、その場合には、「連立」以外に、すなわち、小ブルジョアとブルジョアジーの同盟または協定以外に、残された道はない。それ以外のものは考えることもできない!!

しかし、連立は半年もためされ、しかも破綻に終わったではないか。そして、親愛な、しかし考える力のない『ノーヴァヤ・ジーズニ』の市民諸君、諸君自身が連立を拒否したではないか。

では、どういうことになるか？

『ノーヴァヤ・ジーズニ』の市民諸君、諸君はひどく混乱してしまい、ひどくおじけづいているので、五つはさておき、わずか三つまで数えるくらいの、ごく簡単な考察においてさえ、諸君は辻つまを合わせることができないのだ。

次の三つのうちのどれかである。全権力をブルジョアジーに渡すか――だが、諸君はずっとまえからそれを主張するのはやめているし、またブルジョアジー自身、すでに四月二〇―二一日に人民が肩を一ゆすりしてそういう権力をほうりだしたこと、またいまではその三倍も断固たるやり方で無慈悲にほうりだすであろうことを知っているので、これをほのめかすことさえあえてしないのである。それとも、権力を小ブルジョアジーに渡すか、つまり、小ブルジョアジーとブルジョアジーとの連立（同盟、協定）か。というのは、小ブルジョアジーが自主的に、独立に権力を掌握しようとは思わないこと、また掌握できないことは、すべての革命の経験が証明したところであり、経済科学もまた――資本主義国では資本に味方するのも、労働に味方するのも勝手だが、その中間をとることはできないことを、明らかにすることによって――証明しているところだから

である。ロシアでは、この連立は半年のあいだに何ダースもの方法を試みて、失敗したのである。

最後に、もう一つの道として、ブルジョアジーの反抗を打ち砕くために、ブルジョアジーに対抗して全権力をプロレタリアと貧農に渡すか。この道はまだためされていない。そして、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の紳士諸君、諸君は、ブルジョアジーの前で自分がおじけづくことで人民をおじけづかせて、この道をとるのを人民に思いとどまらせようとしているのである。

第四の道は考えることもできない。

つまり、『ノーヴァヤ・ジーズニ』は、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を恐れており、プロレタリア権力がブルジョアジーに打ち破られるかもしれないという理由で、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を拒否しているが、これは、資本家との協調の立場にこっそり復帰するのと同じことである!!!　反抗を恐れ、この反抗を打ち砕けることを信じないで、「資本家の反抗を恐れよ、この反抗は諸君の手におえないだろう」と人民に教える者が、とりもなおさず、またしても資本家との協調をよびかけるものであることは、火を見るよりも明らかである。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』は、たよりなく、みじめにも混乱してしまった。それは、現在すべての小ブルジョア民主主義者が混乱しているのと同様である。彼らは、連立の破綻を見ているので、それを公然と擁護する勇気はないが、それと同時に、ブルジョアジーから保護をうけていて、プロレタリアと貧農の全一の権力を恐れているのである。

＊＊

資本家の反抗を恐れながら、同時に革命家と自称し、社会主義者のうちに数えられることを望むとは、なんという恥さらしだろう！　このような声があげられるようなことが可能となるには、日和見主義にむしばまれた世界社会主義は、思想的になんと深く堕落しなければならなかったことか！

資本家の反抗力については、われわれはそれをすでに見てきたし、全人民もそれを見てきた。なぜなら、資本家は、他の諸階級よりも意識水準が高く、ソヴェトの意義をただちに理解して、ただちにその全力を極度にまでふりしぼって、ありとあらゆるものを動員し、見さかいもなくあらゆることをやってのけ、前代未聞のうそ、中傷、軍事的陰謀にまでうったえて、ソヴェトを破壊し、それを無力にし、それをけがし（メンシェヴィキとエス・エルの援助によって）、それをおしゃべり会議に変え、何ヵ月もつづく空疎きわまるおしゃべりと革命ごっこで農民や労働者を飽きあ

きさせてきたからである。

ところが、プロレタリアと貧農の反抗力がどんなものか、われわれはまだ見たことがない。なぜなら、この力は、権力がプロレタリアートの手にはいったときにはじめて、そして、国家の権力が被抑圧階級の手にはいったこと、この権力が地主と資本家にたいする貧民の闘争を助け、地主と資本家の反抗を打ち砕いていることを、困窮と資本主義的奴隷制とに押しつぶされた幾千万の人々が自分の体験によって知り、感じとるときにはじめて、あますところなく発揮されるからである。そのときにはじめて、われわれは、資本家にたいするどんなに無尽蔵の反撃力が人民のなかにひそんでいるかを、知ることができるであろう。そのときにはじめて、エンゲルスが「潜在的社会主義」とよんでいるもの[102]が現われてくるであろう。そのときにはじめて、公然たる敵と隠れた敵とを問わず、自分の本心を行為にあらわしている敵と、それを消極的なかたくなさにあらわしている敵とを問わず、労働者階級の権力の敵一万人につき、一〇〇万人の新しい戦士が立ちあがるであろう。これは、いままでは政治的に眠っていて、困窮の苦しみと絶望のなかで味気ない日々をおくっていて、自分たちもまた人間であり、自分たちにも生きる権利があり、現代の中央集権国家の全威力は自分たちの役にも立つことができ、プロレタリア民兵部隊は自分たちにも、国家統治の仕事に直接に、緊密に、日常的に参加するように全幅的な信頼をもってよびかけていることを、信じなくなっていた人々である。

資本家と地主が、プレハーノフ、ブレシコフスカヤ、ツェレテーリ、チェルノーフ一派の諸君のご親切な協力をえて、民主的共和制をけがすため、富へのご奉公によってけがすために、あらゆることをやったので、人民は、冷淡と無関心におちいって、なにがどうなろうと自分たちには同じだという気分になっている。飢えている者には共和制と君主制の区別はつかないし、他人の利益のために死んでゆく、こごえた、はだしの、疲れはてた兵士は、共和国を愛することはできないからである。

しかし、プロレタリア権力は富にへつらわずに貧民を助けること、この権力は革命的方策をとるのをためらわないこと、この権力は徒食者から余分の物資を取りあげて飢えた人々にあたえること、この権力は宿なしを強制的に金持の家に住まわせること、この権力は、牛乳の代金を金持に支払わせるが、すべての貧しい家庭の子どもに牛乳が十分に渡らないうちは、一滴の牛乳も金持にはやらないこと、土地は働く者の手に渡り、工場や銀行は労働者統制のもとにおかれること、財産を隠匿する百万長者にはただちに厳重な懲罰がくわえられること——これらのことを、どの雑

役労働者も、どの失業者も、どの炊事婦も、どの零落農民も、すべての者が見てとるとき——新聞によってではなく、自分の目で見てとるとき——、貧民がこれらのことを見てとり、感じるときには、資本家と富農のどんな勢力も、何千億という金を打ち破ることはできないであろう。いや、反対に、人民革命が全世界を征服するであろう。なぜなら、すべての国に社会主義的変革が成熟しつつあるからである。

もしわが国の革命が自分自身を恐れずに、プロレタリアートに全権力をゆだねるなら、それは不敗である。なぜなら、われわれの背後には、さらに測りしれないほど多くの、いっそうすすんだ、いっそうよく組織された、プロレタリアートの世界的な勢力がひかえているからである。この勢力は、戦争によって一時抑えつけられてはいるが、絶滅されてはおらず、むしろ戦争によって増加しているのである。

＊＊＊

ボリシェヴィキの権力、すなわち、貧農の心からの支持を保障されているプロレタリアートの権力を、資本家諸君が「一掃するだろう」と恐れるとは！　なんという近視眼、なんという恥ずべき人民恐怖、なんという偽善であろう！　こういう恐怖を示す人は、自分で信じてもいないのに、習慣で、空文句として、どんな内容ももたせずに、「正義」ということばを口にする、あの「上流」（資本主義的な尺度で測れば上流だが、実際には腐敗した）「社会」に属する人々である。

一例をあげよう。

ペシェホーノフ氏は、周知の半カデットである。トルドヴィキとして、ブレシコフスカヤやプレハーノフらの同志として、これ以上に穏健な人は見つからないだろう。これ以上にブルジョアジーによく仕える大臣は、いままでになかった。これ以上に熱烈な「連立」すなわち資本家との協定の味方は、世界じゅうにまだなかった！

ところで、祖国防衛派の『イズヴェスチヤ』の伝えるところによれば、この紳士が、「民主主義」（ブルィギン式と読め）会議での演説のなかで、次のように認めざるをえなかったのである。

「二つの綱領がある。一つはグループ的要求、階級的および民族的要求の綱領である。このような綱領を最もおおっぴらに主張しているのは、ボリシェヴィキである。しかし、民主主義派の他の部分にとっても、この綱領を拒むことは、けっしてたやすいことではないであろう。なぜといって、これは勤労大衆の要求であり、だまされ抑圧されている諸民族の要求だからである。だから、民

主主義派がボリシェヴィキと手を切ったり、これらの階級的要求を拒んだりすることがそうやすやすとできないのは、なによりもこれらの要求が本質的に公正なものだからである。われわれは、革命以前はこの綱領のためにたたかったし、それを実現するためにこそ革命をなしとげたのであって、事情がいまのようでさえなければ、われわれはみな協力一致してこの綱領を支持したであろうが、しかし、現在の事情のもとでは、この綱領は非常に危険である。ちょうど国家がそれをみたすことが不可能となった時機に、それらの要求が提出されているだけに、現在ではこの危険はますます大きなものになっている。まずはじめに全体――国家――を守り、それを破滅から救うことが必要である。そのためには、道は一つしかない。これらの要求がどれほど公正で根拠あるものに思えても、それらをみたすのではなく、反対に、それらを制限し、犠牲にすること、これである。犠牲は、各方面がはらわなければならない」(『中央執行委員会イズヴェスチヤ』九月一七日号)。

資本家が権力をにぎっているあいだは、ペシェホーノフ氏が守っているのは、全体ではなくて、ロシアと「連合国」の帝国主義的資本の利己的な利益だということが、彼らにはわからないのである。資本家と手を切り、彼らの秘密条約、彼らの併合(外国領土の強奪)、彼らの銀行・金融詐欺と手を切ったときにはじめて、戦争は強奪戦争、帝国主義戦争、略奪戦争でなくなることが、ペシェホーノフ氏にはわからないのである。そうしたあとではじめて、正式に申し入れた公正な講和を敵が拒否した場合に、戦争は防衛戦争、正義の戦争になることが、ペシェホーノフ氏にはわからないのである。資本のくびきを振りすて、土地を農民にあたえ、銀行と工場を労働者統制のもとにおいた国の防衛能力は、資本主義国の防衛能力の何倍も大きいことが、ペシェホーノフ氏にはわからないのである。

だが、肝心な点は、ペシェホーノフ氏がボリシェヴィズムの公正さを認めざるをえず、ボリシェヴィズムの要求が「勤労大衆」、すなわち住民の多数者の要求であることを認めざるをえないのは、とりもなおさず、自分の立場全体、小ブルジョア民主主義派の立場全体を放棄するものだということが、彼にわからないことである。

この点にこそ、われわれの力がある。だからこそ、われわれの政府は不敗であろう。というのは、ボリシェヴィキの綱領が「勤労大衆」と「抑圧されている諸民族」の綱領であることを、反対者ですら認めざるをえないからである。

なぜといってペシェホーノフ氏は、カデット、『エヂンストヴォ』と『デーロ・ナローダ』の一党、ブレシコフス

カヤ、プレハーノフらの政治的友人で、富農の代表者ではないか、ボリシェヴィキがコルニーロフの部隊か、あるいは（まったく同じことだが）ケーレンスキーの部隊に敗れるようなことがあれば、その翌日にはまだ息の根のとまっていないボリシェヴィキの目を日傘でえぐるためにやってくる女どもを妻君や姉妹にもつ紳士たちの代表者ではないか。

そういう紳士でさえ、ボリシェヴィキの要求の「公正さ」を認めざるをえないのである。

彼にとっては、「公正」は空文句にすぎない。だが、半プロレタリアの大衆にとっては、戦争のために零落し、苦しみ、疲れはてた、都市と農村の小ブルジョアジーの多数者にとっては、それは空文句ではなく、このうえなく鋭い、このうえなく焦眉の、このうえなく大きな問題、餓死するかどうかの問題、一きれのパンの問題である。だからこそ、「連立」をもとにしては、飢えた、零落してゆく人々の利益と搾取者の利益との「協定」をもとにしては、どんな政策も立てられないのだ。だからこそ、ボリシェヴィキの政府には、これらの大衆の圧倒的多数者の支持が保障されているのである。

公正は空虚なことばである——インテリゲンツィアや、経済的唯物論の「お尻をながめた」(103)という高尚な理由でマルクス主義者と自称したがっているろくでなしどもは、こう言う。

思想は、大衆を把握すると、力となる。そして、いまこそ、ボリシェヴィキ、すなわち革命的プロレタリア的国際主義の代表者は、全世界で広大な勤労大衆をうごかしている思想を、自分の政策に具現しているのである。

公正だけでは、搾取に憤激した大衆の感情だけでは、彼らを社会主義への正しい道にみちびくことはけっしてできないであろう。しかし、資本主義のおかげで大銀行、シンジケート、鉄道、その他の物的機構が成長しているとき、先進国のきわめて豊富な経験が技術的奇跡のたくわえを積みかさね、しかも資本主義がその応用を妨げているとき、また、自覚した労働者が、すべての勤労被搾取者の支持を得て、計画的にこの機構を掌握しこれを運用するために、二五万人の党に結束しているとき、——これらの条件が存在しているときには、ボリシェヴィキが、おじけづくことなく、権力を掌握して世界社会主義革命の勝利の日までそれを維持することができるならば、この地上にボリシェヴィキを妨げる力はないであろう。

あとがき

以上を書きあげたときに、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の一〇月一日号の社説が、新たな愚鈍の珠玉をもたらした。これは、ボリシェヴィキへの共感という旗のかげに隠れ、「挑発にのってはならない」という小賢しい俗論でよそおっているだけに、いっそう危険である（ボリシェヴィキをおじけづかせて、権力の掌握をやめさせることを目的とした、挑発だというわめき声のわなにひっかかってはならない）。

次にあげるのがその珠玉である。

「一方では七月三―五日のような運動の教訓、他方ではコルニーロフ事件の教訓は、次のことをまったく明瞭に示した。すなわち、住民のあいだにきわめて強い影響力をもつ諸機関を支配している民主主義派は、内乱において守勢の立場をとるときには不敗であるが、攻勢のイニシアティヴをとると、敗北をこうむり、すべての中間的な動揺分子を失う、ということである。」

もしボリシェヴィキが、この議論に現われているこういう俗物的愚鈍にたいして、どんなかたちであれいささかの譲歩でも示すなら、自分の党をも革命をも滅ぼすことになろう。

なぜなら、この議論の筆者は、内乱（どの点からみても気持のよい貴婦人にとって、これはまさに手ごろの主題である）を論じることにとりかかりながら、この問題についての歴史の教訓を歪曲して、信じられないほどこっけいなものにしてしまったからである。

プロレタリア的＝革命的戦術の代表者であり創始者であるカール・マルクスは、この教訓について、この問題にかんする歴史の教訓について、次のように論じた。

「ところで、蜂起は、戦争や、その他の技術とまったく同様に、一つの技術であって、若干の規則に従うものである。その規則を無視すれば、無視した側は破滅をまねくであろう。その規則は、そういう場合に考慮すべき当事者と状況の性質から論理的に出てくるものであって、きわめて平明、単純なものなので、一八四八年の短い経験によってさえ、ドイツ人はかなりによくこの規則をのみこんでいたのである。第一に、最後までやりぬく決意がないなら」（文字どおりには、諸君の勝負から起こる結果を敢然として迎える十分な覚悟がないなら）、「けっして蜂起をもてあそんではならない。蜂起は、きわめて不定な量を用いておこなう計算のようなものであって、その量の数値は日ごとに変動するかもしれない。諸君の

相手の軍勢は、組織の点でも、規律の点でも、伝統的権威の点でも、すべて有利である。」（マルクスが念頭においているのは、最も「困難な」蜂起の場合、すなわち、「強固な」旧権力にたいする蜂起、革命と政府の動揺とに影響されて分解するまでにいたっていない軍隊にたいする蜂起の場合である。）「きわめて優勢な兵力でこれに対抗しないかぎり、諸君は敗北し、破滅する。第二に、いったん蜂起の道にすすんだなら、最大の決意をもって行動し、攻勢をとれ。守勢はあらゆる武装蜂起の死である。そのときには、敵と戦いをまじえないうちに、すでに蜂起は敗北したも同然である。敵の軍勢が分散しているあいだに、その不意をうて。どんなに小さい勝利でも、日ごとに新しい勝利をあげるように心がけよ。蜂起の最初の勝利によって得た士気の優越を維持せよ。こうして、つねに最も打撃力の強い者に従い、つねに安全な側をさがしもとめる動揺分子を、味方に引きいれよ。敵が諸君にたいして兵力を集結できないうちに、これに退却をよぎなくさせよ。歴史上に知られた最大の革命的政策の大家であるダントンのことばを借りれば、de l'audace, de l'audace, encore de l'audace!（大胆なれ、大胆なれ、かさねて大胆なれ！）」（『ドイツにおける革命と反革命』、一九〇七年、ドイツ語版、一一八ページ）[101]

『ノーヴァヤ・ジーズニ』の「でもマルクス主義者」は、次のようにひとりごとを言うかもしれない。——われわれは、これをすっかりやりかえた。われわれは、三重の大胆さではなく、二つの資質をもっている。「二つありますよ。中庸と几帳面です。」[102]「われわれ」にとっては、世界史の経験、フランス大革命の経験は無である。「われわれ」にとって重要なのは、モルチャーリン式の眼鏡でゆがめられた一九一七年の二つの運動の経験である、と。

このすてきな眼鏡をとおさずに、この経験をながめてみよう。

諸君は、七月三—五日を「内乱」になぞらえている。それは、諸君が、アレクシンスキーやペレヴェルゼフの一派を信頼したからである。『ノーヴァヤ・ジーズニ』の諸君がこういう連中を信頼していること（日刊の大新聞の膨大な機構をもっていながら、七月三—五日についての情報を集めるために自主的になにもしないで）が、この諸君の特徴である。

しかし、しばらく、七月三—五日は内乱の端緒——ボリシェヴィキによって端緒の範囲内に押えられた——ではなくて、ほんとうの内乱であった、と仮定しよう。そう仮定してみよう。

そうだとすると、この教訓はいったいなにを証明してい

るか？

第一は、ボリシェヴィキは攻勢をとらなかった、ということである。なぜなら、もし攻勢をとっていたなら、ボリシェヴィキは、七月三日から四日にかけての夜に、そして七月四日にも、きわめて多くの成果をおさめたであろうことは、争う余地がないからである。もし内乱だという立場で論じるとすれば（事実が示しているところにしたがい、自然発生的な爆発が四月二〇—二一日の型のデモンストレーションに転化したことについて論じるのでなく、『ノーヴァヤ・ジーズニ』式に論じるとすれば）、守勢をとったことがボリシェヴィキの弱点であった。

つまり、「教訓」は、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の賢人たちを反論している。

第二に、ボリシェヴィキは七月三—四日には蜂起を目標とすることさえせず、ボリシェヴィキのどの合議体もそういう問題提起をさえしなかったが、その理由は、われわれと『ノーヴァヤ・ジーズニ』との論争の範囲外のことである。なぜなら、われわれは、「内乱」すなわち蜂起の教訓について論争しているのであって、革命党が、多数者を自分の味方に獲得していないことがはっきりしているため、蜂起を考えるのをさしひかえる場合について論争しているのではないからである。

だれでも知っているように、ボリシェヴィキが両首都のソヴェトでも、全国をつうじても多数者を獲得したのは（モスクワでは投票の四九％以上）、一九一七年七月よりはるかあとにはじめて起こったことであるから、したがって、そこから出てくる「教訓」は、またしても、『ノーヴァヤ・ジーズニ』のどの点からみても気持のよい貴婦人が見ようとしているものとは、まったく違ったものである。

いや、いや、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の市民諸君、諸君は政治に口を出さないほうがいい！

もし革命党が、革命的諸階級の先進部隊のなかでも、また全国をつうじても多数者を獲得していないなら、蜂起などということは論外である。そのうえ、蜂起のためには次のことが必要である。(一) 全国民的規模で革命が成熟していること。(二) 旧政府、たとえば「連立」政府が、道徳的、政治的に完全に破産していること。(三) すべての中間分子、すなわち、きのうまでは政府を完全に支持していたが、いまは政府をかならずしも完全には支持していない人々の陣営に、大きな動揺がおきていること。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』は、七月三—五日の「教訓」に言及しながら、なぜこのきわめて重要な教訓に注意さえしなかったのか？　それは、政治問題にとりくんだのが、政治家ではなくて、ブルジョアジーにおどしつけられたイ

ンテリゲンツィア仲間の人々だからである。

さらに、第三に、事実は次のことを語っている。すなわち、エス・エルとメンシェヴィキの瓦解が始まったのは、ほかならぬ七月三―四日のあとのことで、まさにツェレテーリらの諸君が彼らの七月政策によって暴露された結果であり、まさに大衆が、ボリシェヴィキこそ自分たちの前衛戦士で、「社会ブロック主義者」は裏切者であることを見てとった結果である、ということである。この瓦解は、コルニーロフ反乱がまだ起きないまえに、八月二〇日のピーテルの選挙、すなわちボリシェヴィキには勝利を、「社会ブロック主義者」には惨敗をもたらした選挙によって、完全に証明されていた（最近『デーロ・ナローダ』は、全政党についての総括数字を隠しておいて、この事実を反駁しようと試みた。これは自分をあざむき、読者をあざむくものである。『デーニ』〔102〕八月二四日号の資料は、市部だけについてのものであるが、それによれば、カデットの得票率は二二％から二三％に増大したが、その得票の絶対数は四〇％減少した。ボリシェヴィキの得票率は二〇％から三三％に増大し、その得票の絶対数は一〇％減っただけである。「中間派」の総得票率は五八％から四四％に減少し、その得票の絶対数は六〇％減少した!!）。

七月事件からコルニーロフ事件までのあいだのエス・エルとメンシェヴィキの瓦解は、さらに、両党の内部で「左」翼が伸び、ほとんど四〇％を占めるまでになったことによっても証明されている。これは、ケーレンスキーらの諸君がボリシェヴィキを迫害したことにたいする「復讐」である。

七月三―四日事件によって、プロレタリア党は、数百人の党員を「失った」にもかかわらず、非常に大きな利益を得た。なぜなら、ほかならぬこの困難な数日に、大衆は、プロレタリア党の献身とエス・エルおよびメンシェヴィキの裏切りを理解し、見てとったからである。つまり、そこから出てくる「教訓」は、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の言うようなものではけっしてなく、まったく別のものである。すなわち、激動する大衆を捨てて「モルチャーリン式民主主義」のほうへ去ってはならないということ、そして、蜂起したなら、攻勢をとり、敵の軍勢が分散しているあいだに敵の不意をうたなければならない、ということである。

そうではないだろうか、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の「でもマルクス主義者」諸君？

それとも、「マルクス主義」とは、客観的情勢の正確な評価を戦術の基礎とするものではなく、「内乱」だろうが、「ソヴェト大会と憲法制定議会の招集」だろうが、無意味に、無批判に、なんでもいっしょくたにするものなのか！

だが、諸君、それはまったくこっけいではないか。それは、マルクス主義をも、一般にあらゆる論理をも、まったく愚弄するものではないか！

もし客観的な事態のうちに、階級闘争が激化して「内乱」の段階にまで達する根拠がないなら、なぜ諸君は、「ソヴェト大会と憲法制定議会」（ここで検討している『ノーヴァヤ・ジーズニ』の社説には、まさにこういう表題がついている）に関連して、「内乱」を論じはじめたのか？ もしそれがないなら、諸君は、客観的情勢の条件のうちには内乱の基盤はなく、したがって、ソヴェト大会と憲法制定議会というような、平和的で、立憲的＝合法的で、法制上からみても、議会的な見地からみても「単純な」事物を、戦術の最重点とすることができるし、またそうしなければならないことを、読者にはっきりと語り、証明してみせるべきであろう。それならば、このような大会とこのような議会が実際に問題を解決できるという意見をもってもよいことになる。

だが、もし現在の時機の客観的諸条件のなかに内乱を不可避とする要素、あるいは、すくなくともそれをありうるものとする要素がふくまれているとすれば、もし諸君が「漫然と」内乱を論じはじめたのではなく、内乱の状況が現にあることをはっきりと見、感じ、触知してそうしたのだとすれば、それなら諸君は、どうしてソヴェト大会や憲法制定議会に最重点をおくことができるのか？？ これは、飢えて苦しんでいる大衆を嘲弄するものではないか！ いったい、飢えた人々が二ヵ月も「待つ」ことを承知するというのか？ また、諸君自身がその増大について毎日書きたてている荒廃が、ソヴェト大会や憲法制定議会まで「待つ」ことを承知するというのか？ また、われわれのほうから講和のための真剣な措置をとらないでも（すなわち、すべての交戦国にたいして正式に公正な講和を申し入れないでも）、ドイツが、ソヴェト大会や憲法制定議会まで攻勢に出るのを「待つ」ことを承知するというのか？ また、二月二八日から九月三〇日までは異常に激しく、かつてない急速度で進行したロシア革命の歴史が、一〇月一日から一一月二九日〔三〕までは、爆発や飛躍や敗戦や経済恐慌なしの、きわめておだやかな、平和な、合法的に均整のとれた速度ですすむと結論してよいような資料を、諸君はもっているのか？ また、ボリシェヴィキでない一士官ドゥバーソフが、戦線の兵士を代表して、自分たちは「戦わないであろう」と公式に声明したのに、その戦線の軍隊が「所定の」日取りまで静かに飢え、こごえているだろうというのか？ また、諸君が農民蜂起を「無政府」だ、「ポグロム」だとよびさえすれば、そしてケーレンスキーが農民に

たいして「兵」力をさしむけさえすれば、それで農民蜂起は内乱の要素でなくなるというのか？　また、農民国で政府が農民蜂起を鎮圧しているのに、この政府が憲法制定議会の招集のためにおだやかな、正規の、ほんものの活動をすることが、可能だというのか、考えられるというのか？
　諸君、「スモーリヌィ女学院の当惑」(二三)を笑ってはならぬ！　諸君の当惑はそれにおとるものではない。内乱の恐ろしい問題に、諸君は、当惑した文句とみじめな立憲的幻想で答えている。だからこそ私は言うのだ。万一ボリシェヴィキがこのような気分にとらえられるなら、自分の党を、自分の革命をも滅ぼすことになるだろう、と。

エヌ・レーニン

一九一七年一〇月一日

一九一七年九月末―一〇月一（一四）日に執筆
一九一七年一〇月に雑誌『プロスヴェシチェーニエ』第一―二号に発表
全集、第五版、第三四巻、二八七―三三九ページ所収
邦訳全集、第二六巻、七六―一〇三ページ所収

党綱領の改正によせて

　中央委員会によって一〇月一七日に招集されているロシア社会民主労働党（ボリシェヴィキ）の臨時党大会(二三)の日程に、党綱領改正の問題がのぼっている。すでに四月二四―二九日の党協議会が綱領の改正を必要と認めた決議(二三)を採択して、八項目にわたって改正の方向を示している。ついで、ピーテル［ペトログラード］とモスクワで、改正問題を取り扱った小冊子が発行され、またモスクワの雑誌『スパルターク』(二三)の八月一〇日付、第四号に、この主題を取り扱った同志エヌ・イ・ブハーリンの論文がのった。

＊『党綱領改正資料』、エヌ・レーニン編集ならびに序文、「プリボイ」出版所、一九一七年。
＊＊『党綱領改正資料』、ヴェ・ミリューチン、ヴェ・ソコリニコフ、ア・ローモフ、ヴェ・スミルノーフの論文集、ロシア社会民主労働党モスクワ工業地域地方ビューロー出版所、一

九一七年。

モスクワの同志たちの考えを検討してみよう。

一

「せまりつつある社会主義革命と結びつけて、帝国主義と帝国主義戦争の時代との評価」をあたえなければならない（四月二四―二九日の協議会決議、第一項）と認める点では、ボリシェヴィキの意見はみな一致しているので、ボリシェヴィキにとって、党綱領の改正にあたっての基本的な問題は、新しい綱領の書き方の問題である。すなわち、古い綱領に帝国主義の特徴づけを補うか（ピーテルの小冊子で私はこの意見を主張した）、それとも、古い綱領の本文全体を書きかえるか（四月協議会で設置された部会がこういう意見を述べ、モスクワの同志たちもこの意見を主張している）。わが党にとって、問題はなによりもまずこういうふうに出されている。

二つの草案がある。その一つは、私の提案する草案[二三]で、古い綱領に帝国主義の特徴づけを補ったものである。もう一つは、同志ソコリニコフの提案するもので、三人委員会（四月協議会で設置された部会によって選ばれたもの）の意見にもとづいており、綱領の総論部分全体を書きかえている。

部会で立案された書きかえのプランが理論上まちがっているということについても、私はやはり意見を述べるおりがあった（前記の小冊子、一一ページ）[二四]。いま、このプランが同志ソコリニコフの草案でどう実行されたかを見よう。

同志ソコリニコフは、われわれの綱領の総論部分を一〇の部分に分け、各部または各節に別々の番号を打っている（モスクワの小冊子の一一―一八ページを見よ）。読者が当該の箇所を見つけやすいように、われわれもこの番号を採用しよう。

現行の綱領の第一節は二つの命題からできている。第一の命題は、労働運動が交換の発展によって国際的な運動になった、と言っている。第二の命題は、ロシア社会民主党は自分をプロレタリアートの世界的軍隊の一部隊と見なす、と言っている。（そのさきの第二節には、すべての国の社会民主主義者の共通の終局目標について述べている。）

同志エス〔ソコリニコフ〕は、第二の命題をもとのまま変えずにおいて、第一の命題を新しい命題とおきかえ、交換の発展の指摘につけくわえて、「資本輸出」と、さらにプロレタリアートの闘争が「社会主義的世界革命」に移行することとについて述べている。

こうして、たちまち非論理的なものができあがり、いくつかのテーマがまじりあい、綱領構成の二つの型がごっちゃにされてしまった。二つに一つである。全体としての帝国主義の特徴づけから始めるか――それなら、「資本輸出」だけを取りだしてくるわけにはいかないし、また同志エスがやっているように、第二節にあるブルジョア社会の「発展行程」の分析を、もとのままに残しておくわけにはいかない。それとも、綱領構成の型をもとのまま変えずにおくか、つまり、われわれの運動がなぜ国際的な運動になったか、その共通の終局目標はどういうものか、ブルジョア社会の「発展行程」がどのようにしてこの終局目標にみちびくかを、はじめに説明するか、そのどちらかである。

同志エスの綱領の構成が非論理的で首尾一貫していないことを、いっそう明瞭に示すために、古い綱領の書きだしを全文引用しよう。

「交換の発展は、文明世界のすべての国民のあいだにきわめて密接な結びつきを打ち立てたので、プロレタリアートの偉大な解放運動は国際的な運動にならざるをえなかったし、またすでにずっとまえからそうなっている。」

この文章では、二つの点が同志エスの不満を買う。(一)綱領が交換の発展について述べているのは、古くさくなった「発展期」を記述するものだ。(二)同志エスは、「文明」ということばに感嘆符をつけて、こう述べている。「本国と植民地との緊密な結びつき」がわれわれの綱領には「規定されていない」と。

「保護関税制度、関税戦争、帝国主義戦争――これらのものはプロレタリア運動の結びつきを断ち切るであろうか?」――同志エスはこう質問し、次のように答えている。「われわれの綱領の本文を信じると、断ち切る、ということになる。なぜなら、交換によって打ち立てられる結びつきは、それらのものによって断ち切られるからである」と。

まことに奇妙な批判である。保護関税制度も、関税戦争も、交換を「断ち切る」ものではなく、ただ一時的に交換の形態を変えるか、あるいは、ある場所で断ち切って、別の場所でつづけるだけである。交換は、現在の戦争によって断ち切られてはいない。交換は、ある場所で困難になって、他の場所に移されただけであって、依然として世界的な結びつきである。このことの最も明瞭な証拠は、為替相場である。これが第一。第二に、同志エスの草案には、「商品交換と資本輸出とにもとづいてすべての国民を世界経済に引き入れた生産力の発展」うんぬん、と書いてある。帝国主義戦争は、交換を中断させるのと同様に、資本輸出をも(ある場所で、一時的に)中断させる。つまり、同志

エスの「批判」は、彼自身をやっつけるのである。

第三に、問題になっていた(古い綱領で)のは、労働運動が「ずっとまえから」国際的な運動に「なっている」のはなぜかということであった。労働運動が国際的になったのは、資本主義の最高の段階としての資本輸出よりもまえのことであったのは、争う余地がない。

結論。同志エスは、帝国主義の定義の一断片(資本輸出)を、明らかに、見当ちがいの場所に挿入したのである。

つぎに、「文明世界」ということばが同志エスの気にいらない。というのは、彼の考えでは、このことばは、なにか平和的な、調和あるものを暗示し、植民地を忘れているからである。

まさにその逆である。綱領が「文明世界」を語っているのは、不調和なものを、非文明国の存在を示しているのである(これは事実ではないか)。ところが、同志エスの草案は、はるかに調和的なものになっている。なぜなら、たんに「すべての国民の世界経済への引き入れ」について述べているだけだからである!! まるですべての国民が一様に世界経済に引き入れられているかのようだ! まるで、ほかならぬ「世界経済への引き入れ」にもとづいて「文明」国民と非文明国民とのあいだに隷属関係が生まれていないかのようだ!

同志エスがふれたこの二つのテーマのどちらでも、彼の草案は古い綱領をまさしく改悪している。彼の草案では、国際性の強調がより弱い。この国際性がずっとまえに、金融資本の時代よりはるか以前に成立したことを指摘するのは、われわれにとってきわめて重要である。また、植民地にたいする関係の問題でも、彼の草案ではより「調和」的になっている。だが、労働運動が、残念なことに、さしあたって文明国をしかとらえていないという、争う余地のない事実について沈黙を守ることは、われわれにとってふさわしいことではない。

もし同志エスが植民地の搾取をもっと明瞭に指摘するように要求したのだったら、私は喜んで彼に同意したであろう。このことは、帝国主義の概念の真に重要な構成部分である。しかし、同志エスの提案する第一節では、まさにこの点についての一つの暗示もないのである。彼の草案では、帝国主義の概念のさまざまな構成部分がいろいろな箇所にまき散らされていて、一貫性も明瞭さもそこなわれてしまっている。

この分散性と一貫性の欠如が、同志エスの草案全体につきまとっている特徴であることを、われわれはじきに見るであろう。

二

古い綱領のさまざまな節でテーマの連関と一貫性がどうたもたれていたかを、読者はざっと一瞥されたい（節の番号は同志エスの番号による）。

（一） 労働運動はずっとまえから国際的な運動になっている。われわれはこの運動の一部隊である。

（二） 運動の終局目標は、ブルジョア社会の発展行程によって規定されている。出発点――生産手段の私的所有と、プロレタリアが経営をもたないこと。

（三） 資本主義の成長、小生産者の駆逐。

（四） 搾取の増大（婦人労働、予備軍、その他）。

（五） 恐慌。

（六） 技術の進歩と不平等の増大。

（七） プロレタリアの闘争の増大。資本主義から社会主義への交替の物質的諸条件。

（八） プロレタリアートの社会革命。

（九） この革命の条件――プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）。

（一〇） 党の任務――社会革命をめざすプロレタリアートの闘争を指導すること。

私はこれにもう一つテーマをつけくわえる。

（一一） 資本主義はこのような最高の段階（帝国主義）への成長をとげ、いまやプロレタリア革命の時代が始まった。

これと、同志エスの草案のテーマの配列――本文の部分的な訂正でなくて、ほかならぬテーマの配列――、および帝国主義についての彼の補足のテーマとを、比較してみたまえ。

（一） 労働運動は国際的である。われわれはこの運動の一部隊である。（ここに資本輸出、世界経済、闘争の世界革命への移行が挿入されている。すなわち、帝国主義の定義の一断片が挿入されている。）

（二） 運動の終局目標は、ブルジョア社会の発展行程によって規定されている。出発点――生産手段の私的所有と、プロレタリアが経営をもたないこと。（その中間に、全能の銀行とシンジケート、世界的独占団体が挿入されている。すなわち、帝国主義の定義のもう一つの断片が挿入されている。）

（三） 資本主義の成長。小生産者の駆逐。

（四） 搾取の増大（婦人労働、予備軍、外国人労働者、その他）。

（五） 恐慌と戦争。「世界分割の試み」という、帝国主義の定義のさらにもう一つの断片が挿入されている。独占

団体と資本輸出がもう一度繰りかえされている。金融資本ということばに、括弧に入れて次の注釈がつけくわえられている——「銀行資本と産業資本の融合の産物」。
(六) 技術の進歩と不平等の増大。帝国主義の定義のさらにもう一つの断片が挿入されている——物価騰貴、軍国主義。独占団体がもう一度繰りかえされている。
(七) プロレタリアの闘争の増大。資本主義から社会主義への交替の物質的諸条件。その中間に、もう一度「独占資本主義」を繰りかえして、銀行とシンジケートが社会的規制の機構を準備することと等々を指摘している挿入句。
(八) プロレタリアートの社会革命。(これが金融資本の支配を終わらせるという挿入句。)
(九)この革命の条件としてのプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)。
(一〇) 党の任務——社会革命をめざすプロレタリアートの闘争を指導すること。(その中間に、この社会革命が日程にのぼっているという挿入句。)

こう対比してみると、「機械的な」補足(一部の同志が心配していた)がほかならぬ同志エスの草案に見られることは明らかだと、私には思える。帝国主義の定義のさまざまな断片が、まったく一貫性を欠いたやり方で、モザイクのように、いろいろな箇所にまき散らされている。帝国主義についての全体的な、まとまった観念は得られない。繰りかえしがとほうもなく多い。古い骨組はもとのまま残されている。綱領の古い全体的プラン——運動の「終局目標」が現代のブルジョア社会の性格とその発展行程とによって「規定されている」ことを示すという——はもとのまま残されている。ところが、まさにこの「発展行程」が現われておらず、得られたものは、大部分見当ちがいの場所にまき散らされた帝国主義の定義の断片だけである。

第二節をとってみよう。ここでは、同志エスは、初めと終りをもとのままに変えずにおく。初めに、生産手段が少数の人々に属していることを述べ、終りに、住民の多数者がプロレタリアと半プロレタリアであることを述べている。そのまんなかに、同志エスは、次の別個の命題を挿入する。「最近の四半世紀のあいだに、資本主義的に組織された生産にたいする直接間接の支配権は、全能の」銀行、トラスト、等々「の手に移った」うんぬん。

これが、大経営による小経営の駆逐という命題を述べるまえに言われているのである!! というのは、この命題は、第三節ではじめて述べられているからである。だが、トラストは、まさに大経営による小経営の駆逐というこの過程の最高の、最も後期の現われではないか。はじめにトラストの出現について述べ、あとから大経営による小経営の駆逐について述べるというようなことが、考えられるだろう

か？　そんなことをすれば、論理的な順序がそこなわれはしないか？　なぜといって、トラストはいったいどこからやってきたのか？　これでは理論上の誤りにならないだろうか？　支配権はどうやって、どうして、トラストの手に「移った」のか？　まずもって大経営による小経営の駆逐を理解しなければ、このことは理解できない。

第三節をとってみよう。ここでも、同志エスは、大経営による小経営の駆逐である。この節のテーマは、初め（大企業の意義が増大していることを述べた）と終り（小生産者は駆逐される）をもとのままに残して、そのまんなかに次のようにつけくわえる。大企業は「融合して、生産と流通との一系列の継起的段階を結合する巨大な組織体となる」と。だが、この挿入句は、すでに別個のテーマを取り扱ったものである。すなわち、生産手段の集積と資本主義による労働の社会化、資本主義から社会主義への交替の物質的諸条件の創出というテーマである。古い綱領では、このテーマは第七節ではじめて究明されている。

同志エスは、この全体的プランをもとのままに残している。彼もまた、資本主義から社会主義への交替の物質的諸条件については、第七節ではじめて述べている。彼もまた、この第七節で、生産手段の集積と労働の社会化について指摘したところをそのままに残している！

こうして、集積についての指摘の断片が、集積を特別に取り扱っている一般的な、総括的な、まとまった一節より数節もまえに挿入されるということになった。これは非論理の骨頂であって、広範な大衆にとってわれわれの綱領を理解しにくくするものでしかないであろう。

三

恐慌について述べている綱領の第五節に、同志エスは「全体的な改訂をくわえている」。彼は、古い綱領が「通俗性をねらって、理論上の罪をおかし」、「マルクスの恐慌理論から逸脱している」ことを見いだす。

同志エスの考えでは、古い綱領には「過剰生産」ということばがつかわれていて、これが恐慌の「説明の基礎に」されているが、「こういう見解は、むしろ、恐慌を説明するのに労働者階級の過小消費から出発したロートベルトゥスの理論に一致している」という。

理論的異端をかぎだそうとする同志エスの試みがひどいしくじりであり、ここではロートベルトゥスはむりやり引きずりこまれたのだということは、古い本文と同志エスの提案している新しい本文とを比較してみれば、すぐにわかる。

古い本文では、（第四節に）「技術上の進歩」、労働者の搾取の度合の高まり、労働者にたいする需要の相対的な減少を指摘したあとで、こう言っている。「ブルジョア諸国の内部におけるこのような事態……は、たえず増大する数量で生産される商品の販売をますます困難にする。……恐慌、および……沈滞期となって現われる過剰生産は、……不可避の結果である。……」

ここでは、過剰生産を「説明の基礎」にしているのではけっしてなく、恐慌と沈滞期との起原を記述しているにすぎないことは、明らかである。同志エスの草案には、次のように書いてある。

「もっぱら利潤の追求を目的とし、こういう矛盾にみちた形態――そこでは、生産の条件が消費の条件と衝突し、資本の実現の条件がその蓄積の条件と衝突する――でおこなわれる生産力の発展は、その不可避の結果として、鋭い産業恐慌と不況をよびおこす。これは、たえず増大する数量で無政府的に生産される商品の売れゆきが停滞することを意味する。」

同志エスは同じことを言っているのだ。なぜなら、「たえず増大する数量で」生産される商品の「売れゆきが停滞する」のは、過剰生産にほかならないからである。どういう点でもまちがっていないこのことばを、同志エスが恐れるのは、理由のないことである。また同志エスが、「過剰生産」ということばを「過小生産」ということばとおきかえても、いっこうさしつかえないし、むしろそのほうがよいくらいである」（モスクワの小冊子の一五ページ）と書いているのも、理由のないことである。

「たえず増大する数量で」「生産される商品の販路が停滞する」ことを、「過小生産」とよぶというなら、まあやってみたまえ！ 絶対にうまくいかないだろう。

ロートベルトゥス主義は、「過剰生産」ということば（これは、資本主義の最も深刻な矛盾の一つを正確に記述するただ一つのことばである）をつかう点にあるのではけっしてなく、恐慌をもっぱら労働者階級の過小消費によって説明する点にある。しかし、古い綱領は、恐慌を過小消費からみちびきだしてはいない。古い綱領は、「ブルジョア諸国の内部におけるこのような事態」を拠りどころとしているのであって、その事態とは、まさにこれよりまえに、前節に述べられているものであり、「技術上の進歩」と、「労働者の生きた労働にたいする需要の相対的な減少」とを内容とするものである。それとならんで、古い綱領は、「世界市場におけるたえず激化してゆく競争」についても述べている。

ここでは、まさに蓄積の条件と実現の条件との衝突にお

ける基本的な点が述べられており、しかもずっと明瞭に述べられている。ここでは、同志エスがまちがって考えているように、「通俗性をねらって」理論を「改変」しているのではなくて、明瞭に、かつ平易に叙述しているのである。このことはその長所である。

もちろん、恐慌について数巻の書物を書くこともできるし、蓄積の条件をもっと具体的に分析し、生産手段の役割や、生産手段の形をとった剰余価値および可変資本と、消費資料のかたちをとった不変資本との交換や、新しい発明による不変資本の減価、等々について述べることができる。だが、同志エス自身、そういうことをやろうとしてはいないではないか!! 彼が綱領にくわえたと称する改善は、次のものにすぎない。

(一) 彼は、第四節から第五節への移行、技術上の進歩等々の指摘から恐慌への移行のプランを、もとのまま残しながら、「このような事態」ということばを削除することで、両節の結びつきを弱めてしまった。

(二) 生産の条件と消費の条件との衝突、実現の条件と蓄積の条件との衝突という、いかにも理論的にきこえる文句をつけくわえた。この文句はまちがいではないが、新しい考えを言いあらわしてもいない。なぜなら、この問題についての基本的な点は、まさに前節にもっと明瞭に述べられているからである。

(三) 「利潤の追求」ということばをつけくわえている。この表現は、綱領にはあまりふさわしいものではなく、ここでそれをつかっているのは、たぶん、まさに「通俗性をねらった」ものであろう。なぜなら、これと同じ思想は、「実現の条件」についての文句によっても、「商品」生産についての文句、その他によっても、何回も繰りかえし述べられているからである。

(四) 「沈滞」を「不況」とおきかえているが、この書きかえはまずい。

(五) 古い本文に「無政府的」ということばをつけくわえている（「たえず増大する数量で無政府的に生産される商品」）。この補足は理論的に不正確である。なぜなら、「無政府性」、あるいは、エルフルト綱領草案にもちいられ、エンゲルスの異議をまねいた表現をつかえば「無計画性」ということは、まさにトラストを特徴づけるものではないからである。*

* エンゲルスは、エルフルト綱領草案の「私的生産」と「無計画性」という表現を批判して、こう書いている。「株式会社からすすんで、幾多の産業部門を支配し独占するトラストに移るなら、そこでは私的生産がなくなるだけでなく無計画性もまたなくなる。(三三)」

同志エスの草案ではこういうことになっている。

「……商品は、たえず増大する数量で無政府的に生産されている。……生産の制限によって恐慌を排除しようとする資本家団体（トラストその他）の努力は破綻する」うんぬん……

しかし、商品は、トラストによって、無政府的にではなく、まさに計算にもとづいて生産される。トラストは、生産を「制限」するだけではない。トラストは、恐慌を排除しようなどという努力をしてはいない。そういう「努力」をトラストがすることはありえない。同志エスの草案は、幾多の点で不正確である。これは、次のように言うべきであったろう。トラストは、無政府的にではなく、計算にもとづいて商品を生産するが、それにもかかわらず、前述した資本主義の特性は、トラストのもとでも引きつづきたもたれていて、そのため、恐慌はやはり排除されずに残る。そして、トラストが好況の絶頂と投機との時期に、「ゆきすぎをやらない」ように生産を制限するとしても、それはせいぜい最大の企業を救うだけで、恐慌は、やはりやってくる、と。

以上に恐慌の問題について述べたことをまとめると、同志エスの草案は古い綱領を改善していないという結論になる。それどころか、新しい草案にはいろいろ不正確な点がある。古い本文を訂正する必要があるということは、証明されずにしまった。

四

帝国主義的な戦争の問題では、同志エスの草案は二つの点で理論上の誤りをおかしている。

第一に、彼は、目下の、現在の戦争の評価をあたえていない。彼は、帝国主義時代は帝国主義戦争を生む、と言っている。これは正しいし、もちろん、これは綱領のなかで言わなければならないことであった。だが、これだけでは足りない。それにくわえて、一九一四―一九一七年の現在の戦争こそまさに帝国主義戦争であることを、言わなければならない。ドイツの「スパルタクス」団は、一九一五年にドイツ語で出された同団の『テーゼ』(二〇)のなかで、帝国主義時代には民族戦争はありえない、という主張をかかげた。これは、明らかにまちがった主張である。なぜなら、帝国主義は民族的抑圧を激しくするが、その結果、民族的蜂起と民族戦争は（蜂起と戦争を区別しようとする試みは、破綻せざるをえないだろう）、たんに可能なこと、ありそうなことというだけでなく、まさに不可避なことになるからである。

マルクス主義は、それぞれの戦争を、具体的な資料にもとづいて正確に評価するように、無条件に要求する。現在の戦争の問題を一般論によって回避することは、理論的にも誤りであり、実践的にも許されない。なぜなら、日和見主義者は、そういう一般論のかげに隠れて、抜け道をつくりだすからである。すなわち、一般的にいえば帝国主義は帝国主義戦争の時代であるが、この戦争はまったく帝国主義戦争というわけではなかった、と（たとえば、カウツキーはそう論じている）。

第二に、同志エスは、「恐慌と戦争」を、一般に資本主義に、とくに最新の資本主義にともなう二者一体的な現象として、いっしょに結びつけている。モスクワの小冊子の二〇―二一ページで、同志エスの草案は、恐慌と戦争のこの結びつきを三度も繰りかえしている。ここでの問題は、綱領のなかで繰りかえしをやるのは望ましくない、ということではない。ここでの問題は、これが原則的に誤りだという点にある。

ほかならぬ過剰生産、または「商品の売れゆきの停滞」――もし同志エスが過剰生産ということばを追放するなら――のかたちをとった恐慌は、もっぱら資本主義だけに固有な現象である。これに反して、戦争は、奴隷制の経済制度にも、農奴制の経済制度にもつきものである。帝国主義戦争もまた、奴隷制の基盤のうえでも（ローマとカルタゴの戦争は、どちらの側についてみても帝国主義戦争であった）、中世にも、商業資本主義の時代にも、起こった。両交戦国の双方が外国または他民族を抑圧しており、獲物の分けまえをめぐって、「だれがより多く抑圧または略奪するか」をめぐっておきる戦争は、すべて帝国主義戦争とよばないわけにはいかない。

もしわれわれが、最新の資本主義だけが、帝国主義だけが、帝国主義戦争をともなったと言うなら、これは正しい。なぜなら、資本主義の先行段階、自由競争の段階または独占以前の資本主義の段階は、主として西ヨーロッパの民族戦争を特徴としていたからである。しかし、以前の段階には帝国主義戦争は全然なかったと言えば、それはもうまちがいになろう。それは、同じく帝国主義的であった「植民地戦争」を忘れることになるだろう。これが第一。

第二に、まさに恐慌と戦争とを結びつけることが、やはり誤りである。なぜなら、この二つはまったく別種の現象であって、違った歴史的起原をもち、階級的意義を異にしているからである。たとえば、同志エスがその草案で言っているように言うことはできない。すなわち、「恐慌も戦争も、それ自体、小生産者をさらにいっそう零落させ、資本にたいする賃労働の従属をさらにいっそう増大させる

……」と。なぜなら、資本家階級にたいする賃金労働者の闘争の過程で、賃労働を資本から解放するための戦争がありうるからであり、反動的な帝国主義戦争だけでなく、革命的な戦争もありうるからである。「戦争は」いずれかの階級の「政治の継続である」。どの階級社会にも、つまり、奴隷制社会にも、農奴制社会にも、資本主義社会にも、抑圧階級の政治の継続である戦争があったし、さらに被抑圧階級の政治の継続である戦争もあった。同じ理由で、同志エスのように言うことはできない。すなわち、「恐慌と戦争は、資本主義制度が生産力の発展の形態からそのブレーキに変わりつつあることを示している」と。

現在の帝国主義戦争が、その反動性とそのもたらす負担とによって大衆を革命化し、革命を促進するというのは正しいし、そう言わなければならない。帝国主義時代に典型的な戦争としての帝国主義戦争一般についても、これはあてはまるだろうし、そう言ってさしつかえない。しかし、あらゆる「戦争」一般についてそう言うことはできないし、それに、けっして恐慌と戦争とを結びつけてはならない。

五

いまやわれわれは、ボリシェヴィキ全員の一致した決定にもとづいて、新しい綱領でまず第一に解明され評価されなければならない最も主要な問題について、総括をおこなわなければならない。それは、帝国主義の問題である。同志ソコリニコフは、この解明と評価をいわば小出しにあたえ、帝国主義のさまざまな標識を綱領のさまざまな節に割りふるほうが適切だという立場をとっている。私は、綱領の特別の節または特別の部分でこれをおこない、帝国主義について言わなければならないことは全部そこにまとめるほうが適切だと考える。党員諸君はいまやこの両方の草案をもちあわせており、決定は大会でくだされるであろう。しかし、帝国主義についてなにを言わなければならないかという点では、われわれと同志ソコリニコフの意見は完全に一致している。なお検討を要するのは、帝国主義をどう解明し評価すべきかという点で意見の相違がないかどうかである。

この見地から新しい綱領の二つの草案を比較してみよう。私の草案には、帝国主義の五つの主要な標識がとりあげられている。（一）独占的資本家団体。（二）銀行資本と産業資本の融合。（三）外国への資本輸出。（四）世界の領土的分割、この分割はすでに完了した。（五）国際的な経済的トラストによる世界の分割。（『党綱領改正資料』よりもあとから発行された私の小冊子『資本主義の最新の段階とし

ての帝国主義』の八五ページに、帝国主義のこの五つの標識があげてある。[17]）同志ソコリニコフの草案にも、実のところ、これと同じ五つの基本的な標識が見いだされる。したがって、わが党内では、帝国主義の問題についてはどうやら完全な原則上の意見の一致がつくりだされているようである。それもまた当然である。というのは、口頭でも、印刷物でも、この問題についてわが党がおこなってきた実践的宣伝は、すでにずっとまえから、革命のそもそもの初めから、この根本問題についてはボリシェヴィキ全員のあいだに完全な意見の一致があることを、明らかにしていたからである。

なお検討されなければならないのは、帝国主義の規定や特徴づけを定式化するうえで、両草案のあいだにどういう相違があるかということである。本来、いつごろから資本主義の帝国主義への転化を語ることができるかについては、どちらの草案にも具体的な指示がふくまれている。そして、経済的発展の評価全体が正確で、歴史的に正しいものであるためには、こういう指示が必要であることに、おそらく異論はないであろう。同志エスは「最近の四半世紀のあいだに」と言っている。私の草案には「およそ二〇世紀の初頭に」と言っている。ついいましがた引用した帝国主義[20]についての小冊子には（たとえば、一〇—一一ページに）、ヨーロッパでカルテルが完全な勝利をおさめた転換点は一九〇〇—一九〇三年の恐慌であるという、カルテルとシンジケートを専門的に研究したある経済学者の証言があげられている。だから、「最近の四半世紀のあいだに」というより、「およそ二〇世紀の初頭に」と言うほうが正確なように、私には思える。私がいまあげた専門家だけでなく、一般にヨーロッパの経済学者がいちばんよく利用しているのはドイツの資料だが、このドイツはカルテル形成の過程では他の国々に先んじているという理由からしても、これはますます正確であろう。

つぎに、独占体については、私の草案は、「独占的資本家団体が決定的な意義を獲得した」と言っている。同志エスの草案には何度も繰りかえして独占団体に言及しているけれども、比較的に明確なのは、これらすべての言及のうちの一箇所だけである。すなわち、次のものである。

「……最近の四半世紀のあいだに、資本主義的に組織された生産にたいする直接間接の支配権は、たがいに連合して、一にぎりの大金融資本家に率いられる世界的独占団体を形成した全能の銀行、トラスト、シンジケートの手に移った。」

私には、これでは「扇動」が多すぎると、つまり、「通俗性をねらって」、綱領のなかにそれにふさわしくないも

のがもちこまれていると思われる。新聞の論文や演説や大衆的な小冊子では、「扇動」は必要であるが、党の綱領は経済学上の正確さを特徴とすべきで、よけいなものをふくんではならない。独占団体が「決定的な意義」を獲得したこと、これがいちばん正確で、すべてを言いつくしていると私には思われる。ところが、いましがた同志エスの草案から引用した一節には、よけいなものがたくさんふくまれているばかりか、「資本主義的に組織された生産にたいする支配権」という表現は、理論的にも疑義がある。資本主義的に組織された生産にたいしてだけだろうか？　そうではない。これでは弱すぎる。明白に資本主義的に組織されていない生産も、すなわち、小手工業者、農民、植民地の小綿花生産者等々も、銀行に、一般に金融資本に依存するようになっている。「世界資本主義」一般を問題にする場合（そして、誤りにおちいらずにここで問題にすることのできるのは、これだけである）、独占団体が「決定的な意義」を獲得したと言えば、どういう生産者もこの決定的意義への従属から除外されないのである。独占団体の影響を「資本主義的に組織された生産」だけに限るのは、まちがいである。

つぎに、同志エスの草案には、銀行の役割について同じことが二度言われている。一度はいましがた引用した節であり、二度目は、恐慌と戦争を論じた節で「金融資本（銀行資本と産業資本の融合の産物）」という定義をあたえているところである。私の草案にはこう言っている。「とほうもなく集積された銀行資本が産業資本と融合した」と。綱領では一度これを言えば十分である。

第三の標識。「外国への資本輸出がきわめて大規模に発展した」（こう私の草案には言ってある）。同志エスの草案では、一度はただ「資本輸出」に言及しているだけであり、二度目は、全然別個の関連で、「超過利潤を求めて輸出される資本の投下地域……になっている新しい国々」と言っている。この場合、超過利潤と新しい国々についての指摘は、正しいとは認めがたい。なぜなら、資本輸出は、ドイツからイタリアへ、フランスからスイスへ、等々というかたちでも発展したからである。帝国主義のもとで、資本は古い国々へも輸出されるようになっており、しかも、超過利潤だけがその目的ではない。新しい国々について正しいことも、資本輸出一般にはあてはまらないのである。

第四の標識は、ヒルファディングが「経済的領域争奪戦」とよんだものである。このよび方は正確ではない。なぜなら、それは、現代の帝国主義と、経済的領域の争奪戦の以前の諸形態との主要な相違を、表現していないからである。古代ローマもそういう領域を求めてたたかい、一六一一八

世紀のヨーロッパの諸国家も、植民地を征服するにあたって、そういう領域を求めてたたかい、旧ロシアも、シベリアを征服するにあたって、そういう領域を求めてたたかった、等々。現代の帝国主義の標識は、（私の綱領草案に言っているように）「全世界が最も富裕な諸国のあいだにすでに領土的に分割されつくしている」こと、すなわち諸国のあいだの地球の分割が完了していることである。ほかならぬこの事情のために、世界の再分割のための闘争がとくに激しいものとなり、戦争にみちびく諸衝突がとくに激しいものとなっているのである。

同志エスの草案は、このことを述べるのにきわめてたくさんのことばを費やしており、しかも、理論的に正しく言いあらわしているとはとうてい言えない。私はすぐあとで彼の定式を引用するが、それには世界の経済的分割の問題もいっしょに結びつけられているので、まず、帝国主義のこの最後の、第五の標識にふれておく必要がある。私の草案には、これは次のように定式化されている。

「……国際トラストによる世界の経済的分割が始まった」。経済学や統計の資料をもとにしては、これ以上のことを言うことは許されない。世界のこういう分割はきわめて重要な過程であるが、まだ始まったばかりである。世界のこういう分割をめざし、再分割をめざす帝国主義戦争は、領土的分割が完了したときに、すなわち、競争相手との戦争によらずに占領できる「自由な」土地がもう残っていないときにはじめておきるのである。

さて、同志エスの定式を見ることにしよう。

「しかし、資本主義的諸関係の支配分野は、新しい国国にこの関係がもちこまれることによって、そとに向かってもたえまなく拡大される。これらの国々は、独占的資本家団体にとって、商品市場、原料供給源、および超過利潤を求めて輸出される資本の投下地域になっている。金融資本（銀行資本と産業資本の融合の産物）の処理にゆだねられた膨大な量の蓄積された剰余価値が、世界市場に投じられる。市場の支配をめぐって、弱小国の領土の占有または支配をめぐって、すなわち、これらの国々を無慈悲に抑圧する優先権をめぐって、一国的に組織され、ときには国際的にも組織された強力な資本家団体のあいだにおこなわれる競争は、不可避的に、最も富裕な資本主義諸国家のあいだに全世界を分割しようとする企図に、全般的な災厄と零落と野蛮化を生みだす帝国主義戦争に、みちびかざるをえない。」

ここには、とほうもなく多くのことばがあり、そのかげに理論的な誤りがいくつも隠されている。世界を分割しようとする「企図」を語ることはできない。というのは、世

界はすでに分割されつくしているからである。一九一四—一九一七年の戦争は、世界を「分割しようとする企図」ではなくて、すでに分割された世界の再分割をめざす闘争である。資本主義にとってこの戦争が避けられないものになったのは、その何年かまえに帝国主義が、いわば古い力の物差によって世界を分割しつくしたからであり、この力の物差を戦争が「訂正しようとしている」のである。

植民地をめぐる（「新しい国々」をめぐる）闘争も、「弱小国の領土の占有」をめぐる闘争も、すべて帝国主義以前にもあった。現代の帝国主義にとって特徴的なものは、別の事柄である。すなわち、二〇世紀の初頭に地球全体があれこれの国家によって占領され、分割されつくしたということである。ただこのためにだけ、「世界の支配」の再分割は、資本主義の基礎のうえでは、世界戦争によらずには不可能だったのである。「国際的に組織された資本家団体」もやはり、帝国主義以前にも存在していた。さまざまな国の資本家を参加させた株式会社は、すべて「国際的に組織された資本家団体」である。

帝国主義に特徴的なものは、以前には、二〇世紀のまえには存在していなかった別の事柄である。すなわち、世界が国際的トラストのあいだに経済的に分割されつつあること、国々が、条約にもとづいてそれらのトラストのあいだに販売地域として分割されつつあることがそれである。同志エスの草案にはまさにこのことが言いあらわされていない。その結果、帝国主義の力は、実際よりも弱く描かれている。

最後に、蓄積された剰余価値量が世界市場に投じられると語るのは、理論的にまちがっている。これはプルードンの実現理論に似ている。彼の理論によれば、資本家は、不変資本も可変資本もたやすく実現できるが、剰余価値を実現する点で困難にぶつかる、という。実際には、資本家は、困難や恐慌にあわずには、剰余価値ばかりでなく、可変資本や不変資本も実現できない。市場に投じられる商品量は、蓄積された剰余価値をあらわすだけでなく、可変資本や不変資本を再生産する価値をもあらわしている。たとえば、世界市場には大量のレールや鉄材が投じられるが、これは、労働者の消費物資、または他の生産手段（木材、石油、その他）との交換によって実現される。

六

以上で同志ソコリニコフの草案の検討を終わるが、彼が提案している非常に貴重な一つの補足を、とくに強調しなければならない。私の考えでは、この補足は採用すべきで

あり、むしろもっと敷衍すべきである。すなわち、彼は、技術上の進歩と、婦人労働や児童労働の使用の増大について述べている節に、「ならびに、後進国から移入される未熟練の外国人労働者の労働」(を使用する)ということばをつけくわえるよう提案している。これは、貴重な、また必要な補足である。まさに帝国主義にとりわけ特徴的なことは、後進国からきた低賃金の労働者の労働をこのように搾取することである。富裕な帝国主義諸国の寄生生活は、ある程度まで、まさにこの搾取に基礎をおいている。これらの国々は、「安価な」外国人労働者の労働を度はずれに、恥知らずなやり方で搾取する一方、より高い賃金で自国の一部の労働者まで買収する。ここには、「低賃金の」ということばと、さらに「また、しばしば無権利の」ということばとを補うべきであろう。というのは、「文明」諸国の搾取者は、移入された外国人労働者が無権利であるという事情を、つねに利用しているからである。これは、ドイツにおけるロシア人労働者、すなわちロシアから移住した労働者についてだけでなく、スイスでイタリア人について、フランスでスペイン人やイタリア人について、等々というふうに、われわれのつねに目撃するところである。

たぶん、植民地や弱小民族の略奪によって寄生的な仕方で金儲けをしている一にぎりの最も富裕な帝国主義国の特別の地位を、綱領のなかでもっと力をこめて強調し、もっと明瞭に言いあらわすことが適切であろう。これは、帝国主義のきわめて重要な特質である。ついでながら、この特質は、帝国主義的略奪をこうむっている国々、帝国主義的巨大国(ロシアのような)によって分割され圧殺される脅威に面している国々では、深刻な革命運動の発生をある程度容易にし、これに反して、多くの植民地や外国を帝国主義的に略奪し、それによって自国の住民の非常に大きな部分(比較的にいって)を帝国主義的獲物の分けまえにあずからせている国々では、深刻な革命運動の発生をある程度困難にしている。

そこで、私は、私の草案で、たとえば社会排外主義の特徴づけをあたえている箇所(小冊子の二二ページ)[三]に、最も富裕な国々がこのように他の多くの国々を搾取しているという指摘を挿入することを提案したい。つまり、草案の右の箇所は、次のようになるであろう(新しくつけくわえたことばには、傍点をつけておいた)。

「こういう歪曲の一つは、社会排外主義の潮流である。これは、口先での社会主義、実際の排外主義であって、帝国主義戦争のさいの『自』国ブルジョアジーの略奪者的利益の擁護や、さらに、植民地および弱小民族の略奪から膨大な収入を得ている富裕な国の市民の特権的な地位の擁護

を、『祖国擁護』のスローガンでおおいかくすものである。他方、こういう歪曲のもう一つのものは、前者におとらず広範で国際的な『中央派』の潮流である。うんぬん。」

「帝国主義戦争のさいの」ということばのつけくわえは、いっそうの正確を期するために必要である。「祖国擁護」とは、戦争を正当化し、戦争を適法的で、正しいものと認めるスローガンにほかならないからである。しかし、戦争にもいろいろある。革命的戦争もありうる。だから、ここで問題としているのがほかならぬ帝国主義戦争であることを、完全に正確に言わなければならない。このことは、言外に含意されてはいるが、曲解を避けるため、含意するのでなく、率直かつ明瞭に言うべきである。

七

綱領の総論部分または理論的部分を離れて、最小限綱領に移ろう。ここでは、われわれはさっそく、最小限綱領をそっくり削除せよという同志エヌ・ブハーリンと同志ヴェ・スミルノーフの一見「きわめて急進的な」、そしてきわめて不合理な提案にぶつかる。それはこうである。最大限綱領と最小限綱領とに分けるやり方は「古くさくなった」。社会主義への移行が問題となっている以上、なんのためにそんなことをするのか？　最小限綱領なんかいらない。いきなり社会主義への過渡方策の綱領をつくれ、と。

これが前記の二同志の提案であるが、どういうわけか、彼らは、これに応じた草案を提出する決心がつかなかった（党綱領の改正がきたるべき党大会の日程にのぼっているので、そういう草案を起草することがこれらの同志の直接の義務であったにもかかわらず）。一見「急進的」に見えるこの提案の発議者自身、決心がつかないで、ためらっているのかもしれない。……それはとにかく、彼らの意見を検討しなければならない。

戦争と荒廃にせまられて、すべての国が独占資本主義から国家独占資本主義にすすむことをよぎなくされている。これが客観的情勢である。だが、革命の状況のもとでは、革命のさいには、国家独占資本主義は直接に社会主義に移行する。革命時には、社会主義にむかってすすまずには前進することができない。これが、戦争と革命によってつくりだされた客観的情勢である。わが党の四月協議会が、「ソヴェト共和国」（プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の政治形態）のスローガンと、銀行やシンジケートの国有化のスローガン（社会主義への過渡方策のうちの基本的なもの）をかかげたのは、このことを考慮に入れたものである。これまではボリシェヴィキの全員の意見が一致していた。ところが、

同志ヴェ・スミルノーフと同志エヌ・ブハーリンとは、さらにすすんで、最小限綱領をそっくり削除することを望むのだ。これは、あの賢い格言の賢い忠告にさからうというものであろう！　その格言は言う。

「戦いの門出に自慢するな、戦いのあとで自慢せよ」と。

われわれはいま戦いの門出にある。つまり、わが党の手に政治権力を獲得するためにたたかっている。この権力とは、プロレタリアートと貧農の執権（ディクタツーラ）であろう。この権力を掌握するにあたって、われわれは、ブルジョア制度の限界をこえることを恐れないばかりか、逆に、明瞭に、率直に、正確に、みなに聞こえるように次のように言う。われわれはこの限界をこえてすすむであろう、われわれは、恐れることなく社会主義にむかってすすむであろう、われわれの進路の道すじは次のとおりである、すなわち、ソヴェト共和国を経由し、銀行とシンジケートの国有化、労働者統制、全般的労働義務制、土地の国有化、地主の家畜農具の没収等々を経由してすすむ、と。この意味では、われわれは社会主義への過渡方策の綱領をあたえたのである。

だが、戦いの門出に自慢してはならない。われわれは最小限綱領を削除してはならない。なぜなら、それは、われわれはなに一つ「ブルジョアジーに要求」しようとは思わない、われわれは万事自力でなしとげる、ブルジョア制度の枠内で得られる瑣末なもののために活動しようとは思わない、と空（から）自慢するのと、同じだからである。

これが空自慢だというのは、まず権力を獲得しなければならないのに、われわれはまだ権力を獲得してはいないからである。まず社会主義への過渡方策を実際に実現し、わが国の革命を世界社会主義革命の勝利まで押しすすめなければならない。そうしてのちはじめて、「戦いのあとで」、もはや不必要なものとして最小限綱領を削除することができるし、また削除しなければならない。

最小限綱領はもはや必要でないと、現在うけあって言えるだろうか？　もちろん、言えない。それは、われわれがまだ権力を獲得しておらず、社会主義を実現しておらず、まだ世界社会主義革命の端緒さえまだ見ていないという、簡単な理由による。

この目標にむかって、しっかりと、大胆に、動揺せずにすすまなければならないが、その目標がまだ達成されていないことが明らかなのに、それは達成されたと宣言することは、こっけいである。いますでに最小限綱領を削除することは、「われわれはすでに勝利をおさめた」と公言し、宣言する（簡単にいえば、自慢する）のと同じである。

いや、親愛な同志諸君、われわれはまだ勝利をおさめてはいない。

われわれがあす勝利するか、それともこの勝利がいくらか遅れるか、われわれはそれを知らない。（私個人としては、あす勝利するだろう、という意見に傾いている——私はこの文章を一九一七年一〇月六日に書いている——。権力の掌握がそれより遅れることはありうるが、いずれにしても、あすであって、きょうでないことにはまちがいない。）われわれが勝利したあとで西欧にどれだけ急速に革命が起こるか、われわれはそれを知らない。われわれが勝利したあとでもなお反動と反革命の勝利の時期が一時的にやってくるかどうか——それはありえないことではない——、われわれはそれを知らない。だからこそ、勝利をおさめたあかつきには、われわれはそういう可能性にそなえて「三重の塹壕線」をつくるであろう。

われわれはこうしたことをみな知らないし、また知ることもできない。これを知ることができる者はだれもいない。だから、最小限綱領を削除するのは、こっけいなのである。われわれがまだブルジョア制度の枠内に生活しているあいだは、われわれがまだこの枠を破壊しておらず、社会主義への移行の基本的な条件を実現しておらず、敵（ブルジョアジー）を粉砕しておらず、また粉砕しても絶滅していないあいだは、最小限綱領は必要である。これらのことはすべて実現されるであろうし、たぶん、多くの人々が考えているよりもずっと早く実現されるであろう。（私個人としては、あすは始まるにちがいないと考えている）が、しかし、まだそれは実現されてはいない。

政治的分野における最小限綱領をとってみよう。この綱領はブルジョア共和制を目あてとしたものである。われわれは、それにつけくわえて、われわれはブルジョア共和制の枠にとどまるものではなく、ただちにいっそう高度の型であるソヴェト共和国をめざしてたたかう、と言っている。われわれはそうしなければならない。われわれは限りない勇気と決断をもって、この新しい共和国をめざしてすすまなければならないし、またまさにそのようにしてこの共和国をめざしてすすむであろうと、私は確信している。しかし、最小限綱領を削除することは、断じて許されない。なぜなら、第一に、ソヴェト共和国はまだ存在していないし、第二に、「君主制復活の企図」の可能性はまだとりのぞかれていないからである。こういう企図をまず克服し打ち破らなければならない。第三に、古いものから新しいものへの移行にあたっては、一時的な「複合型」が可能である（数日まえの『ラボーチー・プーチ』が正しく指摘していたように）。たとえば、憲法制定議会をともなうソヴェト共和国も可能である。われわれはまずこういうものをすべて克服しようではないか。最小限綱領を削除するのは、そ

れからでもおそくはないであろう。

経済的分野についても同じことが言える。社会主義にむかってすすむのを恐れるのは、このうえなく卑劣であり、プロレタリアートの大業にたいする裏切りであることについては、われわれはみな意見が一致している。この方向への基本的な第一歩が、銀行とシンジケートの国有化のような方策でなければならないという点で、われわれはみな意見が一致している。これらの方策やそれに類した他の諸方策をまず実現しようではないか。それからさきは、そのときになってから見ることにしよう。そのときになれば、そのさきがもっとよく見えるようになろう。なぜなら、最良の綱領の幾百万倍もの価値のある実践的経験がわれわれの視野をはかりしれないほど拡大するだろうからである。この方面でも過渡的な「複合型」なしにはすまされないということは、ありうることだし、ありそうなこと、疑いをいれないことでさえある。たとえば、一人か二人の賃金労働者を使っている小経営をいきなり国有化することはできないだろうし、それをほんとうの労働者統制のもとにおくことさえできないであろう。こういう経営の役割はとるにたりないものだとしよう。また銀行やトラストが国有化されれば、それらの経営は手も足も縛られることになるとしよう。だが、そうだとしても、ブルジョア的関係のささやかな一角でも残っているかぎり、どうして最小限綱領を削除しなければならないのか？　世界最大の革命をめざして大胆にすすみながらも、事実を冷静に考慮するマルクス主義者として、われわれは最小限綱領を削除する権利をもたない。

もしいまそれを削除するなら、われわれは、まだ勝利してもいないうちにすでに分別を失ってしまったことを、それによって証明することになろう。だが、われわれは、勝利するまえにも、勝利のさなかにも、勝利したあとでも、分別を失ってはならない。分別を失えば、われわれはすべてを失うだろうからである。

具体的な提案にかんしては、同志エヌ・ブハーリンは、実のところ、なにも言っていない。というのは、彼は、銀行とシンジケートの国有化についてすでにずっとまえから言われてきたことを、繰りかえしているだけだからである。同志ヴェ・スミルノーフは、彼の論文のなかで、予想される改革のきわめて興味ぶかい、教えるところの多い一覧表を示しているが、それらは、けっきょく、生産物の生産と消費の規制に帰着するのである。これは、一般的なかたちでは、たとえば私の草案にもすでにはいっており、そこでは、そのあとに「等々」ということばをつけてある。いま、それ以上にすすんで、個々の措置の具体化にふけることは

適当でないと、私には思える。われわれが新しい型の基本的諸方策をとったあとでは、銀行を国有化したあとでは、労働者統制に着手したあとでは、多くのことがいっそうよく見えるようになろうし、経験が新しいものを大量に示唆するであろう。なぜなら、それは、何千万人もの経験であろうし、何千万もの人が自覚して参加した新しい経済制度の建設の経験であろうからである。もちろん、論文や小冊子や演説で新しいものの輪郭を示し、計画を提出し、それらの計画を評価し、いろいろなソヴェトや食糧供給委員会等々の地方的、部分的な経験を検討すること——そういうことがみなきわめて有益な仕事であるのは、いうまでもない。しかし、綱領のなかに過度の細目をもちこむのは、まだその時機でないし、細目でわれわれの手を縛ることによって、有害とさえなりうる。だが、新しい道に完全に足を踏みだしたときに、新しいものをいっそう力づよく創造できるように、われわれは自分の手を自由にしておかなければならないのである。

八

同志ブハーリンの論文は、もう一つ別の問題にふれており、それにも立ちいって論じる必要がある。

「……わが党綱領の改正の問題は、プロレタリアートの国際的政党のための単一の綱領を作成する問題と結びつけられなければならない。」

これは、あまり明瞭な言い方ではない。単一の国際綱領、これを、筆者が、新しい綱領を採用しないように、単一の国際綱領、第三インタナショナルの綱領がつくられるまでこの問題を延期するように、われわれに勧めているのだと解するなら、そういう意見にたいしては断固として反対せざるをえない。なぜなら、そういう理由で延期することは（ほかに延期する理由がないと仮定して、たとえば、綱領改正のためのわが党の資料の準備が不足しているという理由でその延期を要求する者が、だれもいなかったと仮定して）、われわれの側で第三インタナショナルの創立の仕事を遅らせるのと同じだろうからである。もちろん、第三インタナショナルの創立ということを形式的に理解してはならない。せめて一国だけででもプロレタリア革命が勝利をおさめるか、あるいは戦争が終わるかするまでは、さまざまな国の革命的〃国際主義的諸党の大きな会議を招集する仕事が急速に、順調にすすむことは、新しい綱領を正式に承認する件でそれらの諸党の同意を得ることは、期待できない。だが、それまでは、げんざい他の諸党よりも有利な地位にあって、最初の一歩を踏みだすことのできるような諸党のイニシア

ティヴによって――もちろん、この最初の一歩をけっして最終の一歩と見なすことなく、また自党の綱領をぜがひでも他の「左翼的」(すなわち革命的＝国際主義的)諸綱領に対置するようなことをけっしてせずに、まさに共通の綱領の作成めざしてすすみながら――、この仕事を前進させなければならない。げんざいロシアを除いては、国際主義者が会議をひらく比較的に大きな自由のある国は世界に一つもなく、わが党ほどに国際的な諸潮流や諸綱領に通暁している同志たちを多数もっている国は、世界に一つもない。だからこそ、ぜひともわれわれがイニシアティヴをとらなければならないのである。これは、国際主義者としてのわれわれの直接の義務である。

同志ブハーリンも、どうやら、まさにこういうふうにこの問題を見ているらしい。というのは、彼はその論文の書きだしで、「ついさきごろ終わった党大会(三)(これは八月に書かれたものである)は、綱領を改正する必要を認めた」、「この目的のために臨時大会が招集されるであろう」と言っているが、このことばからみて、同志ブハーリンは、この臨時大会で新しい綱領を採択することに異議がないものと結論してよいからである。

もしそうなら、ここでふれた問題については、完全な意見の一致が得られたわけである。わが党の大会が、新しい綱領を採択したあとで、第三インタナショナルの共通の、単一の綱領を作成したいという願いを表明し、そのために若干の措置をとることに反対する者は、おそらくいないであろう。この措置とは、たとえば、左派の会議を促進したり、数ヵ国語で論文集を発行したり、他の国々で新しい綱領への道を「さぐる」(同志ブハーリンの正しい表現を借りれば)ためになされた仕事(オランダのトリビューネ派(三)、ドイツの左派。アメリカの「社会主義宣伝連盟」(三)のことは、同志ブハーリンもすでに名まえをあげているが、さらに、アメリカの「社会主義労働党」(三)と、この党が「政治的国家を産業民主主義と」おきかえるという問題を提起していることとを指摘することができよう)についての資料をまとめる委員会をつくったりすることである。

つぎに、私の草案のなかのある欠陥について同志ブハーリンがおこなった一つの指摘は、無条件に正しいものと認めなければならない。同志ブハーリンは、この草案のなかの、ロシアの現在の情勢や、資本家の臨時政府等々について述べている箇所(小冊子の二三ページ(三))を引用している。同志ブハーリンがこの箇所を批判して、これは戦術的決議か、行動綱領にでも移すべきものだ、と言っているのは、正しい。だから、私は、二三ページの最後の一節をそっくり削除するか、あるいは、次のように叙述することを提案

する。

「一般に経済的発展と人民の権利を、またとくにできるだけ苦痛なく社会主義に移行する可能性を、最もよく保障するような国家制度をつくりだすことにつとめるプロレタリアートの党は、……にとどめることはできない。(三三)」

最後に、ここで私は、ある一つの条項について一部の同志のあいだに生まれた、しかし私の知るかぎり出版物では提起されなかった一つの疑問に、答えなければならない。それは、民族自決権について述べた政治綱領の第九項にかんする問題である。(三四)この条項は二つの部分からなっている。第一の部分は、自決権の新しい定式をあたえている。第二の部分は、要求ではなくて宣言をふくんでいる。私の受けた質問は、この箇所に宣言をいれることは適切であろうか、ということであった。一般的にいえば、綱領に宣言を入れるべきではないが、しかしここでは、通則からの例外として、そうする必要があると私には思える。たびたび誤解のきっかけとなった自決ということばを、私は、「自由に分離する権利」というまったく正確な概念とおきかえている。一九一七年の半年間の革命の経験を経たあとでは、ロシアの革命的プロレタリアートの党、大ロシア語をつかって活動している党が分離の権利を承認する義務があることについては、おそらく異論の余地はないであろう。権力を獲得したあかつきには、われわれは、フィンランドにも、ウクライナにも、アルメニアにも、およそツァーリズム(と大ロシア人のブルジョアジー)によって抑圧されてきたどの民族にも、ただちに無条件にこの権利を承認するであろう。しかし、われわれの側から、分離を望んでいるわけではけっしてない。われわれは、できるだけ大きな国家を望んでおり、大ロシア人に隣接して住んでいる諸民族のできるだけ多くのものとの、できるだけ緊密な同盟を望んでいる。われわれがそれを望むのは、民主主義と社会主義の利益のためであり、さまざまな民族に属するできるだけ多数の勤労者をプロレタリアートの闘争に引き入れるためである。われわれが望んでいるのは、革命的"プロレタリア的な統一、連合であって、分離ではない。われわれが望んでいるのは、革命的な連合である。だから、われわれは、あらゆる国家一般の連合というスローガンをかかげない。なぜなら、社会革命が日程にのぼせているのは、社会主義に移行した、また移行しつつある国々、解放を達成しつつある植民地等々だけの連合だからである。われわれは自由な連合を望んでいる。だから、われわれが分離の自由を承認することが、義務となるのである(分離の自由のない連合は、自由な連合とは言えない)。ツァーリズムと大ロシア人のブルジョアジーが、その抑圧によって隣接する諸民族の心

に大ロシア人全体にたいするおびただしい憤怒と不信を残しているだけに、分離の自由を認めることはなおさらわれわれの義務となっている。そして、こういう不信は、ことばによってではなく、行為によって吹き散らさなければならない。

しかし、われわれは連合を望んでおり、そのことを言わなければならない。雑多な民族からなる国家の党の綱領のなかでこのことを述べるのは、きわめて重要であるから、そこで、普通のやり方からはずれることが必要になり、宣言をとりいれることが必要になるのである。ロシア民族（大ロシア民族と言ってもよいであろう。そのほうが正確だから）の共和国が他の諸民族を自分の味方に引きつけることを、われわれは望んでいる。だが、どういう方法によってか？　強力によってではなく、もっぱら自由意志にもとづく合意によってである。そうでなければ、万国の労働者の統一と兄弟のような同盟はそこなわれる。ブルジョア民主主義者とは違って、われわれは、諸民族の友愛ではなくて、すべての民族の労働者の友愛というスローガンをかかげる。なぜなら、われわれはすべての国々のブルジョアジーを信頼せず、彼らを敵と見ているからである。

だからこそ、ここでは通則からの例外を認めて、第九項に原則宣言を挿入しなければならないのである。

九

以上の文章をすでに書きおわったとき、『われわれの綱領における労働者の諸要求』という同志ユ・ラーリンの論文ののった『ラボーチー・プーチ』第三一号が発行された。わが党の中央機関紙による綱領草案の討議の口火を切ったものとして、この論文を歓迎しないわけにはいかない。同志ラーリンは、綱領のなかで、私が仕上げる機会のなかった部分、その草案としては「労働保護小部会」――一九一七年四月二四―二九日の党協議会で設置された小部会――の文案があるだけの部分に、とくに立ち入って論じている。同志ラーリンは一連の補足を提案しており、私の考えでは、それらは完全に採用できるものであるが、残念なことに、彼は、その提案をかならずしも正確に定式化していない。

ある一項目についての同志ラーリンの定式は、私にはまずい定式のように思える。「労働者の人身（？）処理（？）の面での労働者の民主主義的（？）自主管理にもとづく（？）労働力の正しい（？）配置」というのがそれである。私の考えでは、これは、「職業紹介所はプロレタリア的な階級的組織でなければならない」うんぬん（『資料』、一五ページを見よ）という小部会の定式よりもまずい。さらに、

同志ラーリンは、最低賃金の問題についての自分の提案をもっとくわしく仕上げ、正確に定式化し、それを、この点についてのマルクスおよびマルクス主義の見解の歴史と結びつけるべきであったろう。

つぎに、同志ラーリンは、綱領の政治的部分と農業部分の問題について、「もっと綿密に文章を練る」必要があると考えている。わが党の新聞雑誌が、あれこれの要求の文案の問題についてもただちに討論を開始し、この問題をけっして大会まで延ばさないように、希望したい。なぜなら、第一に、そうしなければ、十分に準備された大会とはならないであろうし、第二に、綱領や決議を取り扱ったことのある者ならだれでも知っているように、ある項目の文案を綿密に仕上げることによって、しばしば原則上のあいまいさや意見の相違が明るみにだされ、とりのぞかれるからである。

最後に、綱領の財政＝経済部分の問題について、同志ラーリンは次のように書いている。「そういう部分はなくて、空白に近い。ツァーリズムの」（ツァーリズムだけのか？）「戦債や国債の破棄、専売制を財政上の目的に利用することに反対する闘争、等々については、なにも言われていない。」同志ラーリンが自分の具体的な提案を大会まで延ばさないで、すぐに提出してくれることが、きわめて望ましい。なぜなら、そうしなければ、真剣な準備にはならないだろうからである。国債（もちろん、ツァーリズムだけでなく、ブルジョアジーのそれもふくめて）の破棄の問題では、小額公債所有者の問題を慎重に考慮しなければならないし、「専売制を財政上の目的に利用することに反対する闘争」の問題では、奢侈品生産の専売制の現状や、ここに提案されている項目と間接税の全廃という綱領中の要求との関係を、熟考しなければならない。

繰りかえして言おう。綱領を真剣に準備するために、真に全党をこの準備に参加させるために、この問題に関心をもつすべての人がただちにこの仕事にとりかかり、その意見や、さらに、補足ないし修正をふくむ、すでに成文化された正確な条項案を発表しなければならない、と。

一九一七年一〇月六―八（一九―二一日）に執筆
一九一七年一〇月に雑誌『プロスヴェシチェーニエ』第一―二号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三四巻、三五一―三八一ページ所収
邦訳全集、第二六巻、一四五―一七六ページ所収

一局外者の助言

　この文章は一〇月八日に書いているので、これが九日中にピーテルの同志諸君の手にはいる見込みは、あまりない。北部ソヴェト大会(注)は一〇月一〇日にひらかれる予定だから、この文章は間にあわないかもしれない。しかし、とにかく、予想されるピーテルとその「周辺」全体の労働者と兵士の行動が、まもなく起ころうとしているが、まだ起こっていない場合のために、「一局外者の助言」を述べてみよう。

　全権力がソヴェトに移らなければならないことは、明らかである。同様に、革命的プロレタリア権力(あるいはボリシェヴィキ権力――この二つはいまでは同じことである)にたいしては、一般に全世界の、とくに交戦諸国のすべての勤労被搾取者のあいだで、とりわけロシアの農民のあいだで、絶大な共感と心からの支持とが保障されていることも、およそボリシェヴィキにとっては、争う余地のないことでなければならない。これらのだれ知らぬもののない、とっくに証明ずみの真理を、立ちいって論じるにはおよばない。

　立ちいって論じなければならないのは、かならずしもすべての同志に十分に明らかになっているとは思えない点、すなわち、権力をソヴェトに移すことはいまでは実際上武装蜂起を意味するという点である。これは、わかりきったことと思われるかもしれないが、かならずしもすべての人がこの問題をよく考えたわけではなく、現によく考えているわけでもない。いま、武装蜂起を否認することは、ボリシェヴィズムの主要なスローガン(全権力をソヴェトへ)を否認すること、総じて、革命的プロレタリア的国際主義を全体的に否認することとであろう。

　だが、武装蜂起は政治闘争の特殊な形態であって、特殊な法則にしたがう。これらの法則を注意ぶかく熟考することが必要である。カール・マルクスが武装「蜂起は戦争とまったく同様に一つの技術である」と書いたのは、この真理をすばらしくあざやかに言いあらわしたものである。

　この技術の主要な規則のうち、マルクスは次のものをあげている。

　(一)けっして蜂起をもてあそんではならず、蜂起を始めたなら、最後までやりぬかなければならないことを、し

っかりと知っていなければならない。
（二）　決定的な地点に、決定的な瞬間に、きわめて優勢な兵力を集結しなければならない。さもなければ、準備と組織の点でまさっている敵は、蜂起軍を壊滅させるだろうから。
（三）　いったん蜂起を始めたなら、最大の決意をもって行動し、かならず、無条件に、攻勢をとらなければならない。「守勢は武装蜂起の死である。」
（四）　敵の不意をうつようにつとめ、敵の軍勢が分散しているあいだに好機をつかまなければならない。
（五）　ぜひとも「士気の優越」をたもちながら、どんな小さな勝利でも、日ごとに（一つの都市の場合なら、刻々に、と言ってもよかろう）勝利をあげるようにつとめなければならない。
マルクスは、武装蜂起についてのすべての革命の教訓を、「歴史上に知られた最大の革命的戦術の大家であるダントン」の「大胆なれ、大胆なれ、かさねて大胆なれ！」ということばにまとめている。(30)
これをロシアと一九一七年の一〇月とに適用すれば、次のようになる。かならず外部からも内部からも、労働者地区からも、フィンランドからも、レヴェリからも、クロンシタットからも、いっせいに、できるだけ不意にかつ迅速に、ピーテルにたいして攻勢に出ること、艦隊全体を攻勢に立たせること。一万五〇〇〇名から二万名（それ以上かもしれない）をかぞえるわが国の「ブルジョア衛兵」（士官学校生徒）、わが国の「ヴァンデ部隊」（カザック部隊）、等々にたいして、はるかに優勢な兵力を集結すること。
われわれの三つの主要戦力——艦隊、労働者、陸軍部隊——を合わせて、かならず、（a）電話局、（b）電信局、（c）鉄道停車場、とくに（d）橋梁を占領させ、どんな損失もいとわずにそれを確保すること。
最も決意の固い分子（われわれの「突撃隊員」と青年労働者、さらに最も優秀な水兵）を選抜して小部隊に編成し、すべての最重要地点の占領にあたらせ、またいたるところですべての重要作戦に参加させること、たとえば、
ピーテルを包囲し、遮断し、艦隊、労働者、陸軍部隊の協同攻撃でこれを占領すること。これは、技術と三重の大胆さとを必要とする任務である。
小銃と爆弾で武装した最もすぐれた労働者の部隊を編成して、全滅しても敵をとおすな、というスローガンのもとに、敵の「本拠」（士官学校、電信局と電話局、その他）の攻撃と包囲にあたらせること。
行動が決定されたあかつきには、指揮者諸君が、ダントンとマルクスの偉大な遺訓をりっぱに応用することを、期

待しよう。

　ロシア革命と世界革命の成功は、二、三日間の闘争にかかっている。

一九一七年一〇月八（二一）日に執筆
一九二〇年一一月七日に新聞『プラウダ』第二五〇号にはじめて発表
署名――局外者

全集、第五版、第三四巻、三八二―三八四ページ所収
邦訳全集、第二六巻、一七七―一七九ページ所収

ロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会会議決議（二二）

一九一七年一〇月一〇（二三）日

　中央委員会は次のことを認める。ロシア革命をめぐる国際情勢（全ヨーロッパに世界社会主義革命が成長していることの端的な現われとして、ドイツの海軍に反乱が起こったこと、さらに、ロシア革命を圧殺する目的で帝国主義者が講和を結ぶおそれがあること）も、――軍事情勢（ロシアのブルジョアジーとケーレンスキー一派が、疑いもなく、ピーテルをドイツ軍に明け渡す決心をしていること）（二三）も、――プロレタリア党がソヴェト内で多数を獲得したことも、――このすべては、農民の蜂起や、人民の信頼がわが党のほうに向けかえられたこと（モスクワの選挙）とあいまって、また最後に、第二のコルニーロフ反乱が明白に準備されていること（ピーテルからの〔革命的〕軍隊の転出、カ

ザックのピーテルへの輸送、カザックによるミンスクの包囲、等々）も、——このすべては、武装蜂起を日程にのぼせている。

このように、武装蜂起が避けられないものとなり、その機運が完全に成熟したことを認めて、中央委員会は、すべての党組織にたいし、このことを指針とし、この見地からすべての実践的問題（北部地方ソヴェト大会、ピーテルからの軍隊の転出、モスクワおよびミンスクの住民の行動（三）、等々）を討議し解決するように提案する。

一九二二年に雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』第一〇号にはじめて発表
全集、第五版、第三四巻、三九三ページ所収
邦訳全集、第二六巻、一八九ページ所収

労働者・兵士代表ソヴェト第二回全ロシア大会（三）

一九一七年一〇月二五—二六日（一一月七—八日）

一 講和についての報告

一〇月二六日（一一月八日）

講和の問題は今日の焦眉の問題、切実な問題である。この問題については多くのことが話されもし、書かれもした。諸君もみな、おそらく、それについて少なからず討議してきたことであろう。だから、諸君の選んだ政府が公布すべき宣言の朗読に移ることを許されたい。

講和にかんする布告

一〇月二四―二五日の革命によって樹立され、労働者・兵士・農民代表ソヴェトに立脚する労農政府は、すべての交戦国の人民と政府に、公正な民主主義的講和についてただちに交渉を始めるよう申し入れる。

戦争に疲れはて、苦しみ、悩みぬいた、すべての交戦国の労働者階級と勤労諸階級の圧倒的多数者が渇望している公正な、あるいは民主主義的な講和――ロシアの労働者と農民がツァーリ君主制を打倒したのち、きわめて明確かつねばりづよく要求してきた講和――、このような講和として政府が認めるのは、無併合（すなわち、他国の土地を略奪することのない、他民族を暴力的に合併することのない）、無賠償の、即時の講和である。

ロシア政府は、このような講和をただちに締結するよう、すべての交戦諸国民に申し入れるとともに、すべての国、すべての民族の人民代表の全権をもった会議がこのような講和のすべての条件を最終的に承認するまで、いささかも遅滞することなく、ただちにあらゆる断固たる措置をとる用意のあることを表明する。

政府が、民主主義派一般、とくに勤労諸階級の法意識にしたがって、併合、すなわち他国の土地の略奪と解しているのは、およそ弱小民族が正確に、明白に、かつ自由意志にもとづいて同意と希望を表明していないのに、強大な国家がこの弱小民族を合併することであり、その暴力的な合併がいつおこなわれたかにはかかわりなく、暴力的に合併されたり、ある国家の境界内に暴力的に引きとめられたりする民族が、どれだけ進歩しているか後進的かにはかかわりなく、さらにまた、この民族がヨーロッパに住んでいるか、それとも遠い海外諸国に住んでいるかにはかかわらない。

もしいずれかの民族がある国家の境界内に暴力によって引きとめられているなら、もし、この民族によって表明された希望――その希望が印刷物や、人民集会や、政党の決定に表明されていようと、民族的抑圧に反対する憤激や蜂起に表明されていようと、同じことである――にさからって、この民族にたいして、合併する側の民族、一般により強力な民族の軍隊が完全に撤退したうえで、いささかの強制もくわえられずに、自由な投票によって、この民族の国家的存立の形態の問題を解決する権利があたえられないなら、この民族の合併は併合、すなわち略奪であり暴行である。

富強な民族がその略奪した弱い民族を自分たちのあいだでどのように分けあうかをめぐっておこなわれているこの戦争をつづけることを、政府は人類にたいする最大の犯罪であると考え、例外なくすべての民族にとって等しく公正

な前述の条件にもとづいてこの戦争を終わらせる講和条件に即時調印する決意であることを、厳粛に声明する。

それと同時に、政府は、前述の講和条件をけっして最後通牒的なものとは考えないこと、すなわち、政府は他のいかなる講和条件でも検討することに同意することを声明する。ただし政府は、どの交戦国であれその講和条件をできるだけ速やかに提案するよう、また講和条件を提案するにあたってはそれがまったく明白であって、あいまいな点や秘密はすべて無条件にとりのぞくよう主張する。

政府は秘密外交を廃止するとともに、自己の側ではすべての交渉を全人民の面前で完全に公然とおこなうという確固たる意向を表明し、一九一七年二月から一〇月二五日までに地主と資本家の政府が確認または締結した秘密条約を完全に公表することにただちに着手する。これまで大多数の場合にそうであったように、それらの秘密条約の全内容がロシアの地主と資本家に利益と特権をあたえるためのものであり、大ロシア人の併合地域を維持または増加するためのものであるかぎり、政府はこれを無条件に即時廃棄することを声明する。

政府は、すべての国の政府と人民に講和締結にかんする公開の交渉をただちに開始するよう申し入れるとともに、この交渉を、文書の連絡や、電報によっても、また各国代表間の交渉、あるいはこれらの代表の会議によっても、おこなう用意があることを表明する。このような交渉を容易にするために、政府は中立諸国へのその全権代表を任命する。

政府はすべての交戦国の政府と人民に、ただちに休戦協定を結ぶよう申し入れる。そのさい政府は、この休戦がすくなくとも三ヵ月を期間として結ばれることが望ましいと考える。これだけの期間があれば、戦争にまきこまれたか、あるいは参戦をよぎなくされたすべての大小の民族の代表が例外なく参加した講和交渉を完了することも、また、講和条件を最後的に批准するためにすべての国の人民代表の全権をもった会議を招集することも、まったく可能である。

すべての交戦国の政府と人民に以上のように講和を申し入れるにあたって、ロシア労農臨時政府は、とくに、人類の最も先進的な三民族、この戦争に参加した三大国家、イギリス、フランス、ドイツの自覚した労働者諸君にも呼びかける。これらの国の労働者は、進歩と社会主義の大業に最大の貢献を果たした。イギリスにおけるチャーティスト運動[三]の偉大な模範がそれであり、フランスのプロレタリアートがおこなった世界史的意義をもつ一連の革命がそれであり、最後に、ドイツにおける社会主義者取締法にたいする英雄的なたたかい、全世界の労働者の模範とすべきドイ

ツの大衆的プロレタリア組織をつくりだすための長期にわたる頑強な規律ある活動がそれである。プロレタリア的英雄精神と歴史的創造のこれらすべての模範は、前述した国国の労働者が、戦争の惨禍とその結果から人類を解放するという、いま彼らに負わされている任務を理解するであろうこと、これらの労働者は、われわれが平和の大業を、それとともにまたあらゆる隷属とあらゆる搾取から勤労被搾取住民大衆を解放するという大業を成功裏にやりとげるよう、その全面的な、断固たる、あくまで精力的な活動によって、われわれを助けるであろうことを、われわれに保障している。

一〇月二四―二五日の革命によって樹立され、労働者・兵士・農民代表ソヴェトに立脚する労農政府は、ただちに講和交渉を開始しなければならない。われわれのよびかけは、諸国の政府と人民の双方に向けられなければならない。われわれは諸国の政府を無視することはできない。なぜなら、無視すれば、講和締結の可能性がさきに延ばされるからである。人民政府はそういうことをあえてすることはできない。だがわれわれには、同時に諸国の人民にも呼びかけずにすます権利は断じてない。どこでも、政府と人民の意見はくいちがっている。だから、われわれは、人民が戦争と平和の問題に介入するのを助けなければならない。もちろん、われわれは、無併合・無賠償の講和というわれわれの綱領全体を、極力主張しつづけるであろう。われわれはこの綱領から後退することはあるまい。しかしわれわれは、われわれの敵が、自分たちの条件はこれとは違うから、君たちと交渉にはいるわけにはいかないと言う可能性を、彼らの手からたたきおとさなければならない。いや、われわれは、彼らに有利なこういう立場を彼らから奪いとらなければならないし、われわれの条件を最後通牒的に突きつけてはならない。だからこそ、われわれはあらゆる講和条件、あらゆる提案を検討するつもりだという条項をいれたのである。しかし、検討することは、まだ、受けいれることではない。われわれは、それらの条件や提案を憲法制定議会の審議にゆだねるであろう。憲法制定議会は、譲歩してよいことと、譲歩してはならないこととを、権能をもって決定するであろう。われわれは、口先ではみな平和や正義をうんぬんしながら、実際には侵略的な強盗戦争をおこなっている諸国政府の欺瞞とたたかう。どの政府も、自分が考えていることをのこらず口にすることはないだろう。だが、われわれは秘密外交に反対であり、全人民の面前で公然と行動するであろう。われわれは困難に目をとざすものでないし、とざしたこともない。戦争を拒否することで

戦争を終わらせることはできないし、戦争を一方だけで終わらせることもできない。われわれは三ヵ月間の休戦を提案するが、へとへとになっている軍隊がたとえしばらくでも自由にひと息つくことができるように、もっと短い期間でも拒否しはしない。なおそのほかに、すべての文明国で、条件を審議するために人民代表の会議を招集することが必要である。

休戦協定の即時締結を提案するにあたって、われわれは、プロレタリア運動の発展のために多くのことをなしとげた国々の自覚した労働者諸君に訴える。われわれは、チャーティスト運動が存在したイギリスの労働者に、かずかずの蜂起によって自分の階級意識の力をあますところなく示したフランスの労働者に、また、社会主義者取締法との闘争に耐えぬいて強力な組織をつくりだしたドイツの労働者に訴える。

われわれは三月一四日の宣言[二六]で、銀行家を打倒することを提案した。しかし、われわれは自国の銀行家を打倒しなかったばかりでなく、彼らと同盟を結びさえした。いまわれわれは銀行家の政府を打倒した。

諸国の政府とブルジョアジーは、連合して労農革命を流血のうちに押しつぶすために、全力をつくすだろう。だが、三年間の戦争は十分に大衆に教えた。他の国々でのソヴェト運動、死刑執行人ヴィルヘルムのユンカーによって鎮圧されたドイツ艦隊の反乱。最後に、われわれが住んでいるのはアフリカの奥地ではなく、万事がすぐに知れわたるヨーロッパであることを銘記しなければならない。

労働運動は勝利をおさめ、平和と社会主義への道を切りひらくであろう。(長く鳴りやまぬ拍手)

二　講和についての報告の結語

一〇月二六日（一一月八日）

私は、宣言の一般的性格にはふれまい。また、本質的でない点については、諸君の大会がこれからつくる政府が修正をくわえることもできよう。

私は、われわれの講和要求を最後通牒的にすることには断然反対を表明するであろう。最後通牒は、われわれの大業全体を破滅させるものになりかねない。帝国主義諸国の政府に、われわれの要求とのなにか些細なくいちがいをとらえて、君たちは非妥協的だから講和交渉にはいることはできない、と言う可能性をあたえるような要求を、われわれは提出することはできない。

われわれはわれわれのよびかけをあらゆるところに送りつけるから、だれにもそれは知れわたるだろう。わが労農政府の提出した条件を隠しておくことはできないであろう。銀行家と地主の政府を倒したわが労農革命のことを隠しておくことはできない。

最後通牒的なものであれば、諸国政府は答えないでおくことができるが、われわれの文案では、彼らは答えざるをえないだろう。自分たちの政府はなにを考えているかを、みなに知らせよう。われわれは秘密を望まない。われわれは、諸国の政府がつねにその国の世論の監視下にあることを望んでいる。

われわれの要求が最後通牒的なために、他国の政府がなにを欲しているのか知ることができなくなるとしたら、どこか辺鄙な県の農民はどう言うだろう。彼はこう言うだろう——同志諸君、なぜ諸君はいろいろな講和条件が提案される可能性をなくしてしまったのか。私はいろいろな提案を審議したかった。それらを検討したかった。そしてそのあとで、憲法制定議会に出る私の代表たちに、どのような態度をとるべきかを指令したかった。私は、もし諸国の政府が同意しないなら、公正な条件のために革命的なやり方でたたかう用意がある。しかし、一部の国については、私がその国の政府にむかって、今後は自分たちだけでたたかってゆくように勧めたいと思うような条件を提出することだってありうる。われわれの考えの完全な実現は、ひとえに資本主義体制全体の打倒にかかっているのだ、と。農民はわれわれにそう言うかもしれない。そして彼は、ブルジョアジーと、政府の首脳におさまっているその死刑執行人——王冠をかぶっているものであれ、かぶらないものであれ——の醜さと悪行をすっかり暴露することがわれわれにとって肝心なことなのに、われわれが些細なことに非妥協

的すぎた、と言ってわれわれを非難するであろう。

われわれは、諸国の政府に、われわれの非妥協的態度を口実にして、なんのために人民が屠殺場に送られるのかを人民に隠す可能性をあたえるようなことを、あえてなしえないし、またしてはならない。これは一滴の水であるが、われわれは、ブルジョア的略奪の石をうがつこの一滴の水を放棄するようなことを、あえてなしえないし、またしてはならない。最後通牒は、われわれの敵の立場をらくにするだろう。われわれはすべての条件を人民に示そう。すべての国の政府にわれわれの条件を突きつけよう。そして各国政府に自国民への回答を出させよう。われわれはすべての講和提案を憲法制定議会にもちこんで、その決定にゆだねよう。

同志諸君が最大の注意をはらわなければならない点が、もう一つある。秘密条約は、公表しなければならない。併合と賠償にかんする条項は、廃棄しなければならない。同志諸君、条項にもいろいろある。強盗的な諸政府は、強奪協定を結んだだけでなく、この協定のなかに経済協定も、善隣関係にかんするその他さまざまな条項も盛りこんできたからである。

われわれは条約に拘束されはしない。われわれは条約に絡みこまれはしないだろう。われわれは強奪と暴力にかんするすべての条項をしりぞける。しかし、善隣的な約定や経済協定がふくまれている条項はすべて、快く受けいれる。われわれはそれらを拒むことはできない。われわれは三ヵ月間の休戦を提案する。われわれが長い期間を選ぶのは、諸国民は疲れており、足かけ四年もつづいているこの血まみれの虐殺からひと息つくことを熱望しているからである。われわれは、諸国民にとっては講和条件を審議し、議会の参加のもとに自分の意志を表明する必要があることを、理解しなければならない。だがこのためには、ある期間をあたえなくてはならない。だから、われわれは、塹壕内の兵士がこのはてしない人殺しの悪夢から醒めてひと息つけるように、長期の休戦を要求する。しかしわれわれは、もっと短い休戦の提案でもこばまずに、そういう提案を検討しよう。そして、一ヵ月あるいは一ヵ月半という休戦が提案されても、われわれは、それを検討するであろうし、受けいれるべきであろう。われわれの休戦提案もまた最後通牒的であってはならない。なぜなら、われわれは敵に、われわれの非妥協的態度を楯にとって、諸国民に真相を隠す可能性をあたえはしないだろうからである。われわれの提案は最後通牒的であってはならない。なぜなら、休戦を望まない政府は犯罪的だからである。われわれがわれわれの休戦提案を最後通牒的でないものにすれば、まさにそのこと

によって、われわれは、人民の目に諸国政府を犯罪者として映らせるであろう。人民はこのような犯罪者に遠慮しないようになるであろう。われわれが最後通牒を出さないのはわれわれの無力を示すものだ、と言ってわれわれに反論する人がある。だが、人民の力について論じるさい、もはやブルジョアの欺瞞をいっさい投げすてるべき時だ。力というのは、ブルジョア的な考え方によれば、大衆が帝国主義諸政府の命令に服従して、盲目的に屠殺場におもむく時のことである。ブルジョアジーが国家に力があると認めるのは、国家が政府機構の全力を用いて大衆をブルジョア的統治者の欲するところへ投入することができる時だけである。われわれのもつ力の概念は、これとは違っている。われわれの考えによれば、国家は、大衆の自覚によって強力なのである。国家は、大衆がすべてを知り、すべてについて判断することができ、自覚してすべてのことにあたるとき強力なのである。疲れている、とありのままに語ることを、われわれは恐れるにおよばない。なぜといって、どの国家がいま疲れていないだろうか？　どの国の人民がこのことを公然と語っていないだろうか？　イタリアをとってみよう。そこでは、この疲れがもととなって、殺戮の中止を要求する革命運動が長期にわたってあった。ドイツではそこ労働者の大衆的デモンストレーションがおこなわれ、そこでは戦争中止のスローガンがかかげられているのではないのか？　死刑執行人ヴィルヘルムとその手先によって無慈悲に押しつぶされはしたが、ドイツ海軍のあの反乱は、疲れから起こったのではないのか？　ドイツのように規律ある国でこのような出来事が起こりうるなら、またそこで、疲れとか、戦争の中止とかについて論じはじめているとすれば、われわれが同じことを公然と言ったとしても、われわれとしてなにも恐れることはない。なぜなら、これは、われわれにとっても、すべての交戦国にとっても、いや非交戦国にとってさえ、同じようにまちがいのない真実だからである。

三　土地についての報告

一〇月二六日（一一月八日）

革命は土地問題をはっきり提起することがどれほど重要であるかを立証し、明示したと、われわれは考えている。武装蜂起が起こり、第二革命、十月革命が起こったことは、土地が農民の手に引き渡されなければならないことを、はっきり立証している。罪をおかしたのは、打倒された政府であり、さまざまな口実を設けて土地問題の解決を引き延ばし、こうして国を荒廃と農民蜂起にみちびいたメンシェヴィキとエス・エルの協調主義諸党であった。農村のポグロムや無政府状態を語る彼らのことばは、虚偽の、卑怯な欺瞞のひびきをもっている。道理にかなった措置をとりながら、ポグロムや無政府状態が生じたためしが、いつどこにあったか？　政府が道理にかなった行動をしていたなら、政府の措置が貧農の必要にこたえていたなら、はたして農民大衆は動揺を起こしただろうか？　しかし、アウクセンチエフやダンのソヴェトが是認した政府の措置はすべて、農民の利益に反するものであり、彼らをいやおうなく蜂起に立たせたのである。

政府は、蜂起を引きおこしておきながら、自分で引きおこしたそのポグロムや、無政府状態のことでわめきたてはじめている。政府は蜂起を鉄と血で弾圧しようと思ったのだが、自分のほうが、革命的な陸海兵士と労働者の武装蜂起によって一掃されてしまった。労農革命の政府は、なによりも第一に、土地問題を解決しなければならない。これは、膨大な貧農大衆を安心させ、満足させることのできる問題である。ここで、諸君のソヴェト政府が公布すべき布告の条項を読みあげよう。この布告の一ヵ条には、地方の農民代表ソヴェトの二四二通の委託書をもとにして作成された、土地委員会への委託書がとりいれられている。

土地にかんする布告

（一）　地主的土地所有は、いっさい無償で、ただちに廃止される。

（二）　地主所有地、ならびに帝室、修道院、教会のすべての土地は、そのいっさいの家畜、農具、農事用建物、すべての付属施設とともに、憲法制定議会まで、郷土地委員会と郡農民代表ソヴェトの処分にゆだねられる。[三三]

（三）　今後全人民に属する没収財産をいささかでもそこなうことは、重罪として革命裁判所によって処罰されるべきものとする。地主所有地の没収にあたって厳格な秩序を守るため、どの程度の大きさの地所が、またどの地所が没

収されるべきかを決定するため、全没収財産の正確な目録をつくるため、また、すべての建物、農具、家畜、貯蔵農産物その他をふくめて、人民の手に移る全農業経営を革命的なやり方で厳重に保全するために、郡農民代表ソヴェトはあらゆる必要な措置を講じる。

（四）　憲法制定議会によって土地改革が最後的に解決されるまでは、二四二通の地方農民委託書をもとにして『全ロシア農民代表ソヴェト通報』編集局が作成し、同『通報』第八八号（ペトログラード、一九一七年八月一九日、第八八号）に発表された、次の農民委託書が、どこでも、偉大な土地改革を実施するための指針とならなければならない。

土地についての農民委託書

「土地問題を全面的に解決できるのは、全人民の憲法制定議会だけである。

土地問題の最も公正な解決は、次のようなものでなければならない。

（一）　土地の私有権は永久に廃止される。土地は、売ることも、買うことも、賃貸ししたり担保に入れたりすることもできず、その他いかなる方法によっても他人に譲渡することはできない。

すべての土地、すなわち、国有地、帝室領地、御料地、修道院所有地、教会所有地、特許工場所有地、長子相続地、〔三〇〕私有地、公有地、農民地その他は、無償で収用されて、全人民の財産となり、その土地で働くすべての勤労者の用益に移される。

この財産上の変革によって損害をこうむった者は、新しい生活条件に順応するのに必要な期間だけ、公共の扶助をうける権利を認められる。

（二）　すべての地下埋蔵物、すなわち鉱物、石油、石炭、塩等々、および全国的意義をもつ森林および河川湖沼は、国家の排他的用益に移される。小さな河川、湖沼、森林その他はすべて、地方自治機関による管理を条件に、共同体の用益に移される。

（三）　高度に発達した経営のおこなわれている地所、すなわち、果樹園、プランテーション、苗圃、養樹園、温室その他は、分割されることなく、模範経営とされ、その規模と重要性におうじて国家または共同体の排他的用益に移される。

都市と農村の屋敷付属地は、家庭用の菜園や果樹園をふくめて、そのまま現保有者の用益にゆだねられる。ただし、地所の大きさと土地用益税の額は、法律によって定められる。

（四）　種馬場、官有および私有の種畜場、養禽場その

他は、没収されて全人民の財産とされ、その大きさと重要性におうじて国家または共同体の排他的用益に移される。

補償の問題は憲法制定議会の審議に付するものとする。

（五）没収された土地の経営用具は、家畜も農具も、すべて無償で、その大きさと重要性におうじて国家または共同体の排他的用益に移される。

経営用具の没収は、土地の少ない農民についてはおこなわない。

（六）家族の手助けをうけるか、または組合をつくって、自分の労働で土地を耕作することを希望するロシア国家の市民とはすべて（性別にかかわりなく）、土地用益権を受け取る。ただし、土地を耕作する能力があるあいだに限られるものとする。賃労働の雇用は許されない。

村団の成員が二年間、一時的に労働能力を失った場合には、村団は、二年を限って、その成員が労働能力を回復するまで、土地の共同耕作によって同人を援助する義務がある。

老齢または廃疾の結果、みずから土地を耕作する能力を永久に失った農耕者は、土地用益権を失い、そのかわりに、国家から年金の保障をうける。

（七）土地用益は均等でなければならない。すなわち、土地は勤労者のあいだに、地方的条件を考慮して、労働基準または消費基準にもとづいて分配される。

土地用益の形態は、まったく自由でなければならない。個々の村または部落で決定されるところにしたがって、個人農的、フートル的、共同体的、アルテリ的形態のいずれでもよい。

（八）すべての土地は、収用後は、全人民的土地フォンドに属する。勤労者への土地の分配は、民主的に組織された、身分の別のない農村および都市の共同体から、州の中央機関にいたるまでの、地方および中央の自治機関が管掌する。

土地フォンドは、人口の増加と農業の生産性および栽培技術の向上におうじて、定期的に割り替えられるべきものとする。

分与地の境界を変更するさい、分与地の最初の中核部分に手をつけることは許されない。

離農者の土地は土地フォンドに返還される。そのさい、離農者の地所を受け取る優先権は、同人の最近親者および同人の指定する者にあたえられる。

土地に投じられた肥料費や土地改良費（根本的改良）は、分与地が土地フォンドに返還されるまでに利用され

なかった部分については、払い戻されなければならない。

個々の地方で現存の土地フォンドがその地方の全住民の必要をみたすのに不十分である場合には、過剰の人口は移住させられるものとする。

移住の実施、ならびに移住の費用、農具の供給その他の費用については、国家が責任を負わなければならない。

移住は次の順序でおこなわれる――移住を希望する土地のない農民、つぎに共同体の不良分子、脱走兵その他、最後に、抽選あるいは取りきめによって選ばれたもの。」

この委託書にふくまれていることはすべて、全ロシアの自覚した農民の大多数者の無条件の意志をあらわすものとして、臨時の法律とされることを公告する。この法律は、おって憲法制定議会がひらかれるまで、できるだけ速やかに実施されるが、そのある部分については、郡農民代表ソヴェトの定めるところにより、必要におうじ順を追って実施される。

（五）普通の農民と普通のカザックの土地は没収されない。

ここで、布告そのものと委託書とは社会革命党員がつくったものだ、という声があがっている。それならそれでよい。だれがつくったかはどうでもいいことではないか。しかしわれわれは、民主主義的政府として、たとえ自分では不同意であっても、下部の人民の決定を回避することはできない。決定を実地に適用し、それを現地で実行するうちに、実生活の試練をうけて、農民自身、どこに真理があるかを理解するだろう。そして、たとえ農民が今後も社会革命党員のあとについてゆくにしても、また農民が憲法制定議会でこの党に過半数をあたえるにしても、そのときでもわれわれは言うであろう――それならそれでよい、と。実生活は最良の教師である。それはだれが正しいかを示すであろう。農民は一方の端からこの問題を解決するがいい。われわれは他方の端からそれを解決してゆくであろう。実生活は、革命的創造の全体的な流れのなかで、新しい国家形態をつくりだしてゆくうちに、われわれ両者をいやおうなしに接近させるであろう。われわれは実生活に従ってゆかなければならない。われわれは人民大衆に創造の完全な自由をあたえなければならない。武装蜂起によって打倒された旧政府は、居のこったツァーリの旧官僚を使って土地問題を解決しようと望んだ。だが官僚は、問題を解決するかわりに、農民と抗争しただけであった。農民は、わが国の八ヵ月の革命のうちになにかを学んだ。彼らは、すべて

の土地問題を自分で解決しようと望んでいる。だから、われわれは、この法案の修正にはいっさい反対する。われわれは細目に立ちいろうとは思わない。なぜなら、われわれは布告を書いているのであって、行動綱領を書いているのではないからである。ロシアは大きな国で、その地方地方の条件はさまざまである。われわれは、農民自身がわれわれよりももっとうまく、正しく、当然あるべきように、問題を解決できるであろうと確信する。われわれの趣旨でやるか、エス・エルの綱領の趣旨でやるか――要点はそういうところにはない。要点は、農民に、農村にはもはや地主はいない、という固い確信をもたせること、農民に自分ですべての問題を解決させ、農民に自分でその生活を建設してゆかせることにある。（さかんな拍手）

一九一七年一〇月二六日（一一月八日）に執筆
講和についての報告、講和についての報告の結語、およひ土地についての報告は一九一七年一一月一〇日（一〇月二八日）に新聞『プラウダ』第一七一号および『イズヴェスチヤ』第二〇九号に発表
講和にかんする布告は一九一七年一一月九日（一〇月二七日）に『プラウダ』第一七〇号および『イズヴェスチヤ』第二〇八号に発表
土地にかんする布告は一一月一〇日（一〇月二八日）に『プラウダ』第一七一号および『イズヴェスチヤ』第二〇九号に発表

全集、第五版、第三五巻、一三―二七ページ所収
邦訳全集、第二六巻、二四七―二六五ページ所収

労働者と勤労被搾取農民の同盟

『プラウダ』編集局への手紙

きょう、一一月一八日の土曜日に、たまたま農民大会[一三]で演説したさい、私は公開の席で質問をうけ、すぐその場で回答をあたえた。この質問と私の回答は、全読者にすぐに知らせる必要がある。私は、形式上はもっぱら自分の意見として語ったのであるが、実質上は全ボリシェヴィキ党を代表して語ったからである。

それはこういうことであった。

演説のなかで、私は、ボリシェヴィキ派労働者と、現在多くの農民の信頼をえているエス・エル左派[一四]との同盟という問題にふれて、この同盟が「誠実な連合」、誠実な同盟でありうることを立証しようとした。なぜなら、賃金労働者の利益と勤労被搾取農民の利益には根本的なくいちがいはないからである。社会主義は両者の利益をみたすことが十分にできる。社会主義だけが両者の利益をみたすことができる。だから、プロレタリアと勤労被搾取農民との「誠実な連合」は可能であり、必要なのである。これに反して、勤労被搾取諸階級とブルジョアジーとの「連合」（同盟）は、双方の階級の利益が根本的にくいちがっているので、「誠実な連合」ではありえない。

私は次のように言った。政府部内で、ボリシェヴィキが多数派で、エス・エル左派が少数派だと仮定しよう。それどころか、エス・エル左派はたった一人、農業人民委員がいるだけだと仮定しよう。そういう場合でも、ボリシェヴィキは誠実な連合を実現することができるであろうか？

できる。なぜなら、ボリシェヴィキは、反革命分子（エス・エル右派と祖国防衛派をふくむ）との闘争では非妥協的であるが、第二回全ロシア・ソヴェト大会で承認された土地綱領の純エス・エル的な諸条項に関係のあるような問題の表決にあたっては、棄権することがその義務であろうからである。たとえば、均等な土地用益や、小経営主のあいだでの土地の割替についての条項がそれである。

こういう条項の表決のさいに棄権しても、ボリシェヴィキは、いささかも自分の綱領にそむいたことにはならない。なぜなら、社会主義が勝利している条件のもとでは（工場の労働者統制、つづいて工場の収用、銀行の国有化、国の

国民経済全体を規制する最高経済会議の創設)、労働者は、勤労被搾取小農民の提案する過渡方策が社会主義の大業に害をもたらさないかぎり、それに同意をあたえる義務があるからである。私はこう言った。カウツキーも、まだマルクス主義者であったころ(一八九九—一九〇九年)、大規模農業の国と小規模農業の国とでは社会主義への過渡方策が一様ではありえないことを、幾度も認めたものであった、と。

人民委員会議または中央執行委員会で、このような条項が表決されるさいには、棄権することがわれわれボリシェヴィキの義務であろう。なぜなら、エス・エル左派(ならびに彼らに味方する農民)が、労働者統制や、銀行の国有化などに同意している条件のもとでは、均等な土地用益は、完全な社会主義への過渡方策の一つにすぎないだろうからである。プロレタリアートのほうからこのような過渡方策を押しつけるとすれば、それは愚かしいことであろう。勤労被搾取小農民がそういう過渡方策を選ぶときには、プロレタリアートは、社会主義の勝利のために彼らに譲歩する義務がある。なぜなら、それらの方策は社会主義の大業に害をもたらしはしないだろうからである。

あるエス・エル左派(私の思いちがいでなければ、それは同志フェオフィラクトフであった)が、そのとき私に次のように質問した。

「ところで、憲法制定議会で、農民が均等な土地用益にかんする法律をとおしたいと望み、ブルジョアジーが農民に反対し、決定がボリシェヴィキしだいということになったら、ボリシェヴィキはどんな態度をとるのか?」

私はこう答えた。社会主義の大業が労働者統制の実施や、銀行の国有化などによって保障されている場合には、労働者と勤労被搾取農民の同盟はプロレタリアートの党に、ブルジョアジーに反対し農民に賛成して投票する義務を負わせるであろう。私の意見では、そういうときにはボリシェヴィキは、表決のさいに特別の声明をおこなって、これには異議があるのだという留保をおこなっておく権利があるだろう。しかし、そういう場合に棄権するのは、部分的な意見の不一致のために、社会主義をめざす闘争での自分の同盟者を裏切ることを意味するであろう。こういう状況のもとでは、ボリシェヴィキはけっして農民を裏切らないであろう。権力が労働者農民の政府の手にあり、労働者統制が実施され、銀行の国有化が実施され、国民経済全体を方向づける(規制する)労働者農民の最高経済機関が設置され、等々するならば、均等な土地用益その他の方策は、けっして社会主義に害をおよぼすことはないであろう、と。

以上が私の回答であった。

競争をどう組織するか？

一九一七年一二月一八日（一二月一日）に執筆
一九一七年一二月二日（一一月一九日）に新聞『プラウダ』第一九四号に発表
全集、第五版、第三五巻、一〇二一一〇四ページ所収
邦訳全集、第二六巻、三四一―三四三ページ所収

ブルジョア文筆家は、競争、私的企業心その他の資本家と資本主義制度のすばらしい長所や魅力をほめたたえて、紙の山ができるほど書きちらしてきたし、いまも書きちらしている。社会主義者は、この長所の意義を理解しようとせず、「人間の天性」を考えにいれようとしない、と言って非難されてきた。ところが、実際には、資本主義は、競争が企業心、活動力、大胆な創意をいくらかでも広い範囲につちかうことのできた独立小商品生産を、ずっと昔に大規模工場生産、株式企業、シンジケートやその他の独占体とおきかえてしまったのである。このような資本主義のもとでの競争は、住民大衆、その大多数者、勤労者の九割九分までの者の企業心、活動力、大胆な創意がこれまで聞いたこともないほど凶暴な仕方で抑圧されることを意味し、また社会の上層では金融上のぺてん、専制、お追従が競争

にとってかわったことを意味している。

社会主義は、競争を消滅させないばかりではなく、反対に、これを真に広く、真に大衆的な規模で適用する可能性、勤労者の多数者がその力量をあらわし、その能力をのばし、その才能を発揮することのできるような活動舞台に、真に彼らを引き入れる可能性をはじめてつくりだす。人民のなかにはそういう才能のまだ汲まれたことのない泉がひそんでいるのだが、資本主義は、そういう才能を何万、何百万となく踏みにじり、押しつぶし、締め殺してきたのである。

社会主義政府が権力をにぎっているいまでは、われわれの任務は競争を組織することである。

ブルジョアジーの腰巾着や寄食者どもは、社会主義を一律の、お役所式で、単調な、灰色の兵営のように描いてきた。財布の召使、搾取者の下僕であるブルジョア・インテリゲンツィア諸氏は、社会主義のことで人民を「おどかしてきた」。ところが、この人民は、まさに資本主義のもとでこそ、度はずれの、うんざりする労働、食うや食わずの暮らし、ひどい貧乏といった苦役と兵営ふうの生活をおくる運命を負わされているのである。この苦役から勤労者を解放する第一歩は、地主の土地の没収、労働者統制の実施、銀行の国有化である。それにつづく措置は、工場の国有化、生産物販売組合をも兼ねた消費組合への全住民の強制的組織化、穀物その他の必需品の商業の国家独占であろう。

企業心や、競争や、大胆な創意を発揮する可能性がいまはじめて広く、真に大衆的につくりだされている。資本家がほうりだされたか、すくなくともほんとうの労働者統制によって抑制されているどの工場も、搾取者である地主をいぶりだして、その土地を取りあげたどの農村も、いまや、いまはじめて、働く人が自分の力量を発揮し、いくらか腰をのばし、まっすぐに立ち、自分を人間だと感じることのできる活動場面となっている。何世紀にもわたる他人のための労働、搾取者のための強いられた労働ののちにはじめて、自分のための労働、しかも最新の技術と文化のあらゆる成果に立脚する労働の可能性が現われている。

もちろん、強いられた労働から自分のための労働への、この人類史上最大の交替は、摩擦も、困難も、衝突もなしに、骨の髄からの徒食者とその腰巾着どもに暴力をくわえることもなしに、起こることはできない。この点については、労働者はだれひとり幻想をいだいていない。長い長い年月にわたる搾取者のための苦役労働、搾取者からうけた数しれない愚弄と侮辱によって鍛えられ、苦しい窮乏によって鍛えられた労働者と貧農は、搾取者の反抗を打ち砕くには時間がかかることを知っている。声をからして資本家を攻撃して「わめきたて」、彼らに反対だという「ゼスチ

ュアをし」、彼らを「こきおろした」けれども、いざ実行となり、おどかしを実行し、資本家の更迭の仕事を実地におこなう段になると、泣きさけび、ぶたれた犬ころのようにふるまうだけであったインテリゲンツィア諸氏、ノーヴァヤ・ジーズニ派その他のくだらない連中のセンチメンタルな幻想には、労働者と農民はすこしも染まっていない。

強いられた労働から自分のための労働、巨大な、全国家的な（ある程度はまた国際的、世界的な）規模で計画的に組織された労働へのこの偉大な交替は、搾取者の反抗を鎮圧するための「武力的」方策のほかに、プロレタリアートと貧農が大きな組織上の努力、また組織者的な努力をはらうことを必要としている。組織上の任務は、きのうまでの奴隷所有者（資本家）とその召使の群――ブルジョア・インテリゲンツィア諸氏にたいする容赦のない武力弾圧の任務と絡みあって、不可分の一体となっている。きのうまで次のように言い、また考えている――われわれはいつでも組織者であり上長であった。われわれは命令してきた。われわれはそのままでいたい。われわれは「庶民」、労働者と農民に従うまい。われわれは彼らの下につくまい。われわれは知識を、財布の特権と資本の人民支配とを守る武器に変えよう、と。

ブルジョアとブルジョア・インテリゲンツィアはそう言い、そう考え、そう行動している。わが身かわいさの見地からすれば、彼らのふるまいはよくわかる。農奴主的地主の寄食者と居候、坊主、書き役、ゴーゴリの作品型の官吏、ベリンスキーを憎んだ「インテリゲンツィア」にとっても、農奴制に別れをつげるのは、同じように「困難」であった。しかし、搾取者とそのインテリ下僕どもの仕事は、先の望みのない仕事である。労働者と農民は、彼らの反抗を打ち砕きつつあり――残念ながら、まだ十分にしっかりと、断固として、容赦なくやってはいないが――、そして打ち砕きつくすであろう。

「彼ら」は考える――「庶民」、「普通」の労働者と貧農には、社会主義革命が勤労者の肩に負わせた偉大な、世界史的な意味で真に英雄的な、組織上の任務は、手におえないだろう、と。「われわれなしにはやっていけない」――資本家や資本主義国家に奉仕することに慣れたインテリゲンツィアは、そう言って自分を慰めている。彼らの厚かましい目算ははずれるだろう。いまでもすでに教育のある人たちが現われてきて、人民の側に、勤労者の側に移って、資本の召使どもの反抗を打ち砕くのを助けている。また、組織上の才能をもった人材は、農民や労働者階級のなかにたくさんいるのであって、この人々はいまやっと自覚し、

目をさまし、生きいきした、創造的な、偉大な活動に引き入れられ、社会主義社会の建設に自主的にとりかかりはじめたところである。

いま、最大の任務とまではいかないにしても、最大の任務の一つになっているのは、創造的な組織活動の面で労働者の、一般にすべての勤労被搾取者のこの自主的な創意を、できるだけ広く発展させることである。国家を統治したり、社会主義社会の組織的建設をつかさどったりすることができるのは、いわゆる「上流階級」だけ、金持か金持階級の学校を卒業した者だけだというような古い、ばかげた、とほうもない、いまわしい、けがらわしい偏見を、どんなことがあっても粉砕してしまわなければならない。

これは偏見である。この偏見は、腐った因襲、旧弊、奴隷の習慣によってささえられており、またそれ以上に、略奪しながら統治し、統治しながら略奪することを利益とする資本家のきたならしい私欲によってささえられている。そうだ、労働者は自分に知識の力が必要であることを、かたときも忘れないであろう。教育事業に労働者が示している、ほかならぬいま示している異常な熱意は、この点について、プロレタリアートのあいだに思いちがいはないこと、またありえないことを証明している。ところで組織者的活動は、読み書きができ、人間というものを知っており、実地の経験をもっている者なら、普通の労働者や農民にやりこなせる仕事である。こういう人々は、ブルジョア・インテリゲンツィアが傲慢に見くだして軽侮をもって語っている「庶民」のなかに、たくさんいる。労働者階級と農民のなかには、こういう才能のまだ汲まれたことのない泉、しかもきわめて豊かな泉がひそんでいる。

労働者と農民はまだ「おずおずしており」、自分がいまでは支配階級であるという考えにまだ慣れておらず、まだ十分断固とした態度をとっていない。変革も、飢えと欠乏に一生鞭打たれながら働かざるをえなかった幾百万幾千万の人々のなかに、こういう性質を一挙につくりだすことはできなかった。しかし、一九一七年の十月革命が、このような性質をめざめさせ、古くからの障害をすべて打ち砕き、朽ちた足かせをぶちこわし、勤労者を新生活の自主的創造の道にみちびいているところにこそ、この革命の力があり、その生命力があり、その不敗性がある。

記録と統制——これこそ、それぞれの労働者・兵士・農民代表ソヴェト、それぞれの消費組合、それぞれの配給組合または委員会、それぞれの工場委員会または労働者統制機関一般の主要な経済的任務である。

自由でない人間の見地から労働の基準や生産手段を見る古い習慣との闘争、つまり、なんとかしてよけいな重荷か

らまぬかれよう、なんとかしてブルジョアジーからひとかけらでもかすめとろうとする古い習慣との闘争が必要である。先進的な、自覚した労働者はすでにこの闘争を開始した。戦時にとくに大量に工場にはいってきた新参者で、現在、人民の工場、人民の所有となった工場にたいしても、あいかわらず「ひとかけらでもよけいに多くかすめとって逃げだす」ことしか考えない立場でのぞもうとしている連中に、自覚した労働者は断固とした反撃をくわえている。農民と勤労大衆のなかの自覚した、誠実な、物事を考える者はすべて、この闘争で先進的労働者の味方になるであろう。

記録と統制――それが最高の国家権力としての労働者・兵士・農民代表ソヴェトによって、あるいはこの権力の指示に、その委任にもとづいておこなわれるかぎり、――あまねくおこなわれる全般的、普遍的な記録と統制、労働の量と生産物の分配とにたいする記録と統制――プロレタリアートの政治的支配がつくりだされ、保障されているかぎり、ここにこそ、社会主義的改造の要点がある。

社会主義に移行するのに必要な記録と統制となりうるのは、大衆による記録と統制だけである。金持にたいし、ぺてん師にたいし、徒食者にたいし、無頼漢にたいする記録と統制に、労働者農民大衆が自発的に、誠実に、革命的熱情をもって協力することによってはじめて、のろうべき資本主義社会のこれらの遺物、これらの人間のくず、どうしようもないほど腐りはて麻痺した人々、資本主義から遺産として社会主義に残されたこの悪疫、ペスト、潰瘍にうちかつことができる。

労働者・農民諸君、勤労被搾取者諸君！　土地、銀行、工場は全人民の所有となった！　生産物の生産と分配にたいする計算と統制に、自分でとりかかりたまえ――社会主義の勝利への道、その勝利の保障、あらゆる搾取、あらゆる窮乏と貧困に勝利する保障はここに、ここにだけある！なぜなら、労働と生産物を正しく配分しさえすれば、この配分にたいする全人民の実務的、実際的な統制を確立しさえすれば、政治だけでなく、日常の経済生活でも、人民の敵、金持、その寄食者、さらにぺてん師、徒食者、無頼漢に勝利しさえすれば、ロシアには穀物、鉄、木材、羊毛、綿花および麻が、みなに十分足りるだけあるからである。

これらの人民の敵、社会主義の敵、勤労者の敵には、なんの容赦もいらない。金持とその寄食者であるブルジョア・インテリゲンツィアに、必死のたたかいを宣言せよ、ぺてん師、徒食者、無頼漢にたたかいを宣言せよ。あれもこれも、前者も後者も、血を分けた兄弟であり、資本主義の産みの子であり、旦那衆とブルジョアの社会の息子であ

る。この社会では、ひとにぎりの人間が人民を略奪し、人民を愚弄してきた。この社会では、窮乏と貧困が幾千幾万人を無頼、金ずくの腐敗、ぺてんの道に追いこみ、人間らしい面影を失わせてきた。この社会は、勤労者の心に、ごまかしてでも搾取をまぬかれたい、せめて一分でもいやな仕事からのがれたい、ぬけだしたい、飢えないため、自分と自分の身内がひもじい思いをしないためには、どんな方法ででも、どんな犠牲をはらってでもひとかけらのパンなりとかすめとりたいという気持を、不可避的につちかってきた。

金持とぺてん師――それは一つのメダルの両面である。それは、資本主義によって育てあげられた寄生虫の二つの主要な種類である。それは、社会主義の主要な敵であって、これらの敵は、全住民の特別の監視下におかなければならず、社会主義社会の規則や法律にすこしでも違反したならば、容赦なく制裁しなければならない。この点での手ぬるさ、動揺、センチメンタリズムはすべて、社会主義にたいする最大の犯罪であろう。

これらの寄生虫が社会主義社会に害をおよぼさないようにするには、労働の量、生産物の生産と分配にたいする全人民的な記録と統制を組織して、幾百万の労働者農民が自発的に、精力的に、革命的熱情をもってこれを支持することが必要である。だが、この記録と統制は、誠実で、もののわかった、気のきいた労働者や農民なら、だれにでも十分にとりくむことができ、十分にやりこなすことができるものであるが、この記録と統制を組織するには、彼らの仲間のあいだから、彼ら自身の組織者的才能を引きださなければならない。組織者としての成功についての競争を彼らのあいだにかきたて、そしてこの競争を全国的規模で組織しなければならない。教養のある人からの必要な助言と、「教養のある」人々にありがちなだらしなさにたいする「普通の」労働者農民の必要な統制との区別を、労働者と農民がはっきり理解しなければならない。

このだらしなさ、怠慢、不精、なげやり、神経質なあせり、実行のかわりに議論を、仕事のかわりにおしゃべりをしたがる傾向、どんなことにでも手を出すが一つとしてやりとげようとしない傾向は、「教養のある人々」の特性の一つであるが、これはけっして彼らが生まれつき悪い性質をもっていることからくるものではなく、まして悪意からくるものでもなく、生活の習慣から、彼らの仕事の環境から、過労から、精神労働と肉体労働との変則的な分離その他等々からくるものなのである。

われわれの革命の誤り、欠陥、失策のうちですくなからぬ役割を演じているのは、われわれの仲間のインテリゲン

ツィアのこういう嘆かわしい――しかしいまのところ避けられない――性質と、インテリゲンツィアの組織者的活動にたいする労働者側からの十分な統制の欠如とから生まれる誤り等々である。

労働者と農民は、まだ「おずおずしている」。彼らはこれから脱却しなければならないし、疑いもなく脱却するであろう。教養のある人々、インテリゲンツィア、専門家の助言や指示なしにはやっていけない。すこしでもものがわかった労働者や農民なら、みなこのことをよく理解している。だから、われわれの仲間のインテリゲンツィアは、労働者や農民の配慮と同志的尊敬が足りないと不平を言うわけにはいかない。しかし、助言や指示をあたえることと、実地の記録と統制を組織することとは、別物である。インテリゲンツィアはすばらしい助言や指示をたえずあたえはするが、しかし、これらの助言や指示を実行に移し、ことばが行為に変わるように実地の統制をおこなう段になると、おかしいくらい、ばかばかしいくらい、恥さらしなくらい「不手際」で、無能である。

だから、「人民」出身の、労働者や勤労農民出身の実践的組織者の援助と指導的役割なしにすませることは、けっしてできないのである。「神様が壺を焼くのではない」――この真理を、労働者と農民は、なによりもしっかりと心にきざみこんでおかなければならない。現在では万事は実践にあることを、彼らは理解しなければならない。理論が実践に転化し、実践によって生命をあたえられ、実践によって是正され、実践によって点検される歴史的瞬間、「現実の運動の一歩一歩は一ダースの綱領よりも重要です(三三)」――つまり、金持やぺてん師を実践的に、現実に抑制し、おとなしくさせ、完全な記録と監視のもとにおく仕事での一歩一歩は、社会主義についての一ダースのすぐれた議論よりも重要である――というマルクスのことばがとくにあてはまる歴史的瞬間が、まさに到来したことを彼らは理解しなければならない。なぜなら、「ねえ君、理論は灰色で、緑に萌えるのは永遠の生命(いのち)の樹だ(三四)」からである。

労働者や農民出身の実践的組織者どうしの競争を組織しなければならない。インテリゲンツィアにごくありがちな、紋切型にはめこむやり方や、上から画一的なものを押しつけようとする試みにたいしては、いっさいたたかわなければならない。紋切型にはめこんだり、上から画一的なものを押しつけたりすることは、民主主義的または社会主義的中央集権制とは縁もゆかりもない。基本的な点、根本的な点、本質的な点での統一は、細部での、地方的特殊性での、仕事の取りあげ方での、統制実施の仕方での、寄生虫（金持とぺてん師、インテリゲンツィアのうちの不精者とヒス

テリーもち等々）を根絶しその害をとりのぞく方法での多様性によってそこなわれるものではなく、かえって保障されるのである。

パリ・コミューンは、下からの創意、自主性、行動の自由、活動力と、紋切型には縁のない自発的な中央集権制とを結合する偉大な模範を示した。われわれのソヴェトはまだ「おずおずして」おり、まだ自由にふるまうまでになっておらず、社会主義制度をつくりだすという新しい、偉大な、創造的な仕事にまだ「食いついて」いない。ソヴェトはもっと大胆に、もっと創意をもって仕事にかからなければならない。すべての「コミューン」が――どの工場、どの農村、どの消費組合、どの配給委員会も――おたがいに競争しながら、労働の配分と生産物の分配とにたいする記録と統制の実践的組織者として行動しなければならない。この記録と統制の綱領は、単純で、明瞭で、だれにでもわかるものである。すなわち、だれにもみなパンがあるようにすること、みなが丈夫な靴をはき、ぼろでない着物を着、暖かい住居をもち、誠実に働くようにすること、ひとりのぺてん師（仕事を怠ける者をふくめて）をも大手をふって歩かせず、監獄に入れるか、あるいは最も苦しい強制労働の刑罰に服させること、社会主義の規則や法律にそむく金持は、ひとりとしてこのぺてん師の運命をまぬかれることができず、このぺてん師の運命が当然に金持の運命とならなければならないこと、これである。「働かざる者は食うべからず」――これが社会主義の実践的戒律である。これこそ実地に組織されるべき事柄である。こういう実践上の成功をこそ、われわれの「コミューン」と労働者・農民出身の組織者とは、誇りとすべきである。インテリゲンツィア出身の組織者にとってはなおさらそうである。（なおさらというのは、彼らは、その一般的な指示や決議を誇ることにあまりにも慣れており、過度に慣れているからである。）

金持、ぺてん師、徒食者にたいする実地の記録と統制の何千という形態と方法は、コミューン自身、農村や都市の小さい細胞自身が、これをつくりあげ、実地にためしてみなければならない。その場合の多様性は、生命力の保障であり、ロシアの土地からあらゆる種類の害虫、蚤、――ぺてん師、南京虫――金持等々を一掃するという、単一の共通目標を達成するうえでの成功の保障である。あるところでは、一〇人の金持、一ダースのぺてん師、仕事を怠ける（ペトログラードで、とりわけ党印刷所で、多くの植字工がやっているように、無頼漢式に仕事を怠ける）半ダースの労働者を投獄するだろう。次のところでは、彼らに便所掃除をさせるだろう。第三のところでは、彼らが拘禁刑をつ

とめあげたのちに、黄色の鑑札をあたえて、矯正されるまで、全人民が有害分子として彼らを監視するだろう。第四のところでは、徒食の罪をおかした一〇人のうち一人をその場で射殺するだろう。第五のところでは、いろいろな手段の組合せを考案し、たとえば仮釈放によって、金持、ブルジョア・インテリゲンツィア、ぺてん師、無頼漢のうちの矯正可能な分子の速やかな矯正をなしとげるだろう。多様であればあるほど、全体的な経験は、ますますすぐれた、ゆたかなものになり、社会主義の成功はますます確実に、速やかになり、実践が最良の闘争方式と闘争手段をつくりあげることがますます容易になるであろう（というのは、実践だけがそれをつくりあげることができるのだから）。

どのコミューンに、大都市のどの区に、どの工場に、どの部落に、飢えた者がいないか、失業者がいないか、金持の徒食者がいないか、ブルジョアジーの下劣な従僕やインテリゲンツィアと名のるサボタージュ分子がいないか？　労働生産性を向上させるため、貧民用の新しいりっぱな家を建てるため、貧民を金持の家に住まわせるため、貧しい家庭の乳児一人ひとりに一壜の牛乳を規則ただしく配給するために、どこで最も多くの仕事がなされたか？――こういう問題をめぐってこそ、コミューン、共同体、消費＝生産団体や組合、労働者・兵士・農民代表ソヴェトの競争が、展開されなければならない。この活動のなかでこそ、組織者的才能の持主が実践的に頭角をあらわし、上部へ、全国家的統治の仕事へ、抜擢されていかなければならない。こういう才能の持主は、人民のなかにたくさんいる。それは抑えつけられているだけである。こういう才能の持主が自由にふるまえるように助けなければならない。彼らは、そして彼らだけが、大衆の支持をうけてロシアを救い、社会主義の大業を救うことができるであろう。

一九一七年一二月二四―二七日
（一九一八年一月六―九日）に執筆
一九二九年一月二〇日に新聞『プラウダ』第一七号にはじめて発表
署名――ヴェ・レーニン

全集、第五版、第三五巻、一九五―二〇五ページ所収
邦訳全集、第二六巻、四一五―四二四ページ所収

勤労被搾取人民の権利の宣言(一四五)

憲法制定議会は、次のように決定する。

一 一 ロシアは、労働者・兵士・農民代表ソヴェト共和国であると宣言する。中央と地方の全権力は、これらのソヴェトに属する。

二 ロシア・ソヴェト共和国は、自由な諸民族の自由な同盟を基礎として、民族ソヴェト諸共和国の連邦として創設される。

二 人間による人間のあらゆる搾取を根絶し、社会の階級分裂を完全にとりのぞき、搾取者の反抗を仮借なく鎮圧し、社会主義的社会組織を確立し、すべての国で社会主義の勝利をもたらすことを自己の基本的任務とする憲法制定議会は、さらに次のように決定する。

一 土地の私有権は廃止される。すべての土地は、すべての建物、家畜および農具、その他の農業生産用の付属施設とともに、全勤労人民の財産であることを宣言する。

二 搾取者にたいする勤労人民の権力を保障するため、また、工場、鉱山、鉄道、その他の生産手段、運輸手段を完全に労農国家の所有に移す第一歩として、労働者統制と最高国民経済会議とにかんするソヴェト法(一四六)を確認する。

三 勤労大衆を資本のくびきから解放する一条件として、すべての銀行を労農国家の所有に移す(一四七)ことを確認する。

四 社会の寄生的諸層をなくすために、全般的労働義務制を実施する。

五 勤労大衆に完全な権力を確保し、搾取者の権力が復活するあらゆる可能性をとりのぞくために、勤労者の武装、社会主義的労農赤軍の編成、有産階級の完全な武装解除を布告する。

三 一 憲法制定議会は、すべての戦争のなかでも最も犯罪的な現在の戦争で大地を血にひたした金融資本と帝国主義の毒牙から人類を救いだすという不屈の決意を表明するとともに、秘密条約を廃棄し、現在相戦っている諸国軍隊の労働者農民との最も広範な交歓を組織し、自由な民族自決にもとづいて、諸国民間の無併合・無賠償の民主主義的講和を革命的方策によってぜひとも達成しようとするソヴェ

ト権力の政策に、全面的に同意する。

二　同じ目的で、憲法制定議会は、アジア、一般に植民地、および諸小国の数億の勤労住民の奴隷化のうえに、少数の選ばれた民族の搾取者の幸福をきずいてきたブルジョア文明の野蛮な政策と、完全に絶縁するように主張する。

憲法制定議会は、フィンランドの完全な独立を宣言し、ペルシアからの軍隊の撤退を開始し、アルメニアの自決の自由を宣言した人民委員会議の政策を歓迎する。[四]

三　憲法制定議会は、ツァーリ、地主、ブルジョアジーの政府が締結した借款の無効（廃棄）にかんするソヴェト法を、国際銀行資本、金融資本にたいする最初の打撃と見なし、資本のくびきにたいする国際的な労働者蜂起が完全に勝利するまで、ソヴェト権力は確固としてこの道をすすむであろう、という確信を表明する。

四　憲法制定議会は、十月革命以前に、人民がまだこぞって搾取者に反対して蜂起することができず、自分の階級的特権を守るさいの搾取者の抵抗力を完全に知ってはおらず、社会主義社会の創設にまだ実際にとりかかっていなかった当時に作成された党派別候補者名簿にもとづいて選出されたものであるから、憲法制定議会がみずからをソヴェト権力に対立させることは、形式的な見地からみてさえ、根本的なまちがいと考えるであろう。

また実質上では、憲法制定議会は、人民がその搾取者にたいして最後のたたかいをおこなっている現在、いかなる権力機関にも搾取者の席はありえないと考える。権力はことごとく、またもっぱら勤労大衆とその全権代表である労働者・兵士・農民代表ソヴェトとに属さなければならない。

憲法制定議会は、ソヴェト権力と人民委員会議の布告とを支持するものであって、自己の任務が社会の社会主義的改造の根本的基礎を確立することにつきるものと考える。

それと同時に、憲法制定議会は、ロシアのすべての民族の勤労諸階級のあいだに、真に自由で自発的な、したがってそれだけにいっそう緊密で強固な同盟をつくりだすことにつとめるものであって、ロシア・ソヴェト共和国連邦の根本原則を確立することに自己の任務を限定し、各民族の労働者と農民が連邦政府その他の連邦ソヴェト機関に参加することを望むかどうか、またどういう基礎のうえに参加することを望むかについては、彼らが自身の全権あるソヴェト大会で自主的な決定をくだすのにまかせる。

一九一八年一月、三（一六）日以前に執筆
一九一八年一月四（一七）日に新聞『プラウダ』第二号、および『イズヴェスチヤ』第二号に発表
全集、第五版、第三五巻、二二一—二二三ページ所収
邦訳全集、第二六巻、四三三—四三五ページ所収

ロシア共産党（ボ）第七回臨時大会(一四九)

一九一八年三月六―八日

中央委員会の政治報告

三月七日

政治報告は中央委員会のもろもろの方策を列挙することですむかもしれないが、現在、緊要なのは、そのような報告ではなく、われわれの革命全体の概観である。それだけが、われわれのすべての決定にただ一つマルクス主義的な基礎づけをあたえることができるのである。われわれは革命のこれまでの全経過を検討し、なぜ、革命のその後の発展が変化したかを解明しなければならない。われわれの革命には、将来、国際革命にとって大きな意義をもつような急転換があった。すなわち、十月革命である。

二月革命がはじめに数々の成功をおさめたのは、農村の大衆ばかりでなく、ブルジョアジーまでがプロレタリアートのあとについてきたからであった。ツァーリズムにたいする勝利が容易だったのはこのためであるが、これは、われわれが一九〇五年には達成できなかったことである。二月革命で労働者代表ソヴェトが自主的に、自然発生的にできたことは、一九〇五年の経験の繰りかえしであった。――われわれは、ソヴェト権力の原理を宣言しなければならなかった。大衆は、自身の闘争経験から革命の任務を学んだ。四月二〇―二一日の事件は、デモンストレーションと一種の武装蜂起とを独特なかたちで組み合わせたものであった。これだけで、ブルジョア政府は倒れた。権力の座にあった小ブルジョア政府の本質そのものに由来する長期にわたる協調政策が始まった。七月事件は、まだプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を実現することはできなかった。――大衆の準備がまだととのっていなかったのである。だから、責任ある組織のどれ一つとして、大衆にプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をよびかけなかった。しかし、敵陣偵察という意味では、七月事件は大きな意義をもっていた。コルニーロフ反乱とそのあとの諸事件は、実地の教訓となって、十月の勝利を可能にした。十月になってさえ権力を分けあうことを望んだ連

（二四）中の誤りは、彼らが十月の勝利を、七月事件、攻勢、コルニーロフ反乱などと結びつけなかったことにある。ところが、これらの事件こそ、ソヴェト権力が避けられないものになったことを、何百万もの大衆に意識させたのであった。さらにそのあとには、ロシア全土にわたるわれわれの凱旋行進がつづいたが、それには、すべての人々の平和の熱望がともなっていた。われわれは戦争を一方的に拒否しても、平和はえられないことを知っている。われわれは、このことをすでに四月協議会で指摘しておいた。（二五）協調政策がますます戦争を長びかせていること、この政策のために、帝国主義者は、攻勢に移り、このさき何年もつづく戦争にますますぬきさしならず深いりしてゆくというばかげた、無意味な企てをおこなうようになったのだということを、兵士たちは四月から一〇月までの時期にきわめてはっきりとさとった。まさにこの理由で、なにはともあれ、できるだけ速やかに積極的な平和政策に移り、権力をソヴェトの手に掌握し、地主的土地所有を徹底的に一掃する必要があった。ご承知のように、ケーレンスキーばかりでなく、アウクセンチエフまでが地主の土地所有を支持し、土地委員会の委員を逮捕することまでやった。われわれがきわめて広範な人民大衆の意識に植えつけているこの政策、「権力をソヴェトへ」というこのスローガンこそ、われわれが十月にペテルブルグであのように容易に勝利することを可能にしたのであり、ロシア革命の最近の数ヵ月を一つづきのたえまない凱旋行進に変えたのである。

内乱は事実となった。われわれが革命のはじめに、それどころか戦争のはじめにさえ予言した事柄、しかもその当時社会主義者仲間のかなり大きな部分が信用せず、あるいは嘲笑をもってむかえさえしたその事柄、すなわち、帝国主義戦争の内乱への転化は、一九一七年一〇月二五日には、参戦国のうちでも最大の最も遅れた国の一つにとって事実となった。この内乱で、住民の圧倒的多数がわれわれの味方となり、その結果、われわれは異常にやすやすと勝利を占めた。

戦線から去ってゆく軍隊は、その姿をあらわすところのどこへも、協調政策にきっぱりとどめを刺そうとする最大限の革命的決意をもたらした。そこで、協調主義分子、白衛軍、地主の伜どもは、住民のなかであらゆる支持を失ってしまった。彼らとの戦いは、広範な大衆や、われわれに向かって出動させられた部隊がボリシェヴィキ側に移るにつれて、しだいに革命の凱旋行進に変わった。われわれはこれをピーテルで、ガッチナ戦線で見たが、そこではケーレンスキーとクラスノーフが赤い首都にさしむけようとしたカザックが動揺してしまった。その後、われわれはこれ

を、モスクワ、オレンブルグ、ウクライナで見た。ロシア全土に内乱の波が高まった。そして、われわれは、いたるところで異常なまでに容易に勝利をおさめたのであるが、それは果実が熟していたからにほかならず、大衆がすでにブルジョアジーとの協調政策のあらゆる経験を嘗めつくしていたからにほかならない。われわれのスローガン「全権力をソヴェトへ」は、長期にわたる歴史的経験をつうじて大衆によって実践的にためされて、彼らの血となり肉となった。

だからこそ、一九一七年一〇月二五日以後のロシア革命のはじめの数ヵ月は、一つづきのたえまない凱旋行進だったのである。社会主義革命がたちまちぶつかった、またぶつからざるをえなかった困難は、この一つづきのたえまない凱旋行進のかげに忘れさられ、後景に押しやられた。ブルジョア革命と社会主義革命との基本的な違いの一つは、封建制のなかから成長してくるブルジョア革命にあっては、旧体制の胎内で新しい経済組織が徐々につくりだされ、それらの組織が徐々に封建社会のあらゆる側面を変えてゆくという点にある。ブルジョア革命が当面したただ一つの任務は、以前の社会のあらゆるきずなを一掃し、投げすて、破壊することであった。あらゆるブルジョア革命は、この任務を果たせば、それに提出された要求のすべてを果たしたことになる。つまり、それは資本主義の成長を強化するのである。

社会主義革命は、これとはまったく異なった立場にある。歴史のジグザグのゆえに社会主義革命を始めることになった国が遅れていればいるほど、その国にとって、古い資本主義的関係から社会主義的関係への移行は、それだけいっそう困難である。ここでは、破壊の任務に、新しい、前代未聞の困難な任務――組織上の任務がつけくわわる。一九〇五年の偉大な経験を経てきたロシア革命の人民的創造力が、すでに一九一七年二月にソヴェトをつくりだしていなかったら、ソヴェトは、一〇月に権力を掌握することはけっしてできなかったであろう。なぜなら、成功のいかんは、もっぱら何百万人をもまきこんだ運動の組織形態が、すでにできあがったかたちで存在しているかどうかにかかっていたからである。このできあがった形態がソヴェトであった。それだからこそ、政治の分野でわれわれを待っていたのは、すばらしい成功であり、われわれの経験したあの一つづきのたえまない凱旋行進だったのである。なぜなら、政治権力の新しい形態ができあがっていて、われわれがなしなければならなかったのは、ただ、いくつかの布告によって、ソヴェト権力を、革命のはじめの数ヵ月間におけるような萌芽状態から、法的に承認され、ロシア国家で確

認された形態に、すなわちロシア・ソヴェト共和国に変えることだけだったからである。ロシア・ソヴェト共和国はたちどころに生まれ、いともやすやすと生まれた。なぜなら、一九一七年二月に大衆は、どんな党もこのスローガンを宣言するいとまのないうちに、ソヴェトをつくりだしたからである。一九〇五年の苦い経験を経て、それによって賢くなった人民の深い創造力そのもの——まさにこれが、プロレタリア権力のこの形態をつくりだしたのである。国内の敵に勝利する任務は、きわめて容易な任務であった。政治権力をつくりだす任務は、きわめて容易であった。大衆が政治権力の骨組、基礎をわれわれにあたえてくれたからである。ソヴェト共和国はたちどころに生まれた。しかし、まだ二つのとほうもなく困難な任務が残っており、それの解決は、われわれの革命のはじめの数ヵ月に見られたような凱旋行進ではけっしてありえなかった。われわれは、このさき社会主義革命がとほうもなく困難な任務に当面するであろうことを疑わなかったし、また疑う余地はありえなかった。

第一に、それは、どんな社会主義革命も当面する内部組織の諸任務である。ブルジョア革命の場合には、資本主義的関係の既成の諸形態があるのに、ソヴェト権力、つまり、プロレタリア権力は、資本主義の最も発展した諸形態——しかもそれは、実質上、工業のわずかな上層をとらえていただけで、まだ農業にはまったくわずかしかふれていなかった——を別とすれば、そういう既成の諸関係を受けとらないということ、これが、社会主義革命とブルジョア革命との違いである。記録を組織すること、巨大企業を統制すること、国家の経済機構全体を一つの大きな機械に変え、何億もの人間を一つの計画に従わせるような仕方で機能する経済的有機体に変えること、——これがわれわれの双肩にかかった巨大な組織上の任務である。今日の労働条件のもとでは、この任務は、われわれが内乱の任務の解決に成功したときのように、「ウラー」と叫ぶだけで解決するわけにはけっしていかなかった。事柄の本質そのものが、そのような解決を許さなかったのである。われわれは、はなはだたやすくわがカレーヂン派に勝利したし、またとりたてて注意するに値しないほどの抵抗しかうけずに、ソヴェト共和国を創建したが、事件のこのような成りゆきは、それまでの客観的な発展全体によってまえもってきめられていたのであった。だから、あとはただ最後のことばだけを述べ、看板をとりかえ、「ソヴェトは職業的団体として存在する」と書くかわりに「ソヴェトは国家権力のただ一つの形態である」と書くことだけであった。ところが、組織上の任務になると、事情は一変した。ここでは、われわれ

はどえらい困難に出会った。戦争が資本主義社会にもたらした解体に打ちかつには、自己規律の困難な、長い道によるほかには方法がないこと、この解体を克服し、また解体をつのらせている分子に打ちかつには、非常に困難な、長期にわたる、不屈の道によるほかには方法がないことは、われわれの革命の諸任務にたいして考えぶかい態度をとろうとした人にはだれにもすぐにはっきりとわかった。これらの分子は、革命を、なんでもできるだけ多くのものをそれからとりこみながら、古いきずなをまぬかれる手段と見なしていたのである。信じられないほどの荒廃におちいった小ブルジョア国では、このような分子が多数現われることは、避けられなかった。これらの分子にたいする百倍も困難な闘争、はなばなしい立場に立てるという見込みのすこしもない闘争が、今後にひかえている。われわれは、やっとそういう闘争の口火を切ったばかりである。われわれは、この闘争の最初の段階にある。われわれの前途には苦しい試練が待っている。ここでは、客観的な事態からみて、われわれは、カレーヂン派とたたかったときのように、旗をなびかせて凱旋行進をやるだけですませるわけにはけっしていかない。このような闘争の方法を、革命の前途に立ちはだかる組織上の任務に適用しようとする人はだれでも、政治家、社会主義者、社会主義革命の活動家としては、完全な破産者となるだろう。

革命が、それにのしかかる第二の巨大な困難――国際問題に具体的に当面したとき、革命の最初の凱旋行進に酔っていたわれわれの若干の若い同志を待っていたのも、右と同じ運命であった。われわれがケーレンスキー・ギャング団を苦もなく片づけてしまい、いともやすやすと自分たちの権力をつくりだし、すこしも骨をおらずに土地社会化にかんする布告（三三）や労働者統制にかんする布告を手にいれたのは、――すべてこういうものをきわめて容易に手にいれたのは、幸運な諸条件が生じていて、短期間われわれを国際帝国主義から掩護してくれたからにほかならない。強大な資本の力を擁し、高度に組織された軍事装備――これが国際資本の真の力であり、真のとりでであるが――をそなえた国際帝国主義は、その客観的な地位からみても、またそれに体現されている資本家階級の経済的利益からみても、けっして、どんな条件のもとでも、ソヴェト共和国と併存することはできなかった――通商上の結びつきや、国際金融関係の理由から、そうすることができなかった。ここでは衝突は避けられない。ここに、ロシア革命の最大の困難があり、その最大の歴史的問題がある。すなわち、国際的な諸任務を解決することの必要、国際革命をよびおこし、狭い一国的な革命としてのわれわれの革命から世界革命へ

のこの移行をおこなうこととの必要の問題である。この任務が、信じられないほどの困難をともなって、われわれの前に現われてきた。繰りかえして言うが、左翼をもって自任しているわれわれの若い友人たちの非常に多くの者は、なぜ十月革命後の偉大な凱旋行進の数週、数ヵ月のあいだ、われわれがあんなにも容易に勝利から勝利へとすすんでゆくことが可能だったのかという、最もだいじなことを忘れるようになった。ところが、それが可能であったのは、国際的な諸事件の特別な組合せが一時われわれを帝国主義から掩護してくれたからであった。帝国主義はわれわれにかまってはいられなかった。われわれも帝国主義にかまってはいられないように、われわれには思われた。ところで、個々の帝国主義者がわれわれにかまっていられなかったのは、現代の世界帝国主義の巨大な社会＝政治力と軍事力の全体が、その当時二つのグループに分かれて内輪の戦争をしていたからにほかならない。この闘争にまきこまれた帝国主義的強盗どもは、信じられないほどの極端にはしり、生きるか死ぬかの格闘をやるまでになり、そのため、この両グループのどちらも、いくらかでも本格的な力をロシア革命にたいして集中することができなかった。われわれは一〇月には、ちょうどこのような時機にめぐり合わせたのであった。われわれの革命は、まさに幸運な――これは逆説のようだが、ほんとうである――時機にめぐり合わせたのである。それは、何百万もの人間が絶滅されるという前代未聞の災厄が帝国主義国の大多数を襲い、戦争が未曽有の災厄によって諸国民をさんざんに苦しめ、戦争の第四年目に交戦諸国が袋小路に、岐路にさしかかっており、このような状態におとしいれられた諸国民がこれ以上戦えるかどうかという問題が、客観的に提起されていた、そういう時機であった。二つの巨大な強盗グループのどちらもすぐに相手に襲いかかることもできなければ、われわれに対抗して連合することもできなかったこういう好運な時機にめぐり合わせたからこそ、――国際政治関係と経済関係のこの時機を利用することができ、また実際に利用したことによってのみ、われわれの革命は、ヨーロッパ・ロシアでこのすばらしい凱旋行進をおこない、フィンランドにとびうつり、カフカーズやルーマニアをたたかいとりはじめたのである。われわれのあいだに、わが党の指導層のうちにインテリの超人党活動家が出現したのも、もっぱらこういう事情によるものである。彼らはこの凱旋行進に酔ってしまい、われわれは国際帝国主義をかたづけるだろう、そこでまた凱旋行進だ、ほんとうの困難などないだろう、と言った。まさにこの点に、ロシア革命の客観的情勢とのくいちがいがある。ロシア革命は、国際帝国主義の一時の故障を

利用したものにすぎなかった。というのは、ちょうど列車が手押一輪車に向かってばく進し、それを粉砕するのと同じように、われわれに向かってばく進してくるはずであった機関車が一時停止したからである。——機関車が停止したのは、二つの強盗グループが衝突したからである。あちこちに革命運動が成長してきたが、それは、例外なくすべての帝国主義国で、大多数の場合に、まだ端緒的段階にあった。その発展テンポは、わが国の場合とは全然違っていた。ヨーロッパにおける社会主義革命の経済的前提について熟考してみた人ならだれでも、革命を始めるのは、ヨーロッパのほうがはるかに困難で、わが国のほうがはるかに容易であるが、革命をつづけるのは、わが国のほうがヨーロッパよりも困難であろうということを、はっきり見ないわけにはいかなかった。こういう客観的情勢からして、われわれが歴史の異常に困難な急転換に際会するということが起こったのである。われわれは、一〇月、一一月、一二月に、われわれの国内戦線でわが国の反革命派にたいし、ソヴェト権力の敵にたいして一つづきのたえまない凱旋行進をおこなったあとで、一転して、われわれを真に敵視している真の国際帝国主義との衝突に移らなければならなかった。凱旋行進の時期から、異常に困難で苦しい状態の時期に移らなければならなかったのである。口先で、きらびやかなスローガンでこの状態から逃れることは、——それがどんなに愉快であろうとも——もちろん、不可能である。なぜなら、荒廃したわが国には、信じられないほど疲れきった大衆がいたからである。彼らは、これ以上なんとしても戦えない状態になっており、三年間の苦しい戦争にひどく打ちひしがれて、軍事的にはまったく役に立たない状態におちいっていた。まだ十月革命の始まるまえに、われわれは、ボリシェヴィキ党に属していない兵士大衆の代表に会ったが、彼らは、ロシア軍はもう戦わないだろうという真実を、全ブルジョアジーの前で公言してはばからなかった。軍隊のこういう状態は非常な危機を生んだ。小農民からなり、戦争によって解体させられ、聞いたこともないような状態におとしいれられたこの国は、異常に苦しい状態におかれた。われわれには軍隊がないのに、ひきつづき歯まで武装した強盗とならんで生きてゆかなければならない。この強盗は、まだいまのところは強盗であり、これからも強盗であろうし、無併合・無賠償講和の扇動でその心をうごかすことは、できない相談であった。おとなしい家畜が虎とならんですわって、講和は無併合・無賠償であるべきだと、虎を説きつけようとしたのである。そういうことは、虎を攻撃することによってはじめて達成できるものなのに。わが党の上層部——インテリゲンツィアと一部

の労働者組織――は、なによりもまず空文句によって、そんなことが起こるはずはない、という逃げ口上によって、この見とおしから逃れようとした。彼らは言った。この講和は、あまりにもありそうにない見とおしであるから、これまで旗をなびかせて野戦に繰りだし、叫び声だけですべての敵をつかまえてきたわれわれが、譲歩をして、屈辱的な条件を受けいれるなどということは、問題にならない。断じていけない。われわれはあまりにも誇り高い革命家である。われわれはなによりもまずこう声明する――「ドイツ軍は攻勢に出ることはできないだろう[三三]」と。

この連中が自分を慰めるのにつかった第一の逃げ口上は、こういうものであった。歴史はいまわれわれを異常に困難な状態においている。前代未聞の困難な組織活動をやりながら、われわれは、いくつかのきわめて苦しい敗北を切りぬけてゆかなければならない。世界史的な規模でみるならば、われわれの革命が単独なものにとどまり、他の国々に革命運動が起こらないとすれば、われわれの革命が最後の勝利をえる望みがないことは、なんら疑う余地がない。われわれがボリシェヴィキ党の単独の手に全事業をにぎったとき、われわれは、すべての国に革命の機が熟しつつあり、われわれがどんな困難な目にあおうとも、どんな敗北の運命を負わせられようとも、終局においては――まずはじめにではなく――国際社会主義革命がやってきて――なぜなら、それは進行しているから――、成熟をとげ――なぜなら、それは成熟しつつあるから――、成熟しきるであろうと確信していたからこそ、この事業を一身に引きうけたのである。これらのすべての困難からわれわれを救うものは、――繰りかえして言うが――全ヨーロッパ革命である。われわれは、この真理から、このまったく抽象的な真理から出発し、それを指針としながらも、それがいつのまにか空文句に変わってしまわないよう、気をつけなければならない。なぜなら、どんな抽象的真理も、なんの分析もしないでそれを適用すれば、空文句に変わってしまうからである。どのストライキの背後にも革命のヒュドラ[三四]がひそんでおり、このことを理解しない者は社会主義者ではない、と言うなら、それは正しい。さよう、どのストライキの背後にも、社会主義革命がひそんでいる。しかし、当面するどのストライキも社会主義革命への直接の一歩だと言うなら、それはまったく空疎な空文句をしゃべっていることになる。われわれは、「いつもきまってこの場所で[三五]」この空文句を聞かされて、うんざりしてしまったので、労働者たちはこんな無政府主義的な空文句をみなおっぽりだしてしまった。なぜなら、どのストライキの背後にも社会主義革命のヒュドラがひそんでいるということに疑う余地がないのと同様

のである。この新しい歴史的時期がわれわれを対面させた相手は、ケーレンスキーやコルニーロフという朽木のような連中ではなくて、国際的強盗、つまりドイツ帝国主義であり、そのドイツでは革命はやっと成熟しかけたところであって、だれでも知っているように成熟しきってはいないのである。敵は革命にたいする攻勢に踏みきれないだろうという主張は、そういう冒険であった。ブレスト会談(一六)のときには、まだわれわれのほうでどんな講和条件でも受諾しなければならないような情勢ではなかった。客観的な力関係は、息つぎを獲得するだけでは不十分なようなものであった。ドイツ軍が攻勢に出るだろうということ、ドイツ社会は、いますぐ革命が勃発しうるほどに革命をはらんではいないということが、ブレスト会談をまってはじめて明らかになった。そして、ドイツ帝国主義者がそのふるまいによってこの爆発を、あるいは、左翼をもって自任しているわれわれの若い友人たちのことばを借りていえば、ドイツ軍が攻勢に出られないような情勢を、まだ準備しなかったということで、ドイツ帝国主義者をとがめるわけにはいかない。われわれには軍隊がないこと、われわれが復員をおこなわざるをえなかった――われわれは、われわれのおとなしい家畜のかたわらに虎がいることをけっして忘れていなかったにもかかわらず、復員をおこなわざるをえなかっ

たのだ——ことを、これらの若い友人たちに語っても、彼らは理解しようとしないのである。軍隊を復員させざるをえなかったとはいえ、われわれは、銃剣を地面に突きさせという一方的な命令によって、戦争を終わらせることはできないことを、けっして忘れてはいなかった。

わが党内のどの潮流も、どの流派も、どの組織も、この復員に反対しなかったというようなことが、そもそもどうして起こったのか？　われわれは、まったく気でもくるったのか？　けっしてそんなことはない。すでに一〇月以前に、ボリシェヴィキ派でない将校たちが、軍隊には戦う力がなく、軍隊を戦線に数週間踏みとどまらせることはできないだろう、と言っていた。一〇月以後には、隠れたり、帽子を目深くかぶったり、高慢ちきな空文句でお茶をにごそうとせずに、事実を、見ぐるしい、苦い現実を見ることを望む人にはだれにも、このことは明瞭になった。軍隊はなく、それを踏みとどまらせることはできない。なしうる最善の策は、できるだけ速やかに軍隊を復員させることである。これは、前代未聞の苦痛をなめ、装備を欠いたまま戦争に参加して、その戦争の困苦にさいなまれぬいた身体の患部であって、それが戦争からぬけでてきたときには、敵の攻勢にあうたびにパニックをおこすような状態にあった。このような前代未聞の苦難に耐えてきた人々を、このことで非難してはならない。兵士たちは、ロシア革命の初期にさえ、何百もの決議のなかで、まったく明白に述べている。「われわれは血にむせんでいる。われわれには戦う力はない」と。戦争の終結を人為的に引きのばすことはできたし、ケーレンスキー流のぺてん行為をやることはできたし、終結を数週間延ばすことはできたが、客観的現実は、自分の道を切りひらいていった。それは、ロシア国家の身体のうち、これ以上この戦争の重荷に耐えきれない患部であった。軍隊の復員を速めれば速めるほど、軍隊は、まだそれほど病んでいない部分のあいだにそれだけ速やかに散って吸収されてゆき、国はそれだけ速やかに新たな苦しい試練に耐える準備ができるであろう。軍隊の復員という、対外的な出来事の見地からすればばかげたこの決定が、すこしの抗議もなしに、全員一致で採択されたとき、われわれはまさに右のように感じたのである。これは正しい措置であった。軍隊を踏みとどまらせようとするのは軽率な幻想である、とわれわれは言った。軍隊の復員を速めれば速めるほど、社会の身体全体の健全化が、それだけ早く始まるであろう。だからこそ、「ドイツ軍は攻勢に出ることはできない」という革命的空文句は、はなはだしい誤りであり、諸事件のいたましい過大評価であった。この革命的空文句からは、次のような別の空文句が出てきた。「われわ

れは戦争状態の終結を宣言することができる。戦争もせず、講和条約の調印もしない」[三〇]と。しかし、ドイツ軍が攻勢に出たら、どうするのか？「いや、ドイツ軍は攻勢に出ることはできないだろう。」ところで、諸君には、国際革命の運命を賭ける権利はないが、そういう事態がやってきたなら諸君はドイツ帝国主義の共謀者ということになりはしないか、という具体的な問題を提起する権利はある。しかし、われわれはみな、一九一七年一〇月以来、祖国擁護を認める防衛論者になったのだが、そのわれわれはみな、自分たちが口先でなく、実際に帝国主義者と手を切ったことを知っている。すなわち、われわれは、秘密条約を廃棄し、自国内でブルジョアジーを打ち破り、公然たる公正な講和を申し入れたのであって、その結果、あらゆる国の人民がわれわれの意向を実際にあますところなく見てとることができた。ソヴェト共和国を防衛するという立場を真剣にとっている者が、すでにその当然の実を結んでいるこういう冒険に、どうして乗りだすことができたのか？だが、これは事実である。なぜなら、党内に「左翼」反対派が結成されたためにわが党が際会している重大な危機は、ロシア革命が際会している最大の危機の一つであるからである。

この危機は克服されるであろう。わが党も、われわれの革命も、この危機のために挫折することはけっしてないであろう、——たとえ、現在そうなる寸前まできており、そうなることもまったくありうるにしても。われわれがこの問題のために挫折しないことの保障は、分派間の意見の不一致を解決する古い方法、異常なほど多くの文書と討論、かなり頻繁な分裂という古い方法に代わって、もろもろの事件が人々に、学ぶという新しい方法をもたらしたことにある。この方法は、もろもろの事実や事件、世界史の教訓によって万事を点検することである。ドイツ軍は攻勢に出ることはできないと、諸君は言う。諸君の戦術からは、戦争状態の終結を宣言することができるという結論が引きだされた。歴史は君たちを懲らしめ、この幻想をくつがえしてしまった。さよう、ドイツ革命は成長しつつあるが、その成長ぶりは、われわれの希望するようではなく、ロシアのインテリゲンツィアのお気にめすほどのテンポで成長しているのではなく、われわれがどこかの都市に行ってソヴェト権力を宣言すれば、数日後には労働者の一〇分の九がわれわれの側に移ってきたあの一〇月に、われわれの歴史が示したようなテンポで成長しているのではない。ドイツ革命は、不幸なことに、そんなに速くはすすんでいない。では、どちらがどちらを目安とすべきか、われわれがドイツ革命をか、それともドイツ革命がわれわれをか？諸君

は、ドイツ革命が諸君を目安とするように望んだが、歴史は諸君を懲らしめた。これは教訓である。なぜなら、ドイツ革命がなければ、われわれは滅亡するだろうという真理、——たぶん、ペトログラードでではなく、モスクワでではなく、ウラヂヴォストークか、あるいは、われわれがたぶん今後移ってゆくことをよぎなくされるであろうような、たぶんペトログラードからモスクワまでの距離よりもさらに遠い距離にある、さらに遠い地方においてであろうが、とにかく、ドイツ革命がやってこなければ、考えられるかぎりのどんな事態の曲折があろうと、われわれは滅亡するであろうという真理は、絶対的なものであるからである。それにもかかわらず、大言壮語せずに、どんなに困難な事態をも耐えぬくすべを知らなければならないというわれわれの信念は、このために微動だにしないのである。

革命は、われわれが期待したように速やかにはやってこないだろう。歴史はそのことを証明した。このことを、事実としてうけとることができなければならない。先進国での世界社会主義革命は、ロシアで——ニコライとラスプーチンの国で革命が始まったようには、容易には始まりえないということを、考慮にいれることができなければならない。ロシアの住民の大部分にとっては、辺境地方にどんな民族が住んでいようと、そこでなにが起ころうと、まったくどうでもよいことであった。このような国で革命を始めることは容易であった。それは、鳥の羽根をもちあげるも同然であった。

しかし、資本主義が発展し、それが住民の一人のこらずに民主主義的な文化と組織性をあたえている国で、無準備で革命を始めることは、まちがいであり、ばかげている。そこでは、われわれは、社会主義革命の苦難にみちた開始期に、いまやっと近づいただけである。これは事実である。われわれは知らないし、だれも知らないが、もしかしたら、社会主義革命は数週後に、いや数日後に勝利するかもしれない。——これはまったくありうることだ。しかし、そのことに賭けてはならない。異常な困難、異常に苦しい敗北を覚悟していなければならない。これは避けられない。なぜなら、ヨーロッパでは革命は、あすにでも始まるかもしれないが、まだ始まっていないからである。いったん始まったなら、もちろん、われわれは疑惑になやまされることはないだろうし、革命戦争の問題はなくなるであろうし、一つづきの凱旋行進があるだけであろう。そうなるであろうし、それは避けられないだろうが、まだそうなってはいない。これは、歴史がわれわれに教えた単純な事実であって、歴史はこの事実でわれわれをしたたかになぐりつけた。——だが、なぐられた一人はなぐられない二人に匹敵する。

だから、ドイツ軍は攻勢に出ることはできないだろうとか、「ウラー」と叫ぶだけで敵を打ち倒せるだろうとか期待したわれわれが、歴史によってしたたかなぐりつけられたあとでは、私の考えでは、この教訓は、わがソヴェト組織のおかげで、全ソヴェト・ロシアの大衆の意識のなかにきわめて速やかにはいってゆくであろう。大衆はみな動きだし、集会をもち、大会の準備をし、決議を採択し、過ぎさった事件を熟考している。われわれのあいだでいまおこなわれているのは、狭い党員サークルの内部だけにとどまった革命前の古い論争ではなく、すべての決定が大衆の討議にかけられている。大衆は決定を経験によって、事実によって点検するよう要求しており、けっして軽々しい演説に夢中になることはなく、事件の客観的な経過が命じる道からそらされることもけっしてない。もちろん、インテリゲンツィアか左翼ボリシェヴィキであったら、われわれの当面している困難を逃げ口上でごまかすこともできるだろう。もちろん、彼らならば、軍隊がないという問題や、ドイツに革命が起ころうとしていないということを、逃げ口上でごまかすことができるだろう。何百万人もの大衆——そして、政治というものは、何百万人もの人間のいるところで始まるものであり、何千人ではなく、何百万人がいるところでだけ、本格的な政治は始まるのである——、何百万もの人間は、軍隊とはなにかを知っており、戦線から帰ってくる兵士を見てきた、彼ら——もし個々の人物ではなく、真の大衆をとりあげるなら——は、われわれには戦う力がないこと、戦線ではみな、およそ考えられるかぎりの苦難を耐えてきたことを知っている。大衆は、軍隊がなく、そして猛獣がかたわらにいるときには、どんなに苛酷な、屈辱的な講和条約にも調印しなければならないという真理を理解した。革命が起こるまでは、諸君の軍隊の健康が回復するまでは、軍隊を家々に帰らすまでは、それは避けられない。それまでは、病人はなおらないだろう。ドイツの強盗を「ウラー」と叫ぶだけでつかまえるわけにはいかず、彼らは、ケーレンスキーやコルニーロフを倒したようには倒せないだろう。これこそ、苦い現実から逃避しようと望む一部の人々が大衆に提供しようとした逃げ口上などなしに、大衆が引きだした教訓である。

はじめ、一〇月と一一月には、一つづきのたえまない凱旋行進があった——ついで、突然にロシア革命は、数週間のうちにドイツの強盗によって粉砕され、略奪条約の条件を受けいれる覚悟をした。さよう、歴史の転換はまことに苦しいものである。われわれにとって、すべてこのような転換は苦しいものである。一九〇七年にわれわれがストルィピンとの前代未聞の不名誉な国内条約に調印したとき、

またストルィピン国会という家畜小屋を通りぬけることをよぎなくされ、君主主義的な文書に署名して誓約をあたえたとき（三六）、われわれは、今日の規模にくらべれば小さい規模でではあるが、同じことを経験した。革命の最良の前衛に属する人々は、その当時こう言った（彼らもまた、自分の正しさをみじんも疑わなかった）。「われわれは誇り高い革命家である。われわれはロシア革命を信じている。われわれはけっしてストルィピンの合法的な機関にははいらないであろう」と。いや、諸君ははいってゆくだろう、とわれわれは言った。大衆の生活のほうが、歴史のほうが、諸君の断言よりも有力である。諸君がはいらないなら、歴史が諸君にはいるよう強制するだろう。彼らははなはだ左翼的であったが、ひとたび歴史が転換すると、彼らの分派からは煙のほかにはなにも残らなかった。われわれが革命家としてとどまり、苦しい条件のもとで活動し、この状態からいま一度ぬけだすことができたとすれば、今度もぬけだすことができるだろう。なぜなら、これはわれわれの気まぐれではないからであり、ヨーロッパ革命がわれわれの願いにそむいてあえて遅れてしまい、ドイツ帝国主義が、われわれの願いにそむいてあえて攻勢に出たために、極度に荒廃した国に生まれた客観的な不可避性であったからである。

ここでは退却するすべを知らなければならない。空文句をつかって、信じがたいほど苦しい、悲しむべき現実から目をそむけてはならない。ねがわくは、なかば秩序をたもって退却したいものである、と言わなければならない。われわれは秩序整然と退却することはできない。――われわれの身体の患部の腫れがいくらかでも散るように、ねがわくは、なかば秩序をたもって退却し、ごくわずかでも時をかせぎたいものである。身体は全体としては健康である。それは病気を克服するであろう。しかし、身体が病気をたちどころに、即座に克服するように要求することはできないし、敗走中の軍隊を踏みとどまらせることはできない。私が左翼気どりの若い友人の一人にむかって、同志よ、戦線に行きなさい、そこの軍隊でなにが起こっているか見なさい、と言ったとき、これは侮辱的な提案とうけとられた。「われわれがここで革命戦争の偉大な原則のための扇動をおこなえないようにするため、われわれを流刑にしようとしているのだ」と彼は言った。私がこういう提案をしたのは、ほんとうに、反対者の分派を流刑にするつもりではなかった。これは、軍隊が前代未聞の敗走を始めたのを見てきたまえ、という提案であった。以前からわれわれはこれを知っていた。以前からわれわれは、戦線での解体が前代未聞の事実を、すなわち、味方の武器が二足三文でドイツ軍に売りわたされるという事実を生むまでになっているこ

とに、眼を閉ざしていることはできなかった。こうしたことをわれわれは知っていた。それはちょうど、軍隊は攻勢に出とどまらせることが不可能なことを、ドイツ軍は攻勢を踏みないだろうという逃げ口上がはなはだしい冒険であったことを、われわれがいま知っているのと同じである。ヨーロッパ革命の誕生が遅れるなら、われわれを待っているのは、このうえなく重大な敗北であろう。なぜなら、われわれには軍隊がないからである、組織がないからである。この二つの任務をいますぐ解決することは不可能だからである。もし事態に順応するすべを知らず、泥の中を四つんばいになって進む気がないなら、君は革命家ではなく、おしゃべり屋である。そして私がそのようにして進むように提案するのは、それを私が好んでいるからではなく、それ以外の道がないからであり、歴史は、いたるところで革命が同時に成熟するほど都合よくできてはいないからである。

内乱は帝国主義との衝突の試みとして始まり、そしてこの試みは、帝国主義がまったく腐れはてたこと、どの軍隊のなかにもプロレタリア分子が立ちあがりつつあることを証明した、——これが事態の経過である。たしかに、われわれは将来、国際革命、世界革命にお目にかかるだろうが、いまのところ、これはたいへんすばらしいおとぎ話であり、たいへん美しいおとぎ話である。——子供は美しいおとぎ話を好むのがもちまえだということは、私にもよくわかる。しかし、おたずねしたいが、おとぎ話を信じるのが、まじめな革命家のなすべきことだろうか？　どんなおとぎ話のなかにも、現実性の要素があるものである。雄鶏と猫が人間のことばで会話をしないようなおとぎ話を子供に聞かせるなら、子供はそれに興味をもちはしないだろう。それと同じように、諸君が、ドイツには内乱がやってくるであろうと人民に語り、それと同時に、帝国主義との衝突ではなくて、国際的な戦場革命(三五)が起こるだろうと人民に保証するなら、諸君は人をだましているのだ、と人民は言うだろう。そうすることで、諸君は、歴史のもたらした困難を、ただ自分の考えと願望のなかで切りぬけるだけである。ドイツのプロレタリアートが決起することができるなら、それは結構なことだ。しかし、諸君は、それを測定したのか、ドイツ革命がこれこれの日に起こることを測定するような器具を見つけだしたのか？　いや、諸君はそれを知らないし、われわれも知らない。諸君は万事をそれに賭けている。革命が起こるなら、万事が救われる、と。もちろんそうだ——、しかし、革命がわれわれの希望どおりに起こらなかったら、あす突然に勝利しなかったら、そのときはどうなるか？　そのときには、大衆は諸君に言うだろう。——君たちは冒険家として行動したのだ、君たちは事件の幸運な

成りゆきに賭けたが、それはやってこなかった、国際革命――それはいつかはかならずやってくるが、いまのところはまだ成熟しきっていない――のかわりに生じた情勢のもとでは、君たちは役だたずだということがわかった、と。

その軍隊を復員させた国、復員させざるをえなかった国が、歯まで武装した帝国主義からこうむったきわめて重大な敗北の時期がやってきた。私が予言したことがそっくりやってきた。われわれはブレスト講和のかわりに、はるかに屈辱的な講和をうけとったが、これはブレスト講和を受けいれなかった連中の責任である。われわれが帝国主義と講和を結ぼうとしているのは、軍隊のせいであることを、われわれは知っていた。われわれとならんでテーブルについたのは、リープクネヒトではなく、ホフマンであった。――そしてそうすることで、われわれはドイツ革命を助けたのである。ところがいま、諸君はドイツ帝国主義を助けている。なぜなら、諸君は何百万もの自国の富――大砲や弾薬――を引きわたしてしまったからである。信じられないほどいたましい軍隊の状態を見たものはだれでも、こうなることを予言したにちがいない。ドイツ軍のほんの小さな攻勢をうけても、われわれは不可避的にかならず滅亡するであろうと、戦線から帰ってきた誠実な人はみな言っていた。われわれは数日で敵の獲物になってしまった。

こういう教訓をえたわれわれは、この病気がどんなに重くても、われわれの分裂、われわれの危機を克服するであろう。なぜなら、世界革命というはるかに頼りになる同盟者がわれわれを助けにやってくるだろうからである。このティルジット講和[20]すなわち、さきのブレスト講和よりもいっそう屈辱的で略奪的な、前代未聞の講和の批准を問題にするなら、私は、無条件に批准する、と答える。われわれは、大衆の見地からものごとを見るので、そうしなければならない。一国内での一〇月―一一月の戦術、つまり革命のこの凱旋行進の時期の戦術を、われわれの空想の助けをかりて、世界革命の諸事件の経過に適用しようとする試み――そういう試みは失敗するにきまっている。[21]息つぎは幻想であると言う人がいるとき、また『コムニスト』――きっと、コミューンにちなんで、こうつけたのだろう――と称する新聞が、息つぎの理論を反駁しようとする試みで、そのどの欄もどの欄もいっぱいにしているとき、私はこう言う。私は、分派間の衝突や分裂にたびたび出会う機会があったので、多くの実地の経験をもっているが、党をさまざまな分派に分裂させるという古い方法ではこの病気はなおらないことを、私ははっきり知っていると、言っておかなければならない。なぜなら、それよりまえに生活がこの病気をなおすであろうから、と。生活の歩みはたいへん速

い。この点で、生活のはたらきはすばらしい。歴史がその機関車をきわめて迅速に駆りたてているから、『コムニスト』の編集部が次号を出すひまのないうちに、ピーテルの労働者の大多数は、この新聞の思想に失望しはじめるだろう。なぜなら、息つぎが事実であることを、生活が示しているからである。いまわれわれは、講和条約に調印しつつある。われわれは息つぎをえている。われわれは、もっとよく祖国を防衛するためにこの息つぎを利用している。なぜなら、もし戦争をしていたなら、われわれのところには、パニックをおこして潰走するような軍隊、踏みとどまらせなければならないが、われわれの同志には踏みとどまらせることができず、またこれまでも踏みとどまらせられなかったような軍隊があっただろうからである。なぜなら、戦争は、お説教や一万もの議論よりも有力だからである。われわれの同志たちが客観的情勢を理解しなかったとすれば、彼らは軍隊を踏みとどまらせることはできないし、踏みとどまらせもしないであろう。この病んだ軍隊は、身体全体に病毒を感染させた。そして、われわれは、新たに前代未聞の敗北をこうむり、革命にたいするドイツ帝国主義の新しい打撃をこうむった。これは痛烈な打撃であった。なぜなら、軽率にも、機関銃をもたずに帝国主義の打撃に身をさらしたからである。ところで、われわれは、この息つぎを利用して、人民に団結してたたかうよう説きつけ、ロシアの労働者と農民に次のように言うであろう。「自己規律を、厳格な規律を打ち立てたまえ。そうしなければ、諸君はドイツ軍の軍靴に踏みにじられるであろう。いま踏みにじられているように、また、人民がたたかうすべを学びとるまでは、敗走するのでなく、前代未聞の苦難におもむく能力のある軍隊をつくりだすことを学びとるまでは、踏みにじられるのが避けられないように」と。これは避けられない。なぜなら、ドイツ革命はまだ生まれておらず、それがあすやってくるとは保証できないからである。

『コムニスト』紙上のおびただしい論文によって頭から拒否されている息つぎの理論が生活そのものによって押しだされているのは、このためである。現に息つぎがあり、みながそれを利用していることは、だれでも見ている。われわれに近づいてくるドイツ軍部隊がペトログラードから数日行程の距離にせまったとき、優秀な水兵とプチーロフ工場の労働者が、その偉大な熱情にもかかわらず孤立していたとき、前代未聞の混乱とパニックが生じて、それが軍隊をガッチナまで敗走させたとき、引き渡しもしなかったものを奪還するというようなエピソードを経験したとき、われわれは数日中にペトログラードを失うだろうと予想した。このエピソードというのは、次のような事情であった。

一電信手がある停車場に到着して、電信機の前にすわり、こう打電してきた。「ドイツ兵の影を見ず、わが方停車場を占領」。数時間後に電話のベルが鳴って、交通人民委員部から私にこう知らせてきた。「次の駅を占領しました。いまヤンブルグに接近しつつあります。一兵のドイツ兵もいません。電信手は部署についています。」これがわれわれの経験したことであった。これが一一日戦争[一六二]の現実の歴史であった。この歴史をわれわれに述べたのは、水兵とプチーロフ工場の労働者であるので、彼らをソヴェト大会に迎えるべきである。彼らに真実を語らせるがよい。これはひどく苦い、恥ずかしい、苦しい、屈辱的な真実である。しかし、この真実は百倍も有益である。それは、ロシアの人民に理解される。

　国際的な戦場革命に熱中するものがいるなら、そうさせておこう。それは、いつかはやってくるであろうから。なにごとも、その時機がくればやってくる。しかし、いまは、自己規律を確立することにとりかかりたまえ。模範的な秩序がたもたれるように、労働者が一昼夜にせめて一時間でも戦闘法を学ぶように、なにはともあれ服従したまえ。これは、すばらしいおとぎ話をつくるよりすこしばかりむずかしい。これが、いまなすべき仕事である。こうすることで、諸君はドイツ革命と国際革命を助けることになろう。われわれは、何日間の息つぎをあたえられたのかを知らないが、しかし息つぎ現にあたえられている。軍隊は病んでいる器官であるから、その復員はできるだけ速くおこなうべきである。ところで、さしあたって、われわれはフィンランド革命[一六三]を援助しよう。

　さよう、いかにも、われわれは条約に違反している。われわれはすでに三〇回も四〇回も違反してきた。苦しい、長期にわたる解放期が始まり、それがいましがたソヴェト権力を創設し、それを三つの発展段階[一六四]だけ引きあげた、そういう時期には、長期にわたる慎重な闘争がなければならないことを理解できないのは、子どもだけである。しかし、『コムニスト』の同志たちが戦争について論議するとき、彼らは人々が拳を握りしめ、怒りに燃えていることを忘れて、感情に訴えるのである。彼らはどう言っているか？「自覚した革命家はけっしてこんなことを忍ばないだろうし、この辱しめにあまんじないだろう」と。彼らの新聞の表題は『コムニスト』であるが、それは『シリャフチチ』という表題にすべきである。なぜなら、この新聞は、その死にのぞんで剣を手にし、みごとなポーズをつくって、「講和は汚辱だ、戦争こそ名誉だ」と言ったポーランドの小貴族（シリャフチチ）の立場からものごとを見ているからである。彼らはポーランド小貴族

の立場から論じ、私は農民の立場から論じているのである。

軍隊が敗走し、また数千人を失うまいとすれば敗走せざるをえないときに、私が講和を受けいれるのは、事態のこれ以上の悪化を防ぐためである。条約ははたして不名誉なものか？　まじめな農民や労働者はだれでも、私が正しいことを認めるだろう。なぜなら、彼らは、平和が力をやしなう手段であることを理解しているからである。すでに何度も引合いにだしたことだが、ティルジット講和のあとで、ドイツ人がナポレオンから解放されたことを、歴史は知っている。私はこの講和をわざとティルジット講和と名づけた。とはいえ、われわれは、ティルジット講和条約にふくまれているような、征服者が他国民を征服するのを援助するために わが国の部隊を提供する義務に、調印しはしなかった。——だが、歴史上にはそこまでいった例があり、われわれの場合にも、国際的な戦場革命に期待をかけるだけであったら、事態はそこまでいくだろう。歴史が諸君を軍事的奴隷制のこの形態にまでいたらせないよう、注意したまえ。そして、社会主義革命がすべての国々で勝利しないかぎり、ソヴェト共和国は奴隷状態におちいるかもしれない。ナポレオンはティルジットで前代未聞の不名誉な講和条件をドイツ人に押しつけた。当時そこでは、講和が何回も結ばれる羽目になった。当時のホフマン、つまりナポレオンは、講和条約違反の件でドイツ人をとっつかまえた。ホフマンは同じ件でわれわれをとっつかまえるだろう。ただわれわれは、彼からすぐにとっつかまえられないように努力するであろう。

さきの戦争は、みずからを組織し、規律をやしない、服従し、模範的な規律をつくりだすという、苦い、つらい、しかし重大な教訓をロシアの人民にあたえた。ドイツ人から彼らの規律を学びたまえ。そうしないなら、われわれは、滅んだ国民となり、永久に奴隷状態におかれるであろう。

歴史はこのようにすすんできたし、もっぱらこのようにすすんできた。歴史は、平和が戦争のための息つぎであること、戦争が、いくらかでもましな、あるいはもっと悪い平和を獲得する方法であることを、語っている。ブレストでの力関係は、敗者の講和ではあっても、屈辱的でない講和をもたらすようなものであった。プスコフでの力関係は、不名誉な、いっそう屈辱的な講和をもたらすようなものであったが、次の段階であるピーテルとモスクワでは、四倍も屈辱的な講和がわれわれに申しわたされるであろう。われわれは、モスクワの若い友人たちがわれわれに言ったように、ソヴェト権力は形式にすぎない(一〇二)、とは言わないだろう。われわれは、あれこれの革命的原則のためには内容を犠牲にしてもよい、とは言わないだろう。われわれは言う

であろう。ロシア人民は規律をやしない、みずからを組織しなければならないことを理解すべきである、そうすれば、彼らはどんなティルジット講和にも耐えられるであろう、と。解放戦争の全歴史は、こういう戦争が広範な大衆をまきこめば、解放が速やかにやってくることを、われわれに示している。われわれは言う。もし歴史がそのようにすすむならば、われわれは平和をやめて、戦争に逆もどりしなければならない。そして、ここ二、三日のうちにそうなるかもしれない。だれもみな準備をととのえていなければならない。たとえ、すべての新聞が伝えているように、ナルヴァが占領されていないということが事実であっても、ドイツ軍がナルヴァの後方で準備をととのえていることは、私にはすこしも疑いをいれない。ナルヴァでなくとも、ナルヴァ付近で、プスコフでなくとも、プスコフ付近で、ドイツ軍はその正規軍を集結し、その鉄道を整備し、こうして、次の一跳びでペトログラードを占領しようとしているのだ。この野獣は跳躍がうまい。この野獣はそのことを実証した。この野獣はもう一度跳躍するだろう。そのことはすこしの疑いもない。だから、準備をととのえていなければならないし、大言壮語せずに、たとえ一日の息つぎでも受けいれることを知らなければならない。なぜなら、たとえ一日でも、ピーテルの疎開に利用することができるし、ピーテルが占領されるならば、数十万のわがプロレタリアは前代未聞の苦しみにあうであろうから。もう一度言うが、私は、たとえ数日でも、ピーテルの疎開のための時間を手にいれるためなら、二〇倍も、百倍も屈辱的な条約にも調印する用意があり、またそれに調印することを義務と考えるであろう。なぜなら、そうすることで私は、そうしなければドイツ軍のくびきにつながれるかもしれない労働者たちの苦しみをやわらげるからであり、またわれわれの必要としている資材や火薬などのピーテルからの搬出を容易にするからである。というのは、私は祖国防衛論者だからであり、また私は、たとえ病んで復員した現在の軍隊が目下治療につとめている、はるかな後方においてでも、軍隊を養成することに賛成だからである。

われわれは息つぎがどのようなものになるかを知らないが、時機を利用するようつとめよう。息つぎはかなりに長いものとなるかもしれないし、わずか数日間しかつづかないかもしれない。いろいろな場合がありうるが、だれもそれを知らないし、知ることもできない。なぜなら、すべての大国が縛られており、拘束されており、数個の戦線で戦うことをよぎなくされているからである。ホフマンの行動を規定しているものは、第一にはソヴェト共和国を粉砕する必要であり、第二には、彼の国が多くの戦線で戦ってい

ることであり、第三には、ドイツ革命が成熟し成長しつつあることで、ホフマンはこのことを知っている。彼は、人人が主張しているように、いますぐピーテルを占領し、モスクワを占領することはできない。しかし、彼はあすはそれをやることができるし、それはまったくありうることである。繰りかえして言う。軍隊の病気という事実があり、われわれが、たとえ一日の息つぎを手に入れるためであろうと、あらゆる機会をぜひとも利用しようとしているようなときには、われわれは次のように言う。大衆と結びついていて、戦争とはなにか、大衆とはどんなものかを知っているまじめな革命家はだれでも、大衆に規律を教え、大衆の病気を治療しなければならないし、新しい戦争に大衆を立ちあがらせるよう試みなければならない、と。——このような革命家はだれでも、われわれの正当さを認めるであろうし、どんな不名誉な条約でも、正しいと認めるであろう。なぜなら、それは、プロレタリア革命の利益になり、ロシアの再生の利益になり、ロシアから病気の器官をとりのぞくことに役だつからである。常識のある人ならだれでも理解しているように、この講和に調印しても、われわれは、われわれの労働者革命を中止するわけではない。ドイツ軍との講和に調印しても、われわれはわれわれの軍事援助を中止するものでないことは、だれでも理解していることである。われわれは、フィンランド人に武器を送っているが、役に立たないとわかっている部隊を送ることはしない。

もしかしたら、われわれは戦争に応じるかもしれない。あすはモスクワをも明け渡し、そのあとで攻勢に転じるかもしれない。人民の気分に転換が生じるならば、われわれはわが軍を敵軍に向けて出動させるであろう。この転換は熟しつつあるが、それには、たぶん多くの時間を要するであろう。しかし、広範な大衆がいま彼らの言っているのと違ったことを言うようになるとき、転換はやってくるであろう。現在そういう時がきているとは、私は自分の心に言うことができないから、どんな苛酷な講和でも受けいれざるをえないのである。再生の時がやってくれば、みながそれを感じるであろうし、ロシア人がばかでないことを知るであろう。ロシア人は、自制する必要があること、このスローガンを実行しなければならないことを見てとり、理解するであろう。——これがわが党大会とソヴェト大会の主要な任務である。

新しいやり方で活動するすべを知らなければならない。これは、はるかに困難ではあるが、しかしけっして見込みのないことではない。われわれが愚劣きわまる冒険によって、自分でソヴェト権力をぶちこわさないかぎり、これは

けっしてソヴェト権力をぶちこわしはしないだろう。もうこれ以上苦しみにはあまんじないと、人民が言う時がやってくるだろう。しかし、われわれがこのような冒険に応じないで、困難な条件のもとで、われわれがつい数日前調印した前代未聞の屈辱的な条約のもとで、活動するすべを知るときにはじめて、そういうことが起こることができよう。なぜなら、このような歴史的危機は、戦争だけでは、講和条約だけでは、解決されないからである。ドイツ人民が、そのつど新たな屈辱と新たな条約違反のための息つぎに変わったいくつかの屈辱的な講和を経て、一八〇七年にティルジット講和に調印したとき、彼らは自国の君主制的組織によって縛られていた。大衆のソヴェト組織は、われわれの任務を容易にするであろう。

われわれのスローガンはただ一つ、——軍事を本格的に学べ、鉄道に秩序を確立せよ、でなければならない。鉄道なしに社会主義的革命戦争をおこなうことは、最も有害な裏切り行為である。秩序をつくりださなければならない。革命にふくまれる最良のものをつくりだすあのエネルギーと威力を、あますところなくよびおこす必要がある。

息つぎが諸君にあたえられたなら、遠い後方との連絡をもち、そこに新しい軍隊を創建するために、たとえ一時間でも息つぎを利用したまえ。幻想を捨てたまえ。この幻想のために、生活はこれまで諸君を罰してきたが、将来はさらにひどく罰するだろう。われわれの前途には、最も重大な敗北の時代が姿をあらわそうとしている。この時代はすでにここにある。この時代を考慮にいれることができなければならない。非合法の条件のもとで、ドイツ軍にまごうかたなく隷属している条件のもとで、ねばりづよく活動するための準備をととのえなければならない。表面を飾るにはおよばない。これは、ほんとうにティルジット条約である。われわれがこのように行動することができるなら、そのときにはわれわれは、敗北したにもかかわらず、絶対的な確信をもって言うことができる。われわれは勝利する、と。（拍手）

簡単な新聞報道は一九一八年三月九日（二月二四日）に新聞『プラウダ』第四五号に発表
全文は一九二三年に単行本『ロシア共産党第七回大会。速記録、一九一八年三月六—八日』に発表
全集、第五版、第三六巻、三—二六ページ所収
邦訳全集、第二七巻、八一—一〇六ページ所収

ソヴェト権力の当面の任務[一六]

ロシア・ソヴェト共和国の国際的地位と社会主義革命の基本的任務

講和がかちとられたおかげで、——それはきわめて苛酷で、まったく不安定なものであるにもかかわらず——、ロシア・ソヴェト共和国は当分のあいだ、社会主義革命の最も重要で最も困難な側面に、すなわち組織上の任務に、その精力を集中することができるようになった。

この任務は、一九一八年三月一五日にモスクワでの臨時ソヴェト大会が採択した決議の第四節（第四部）のなかで——勤労者の自己規律について、また混乱や組織破壊との仮借ない闘争について述べている決議のその同じ節（部）のなかで、すべての勤労被抑圧大衆のまえに明瞭かつ正確に提起されている。[一七]

ロシア・ソヴェト共和国がかちとった講和が不安定なのは、もちろん、ロシアがいま軍事行動を再開しようと考えているからではない。——ブルジョア反革命派やその受売人たち（メンシェヴィキその他）を別とすれば、責任ある政治家はだれ一人としてそのようなことは考えていない。講和が不安定なのは、ロシアの西と東に境を接している、巨大な軍事力をもつ帝国主義諸国家の内部で、ロシアの一時的な弱体にさそわれた主戦派、社会主義を憎んで略奪をやりたがっている資本家たちにそそのかされた主戦派が、いつなんどき優勢になるかわからないからである。

このような情勢のもとでは、われわれに紙のうえでなく現実に平和を保障するものは、すでに頂点に達している帝国主義列強間の反目だけである。この反目は、一方では、西欧における諸国民の帝国主義的殺戮の再開のうちに、他方では、太平洋とその沿岸地域の支配をめぐる日本とアメリカとの帝国主義的競争の極度の激化のうちに現われている。

このような不たしかな守りによって保護されているわがソヴェト社会主義共和国が、はなはだしく不安定な、まったくきわどい国際的地位にあることは、明らかである。われわれが諸事情の組合せによって手に入れた息つぎを利用

して、ロシアの社会的身体全体が戦争によって受けたこのうえなく深い傷をいやし、国を経済的に高揚させることに、われわれの全力をぎりぎりにふりしぼることが必要である。それなしには、国防力の多少とも真剣な強化は問題にさえなりえないのである。

さらにまた、一連の理由によって遅れてしまった西欧における社会主義革命への真剣な協力も、われわれが自己に課されている組織上の任務を解決できる程度におうじてのみなしうることは、明らかである。

われわれがなによりもさきに直面している組織上の任務を首尾よく解決するための基本的条件は、人民の政治的指導者たち、すなわち、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）の党員たちが、ついでまた勤労大衆のうちのすべての自覚ある代表者たちが、ここで考察している点における従来のブルジョア革命と現在の社会主義革命とのあいだの根本的な相違を、完全に会得することである。

ブルジョア革命では、勤労大衆の主要な任務は、封建制、君主制、中世的諸制度を廃絶するという否定的あるいは破壊的な仕事を遂行することにあった。新しい社会を組織するという積極的あるいは創造的な仕事を遂行したのは、住民のうちの富裕な、ブルジョア的少数者であった。そして彼らはこの任務を、労働者や貧農の抵抗にもかかわらず、比較的容易に遂行したのであるが、それは、資本によって搾取されている大衆がばらばらでしかも未成熟だったため、彼らの抵抗がその当時はきわめて微力であったからだけではなく、また、無政府的に構築されている資本主義社会の基本的な組織力が、自然成長的に広さと深みをましてゆく市場、国内的および国際的市場であるからでもある。

これに反して、あらゆる社会主義革命における——したがってまた一九一七年一〇月二五日にわれわれが始めたロシアの社会主義革命における——プロレタリアートと彼らに指導される貧農との主要な任務は、幾千万の人々の生存にとって必要な生産物の計画的な生産と分配を包括する、新しい組織的諸関係のきわめて複雑で目のこまかな網を整備するという積極的または創造的な仕事である。このような革命は、住民の多数者、とりわけ勤労者の多数者が自主的な歴史的創造活動をおこなうときにのみ、首尾よく達成することができるのである。プロレタリアートと貧農が、自覚、思想性、献身、不屈さを十分に発揮できる場合にのみ、社会主義革命の勝利は保障されるであろう。われわれは、勤労被抑圧大衆のために新しい社会の自主的な建設に最も活発に参加する可能性をひらく新しいソヴェト型の国家をつくりだしたが、われわれはそれによってはまだ困難な任務の小部分を解決したにすぎない。主要な困難は経済

きわめて厳格で全般的な記録と統制を実施し、労働生産性を高め、実際に生産を社会化することが、それである。

いまロシアで政府党になっているボリシェヴィキ党の発展は、われわれが際会しており、そして当面の政治的情勢の特徴をなしている歴史的転換がどういうものであるかを、とくにくっきりと示している。この歴史的転換は、ソヴェト権力の新しい方向づけを、すなわち新しい任務の新たな提起を、要求しているのである。

未来をもつあらゆる政党の第一の任務は、その綱領と戦術の正しさを人民の多数者に説得することである。この任務は、ツァーリズムのもとでも、チェルノーフやツェレテーリの一味がケーレンスキーやキーシキンの一味と協調していた時期にも、第一位にあった。――この任務は、もちろん、完遂されるにはまだほどとおいが（またそれがあますところなくなしとげられることはけっしてありえないことだが）、いまでは大体において解決されている。なぜなら、ロシアの労働者・農民の多数者は、モスクワでの最近のソヴェト大会が疑問の余地なく示したように、明らかにボリシェヴィキの側に立っているからである。

わが党の第二の任務は、政治権力の獲得と搾取者の反抗の抑圧とにあった。この任務もまたけっしてあますところなくなしとげられてはおらず、この任務を無視することはできない。なぜなら、一方では君主主義者やカデットが、他方では彼らの受売人であり追従者であるメンシェヴィキや右派エス・エルが、ソヴェト権力打倒のために連合しようとの試みをつづけているからである。しかし、搾取者の反抗を抑圧するという任務は、一九一七年一〇月二五日から（ほぼ）一九一八年二月までの時期に、あるいはボガエフスキーの降伏までの時期に、すでに大体において解決されている。

いまや当面の任務として、現時点の特色をなす任務として、第三の任務――ロシアの管理〔統治〕を組織するという任務が、日程にのぼってきている。いうまでもなく、この任務は、一九一七年一〇月二五日のすぐ翌日にわれわれが提起し、以後その解決にとりくんできたものである。しかし、搾取者の反抗がまだ公然たる内乱の形態をとっていたあいだは、管理という任務は主要な、中心的な任務にはなりえなかった。

いまではそれはそういうものになったのである。われわれボリシェヴィキ党は、ロシアを説得した。われわれはロシアを、金持の手から貧民の手に、搾取者の手から勤労者

の手に、たたかいとった。いまやわれわれはロシアを管理しなければならない。そして現時点の全特色、全困難は、人民の説得と搾取者にたいする軍事的抑圧という主要任務から、管理という主要任務への移行の特殊性を理解することにある。

世界史上はじめて、社会主義政党が権力の獲得と搾取者の抑圧という事業を大体においてやりとげ、管理の任務に直接にとりくむことができるまでになった。われわれは、社会主義的変革のこの最も困難な（そして最もやりがいのある）任務の遂行者たるに値するという実を示さなければならない。首尾よく管理するためには、説得する能力のほかに、内乱で勝利する能力のほかに、実際に組織する能力が必要であることを、よく考えなければならない。これは最も困難な任務である。なぜなら、ここで問題になっているのは、幾千万もの人々の生活の最も奥底の、経済的な基盤を新しい仕方で組織することだからである。そして、これは最もやりがいのある任務である。なぜなら、この任務が（主要で基本的な点において）解決されたのちにはじめて、ロシアがたんにソヴェト共和国になっただけでなく、社会主義共和国にもなった、と言うことができるからである。

現時点の一般的スローガン

右に概観した客観的な情勢は、きわめて苛酷で不安定な講和と、戦争と（ケーレンスキーおよび彼を支持したメンシェヴィキと右派エス・エルによって代表される）ブルジョアジーの支配とがわれわれに遺産として残した、苦痛にみちた荒廃と失業と飢餓によってつくりだされたものであるが、これらすべてのことは不可避的に、広範な勤労大衆を極度に疲労させ、さらには彼らの力を枯渇させることとなった。彼らはいくらかの休息を切実に要求しているし、また要求しないではいられない。いまや、戦争とブルジョアジーの失政とによって破壊された生産力を復興すること、戦争と敗戦によって、また投機と、打倒された搾取者の権力を再建しようとするブルジョアジーの企図によってもたらされた傷をいやすこと、国を経済的に高揚させること、基本的な秩序をしっかりと守ることが、日程にのぼってきている。逆説的に聞こえるかもしれないが、実際には、上記の客観的諸条件のゆえに、現時点では、ソヴェト権力がブルジョアジーやメンシェヴィキや右派エス・エルの抵抗を排して、社会生活を維持するうえできわだって基礎的な、最も基礎的なこれらの任務を実践的に解決する場合にのみ、

ロシアの社会主義への移行を確実なものになしうることは、まったく疑いないところである。現在の情勢の具体的な特殊性のゆえに、そして土地の社会化や労働者統制やその他にかんする法律を公布したソヴェト権力が存在しているもとでは、これらの最も基礎的な任務を実践的に解決することと、社会主義への最初の数歩を踏みだすうえでの組織上の諸困難を克服することとは、いまや一つのメダルの両面なのである。

金銭勘定を正確に誠実におこなえ、きりつめて経営せよ、怠けるな、盗みをするな、厳格な労働規律を順守せよ——ブルジョアジーが同じようなことばで搾取階級としての自己の支配を覆いかくしていた当時は革命的プロレタリアートが正当にも一笑に付していたほかならぬこのようなスローガンが、いま、ブルジョアジーを打倒したあとでは、現時点の当面の主要スローガンとなりつつある。そして、一方では、勤労大衆がこれらのスローガンを実際に実行に移すことが、帝国主義戦争と（ケーレンスキーをかしらとする）帝国主義的略奪者たちによって半死半生の状態にまでいためつけられたわが国を救済するただ一つの条件であり、他方では、ソヴェト権力が自身の方法により、自身の法律にもとづいてこれらのスローガンを実際に実行に移すことは、社会主義の最終的勝利にとって必要かつ十分なものである。これほどの「陳腐」で「月なみな」スローガンを前面に押しだすことを鼻であしらうような人は、まさにこのことが理解できないのである。わずか一年まえにツァーリズムを打倒し、半年にもならぬまえにケーレンスキー一味から解放されたばかりの小農民国では、当然、自然発生的な無政府性が、あらゆる長期にわたる反動的戦争につきものの野蛮化と粗暴化によって強められて、少なからず残っており、絶望とやり場のない憤りの気持がつくりだされている。これにくわえて、ブルジョアジーの下僕たち（メンシェヴィキ、右派エス・エル、その他）の挑発的な政策があることを考えるなら、大衆の気分を完全に転換させ、彼らを規則正しい、着実な、規律ある労働へと移行させるためには、最もすぐれた、最も意識の高い労働者と農民のどれほど長期にわたる不屈の努力が必要であるかが、まったく明らかになろう。貧民（プロレタリアと半プロレタリア）の大衆がこのような移行をなしとげてはじめて、ブルジョアジーにたいする、とりわけ最も頑強で数の多い農民ブルジョアジーにたいする勝利を、達成することができるのである。

ブルジョアジーとの闘争の新しい段階

ブルジョアジーはわが国で打ち負かされた。しかし、彼らはまだ根こそぎにされておらず、絶滅されておらず、また徹底的に打ち砕かれてもいない。だから、新しい、より高い形態でのブルジョアジーとの闘争が、すなわち、資本家たちをさらに収奪してゆくというきわめて単純な任務から、ブルジョアジーが存続することも新たに発生することもできないような条件をつくりだすというはるかに複雑で困難な任務への移行が、日程にのぼってきている。これがくらべものにならないほどより高度な任務であり、それが解決されなければ社会主義がまだ存在しないことは、明白である。

西ヨーロッパの革命を基準としてはかれば、われわれは現在、ほぼ一七九三年と一八七一年に達成された水準にある。この水準にまで高まったこと、そしてある点では、すなわち、ロシア全土にいっそう高度な型の国家であるソヴェト権力を布告し樹立したという点では、疑いもなく、いくらか先へ進んだことを、われわれは正当にも誇りとすることができる。しかし、われわれはけっして、すでに達成されたものに満足することはできない。なぜなら、われわれは社会主義への移行を始めたばかりであり、この点で決定的なことをまだ実現していないからである。

決定的なことは、生産物の生産と分配にたいするきわめて厳格で全人民的な記録と統制を組織することである。ところが、われわれがブルジョアジーから取りあげた企業で、経済部門と経済分野で、記録と統制をわれわれはまだなしとげていない。だが、このことなしには、社会主義の実現にとっての第二の、同様に肝要な物質的条件、すなわち全国的な規模での労働生産性の向上は、問題にもなりえないのである。

だから、現在の時点での任務を、資本にたいする攻撃の継続という単純な定式で規定することはできないであろう。疑いもなく、われわれは資本にとどめをさしていないのであって、勤労者のこの敵にたいして攻撃を継続することは無条件に必要であるとはいえ、右のような規定は不正確であり、具体性を欠いているであろう。そこには、将来の攻撃を成功させるためにいまは攻撃を「中止する」ことが必要であるという現時点の特異性が考慮されていないと言えよう。

このことは、資本にたいする戦争におけるわれわれの立場を、たとえば敵からその領土の半分ないし三分の二を奪

いとっていながら、しかも兵力を集結し、戦闘資材の貯蔵をふやし、兵站線を修復・補強し、新しい集積所を建設し、新手の予備軍をつれてくる等々のために、攻撃の中止をよぎなくされた戦勝軍の立場と比較することによって説明することができる。このような形勢のもとでの戦勝軍の攻勢中止は、敵方から残りの領土を略取するためにこそ、すなわち完全な勝利のためにこそ、必要なのである。現在の時点における客観的情勢がわれわれに命じている資本にたいする攻撃の「中止」は、まさにこのようなものなのであるが、このことがわからない者は、現在の政治情勢がなに一つわかっていない者である。

もとより、資本にたいする攻撃の「中止」ということは、括弧つきでのみ、すなわち比喩的にのみ、語ることができるにすぎない。通常の戦争では、攻撃中止の一般命令をくだすことができるし、実際に前進を停止することができる。だが、資本にたいする戦争では、前進を停止することはできない。そして、われわれが資本のこれ以上の収奪を断念するなどということは、問題になりえない。問題になっているのは、われわれの経済的および政治的活動の重点を移すことである。いままでは収奪者の直接的収奪の諸方策が前面に立っていた。いまや前面に押しだされつつあるのは、すでに資本家から収奪した経営において、また他のすべての経営において、記録と統制を組織することである。

もし、いまでも従来どおりのテンポで資本の収奪をさらに継続しようと欲するならば、われわれはきっと敗北を喫するであろう。なぜなら、すべての思慮ある人にとって明瞭なように、プロレタリア的記録と統制を組織する面でのわれわれの仕事は、直接的な「収奪者の収奪」の仕事よりも、明白に立ちおくれているからである。もしわれわれがいま記録と統制を組織する仕事に全力をあげてとりくむならば、われわれはこの任務を解決できるだろうし、われわれは手ぬかりを埋めあわせて、資本にたいするわれわれの「戦役」全体で勝利するであろう。

だが、手ぬかりを埋めあわせなければならないと認めることは、なんらかのあやまちをおかしたと認めることと同じではないだろうか？　けっしてそんなことはない。もう一度軍事との比較をおこなってみよう。もし軽騎兵の部隊だけで敵を撃破し駆逐することができるならば、そうしなければならない。だが、それでは一定限度までの成果しかあげることができないなら、その限度をこえるところで重砲隊をよびよせる必要が生じることが、十分に考えられる。われわれは、いまや重砲隊をよびよせる点で手ぬかりを埋めあわせる必要を認めるとしても、けっして、騎兵隊の勝利した攻撃が誤りだったと認めるわけではない。

ブルジョアジーの下僕たちは、われわれが資本にたいする「赤衛軍的」攻撃をおこなったということで、しばしばわれわれを非難してきた。この非難はばかげており、金持の腰巾着にちょうどふさわしいものである。なぜなら、資本にたいする「赤衛軍的」な攻撃は、その当時は諸事情が無条件に要求するところだったからである。第一に、資本は当時、ケーレンスキーやクラスノーフ、サーヴィンコフやゴーツ、ドゥートフやボガエフスキーを代表として、軍事的に反抗していた（ゲゲチコーリはいまもそうした反抗をしている）。軍事的反抗は軍事的手段によって打ち砕くほかはないのであって、こうして赤衛兵たちは勤労被搾取者を搾取者の圧制から解放するという、最も崇高で偉大な歴史的事業をおこなったのである。

第二に、われわれが当時、抑圧という方法に代えて管理という方法を前面に押しだすことができなかったのは、また、管理する能力というものは生まれながらに人々にそなわっているものではなく、経験によってあたえられるものであるからでもあった。当時はわれわれにこの経験がなかった。いまではそれがある。第三に、当時は、知識や技術のさまざまな部門の専門家で、われわれが自由に使える人はありえなかった。なぜなら、そういう専門家たちはボガエフスキー一味の戦列にはいって戦っていたか、そうでなければサボタージュによる消極的反抗を常習的に頑強におこなう可能性をなおもっていたからである。だがいまではわれわれはサボタージュを粉砕してしまった。資本にたいする「赤衛軍的」攻撃は成功し、勝利した。なぜなら、われわれは資本の軍事的反抗にもサボタージュによる反抗にも打ち勝ったからである。

このことは、資本にたいする「赤衛軍的」な攻撃がつねに妥当であり、あらゆる事情のもとで妥当であるということ、われわれが資本との闘争のそれ以外の方法をもちあわせないということを、意味するだろうか？　そのように考えたら子どもじみているであろう。われわれは軽騎兵を用いて勝利したが、われわれには重砲隊もある。われわれは抑圧という方法で勝利してきたが、われわれは管理という方法によっても勝利することができる。情勢が変化したら、敵にたいする闘争の方法を変えることができなければならない。われわれは、サーヴィンコフ一味やゲゲチコーリ一味の諸君にたいしても、他のすべての地主およびブルジョアの反革命派にたいしても、これを「赤衛軍的」に抑圧することを一瞬たりともやめはしないだろう。しかし、赤衛軍的攻撃が必要な時期が基本的には終わり（しかも勝利のうちに終わり）、そして、もはやどのようなブルジョアジーもまったくそだちえなくなるように土壌を鋤きかえすた

めに、プロレタリア国家権力がブルジョア専門家を利用する時期がまぢかにせまっているようなときに、「赤衛軍的」方法を前面に押しだすほど、われわれは愚かではないであろう。

これは特異な発展期、あるいは、より正確にいえば発展局面であって、資本に窮極的に打ち勝つためには、われわれの闘争方法をそういう局面の特異な諸条件に適応させることができなければならない。

知識や技術や経験の種々な部門の専門家の指導なしには、社会主義へ移行することは不可能である。なぜなら、社会主義は、資本主義が達成したものを基盤として、資本主義とくらべてより高い労働生産性をめざす、自覚した大衆的な前進運動を必要とするからである。社会主義は、独自の仕方で、自身の方法で——もっと具体的にいえば、ソヴェト的方法で——この前進運動を実現しなければならない。ところで、専門家たちは、彼らを専門家にした社会生活のいっさいの事情の結果として、その大部分は不可避的にブルジョア的である。もしわが国のプロレタリアートが、権力を獲得したあと、全人民的な規模での記録、統制、組織化の任務を敏速に解決していたならば——(これは戦争とロシアの後進性のゆえに実現できなかったが)——、その場合には、われわれは、サボタージュを粉砕したあと、全般的な記録と統制によってブルジョア専門家をも完全に服従させていたであろう。だが、記録と統制が一般にいちじるしく「立ちおくれ」た結果、われわれは、サボタージュに打ち勝つことができたとはいえ、ブルジョア専門家を自由に使いこなすような事態を、まだつくりだしていない。多数の怠業者が「勤めに出ている」。しかし、最良の組織者と最高級の専門家たちを国家が利用することは、古いやり方、ブルジョア的なやり方(すなわち、高給をはらうこと)によるか、それとも新しいやり方、プロレタリア的なやり方(すなわち、いやおうなくひとりでに専門家たちを従わせ、かつ引きよせるような、全人民的記録と下からの統制という環境をつくりだすこと)によるしかない。

われわれはいま、古い、ブルジョア的手段にうったえて、ブルジョア専門家のうちの最高級の人物の「サービス」にたいする非常に高い支払に同意しなければならなかった。事情に精通している人ならだれでも、このことを知っている。しかし、プロレタリア国家がこのような方策をとることの意義については、だれでもが深く考えているわけではない。このような方策が一つの妥協であり、そして、俸給を平均的な労働者の賃金水準に引き下げることを要求し、口先だけでなく実際にも出世主義とたたかうことを要求している、パリ・コミューンとあらゆるプロレタリア権力の

原則からの逸脱であることは、明らかである。

それればかりではない。明らかに、このような方策は資本にたいする攻勢の――ある領域での、そしてある程度の――中止であるだけでなく（なぜなら、資本は一定額の貨幣ではなく、一定の社会関係にほかならないから）、当初から高額の俸給を平均的な労働者の賃金にまで引き下げる政策をかかげて実行してきた、わが社会主義的ソヴェト国家権力の一歩後退でもある。

もちろん、ブルジョアジーの下僕たち、とりわけメンシェヴィキ、ノーヴァヤ・ジーズニ派、右派エス・エルのような雑輩は、われわれが一歩後退しつつあることを告白するのを見て、ほくそ笑むことだろう。しかし、そんなことを気にする必要はすこしもない。われわれにとって必要なことは、みずからの誤りや弱点を包みかくしたりせず、やりおえていないことを適時になしとげることにつとめながら、社会主義にむかっての最高度に困難で新しい道の特殊性を研究することである。ブルジョア専門家たちをきわめて高い給料で引きよせるのはコミューンの原則からの逸脱であることを、大衆に隠したりするのは、ブルジョア政治屋の水準にまでおちこみ、大衆をあざむくことを意味するだろう。どのようにして、またなにゆえにわれわれが一歩後退したのかを公然と説明し、ついで、手ぬかりを埋めあわせるためにどのような手段があるかを公開の場で論議すること――これは、大衆を教育し、経験から学ぶこと、彼ら大衆とともに社会主義建設を学ぶことを意味する。歴史上の勝利した戦役で、勝利者がどのようなあやまちもまったくおかさず、部分的な敗北をこうむることもなく、またなにかの点で、またどこかで一時的に後退することがなかったようなものは、ただの一つもないであろう。まして、われわれがおこなっている資本主義にたいする「戦役」は、最も困難な軍事上の戦役よりも百万倍も困難であり、したがって、個別的で部分的な後退で気をおとしたりすることは、ばかげた恥ずべきことであろう。

この問題を実務的な側面から取りあげてみよう。ロシア・ソヴェト共和国にとって、国のできるだけ急速な経済的高揚をかちとるために人民の労働を指導するのに、知識、技術、実際的経験のさまざまな分野の第一級の学者や専門家が一千人必要だと仮定しよう。また、これらの「一等星」の人々に――彼らの大多数は、もちろん、労働者の堕落について叫びたてるのをこのめばこのむほど、それだけ多く彼ら自身がブルジョア的風習によって毒されているのだが――、年二万五〇〇〇ループリずつ支払わなければならないと仮定しよう。かりにこの総額（二五〇〇万ループリ）を二倍にし（最も重要な組織上および技術上の課題を

とくに首尾よく敏速に遂行した者に報奨金をあたえると想定して)、さらには四倍にもする(より多くを要求する外国人専門家を数百人招くと想定して)必要があると仮定しよう。さて、科学・技術の最新の成果にもとづいて人民の労働を組織がえするために年間五〇〇〇万もしくは一億ルーブリを支出することが、ソヴェト共和国にとって度のすぎた、力にあまることだろうか? もちろん、そんなことはない。自覚ある労働者・農民の圧倒的多数は、このような支出に賛成するだろう。というのは、われわれの後進性のため幾十億もの額が失われているのに、われわれの仕事にブルジョア・インテリゲンツィアの「巨星」たちを一人のこらず自発的に参加させるような高い組織性と記録と統制の水準を、われわれがまだ達成していないことを、彼らは実生活から知っているからである。

もとより、この問題は別の側面をももっている。高額の俸給が人を堕落させる影響をおよぼすことは、議論の余地がない。それは、ソヴェト権力にたいしてもそうだし(変革が急速におこなわれたためある数の山師や詐欺師がソヴェト権力にもぐりこまないわけにはいかなかったが、この連中は、無能なまたは恥知らずな各種の委員たちといっしょに、……公金私消の「巨星」になることをいとわないかち、なおさらである)、労働者大衆にたいしてもそうである。しかし、労働者と貧農のうちの思慮ぶかくて誠実な人はみな、われわれに同意してくれるだろうし、また、資本主義の醜い遺産をわれわれが一挙にまぬかれることはできず、ソヴェト共和国を五〇〇〇万ないし一億ルーブリの「貢物」(全人民的記録と下からの統制を組織する仕事でのわれわれ自身の立ちおくれにたいする償いとしての貢物)からまぬかれさせるには、みずからを組織し、自分たち自身のあいだで規律をひきしめ、自分たちの周囲から、「資本主義の遺産を維持しよう」としたり「資本主義の伝統に従おう」とするすべての者、すなわち、のらくら者、徒食者、公金私消者(いまやすべての土地、すべての工場、すべての鉄道がソヴェト共和国の「公有財産」である)を一掃するほかはないことを、認めるであろう。もし労働者と貧農との自覚ある先進分子が、ソヴェト諸機関の援助のもとに、一年のうちにみずからを組織し、規律を身につけ、心をひきしめ、強固な労働規律をつくりだすことに成功するならば、われわれは一年たてばこの「貢物」なしですむようになるだろうし、またそれ以前でも……わが労働者・農民的な労働規律と組織性が成果をあげる程度におうじて、それを削減することができるであろう。われわれ自身、労働者と農民が、この学問のためにブルジョア専門家を利用して、よりすぐれた労働規律とより高い労働技術を学びと

ることが早ければ早いほど、それだけ早くわれわれはこれらの専門家たちへのあらゆる「貢物」をまぬかれることになるであろう。

プロレタリアートの指導下に生産物の生産と分配の全人民的記録と統制を組織するというわれわれの仕事は、収奪者の直接的収奪というわれわれの仕事にくらべてひどく立ちおくれてしまった。この命題は、現在の時点の特殊性とそこから出てくるソヴェト権力の任務を理解するうえで基本的なものである。ブルジョアジーにたいする闘争の重点は、そのような記録と統制を組織することに移りつつある。このことから出発することによってはじめて、銀行の国有化、外国貿易の独占、貨幣流通の国家統制、プロレタリア的見地からみて満足できる財産税および所得税の制定、労働義務制の実施という分野での経済・財政政策の当面の任務を正しく規定することができるのである。

これらの分野(ところで、それらはきわめて、きわめて重要な分野であるが)での社会主義的諸改革において、われわれは極度に立ちおくれてしまった。そして、このように立ちおくれたのはまさに、記録と統制が一般に不十分にしか組織されていないからである。もとよりこの任務は最も困難なものの一つであり、戦争のもたらした荒廃のもとでは長期間かかってはじめて解決できるものである。だがほかならぬこの部面で、ブルジョアジー――とりわけ無数の小ブルジョアジーと農民ブルジョアジー――がわれわれに重大な決戦をいどんでおり、整備されつつある統制を掘りくずし、たとえば、穀物独占を掘りくずしたり、投機や投機的商業のための地歩をかちえようとしたりしていることを、忘れてはならない。われわれは、すでに布告したこともはなはだ不十分にしか実行に移していない。そして現時点の主要な任務は、すでに法律となっている(だがまだ現実とはなっていない)諸改革の基本点を実務的、実践的に実現することに、全力を集中することにこそ存するのである。

銀行の国有化をさらに継続し、銀行を社会主義のもとでの社会的簿記の結節点に変える方向にたゆまず前進するために、まず第一に、なににもまして、人民銀行の支店数をふやし、預金を集め、公衆にとって金銭の預入れや引出しを容易にし、「行列」をなくし、収賄者や詐欺師をとらえて銃殺にする等々の点で、実際の成果をあげなければならない。はじめに、最も簡単なことを実際に実行し、現にあるものをうまく組織し、――そのあとではじめて、より複雑なものを準備するのである。

すでに施行されている(穀物、皮革、その他にたいする)国家独占を強化・整備し、それによって外国貿易の国家による独占を準備する。そのような独占なしには、われわれ

われは「貢物」の支払によって外国資本から「まぬかれる」ことはできないだろう。[167] そして、およそ社会主義建設の可能性は、われわれが、一定の過渡期中に外国資本にいくらかの貢物を支払うことによって自国内の経済的自立性を守ることができるかどうかにかかっているのである。

租税一般の、とりわけ財産税と所得税の徴収においても、われわれは極度にひどく立ちおくれてしまった。ブルジョアジーに賦課金を課していること——これは、原則的には無条件に許されるべきものであり、プロレタリアートが賛同するに値する方策であるが——は、この点でわれわれが、いまなお管理というやり方よりも、むしろたたかいとる（ロシアを金持の手から貧乏人の手に）というやり方のほうに近い箇所にいることを示している。しかし、より強くなり、よりしっかりと自分の足で立つためには、われわれは後者のやり方へ移ってゆかなければならず、われわれはブルジョアジーへの賦課金を、恒常的で規則正しく徴収される財産税と所得税に切りかえなければならない。これらの租税はプロレタリア国家により多くをもたらすであろうし、それはまたわれわれにより高い組織性をもち、記録と統制をよりよく整備することを要求するのである。[168]

労働義務制の実施におけるわれわれの立ちおくれは、いま日程にのぼっているものが、ほかならぬ準備し組織する仕事であることを、あらためて示している。この仕事は、一方では、すでにかちとられた成果を最終的に打ちかためるべきものであり、他方では、資本を「包囲し」、それに「降伏」をよぎなくさせる作戦を準備するために必要なものである。労働義務制の実施にわれわれは即刻とりかかるべきであろうが、しかし、それの実施は十分に順を追って慎重にはこぶべきであって、一歩一歩を実地の経験で点検し、そして、当然のことだが、第一歩としては金持にたいして労働義務制を実施するのである。農村のブルジョアをふくむすべてのブルジョアにたいして労働手帳と消費＝家計手帳の制度を実施することは、敵を完全に「包囲し」、生産物の生産と分配にたいする真に全人民的な記録と統制をつくりだすことへの重大な一歩前進となるであろう。

全人民的な記録と統制のための闘争の意義

幾世紀ものあいだ人民を抑圧し略奪する機関であった国家は、あらゆる国家的なものにたいする大衆のきわめて大きな憎悪と不信とを、遺産としてわれわれに残した。これを克服することは非常に困難な任務であり、ソヴェト権力のみが果たしうるものであるが、しかしソヴェト権力にと

っても長い期間と絶大なねばりづよさを要する任務である。このような「遺産」は、記録と統制の問題で——ブルジョアジーを打倒した直後の社会主義革命にとってのこの根本問題で——、とりわけ鋭く現われる。地主とブルジョアジーが打倒されたのちにはじめて自由な身となったと感じた大衆が、生産物の生産と分配にたいする全面的な、国家的な記録と統制なしには、勤労者の権力も勤労者の自由ももちこたえることができないし、資本主義のくびきのもとへの逆戻りが避けられないことを——書物からではなく、自分自身の、ソヴェトの経験から——理解するまでには、そのことを理解し、感じとるまでには、どうしても一定の時間がかかるであろう。

ブルジョアジー一般の、とりわけ小ブルジョアジーのすべての習慣と伝統もまた、国家的統制にさからい、「神聖な私有財産」、「神聖な」私的企業の不可侵を守る方向にはたらく。無政府主義やアナルコ・サンディカリズムはブルジョア的潮流であるというマルクス主義の命題がどれほど正しいものであるか、それらが社会主義にたいし、プロレタリア執権（ディクタツーラ）にたいし、共産主義にたいして、どんなに和解しがたい対立関係にあるかということは、いまやわれわれにとってとくに明瞭である。ソヴェト的な国家的統制と記録という思想を大衆のなかに植えつけるための闘争、この思想を実現するための闘争、衣食の獲得を「私」事と見なし、売買を「自分だけに関係のある」取引と見なすように習慣づけてきた呪うべき過去と訣別するための闘争、この闘争は世界史的な意義をもつ最も偉大な闘争であり、ブルジョア的・無政府主義的自然発生性にたいする社会主義的意識性の闘争である。

労働者統制はわが国では法律として施行されているが、しかし実生活のなかには、そして広範なプロレタリア大衆の意識のうちにさえ、それはやっと浸透しはじめたばかりである。生産物の生産と分配の仕事で報告制がなく統制がないことは、社会主義の萌芽の死滅であるし、公金私消であること（なぜなら、全財産は国庫に属し、そして国庫はソヴェト権力、大多数の勤労者の権力にほかならないから）、記録と統制における怠慢は、ドイツやロシアのコルニーロフたちにたいする直接の手助けであること——彼らは、われわれが記録と統制の任務を解決できない場合にはじめて勤労者の権力をくつがえすことができるのであり、そして全農民ブルジョアジーの援助、カデット、メンシェヴィキ、右派エス・エルの援助のもとに、機会をうかがいながら、われわれを「待伏せ」しているのだが——、このことについて、われわれは扇動のなかで不十分にしか語っていないし、労働者と農民の先進分子もこのことについて

不十分にしか考えたり語ったりしていない。ところで、労働者統制が事実とならないうちは、先進的労働者が、この統制の違反者や統制に無関心な人間にたいして勝利にみちた容赦ない戦役を組織し、遂行しないうちは、社会主義への第一歩から（労働者統制から）第二歩を踏みだすこと、すなわち、生産の労働者による規制に移ることは、できないのである。

社会主義国家は、自己の生産と消費を誠実に記録し、労働を節約し、その生産性を不断に高め、そのことによって労働日を一日七時間、六時間、さらにそれ以下に短縮することを可能にする、生産・消費コミューンの網として、はじめて発生することができる。穀物と穀物生産にたいする（ついで他のすべての必需物資にたいする）厳格な全人民的、包括的な記録と統制を整備することなしに、すますわけにはいかない。資本主義は、生産物の分配の大規模な記録と統制への移行を容易にすることのできる大衆的組織――消費組合――を、われわれに遺産として残した。先進諸国とくらべて、ロシアではその発展は微弱であるが、それでも消費組合は一千万人以上の組合員をもつまでになった。最近公布された消費組合にかんする布告は（三）、現時点におけるる状況の特異性とソヴェト社会主義共和国の任務とをはっきり示す、きわめて意義ぶかい出来事である。

この布告は、ブルジョア的協同組合およびブルジョア的見地にとどまっている労働者協同組合との協定である。協定ないし妥協は、第一に、前記の諸機関の代表がこの布告の審議にくわわったばかりでなく、実際上、決定権をもあたえられた点にある。というのは、これらの機関の断固たる反対にあった布告の部分は放棄されたからである。第二に、実質上、妥協は、ソヴェト権力が協同組合への無料加入の原則（唯一の一貫したプロレタリア的原則）を放棄し、また各地域の全住民を、一つの協同組合に統合することを断念した点にある。階級の廃絶という任務にこたえるこの唯一の社会主義的原則からはずれて、「労働者階級的協同組合」（この場合「階級的」とよばれるのは、ブルジョアジーの階級的利益に従属するからにすぎない）は、存続する権利をあたえられたのである。最後に、協同組合の理事会からブルジョアジーを完全に排除しようというソヴェト権力の提案もまた非常に弱められ、理事会にはいるのを禁止されたのは、私的資本主義的性格をもつ商工業企業の持ち主だけとなったのである。

もしプロレタリアートが、ソヴェト権力をつうじて活動するなかで、全国家的規模での記録と統制を、あるいはせめてそういう統制の基礎だけでも整備することができていたなら、このような妥協の必要はなかったであろう。われ

われは、ソヴェトの食糧部をつうじ、ソヴェト付属の配給機関をつうじて、住民を、単一の、プロレタリア的に指導された協同組合に統合したことであろう。ブルジョア的協同組合の助けなしに、あの純然たるブルジョア的な原則に譲歩することなしに、そうしたであろう。このブルジョア的原則は、労働者協同組合をブルジョアの協同組合とならんで労働者の協同組合として存続させるものであって、労働者協同組合が両者を合体させたうえ、全理事会を自分の手におさめ、金持の消費にたいする監視を自分の手におさめることによって、ブルジョア的協同組合を全面的に自分に従属させるものではないのである。

こういう協定をブルジョア的協同組合と結ぶことによって、ソヴェト権力は、当面の発展局面にたいする自己の戦術的任務と特異な行動方式を具体的に決定した。すなわち、それは、ブルジョア分子を指導し、彼らを利用し、彼らにたいして一定の部分的譲歩をおこないながら、われわれがはじめに考えていたよりも緩慢ではあるが、そのかわりによりいっそう堅実で、基地や兵站線をよりしっかり確保し、たたかいとった陣地にいっそう強固な防御工事を施すような、そういう前進運動のための条件をつくりだすことである。ソヴェトはいまや社会主義建設の事業における自己の成功の度合を、なかんずく、きわめて明瞭で、単純で、実際的な、次のような尺度によって測ることができる（また測らなければならない）。それは、どれだけの数の共同体（コミューンまたは村落、街区その他）で、協同組合の発展が全住民をとらえるところに、どの程度近づいているか、ということである。

労働生産性の向上

およそ社会主義革命では、プロレタリアートによる権力の獲得という任務が解決されたのちには、また、収奪者を収奪し、彼らの反抗を抑圧するという任務が基本的に解決されてゆくにしたがって、資本主義よりも高度な社会制度をつくりだすという根本的な任務が、必然的に前面に押しだされてくる。すなわち、労働生産性の向上、ならびにそれと関連して（またそのために）より高度な労働組織ということである。ケーレンスキーからコルニーロフにいたる搾取者たちにたいする勝利のおかげで、この任務に直接たちむかい、それにじかに取りくむことができるようになったいま、わがソヴェト権力はまさにそういう立場にある。そこですぐさま明らかになることだが、中央国家権力を獲得することは数日間でできるし、広い国土のすみずみにいたるまで搾取者の軍事的（およびサボタージュによる）反

抗を鎮圧することも数週間で可能であるとしても、労働生産性を高めるという任務を確実に解決するには、どうしても（苦痛と破壊にみちみちた戦争のあとではとくに）数年が必要である。この場合、仕事が長期にわたる性質のものであることは、客観的状況によっていやおうなしに命じられているのである。

労働生産性を高めるには、なによりもまず、大工業の物質的基盤を確保すること、すなわち、燃料、鉄の生産、機械製作業、化学工業を発展させることが、必要である。ロシア・ソヴェト共和国は、――ブレスト講和ののちでさえ――膨大な埋蔵量の鉱石（ウラルの）や、西部シベリア（石炭）、カフカーズおよび南東地方（石油）、中部地方（泥炭）の燃料をもち、木材、水力、および化学工業用原料（カラブガーズ）[13]等々の膨大な資源をもつという、有利な条件のもとにある。最新の技術を用いてこれらの天然資源を開発するならば、それは生産力の空前の進歩の基盤となるであろう。

労働生産性を高めるためのそのほかの条件としては、第一に、住民大衆の教育と文化の向上がある。この向上はいま非常な速さで進行しているのであって、それに気づかないのは、ブルジョア的因襲のため目が見えなくなっている人だけである。彼らは、いま「下層」人民が、ソヴェト組織のおかげで、どれほどの知識欲と創意を発揮しつつあるかを、理解できないのである。第二に、勤労者の規律や、仕事の腕前や、能率や、労働の緊張度を高め、労働組織を改善することも、経済的高揚の条件である。

この面では、わが国の状態はことのほか悪く、もし、ブルジョアジーに恐れをなしたり、私利私欲から彼らに仕えたりしている連中のことばを信じるならば、絶望的でさえある。これらの連中には、古いものの味方が、崩壊だ、無政府状態だ、などとわめきちらさないような革命はかつてなかったし、またありえないということが、わからない。かつてない野蛮な抑圧をかなぐりすてたばかりの大衆のあいだに、深刻で広範な興奮と激動が起こっているのは当然であるし、労働規律の新しい原則を大衆がつくりあげるのがきわめて長期にわたる過程となるのは当然であるし、また地主とブルジョアジーに完全に勝利するまではそれをつくりあげはじめることさえできなかったのは、当然である。

しかし、（自分の古い特権を守りとおすことに望みを失った）ブルジョアやブルジョア・インテリゲンツィアがまき散らしている、往々にしていつわりの絶望感にはすこしもおちいらないものの、われわれは、明白な悪弊をけっして隠してはならない。反対に、われわれはそれをあばきだし、それにたいするソヴェト的闘争方法を強化するであろ

う。なぜなら、社会主義の成功は、自然発生的な小ブルジョア的無政府性——これは、ケーレンスキー体制やコルニーロフ体制のありうべき復活を真に保障するものであるが——にたいするプロレタリア的な意識的規律性の勝利なしには考えられないからである。

ロシアのプロレタリアートの最も自覚ある前衛部隊は、すでに労働規律の向上という任務を立てている。たとえば、金属労働組合の中央委員会でも、労働組合中央評議会でも、そのための方策と布告案の作成[一三]が始められている。この仕事を、全力をあげて支援し前進させる必要がある。出来高払制の実施、テーラー・システムのうちにある多くの科学的で進歩的なものの採用、賃金を生産物産出総額もしくは鉄道・水運の操業成績に見合ったものとすること、その他等々のことを、いまやとりあげ、実地に適用し、試験してみなければならない。

ロシア人は、先進諸国民と比較すれば劣った働き手である。ツァーリズムの体制があり、農奴制度の遺物が生きながらえているもとでは、そうならざるをえなかった。働くことを学ぶこと——ソヴェト権力はこの任務を、全面的に人民の前に提起しなければならない。この面での資本主義の最新の成果であるテーラー・システムは——資本主義のあらゆる進歩と同様に——、ブルジョア的搾取の洗練された残忍さと、一連のきわめて豊かな科学的成果——労働のさいの力学的運動の分析、むだでぎこちない動作の除去、より正しい作業方法の考案、記録と統制のよりよい方式の採用、等々における——とをあわせもっている。ソヴェト共和国は、この分野での科学と技術の成果のうちのすべての貴重なものを、ぜがひでも学びとらなければならない。社会主義が実現できるかどうかは、まさに、ソヴェト権力およびソヴェト的管理組織を資本主義の最新の進歩に結びつけることにわれわれが成功するかどうかにかかっている。ロシアでテーラー・システムの研究と教授、その系統的な実験と応用をやりはじめなければならない。それとともに、労働生産性の向上をめざすなかで、資本主義から社会主義への過渡期の特殊性を考慮に入れる必要がある。この特殊性は、一方では、競争の社会主義的組織化の基礎をきずくことを要求しているが、他方では、ゼリーめいた〔「軟弱な」の意〕プロレタリア権力の実践によってプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）のスローガンがけがされることがないように、強制を用いることを要求しているのである。

競争の組織化

社会主義についてブルジョアジーが好んで言いふらして

いるたわごとの一つに、あたかも社会主義者は競争の意義を否定するものであるかのようにいう主張がある。だが実際には、社会主義だけが、階級を、したがってまた大衆の奴隷化をなくすことによって、真に大衆的な規模での競争のための道をはじめて切りひらくのである。そして、ほかならぬソヴェト組織こそが、ブルジョア共和制の形式的な民主主義から管理〔統治〕への勤労大衆の実際の参加に移ることによって、はじめて競争を広範なものとするのである。これを政治の分野でおこなうことは、経済の分野でおこなうよりもずっと容易である。しかし社会主義の成功のためには、まさに後者こそ重要なのである。

公開制というような、競争の組織手段をとりあげてみよう。ブルジョア共和制はそれを形式的に保障するだけであって、実際には、新聞を資本に従属させ、「庶民」をくだらない扇情的な政治記事でおもしろがらせておいて、工場内で、また商取引や納品などのさいにおこなわれていることについては、「神聖な財産」を守護する「営業上の秘密」のヴェールで覆いかくしている。ソヴェト権力は、営業上の秘密を廃止して、新しい道に踏みだした。だが、経済的競争のために公開制を利用することでは、われわれはまだほとんどなにもしていない。徹頭徹尾うそつきで厚顔無恥な中傷をこととするブルジョア新聞を容赦なく弾圧するとともに、政治的な扇情記事やくだらない記事で大衆をおもしろがらせたり愚弄したりするのでなく、ほかならぬ日常の経済問題を大衆の審判にかけ、その真剣な研究を助けるような新聞を、つくりだす仕事がおこなわれるよう、系統的にとりくまなければならない。各工場、各村落は、ソヴェトの一般的な法規を自分なりに(「自分なりに」というのは、法規にそむいてという意味でではなく、それを実施する形態が多種多様だという意味であるが)適用する権利と義務、生産物の生産と分配を記録する問題を自分なりに解決する権利と義務をもつ、生産・消費コミューンである。資本主義のもとでは、それは個々の資本家、地主、富農の「私事」であった。ソヴェト権力のもとでは、それは私事ではなく、最も重要な国事である。

またわれわれは、コミューン間の競争を組織し、穀物、衣料、その他の生産の過程に報告制と公開制を導入し、無味乾燥で、生気のない、官僚的な報告を、生きいきとした実例に——いとわしいものも、心をひかれるものもふくめて——変えてゆくという、膨大で、困難な、だがそのかわりやりがいのある仕事に、まだほとんど着手していない。資本主義的生産様式のもとでは、個々の事例、たとえばどこかの生産組合の事例の意義は、どうしても極度に限られていた。そして、小ブルジョア的幻想だけが、篤志的施設

の示す模範の影響によって資本主義を「矯正する」ことを夢想することができたのである。政治権力がプロレタリアートの手に移り、収奪者が収奪されたのちには、事態は根本的に変化し、そして――著名な社会主義者たちが繰りかえし指摘したように――、模範の力がはじめて大量的作用を及ぼしうるようになる。模範的なコミューンは遅れたコミューンにたいして、訓育者、教師、牽引者の役割を果たさなければならないし、また果たすであろう。新聞は模範的なコミューンの成果を詳細に知らせ、その成功の原因や経営のやり方を研究するとともに、他方で、「資本主義の伝統」、すなわち無政府性、怠惰、無秩序、投機をかたくなに維持しているコミューンを「ブラック・リスト」にのせることによって、社会主義建設の道具としての役割を果たさなければならない。統計は、資本主義社会では、もっぱら「役人」ないしは少数の専門家の仕事であった。だがわれわれは、統計を大衆のなかにもちこみ、それを普及し、こうして勤労者が、どのように、どれだけ働かなければならないか、またどのように、どれだけ休むことができるかを自分で理解し見いだすことを、しだいに習得してゆくように、また個々のコミューンの経営の業務成績の比較が一般の興味と研究の対象になるように、そして優秀なコミューンがただちに報奨をうける（一定期間のあいだ労働日を短縮したり、賃金を引き上げたり、より大量の文化財あるいは美術品や高価品を供与するなどにより）ようにしなければならない。

新しい階級が社会の領導者、指導者として歴史の舞台に立ちあらわれるときには、いつも、一方ではきわめて激しい「揺れ」、振動、闘争および嵐の時期をともなわずにはおかないし、他方では、新しい客観的情勢に見あった新しいやり方の選択についての確信のない足どり、実験、動揺、逡巡の時期をともなわずにはおかない。滅びてゆく封建貴族は、彼らを打ち負かし駆逐しつつあったブルジョアジーにたいして、陰謀や、蜂起と復古の企てによって報復しただけでなく、王侯貴族や名門がもっていた何世紀もの訓練もなしに国家の「神聖な枢機」を不遜にもその手ににぎろうとする「成上り者」、「無礼者」の無能さ、拙劣さ、仕損じにたいして嘲笑をあびせかけることによっても報復した。それはちょうど、いま、権力をにぎろうとするロシアの労働者階級の「不遜な」試みにたいして、コルニーロフやケーレンスキー、ゴーツやマルトフの一味、ブルジョア的金儲けもしくはブルジョア的懐疑のこれらすべての英雄連中が報復しているのと同じである。

もとより、新しい社会階級が、しかもこれまで抑圧され、窮乏と無知によってうちひしがれていた階級が、新しい境

週に慣れ、それになじみ、自分の仕事を整備し、自分自身の組織者を登用することができるようになるまでには、数週間ではなく、長い月日が必要である。革命的プロレタリアートを指導する党に、幾百万、幾千万の市民を目あてとした大きな組織的企画の経験と熟練が生まれえなかったのは当然であり、ほとんど扇動に限られていた従来の習慣の改変がきわめて長期にわたる仕事であるのも、当然である。だが、この点に不可能なことはなにもない。われわれが変化の必要性をはっきりと認識し、その実現を固く決意し、偉大で困難な目的を追求するうえでのねばりづよさをもつようになれば、われわれはそれをやりとげるであろう。組織者的才能の持主は「人民」のなかに、すなわち、労働者と、他人の労働を搾取しない農民のなかに、大量にある。そういう人材を、資本は幾千となく押しつぶし、破滅させ、ほうりだしてきた。そしてそういう人材を見つけだし、はげまし、立ちあがらせ、登用することを、われわれはまだやれないでいる。しかし、もしわれわれが――革命の勝利にとって欠くことのできない革命的情熱のすべてをかたむけて――その習得にとりくむならば、われわれはそれを学びとるであろう。

　歴史上の奥ぶかくて力づよい人民運動のどれ一つとして、きたない泡をともなわずにすんだものはなかった。経験に乏しい革新者にまといつく山師や詐欺師、はったり屋やほら吹きなしに、ばかげた混乱や、ごたごたや、空騒ぎなしに、また二〇もの仕事をやろうとしてなに一つやりとげえないような個々の「指導者」の試みなしにすんだものはなかった。ベロルーソフからマルトフにいたるブルジョア社会の狆どもが、大きな古い森を伐るときに、よけいな木屑が出るごとに、金切り声をあげ、吠えたてるなら、かってにそうするがいい。プロレタリアートという象にむかって吠えたてればこそ、彼らは狆なのである。吠えるなら吠えるがいい。われわれは自分自身の道を歩むだろう。そして、真の組織者たち、健全な思考と実践上の敏活さをもった人人、社会主義への忠誠と、ソヴェト組織の枠内での数多くの人々の不屈で協力一致した共同作業を、大騒ぎなしに(しかも混乱や喧騒に抗して)組織する能力とを兼ねそなえた人々を、できるだけ注意ぶかく、また辛抱づよく、ためし、見わけるよう心がけるであろう。こういう人々だけを、何度もためしたのちに、最も簡単な任務からより困難な任務に移らせ、人民労働の指導者、管理の指導者という責任ある地位に登用しなければならない。われわれはまだこのことを習得していない。だが、われわれはそれを習得するであろう。

「整然とした組織」と執権

最近の（モスクワでの）ソヴェト大会の決議は、現時点の第一の任務として、「整然とした組織」をつくりだすことと規律を高めることとをあげている。(注) この種の決議には、いまではすべての人が喜んで「賛成し」、「署名する」。だが、それを実際におこなうためには強制――そして、まさに執権という形での強制――が必要だということについては、あまり深く考えないのが普通である。しかしながら、資本主義から社会主義への移行が強制なしに、執権なしに可能だと考えるならば、それは愚の骨頂であり、ばかげきったユートピア主義であろう。この小ブルジョア民主主義や無政府主義的なたわごとにたいして、マルクスの理論ははるか以前から、しかもまったくきっぱりと反対してきた。一九一七―一九一八年のロシアも、この点でのマルクスの理論をまざまざと、手にとるように、力づよく確証しており、この点でなお思いちがいできるのは、度しがたい愚か者か、真実を認めまいと頑固にきめこんでいる者だけである。コルニーロフ（彼をロシア型のブルジョア的カヴェニャクに見たてるならば）の独裁か、それともプロレタリアートの執権か――あらゆる戦争のうちで最も苦悩にみちた戦争によってつくりだされたひどい荒廃のもとで、異常に急激な転換をかさねながら異常に急速な発展をとげつつある国にとっては、これ以外の道は問題になりえない。中間的な解決はすべて、真実を語ることができず、自分にはコルニーロフが必要なのだと言うことができないブルジョアジーによる人民の欺瞞か、そうでなければ、民主主義派の統一とか、民主主義派の執権とか、一般民主主義戦線とか、その他のたわごとをしゃべりたてている小ブルジョア民主主義者、チェルノーフ、ツェレテーリ、マルトフらの一味の愚鈍さかの、どちらかである。中間的な解決がありえないということを、一九一七―一九一八年のロシア革命の経過からさえ学びとらなかった者には、あいそをつかすほかはない。

他方では、資本主義から社会主義に移行するさいには、いつでも、二つのおもな原因によって、もしくは二つのおもな方面において執権が必要であることが、容易に確認される。第一に、搾取者たちから彼らの富や、組織性と知識における彼らの優位を一挙に奪いとることはできず、したがって、彼らはかならずかなり長期にわたって憎むべき貧民の権力をくつがえそうと試みるであろうが、彼らの反抗を容赦なく抑圧することなしには、資本主義に打ち勝ってこれを根こそぎにすることはできない。第二に、すべての偉大な革命、とりわけ社会主義革命は、たとえ対外戦争が

ないとしても、国内の戦争、すなわち内乱なしには考えられないのであって、この内乱は、対外戦争より以上に大きな荒廃を意味し、動揺や一方の側から他方の側への寝返りが幾千件、幾百万件と起こることを意味し、このうえもない不確定さ、不均衡、混沌を意味するものである。そして、いうまでもなく、旧社会のあらゆる腐敗分子――彼らは不可避的にきわめて多数にのぼり、主として小ブルジョアジーと結びついているが（なぜなら、あらゆる戦争、あらゆる危機は、なによりも小ブルジョアジーを零落させ、破滅させるから）――は、このような深刻な変革にさいして「本性をあらわさ」ずにはおかない。ところで腐敗分子が「本性をあらわす」のは、犯罪や、無頼行為や、買収や、投機や、ありとあらゆる醜行の増加以外にはありえない。これを処理するためには時間が必要であり、鉄の腕が必要である。

歴史上の偉大な革命で、人民がこのことに本能的に気づかず、盗人を犯行現場で射殺するような有益な毅然さを示さなかったようなものは、一つもない。これまでの革命の不幸は、大衆のはりつめた気分を支え、腐敗分子を容赦なく抑圧する力を彼らにあたえる革命的情熱が、長つづきしなかったという点にある。大衆の革命的情熱がそのように長つづきしなかったことの社会的な、すなわち階級的な原因は、プロレタリアートが弱いことであった。ひとりこのプロレタリアートだけが（もしその数が十分に多く、自覚があり、規律を身につけているなら）、勤労被搾取者の多数者（もっと簡単に、平易に言うなら、貧民の多数者）を自分の側に引きつけ、すべての搾取者とすべての腐敗分子を完全に抑えつけるのに十分なだけ長期にわたって権力を維持することができるのである。

マルクスは、すべての革命のこの歴史的経験、この世界史的――経済的および政治的――教訓を総括して、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）という、簡潔で、鋭く、正確で、明瞭な定式をあたえた。そして、ロシア革命がこの世界史的な任務の実現に正しくとりくんだということは、ロシアのすべての民族と言語の人々にわたってのソヴェト組織の勝利の行進が証明したところである。なぜなら、ソヴェト権力はプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の組織形態にほかならず、幾千万の勤労被搾取者を、新しい民主主義に、国家の統治への自主的参加に引きあげる先進的階級の執権（ディクタツーラ）の組織形態にほかならないからである。そして、幾千万の勤労被搾取者は、自分自身の経験をつうじて、規律をもち自覚あるプロレタリアートの前衛を自分たちの最も信頼できる指導者と見ることを学びとるのである。

しかし、執権（ディクタツーラ）とは重大なことばである。そして重大な

ことばは、やたらにつかってはならない。執権は鉄の権力であり、搾取者や無頼漢を抑圧するにあたって革命的に大胆で、敏速で、容赦ない権力である。ところが、われわれの権力は極度に軟弱であり、しばしば鉄というよりゼリーに似ている。ブルジョア的および小ブルジョア的自然発生性がソヴェト権力にたいして二重のたたかいをいどんでいることを、一瞬たりとも忘れてはならない。すなわち、それは、一方では、サーヴィンコフ、ゴーツ、ゲゲチコーリ、コルニーロフらの一味のやり方で、陰謀や蜂起によって、また、そのけがらわしい「思想的」反映によって、すなわち、カデットや右派エス・エルやメンシェヴィキの印刷物で虚偽と中傷をまきちらすことによって、外側からはたらきかけている。他方では、この自然発生性は、買収をおこない、無規律、放縦、混乱を助長するために、あらゆる腐敗分子を利用し、あらゆる弱さを利用することによって、内側からはたらきかけている。われわれが、ブルジョアジーを完全に軍事的に制圧するようになればなるほど、小ブルジョア的無政府性の自然発生性はわれわれにとってより危険なものとなる。そして、宣伝と扇動だけによっては、競争を組織することだけによっては、組織者を選抜することだけによっては、この自然発生性とたたかうことはできない。このたたかいをすすめるには、強制をも用いることが必要である。

軍事的抑圧ではなく、管理が権力の基本的任務となるにつれて、現場での銃殺ではなく、裁判が抑圧と強制の典型的な現われとなってくる。この点でも革命的大衆は、一九一七年一〇月二五日以降正しい道に踏みだし、ブルジョア的＝官僚的裁判機構の解散にかんするいかなる布告よりもさきに、すでに自分たちの、すなわち労働者と農民の裁判所を組織しはじめることによって、革命の生命力を示した。だが、われわれの革命的人民裁判所は、極度に、信じられないほど弱体である。裁判所をなにかお役所的な、無縁のものと見る見方、地主やブルジョアジーのくびきから受けつがれたこのような人民の見方は、まだ最終的には打ち砕かれていないように感じられる。裁判所がほかならぬ貧民を一人のこらず国家統治に引きいれる機構である（なぜなら、裁判活動は国家統治の機能の一つだから）ということ、裁判所がプロレタリアートと貧農との権力機関であるということ、裁判所が規律を教えこむ道具であるということ、このことが十分に認識されていない。ロシアのおもな災厄が飢えと失業にあるとすれば、これらの災厄に打ちかつことはどのような衝動的行動をもってしてもできないのであって、人々のためのパンと工業のためのパン（燃料）の生産を増大させ、それらを適時にはこんで正しく分配するた

めの全面的、包括的、全人民的な組織と規律によるほかはないということ、だから、飢えと失業の苦しみにたいしては、どの工場、どの経営、どの事業においてであるかを問わず、労働規律に違反している者全員に責任があるということ、この点で責任ある者を見つけだし、裁判にかけ、容赦なく処罰することができなければならないということ、この簡単で明白な事実が十分に認識されていないのである。いまわれわれが最もねばりづよくたたかいつづけなければならない小ブルジョア的自然発生性は、ほかでもなく、組織と規律の面における全員一人ひとりの放縦が、飢えや失業と国民経済的および政治的に結びついているという認識が弱いことのうちに現われており、自分はすこしでもよけいに取りこもう、あとは野となれ山となれという小所有者的な考え方が根づよく維持されていることのうちに現われている。

大規模資本主義がつくりだした組織体の経済的諸連関を、おそらく他のなによりもはっきり体現している鉄道事業では、放縦という小ブルジョア的自然発生性とプロレタリア的組織性とのたたかいは、とりわけ鮮明に現われている。「管理者的」分子からは怠業者や収賄者が大量に出ており、プロレタリア的分子の最良の部分は規律のためにたたかっている。だが、どちらの分子のあいだにも、もちろん、多くの動揺する者、「弱い」者がいる。彼らは、それが正しく機能するかどうかによって飢えと失業にたいする勝利がきまるこの機構全体をだめにするという代価をはらってえられる、投機や賄賂や個人的利益の「誘惑」に抗しきれないのである。

こういう基盤のうえで、鉄道管理についての最近の布告、すなわち、個々の指導者に執権者的全権（あるいは「無制限の」全権）［二五］をあたえることについての布告をめぐって展開されたたたかいは、特徴的である。小ブルジョア的放縦の意識的な（そしておそらくは、より多くの部分が無意識的なのだろうが）代表者たちは、個々の人間に「無制限の」（すなわち執権者的な）全権をあたえることを、合議制の原則からの、民主主義からの、ソヴェト権力の原則からの、逸脱と見たがった。左派エス・エルのあいだでは、執権制にかんする布告に反対して、まったくのならず者的な扇動が、すなわち「取りこもう」という醜い本能や小所有者的志向にうったえた扇動が、そこここで展開されてきた。真に巨大な意味をもつ問題が提起されたのだ。第一に、執権者（ディクタトル）としての無制限な全権をあたえられた個人を任命することが、一般にソヴェト権力の根本原則と両立しうるかどうかという、原則的な問題である。第二に、この事例――この先例と言ってもよい――が、現在の具体的時点に

おける権力の特殊な任務とどのような関係にあるか、ということである。これらの問題はともに、きわめて注意ぶかく検討されなければならない。

革命運動の歴史において、個々の人間の執権（ディクタツーラ）がきわめてしばしば革命的階級の執権（ディクタツーラ）の表現であり、担い手であり、媒介者であったことについては、議論の余地ない歴史上の経験がものがたっている。個々の人間の執権（ディクタツーラ）は、疑いもなくブルジョア民主主義と両立していた。だが、この点では、ソヴェト権力にたいするブルジョア的誹謗者たちは、そしてまた彼らの小ブルジョア的受売人たちは、いつも手品をやってのけるのである。彼らは、一方では、ソヴェト権力をたんになにかばかげた無政府的な、野蛮なものだと宣言するだけで、われわれがおこなう歴史的比較や、ソヴェトが民主主義のより高度の形態であり、さらにそれ以上のものでさえあるという、つまり民主主義の社会主義的形態の端緒であるという理論的論証をすべて極力避けてとおろうとする。そして他方では、彼らはわれわれにたいしてブルジョア民主主義よりももっと高度な民主主義を要求し、われわれにむかって、君たちの、ボリシェヴィキ的な（すなわち、ブルジョア的でなく、社会主義的な）ソヴェト民主主義と個人的執権（ディクタツーラ）とは絶対に両立しえない、と言うのである。

この議論はなっていない。われわれが無政府主義者でないならば、われわれは資本主義から社会主義への移行のためには国家が、すなわち強制が必要であることを、認めなければならない。強制の形態は、その革命的階級の発展の度合によってきまり、また、たとえば、長期の反動的な戦争の遺産のような特殊な事情によってきまり、さらにブルジョアジーや小ブルジョアジーの反抗の形態によってきまる。だから、ソヴェト的（すなわち社会主義的）民主主義と個々の人間が執権者的権力を行使することとのあいだには、どのような原則的矛盾も断じてない。プロレタリア執権（ディクタツーラ）とブルジョア執権（ディクタツーラ）との違いは、前者が搾取されている多数者のために搾取している少数者にたいして打撃をくわえるという点にあり、さらにまた、プロレタリア執権（ディクタツーラ）は、勤労被搾取大衆によって実現されるだけではなく、まさにそれらの大衆を目ざめさせ、歴史的創造に立ちあがらせるようにつくられている組織（ソヴェト組織はこの種の組織にはいる）によっても――ときには個々の人間を媒介としても――実現されるという点にある。

第二の問題、現時点の特殊的任務という観点から見たほかならぬ一個人の執権者的権力の意義については、およそ大規模機械制工業が――すなわち、社会主義のほかならぬ物質的、生産的源泉であり基礎であるものが――、幾百、幾千、幾万もの人々の共同作業を指揮する意志の無条件的

で厳格な統一を要求するのだ、と言わなければならない。技術的にも、経済的にも、歴史的にも、この必要性は明白であり、社会主義について考えたすべての人が、つねにそれを社会主義の条件として認めてきた。だが、きわめて厳格な意志の統一はどうすれば確保できるだろうか？　それは、幾千人もの意志を一人の意志に従わせることによってである。

この服従は、共同作業の参加者の自覚と規律が理想的である場合には、むしろオーケストラ指揮者のおだやかな指揮を思わせるかもしれない。もし理想的な規律や自覚がない場合には、それは執権（ディクタツーラ）という鋭いかたちをとることもありうる。だが、いずれにしても、大規模機械制工業の型で組織されている作業過程がうまくいくためには、単一の意志への絶対的服従が無条件に必要である。鉄道にとっては、それは二重にも三重にも必要である。そして、一つの政治的任務から外見上それとすこしも似ていない別の政治的任務へのこうした移行こそが、現在の時点の特異性のすべてをなしているのである。革命は、大衆が強制のもとで従わせられてきた最も古い、最も頑強な、最も重苦しい桎梏をたったいま打ち砕いたばかりである。それは、きのうのことであった。だが、きょうは、この同じ革命が、まさに革命の発展と強化のために、まさに社会主義のために、労働過程の指導者の単一の意志への大衆の絶対的服従を要求している。もちろん、このような移行は一挙にはおこなわれえない。もちろん、この移行はきわめて大きな衝撃や激動、古いものへの逆もどりや人民を新しいものへとみちびくプロレタリア前衛の精力の最大の緊張という代価を払ってはじめて、実現できるものである。『ノーヴァヤ・ジーズニ』や『フペリョード』(二七五)、『デーロ・ナローダ』や『ナーシ・ヴェーク』(二七六)の俗物的ヒステリーにおちこんでいる者は、この点をよく考えないのである。

勤労被搾取大衆の平均的な、普通の人物の心理をとりあげて、それを、彼の社会生活の客観的な物質的条件と比較してみたまえ。十月革命以前には、彼は、有産階級、搾取階級が連中にとってほんとうに重大ななにものかを実際に犠牲にし、彼に譲歩するのを、現実に見たことはなかった。彼は、何度も約束された土地と自由が自分にあたえられ、平和があたえられ、そして「大国的地位」や大国間の秘密条約の利益が犠牲にされ、資本と利潤が犠牲にされるのを、まだ見たことがなかった。彼自身が力ずくでそれをつかみとり、ケーレンスキー、ゴーツ、ゲゲチコーリ、ドゥートフ、コルニーロフらの一味からとりあげたものをやはり力ずくで守らなければならなかった一九一七年一〇月二五日以後にはじめて、彼はそれを見たのである。一定期間、彼

のすべての注意、すべての考え、すべての精神力は、ひと息つくことに、手足をのばすことに、のびのびとふるまうことに、そして、いまや手にすることができるようになったが、打倒された搾取者たちからはあたえられなかった生活上の身ぢかな便益を手にとることにだけ向けられていたのも、当然である。また、大衆の普通の人物が、そのようにただ「つかみどり」、とりこみ、ひったくるだけではだめであって、それは荒廃をひどくし、破滅に向かわせ、そしてコルニーロフ一味の復帰をもたらすものであることを、みずからさとるだけでなく、納得するだけでなく、それを肌で感じるようになるまでには、一定の時間が必要であるのも、当然である。普通の勤労大衆の生活条件における(したがってまた心理における)こういう方向への転換は、まだやっと始まったばかりである。こうしてわれわれの全任務は、被搾取者の解放への志向の意識的な表現者である共産主義者(ボリシェヴィキ)の党の任務は、この転換を認識し、その必然性を理解すること、打ちひしがれ疲れはてて活路を求めている大衆の先頭に立つこと、大衆を正しい道にそって、労働規律の道にそって、また、作業条件についての集会開催の任務と、作業時におけるソヴェト指導者、執権者(ディクタトール)の意志への絶対的服従という任務とを調和させる道にそって、みちびいてゆくことである。

ブルジョアや、メンシェヴィキや、ノーヴァヤ・ジーズニ派は、「集会ずき」をあざわらっており、さらには悪意をこめてこれに文句をつけることもいっそうしばしばである。彼らは混乱や、ごたごたや、小所有者的利己主義の爆発だけしか見ないのである。しかし、集会をひらかずには、被抑圧大衆は、搾取者によって強制された規律から、自覚した、自発的な規律へと移ることがけっしてできないであろう。集会の開催は、勤労者の真の民主主義であり、彼らが手足をのばすことであり、彼らが新しい生活に目ざめることであり、彼ら自身が悪党ども(搾取者、帝国主義者、地主、資本家)を一掃してきれいにした舞台に第一歩を踏みだすことである。そして、彼らはこの舞台を、自分なりのやり方で、自分たちのために、他人の、旦那の、ブルジョアの権力ではなく、自分たちの、ソヴェトの権力の原則にもとづいて整備することを学ぼうと欲している。労働規律のより高い形態へ、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の必要性という思想の意識的な習得へ、また作業時におけるソヴェト権力の代表者の単独の命令にたいする絶対的服従へ確実に移行することが可能となるためには、まさに、搾取者にたいする勤労者の十月の勝利が必要であったし、新しい生活条件を、新しい任務をはじめに勤労者自身が討議するようになる歴史的一時期が必要であった。

この移行がいまや始まったのである。
われわれは革命の第一の任務を首尾よく解決した。われわれは、勤労大衆が自分自身のうちに革命の成功の基本条件――搾取者の打倒のために搾取者に反対して力を合わせること――を、どのようにつくりあげたかを見た。一九〇五年の十月[38]、一九一七年の二月と十月というような段階は、世界史的な意義をもっている。
われわれはまた、ほかならぬ社会の「下層」を目ざめさせ、立ちあがらせるという、革命の第二の任務を首尾よく解決した。彼らは搾取者によって下へ押しやられていたのだが、一九一七年一〇月二五日以後にやっと、搾取者を打倒して自分なりのやり方で、周囲を見まわし生活を整えはじめる自由をすっかり手に入れたのである。ほかならぬ最も抑圧されしいたげられていた、そして最も訓練されていない勤労大衆が集会をもつこと、彼らがボリシェヴィキの側へと移ったこと、彼らがいたるところで自分たちのソヴェト組織を設立したこと――これが革命の第二の偉大な段階であった。
第三の段階が始まりつつある。われわれ自身がかちとったもの、われわれ自身が布告し、法制化し、審議し、立案したものを打ちかためること――日常の労働規律という確実な形態のうちに打ちかためることが、必要である。これは、最も困難な、だが最もやりがいのある任務である。なぜなら、この任務の解決によってはじめてわれわれは社会主義的秩序を手に入れるからである。嵐のような、春の大水のように湧きでる、あらゆる岸からあふれだすような、勤労大衆の集会民主主義を、作業時における鉄の規律に、作業時における一人の人間の意志、ソヴェト指導者の意志への絶対的服従に、結びつけることを習得することが必要である。
われわれはそれをまだ習得していない。
われわれはそれを習得するであろう。
ブルジョア的搾取の復活は、きのうは、コルニーロフ、ゴーツ、ドゥートフ、ゲゲチコーリ、ボガエフスキーらの一味という形でわれわれを脅かしていた。われわれは彼らを打ち負かした。この復活、まったく同じ復活が、きょうは別の形でわれわれを脅かしている。それは、小ブルジョア的な放縦と無政府主義の自然発生性、小所有者的な「われ関せず」主義という形で、プロレタリア的規律性にたいするこの自然発生性の日常の、些細な、だがそのかわりにおびただしい数の攻撃や進攻という形で、われわれを脅かしている。われわれは、小ブルジョア的無政府主義のこの自然発生性にたいして打ちかたたなければならないのであって、そしてわれわれはそれに打ちかつであろう。

ソヴェト組織の発展

ソヴェト民主主義——すなわち、具体的に、現在適用されているかたちのプロレタリア民主主義——の社会主義的性格は、次の諸点にある。第一に、選挙人は勤労被搾取者大衆であって、ブルジョアジーは排除されている。第二に、選挙にかんするあらゆる官僚的な形式主義や制限は消滅していて、大衆自身が選挙の手続きや期日を決定し、被選出者をリコールする完全な自由をもっている。第三に、勤労者の前衛である大工業のプロレタリアートの最良の大衆組織がつくりだされており、そしてこの組織はこのプロレタリアートに、きわめて広範な被搾取大衆を指導し、彼らを自主的な政治生活に引きいれ、彼らを彼ら自身の経験にもとづいて政治的に教育することを可能にしている。こうして、住民が実際に一人のこらず管理することを学び、管理しはじめるところへ、はじめて近づきつつある。

これが、ロシアで実施されるようになった民主主義の主要な特徴である。この民主主義は、より高度な型の民主主義であり、民主主義のブルジョア的歪曲との決裂であり、社会主義的民主主義への、国家の死滅が始まることを可能にする状態への移行である。

もとより、小ブルジョア的組織解体の自然発生性（それは、いかなるプロレタリア革命においてもなんらかの程度でかならず現われるものであるが、わが国の革命では、この国の小ブルジョア的な性格と後進性のゆえに、また反動的戦争の結果として、とりわけ強く現われている）は、ソヴェトにもその刻印を押さないではすまない。

ソヴェト組織とソヴェト権力を発展させることに、不断にはげまなければならない。ソヴェトの代議員を「国会議員」に変質させるとか、あるいは他方では官僚に変質させようとする、小ブルジョア的傾向が存在する。ソヴェトのすべての代議員を実際に管理〔統治〕に参加させることによって、これとたたかわなければならない。ソヴェトの部課が多くの場所で委員部（コミッサリアート）としだいに一体となってゆく機関に変わりつつある。われわれの目標は、貧民を一人のこらず実際の管理に参加させるようにすることであり、その実現へのあらゆる歩み——それは多様であればあるほどよい——は、詳細に記録され、研究され、体系化され、より広範な経験によって検証され、法制化されなければならない。われわれの目標は、すべての勤労者が、八時間の生産活動の「日課」を終えたあと、国家的責務を無償で遂行することである。そこにまで移行することは、とくに困難である。だが、この移行のうちにのみ、社会主義を最終的に

打ちかためることとの保障がある。この変化は新規で困難であるため、当然、多くのいわば手さぐりでの歩みや、多くのあやまち、動揺が生じるが、そうしたことなしにはどのような急激な前進もありえない。社会主義者と思われたがっている多くの人の見地からすれば、当面の情勢のいっさいの特異性は、人々が資本主義と社会主義を抽象的に対置させることに慣れて、これら両者のあいだに意味ありげに「飛躍」ということばを入れることのうちにある(一部の人は、エンゲルスから読みかじったことばのかけらを思いだし、よりいっそう意味ありげに「必然の国から自由の国への飛躍」とつけくわえている)(三七)。社会主義の教師たちは世界史的な転変という見地から転換を「飛躍」とよんだのだということ、またこの種の飛躍は一〇年あるいはそれ以上にわたる期間をふくむものだということ、社会主義について「本で読んだ」ことはあるがけっして真剣に問題を究明したことがないいわゆる社会主義者の大多数は、このことに考えおよばないのである。当然のことだが、このような時期には、悪名高い「インテリゲンツィア」のなかから無数の泣き女が出てくる。ある者が憲法制定議会をいたんで泣くと、別の者がブルジョア的規律のことで泣き、第三の者は資本主義的秩序のことで、第四の者は教養ある地主のことで、第五の者は帝国主義的大国の地位をいたんで泣く、その他等々というぐあいである。

偉大な飛躍の時代の真に興味ぶかい点は次のことにある。すなわち、古いものの破片がたくさんあり、それらがときには新しいものの芽ばえ(いつもすぐ目につくとはかぎらない)よりもいっそう早く積まれてゆくため、発展の路線ないし連鎖のなかで最も本質的なものを選別する能力が要求されるという点である。革命の成功のためには、こういう破片をできるだけ多く積みあげることが、すなわち、古い機関をできるだけ多く爆破することが、なににもまして重要であるような歴史的時期がある。また、十分に爆破されたのでこんどはその破片を地上からとりかたづけるという「散文的な」(小ブルジョア的革命家にとっては「退屈な」)仕事が現われる時期がある。さらにまた、がらくたがまだよくかたづけられていない地面の上で、破片の下から生まれでようとしている新しいものの芽ばえを、丹精こめてそだてることがなによりもたいせつな時期がある。

ただ一般に革命家であったり、社会主義の支持者であったり、共産主義者であったりするだけでは、十分でない。その時どきの特殊な時点で、鎖の特殊な一環を見いだすこと、すなわち、鎖全体を掌握して次の環への移行を確実に準備するために全力でしっかりとつかむ必要のある環を、見つけだすことができなければならない。そのさい、諸事

件の歴史的連鎖においていろいろな環がならぶ順序、それらの形、それらのつながりかた、それら相互間の相違は、鍛冶屋がつくる普通の鎖の場合のように簡単なものでもあどけないものでもない。

ソヴェト組織の官僚主義的歪曲との闘争は、ソヴェトと、勤労被搾取者、という意味での「人民」とのあいだの結びつきの堅固さによって、またこの結びつきの柔軟さと弾力性によって保障される。ブルジョア議会は、たとえ民主主義の点で世界最良の資本主義的共和国のものであっても、貧民はけっして「自分の」機関とは考えない。だが、ソヴェトは、労働者と農民の大衆にとって「自分たちのもの」であり、他人のものではない。シャイデマン流の、あるいはほとんど同じことだがマルトフ流の現代「社会民主主義者」たちは、ソヴェトを嫌悪し、上品なブルジョア議会あるいは憲法制定議会に心をひかれているが、それは、六〇年まえに、トゥルゲーネフが穏健な君主制的・貴族制的憲法に心をひかれ、ドブロリューボフやチェルヌィシェフスキーの百姓民主主義を嫌悪したのとちょうど同じである。（二〇）

ほかでもなくソヴェトが勤労「人民」に密着しているということが、リコールその他の下からの統制の特殊な形態をつくりだしているのだが、これらの形態をいまとくに熱をいれて発展させなければならない。たとえば、国民教育の分野でのソヴェト権力の活動を審議し、統制するための、ソヴェト選挙人とその代議員との定期的協議としての国民教育会議（ソヴェト）は、完全な共鳴と支持に値する。ソヴェトをなにか凝結した自足的なものに変えてしまうほど、愚かなことはない。いまわれわれが苛酷なまでに毅然とした権力をきっぱりと支持し、純執行的な諸機能の特定の時点では、特定の作業過程について個々の人間の独裁（ディクタツーラ）をきっぱりと支持する必要があればあるだけ、ソヴェト権力をゆがめるどんなに小さな可能性をもなくし、官僚主義の雑草を繰りかえし、うまずたゆまず取りのぞくために、下からの統制の形態と方法は、いよいよ多様でなければならない。

結び

国際関係では、ただならず重大な、困難な、そして危険な状態。迂回し、後退することとの必要性。西欧で苦痛なほど長期にわたって熟しつづけている革命の新しい爆発を待ちうけている時期。国内では、緩慢な建設と容赦ない「引きしめ」の時期。また、小ブルジョア的放縦と無政府性の危険な自然発生性にたいする、プロレタリア的なきびしい規律性の長期にわたる頑強な闘争の時期。簡単にいえば、これらが、社会主義革命において、われわれが際会してい

る特殊な局面の特徴点である。これが、諸事件の歴史的連鎖のなかで、この次の環——それは特別の輝き、国際プロレタリア革命の勝利の輝きをもってわれわれを引きつけているのだが——へと移行するときまで任務に耐えうるために、われわれがいま全力をあげてしっかりつかまえなければならない環である。

試みに、いま際会している局面の特殊性から出てくる、迂回するとか、後退するとか、時を待つとか、徐々に建設するとか、容赦なく引きしめるとか、きびしく規律をただすとか、放縦さを打ち砕くとか……いうスローガンを「革命家」というものについての普通の、世間に通用している概念とくらべてみたまえ。若干の「革命家」たちが、これを聞いて高潔な怒りの念におそわれ、われわれにむかって、これは十月革命の伝統を忘れるものだ、ブルジョア専門家との協調主義だ、ブルジョアジーとの妥協だ、小ブルジョア性だ、改良主義だ、その他等々と言ってわれわれを「どやしつけ」はじめるとしても、これは驚くべきことだろうか？

これらのへぼ革命家たちの不幸は、彼らのうち、この世で最良の動機にうごかされていて、社会主義の大業にたいして無条件に忠実な者ですら、反動的で不幸な戦争によっていためつけられ、先進諸国にはるかに先がけて社会主義革命を始めた後進的な国が、どうしても経過しなければならなかった特殊な、とくに「不愉快な」状態についての理解が足りず、困難な移行の困難な諸時点における忍耐が足りないことにある。左派エス・エルの党がわが党にたいして、こういう種類の「正式の」反対をおこなっているのも、当然である。集団的および階級的な型からの個人的な例外はもちろんあるし、今後もつねにあるだろう。だが、社会的な型は残る。純粋にプロレタリア的な住民よりも小所有者的な住民のほうがはるかに優勢な国では、どうしてもプロレタリア的革命家と小ブルジョア的革命家とのあいだの相違が現われざるをえないだろうし、ときにはきわめて鋭く現われるであろう。小ブルジョア的革命家たちは、事態の転変があるごとに動揺し、ぐらつく。彼らは一九一七年三月には熱烈に革命的であったが、五月には「連立」を賛美するようになり、七月にはボリシェヴィキを憎悪し（またはボリシェヴィキの「冒険主義」を慨嘆し）、一〇月末にはボリシェヴィキから用心ぶかく遠ざかり、一二月にはボリシェヴィキを支持し、そして、最後に一九一八年の三月と四月には、こういう型の人物はなによりも頻繁に、軽蔑した調子で顔をしかめ、こう言うのである、「自分は『有機的な』仕事や、実用主義や、漸進主義の賛歌をうたう連中とは違うのだ」と。

こういう型の人物が出てくる社会的源泉は、戦争の惨禍や、突然の零落や、飢えと荒廃の空前の苦しみのために狂乱し、ヒステリックにもがきながら活路と救いを求め、プロレタリアートへの信頼および支持と、絶望の発作とのあいだをゆれうごく小経営主である。こういう社会的基盤のうえにはどのような社会主義も建設できないということを、はっきり理解し、しっかり会得しなければならない。動揺することなく自分の道を歩み、最も困難な、苦しい、そして危険な移りゆきにさいしても落胆したり絶望におちいったりしない階級だけが、勤労被搾取大衆を指導してゆくことができるのである。われわれにはヒステリックな衝動は不要である。われわれに必要なのは、プロレタリアートの鉄の部隊の整然とした歩調である。

一九一八年四月一三日から二六日のあいだに執筆
一九一八年四月二八日に新聞『プラウダ』第八三号
および新聞『イズヴェスチヤ』第八五号付録に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三六巻、一六五―二〇八ページ所収
邦訳全集、第二七巻、二四一―二八〇ページ所収

「左翼的」幼稚さと小ブルジョア性について

ちっぽけな「左翼共産主義者」のグループが雑誌『コムニスト』[182]（第一号、一九一八年四月二〇日）と『テーゼ』を出したことは、ソヴェト権力の当面の任務にかんする小冊子のなかで私が述べたことを、じつによく裏づけてくれる。ときとして「左翼的」スローガンのかげに隠された小ブルジョア的放縦の擁護が素朴きわまるものであることを――政治文献のなかで――これ以上まざまざと裏づけてくれるものは、望んでも得られないだろう。「左翼共産主義者」の議論は、現在の情勢に特徴的なものであるから、これを取りあげるのは有益であり必要である。彼らの議論は、現情勢の「核心」を非常にはっきりと――その否定面から――明らかにしてくれる。それは教訓にみちている。というのは、彼らは情勢を理解できなかった者のなかでも最も

優秀な人々であって、知識にかけても忠誠さにかけても、同じような誤りをおかしたそんじょそこらの連中、つまり左派エス・エルよりも、ずっとずっと程度が高いからである。

一

ひとかどの政治勢力——あるいは、政治的役割を果たすと自任している勢力——として、「左翼共産主義者」のグループは、『現情勢にかんするテーゼ』をあたえてくれた。自分の見解と戦術の基本について、首尾一貫したまとまりのある叙述をあたえること、これはマルクス主義者のりっぱな習慣である。ところがマルクス主義者のこのりっぱな習慣が、わが「左派」の誤りを暴露するのに役だったのだ。というのは、論証をあげようとすれば——空疎なお談義をするのではなく——、それだけでもう論証がなりたちえないことをさらけだすからである。

まず目につくのは、ブレスト講和の締結は正しかったかどうかという古くさい問題について、ほのめかしや暗示や逃げ口上がふんだんに出てくることである。「左派」は、この問題を正面きって提起する決心がつかなかった。そこで、彼らはこっけいな悪あがきをやって、論拠に論拠を積みかさね、いろいろな理由づけをあさりまわり、「一方では」、「他方では」といったありとあらゆる言い分をさがしだし、あらゆる論点や、その他いろんなことについて考えをくりひろげているのだが、彼らが自分で自分をやっつけていることは、見ないようにつとめている。党大会で講和賛成二八票にたいし講和反対は一二票であったという数字を、「左派」はぬけ目なくあげているが、ソヴェト大会のボリシェヴィキ代議員団の数百票のうち彼らが集めたのは一〇分の一にみたなかったことについては、つつましく口をつぐんでいる。講和を通過させたのは「疲れきった階級脱落者」で、講和に反対したのは「経済的にずっと生活力のある、穀物もはるかによく供給されている南部諸州の労働者と農民であった」という「理論」がつくりだされている。……これを笑わないでいられようか？　全ウクライナ・ソヴェト大会の講和賛成の表決については一言も述べず、講和に反対であった、ロシアの典型的な小ブルジョア的な、階級を脱落した政治的混合体（左派エス・エルの党）の社会的、階級的性格については、かたことも語らない。「科学性をよそおった」こっけいな説明で自分らの失敗を隠し、事実を隠そうとする、まったく幼稚なやり方だ。事実をよせあつめただけでも、小ブルジョア的な革命的空文句のスローガンをかかげて講和に文句をつけたのは、ま

さに階級を脱落した、インテリゲンツィア的な党「首脳者」や上層部であって、講和を通過させたのは労働者と被搾取農民の大衆であったことがわかっただろうに。

戦争と平和の問題については、「左派」の上記のあらゆる言明や逃げ口上をつらぬいて、やはり単純明白な真実が現われてくる。テーゼの筆者たちも、次のことを認めざるをえない。「講和の締結は、国際的な取引をやろうとする帝国主義者の志向を、さしあたり弱めた。」（「左派」のこの記述は正確を欠いている。だが、ここで不正確な点をとやかく言っている余裕はない）「講和の締結は、すでに帝国主義列強間の格闘を激化させるにいたった。」

これこそが事実である。これこそが決定的な意義をもっている。だから、講和締結に反対した者は、客観的には帝国主義の手に踊らされた道具だったのであり、彼らのわなにかかっていたのである。なぜなら、何ヵ国かをまきこむ国際社会主義革命が、国際帝国主義を打ち負かすことができるほど強力な革命が勃発するまでは、一国で（とくに遅れた一国で）勝利した社会主義者の直接の責務は、帝国主義の巨人どもとの戦いに応じないことであり、戦いを避ける努力をすることであり、帝国主義者どうしの格闘がさらに彼らを弱め、他の諸国での革命をさらに近づけるまで、時を待つことである。この単純な真理を、わが「左派」は、一月にも二月にも三月にも理解できなかった。彼らはいまでもそれを公然と認めることを恐れている。この真理は、彼らの支離滅裂な「一方ではこれを承認しないわけにいかないし、他方ではこれも認める必要がある」をつらぬいて現われてくるのである。

「左派」はテーゼのなかでこう書いている。

「次の春と夏のあいだに帝国主義体制の崩壊が始まるにちがいない。戦争の現局面でドイツ帝国主義が勝利する場合にも、この崩壊はおそらくさきにもちこされるだけであって、そのときにはもっと激烈な形態で発現するであろう。」

あれこれと科学性をてらっているにもかかわらず、ここでの定式はますます幼稚で不正確である。これこれの年の春と夏または秋と冬に「崩壊が始まる」「にちがいない」ということを科学がきめることができるかのように科学を「理解する」のは、子どものもちまえだ。

これは、知ることのできないものを知ろうとするこっけいな骨おりだ。まじめな政治家なら、「体制」のなんらかの崩壊がいつ「始まるにちがいない」などと、けっして言いはしない（体制の崩壊はすでに始まっていて、いま問題になっているのは個々の国で爆発の起こる時機のことなのだから、なおさらである）。しかし、どうしようもないほ

ど幼稚な定式をつらぬいて、争う余地ない真理が現われてくるのだ。その真理とは、講和とともに「息つぎ」が始まってから一ヵ月を経過したいまでは、われわれは、他のより先進的な諸国での革命の爆発に、一ヵ月まえ、一ヵ月半まえよりも近づいている、ということである。

つまり、どうなのか？

つまり、はったりの好きな連中にむかって、力関係を評価することができなければならない、社会主義がまだ弱く、社会主義にとって戦いの形勢が明らかに不利なときに、社会主義との戦いをやりやすくしてやって、帝国主義者の手助けをしてはならないと、口を酸っぱくして説いた講和賛成論者は、完全に正しかったし、歴史によってその正しさが実証されたのである。

ところが、わが「左翼」共産主義者は――自分たちにプロレタリア的要素がとくに少なく、小ブルジョア的要素がとくに多いために、彼らはまた「プロレタリア」共産主義者と名のることがお好きだが――力関係についても、力関係の評価についても、考えるすべを知らないのだ。ここにマルクス主義とマルクス主義的戦術の核心があるのだが、彼らは次のような「高慢ちきな」文句でこの「核心」をよけてとおるのである。

「……非行動的な『平和の心理』が大衆のなかに固着したのが、現政治情勢の客観的事実である。……」

これこそまさに珠玉の言だ！　数ある戦争のなかでも最も惨苦にみちた、最も反動的な三年間の戦争ののちに、人民は、ソヴェト権力と大言壮語に堕することとのないその正しい戦術のおかげで、ほんのちょっぴりの、まったくわずかな、不たしかで完全にはほどとおい息つぎを得たのだが、「左翼」インテリゲンツィアは、自分にほれこんだナルキッソスの思いあがりぶりで、意味深長に仰せられる。「非行動的な（!!!???）平和の心理が大衆のなかに（???）固着した（!!!）」と。私が党大会で、「左派」の新聞や雑誌は『コムニスト』と名のらないで『シリャフチチ』と名のるべきだと言った(三)のは、まちがっていただろうか？

勤労被搾取大衆の生活条件と心理をすこしでも理解している共産主義者なら、「平和の心理」を「非行動的」と言い、厚紙製の剣を振りまわすことを「行動的」だと考えるような、お坊っちゃんかシリャフチチの気分をもった典型的なインテリゲンツィア、小ブルジョア、階級脱落者のこの見地に転落することが、はたしてありえようか？　というのは、三年間の屠殺にいためつけられた国民は、息つぎをしなければ戦うことはできないし、全国民的規模で戦争を組織する力がなければ、戦争はプロレタリア的な鉄の規律ではなしに、たえまなく小所有者的な退廃の心理を生み

だすという、ウクライナの戦争でいま一度立証された周知の事実を、わが「左派」が回避するのは、それこそ厚紙製の剣を振りまわすというものだからである。プロレタリア的な鉄の規律やそれをつちかうことなど、わが「左派」には思いもおよばぬことで、彼らには階級から脱落した小ブルジョア・インテリゲンツィアの心理が骨の髄までしみこんでいることは、雑誌『コムニスト』の随所に見られるところである。

二

だが、もしかすると、「左派」が戦争について空文句を弄するのは、それこそ子どもっぽい血気のいたりというもので、しかもその血気は過去にむけられたものであり、したがってすこしも政治的意義をもたないものではなかろうか？　そう言ってわが「左派」を弁護する者がある。だが、それはまちがっている。もし政治的指導をおこなう資格があると自任するなら、政治的任務をよく考えぬくことができなければならないのだが、その点が欠けているために、「左派」は無定見な動揺の唱道者になってしまうのである。その動揺のもつ意義は、客観的にはただ一つ、つまり、その動揺によって、「左派」は、ロシア・ソヴェト共和国を挑発して明らかに不利な戦闘をやらせようとする帝国主義者の手助けをしているのであり、われわれをわなにかけようとする帝国主義者の手助けをしているということである。聞きたまえ。

「……ロシアの労働者革命は、国際革命の道からそれ、たえず戦闘を回避しては国際資本の攻撃を前にして退却し、『祖国の資本』に譲歩をかさねることによっては、『身を全うする』ことはできない。

この観点からみて必要なことは、ことばによる国際的な革命的宣伝と行為によるそれとを結びつける断固たる階級的国際政策をとり、国際社会主義との（国際ブルジョアジーとのではなしに）有機的連繫を強化することである。……」

ここにふくまれている国内政治の分野への攻撃については、あらためて論じることにする。ところで、対外政治の分野でのこのほしいままな大言壮語――実行のうえでの臆病さをともなった――を見てみたまえ。およそ現情勢のもとで帝国主義者の挑発の道具となり、彼らのわなに引きこまれることを欲しない者には、どんな戦術が義務づけられているのか？　およそ政治家たるものは、この問いに明瞭率直な回答をあたえなければならない。わが党の回答は周知のとおり、現情勢のもとでは退却する、戦闘を避けると

いうにある。わが「左派」はこれと反対のことを言う決心はつかないので、あらぬかたに空砲をはなつ。「断固たる階級的国際政策を」と!!

これは大衆を欺瞞するものである。いま戦争を欲するのなら、はっきりとそう言いたまえ。いま退却を欲しないのなら、はっきりとそう言いたまえ。でなければ、君たちは、君たちの客観的な役割からみて、帝国主義者の挑発の道具である。そして君たちの主観的な「心理」は、怒りくるった小ブルジョアの心理だ。この小ブルジョアは、プロレタリアが退却をやっており、しかも組織だった仕方で退却しようと努力しているのは正しいということ、――プロレタリアが、まだそれだけの力がないかぎり、(西と東の帝国主義を前にして)ウラルまででも退却しなければならないことを考えにいれているのは正しいということを、ちゃんと感じているのである。なぜなら、西欧の革命――「春か夏には」始まるに「ちがいない」というような状態には(「左派」のおしゃべりに反して)ないが、しかし一月ごとにますます近づきつつあり、その公算がますます大きくなっている革命――が成熟しつつある時期には、これだけが時をかせぐことのできる唯一の手だてだからである。

「左派」は「自分の」政策をもたない。彼らには、いま退却する必要はないと言う勇気はない。彼らは、ぬらりくらりと遁辞を設け、ことばをもてあそび、現情勢のもとで戦闘を避ける問題を、「たえず」戦闘を避ける問題にすりかえている。彼らはシャボン玉をとばす。「行為による国際的な革命的宣伝を」と!! これはなにを意味するか?

その意味するところは二つに一つ、ノズドリョーフ式の文句か、国際帝国主義を倒すための攻撃戦争か、どちらかでしかありえない。こういうばかげたことは、あからさまに言うわけにはいかない。だから、「左翼」共産主義者は、およそ自覚したプロレタリアから笑われる羽目にならないように、空虚きわまる大言壮語のかげに隠れることになる。彼らの思惑では、「行為による国際的な革命的宣伝」がそもそもなにを意味するか、不注意な読者はおそらく気づくまい、というわけだ。

おおげさな空文句をふりまくのは、階級から脱落した小ブルジョア・インテリゲンツィアのもちまえである。組織されたプロレタリア共産主義者は、こういう「やり方」にたいしては、たぶん、すくなくとも嘲笑をあびせて、いっさいの責任ある地位から追放するくらいの厳罰をくわえることだろう。大衆には苦い真実をありのままに、はっきり、率直に語らなければならない。主戦派がいま一度ドイツで優位を制し(わが国にむかってすぐさま攻勢に転じるとい

う意味で)、ドイツが日本と組んで、正式の協定によるか暗黙の協定によるかして、わが国を分割し押しつぶしにかかるのは、ありうるだけでなく、ありそうなことである、と。わめき屋どもの言うことに耳を貸したいというのでなければ、われわれの戦術は、時を待ち、引きのばしをはかり、戦闘を避け、退却することである。もしわれわれがわめき屋どもをおっぽりだし、「心をひきしめ」、ほんとうに鉄のようなほんとうにプロレタリア的な、ほんとうに共産主義的な規律を打ち立てるならば、何ヵ月もの時をかせぐ大きな可能性があるのだ。で、そのときには、かりに(最悪の場合)ウラルまで退くとしてさえ、それによってわれわれは、われわれの同盟者(国際プロレタリアート)がわれわれを助けるために駆けつけるのを、革命的爆発が始まってから革命にいたるまでの距離を(スポーツ用語で言えば)「縮める」のを、やりやすくしてやることになる。

こうした戦術、ただこうした戦術だけが、一時孤立状態にある国際社会主義の一部隊と他の諸部隊との連繋を実際に強化するのであるが、親愛なる「左翼共産主義者」の諸君よ、君たちのところでは、ほんとうのことを言えば、一つのおおげさな空文句ともう一つのおおげさな空文句との「有機的連繋の強化」がえられるだけだ。こんな「有機的連繋」ではだめなのだ!

そこで、諸君よ、どうして君たちがこんな哀れな羽目におちいったのか、説明してあげよう。それは、君たちが革命のスローガンをよく考えぬこうとしないで、それよりは暗記し暗誦しようとするからだ。それだから君たちは「社会主義的祖国の防衛」ということばを括弧に入れる。この括弧の意味は、おそらく皮肉を弄するつもりにちがいないが、じつは君たちの頭のなかがごたごたしていることを、まさに示しているのだ。君たちは、「祖国防衛」を憎むべく胸くそわるいものだと考える習慣がついた。それを暗誦し暗記した。熱心にその暗誦を繰りかえしたあげく、君たちのなかには、帝国主義時代には祖国防衛は許しがたいものだといったばかげたことまで言う者が出てきた(ほんとうは、ブルジョアジーのおこなう帝国主義的な、反動的な戦争の場合にだけ、それは許しがたいものである)。だが君たちは、なぜ、どんなときに「祖国防衛」が憎むべきものになるか、つきつめて考えることをしなかった。

祖国防衛を認めるのは、戦争が正当であり、正義にかなっていると認めることである。正当であり、正義にかなっているとは、どういう立場から言えることか? 社会主義的プロレタリアートと自己解放のための彼らの闘争の立場からだけ言えることである。それ以外の立場をわれわれは認めない。搾取階級が階級として彼らの支配を固めるため

に戦争をおこなうならば、それは犯罪的な戦争であり、そういう戦争での「祖国防衛」は憎むべきであり、社会主義を裏切ることである。自国でブルジョアジーに打ちかったプロレタリアートが社会主義を強化発展させるために戦争をおこなうなら、その戦争は正当な「聖」戦である。

われわれは、一九一七年一〇月二五日以来祖国防衛論者である。私は、そのことを何回となくきわめてはっきりと言ってきた。そして君たちは、これに異議をとなえる決心はつかないでいる。国際社会主義との「連繋を強化する」ためにこそ、社会主義的祖国を防衛する義務があるのだ。プロレタリアートがすでに勝利した国の防衛に軽率な態度をとるような者は、国際社会主義との連繋をぶちこわすものである。われわれが被抑圧階級の代表者であったころ、われわれは帝国主義戦争における祖国擁護に軽率な態度はとらなかった。われわれはそうした祖国擁護を原理的に否定した。われわれが社会主義を組織しはじめた支配階級の代表者になったいま、われわれは国の防衛に真剣な態度をとることをすべての者に要求する。国の防衛に真剣な態度をとるというのは、徹底した備えをし、力関係を厳密に評価することである。もし明らかに力が不足しているならば、最も重要な防衛手段は奥地に退却することである（これを、もっぱら当面の場合にあてはめてこじつけられた定式だと思う人は、偉大な軍事問題の著作家のひとりである老クラウゼヴィッツがこの点について歴史の教訓をまとめたものを一読したらよい）。だが「左翼共産主義者」には、力関係の問題のもつ意義を理解したらしい形跡はすこしもない。

われわれが原理的に祖国防衛の反対者であったとき、われわれは、社会主義のためと称して祖国の「保全」を望んだ者をあざ笑う正当な根拠をもっていた。われわれがプロレタリア的祖国防衛論者となる正当な根拠を手にしたいま、問題の立て方は根本的に変わってくる。きわめて慎重に勢力を評価し、われわれの同盟者（国際プロレタリアート）が間に合うようにやってくるかどうかを最も綿密に考量することが、われわれの責務となる。資本の利益とするところは、万国の労働者がまだ団結する（実際に、つまり革命を始めることによって）にいたらないうちに、敵（革命的プロレタリアート）を各個撃破することである。われわれの利益とするところは、一箇の国際的大軍団の革命的な諸部隊がそのように団結するときまで（あるいは、団結する「あとまで」）決戦を引きのばすために、あらゆる努力をはらい、そのためのどんな小さな可能性をも利用することである。

三

国内政治の分野におけるわが「左翼共産主義者」の不運に話を移そう。現情勢にかんするテーゼのなかで次のような文句を読むと、なんとしても微笑を禁じえない。

「……無傷のままに残っている生産手段の計画的利用は、最も断固たる社会化をおこなってはじめて考えられることである。」……「ブルジョアジーと彼らの忠僕である小ブルジョア・インテリゲンツィアに降伏することなく、ブルジョアジーを叩きのめし、サボタージュを最後的に粉砕する。……」

愛すべき「左翼共産主義者」、彼らにはなんと断固たるところが多く……そしてなんと思慮に欠けていることか！「最も断固たる社会化」とは、これはいったいなにか？

国有化や没収の問題では、断固としてやることもできるし、あるいは断固としていないこともありうる。しかしながら、国有化や没収から社会化へと移ってゆくには、この世の中で最大の「断固」さをもってしてもなお足りないということ、そこが肝心な点である。「最も断固たる……社会化」という、この素朴で幼稚なことばの組合せによって、わが「左派」は、問題の核心、「現」情勢の核心についての完全な無理解をさらけだしているということ、そこに彼らの不幸がある。「左派」が「現情勢」の本質、没収（没収を実行する場合、政治家のもつべき最も重要な資質は断固さである）から社会化（社会化を実行する場合、革命家に要求されるのは別の資質である）への移行の本質そのものに気づかなかったこと、そこに彼らの不運がある。

きのうは、当面する情勢の核心は、できるだけ断固として国有化をおこない、没収をおこない、ブルジョアジーを叩き、そして叩きのめし、サボタージュを粉砕することであった。きょう、われわれが計算も間に合わないくらいたくさんのものを国有化し、没収し、叩きこわし、粉砕したことが見えないのは、めくらだけである。だが、没収は、正しく計算し、正しく配分する能力がなくても、「断固さ」だけでやれるが、社会化はそういう能力がなければやれないという、まさにその点で、社会化はたんなる没収とは違うのである。

没収や、ブルジョアジーを叩きのめすことや、サボタージュの粉砕で、われわれがきのう断固としていた（あすもそうだろう）ことは、われわれの歴史的功績であった。きょう、『現情勢にかんするテーゼ』のなかでそういうことを書くのは、面を過去に向けることであり、未来への移行を解しないというものである。

……「サボタージュの最後的粉砕」……うまい任務が見つかったものだ！　でも怠業者はわが国では十二分に「粉砕されてしまっている」。われわれに欠けているのは、そ

れとはまるきり、全然違ったものである。怠業者のだれをどこに配置したらいいかという目算に欠けており、たとえば、われわれのところに仕事をしにくる怠業者一〇〇人あたり一人のボリシェヴィキの指導者あるいは監督者、というように、監督のためにわれわれの勢力を組織することに欠けている。このような事態にあるときに、「最も断固たる社会化」とか、「叩きのめす」とか、「最後的に粉砕する」とかいう空文句をふりまわすのは、それこそ的はずれというものだ。叩きのめしたり、粉砕したり等々するだけでは、——大所有者にたいして怒りくるった小所有者にはそれで十分だが——社会主義にとっては足りないということに気づかないのは、小ブルジョア革命家のもちまえである。しかし、プロレタリア革命家は、そういう誤りにはけっしておちいらないだろう。

私がさきに引いたことばが微笑をさそうとすれば、ソヴェト共和国は「右翼ボリシェヴィキ的偏向」のもとにあって、「国家資本主義の方向への進化」の脅威にさらされているという、「左翼共産主義者」の発見にいたっては、まさにホメロス的哄笑をさそうものである。こんどこそ、ほんとうに人を仰天させた、と言ってよかろう！　そして、「左翼共産主義者」は、テーゼでも論文でも、この恐るべき発見をなんと熱心に繰りかえしていることか……

だが、国家資本主義がわがソヴェト共和国の現状に比すれば一歩前進だということを、彼らは考えてもみなかった。かりに半年後にわが国に国家資本主義が打ち立てられるなら、それはたいへんな成功だろうし、一年後にはわが国に社会主義が最終的に確立され、不敗のものとなることを最も確実に保障するものであろう。

「左翼共産主義者」がこの私のことばを聞いてどれほど高尚な怒りにみちてとびのくか、そして労働者の前で「ボリシェヴィキ右派的偏向」にどれほど「壊滅的な批判」をくわえるか、私には想像できる。なんだって？　ソヴェト社会主義共和国で国家資本主義への移行が一歩前進だって？……これは社会主義にたいする裏切りじゃないか？

ここにこそ「左翼共産主義者」の経済上の誤りの根源があるのだ。だから、まさにこの点をややくわしく論じる必要がある。

第一に、社会主義ソヴェト共和国と名のる権利と根拠をわれわれにあたえている資本主義から社会主義への過渡とは、いったいどんなものか、「左翼共産主義者」にはわかっていない。

第二に、彼らは、わが国における社会主義の主要な敵である小ブルジョア的自然発生性を見ないところに、まさに彼らの小ブルジョア性をさらけだしている。

第三に、「国家資本主義」というこけおどしをもちだすことによって、彼らは、ソヴェト国家が経済的にブルジョア国家と違っていることについての無理解をさらけだしている。

この三つの事情をそれぞれ調べてみよう。

ロシア経済の問題と取りくんだ人で、ロシア経済の過渡的性格を否定した者はまだないようである。社会主義ソヴェト共和国という表現は社会主義への移行を実現しようとするソヴェト権力の決意を意味するのであって、新しい経済秩序を社会主義的だと認めたわけではけっしてないということを、否定した共産主義者もいないようである。

ところで、過渡ということばはなにを意味するのか？　それは、経済について用いた場合、現在の体制のなかには資本主義の要素、小部分、小片もあれば、社会主義の要素、小部分、小片もある、ということを意味しないだろうか？　それはそのとおりだ、とだれしも認めるだろう。しかし、それを認めていても、現にロシアに存在するさまざまな社会経済制度の諸要素はいったいどんなものかということについて、だれもが思索をめぐらしているわけではない。だが、およそ問題の核心はここにあるのだ。

それらの要素を列挙してみよう。

(一)　家父長制的な、すなわち多分に現物経済的な農民経済。

(二)　小商品生産（穀物を売る農民の多数者がこれにはいる）。

(三)　私経営的資本主義。

(四)　国家資本主義。

(五)　社会主義。

ロシアは非常に広大で、多様性に富んでいるだけに、社会経済制度のこれらの相異なる型のすべてが国内でたがいに絡みあっている。事態の特異性はまさにここにある。

では、どの要素が優勢か？　わかりきったことで、小農民的な国では小ブルジョア的自然発生性が優勢であり、またそうならざるをえない。農耕者の多数者、しかも大多数者は、小商品生産者である。わが国では国家資本主義の外被（穀物の専売制、統制下にある企業家と商人、ブルジョア的協同組合員）を、あちこちで投機者が突き破っており、投機の主たる対象になっているのは穀物である。

主たる闘争は、まさにこの分野で展開されている。「国家資本主義」というような経済的カテゴリーを示す用語を用いて言えば、この闘争はだれとだれのあいだでおこなわれているのか？　さきに列挙した順序の(四)と(五)のあいだでか？　もちろん、そうではない。ここで社会主義とたたかっているのは国家資本主義ではなく、小ブルジョ

アジー・プラス私経営的資本主義がいっしょに、一つに組んで、国家資本主義とも社会主義ともたたかっているのである。小ブルジョアジーは、国家資本主義的なものであろうと、国家社会主義的なものであろうと、ともかくあらゆる国家的な介入、記録、統制にたいして反抗する。これは、まったく争いがたい現実の事実であって、この点を理解しないところに「左翼共産主義者」の経済上の誤りの根源がある。投機者、暴利商人、専売制の破壊者——これがわれわれの主たる「内」敵、ソヴェト権力の経済施策の敵である。一二五年前、最も熱烈で最も純真な革命家であったフランスの小ブルジョアが、個々の、少数の「選ばれた者」を処刑し、激烈な熱弁をふるうことで投機者に打ちかとうとしたのはまだ許せたが、いま左派エス・エルなどという連中が純然たる口舌の徒としてこの問題にのぞんでいるのにたいしては、自覚した革命家ならだれしも嫌悪か反感をもよおすだけである。投機の経済的基礎が、ルーシ〔ロシアの古名〕の地で異例に幅広い層をなしている小所有者層と、小ブルジョアの一人びとりをその手先としている私経営的資本主義であることを、われわれはよく知っている。この小ブルジョア的ヒュドラの幾百万の触手がここかしこで個々の労働者層をとらえていること、国家独占でなしに投機が、わが国の社会経済生活のあらゆる気孔にくいこんでいることを、われわれは知っている。

この点を見ない者は、その見る目をもたないところに、彼らが小ブルジョア的偏見のとりこになっていることをさらけだしているのである。わが「左翼共産主義者」がまさにそれであって、彼らは、口先では（また、もちろん心の底からそう信じてもいるのだが）小ブルジョアジーの仮借ない敵であるが、実際には、たたかうに事欠いて——一九一八年の四月というのに!!——なんと……「国家資本主義」に反対してたたかうことによって、小ブルジョアジーの手助けをしているだけであり、彼らのお役に立っているだけであり、小ブルジョアジーの立場を代言しているだけである！　的はずれもはなはだしい！

小ブルジョアは、戦時中に「正当な手段で」、またとくに不正手段を用いてためこんだ、何千ルーブリかの小金の貯えをもっている。これが、投機と私経営的資本主義の基礎として特徴的な経済的型である。貨幣は、社会的な富を手に入れるための証書であって、幾百万の小所有者層は、この証書をしっかりにぎって、「国家」の目からそれを隠しており、どんな社会主義も共産主義も信用せず、プロレタリアの嵐が吹きやむのを「じっと待っている」のである。われわれがこの小ブルジョアをわれわれの統制と記録に服させるか（貧民すなわち住民の多数者あるいは半プロレタ

リアを、自覚したプロレタリア前衛のまわりに組織化するなら、われわれはそれをやりとげることができる）、それとも、まさにこの小所有者層を基盤として生まれてくるナポレオンやカヴェニャクの徒が革命を打ち倒したように、小ブルジョアが必然的、不可避的にわれわれの労働者権力を打ち倒すか、どちらかである。問題はこんなふうに立てられているのだ。ただ左派エス・エルだけは、「勤労」農民についての空文句に目をとられて、この単純明白な真実を見ていないのだが、空文句におぼれた左派エス・エルの言うことなどをだれが本気にするだろうか？

何千ルーブリかをためこんでいる小ブルジョアは国家資本主義の敵であり、彼はこの何千ルーブリかを、貧民の利益に反し、いっさいの全国家的統制にさからって、ぜひ自分のために運用しようと思っているのだが、この何千ルーブリかの集まったものが、われわれの社会主義建設をぶちこわす何百億ルーブリという投機の土台をなしているのである。かりに、一定数の労働者が何日かかかって一〇〇〇という数字であらわすことのできる価値額をつくりだしているとしよう。さらに、小投機やあらゆるたぐいの着服の結果、またソヴェトの布告やソヴェトの命令を「くぐりぬける」結果、この額のうち二〇〇がわれわれの手から失われていると仮定しよう。自覚した労働者ならだれでもこう言うだろう。もし一〇〇〇のうち三〇〇を出して、それで秩序と組織がよくなるものなら、二〇〇どころか三〇〇でもよろこんで出そう。なぜなら、秩序と組織がきちんとしたものになり、小所有者があらゆる国家独占をぶちこわすのが最終的に粉砕されるなら、ソヴェト権力のもとでこの「貢物」をあとでたとえば一〇〇に減らし、五〇に減らすことは、いともたやすい仕事だろうから、と。

この数字の例は、記述をわかりやすくするためにわざと思いきり単純化してあるのだが、この簡単な数字の例によっても、国家資本主義と社会主義との現状での相互関係が明らかになる。国家の権力は労働者の手中にある。労働者は、一〇〇〇全部を「取る」完全な法的可能性をもっている。つまり、社会主義的な用途のためでなければ、一コペイカも出さないでいい。権力が実際に労働者の手に渡ったことに基礎をおくこの法的可能性は、社会主義の一要素である。

だが、小所有者と私経営的資本主義との自然発生性は、いろんな道すじによってこの法状態を破壊し、投機をもちこみ、ソヴェトの布告の実施を阻害している。かりに（私は、明確に示すために、わざとああいう数字の例をあげたのだが）われわれがいまよりもっと多く支払うとしても、国家資本主義は巨大な一歩前進であろう。というのは、

「授業料」を払うだけの値うちがあるからであり、それは労働者のためになるからであり、無秩序、荒廃、放埒を克服することがなによりも重要だからであり、小所有者的無政府性の存続は、(もしわれわれがそれを克服しなければ)無条件にわれわれを滅ぼす最大の、最も恐るべき危険であるが、国家資本主義にもっと多くの貢物を払っても、それはわれわれを滅ぼさないどころか、最も確実な道をとおってわれわれを社会主義へとみちびいてくれるだろうからである。労働者階級が、小所有者的無政府性に抗してどのようにして国家秩序を守りぬくべきか、国家資本主義の基礎のうえにどのようにして大規模な、全国家的な生産組織をととのえるかを習得したならば、そのとき彼らは、――こんな言い方をして恐縮だが――全部の切り札を手にすることになり、社会主義の確立が保障されるだろう。

国家資本主義は、わが国の現在の経済にくらべて比較にならぬほど経済的に高度なものである。これが第一。

第二に、国家資本主義には、ソヴェト権力にとって恐ろしいものはなにもふくまれていない。ソヴェト国家は労働者と貧民の権力が保障されている国家だからである。「左翼共産主義者」は、これらの争いがたい真理を解しなかった。この真理は、経済学について頭のなかでおよそどんな考えもまとめることのできない「左派エス・エル」には、もちろん、いつまでたってもわかりっこないのだが、しかしマルクス主義者ならだれでも認めざるをえないであろう。左派エス・エルとは論争してもはじまらない。彼らは、駄ぼらの「おぞましい手本」として指さしするだけで十分だ。だが、「左翼共産主義者」とは論争する必要がある。というのは、ここで誤りをおかしているのはマルクス主義者であり、彼らの誤りを分析することは、労働者階級が正しい道を見いだすのに役だつからである。

四

問題をもっとはっきりさせるために、まず国家資本主義の最も具体的な例をあげよう。その例がどんなものだか、だれでも知っている。それはドイツである。そこには、ユンカー的＝ブルジョア的帝国主義に支配された現代の大規模資本主義的技術と計画的組織化との「最新の達成」がある。傍点を付したことばをとりのぞいて、軍事的、ユンカー的、ブルジョア的、帝国主義的な国家というところを、同じく国家ではあるが、違った社会的型の国家、違った階級的内容をもつ国家であるソヴェト国家すなわちプロレタリア国家と言いかえれば、社会主義を成立させる条件の全部がそろうことになる。

最新科学の最新の達成のうえにきずかれた大規模資本主義的技術がなく、幾千万という人々に生産物の生産と分配の単一の基準をきわめて厳格に守らせる計画的な国家的組織がなければ、社会主義は考えられない。そのことを、われわれマルクス主義者はいつも言ってきたし、こんなことさえわかっていない人々(無政府主義者と左派エス・エルの過半数)とは、話し合いに寸秒の時をついやす値うちもない。

それとともに、国家におけるプロレタリアートの支配権なしには、社会主義は考えられない。これまたイロハである。そして歴史は(歴史が、なめらかに、平穏に、やすやすと、簡単に「十全な」社会主義をあたえてくれるだろうと期待したのは、おそらく第一級の鈍物たるメンシェヴィキ以外にはだれもいない)、独特なすすみ方をして、一九一八年にはすでに、国際帝国主義という一つの殼にはいった将来の二羽のひよっこさながらに、社会主義を二つに分けた両半分を、すぐ隣りあわせに生みだした。ドイツとロシアは、一九一八年には、前者は社会主義の経済的、生産的、社会経済的条件の、後者はその政治的条件の、最も明瞭な物的実現をあらわしていた。

ドイツのプロレタリア革命が勝利すれば、たちどころに、きわめて容易に、いっさいの帝国主義の殼をぶちやぶるだろう(残念ながら、この殼は最良質の鋼でできているために、どんな……ひよっこの努力をもってしても破れない)し、きっとなんの困難もなく、あるいはごくわずかな困難にあうだけで、世界社会主義の勝利を実現することであろう――もちろん、その「困難さ」の尺度には、俗物仲間の尺度ではなく、世界史的な尺度をとっての話だが。

ドイツで革命がまだ「うぶ声をあげる」のに手間どっているうちは、われわれの任務は、ドイツ人の国家資本主義を学ぶことであり、全力をあげてそれを摂取することである。そして、ピョートルが野蛮なルーシへの西欧文物の摂取を速めたより以上にこの摂取を速めるためには、執権者的なやり方をとるのをはばかってはならず、野蛮とたたかうのに野蛮な闘争手段の使用をためらってはならない。無政府主義者や左派エス・エルのなかには(私は、中央執行委員会でのカレーリンやゲーの演説をふと思いだしたのだが)、ドイツ帝国主義から「学ぶ」などとはわれわれ革命家にふさわしくないといった、ナルキッソス式の議論をやりかねない連中がいるが、一つだけ言っておかねばならない、そういう連中の言うことを真にうけるような革命は、たよりなく滅びるだろう(それもまったく身から出たさびだ)、と。

ロシアでは、いままさに小ブルジョア的資本主義が幅を

きかしており、そこからは、大規模国家資本主義へゆくにも社会主義へゆくにも、同じ一つの道を通り、同じ一つの中間駅、いわゆる「生産物の生産と分配にたいする全人民的な記録と統制」を経由する道を通るのである。この点を理解しない者は、許しがたい経済上の誤りをおかすものであって、それは、現実の事実を知らず、現にあるものが見えず、真実を直視することができないためか、それとも、「資本主義」と「社会主義」とを抽象的に対置するだけで、いまわが国でこの移行がおこなわれている具体的な諸形態と諸段階を深くきわめようとしないためか、どちらかである。ついでに言っておくと、これは、『ノーヴァヤ・ジーズニ』や『フペリョード』の陣営に属する人々のうちいちばんましな連中をさえ混迷におとしいれたのとまったく同じ理論的な誤りである。彼らのうちでもいちばん程度の低い連中や中くらいの連中は、頭がにぶく無定見なために、ブルジョアジーにおどしつけられて、ブルジョアジーの尻にくっついている。いちばんましな連中にしても、社会主義の教師たちが資本主義から社会主義への過渡のまる一時期について語ったのは、漫然と語ったわけではなく、また彼らが新しい社会の「長い生みの苦しみ」を強調したのは、ゆえあってのことだということが、わかっていない。なおまた、この新しい社会というのもこれまた抽象であって、なんらかの社会主義国家をつくりだそうとする、さまざまな、不完全な、具体的試行をいくつも積みかさねたうえでなければ、この抽象が実際に具現されることはありえないのである。

国家資本主義にも社会主義にも共通するもの（全人民的な記録と統制）を経由するのでなければ、ロシアの現在の経済状態からさきにすすむわけにいかないだけに、「国家資本主義の方向への進化」（『コムニスト』第一号、八ページ、第一欄）ということでひとをおどかし、自分もおびえるのは、理論的にまったくの愚行である。それはまさに、思考を「進化」の現実の道から外の「方向へ」そらすことであり、この道を理解しないことである。そして、実践のうえでは、それは小所有者的資本主義へ引きもどすのと同じことである。

私が国家資本主義に「高い」評価をあたえるのは、けっしていまに限ったことではなく、ボリシェヴィキが権力をにぎるまえにもそうであったことを読者にのみこんでもらうために、一九一七年九月に書いた私の小冊子『さしせまる破局、それとどうたたかうか』から次の文章を引用しておきたい。

「……試みに、ユンカー＝資本家国家のかわりに、地主＝資本家国家のかわりに、革命的民主主義国家、すなわちあ

らゆる特権を革命的に破壊する国家、最も完全な民主主義を革命的に実現することを恐れない国家をもってきたまえ。そうすれば、ほんとうに革命的民主主義的な国家のもとでは、国家独占資本主義は、不可避的に、必然的に、社会主義への一歩、いな数歩を意味することがわかるだろう！

……なぜなら、社会主義は、国家資本主義的独占からさらに一歩をすすめたものにほかならないからである。

……国家独占資本主義は、社会主義のきわめて完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義とよばれる一段とのあいだにはどんな中間の段もないような歴史の階段の一段である。」（二七および二八ページ）[一八四]

注意されたいのは、これはケーレンスキーの時代に書いたもので、ここで論じているのはプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のことでもなければ、社会主義国家のことでもなく、「革命的民主主義的な」国家のことだという点である。われわれがこの政治的一段をさらに高いところにのぼってゆけばゆくほど、ソヴェトのうちに社会主義国家とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とをより安全に具現してゆけばゆくほど、われわれは「国家資本主義」を恐れなくてもよいようになることは、明らかではあるまいか？　物質的、経済的、生産的な意味では、われわれはまだ社会主義の「入口」にさえいないことは、明らかではあるまいか？　また、われわれがまだ到達していないこの「入口」を通らないでは、社会主義の扉の内側にはいれないことも、明らかではあるまいか？

どの面から問題を取りあげてみても、結論は同一である。すなわち、「左翼共産主義者」がわれわれを脅かしているという「国家資本主義」の議論は、経済的にまったくの誤りであり、彼らがまさしく小ブルジョア・イデオロギーの完全なとりこになっていることの明白な証拠である。

五

さらに、次の事情もきわめて教訓に富んでいる。

われわれが中央執行委員会で同志ブハーリンと論争したとき、彼はなかでも次のような意見を述べた。専門家に高い給与をあたえる問題では「われわれ」（われわれとは、明らかに「左翼共産主義者」のこと）は「レーニンよりも右だ」、なぜなら、一定の条件のもとでは「この一味をそっくり買い取ること」（すなわち、資本家一味を買い取ること、つまり、ブルジョアジーから土地、工場、その他の生産手段を買い取ること）が労働者階級にとって最も適当である、というマルクスのことばを頭におけば、そこには原則からの逸脱はなにも見られないからである、[一八五]と。

この非常に興味ぶかい意見が明らかにしていることは、第一に、ブハーリンは左派エス・エルや無政府主義者よりも頭二つくらいぬきんでているということ、彼はけっしてむやみにことばにおぼれることがなく、それどころか、資本主義から社会主義への移行——苦痛と困難にみちた移行——の具体的な諸困難を深く考えようとつとめていることである。

第二に、この意見はブハーリンの誤りをいっそう明瞭にあばきだしている。

ほんとうに、マルクスの思想をよく考えてみたまえ。

問題にされているのは、前世紀の七〇年代のイギリスのことであり、独占前の資本主義の最盛期のことであり、当時軍部と官僚制が最も小さかった国のことであり、当時労働者がブルジョアジーを「買い取る」という意味で社会主義が「平和的に」勝利する可能性が最も多かった国のことであった。そこでマルクスは、一定の条件のもとでは労働者はブルジョアジーを買い取ることをけっしてこばむものではない、と言ったのである。マルクスは、変革の形態、やり方、方法について自分の手を——また社会主義革命の将来の活動家の手を——縛ることをしなかった。そのときになればどれほど多くの新しい問題が生じてくるか、変革の過程で情勢全体がどれほど変化するものか、変革の過程で情勢がどれほど頻繁に、激しく変化するものか、よくわきまえていたからである。

ところで、プロレタリアートが権力をにぎったのちの、搾取者の軍事的抵抗とサボタージュによる抵抗を鎮圧したのちのソヴェト・ロシアではどうかといえば——もし半世紀前にイギリスが平和的に社会主義に移りはじめたとしたら、当時のイギリスにおそらく生じたであろうような型の条件が、若干生じていることは、明らかではあるまいか？もし当時イギリスで資本家の労働者への服従が保障されえたとしたら、それは次のような事情によるものであったろう。（一）農民がいなかったため、住民のなかで労働者、プロレタリアが完全に優勢であったこと（七〇年代のイギリスには、農業労働者のあいだで社会主義が非常に急速に成功することを期待させるにたる徴候があった）、（二）プロレタリアートの労働組合へのすばらしい組織率（この点でイギリスは当時世界一の国であった）、（三）数世紀にわたる政治的自由の発展によって訓練されたプロレタリアートの比較的に高い文化水準、（四）みごとに組織されたイギリスの資本家——当時彼らは世界中のどの国よりもよく組織された資本家であった（いまでは、この点で首位はドイツに移っている）——が、政治や経済の問題を妥協によって解決する長いあいだの習慣。このような事情があった

ために、当時、イギリスの資本家が平和的に労働者に服従することがありうるという考えが、生まれることができたのである。

わが国では、そうした服従は、現在、一定の根本的な前提条件（一〇月に勝利をおさめ、一〇月から二月までのあいだに資本家の軍事的抵抗とサボタージュによる抵抗を鎮圧したこと）によって保障されている。わが国では、住民のなかで労働者、プロレタリアが完全に優勢ではなく、高度の組織性ももっていないかわりに、急速に没落した貧農がプロレタリアを支持したことが勝利の原因となった。最後に、わが国には高い文化水準もなければ、妥協の習慣もない。これらの具体的条件をよく考えるならば、いまではわれわれは、どんな「国家資本主義」にも応じようとせず、どんな妥協も考えようとせず、依然として投機、貧民の買収などでソヴェトの施策を挫折させようとしている、非文化的な資本家を容赦なく処断するやり方*と、「国家資本主義」を受けいれ、それを実行することができ、何千万という人々への生産物の供給を現実に掌握している巨大企業の賢明で経験に富む組織者としてプロレタリアートの役に立つ、文化的な資本家と妥協し、あるいはこれを買い取るというやり方とが併用されるようにすることができるし、またしなければならないということが、明らかになる。

* ここでも真実を直視する必要がある。社会主義を成功させるために必要な容赦なさが、われわれにはあいかわらずとぼしい。それがとぼしいのは、決断力がないからではない。決断力は、われわれには十分にある。だが、ソヴェトの施策を踏みにじる投機者、暴利商人、資本家を十分な人数だけ十分手ばやくつかまえる能力がない。というのは、この「能力」は、記録と統制を組織することによってはじめて生まれてくるからだ！　第二に、裁判所に十分に毅然たるところがなく、裁判所は、収賄者を銃殺にはしないで、半年の懲役を言い渡している。われわれのこの二つの欠陥は、一つの社会的な根をもっている。それは小ブルジョア的自然発生性の影響、その意気地なさである。

ブハーリンは、すぐれた教養を身につけたマルクス主義経済学者である。だから、彼は、マルクスが、まさに社会主義への移行を容易にするために巨大規模の生産の組織を保存することがたいせつなこと、そして、もし（例外として。イギリスはその当時は例外であった）資本家を平和的に服従させ、買い取りを条件に文化的、組織的に社会主義に移らせるような事情が生じたならば、資本家にたっぷり支払って、彼らを買い取るという考えも十分容認できることを、労働者に教えたのはあくまでも正しかったということを思いだした。

しかしブハーリンは、ロシアにおける現情勢の具体的特

異性を深く考えなかったために、誤りにおちいった。——現情勢はまさに例外的であって、現在では、われわれロシアのプロレタリアートは、われわれの政治制度の点では、労働者の政治権力の強さでは、どんなイギリスよりも、どんなドイツよりもすすんでいるが、同時に、秩序整然たる国家資本主義の組織の点では、文化の高さでは、社会主義を物質的に、生産面で「導入する」準備の程度では、西ヨーロッパ諸国家のうちの「最も遅れたものよりも遅れているが、こういう特異な状態からして、現在まさに特異な「買い取り」の必要性が生じてくることは、明らかではないか？　それは、ソヴェト権力のもとで勤務し、大規模および巨大規模の「国家的」生産を整備する仕事をちゃんと手つだう用意のある、最も文化的な、最も才能のある、組織者として最も有能な資本家にたいして、労働者が提案すべき「買い取り」である。このような特異な状態にあって、われわれが、それぞれそれなりに小ブルジョア的な二種類の誤りを避けるために努力しなければならないことは、明らかではないか？　一方で、われわれの経済的な「力」と政治的な力の不整合が認められる以上、「したがって」権力をにぎるべきではなかったのだと公言するのは、救いがたい誤りであろう。そういう議論をやるのは、「整合」はいつまでたっても生まれないこと、自然の発展においても社会の発展においてもそういうものはありえないこと、一面的であろうし、一定の不整合という欠陥をもつであろうが、多くの試みを——その一つひとつをとってみれば、——積みかさねることによってのみ、万国のプロレタリアの革命的協力から十全な社会主義が生まれてくることを忘れている「箱のなかの男」である。

他方、「めざましい」革命に熱中はするが、困難きわまる移行をもよく考慮にいれた、堅忍不抜な、熟考された、周到な革命的活動をすることのできないがなり屋や口舌の徒を勝手にふるまわせておくのも、明らかな誤りであろう。

幸いにして、革命的諸政党の発展の歴史、これら諸党とのボリシェヴィズムの闘争の歴史は、はっきりした輪郭をもったいくつかの典型を遺産としてわれわれに残している。そのうち左派エス・エルと無政府主義者は、くだらない革命家の典型の十分明瞭な例証である。彼らはいま「ボリシェヴィキ右派」の「協調主義」反対を叫んでいる——ヒステリックに、口角泡をとばして、大声に叫んでいる。しかし彼らは、「協調主義」はどこが悪かったのか、それが歴史と革命の進行によって当然の断罪を受けたのはなにゆえか、考えるすべを知らないのだ。

ケーレンスキー時代の協調主義は、帝国主義的ブルジョアジーに権力を引き渡した。ところで、権力の問題はあら

ゆる革命の根本問題である。一九一七年一〇―一一月における一部のボリシェヴィキの協調主義は、プロレタリアートが権力をにぎることを恐れたか、でなければ、左派エス・エルのような「たよりない同伴者」とだけでなく、チェルノーフ派、メンシェヴィキのような敵、――憲法制定議会の解散や、ボガエフスキー一味の容赦ない粉砕や、ソヴェト諸制度の完全実施や、各種の没収というような基本問題で、かならずわれわれを妨害したであろう連中――とも、平等に権力を分かち合うことを望んだのである。

いまや権力は、「たよりない同伴者」さえ参加させずに、一つの党、プロレタリアートの党の手に掌握され、維持され、強化されている。権力を分有したり、ブルジョアジーにたいするプロレタリア執権（ディクタツーラ）を放棄したりすることなどが問題になっておらず、いな問題になりえないいま、協調主義をうんぬんするのは、それこそオウムのように、おぼえこんだがわけはわからないことばを繰りかえすというものである。われわれが国を統治することができ、また統治しなければならない状態に立ちいたったいま、われわれが資本主義によって教育された者のうち最も文化的な分子を、金を惜しまずわれわれの側に引きよせ、彼らを小所有者的崩壊を克服する仕事につけようと努力しているのを「協調主義」とよぶのは、社会主義建設の経済的任務についておよそ考えるすべを知らないというものである。

だから、――同志ブハーリンが、カレーリンやゲーの徒から提供された「奉仕」を、中央執行委員会でただちに、「恥じた」という事情が、同志ブハーリンのりっぱな身分証明になっているにしても――「左翼共産主義者」の潮流にたいしては、彼らの政治的戦友を指摘することが、やはり重大な警告となっているのである。

見たまえ、左派エス・エルの機関紙『ズナーミャ・トルダー』を。一九一八年四月二五日号で、同紙は得意になって述べている。「わが党の今日の立場は、ボリシェヴィズム内のいまひとつの潮流（ブハーリン、ポクロフスキー、その他）と一致している。」見たまえ、同日付のメンシェヴィキの『フペリョード』を。同紙は、とりわけ、有名でなくもないメンシェヴィキ、イスフの次の『テーゼ』をのせている。

「はじめから真にプロレタリア的な性格の政策とは無縁であったソヴェト権力の政策は、最近ではますます公然とブルジョアジーとの協定の道に踏みこみ、露骨な反労働者的性格をおびるようになっている。工業国有化の旗印のもとに工業トラスト育成の政策がとられ、国の生産力復興の旗印のもとに八時間労働日の廃止、出来高払制とテイラー・システムの導入、ブラックリストと不適

格証明書の導入の企てがなされている。この政策は、プロレタリアートから経済の分野における彼らの基本的獲得物を奪いさり、彼らをブルジョアジーの無制限の搾取の犠牲に供する危険をはらんでいる。」

まことにみごとなものではないか？

ロシアの資本家に併合を約束した秘密条約の名においてケーレンスキーとともに帝国主義戦争をおこなったケーレンスキーの友人ども、六月一一日に労働者の武装解除をやろうとしたツェレテーリの仲間、とどろきわたる空文句でブルジョアジーの権力を掩護したリーベルダンの徒——その彼らが、「ブルジョアジーとの協定」、「トラストの育成」（つまり、これこそ「国家資本主議」の育成だ！）、テイラー・システムの導入ということでソヴェト権力を告発しているのだ。

そうだ、イスフにはボリシェヴィキからメダルを進呈しなくてはいけない。そして、各労働者クラブや組合に、ブルジョアジーの挑発的言辞の見本として彼のテーゼを掲示すべきである。労働者はいまではリーベルダン、ツェレテーリ、イスフの徒をよく知っており、いたるところで経験によって知っているが、こうしたブルジョアジーの下僕どもがテイラー・システムや「トラストの育成」に反対するよう労働者をそそのかすのはなぜかということに、深く思いをめぐらすのは、労働者にとってきわめて有益なことであろう。

自覚した労働者は、リーベルダン、ツェレテーリ諸氏の友人イスフの『テーゼ』と「左翼共産主義者」の次のテーゼを入念に比較してみるだろう。

「生産における資本家の指導権の回復にともなう労働規律の導入は、労働の生産性を大きく高めることはできず、プロレタリアートの階級的な自主活動、積極性、組織性を低下させるであろう。それは、労働者階級の隷属をもたらすおそれがあり、プロレタリアートの遅れた層にも、その前衛にも、不満をよびおこすであろう。プロレタリアのあいだに『サボタージュをやる資本家』にたいする憎しみがゆきわたっている現状において、この制度を実施するためには、共産党は、労働者に背をむけて小ブルジョアジーに足場を求めなければならず、そのためプロレタリアートの党としての自分自身を滅ぼす羽目におちいるであろう」（『コムニスト』第一号、八ページ、第二欄）。

これこそ、「左派」がわなにひっかかり、イスフその他の資本主義のユダどものそそのかしにのせられたことを示す最も明瞭な証拠である。ここに、プロレタリアートの前衛こそ労働規律の導入に賛成であり、小ブルジョアジーこ

そこの規律をぶちこわすことにいちばん懸命になっていることを知っている労働者にとって、よい教訓がある。上にあげた「左派」のテーゼのような言説は、最大の恥さらしであり、事実上共産主義の完全な否認、ほかならぬ小ブルジョアジーの側への完全な移行である。

「資本家の指導権の回復にともなう」――こういうことばで「左翼共産主義者」は「自分を弁護し」ようと考えている。なんの役にも立たない弁護だ。というのは、第一に、ソヴェト権力が資本家に「指導権」をあたえるのは、指導者の一挙一動を監視し、その指導者としての経験に学び、指導者の処置に異議を申したてることができるだけでなく、ソヴェト権力の諸機関をつうじてその指導者を更迭することもできる、労働者委員（コミッサール）あるいは労働者委員会が存在しているところにおいてである。第二に、資本家に「指導権」をあたえるのは、勤務についているあいだ、執行機能を果たさせるためであり、その勤務の条件も、ほかならぬソヴェト権力がきめるのであり、またその同じソヴェト権力が廃止もすれば改訂もする。第三に、ソヴェト権力が資本家に「指導権」をあたえるのは、資本家としての彼らにあたえるのではなく、高額の労働報酬をうける専門技術者あるいは組織者としての彼らにあたえるのである。また労働者も、ほんとうに大規模のまた巨大規模の企業、トラスト、またはその他の施設の組織者が、九九％まで資本家階級に属しており、一流の技術者もまたそうだということを、よく知っている。――しかし、その彼らを、われわれプロレタリア党は、労働過程と生産組織の「指導者」に採用しなければならない。なぜなら、実地にたずさわり、経験によってこの仕事を知っている人間は、ほかにいないからである。また、「左翼的な」空文句や小ブルジョア的な放縦にまどわされかねないような幼年期を脱した労働者は、ほかならぬ資本家のトラスト指導をつうじ、巨大規模の機械制生産をつうじ、年間数百万ルーブリの売上げをあげる企業をつうじて――もっぱらそうした生産と企業をつうじて、社会主義にむかってすすんでゆくのだからである。労働者は小ブルジョアではない。彼らは巨大規模の「国家資本主義」を恐れない。彼らは「国家資本主義」を、自分たちの権力、ソヴェト権力が小所有者的解体と崩壊に対抗して利用する自分たちの、プロレタリアの道具と評価している。

この点を理解しないのは、階級から脱落した、したがって骨の髄まで小ブルジョア的なインテリゲンツィアだけであるが、「左翼共産主義者」のグループのあいだで、また彼らの雑誌で、そうしたインテリゲンツィアの典型としてふるまっているのがオシンスキーであって、彼はこう書いている。

「……企業を組織し指導する仕事のイニシアティヴはすべて『トラストの組織者』の手ににぎられるだろう。なぜといって、われわれは彼らを教えようとはせず、彼らを平従業員にしようとはしないで、彼らから学ぼうとしているからだ。」(『コムニスト』第一号、一四ページ、第二欄)

この一文のなかのせいいっぱい皮肉のつもりで書かれている文句は、「トラストの組織者から社会主義を学ぶ」という私のことばにむけられているのだ。

オシンスキーには、それが笑止なことなのだ。彼は、トラストの組織者を「平従業員」にしたがっている。もしこれを、詩人が「年齢はようやく一五なのか、それを出てはいないのか？」……といった年ごろの人間が書いたのならいないのか？(三) ——なにも驚くことはない。だが、巨大資本主義が達成した技術と文化の成果を利用しなければ社会主義は不可能であることを学んだマルクス主義者からこういう話を聞くのは、いささか奇妙である。そこにはマルクス主義のかけらも残っていない。

いな。トラストの組織者から学ばなければ社会主義をつくりだすことも、導入することもできないことを理解している者だけが、共産主義者の名に値するのだ。なぜなら、社会主義は頭で考えだすものではなく、権力を獲得したプロレタリアートの前衛が習得するもの、トラストがつくりだしたものを習得し応用するものだからである。われわれプロレタリアートの党は、巨大規模の生産を、どこからも手に、トラストとして組織する能力をどこからも手にいれることができない——資本主義の一流の専門家から手にいれるのでないかぎり、どこからも。

ブルジョア・インテリゲンツィアに社会主義を「教える」などという子どもっぽい目的を立てないかぎり、われわれが彼らに教えるものはなにもない。彼らは、教えるのでなく、収奪しなければならず(それはロシアでは十分「断固として」やられている)、彼らのサボタージュを粉砕しなければならず、階層またはグループとして彼らをソヴェト権力に服従させなければならない。だが、われわれは、——われわれ共産主義者が子どもの年ごろではなく、子どもの理解力しかもたないのでなければ——われわれは彼らに学ばなければならない。また学ぶべきことがある。なぜなら、プロレタリアートの党、プロレタリアートの前衛は、数千万の住民のためにはたらく巨大企業を整備する自主的活動の経験をもたないからである。

そして、ロシアの優秀な労働者はこのことを理解した。彼らは、組織者たる資本家、指導者たる技師、専門家たる技術者から学びはじめた。彼らは、着実慎重に、まずやさ

しいことから手をつけ、しだいにむずかしいことに移っている。冶金工業や機械製作業ではすすみ方がのろいが、それはこのほうがむずかしいからである。だが、繊維労働者、たばこ労働者、皮革労働者は、階級から脱落した小ブルジョア・インテリゲンツィアのように「国家資本主義」を恐れないし、「トラストの組織者から学ぶ」ことを恐れない。「皮革総委員会」とか「中央繊維委員会」とかいった型の中央の指導機関では、この労働者たちは資本家と席をならべ、彼らから学び、トラストを整備し、ソヴェト権力のもとでは社会主義の入口であり、社会主義の動かしがたい勝利の条件をなしている「国家資本主義」を整備している。

ロシアの先進的労働者のこうした活動は、労働規律導入の活動とならんで、静かに、目だたず、一部の「左派」に欠かすことのできないあの騒がしい鳴りものいりでなく、非常に慎重かつ漸進的に、実践の教訓を汲みとりながら、すすめられたし、現にすすめられている。この困難な活動、巨大規模の生産を建設することを実地に学びとる活動のうちに、われわれが道を誤らないという保障がある。――ロシアの自覚した労働者が小所有者的な解体や崩壊とたたかい、小ブルジョア的無規律*とたたかうことの保障があり、共産主義の勝利の保障がある。

* テーゼの筆者たちが実生活の経済的分野でのプロレタリアートの執権の意義についてひとこともふれていないのは、きわめて特徴的である。彼らは、ただ「組織性」等々をうんぬんしているだけである。しかし、それなら、ほかのことはさておき経済面での労働者の執権だけはまっぴらだという小ブルジョアでも承認していることである。こういう時機にプロレタリア革命家たるものが、資本主義の経済的基礎をくつがえそうとするプロレタリア革命のこの「核心」を「忘れる」などということは、けっしてありえないはずだ。

六

終りに、所見を二つ。

われわれが一九一八年四月四日に「左翼共産主義者」と論争したとき（『コムニスト』第一号、四ページの注を参照）、私は彼らの急所をつく質問をした。君たちは鉄道にかんする布告のどこが不満なのか、ちょっと説明してくれたまえ。君たちの修正案を出したまえ。それは、ソヴェトのプロレタリアートの指導者としての君たちの義務だ。でなければ、君たちのことばは空文句になってしまうぞ、と。

一九一八年四月二〇日に『コムニスト』第一号が出た。――そこには、「左翼共産主義者」の意見では鉄道にかんする布告をどう改正または修正すべきかについて、ひとことも述べていない。

「左翼共産主義者」は、この沈黙でみずからを断罪したわけである。彼らは、鉄道にかんする布告にたいしてあてこすりの攻撃をくわえるだけにとどめ（第一号、八ページおよび一六ページ）、「鉄道にかんする布告がまちがっているなら、いったいどう修正するのか？」という質問にたいして、なんらはっきり聞きとれるような答えは出さなかった。

注釈はいらない。鉄道にかんする布告（これは、われわれの方針、確固たる方針、執権の方針、プロレタリア的規律の方針の手本である）にたいするこういう「批判」を、自覚した労働者は「イスフ式」批判と言うか、あるいは空文句と言うだろう。

第二の所見。『コムニスト』第一号には、私の小冊子『国家と革命』について同志ブハーリンの、私にとってたいへんお世辞となるような書評がのっている。ブハーリンのような人々の批評は私にとってなかなか貴重なものではあるが、しかし、私は良心にしたがって言っておかなければならない。この書評の性格は、ブハーリンがプロレタリア執権の任務を考察するとき、面を過去に向け、未来に向けていないという、悲しむべく意味深長な事実を明るみにだしている、と。ブハーリンは、国家の問題についてプロレタリア革命家と小ブルジョア革命家とが意見を共通にしうるような点には気づいて、それを強調した。ブハーリンは、まさにこの両者を区別するものに「気づかなかった」。ブハーリンは、旧来の国家機構を「粉砕し」、「破砕する」必要があること、ブルジョアジーの「息の根をとめる」必要があること、などに気づき、それを強調した。怒りくるった小ブルジョアも、おそらく、同じようにそれを望むことだろう。そして、これは、われわれの革命が一九一七年一〇月から一九一八年二月までのあいだに、大筋においてすでになしとげたことである。

しかし、最も革命的な小ブルジョアでさえ望むはずのないもの、自覚したプロレタリアが望むもの、われわれの革命がまだなしとげていないもの、それについても私の小冊子は述べている。ところが、この任務、あすの日の任務については、ブハーリンは黙して語らなかった。

だが私は、次の事情があるだけになおさらこの点について沈黙を守るわけにいかない理由がある。第一に、共産主義者には、きのうでなく、あすの日の任務により多くの注意をはらうことを期待してしかるべきである。第二に、私の小冊子は、ボリシェヴィキが権力を掌握するまえに書いたものである。つまり、「そら、権力をにぎったあとでは、案の定、規律のことを言いだした……」という俗物的・小市民的な議論をボリシェヴィキに吹きかけるわけにいかな

かったころに書いたものである。

「……社会主義は共産主義に成長転化する……。なぜなら、人々は、強力なしに、従属なしに社会生活の基礎的諸条件を守る習慣を身につけるだろうからである。」（『国家と革命』、七七―七八ページ。[三〇]したがって、「基礎的諸条件」は、権力を掌握するまえに問題にされていたのである）

「……そのときにはじめて、民主主義は……死滅しはじめるであろう。……」、そのときには「人々は、はるか昔からよく知られ、何千年ものあいだあらゆる格言のなかで繰りかえされてきた共同生活の基礎的な規則を守る習慣、強力がなくても、強制がなくても、……国家とよばれる特殊な強制機構がなくても、これらの規則を守る習慣をしだいに身につけるであろう……。」（前掲書、八四ページ。「格言」については、権力を掌握するまえに語っていたのである）

「……共産主義の高い発展段階」（各人はその能力に応じて、各人にはその欲望に応じて）は、「今日の労働生産性を前提とするものでも、また社会的富の貯蔵を――ポミャロフスキーの作品中の神学生のように――おもしろ半分にだいなしにしたり、不可能なことを要求したりするようなことのやれる今日の俗物を前提とするものでもない……。」（前掲書、九一ページ）

「……共産主義の高い段階がやってくるまでは、社会主義者は、労働の基準と消費の基準にたいして社会の側から、また国家の側から、きわめて厳重な統制をくわえるように要求する。……」（前掲書、同ページ）

「……記録と統制――これが、共産主義社会の第一段階……を正しく機能させるために必要とされる主要なものである。」（前掲書、九五ページ）そして、この統制は、「とるにたりない少数者である資本家や、資本家的習癖をもちつづけたがる紳士諸君」にたいしてだけでなく、労働者のうち「資本主義のためにひどく堕落させられた」（前掲書、九六ページ）者にたいしても、また「徒食者や、お坊っちゃんや、ぺてん師や、それに類する資本主義の伝統の保持者たち」（前掲書、同ページ）にたいしても、これを軌道にのせる必要がある。

ブハーリンがこのことを強調しなかったのは、意味深長である。

一九一八年五月五日

一九一八年五月九、一〇、一一日に新聞
『プラウダ』第八八、八九、九〇号に発表
署名――エヌ・レーニン

全集、第五版、第三六巻、二八三―三一四ページ所収
邦訳全集、第二七巻、三二七―三五八ページ所収

アメリカの労働者への手紙(一六)

同志諸君！　一九〇五年の革命に参加し、その後多年のあいだ貴国で暮らしてきたロシアの一ボリシェヴィキから、私の手紙を諸君のもとにとどけようという申し出があった。資本家の利潤の分配をめぐる諸国民の世界的な屠殺にいちばん最後に参加した最新、最強のアメリカ帝国主義の非妥協的な敵として、アメリカの革命的プロレタリアがいまこそとくに重要な役割を演じる使命をおびているだけに、私はなおさら喜んで彼の申し出をうけいれた。まさにいま、アメリカの億万長者――この現代の奴隷所有者は、最初の社会主義共和国の息の根をとめようとするイギリス＝日本の野獣どもの武力進攻に同意をあたえて――直接の同意であろうと間接のものであろうと、あからさまなものであろうと偽善的にカムフラージュしたものであろうと、同じことだ――、血まみれな帝国主義の血まみれな歴史にとくに悲惨な一ページをひらいたのである。

現代の開化したアメリカの歴史は、偉大な、真の解放戦争、真の革命戦争の一つで始まっている。今日の帝国主義戦争のように、奪い取った土地や、かきあつめた利潤の分配をめぐる諸国の国王、地主、資本家の争いから起こった無数の略奪戦争のなかに、こういう革命戦争の数はごく少なかった。それは、アメリカを抑圧して植民地的隷属のもとにおいていた略奪者のイギリス人――この「文明人」のいたるところで、いまでもインドで、エジプトで、また世界のいたるところで、何億という人々を同じように植民地的隷属のもとにおいているのだが――にたいするアメリカ人民の戦争であった。

その時から約一五〇年たった。ブルジョア文明は、ありとあらゆるすばらしい果実をもたらした。アメリカは、結合された人間労働の生産力の発展水準の点で、また機械や、最新技術のあらゆる驚異の利用の点で、教育のすすんだ自由な国のなかで第一位を占めるにいたった。同時に、アメリカは、一方では汚辱と贅沢にひたりきったひとにぎりの厚かましい億万長者と、他方では永久に貧困と紙一重で暮らしている幾百万の勤労者とのあいだのみぞの深さの点でも、第一級の国の一つとなった。封建的奴隷制に抗する革命戦争の第一級の手本を世界に示したアメリカ人民は、ひとにぎり

の億万長者のもとで最新の資本主義的賃金奴隷制におちいって、金持の悪党のために、一八九八年には「解放」を口実にフィリピンを圧殺し、一九一八年には、ドイツ人から「守る」という口実でロシア社会主義共和国を圧殺しようとしている雇われ死刑執行人の役割を演じることになってしまった。
　しかし、諸国民の帝国主義的な屠殺の四年間はむだに過ぎたわけではない。イギリスとドイツとの両略奪グループの無頼漢どもによる人民欺瞞は、争いがたい明白な事実によってすっかり暴露されている。戦争の四年間は、そのもたらした結果によって、獲物の分配をめぐる略奪者間の戦争に適用された資本主義の一般法則を示した。すなわち、最も富み、最も強力な者が最も儲け、最も多くかきあつめたし、最も弱い者が徹底的にかすめとられ、苦しめられ、抑えつけられ、しめあげられたのである。
　イギリス帝国主義の略奪者どもは、「植民地奴隷」の数では、だれよりもまさっていた。イギリスの資本家は、「自分の」（つまり数世紀のあいだに彼らがかきあつめた）土地は寸土も失わずに、かえって、アフリカのドイツ領植民地をことごとく略奪し、メソポタミアとパレスチナを略奪し、ギリシアを圧殺し、ロシアを略奪しはじめた。
　ドイツ帝国主義の略奪者どもは、「彼らの」軍隊の組織性と規律の点ではだれよりもまさっていたが、植民地の点では劣っていた。彼らは、すべての植民地を失いはしたが、ヨーロッパのなかばを略奪したし、その圧殺した小国や弱小民族の数はだれよりも多かった。両方の側について見て、これはなんという偉大な「解放」戦争であろう！　両グループの略奪者、英仏の資本家とドイツの資本家は、その下僕である社会排外主義者、すなわち「自国の」ブルジョアジーの側に移った社会主義者とともに、なんとよく「祖国を守った」ことか！
　アメリカの億万長者は、おそらくだれよりも富んでいたし、地理的に最も安全な位置にあった。彼らはだれよりも儲けた。彼らは、すべての国を、非常に富裕な国をさえ、自分の朝貢国にした。彼らは数千億ドルをかきあつめた。しかも、そのどの一ドルをとってみても、そこには汚辱のあとがみられる。すなわち、かきあつめた獲物の分配について、また労働者を抑圧し国際主義的社会主義者を迫害する仕事での相互「援助」について、イギリスとその「同盟国」とのあいだに、またドイツとその属国とのあいだに結ばれた、けがらわしい秘密条約のあとがそれに見られる。そのどの一ドルをとってみても、各国で金持を富ませ、貧乏人を零落させた「儲けの多い」軍需発注にからむ汚物のかたまりがくっついている。そのどの一ドルにも血のあと

がある。イギリスの略奪者とドイツの略奪者のどちらが獲物を多く手に入れるか、イギリスの死刑執行人とドイツの死刑執行人のどちらが全世界の弱小民族の征服者の第一人者になるかをめぐって起こった、偉大で、気高い、神聖な解放闘争のなかで一千万の死者と二千万の負傷者が流した血の海のあとがある。

ドイツの略奪者は、その軍事的懲罰の野蛮さでレコードを破ったが、イギリスの略奪者は、略奪した植民地の大きさでレコードを破っただけでなく、いまわしい偽善の巧妙さの点でもレコードを破った。いまや、英仏およびアメリカのブルジョア新聞は、何百万部もの紙面でロシアについてのうそと中傷をばらまき、ロシアをドイツ人から「守る」ために努力しているのだと言って、ロシアにたいする自国の略奪戦役を偽善的に正当化しようとしている！

このけがらわしく卑劣なうそをくつがえすためには、多言を要しない。周知の一事実をあげるだけで十分である。一九一七年一〇月、ロシアの労働者が自国の帝国主義政府を打ち倒したとき、革命的な労働者と農民の権力であるソヴェト権力は、無併合・無賠償の公正な講和、あらゆる民族の同権の原則をかたく守る講和を公然と申し入れた、――そういう講和をすべての交戦国に申し入れたのである。

このようなわれわれの申入れを受けいれなかったのは、じつに英仏およびアメリカのブルジョアジーであり、全般的講和についてわれわれと話し合うことさえ彼らは拒否したのである！　彼らこそ、すべての国民の利益を裏切る行動をとったのであり、帝国主義的な屠殺を長びかせたのは、じつに彼らなのである！

ロシアをふたたび帝国主義戦争に引きずりこもうという目算で、講和交渉にそっぽをむき、こうして同じように略奪的なドイツの資本家の手をほどいてやったのは、ほかならぬ彼らであって、そのおかげで、ドイツの資本家は、併合主義的、強制的なブレスト講和をロシアに押しつけたのである！

英仏およびアメリカのブルジョアジーはブレスト講和にたいする「責任」をわれわれになすりつけているが、これ以上いまわしい偽善は、考えることもむずかしい。その気になればブレストを全般的講和の全般的交渉に変えることもできた国々の資本家、ほかならぬその資本家どもが、いまやわれわれの「告発者」として現われているのだ！　植民地の略奪と諸国民の屠殺で大儲けをした英仏帝国主義の禿鷹どもは、ブレスト以後やがてまる一年も戦争を引きのばしてきた。しかも、その彼らが、すべての国に公正な講和を申し入れたわれわれボリシェヴィキ――前ツァーリと英仏資本家のあいだの犯罪的な秘密条約を廃棄し、それを

公表して万人のさらしものにしたわれわれを「告発する」のだ。

どの国に住んでいるかにかかわりなく、全世界の労働者は、われわれに拍手をおくっている。——われわれが、帝国主義的結びつきの、けがらわしい帝国主義的条約の、帝国主義的鎖の鉄環を断ち切ったことに、——われわれがきわめて苦しい犠牲をはらって自由の天地にのがれでたことに、——帝国主義者にずたずたにされ、かすめとられはしたものの、社会主義共和国として、われわれが帝国主義戦争の局外に出て、全世界の前に平和の旗、社会主義の旗をかかげたことに、拍手を送っている。

国際帝国主義者の徒党がこのことでわれわれを憎み、われわれを「告発している」のは、わが国の右派エス・エルとメンシェヴィキをふくむ、帝国主義の下僕どもが、みなわれわれを「告発している」のは、異とするにあたらない。われわれは、帝国主義のこれらの番犬のボリシェヴィキ憎悪からも、万国の自覚した労働者の同情からも、われわれの大業の正しさにたいする新しい確信を汲みとっている。

ブルジョアジーに勝利するため、権力を労働者の手に移すため、国際プロレタリア革命の火蓋をきるためには、領土の一部の犠牲をもふくめて、帝国主義から手痛い敗北をこうむるという犠牲をもふくめて、どんな犠牲も拒むことはできないし、また拒んではならないということ——これがわからない者は、社会主義者ではない。社会主義革命の大業が実際に推進されるためでさえあれば、「自分の」祖国がどんなに大きな犠牲をはらうことにもよろこんで応じる覚悟を行動によって証明しなかった者は、社会主義者ではない。

イギリスとドイツの帝国主義者は、「自分たち」の事業のため、つまり世界の支配権をかちとるためには、ベルギー、セルビアをはじめ、さらにはパレスチナ、メソポタミアなど、幾多の国々を完全に没落させ圧殺することをはばからなかった。それなのに、社会主義者は、「自分たちの」大業のため、全世界の勤労者を資本のくびきから解放するため、世界の恒久平和をたたかいとるために、犠牲をともなわない道が見つかるまで待っていなければならないのか？　やすやすと成功するという「保障」があたえられるまで、戦闘を開始するのを恐れなければならないのか？　ブルジョアジーによってつくられた「自分の祖国」の安泰と保全を、世界社会主義革命の利益に優先させなければならないのか？　そういうふうに考える国際社会主義の腐敗分子、ブルジョア道徳の下僕どもは、何度軽蔑されても当然である。

英仏およびアメリカ帝国主義の野獣どもは、ドイツ帝国主義と「協定した」ということでわれわれを「告発する」。なんという偽善者だ！　おお、「彼ら」自身の国の労働者がわれわれに示している同情に恐れおののきながら、労働者政府を中傷するとは、なんというろくでなしだ！　しかし、彼らの偽善は暴露されるだろう。彼らは、「社会主義者」が労働者に対抗し、勤労者に対抗してブルジョアジー（自国および他国の）と結ぶ協定と、自国のブルジョアジーに勝利した労働者を守るために、ある国のブルジョアジーに対抗して他の国のブルジョアジーと結ぶ協定、すなわちプロレタリアートがブルジョアジーのいろいろなグループのあいだの対立を利用するための協定と、この二つの協定の差異がわからないようなふりをしている。

実際には、ヨーロッパ人ならだれでもこの差異を知りすぎるほど知っているし、アメリカ人民は、つぎに示すように、自国の歴史上で、とくにまざまざとその差異を「体験した」のであった。協定にもいろいろある。フランス人の言う fagots et fagots〔一概には言えない〕である。

一九一八年二月に、国際革命がまだ十分成熟しないうちに、プロレタリアートの国際連帯を信頼して、その軍隊の動員を解除して無防備になっているロシアにたいして、ドイツ帝国主義の略奪者が軍隊をさしむけてきたとき、私はフランスの王党派とある種の「協定」を結ぶのをすこしもためらわなかった。口先ではボリシェヴィキに共鳴しながら、実際には誠心誠意フランス帝国主義につかえていたフランスの陸軍大尉サドゥルが、フランスの将校ド・リュベルサックを私のところに連れてきた。「私は王党派である。私の目標はただ一つ、ドイツの敗北である」とド・リュベルサックは私に言明した。それはわかりきったことだ（cela va sans dire）、と私は答えた。このことは、破壊活動の専門家であるフランスの将校が、ドイツ軍の進攻を妨げるため鉄道線路を爆破してわれわれのお役に立とうと申し入れたことについて、私がド・リュベルサックと「協定する」のをすこしも妨げなかった。これは、自覚した労働者ならだれでも是認する「協定」、社会主義のための協定の見本であった。私とフランスの王党派とは、おたがいにその「相棒」を絞首刑にしたがっていることを承知のうえで、握手をした。しかし、われわれの利害は一時一致していた。襲いかかってくる略奪者ドイツ人に対抗して、われわれは、ロシアおよび世界の社会主義革命のために、他の帝国主義者の同じように略奪的な反対利益を利用したのである。こうして、われわれは、ロシアと他の国々の労働者階級の利益につかえた。われわれは、全世界のプロレタリアートを強め、ブルジョアジーを弱めた。われわれは、一

連の先進諸国で急速に成熟しつつあるプロレタリア革命が熟しきるのを待ちながら、あらゆる戦争できわめて当然な、必須の駆引、迂回、退却の戦術を用いたのであった。

そして、英仏およびアメリカ帝国主義の鮫どもがどんなに怒ってわめきたてようと、どんなにわれわれを中傷しようと、右派エス・エル、メンシェヴィキその他の社会愛国主義新聞の買収に数百万を費やそうとも、私は、英仏軍のロシア攻撃がそれを必要とならせる場合には、同じような「協定」をドイツ帝国主義の略奪者と結ぶのを一瞬もためらわないであろう。私は、ロシア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカの、一言でいえば全文明世界の、自覚したプロレタリアートが私の戦術を是認するであろうことを、非常によく知っている。こういう戦術は、社会主義革命の事業を容易にし、その到来をはやめ、国際ブルジョアジーを弱め、彼らを打ち破りつつある労働者階級の地歩を強化するであろう。

ところで、アメリカ人民は、はるか以前にこの戦術を採用し、しかも、革命の利益のためにそれを用いたのであった。アメリカ人民が抑圧者イギリス人を相手に偉大な解放戦争をおこなっていたとき、現在の北アメリカ合衆国の一部を領有していた抑圧者のフランス人とスペイン人もまた、アメリカ人民と対立していた。その困難な解放戦争のなかで、アメリカ人民も、抑圧者を弱め、抑圧にたいして革命的にたたかっている人々を強めるために、被抑圧大衆の利益のために、一方の抑圧者に対抗してもう一方の抑圧者と「協定」を結んだ。アメリカ人民は、フランス人、スペイン人、イギリス人のあいだの不和を利用した。アメリカ人民は、ときには、抑圧者たるフランス人およびスペイン人の軍隊とともに抑圧者イギリス人を敵としてたたかったことすらあった。アメリカ人民は、まずイギリス人に勝ち、そのあとでフランス人とスペイン人から自分を解放した（一部は領土の買収によって）。

歴史的活動はネフスキー大通りの歩道ではない、とロシアの大革命家チェルヌィシェフスキーは言った。（九）プロレタリアートの革命を「条件づきで」のみ「容認する」者、すなわち、革命がやすやすと順調にすすむこととか、さまざまな国のプロレタリアの統一行動がただちに起こることとか、敗北しないことがあらかじめ確実であることとか、革命の道が広く、自由で、まっすぐであることとか、また、勝利にむかってすすむさいに、ときとして非常に苦しい犠牲をはらったり、「包囲されたとりでのなかでじっともちこたえたり」、さてはひどく狭い、通りにくい、まがりくねった、危険な山路をぬけて進んだりする必要がないこととか、そういう「条件づき」でのみ革命を「容認する」

者は、革命家ではない。それは、ブルジョア・インテリゲンツィアのもの知りぶりからぬけだしていない人である。そういう人は、わが右派エス・エルや、メンシェヴィキや、また（それより稀ではあるが）左派エス・エルでさえそうであるように、実際にはたえず反革命的ブルジョアジーの陣営に転落してゆくものであろう。

これらの諸君は、ブルジョアジーのあとについて、革命の「混乱」や、産業の「破壊」や、失業や、食糧不足のことでわれわれを非難するのが好きである。帝国主義戦争を歓迎し支持していた連中、あるいはこの戦争をつづけたケーレンスキーと「協定した」連中のこういう非難は、なんと偽善的なことか！　まさに帝国主義戦争にこそこれらすべての災厄についての罪がある。戦争によって生みだされた革命は、多年にわたる破壊的、反動的な諸国民屠殺の遺産として残された、信じがたいほどの困難と苦痛をとおりぬけないわけにはいかない。産業の「破壊」や「テロル」のことでわれわれを非難するのは、偽善的にふるまうことであるか、さもなければ、愚鈍なもの知りぶり、革命とよばれるあの荒れくるう、極度に激化した階級闘争の基本的条件についての無理解をさらけだすことである。

この種の「告発者」が階級闘争を「認めている」としても、それは、実質上、口先だけの承認にすぎず、実際には、彼らは諸階級の「協定」と「協力」という小市民的なユートピアにたえずおちこんでゆく。なぜなら、革命の時代には、階級闘争はつねに、かならず、あらゆる国で内乱の形態をとったが、苦痛きわまる破壊もなく、テロルもなく、戦争の利益のために形式的民主主義を制限することもない内乱は、考えられないからである。甘ったるい坊主だけが——キリスト教の坊主であろうと、サロン社会主義者や議会社会主義者という「俗界の」坊主であろうと、同じことだが——、彼らだけがこの必然性を見ず、理解せず、感じないでいられるのである。死んだような「箱のなかの男」だけが、人類最大の問題を闘争と戦争によって解決することを歴史が要求するときに、最大の情熱と決意をもって戦闘に身を投じるかわりに、こういう理由で革命から遠ざかるようなことをやれるのである。

アメリカ人民のうちには革命的な伝統がある。われわれボリシェヴィキへの心からの共鳴をたびたび表明したアメリカ・プロレタリアートの最良の代表者は、この伝統をうけついだのである。その伝統とは、一八世紀のイギリス人にたいする解放戦争であり、ついで一九世紀の内戦である。一八七〇年には、いくつかの産業部門や国民経済の「破壊」だけをとりあげるなら、アメリカはある点で一八六〇年よりも遅れていた。しかし、そういうことを根拠にして

一八六三―一八六五年のアメリカの内戦の最大の、世界史的、進歩的、革命的な意義を否定しようとする者がいるとすれば、それはなんというもの知り学者、なんというたわけものであろう！

黒人の奴隷制をくつがえし、奴隷所有者の権力をくつがえすためには、国全体が長年の内戦と、およそ戦争につきものの限りない荒廃、破壊、テロルをとおりぬけなければならなかったことを、ブルジョアジーの代表者は理解している。ところが、賃金奴隷制、資本主義的奴隷制をくつがえし、ブルジョアジーの権力をくつがえすという、はるかに大きな任務が問題となっている今日、ブルジョアジーの代表者や擁護者は、またブルジョアジーにおどしつけられ、革命を忌避する社会改良主義者は、内乱の必然性と正当性を理解する能力も意志ももたないのである。

アメリカの労働者は、ブルジョアジーについていきはしないだろう。彼らは、われわれとともにあるだろうし、ブルジョアジーにたいする内乱に賛成するであろう。全世界とアメリカの労働運動の歴史は、私のこの確信を強めてくれる。私はまた、アメリカ・プロレタリアートに最も愛されている指導者のひとりユージン・デブズのことばを思いだす。一九一五年の終りごろだと思うが、彼は、『理性へのよびかけ』(Appeal to Reason)[二三]にのった論文《What shall I fight for》(『私はなんのためにたたかうべきか』)[二四]――私は一九一六年のはじめに、スイスのベルンでのある公開の労働者の集まりでこの論文を引用したことがある――のなかで、次のように書いた。

――彼デブズにとっては、現在の犯罪的・反動的な戦争のための戦費に賛成投票するよりは、銃殺されたほうがましなのである。彼デブズは、プロレタリアの立場からみて神聖で正当な戦争を、ただ一つしか知らない。それは、資本家を敵とする戦争、人類を賃金奴隷制から解放するための戦争である、と。

アメリカの億万長者の頭目で、資本家の敵どもの召使であるウィルソンが、デブズを投獄したことに、私は驚かない。真の国際主義者にたいして、革命的プロレタリアートの真の代表者にたいして、ブルジョアジーが凶暴のかぎりをつくすなら、そうするがよい！　彼らの残忍と凶暴が激しければ激しいほど、プロレタリア革命の勝利の日は近いのである。

わが国の革命によって引きおこされた破壊のことでわれわれを非難する者がある。……だが、いったいだれが非難しているのか？　ブルジョアジーの腰巾着どもである。四年間の帝国主義戦争によって、ヨーロッパ文化をほとんど完全に破壊し、ヨーロッパを未開状態と野蛮化と飢えとに

みちびいた当のブルジョアジーの腰巾着どもである。そのブルジョアジーがいまわれわれに、革命をやるのにこういう破壊を土台としないよう、文化の残骸のなかで、戦争がつくりだした残骸と廃墟のなかでやらないよう、戦争のために野蛮化した人々といっしょにやらないように、要求するのである。おお、このブルジョアジーはなんと人道的で公正なことだろう！

彼らの召使どもは、テロルのことでわれわれを非難する。……イギリスのブルジョアは彼らの一六四九年を忘れてしまい、フランスのブルジョアは彼らの一七九三年[(三四)]を忘れてしまった。ブルジョアジーが自分のために封建領主にたいしてテロルを用いたときには、そのテロルは正しくかつ当然なものであった。労働者と貧農が大胆不敵にもブルジョアジーにむかってテロルを用いだしたとき、テロルはけしからぬ、犯罪的なものとなった！　ある搾取する少数者が他の搾取する少数者にとってかわるためにテロルを用いたときには、テロルは正しくかつ当然なものであった。テロルは、それが搾取する少数者の全体を打倒するため、ほんとうの大多数者のため、プロレタリアートと半プロレタリアート、労働者階級と貧農のために用いられはじめたとき、けしからぬ、犯罪的なものとなった！

国際帝国主義のブルジョアジーは、「自分たちの」戦争、イギリスの略奪者か、それともドイツの略奪者か、どちらが全世界を支配するかをめぐって起こった戦争で、一千万人を殺し、二千万人を不具にした。もしわれわれの戦争、抑圧者と搾取者にたいする被抑圧者と被搾取者の戦争がすべての国を合わせて五〇万人あるいは一〇〇万人の犠牲を必要とするなら、ブルジョアジーは言うだろう、まえの犠牲は当然で、あとの犠牲は罪悪である、と。

プロレタリアートはまったく違ったことを言うだろう。プロレタリアートは、いま、帝国主義戦争の惨禍のただなかで、すべての革命が教えるあの偉大な真理を、労働者の最良の教師である近代社会主義の創始者たちが彼らに遺言していった真理を、完全に、明瞭に会得しつつある。その真理とは、搾取者の反抗を鎮圧することなしには革命の成功はありえない、という真理である。われわれ労働者と勤労農民が国家権力を手に入れたとき、搾取者の反抗を鎮圧することがわれわれの義務であった。われわれがそれをやったこと、いまもやっていることを、われわれは誇りにしている。われわれは、強硬に、断固としてそれをやる点でまだ不十分なことを、残念に思っている。

われわれは、あらゆる国で、社会主義革命にたいするブルジョアジーの気ちがいじみた反抗が避けられないこと、

この革命が成長するにつれて彼らの反抗も増大することを知っている。プロレタリアートは、この反抗を粉砕するであろう。反抗するブルジョアジーとの闘争のなかで、勝利と権力を獲得できるだけに最後的に成熟をとげるであろう。

われわれの革命が誤りをおかすたびに、金しだいのブルジョア新聞が、そのことを世界中に叫びたてるなら、叫びたてるがいい。われわれは、自分の誤りを恐れない。革命が始まったからといって、人間が聖人になったわけではない。幾世紀にもわたって抑圧され、しいたげられ、貧困と無知と野蛮化の締め木にむりやり締めつけられてきた勤労諸階級は、誤りをおかさずに革命をなしとげることはできない。そして、私がまえに一度指摘したことがあるように、ブルジョア社会の死骸(六〇)は、棺に入れて、土に埋ずめるというぐあいにはいかない。倒された資本主義は、われわれのあいだで腐敗し、分解し、空中に毒気をまきちらし、われわれの生活を毒し、古いもの、腐ったもの、死んだものの無数の糸と結びつき、新しいもの、新鮮なもの、若いもの、生きたものを絡みこむ。

ブルジョアジーとその下僕(わが国のメンシェヴィキや右派エス・エルをふくめて)が世界中にむかってわめきたてているわれわれの誤り一〇〇件にたいして、偉大な英雄的行為は一万件にものぼる。しかも、それらの行為は単純で、目だたず、工場地帯や片田舎の日常生活のなかに埋もれていて、成功のたびにそれを世界中に吹聴することに慣れていない(またその機会もない)人々によっておこなわれたものだけに、ますます偉大で英雄的なのである。

しかし、たとえこれが逆であったとしても——こういう仮定が正しくないことはわかっているが——、われわれの正しい行為一〇〇件にたいして誤りが一万件にのぼっていたとしても、それでもわれわれの革命は偉大で不敗であろう。また世界史の前に立っても、それは偉大で不敗なものであろう。なぜなら、少数者、金持だけ、教育ある人々だけではなく、真の大衆が、勤労者の大多数者が、みずから新しい生活を打ち立て、自分の経験によって社会主義的組織のきわめて困難な諸問題を解決しつつあるからである。

そういう活動、幾千万の普通の労働者と農民が彼らの全生活を改造するためにおこなうこのきわめて良心的で誠実な活動のなかでおかされた誤り、そういう誤りは、その一つひとつが少数の搾取者の「誤りのない」成功、勤労者をたぶらかし、ぺてんにかけるうえでの成功の数千件、数万件に匹敵する。なぜなら、労働者と農民はそういう誤りをつうじてはじめて新しい生活の建設を学びとり、資本家なしにやってゆく道を学びとるからであり、そうすることによってはじめて——数千の障害をのりこえて——、勝利に

みちた社会主義への道をきりひらくからである。

革命的活動をおこなうなかで誤りをおかしているのは、わが国の農民である。すなわち、一九一七年一〇月二五日から二六日（旧暦）にかけて一夜のうちにいっさいの土地私有を一挙に廃止し、いまやひと月またひと月と、限りない困難を克服し、自分の誤りをただしながら、経済生活の新しい諸条件の組織化、富農（クラーク）との闘争、勤労者へ（金持へではなく）の土地の確保、共産主義的大規模農業への移行という困難きわまる任務を実践的に解決しているその農民である。

革命的活動をおこなうなかで誤りをおかしているのは、わが国の労働者である。すなわち、いまや数ヵ月間にほとんどすべての巨大工場を国有化し、毎日非常な苦労をかさねながら、全産業部門の管理という新しい仕事を学んでおり、惰性、小ブルジョア根性、利己心のはなはだしい抵抗を克服しながら、国有化された経済を軌道にのせようとしており、新しい社会的結びつき、新しい労働規律、組合員にたいする労働組合の新しい統制力の礎石を一つひとつ積みあげているその労働者である。

革命的活動をおこなうなかで誤りをおかしているのは、はやくも一九〇五年に大衆の力づよい高揚によってつくりだされたわれわれのソヴェトである。労働者と農民のソヴェト——それは、国家の新しい型であり、民主主義の新しいより高度の型である。それは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の形態であり、ブルジョアジーぬきで、ブルジョアジーに反対しておこなわれる国家統治の方法である。すべてのブルジョア共和国では、最も民主的な共和国でさえ、民主主義はつねに金持のための民主主義であるが、ここでは民主主義は、そういう金持のための民主主義ではなくなって、はじめて大衆に、勤労者に役だっている。人民大衆は、プロレタリアと半プロレタリアの執権（ディクタツーラ）を実現する任務——それを解決しなくては社会主義など問題になりえないこの任務を、何億という多数の人々のために、はじめて解決しようとしている。

もの知り学者や、ブルジョア民主主義的偏見あるいは議会主義的偏見を度しがたいほど詰めこまれた連中が、われわれの代表ソヴェトがたとえば直接選挙でないことに、疑わしそうに頭を振るなら振るがよい。この連中は、一九一四—一九一八年の大変革の時代に、なにひとつ忘れず、またなにひとつ学びとらなかったのである。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）と勤労者のための新しい民主主義との結合、内乱と大衆のきわめて広範な政治参加との結合、こういう結合は即席でできるものではなく、ありきたりな議会制民主主義の陳腐な形式におさまるものでもない。新しい世界、社

会主義の世界——これこそ、ソヴェト共和国としてその輪郭をわれわれの前にあらわしているものである。そして、この世界がすっかりできあがったものとして生まれてこず、ミネルヴァがユピテル[166]の頭から出てくるように、いっぺんに飛びだしてこないことは、異とするに足りない。

古いブルジョア民主主義的憲法は、たとえば、形式的な平等と集会権をれいれいしく書きしるしたが、われわれのプロレタリア的・農民的ソヴェト憲法は、形式的平等の偽善をかなぐりすてる。ブルジョア共和主義者が王座をくつがえしたとき、彼らは君主主義者と共和主義者との形式的平等などに気をつかわなかった。ブルジョアジーの打倒が問題となっているときに、ブルジョアジーのための権利の形式的平等を求めることができるのは、裏切者かまぬけだけである。りっぱな建物はすべてブルジョアジーの占めるところだとすれば、労働者と農民にとって、「集会の自由」など三文の値うちもない。わがソヴェトは、都市でも農村でも、金持からりっぱな建物をみな取りあげ、それらの建物を全部労働者と農民に引き渡して、彼らの組合や集会のために使えるようにした。これこそ、われわれの集会の自由——勤労者のための集会の自由である！　ここにこそ、わがソヴェト憲法、わが社会主義憲法の意味と内容がある！

だから、今後もどんな不幸がわがソヴェト共和国をおそってくるにせよ、それが不敗であることを、われわれはみな深く信じている。

ソヴェト共和国は不敗である。なぜなら、凶暴な帝国主義のどの攻撃も、われわれが国際ブルジョアジーからこうむるどの敗北も、そのたびに労働者と農民の新しい層をつぎつぎに闘争に立ちあがらせ、非常な犠牲を代価として彼らを教育し、彼らを鍛え、新しい大衆的英雄精神を生みだすからである。

アメリカの労働者諸君、諸君からの援助はおそらくこれからやってくるであろうが、すぐにはこないことを、われわれは知っている。革命の発展は、国が違えば、違った形態で、違ったテンポですすむ（またそれ以外にすすみようはない）からである。ヨーロッパのプロレタリア革命は、最近急速に成熟しつつあるとはいえ、おそらくここ数週間内にまだ大きく燃えあがりはしないだろうことを、われわれは知っている。われわれは、国際革命が不可避だということに賭けている。だからといって、われわれは、一定の短い期期内に革命がかならず起こるということに賭けるほどのばかではけっしてない。われわれは自国で一九〇五年と一九一七年の二つの大革命を見た。だから、革命は注文してつくれるものでも申合せでつくれるもので

共産主義的・ボリシェヴィキ的戦術のほうへ、滅びつつある文化と滅びつつある人類をただ一つ救うことのできるプロレタリア革命のほうへ、徐々にではあるが、着実にすすんでいる。

要するに、われわれは不敗である。なぜなら、世界プロレタリア革命は不敗だからである。

エヌ・レーニン

一九一八年八月二〇日

『プラウダ』第一七八号、一九一八年八月二二日
全集、第五版、第三七巻、四八―六四ページ所収
邦訳全集、第二八巻、五三―六八ページ所収

もないことを知っている。いろいろな事情が社会主義的プロレタリアートのわがロシア部隊を前面に押しだしたが、それはわれわれの功績によるものではなく、ロシアの特別な後進性によるものであったこと、そして、国際革命が爆発するまでには個々の革命の敗北がいくつもありうることを、われわれは知っている。

それにもかかわらず、われわれが不敗であることを、われわれは確実に知っている。なぜなら、人類は帝国主義的屠殺にくじけはせず、それに打ちかつだろうからである。そして、帝国主義戦争の苦役の鎖を打ち砕いた最初の国は、わが国であった。われわれは、この鎖を破壊するための闘争で、手いたい犠牲をはらったが、しかしこの鎖を打ち砕いた。われわれは帝国主義的従属を脱している。われわれは、帝国主義の完全な打倒をめざす闘争の旗を全世界の前にかかげた。

われわれは、国際社会主義革命の他の部隊が救援にくるまでは、包囲されたとりでのなかにいるようなものである。だが、そういう部隊は存在する。それは、われわれの部隊よりも多人数である。それは、帝国主義の蛮行がつづくにつれて、成熟し、増大し、強化する。労働者は、自国の裏切社会主義者、ゴンパーズ、ヘンダソン、ルノデル、シャイデマン、レンナーの徒と袂を分かっている。労働者は、

事項注

（一）**著書『国家と革命。マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務』は、**レーニンが一九一七年八月から九月のあいだに地下で書いたもの。

レーニンは、国家の問題を理論的に究明する必要があるという考えを、一九一六年の後半に述べている。一九一六年一二月、レーニンは、覚え書『青年インタナショナル』のなかで、国家とプロレタリアートの独裁にたいする反マルクス主義的・半無政府主義的な見解を一連の論文で主張していたブハーリンの立場をきびしく批判し、国家にたいするマルクス主義の態度についてくわしい論文を書くことを約束した（本選集、第七巻、一三一―一三四ページを参照）。

一九一六年秋と一九一七年のはじめ、当時チューリヒに住んでいたレーニンは、図書館で一心に仕事をし、国家の問題についてのマルクス、エンゲルスの著作を研究した。一九一七年三月四（一七）日、レーニンはア・エム・コロンタイに、国家にたいするマルクス主義の態度の問題についての材料の準備をほとんど終わった、と知らせている。この材料は、『マルクス主義国家論』と上書きされたノートに細かい字でびっしり書きこまれていた。そこには、マルクスとエンゲルスの著作からの引用や、カウツキー、パンネクーク、ベルンシュタインの著書や論文の抜粋と、それらにたいするレーニンの論評、結論、概括が集められていた。

レーニンは一九一七年四月にスイスからロシアに移るさい、途中で臨時政府に逮捕されるかもしれないと考えて、国家論ノートを国外においてきた。七月事件後、地下にもぐったレーニンは、カーメネフにあてた短信のなかでこう書いている。「ここだけでの話だが――私がやられるようなことがあったら、私のノート『マルクス主義国家論』（ストックホルムにとめてある）を出版するよう、お願いする。青表紙で、製本してある。マルクス、エンゲルスからの引用や、さらにカウツキーのパンネクークへの反論からの引用が全部集めてある。注意書き、備考、定式もいくつかある。一週間もあれば出版できると思う。それを重要だと思うのは、プレハーノフだけでなく、カウツキーも混乱しているからだ。……」（全集、第三六巻、五三四ページ）。『マルクス主義国家論』をストックホルムから受けとったレーニンは、ノートの材料をもとにして『国家と革命』を書いたが、材料全部を利用したわけではけっしてなかった。

計画では、『国家と革命』は全七章のはずであったが、最後の第七章「一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験」は書かれずに終わった。この章のくわしい腹案と「結論」のプランしか残っていない。レーニンは本書の出版所にあてた手紙のなかで、「第七章を書き上げるのが遅くなりすぎるか、大きくなりすぎた場合には、最初の六章だけを第一分冊として単独に出さなければなるまい」と書いている。

『国家と革命』の第二版は一九一九年に発行され、第二章に「一八五二年におけるマルクスの問題提起」という新しい一節がくわえられた。九

（二）**フェビアン派**――一八八四年に創立されたイギリスの改良主義的団体、フェビアン協会の会員をさす。この協会の名は、ハンニバルとの戦争で決戦を回避する待機戦術をとってクンクタトル（ぐずぐずする者）の異名をえた紀元前三世紀のローマの司令官フ

アピウス・マクシムスの名にちなんだもの。フェビアン協会員は、主として学者、作家、政治家などのブルジョア・インテリゲンツィア（ウェッブ夫妻、ラムジ・マクドナルド、バーナード・ショー等）であった。彼らは、プロレタリアートの階級闘争と社会主義革命との必要を否定し、小さな改良を積みかさね、徐々に社会を改造してゆく方法によってのみ、資本主義から社会主義への移行は可能である、と主張した。一九〇〇年に、フェビアン協会は労働党に加盟した。「フェビアン社会主義」は労働党イデオロギーの一源泉となっている。第一次大戦中、フェビアン派は社会排外主義の立場をとった。九

(三) マルクス＝エンゲルス選集、第七冊、二六四ページを参照。以下本書、一四、一五―一六、一六、一七、一八、一九ページの引用については、それぞれ同書、二六四―二六六、二六六、二六六―二六七、二六七―二六九、二六九、二七〇ページを参照。一三

(四) エス・エル（社会革命党）――ロシアの小ブルジョア政党。一九〇一年末から一九〇二年のはじめにかけて、各種のナロードニキ主義的グループおよびサークルの合同によって成立した。第一次世界大戦中、エス・エルの大多数は社会排外主義の立場をとった。

二月革命後、エス・エルは、メンシェヴィキとともに臨時政府の主要な支柱となり、同党の指導者（ケーレンスキー、アウクセンチエフ、チェルノーフ）は政府に入閣した。エス・エル党は、地主的土地所有の一掃という農民の要求を支持することを拒否し、地主的土地所有の存続を主張した。エス・エルの臨時政府閣僚たちは、地主の土地を占拠した農民にたいして討伐隊を派遣した。

外国の軍事干渉と内戦の時期には、エス・エルは反革命的破壊活動をおこない、干渉軍と白衛軍を積極的に支持し、反革命陰謀に参加し、党と国家の活動家にたいするテロル行為を組織した。内戦の終了後も、国の内外で敵対活動をつづけた。なお注一四二を参照せよ。一三

(五) 氏族組織――血縁者の集団からなる原始共同体的な社会制度で、人類史上最初の社会経済構成体。その発展過程で家母長制の時期と家父長制の時期を経過する。その生産関係の基礎は、生産手段の共有と生産物の均等分配とであったが、これは基本的には当時の生産力の発展水準が低かったためであった。やがて私的所有および階級が発生し発展するのにともなって、氏族制度は崩壊し、その原始的民主主義に代わって国家が成立し、歴史は階級社会の時代にはいるのである。一四

(六) マルクス＝エンゲルス全集、第二〇巻、二八九―二九〇ページを参照。二〇

(七) マルクスの著作『ゴータ綱領批判』（第四節）、エンゲルスの著作『反デューリング論』、および一八九五年三月一八―二八日付のエンゲルスのアウグスト・ベーベルへの手紙をさす（全集、第一九巻、二七―三二ページ、第二〇巻、前注箇所、および第一九巻、三―一〇ページを参照）。二三

(八) マルクス『資本論』、全集、第二三巻b、九八〇ページを参照。二三

(九) 三十年戦争（一六一八―一六四八年）は全ヨーロッパ戦争であった。この戦争は、ハプスブルク君主国のくびきとカトリック反動派の攻勢とに抗するベーメンの蜂起で始まった。戦争は、封建的カトリック陣営（教皇、スペインとオーストリアのハプスブルク家、ドイツのカトリック派諸侯）と、ハプスブルク家の敵であるフランス国王に支援されたプロテスタント諸国（ベーメン、デンマー

ク、スウェーデン、ブルジョア的オランダおよび宗教改革を受けいれた一連のドイツ諸邦）とのあいだの戦争に転化した。ドイツはこの戦いの主戦場となり、参戦諸国による略奪とその強盗的要求との対象となった。この戦争は、その第一段階では封建的＝絶対主義的ヨーロッパの反動勢力にたいする抵抗という性格をもっていたが、とくに一六三五年以後は、相あらそう外国征服者たちがあいついでドイツ領土に侵入する結果となった。戦争は、一六四八年にヴェストファーレン和約の締結をもって終わり、この和約によってドイツの政治的分裂が固定化された。二三

（一〇）マルクス＝エンゲルス全集、第二〇巻、一九〇ページを参照。なお『反デューリング論』の初版は一八七八年に、第三版は一八九四年に出た。二三

（一一）マルクス＝エンゲルス全集、第四巻、一九〇ページおよび四八六ページを参照。二四

（一二）**ゴータ綱領**——一八七五年、ゴータの党大会で、それまでは別々の社会主義政党であったアイゼナッハ派（アウグスト・ベーベルとヴィルヘルム・リープクネヒトに指導され、マルクスとエンゲルスの思想的影響下にあったもの）とラサール派とが合同したさいに採択されたドイツ社会主義労働者党の綱領。この綱領は、折衷主義の欠陥をもち、最も重要な諸問題についてラサール派に譲歩し、ラサール主義的な規定を受けいれた日和見主義的なものであった。マルクスは労作『ゴータ綱領批判』のなかで、エンゲルスはベーベルにあてた一八七五年三月一八—二八日付の手紙のなかで、ゴータ綱領草案を徹底的に批判し、一八六九年のアイゼナッハ綱領にくらべて大きな一歩後退であるとみなした（注七を参照）。二四

（一三）マルクス＝エンゲルス全集、第四巻、一九〇ページを参照。二五

（一四）前掲書、四八六ページおよび四九四ページを参照。二六

（一五）この挿入文は、レーニンが、注一に述べた『国家と革命』執筆のための準備労作のなかで、「マルクスとエンゲルスが一八七一年以前に『プロレタリアートの執権』について述べたことがあるかどうか、さがし、調べること。ない！　と思われる」と書いていることと照応している。だがじつは、この章の第三節にあるように、マルクスはすでに一八五二年にヴァイデマイアーあての手紙のなかで「プロレタリアートの執権」ということばを用いている。レーニンは、おそらく『国家と革命』の初版が出版されたのちにこの手紙のことを知ったのであって、自用の初版本の最後のページに、この手紙が発表された雑誌の名、号数などを書きとめており、第二版で第二章に第三節をつけくわえたのである。二六

（一六）**正統王政**——一八一四—一八一五年にナポレオン一世が打倒されたのち、フランスに復活された反動的なブルボン王朝の統治期。一八三〇年の七月革命をもって終わった。

七月王政——一八三〇—一八四八年にフランスを支配していたオルレアン王朝の統治期。オルレアン王朝は、金融貴族と大産業ブルジョアジーの利益を代表していた。二九

（一七）マルクス＝エンゲルス全集、第八巻、一九二一—一九三ページを参照。二九

（一八）**一九一七年二月二七日**（新暦三月一二日）——一九一七年二月のロシアのブルジョア民主主義革命が勝利した日。この日、ペトログラードの労働者と兵士の蜂起によって、ツァーリ君主制が打倒された。三一

（一九）**黒百人組**——極反動の暴力団体（ロシア国民同盟、大天使

ミカエル会議）がこうよばれていた。一九〇五年に結成され、そのなかではルンペン・プロレタリア、小商人、小手工業者の出身者が多かった。大地主、大商人に指導され、官憲の支持をえて、解放運動の弾圧や、ユダヤ人の虐殺、革命家の暗殺などの暴力行為をはたらいた。ここからして、極右派を総称して黒百人組とよぶようになった。三一

（二〇）　カデット——ロシアの自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの主要な政党であった立憲民主党の党員のこと。同党は、一九〇五年一〇月に結成され、ブルジョアジーの代表者、地主のなかのゼムストヴォ活動家、ブルジョア・インテリゲンツィアが、これに参加した。その後、カデットは帝国主義ブルジョアジーの政党となった。第一次世界大戦中、カデットはツァーリ政府の侵略的対外政策を積極的に支持した。二月革命のときには君主制を救おうとつとめた。ブルジョア臨時政府内で指導的な地位を占めたカデットは、アメリカ、イギリス、フランスの帝国主義者に有利な反人民、反革命の政策を推しすすめた。十月革命が勝利すると、ソヴェト権力に敵対し、あらゆる反革命的武力行動や干渉軍の軍事行動にくわわった。彼らの多くは国外に亡命して、反ソ活動をつづけた。三二

（二一）　マルクス＝エンゲルス全集、第八巻、五四四—五四五ページを参照。三三

（二二）　この節は、一九一九年の第二版で補足された。三三

（二三）　『ノイエ・ツァイト』（『新時代』）——ドイツ社会民主党の理論雑誌。一八八三年から一九二三年までシュトゥットガルトで発行されていた。エンゲルスの死後、一八九〇年代の後半から、同誌は修正主義者の論文を系統的に掲載するようになった。第一次世界大戦中は、同誌は中央派的立場をとり、社会排外主義者を事実上支持した。三三

（二四）　マルクス＝エンゲルス選集、第八冊、一七四ページを参照。三四

（二五）　マルクス『フランス＝プロイセン戦争についての国際労働者協会総評議会の第二の呼びかけ』、全集、第一七巻、二五九ページを参照。三六

（二六）　一九〇五年一二月のモスクワ蜂起——第一次ロシア革命の時期の一九〇五年一二月のモスクワ・プロレタリアートの武装蜂起をさす。蜂起は、専制の打倒、民主的共和制の樹立というスローガンのもとにおこなわれた同年一〇月の全国的政治ストライキ（注一七八を参照）によって準備された。一二月七日からモスクワで大規模な政治的ゼネストが始まった。当局は兵力を動かして攻勢に移った。一〇日に、ストライキは武装蜂起に転化し、九日間にわたって激しい戦闘がつづいた。蜂起した労働者に武装闘争の経験がなく、武器が不足し、軍隊との結びつきも十分でなかったことが、メンシェヴィキやエス・エルの降伏主義的態度とあいまって、蜂起を敗北にみちびいた。一二月の武装蜂起が失敗したのち、革命は衰退した。

ここにあげているプレハーノフのことばは、一九〇五年一一月と一二月の『ドネヴニーク・ソツィアル－デモクラータ』（『社会民主主義者の日記』）第三号、第四号に発表された論文『われわれの態度』および『ふたたびわれわれの態度について（同志Xへの手紙）』のなかにある。三六

（二七）　一八七一年四月一二日付のマルクスのクーゲルマンへの手紙、選集、第八冊、一九四ページを参照。三六

（二八）　マルクス＝エンゲルス全集、第一八巻、八七ページ、および第一七巻、三一二ページを参照。三七

(二九) 注二七に同じ。三七

(三〇) レーニン全集、第一二巻、一〇二―一一一ページを参照。三七

(三一) ポルトガル革命――一九一〇年に起こったブルジョア革命。国王マヌエル二世の退位をよぎなくさせた。
トルコ革命――一九〇八年七月に起こって、一九〇九年春までつづいたブルジョア革命。極端な専制をしいたスルターン、アブドゥル・ハミト二世は退位をよぎなくされ、一八七六年の憲法が復活されたが、まもなく青年トルコ党の右派が権力を獲得して、軍事独裁をしいた。三八

(三二) マルクス＝エンゲルス全集、第一七巻、三一二―三一五ページを参照。以下本書、四〇―四一、四三、四八、五一、五二ページの引用については、それぞれ同書、三一五―三一六、三一八、三一五、三一七、三一六―三一七、三一七―三一八、三一八―三一九ページを参照。なおマルクスの原文は英語で書かれたが、レーニンはそのドイツ語訳から引用しているため、全集訳とは個々の表現に若干の違いがある。四〇

(三三) アナルコ・サンディカリズム――労働組合運動内の小ブルジョア的、日和見主義的潮流で、イデオロギー的、政治的に無政府主義の影響下にあった。一九世紀末に生まれ、二〇世紀はじめにフランス、イタリア、スペイン、スイスおよびラテンアメリカ諸国で最も発展した。
アナルコ・サンディカリストは、労働者の政治闘争参加の必要を否定し、労働者階級の独自の政党の必要、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を否認する。彼らの考えでは、労働者階級の最高の組織形態は労働組合であり、労働者階級の利益に合致する唯一の闘争は経済闘争である。彼らの方法は、経済的ボイコット、サボタージュ、ストライキである。アナルコ・サンディカリストの考えでは、経済的ゼネストこそが、プロレタリアートによる国家権力の掌握なしに、労働組合が生産手段を収奪し、新しい社会を建設することを可能にする手段であって、この新しい社会の基本的細胞は、なにか不明確な「生産団体」だというのである。四四

(三四) 『デーロ・ナローダ』(『人民の事業』)――エス・エル党の日刊機関紙。一九一七年三月から一九一八年七月まで、何回か題名を変えて、ペトログラードで発行されていた。のち復刊されたが、反革命活動のかどで閉鎖された。四五

(三五) ヘラストラトス的に有名な――ヘラストラトスは前三五六年ごろのエフェソスの人。後世に自分の名を残そうとして、著名なアルテミスの神殿を焼いた。四八

(三六) ジロンド党――一八世紀末のフランス革命当時、大中ブルジョアジーの利益を代表した政治集団。ジャコバン派（注九七を参照）と違って、革命と反革命のあいだを動揺し、君主制との取引の道にすすんだ。五一

(三七) 全集、第一八巻、二〇三―二八五ページを参照。以下本書、五三―五四、五四、五五ページの引用については、それぞれ同書、二一九、二八〇、二六二ページを参照。五三

(三八) ブランキ主義――フランスの革命家オギュスト・ブランキに代表される小ブルジョア的な革命理論。ブランキは、広範な労働者大衆の運動によらずに、少数の革命家の陰謀によって権力を奪取し、それによって資本主義的搾取を廃止することが可能だと考えていた。組織された革命党や大衆的な階級闘争の役割を否定し、客観的情勢を考慮しない一揆主義的戦術である。五五

（三九）　これは、マルクスの論文『政治問題への無関心』とエンゲルスの論文『権威について』をさす（全集、第一八巻、二九六―三〇一および三〇二―三〇五ページを参照）。以下本書、五五―五六、五七、五七―五八ページの引用については、それぞれ同書、二九六―二九七、三〇三―三〇四、三〇四―三〇五ページを参照。なおレーニンはこれらの論文のドイツ語訳から引用しているため、全集訳とは個々の表現に若干の違いがある。五五

（四〇）　マルクスの『哲学の貧困』をさす。全集、第四巻、五九―一五〇ページを参照。五九

（四一）　マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、七ページを参照。六〇

（四二）　〈община〉にあたる二つのドイツ語――Gemeinde と Gemeinwesen である。前者は「共同体」と訳され、また「地方自治体」の意味にも使われる語。六〇

（四三）　エルフルト綱領草案を批判したエンゲルスの労作『一八九一年の社会民主党綱領草案の批判』については、国民文庫『ゴータ綱領批判』、八六―一一一ページを参照。以下本書、六二、六三、六四、六五、六六―六七ページの引用については、それぞれ同書、九〇―九一、九五、九六―九七、九八―九九、九九―一〇〇ページを参照。

エルフルト綱領――一八九一年一〇月のエルフルト大会で採択されたドイツ社会民主党の綱領。エルフルト綱領は、一八七五年のゴータ綱領にくらべると一歩前進していた。すなわち、資本主義的生産様式が没落し、社会主義的生産様式がそれに代わるのは避けられないというマルクス主義の学説を基礎とし、労働者階級は政治闘争をしなければならないと強調し、この闘争の指導者としての党の役割を指摘していた、等々。しかし、エルフルト綱領も、日和見主義にたいする重大な譲歩をふくんでいた。エンゲルスは前記の著作で、エルフルト綱領草案を全面的に批判したが、それは事実上第二インタナショナル全体の日和見主義の批判であった。なぜなら、エルフルト綱領は、第二インタナショナルの諸党にとって一種の模範だったからである。ドイツ社会民主党の指導部は、党員大衆にエンゲルスの批判を隠し、綱領の最終案文の作成のさいに彼の最も重要な評言を無視した。レーニンの考えによると、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）について口をつぐんでいたことが、エルフルト綱領の主要な欠陥、日和見主義にたいする臆病な譲歩であった。六三

（四四）　社会主義者取締法――ドイツで一八七八年にビスマルク政府が労働運動と社会主義運動を弾圧するために施行したもの。この法律によって、すべての社会民主党組織、労働者の大衆団体、労働者出版物は禁止され、社会主義文献は没収され、社会民主主義者は追及され追放された。しかし、弾圧も社会民主党を粉砕することはできず、その活動は非合法の条件におうじて再建された。国外で党中央機関紙『ゾツィアル－デモクラート』が発行され、党大会が定期的にひらかれた。国内では、非合法の中央委員会に指導される社会民主党の組織やグループが地下に急速に再建された。同時に党は、合法的可能性を広く利用して大衆との結びつきを強化した。党の影響力はたえず増大し、国会選挙で社会民主党候補に投じられる票数は、一八七八年から一八九〇年までに三倍以上にふえた。マルクスとエンゲルスはドイツ社会民主党に大きな援助をあたえた。大衆的労働運動の強化に押されて、一八九〇年に同法は廃止された。六三

（四五）　一八六六年と一八七〇年の「上からの」革命――一八六六年のプロイセン＝オーストリア戦争と、ついで一八七〇年のフラン

ス＝プロイセン戦争とでプロイセンが勝利したことによって、ドイツの民主主義革命の基本的任務の一つであったドイツの統一が、プロイセンの君主主義的ユンカー勢力の手で、「上から」、王朝的方法によって実現されたことをさす。六五

（四六） **『プラウダ』**（『真理』）――ボリシェヴィキの合法的な日刊新聞。一九一二年四月二二日（五月五日）にペテルブルグで創刊された。『プラウダ』はたえず警察の追及をうけ、一九一四年七月八（二一）日に閉鎖された。

二月革命後、『プラウダ』は復刊され、三月五（一八）日からは党中央委員会およびペテルブルグ委員会の機関紙となった。一九一七年七月から一〇月まで、臨時政府の追及をうけた『プラウダ』は、再三題名を変えて（『小型版「プラウダ」』、『プロレタリー』、『ラボーチー』、『ラボーチー・プーチ』）発行された。十月革命の勝利後、新聞は『プラウダ』という元の題名で発行されるようになった。

ここで言っているレーニンの論文（『一つの原則問題』）については、全集、第二四巻、五六七―五七〇ページを参照。六七

（四七） マルクス＝エンゲルス全集、第一七巻、五八四―五九六ページを参照。以下本書、六八、六九、七〇、七一―七二ページの引用については、それぞれ同書、五八六、五九〇、五九四―五九五、五九五―五九六ページを参照。六八

（四八） **六月一一日のツェレテーリの歴史的演説**――一九一七年六月一一（二四）日、第一回全ロシア・ソヴェト大会議長団、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト執行委員会、農民代表ソヴェト執行委員会、大会のすべての代議員団ビューローの合同会議で、ボリシェヴィキによって六月一〇（二三）日に予定されたペトログラードの労働者、兵士の平和的デモンストレーションの問題が審議されたとき、メンシェヴィキの臨時政府閣僚ツェレテーリのおこなった演説をさす。ツェレテーリの演説は中傷的で反革命的なものであった。ボリシェヴィキが反政府陰謀をたくらみ、反革命を助けたと非難して、彼は、ボリシェヴィキに従う労働者の武装を解除する断固たる措置をとると威嚇した。六八

（四九） **教会離脱運動**（Los-von-Kirche-Bewegung）または教会脱退運動（Kirchenaustrittsbewegung）は、第一次世界大戦前にドイツで大衆的なものとなった。一九一四年一月、この運動にたいするドイツ社会民主党の態度の問題が、修正主義者パウル・ゲーレの論文『教会脱退運動と社会民主党』を皮切りとして、『ノイエ・ツァイト』の誌上で討議されはじめた。党は教会脱退運動にたいして中立を守り、党員が党の名で反宗教および反教会宣伝をおこなうのを禁止すべきだ、とゲーレは主張したが、討論のさい、ドイツ社会民主党の著名な指導者たちは、ゲーレに反撃をくわえなかった。六九

（五〇） 「みいりのいい地位をさずかった国家官吏」は、エンゲルスの原文では「上級官庁」となっている。七三

（五一） マルクス＝エンゲルス、二三巻選集、第一三巻、一七三ページを参照。七三

（五二） **ロシア社会民主労働党第二回大会**は、一九〇三年七月一七（三〇）日―八月一〇（二三）日にひらかれた。はじめの一三回の会議はブリュッセルでおこなわれたが、ついで警察の追及のために、会議はロンドンに移された。大会の重要問題は、党の綱領と規約を承認し、中央指導機関を選出することであった。レーニンとその同志たちは、大会で日和見主義者にたいして断固たるたたかいをくりひろげた。

大会は、全員一致で（一名棄権）党綱領を承認した。この綱領には、きたるべきブルジョア民主主義革命における党の当面の任務（最小限綱領）と、社会主義革命の勝利およびプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の樹立を予定した任務（最大限綱領）とが定式化されていた。

党規約を討議するさい、党建設の組織原則の問題について鋭い闘争がくりひろげられた。レーニンとその同志は、労働者階級の戦闘的な革命党をつくるためにたたかい、あやふやな動揺分子が党内にはいるのを困難にするような規約を採択することが必要だと考えていた。確固としていない分子が党にはいるのを容易にしていたマルトフの定式は、大会の席上、反イスクラ派や「沼地派」（「中間派」）から支持されたばかりでなく、「軟弱な」（確固さに欠ける）イスクラ派からも支持され、少差の多数票で採択された。しかし大会は、基本的にはレーニンの作成した規約を承認した。大会は、戦術問題についての一連の決議も採択した。

大会では、イスクラの方針の一貫した支持者――レーニン派――と、「軟弱な」イスクラ派――マルトフ支持者――との分裂が生じた。レーニン派は党の中央機関の選出のさいに多数票をえたので、多数派（ボリシェヴィキ）とよばれるようになり、少数票をえたものは少数派（メンシェヴィキ）とよばれるようになった。

大会は、ロシアの労働運動の発展上に大きな意義をもっていた。大会は、社会民主主義運動内の手工業主義とサークル主義を終わらせ、ロシアにおける革命的マルクス主義党（ボリシェヴィキ党）の端緒をひらいた。レーニンはこう書いている。「ボリシェヴィズムは、政治思想の潮流として、また政党として、一九〇三年以来存在している」（全集、第三一巻、九ページ）。

第二回大会は、すべての国の革命的マルクス主義者の模範となった新しい型のプロレタリア党をつくりだし、国際労働運動の転換点になった。一七四

（五三）四月の提案――党名を共産党とあらためることについての提案。レーニンの論文『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』（本選集、第七巻、一七五ページ）および『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務』（同、二二四―二二八ページ）を参照。一七四

（五四）マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、二八ページを参照。以下本書、七七、八二、八三―八五ページの引用については、それぞれ同書、二八―二九、一九―二〇、二一ページを参照。一七七

（五五）ポミャロフスキーの作品中の神学生――エヌ・ポミャロフスキーの作品『神学院生活のスケッチ』をさす。この作品は、一七五〇―六〇年代のロシアの神学校を支配していた不合理な教育制度と野蛮な習慣とを暴露したもの。一八六

（五六）第一インタナショナルのハーグ大会――一八七二年九月二日から七日までひらかれた。一五ヵ国の組織の代議員六五名が大会に出席した。マルクスとエンゲルスは、プロレタリア革命勢力の結集をめざして、大会の準備のために大々的な活動をおこなった。マルクスとエンゲルスの提案にしたがって、大会の議題が採択され、その招集期日が決定された。大会の議題は、（一）総評議会の権限について、（二）プロレタリアートの政治活動について、の二つの基本問題であった。大会は総評議会の権限拡大についての決議、総評議会の所在地移転についての決議、秘密の「社会民主同盟」の活動についての決議、その他の決議を採択した。これらの決議の大部分は、マルクスとエンゲルスによって書かれ、その他の諸決議は、彼らの提案を基礎としていた。第二の問題についての大会決定は、

「政治権力を獲得することが、プロレタリアートの偉大な義務となっている」、プロレタリアートを政党に組織することが、「社会革命とその終局目標――階級の廃止――との勝利を確保するために」不可欠である、と述べている（全集、第一八巻、一四三ページを参照）。この大会で、あらゆる小ブルジョア・セクト主義にたいするマルクス、エンゲルスとその支持者の多年にわたる闘争が完了した。無政府主義の指導者たち、エム・ア・バクーニン、ジャム・ギヨーム、その他はインタナショナルから除名された。ハーグ大会の諸決定は、無政府主義者の小ブルジョア的世界観にたいするマルクス主義の勝利を意味し、のちに労働者階級の独自の政党が各国に創立される基礎をすえた。九二

（五七）　マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、五四〇―五四一ページを参照。九二

（五八）　『ザリャー』（『あかつき』）――マルクス主義的な学術＝政治雑誌で、一九〇一年から一九〇二年にかけて、シュトゥットガルトの『イスクラ』編集局から発行された。『ザリャー』は全部で四号（三冊）出た。一九〇二年、『イスクラ』および『ザリャー』編集局の内部に意見の相違と衝突とが起こったとき、プレハーノフは雑誌と新聞とを分離する案を出した（『ザリャー』の編集を自分の手に残しておくために）が、この提案は採択されず、両機関紙誌の編集局はひきつづき共通なままであった。

『ザリャー』は、各国およびロシアの修正主義を批判し、マルクス主義の理論的原則を擁護した。『ザリャー』には、『農業問題における「批判家」諸君』（労作『農業問題と「マルクス批判家」』のはじめの四章）、『ロシア社会民主党の農業綱領』その他のレーニンの諸労作が掲載された。九三

（五九）　一九〇〇年九月二三―二七日にパリでひらかれた第二インタナショナルの第五回国際大会をさす。A・ミルランがヴァルデック・ルソーの反革命的政府に入閣したことから生じた「政治権力の獲得およびブルジョア政党との同盟」という基本問題について、大会はカウツキーの決議案を過半数で採択した。この決議には、「個個の社会主義者がブルジョア政府に入閣することは、政治権力獲得の正常な端緒と見なすわけにはいかず、困難な情勢とのたたかいでのよぎない一時的、例外的な手段と見なされる」と述べてあった。のちに日和見主義者は、ブルジョアジーとの協力を正当化するために決議のこの項をしばしば引合いにだした。

一九〇一年四月の雑誌『ザリャー』第一号には、プレハーノフの論文『パリ国際社会主義者大会について一言（私に委任状を送ってよこした同志たちへの公開状）』が発表され、そのなかでカウツキーの決議案がきびしく批判されていた。九三

（六〇）　マルクス＝エンゲルス『共産主義者同盟への中央委員会のよびかけ』、全集、第七巻、二五七ページを参照。一〇一

（六一）　これは、ウェッブ夫妻の著書『イギリス労働組合主義の理論と実践』をさす。一〇三

（六二）　『社会主義月刊』（《Sozialistische Monatshefte》）――ドイツ日和見主義者の主要な機関誌、また国際修正主義の機関誌のひとつ。一八九七年から一九三三年までベルリンで発行された。第一次世界大戦中は社会排外主義の立場をとった。一〇六

（六三）　イギリス独立労働党――ストライキ闘争が激化し、ブルジョア政党からの独立を求めるイギリス労働者階級の運動が強まるなかで、一八九三年に「新労働組合」の指導者たちによって創立された改良主義的組織。入党したのは、「新労働組合」員、一連の古い

労働組合員、フェビアン派の影響下にあったインテリゲンツィアおよび小ブルジョアジーの代表者たちであった。独立労働党は、創立以来ブルジョア改良主義の立場をとり、議会的闘争形態や自由党との議会取引にあけくれた。一〇六

(六四) 手稿ではつづいて次のようになっている。

「第七章 一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験

この章の表題にかかげたテーマは、限りなく大きなテーマであって、それについては数巻の書物を書くことができるし、また書かなければならない。この小冊子では、もちろん、革命における国家権力にかんするプロレタリアートの任務に直接関係のある、経験からえられた最も主要な教訓に限らなければなるまい。」(ここで手稿は中断している。) 一〇七

(六五) コルニーロフ反乱——一九一七年八月に起こったブルジョア・地主の反革命的反乱。反乱の先頭に立ったのは、ツァーリの将軍で最高総司令官のコルニーロフであった。陰謀者一味のねらいは、ペトログラードを占領し、ボリシェヴィキ党を粉砕し、ソヴェトを解散させ、国内に軍事独裁を打ち立て、帝政の復活を準備することにあった。臨時政府の首相ケーレンスキーも陰謀に参加したが、反乱が始まると、自分がコルニーロフもろとも一掃されることを恐れて、彼と手をきり、彼を臨時政府にたいする反乱者と宣告した。

反乱は八月二五日(九月七日)に開始された。コルニーロフは第三騎兵軍団をペトログラードに進撃させた。当のペトログラード市内では、コルニーロフ派の反革命組織が行動の準備をととのえていた。

ボリシェヴィキ党は、コルニーロフにたいする大衆の闘争の先頭に立つと同時に、臨時政府とその手先であるエス・エルやメンシェヴィキの暴露をやめなかった。ボリシェヴィキ党中央委員会のよびかけにおうじて、ペトログラードの労働者と革命的な兵士・水兵は、反乱軍とのたたかいに立ちあがった。首都の労働者から赤衛軍部隊が急速に編成されはじめた。多くの地方に革命委員会が結成された。コルニーロフ軍部隊の前進は阻止された。ボリシェヴィキの扇動の影響をうけて、それらの部隊のあいだに解体が始まった。

コルニーロフの行動は、ボリシェヴィキ党に指導される労働者、農民によって鎮圧された。大衆の圧力に押されて、臨時政府はやむなく、コルニーロフ一味を逮捕して、反乱のかどで裁判にかける命令を出した。一〇八

(六六) 全ロシア民主主義会議——権力の問題を解決するためにメンシェヴィキ＝エス・エルに牛耳られるソヴェト中央執行委員会によって招集された。会議主催者の真の目的は、革命の発展から人民大衆の注意をそらせることにあった。会議は一九一七年九月一四―二〇日(九月二七日―一〇月五日)にペトログラードでひらかれた。会議の出席者は一五〇〇名をこえた。会議では、住民の小部分を代表する市議会やゼムストヴォや協同組合に、住民の圧倒的多数を代表する労働者・兵士代表ソヴェトよりも多くの議席があたえられていた。ボリシェヴィキは、メンシェヴィキとエス・エルを暴露する演壇としてこれを利用するために、同会議に参加した。

民主主義会議は予備議会(共和国臨時議会)の創設についての決定を採択した。これは、ロシアに議会制度が制定されたと見せかけるたくらみであった。だが、臨時政府の承認した規定によると、予備議会は政府の諮問機関にすぎなかった。

民主主義会議のボリシェヴィキ代議員団会議は、七七票対五票で予備議会への参加を決定し、党中央委員会もこれを承認した。レー

ニンは、民主主義会議にたいするボリシェヴィキの戦術の誤りを批判した。彼は、ボリシェヴィキが予備議会から脱退することを断固要求し、蜂起の準備に全力を集中する必要があると強調した。党中央委員会はレーニンの提案を審議し、ボリシェヴィキの予備議会脱退についての決定を採択した。一〇月七（二〇）日の予備議会開会の初日に、ボリシェヴィキは宣言を読みあげて退場した。一〇九

（六七）**四月二〇日**――一九一七年四月二〇日（五月三日）に新聞に発表された臨時政府の外相ミリュコーフの同盟諸国にあてた覚え書によって引きおこされた政治的危機をさす。この覚え書は、臨時政府が、ツァーリ政府の結んだすべての条約を守ること、最後の勝利をえるまで戦争をつづけることを確認したものであった。臨時政府の帝国主義的政策は、広範な勤労大衆の憤激をまねいた。四月二一日（五月四日）、ボリシェヴィキ党のよびかけにこたえて、ペトログラードの労働者は仕事をやめ、平和を要求するデモンストレーションに出ていった。これには一〇万をこえる労働者、兵士が参加した。抗議のデモンストレーションや集会は、モスクワ、ウラル、ウクライナ、クロンシタットその他の都市や地方でもおこなわれた。ミリュコーフの覚え書にたいする抗議の決議が、多くの都市のソヴエトからペトログラード・ソヴェトに送られてきた。

四月のデモンストレーションは、政府危機の始まりとなった。大衆の圧力に押されて、外相ミリュコーフと陸相グチコーフは辞職せざるをえなかった。五月五（一八）日、第一次の連立臨時政府（第二次臨時政府）が成立した。新しい政府には、一〇人の資本家大臣とならんで、エス・エルのケーレンスキー、チェルノーフ、メンシェヴィキのツェレテーリ、スコベレフ、その他が入閣した。一〇九

（六八）**『全ロシア農民代表ソヴェト通報』**――全ロシア農民代表ソヴェトの日刊の公式機関紙。一九一七年五月九（二二）日から一二月までペトログラードで発行され、エス・エル党右派の見解を代表していた。革命に敵対し、反革命的傾向の理由で閉鎖された。

二四二通の農民委託書――一九一七年八月一九日付の『全ロシア農民代表ソヴェト通報』第八八号に、二四二通の農民委託書（委任状）にもとづいて作成、掲載された模範委託書をさす。この委託書は、土地についての農民の切実な民主主義的要求を反映していたとともに、賃労働の禁止、土地の定期的な均分割替などの空想的な要求をふくんでいた。

レーニンは、この委託書を労働者党の対農民政策を決定するうえできわめて貴重な資料だと考えた。彼は、論文『政論家の日記から。農民と労働者』（全集、第二五巻、二九九―三〇七ページ）のなかに、その詳細な分析、評価をおこなっている。この委託書は、革命の勝利直後に労働者・兵士代表ソヴェト第二回大会が出した『土地にかんする布告』の基礎とされた（本書、二一〇―二一三ページを参照）。一一三

（六九）**五月六日**――注六七を参照。一一三

（七〇）**『ラボーチャヤ・ガゼータ』**（『労働者新聞』）――メンシェヴィキの日刊新聞。一九一七年三月から一一月三〇日（一二月一三日）までペトログラードで発行されていた。八月三〇日（九月一二日）からはメンシェヴィキ中央委員会の機関紙。一一三

（七一）**『イズヴェスチヤ』**――『ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト通報』のこと、一九一七年二月二八日（三月一三日）に発刊された日刊新聞。第一回全ロシア・ソヴェト大会で労働者・兵士代表ソヴェト中央執行委員会が成立してからは、その機関紙となった。この時期には、新聞はメンシェヴィキとエス・エルの手中に

あって、ボリシェヴィキ党にたいする激しい闘争をおこなった。第二回全ロシア・ソヴェト大会後、『イズヴェスチヤ』編集局の顔ぶれは交替し、新聞はソヴェト権力の公式の機関紙となった。二三

(七二)『レーチ』(『言論』)——カデット党の日刊の中央機関紙。一九〇六年にペテルブルグで創刊され、一九一七年一〇月二六日(一一月八日)に閉鎖されたが、翌年八月までいろいろな題名で発行された。二四

(七三)『ルースコエ・スローヴォ』(『ロシアの言論』)——ブルジョア自由主義的傾向の日刊新聞。一八九五年から一九一七年までモスクワで出ていた。二四

(七四)憲法制定議会——臨時政府は、一九一七年三月二(一五)日の宣言で、憲法制定議会を招集することを明らかにした。六月一四(二七)日、臨時政府は憲法制定議会の選挙を九月一七(三〇)日に実施することを決定した。しかし八月になると、政府は選挙を一一月一二(二五)日に延期した。

憲法制定議会の選挙は、十月革命の勝利後、予定どおり一九一七年一一月一二(二五)日におこなわれた。選挙は、十月革命前に作成された名簿により、臨時政府の承認した規則によって実施され、しかも人民の大部分がまだ社会主義革命の意義を理解するいとまもない状況のもとで実施された。これにつけこんだエス・エル右派は、首都や工業中心地から遠く離れた県や地方で、過半数の票を獲得することができた。憲法制定議会は、ソヴェト政府によって招集され、一九一八年一月五(一八)日にペトログラードでひらかれた。憲法制定議会の反革命的多数派は、全ロシア中央執行委員会から提出された『勤労被搾取人民の権利の宣言』を否決し、ソヴェト権力の承認を拒否した。全ロシア中央執行委員会の布告により、一月六(一九)日、ブルジョア的な憲法制定議会は解散された。二四

(七五)レーニンの手紙『マルクス主義と蜂起』は、もう一つの手紙『ボリシェヴィキは権力を掌握しなければならない』とともに、一九一七年九月一五(二八)日の中央委員会会議で審議された。中央委員会は、ごく近いうちに中央委員会会議をひらいて戦術上の諸問題を審議することを決定した。レーニンの手紙を各一部だけ保存するかどうか、という問題が表決に付された。この提案に賛成したのは六名、反対は四名、棄権は六名であった。カーメネフは、社会主義革命をめざす党の方針に反対していたので、武装蜂起の組織についてのレーニンの提案に反対する決議案を中央委員会会議に提出した。中央委員会はカーメネフの決議案を否決した。二六

(七六)『ドイツにおける革命と反革命』、全集、第八巻、九二ページを参照。

労作『ドイツにおける革命と反革命』は、エンゲルスの書いたものだが、一八五一―一八五二年にマルクスの署名で新聞『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』に連続論文として発表された。この著作の執筆にあたって、エンゲルスはたえずマルクスと相談し、また論文を新聞社へ送るまえに、マルクスに目をとおしてもらった。後年、マルクスとエンゲルスとの往復書簡が発表されたことから、エンゲルスがこの著作を書いたことがわかった。二六

(七七)七月三―四日——一九一七年七月三―四(一六―一七)日のペトログラードにおける大衆的デモンストレーションのこと。この事件は、国内のきわめて深刻な政治的危機の現われであった。ケーレンスキーが六月一八日(七月一日)に開始したロシア軍の攻勢の失敗、帝国主義者のためにはらった新しい犠牲、資本家の企業閉鎖にともなう失業の増大、高進する物価騰貴、ひどい食糧不足——

これらはみな、臨時政府の反革命的政策にたいする憤激を広範な労働者・兵士大衆のあいだに爆発させた。運動は、七月三（一六）日に第一機関銃連隊の行動によってヴィボルグ地区で開始された。デモンストレーションは臨時政府にたいする武装行動に転化しようとした。

ボリシェヴィキ党は、国内の革命的危機はまだ成熟しておらず、軍隊と地方は首都の蜂起を支持する心がまえができていないと考えたので、この時点での武装行動には反対であった。七月三（一六）日に党のペテルブルグ委員会および中央委員会付属軍隊内組織と合同で招集された中央委員会会議では、行動をさしひかえることが決定された。このときにひらかれていたボリシェヴィキの第二回ペトログラード全市会議も同様な決定を採択した。同会議の代議員は、大衆に行動を思いとどまらせるために各地区へ派遣された。それにもかかわらず行動は開始され、それを阻止することはもはや不可能となった。

中央委員会は大衆の気分を考慮して、ペテルブルグ委員会および軍隊内組織とともに、七月三（一六）日の夜おそく、デモンストレーションを平和的で組織的なものとするために翌日のデモンストレーションに参加することを決定した。

七月四（一七）日のデモンストレーションには五〇万人以上が参加した。それは「全権力をソヴエトへ！」などのボリシェヴィキのスローガンをかかげて進んだ。デモ参加者は九〇人の代表を選出し、代表たちは、全権力をソヴエトの手に移せという要求をソヴエト中央執行委員会に伝えた。しかし、エス・エルとメンシェヴィキの指導者たちは権力をにぎることを拒否した。

臨時政府は、メンシェヴィキ＝エス・エルに牛耳られる中央執行委員会の同意をえたうえで、士官学校生徒と反革命的カザック兵の部隊を平和なデモンストレーションにさしむけた。これらの部隊はデモンストレーション参加者にむかって発砲した。反動的な気分をもつ部隊が前線からよびもどされた。

七月四日の夜半にレーニンの指導のもとにひらかれた中央委員会およびペテルブルグ委員会の会議で、デモンストレーションを組織だった仕方で中止する決定が採択された。これは正しい措置であって、党は適時に後退して、革命の主力を壊滅から守ることができた。

ブルジョア臨時政府は組織的な弾圧に移った。政府はボリシェヴィキ党に襲いかかった。『プラウダ』、『ソルダーツカヤ・プラウダ』その他は閉鎖され、「トルード」印刷所は破壊された。労働者の武装解除、逮捕、家宅捜索、ポグロムが始まった。ペトログラード守備隊の革命的部隊は解体されて、戦線に送られた。メンシェヴィキとエス・エルは、事実上、反革命的残虐行為の参加者となり、その共犯者となった。七月事件以後、権力は完全に反革命的臨時政府の手に移った。二七

(六八)　**アレクサンドル劇場**——民主主義会議の会場にあてられていたペトログラードの劇場。

ペテロパウロ要塞——冬宮に面してネヴァ河の対岸にあった。帝政時代には政治犯が収容されていた。ペテロパウロ要塞は大規模な兵器庫をもち、ペトログラードの重要な戦略地点であった。現在は革命史博物館。

猛烈師団——第一次世界大戦のさい北カフカースの山岳部族出身の志願兵でつくられた師団のあだ名。コルニーロフ将軍は、革命的ペトログラードを攻撃するために彼が投入した部隊の打撃力としてこの師団を使用した。三三

(七九) 『ラボーチー・プーチ』(『労働者の道』) ――ボリシェヴィキ党の日刊の中央機関紙。臨時政府に閉鎖された新聞『プラウダ』(注四六を参照) に代わって、一九一七年九月三 (一六) 日から一〇月二六日 (一一月八日) まで発行された。一〇月二七日 (一一月九日) からは、旧題名に復した。三三三

(八〇) トルドヴィキ (勤労グループ) ――四次の国会の全部にわたって、ナロードニキ主義的な農民やインテリゲンツィアの代表で構成された小ブルジョア民主主義者のグループ。トルドヴィキ議員団は、一九〇六年四月に第一国会の農民議員によって結成された。国会内で、トルドヴィキは、カデットと革命的社会民主主義者とのあいだを動揺した。第一次世界大戦中、その大多数は社会排外主義の立場をとった。二月革命後、トルドヴィキは臨時政府を積極的に支持した。トルドヴィキは十月革命に敵対し、ブルジョアジーの反革命に参加した。三三三

(八一) 「リーベルダン」――モスクワのボリシェヴィキの新聞『ソツィアルーデモクラート』(一九一七年八月二五日 (九月七日) 付の第一四一号) に、『リーベルダン』と題するデミャン・ベードヌィの読物がのってから、メンシェヴィキの指導者リーベルとダンおよび彼らの支持者につけられるようになったあだ名。三三三

(八二) ブルィギン国会 (諮問「議会」) ――一九〇五年八月六 (一九) 日、ツァーリの詔書――国会開設法と国会選挙令――が公布された。ツァーリから国会法案の作成を一任された内務大臣ア・ゲ・ブルィギンの名にちなんで、この国会はブルィギン国会とよばれた。法案によると、国会は立法権をまったくもたず、ツァーリの諮問機関として若干の問題を審議しうるにすぎなかった。ボリシェヴィキは、ブルィギン国会の積極的なボイコットを労働者と農民によびかけ、武装蜂起、革命軍、臨時革命政府というスローガンを中心に扇動をおこなった。ボリシェヴィキは、すべての革命勢力を動員し、大衆的政治ストライキを組織し、武装蜂起を準備するために、ブルィギン国会のボイコット運動を利用した。ブルィギン国会の選挙はおこなわれず、政府はその召集に失敗した。革命の高揚と一九〇五年一〇月の政治的ストライキ (注一七八を参照) は、ブルィギン国会を一掃してしまった。三三三

(八三) 第三国会――一九〇七年六月三 (一六) 日の選挙法によって召集された議会。革命の退潮を見てとったツァーリ政府は、社会民主労働党の陰謀なるものを口実に、六月三日に第二国会 (一九〇七年二月二〇日 (三月五日) にひらかれたもの) を解散し、社会民主党議員を逮捕すると同時に、地主と大ブルジョアジーに圧倒的優位をあたえるように改悪された新選挙法を公布した。六月三日のクーデタは反動期の始まりを意味するものであった。第三国会は、一九〇七年一一月一 (一四) 日から一九一二年六月九 (二二) 日までに五回開会された。その議員総数四四二名の内わけは、右派一四七名、オクチャブリスト一五四名、カデット五四名、トルドヴィキ一四名、社会民主党一九名等であった。

この国会は、その階級的性格からみて、黒百人組的＝オクチャブリスト的であり、革命勢力にたいする弾圧と迫害の反動政策を遂行するためのツァーリ政府の補助機関の役割を果たした。第三国会は、内外政策のあらゆる問題について反動的な六月三日体制を支持し、警察、憲兵、裁判所、監獄その他の弾圧機構の増員と支出増にかんする法案、兵役義務の改悪法案、労働保険の改悪法案、ストルィピンの農業立法の構想にもとづく農業法案等を通過成立させた。三三四

(八四) チート・チートィチ――オストロフスキーの戯曲『他人の

酒宴で二日酔』の登場人物ブルースコフのこと。粗野で頑迷で専制的な商人の典型。一三五

(八五)『**ノーヴァヤ・ジーズニ**』——一九一七年四月一八日（五月一日）から一九一八年七月までペトログラードで発行されていた日刊新聞。その刊行者は、国際派メンシェヴィキと雑誌『レートピシ』（『年代記』）を中心に集まっていた作家たちとのグループであった。新聞は十月革命とソヴェト権力の樹立とに敵意を示し、一九一八年七月に閉鎖された。一三九

(八六) 一九一七年六月四（一七）日の労働者・兵士代表ソヴェト第一回全ロシア大会の会議でメンシェヴィキのツェレテーリは、臨時政府の閣僚として演説し、「ロシアには単独で国内の全権力を掌握することに同意するような党はない」と主張したとき、レーニンは議席から、ボリシェヴィキ党を代表して、「そういう党はある！」と抗弁し、さらに大会の演壇から演説して、ボリシェヴィキ党はいつ、いかなるときにも「全権力を掌握する用意がある」と声明した（全集、第二五巻、七ページを参照）。

労働者・兵士代表ソヴェト第一回全ロシア大会——一九一七年六月三—二四日（六月一六日—七月七日）にペトログラードでひらかれた。大会には一〇九〇名の代議員が出席した。ボリシェヴィキはそのころはソヴェト内の少数派で、一〇五名の代議員しかもっていなかった。圧倒的多数の代議員は、メンシェヴィキ＝エス・エルのブロックとこれを支持する小グループに属していた。大会の議題は、革命的民主主義派と政府権力、戦争にたいする態度、憲法制定議会の準備、民族問題、土地問題など、一二の問題であった。レーニンは大会の席上、六月四（一七）日には臨時政府にたいする態度について、また六月九（二二）日には戦争について演説した（全集、第二五巻、三—三一ページを参照）。ボリシェヴィキは大会の演壇を大いに利用して、臨時政府の帝国主義的政策およびメンシェヴィキとエス・エルの協調戦術を暴露し、全権力をソヴェトの手に移すことを要求した。

大会のエス・エル＝メンシェヴィキ的多数派は、採択された諸決議のなかで、臨時政府を支持する立場をとり、臨時政府が準備していた戦線での攻勢を是認し、権力をソヴェトに移すことに反対した。大会は、第二回ソヴェト大会まで存続した中央執行委員会を選出したが、そのなかではエス・エルとメンシェヴィキが圧倒的多数を占めていた。一三九

(八七) **八月一四日の政綱**——一九一七年八月一四（二七）日にメンシェヴィキとエス・エルが革命的民主主義派の名においてモスクワの国政会議でおこなった声明をさす。この声明は、反プロレタリア的なブルジョアジーとの協調をつづける政策を民主主義や平和にかんする美辞麗句で包んだものであった。

国政会議——反革命勢力を動員して革命を粉砕するために臨時政府が組織したもの。会議は一九一七年八月一二—一五（二五—二八）日にモスクワでひらかれた。会議には、地主、ブルジョアジー、将官の各代表、元国会議員、カデット党の指導者たちが出席した。ソヴェトや一部の職業団体からは、メンシェヴィキとエス・エルが代表として送られた。会議では、コルニーロフ将軍、カレーヂン将軍その他が革命鎮圧の計画を述べた。彼らは、ソヴェトの一掃、軍隊内社会団体の解散、前線での死刑の復活、最後の勝利をえるまでの戦争遂行を要求した。ボリシェヴィキ党の中央委員会は、この会議に反対して大衆的に抗議するよう、労働者、兵士、農民によびかけた。党モスクワ委員会の決定で八月一二（二五）日にモスクワでお

こなわれたストライキには、四〇万人以上が参加した。抗議集会とストライキは他の諸都市でもおこなわれた。一三三

（八八）　エヌ・ア・ネクラソフの詩『お人よしの詩人は幸いである』からの引用。一三四

（八九）　「連絡」委員会——協調主義的なペトログラード・ソヴェト執行委員会の決定により、三月八（二一）日、臨時政府の活動に「影響をあたえ」、それを「監督する」ために設置されたもの。連絡委員会は、臨時政府がその反革命的政策を偽装するためにペトログラード・ソヴェトの権威を利用するのに役だった。メンシェヴィキとエス・エルは、この委員会によって、大衆が全権力をソヴェトの手に移すために積極的な革命闘争をおこなうのを阻止しようとはかった。連絡委員会は一九一七年四月中旬に廃止され、その機能は執行委員会ビューローに移された。一三五

（九〇）　『ズナーミャ・トルダー』（『労働の旗』）——エス・エル党ペトログラード委員会の日刊の機関紙。一九一七年八月二三日（九月五日）に創刊された。同年一一月一（一四）日の第五九号からは、エス・エル党ペトログラード委員会および第二回全ロシア・ソヴェト大会の中央執行委員会エス・エル左派代議員団の機関紙として発行された。一九一七年一二月二八日（一九一八年一月一〇日）の第一〇五号からは、左派エス・エル党の中央機関紙となった。一九一八年七月、左派エス・エルの反乱のさいに閉鎖された。一三七

（九一）　『ヴォーリャ・ナローダ』（『人民の意志』）——エス・エル党右派の日刊の機関紙。一九一七年四月二九日からペトログラードで発行され、一九一七年一一月に禁止された。その後も別の題名で発行され、一九一八年二月に完全に閉鎖された。一三九

（九二）　『エヂンストヴォ』（『統一』）——プレハーノフを指導者とする祖国防衛派メンシェヴィキの極右グループの機関紙。一九一七年三月から一一月までペトログラードで発行されていた。同紙は、臨時政府を支持し、帝国主義戦争を「完全な勝利まで」つづけるように要求した。一三九

（九三）　本書九一—一〇七ページを参照。一四一

（九四）　スダンのフランス軍——一八七〇年九月一日と二日のスダンの会戦は、一八七〇—一八七一年のフランス＝プロイセン戦争における決定的な会戦であって、この会戦でドイツ軍はマクマオン指揮下のフランス軍を包囲して降伏をよぎなくさせ、皇帝ナポレオン三世以下八万人以上の将兵を捕虜にした。一四六

（九五）　「シンガリョーフ」式の税率——臨時政府の大蔵大臣シンガリョーフのきめた所得税率。大資本家にきわめて低く、臨時政府すら、これでは低すぎるとして所得の三〇％を課税することにしたほどであった。しかし、どちらも実行されなかった。一四六

（九六）　本選集、第七巻、二八七—二九〇ページを参照。一四六

（九七）　国民公会——フランス大革命の当時、一七九二年九月に立法議会に代わって普通選挙で選ばれた革命的議会。共和制を宣言し、国王を裁判にかけて処刑した。はじめ国民公会のなかでは、大ブルジョアジーを代表するジロンド派が優位を占めていたが、一七九三年六月二日、急進小ブルジョアジーの党、ジャコバン派がジロンド派を追放して、革命的民主主義的執権を樹立した。一七九四年七月二七日（テルミドール九日）、大ブルジョアジーはクーデタをおこない、ジロンド派が国民公会に復帰した。一七九五年一〇月二六日、国民公会は解散され、権力は総裁政府に移された。一四七

（九八）　工場委員会第一回協議会——一九一七年五月三〇日—六月三日（六月一二—一六日）にペトログラードでひらかれた。協議会

には、ペトログラードの各工場委員会および労働組合ビューローから五六八名の代議員が出席した。レーニンは、この協議会のために『崩壊との闘争の経済的諸方策についての決議』（全集、第二四巻、五三九―五四一ページを参照）を書いた。協議会の議題は次のとおりであった。――生産の統制と管理について、工場委員会の任務について、労働組合運動における工場委員会の役割について。レーニンもこの協議会で演説した。「ノーヴァヤ・ジーズニ」派の代表アヴィーロフは、ボリシェヴィキの決議案をアナルコ・サンディカリズムだといって非難して、国家統制のスローガンをかかげた決議案を提出した。協議会は圧倒的多数でレーニンの書いた前記の決議案を採択した。一四九

（九九）　本書、三七ページを参照。一五六

（一〇〇）　箱のなかの男――チェーホフの同名の短篇小説中の人物。新しいものを恐れて、人々の生活から離れている硬直した人物。一五六

（一〇一）　ツェレテーリ版のにせブルィギン国会――全ロシア民主主義会議をさす。注六六を参照。一五九

（一〇二）　六月一九日以後の攻勢――一九一七年六月一八日（七月一日）、臨時政府は、メンシェヴィキとエス・エルの同意をえて、戦線で攻勢をはじめた。一六〇

（一〇三）　ドイツの水兵の反乱――一九一七年八月にドイツ海軍の水兵がおこした革命的行動をさす。行動の指導にあたった革命的水兵組織の成員は、一九一七年七月の末ごろには四〇〇〇名に達した。同組織の指導者は、「フリードリヒ大王」号の水兵マックス・ライヒピッチおよびアルビン・ケビスであった。民主主義的講和のためにたたかい、蜂起を準備する決定が、組織で採択された。八月はじめ、艦隊内に公然たる行動が始まった。ヴィルヘルムスハーフェンに停泊中の戦艦「ルイトポルト摂政親王」号の水兵たちは、さきにストライキのかどで逮捕された同僚たちを釈放させるために、独断で上陸した。八月一六日、「ヴェストファーレン」号の火夫が作業を拒否した。同時に、航海中の巡洋艦「ニュルンベルク」号の乗組員が蜂起した。水兵の運動は、ヴィルヘルムスハーフェンの若干の艦隊の艦艇にもひろまった。ドイツ海軍内の革命的行動は残忍に鎮圧された。運動の指導者ライヒピッチとケビスは銃殺され、そのほか運動に積極的に参加した水兵たちは、長期の懲役刑を宣告された。一六〇

（一〇四）　ヴァンデ派――ヴァンデは、フランスの西北の県。フランス大革命のとき、この地方の農民は、カトリック司祭と王党派に指導されて、反革命的蜂起をおこした。そこで、反革命派のことを、ヴァンデ派と言ったもの。一六一

（一〇五）　「潜在的社会主義」――一八八八年二月二二日付のエンゲルスのフリードリヒ・A・ゾルゲあての手紙（ドイツ語全集、第三七巻、二五ページ）を参照。一六四

（一〇六）　『「ラボーチェエ・デーロ」編集必携』（一九〇〇年二月、ジュネーヴ発行の「労働解放団」の資料集）へのプレハーノフの序文のなかの句「わが経済主義者は労働者階級のお尻をながめた」からとったもので、労働者階級の遅れた部分のうしろについてすすむという意味。

経済的唯物論というのは、一八九〇年代のロシアの文筆家たちがマルクスの史的唯物論をさすのにつかったよび名。一六七

（一〇七）　マルクス＝エンゲルス全集、第八巻、九一―九二ページを参照。一六九

（一〇八）　「中庸と几帳面」――グリボエードフの戯曲『知恵の悲し

み』、第三幕第一場に出てくる俗物の官吏モルチャーリンのことば。一六九

（一〇九）『デーニ』（『毎日』）――ブルジョア自由主義的傾向の日刊新聞、一九一二年からペテルブルグで発行されていた。二月革命後、解党派メンシェヴィキの手に移った。一九一七年一〇月二六日（一一月八日）、ペトログラード・ソヴェト軍事革命委員会によって閉鎖された。一七一

（一一〇）ここにあげている日付は、次の事実をさす。二月二八日（三月一三日）は二月革命の起こった日。九月三〇日（一〇月一三日）は、臨時政府が当初に予定していた憲法制定議会の招集期日。だが、憲法制定議会の招集の日取りは一九一七年一一月二八日（一二月一一日）に延ばされた。なお一〇月一日はレーニンがこの論文を書きおわった日である。一七三

（一一一）新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』に発表されたエヌ・スハーノフの論文『雷がまたも鳴った』から引用したもの。

スモーリヌィ女学院の建物のなかには、一九一七年八月から全ロシア中央執行委員会のボリシェヴィキ委員団、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェトのボリシェヴィキ代議員団がおかれていた。一〇月になると、軍事革命委員会もそこにおかれた。一七三

（一一二）この党大会は、党綱領の改正のためにとくに招集されていたもの。政治情勢の逼迫のため、大会は開催されなかった。十月革命後の新しい条件におうじた新しい党綱領は、一九一九年の第八回党大会で採択された。一七三

（一一三）**ロシア社会民主労働党第七回（四月）全国協議会**――一九一七年四月二四―二九日（五月七―一二日）にペトログラードでひらかれた。これは、最初の合法的な党協議会であった。協議会には、議決権をもつ代議員一三三名と、評議権をもつ代議員一八名が、七八の党組織から出席した。協議会は、党大会の役割を果たし、全党の政治方針を確立し、党指導部をつくった。

協議会の議題は、現在の情勢（戦争と臨時政府その他）、講和会議、労働者・兵士代表ソヴェトにたいする態度、党綱領の改正、インタナショナルの状態と党の任務、国際主義的社会民主主義諸組織の統合、農業問題、民族問題、憲法制定議会、組織問題、各地方の報告、中央委員会の選挙であった。

レーニンは協議会の全活動を指導した。現在の情勢、党綱領改正の問題、農業問題についての主報告をおこなったほか、他の議題についてもそれぞれ演説し、また協議会に提出された決議案を作成した。

第七回（四月）協議会の歴史的な意義は、ロシア革命の第二段階への移行というレーニン的方針を採択し、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化のための闘争計画を立て、全権力をソヴェトに移せという要求をかかげたことにあった。

協議会で指示された綱領改正の方向については、全集、第二四巻、二八六―二八七ページを参照。一七三

（一一四）『スパルターク』（『スパルタクス』）――ロシア社会民主労働党モスクワ州ビューロー、モスクワ委員会、モスクワ周辺地区委員会（第二号から）の雑誌。一九一七年五月二六日（六月二日）から一〇月二九日（一一月一一日）まで出ていた。一七三

（一一五）レーニン全集、第二四巻、四八六―四八七、四九六―四九七ページを参照。一七四

（一一六）前掲書、四九二―四九三ページを参照。一七四

（一一七）国民文庫『ゴータ綱領批判』、九〇―九一ページを参照。

一八

(二八)「スパルタクス」団（「インテルナツィオナーレ・グループ」）——ドイツ社会民主党左派の革命的組織。一九一五年四月、ローザ・ルクセンブルクとフランツ・メーリングが雑誌『インテルナツィオナーレ』を創刊したが、それを中心にしてドイツ社会民主党左派の大部分が結集した。一九一六年一月一日にベルリンでひらかれた社会民主党左派の全国協議会で、このグループの組織ができ、「インテルナツィオナーレ」グループと名のる決定を可決した。一九一五年に発行された政治的リーフレットのほか、一九一六年からは、「スパルタクス」の署名で『政治的書簡』を非合法に刊行し、普及させはじめた。それにともない、このグループは「スパルタクス」団とよばれるようになった。一八二

(二九)　レーニン全集、第二二巻、三〇七—三〇八ページを参照。一八五

(三〇)　前掲書、二二九—二三二ページを参照。一八五

(三一)　レーニン全集、第二四巻、四九七ページを参照。一八九

(三二)　**ロシア社会民主労働党(ボ)第六回大会**——一九一七年七月二六日から八月三日（八月八日から一六日）までペトログラードでひらかれた。大会はなかば非合法におこなわれた。大会には、二四万の党員を代表して、議決権をもつ代議員一五七名と、評議権をもつ代議員一一〇名とが出席した。レーニンは、そのために中央委員会の選定した同志たちをつうじてペトログラードと連絡をとりながら、大会の議事を地下から指導した。これらの同志はラズリフにレーニンをたずねた。レーニンのテーゼ『政治情勢』、論文『スローガンによせて』などが、大会の諸決定の基礎となった。レーニンはラズリフにいながら、大会の最も重要な諸決議案の作成と執筆に参加した。

大会の議題は、(一) 組織局の報告、(二) 中央委員会の報告、(三) 地方からの報告、(四) 現在の情勢、(a) 戦争と国際情勢、(b) 政治情勢と経済情勢、(五) 綱領の改正、(六) 組織問題、(七) 憲法制定議会の選挙、(八) インタナショナル、(九) 党の統一、(一〇) 労働組合運動、(一一) 選挙、(一二) その他。大会ではレーニンの裁判所出頭問題も審議された。

大会は、中央委員会の政治報告と政治情勢についての報告とを聴取した（報告者はスターリン）。レーニンの指示が政治情勢についての大会決議の基礎になった。決議は、七月事件後に生じた国内の政治情勢に評価をくだし、革命の新しい段階における党の政治方針を述べていた。大会は、革命の平和的発展が終わり、国内の権力が実際上反革命的ブルジョアジーの手に移ったことを認めた。レーニンの指示にしたがって、大会は、メンシェヴィキとエス・エルに指導されるソヴェトが反革命的臨時政府の付属物になりさがってしまったので、「全権力をソヴェトへ！」のスローガンを一時とりさげた。大会は、反革命的ブルジョアジーの独裁を完全に一掃し、貧農と同盟したプロレタリアートの権力を武装蜂起によって獲得するためにたたかうというスローガンをかかげた。

大会は断固としてプレオブラジェンスキーに反撃をくわえた。彼は、ロシアで社会主義革命が勝利する可能性を否定し、西ヨーロッパにプロレタリア革命が起きた場合にはじめて、国を社会主義の道にむけることができるだろう、と大会で言明したのであった。ブハーリンの提出した革命発展の反レーニン的図式も、大会で批判され、否決された。彼は、農民はブルジョアジーとブロックを結んでいるから、労働者階級のあとにはついてこないだろう、と主張した。

大会の諸決定は、社会主義革命の勝利のもっとも重要な条件としてのプロレタリアートと貧農の同盟というレーニンの命題を、とくに力をこめて強調した。

大会で最も重要なもののひとつとして、レーニンの裁判所出頭問題が審議された。オルジョニキッゼがこの問題について報告した。彼は、どんなことがあってもレーニンを検察当局に引き渡してはならない、それはレーニンの虐殺となるだろう、と強調した。大会は、全員一致でレーニンの裁判所出頭に反対する決議を採択した。

中央委員会の組織活動についてはヤ・エム・スヴェルドローフが報告した。彼はその報告で、第七回（四月）全国協議会以来の三ヵ月間に、党員の数が三倍（八万から二四万に）ふえ、党組織の数が七八から一六二に増加したことを述べた。大会では一九の地方報告が聴取された。報告者たちは、各地でボリシェヴィキ組織が大々的な活動をおこなっていること、また広範な勤労大衆のあいだでボリシェヴィキの影響力が着実に増大していることを述べた。

第六回大会は、ボリシェヴィキ党の経済政綱を審議し、これを可決した。それは次のような革命的措置を定めていた――銀行の国有化と集中化、大工業の国有化、地主の土地の没収と国内のすべての土地の国有化、生産と分配にたいする労働者統制の確立、都市・農村間の適切な交換の組織、その他。

大会はまた新しい党規約を採択した。

大会は、第七回（四月）全国協議会で示された方向で党綱領を改正する必要があるという同協議会の決定を確認した。新しい綱領を作成するため、大会は、特別の大会を近い将来招集する必要があることを認め、また党綱領改正問題についての広範な討論を大会までに展開するよう、党中央委員会とすべての党組織に委任した。大会は『青年団体について』の決議と『労働組合運動について』の決議を採択した。

第六回党大会は、武装蜂起と社会主義革命の勝利のための準備をプロレタリアートと貧農にととのえさせるという主要目標にそって、すべての決定をくだした。大会は、ロシアのすべての勤労者、すべての労働者と兵士と農民に宣言を出して、彼らが力をたくわえ、ボリシェヴィキ党の旗のもとにブルジョアジーとの決戦にそなえるようよびかけた。一九五

（一三三）　トリビューネ派――新聞『トリビューネ』を機関紙とするオランダ社会民主党の党員のこと。トリビューネ派の指導者は、D・ウェインコープ、H・ホルテル、A・パンネクーク、H・ローラント－ホルストであった。トリビューネ派は一貫した革命党ではなかったが、オランダ労働運動の左翼を代表し、第一次世界大戦中はだいたい国際主義の立場をとった。一九一八年、トリビューネ派はオランダ共産党を結成した。一九五

（一三四）「社会主義宣伝連盟」――一九一五年アメリカ社会党の革命的少数派によってつくられた。メンバーの大部分はアメリカに亡命してきた労働者からなっていた。連盟はツィンメルヴァルト左派にくわわっていた。一九五

（一三五）　アメリカ社会主義労働党――第一インタナショナルのアメリカ支部とその他の社会主義団体とが合同して、一八七六年にフィラデルフィアの合同大会で創立されたもの。党員の圧倒的多数は亡命者で、アメリカの地元労働者とあまり結びついていなかった。初期の党内で指導的地位を占めていたラサール派は、セクト的＝教条主義的な誤りをおかした。九〇年代には、D・デ－レオンを指導者とする左派が社会主義労

働党の指導権をにぎったが、アナルコ－サンディカリズム的な誤りをおかした。同党は、労働者階級の部分的要求のためにたたかうことや、改良主義的労働組合内で活動することを拒否し、大衆的労働運動との、そうでなくとも弱かった結びつきをますます失っていった。第一次世界大戦中、同党は国際主義に傾いた。十月革命の影響をうけて、党の最も革命的な部分は、アメリカ共産党の創立に積極的に参加した。現在の社会主義労働党は、労働運動にたいして影響力をもたない少数者の組織である。一九五

（二六）　レーニン全集、第二四巻、四九九ページを参照。一九五

（二七）　この文章の……の箇所は、レーニンの草案では、次のように書かれている。「ブルジョア議会主義的な民主的共和制にとどまることはできない。」一九五

（二八）　レーニンの草案における政治綱領の第九項は次のようになっている。「国家の構成にくわわっているすべての民族は、自由に分離して、自身の国家を形成する権利をもつ。ロシア民族の共和国は、他の大小の民族を自国に引きつけるにあたって、暴力によってではなく、もっぱら共同国家の創設にかんする自発的な合意によらなければならない。万国の労働者の統一と兄弟的同盟は、直接と間接とを問わず、他の民族にたいする暴力とあいいれない。」（全集、第二四巻、五〇〇ページ）一九六

（二九）　**北部地方ソヴェト大会**――大会は、一月一一（二四）日にペトログラードでひらかれ、一〇月一三（二六）日に終わった。ペトログラード、モスクワ、ノヴゴロド、クロンシタット、ヴィボルグ、ヘルシングフォルス、その他の各ソヴェトが、大会に代表を送った。出席した代議員は九四名で、そのうちボリシェヴィキは五一名であった。メンシェヴィキ＝エス・エル的なソヴェト中央執行委員会は、この大会を「一部ソヴェトの私的な会議」と称し、メンシェヴィキは示威として大会を退場した。

レーニンはこの大会に大きな意義を認めた。一〇月八（二一）日、彼は『北部地方ソヴェト大会に参加するボリシェヴィキの同志への手紙』を書いた（全集、第二六巻、一八〇―一八六ページを参照）。レーニンの手紙は一〇月一一（二四）日の朝、大会のボリシェヴィキ代議員団で審議された。大会は、当面の情勢について採択した決議のなかで、ただちに中央と地方で全権力をソヴェトの手に移すことによってのみ国と革命を救うことができる、と強調した。大会は農民へのよびかけを採択し、プロレタリアートの権力獲得闘争を支持するよううったえた。大会は一七名からなる北部地方委員会を選出したが、そのうちボリシェヴィキは一一名、エス・エル左派は六名であった。大会の諸決定は、十月革命の勝利のために全勢力の準備をととのえ、これを組織し、動員するうえで、きわめて大きな意義をもっていた。一九九

（三〇）　注一〇七を参照。二〇〇

（三一）　**ロシア社会民主労働党中央委員会会議**――一九一七年一〇月一〇（二三）日の中央委員会会議は、レーニンがヴィボルグからペトログラードに帰って参加した最初の党中央委員会会議であった。スヴェルドローフを議長としてひらかれた中央委員会会議の席上、レーニンは当面の情勢について報告した。中央委員会はレーニンの提出した決議案を採択した。それは武装蜂起の即時準備という任務を日程にのぼせるものであった。カーメネフとジノヴィエフだけは、武装蜂起に反対し、これに反対票を投じた。トロツキーは中央委員会会議では蜂起の決議案に反対票を投じなかったが、蜂起を第二回ソヴェト大会まで延期すべきだという意見であった。一〇月

一〇（二三）日の中央委員会会議は非常に大きな歴史的意義をもっていた。一〇票対二票で採択された中央委員会の蜂起についての決議は、武装蜂起を即時準備せよという全ボリシェヴィキ党にたいする指令となった。この中央委員会会議で、蜂起の政治的指導のために、レーニンを先頭とする政治局が設置された。三〇一

（一三二）**ケーレンスキー一派のピーテル明渡しの計画**――あらゆる手段で労働者と兵士の武装蜂起を未然に防ごうとしたケーレンスキー臨時政府と反革命的将軍団は、イギリス＝フランス帝国主義者と共謀して、一九一七年一〇月はじめにペトログラードをドイツ軍に明け渡す準備をし、それによって革命を圧殺しようとはかった。このことに関連して、臨時政府は一〇月四（一七）日の閣議で、モスクワへの移転をきめた。十月武装蜂起はこの反革命派の陰謀を打ち砕いた。三〇一

（一三三）**ミンスクの住民の行動**――一九一七年一〇月一〇（二三）日の中央委員会会議でスヴェルドローフが第三議題『ミンスクと北部戦線』についておこなった報告をさす。スヴェルドローフは、ミンスクにおける武装行動の技術的可能性について報告し、革命的軍団を送ってペトログラードを援助するという、ミンスクからの申入れを伝えた。三〇二

（一三四）**労働者・兵士代表ソヴェト第二回全ロシア大会**――一九一七年一〇月二五、二六日（一一月七、八日）にペトログラードでひらかれた。開会のときまでに六四九名の代議員が集まったが、そのうちボリシェヴィキ三九〇名、エス・エル一六〇名、メンシェヴィキ七二名、国際派メンシェヴィキ一四名であった。開会後もひきつづき代議員が到着した。

大会は一〇月二五日午後一〇時四〇分にスモーリヌィでひらかれた。このとき赤衛軍部隊、水兵隊、ペトログラード守備隊の革命的部分は、士官学校生徒と「突撃」大隊に警備される臨時政府のおかれていた冬宮を襲撃中であった。レーニンは蜂起の指導にあたっていたので、大会の第一回会議には出席しなかった。メンシェヴィキとエス・エルの右派指導者は、進行中の社会主義革命を陰謀と称し、連立政府の樹立について臨時政府と交渉を開始するようよびかけた。大会の過半数がボリシェヴィキを支持していることをさとったメンシェヴィキ、エス・エルおよびブンド派は、大会を退場した。一〇月二六日（一一月八日）午前四時、大会は冬宮占領および臨時政府逮捕の報告を受けて、レーニンの書いた檄文『労働者、兵士、農民諸君へ！』を採択した。

大会の第二回会議は一〇月二六日（一一月八日）午後九時にひらかれた。レーニンは講和についての報告と土地についての報告とをおこなった。大会は、レーニンの書いた講和にかんする布告と土地にかんする布告を承認した。大会はレーニンを長とする労農政府――人民委員会議――を組織した。エス・エル左派がソヴェト政府に参加することを拒否したので、ボリシェヴィキだけが政府にはいった。大会で選出された全ロシア中央執行委員会は、ボリシェヴィキ六二名、エス・エル左派二九名、国際派社会民主主義者六名、ウクライナ社会党三名、エス・エル派マクシマリスト一名、計一〇一名で構成されていた。大会はまた、全ロシア中央執行委員会に、農民ソヴェトおよび軍隊組織の代表や、さらに大会を退場した各グループの代表を補充できることを決定した。大会は午前六時に閉会した。三〇三

（一三五）**イギリスにおけるチャーティスト運動**――charter（憲章）から。一九世紀の三〇―四〇年代におけるイギリス労働者の大

衆的革命運動。この運動の組織上の中心は「ロンドン労働者協会」であった。協会の指導部は一八三八年に、二一歳に達した男子の普通選挙権、秘密投票、議員立候補者にたいする財産資格の撤廃、毎年の議会選挙、その他の要求をふくむ議会への請願書（人民憲章）を作成した。一八四〇年に創立された「全国チャーティスト協会」は、労働運動の歴史上最初の大衆的な労働者党であった。一八四八年以来、チャーティスト運動は衰退にむかった。チャーティスト運動の失敗のおもな原因は、明確な綱領と戦術、首尾一貫して革命的なプロレタリア的指導部をもたなかったことにあった。しかし、チャーティストは、イギリスの政治史にも、国際労働運動の発展にも、巨大な影響をおよぼした。それは「最初の広範な、真に大衆的な、政治的にはっきりした形をとったプロレタリア的革命運動」（レーニン全集、第二九巻、三〇七ページ）であった。二〇四

（一三六）**三月一四日の宣言**——一九一七年三月一四（二七）日、ペトログラード・ソヴェトの会議で採択されたソヴェトのよびかけ『全世界の諸国民へ』のこと。交戦諸国の勤労者に平和のために行動するよううったえたものであったが、戦争の侵略的性格を暴露しておらず、平和のための実際的措置も提起していなかった。二〇六

（一三七）**郷**——革命前のロシアで、郡の下の地域行政単位。二一〇

（一三八）**帝室領地**——帝室林野局の管理下にあったツァーリおよび皇族の所有地。

御料地——皇帝官房（帝室管財庁）の管理下にあったツァーリおよび皇族の私有地で、アルタイ、ザバイカル、ポーランドに集中していた。

特許工場所有地——国から工場主に割り当てられた土地で、その土地の代償として工場で働く農民にだけ分与したもの。

長子相続地——分割されずに代々長子または家長に相続される大地主の領地。二二一

（一三九）**村団**——革命前のロシアで最下級の行政単位。人口三〇〇人ないし二〇〇〇人の範囲で、一つないし数個の村で構成され、いくつかの村団が郷をつくっていた。村団の行政機構は村寄合と村長老であった。二二二

（一四〇）**フートル農民**——フートルは、ハンガリー語の határ に由来することばで、元来は、所有者の家、屋敷、農業用建物をもふくむ特別の土地のこと。これは農村共同体が解体してゆくにしたがって形成される個人的土地所有にもとづく私的所有地である。しかし、フートルをもつことができたのは、富裕な農民に限られていた。ストルィピンの改革は、このフートル農民を大量につくりだして、農業における資本主義の発展を促進した。

アルテリ——歴史的には、ロシアにおける単純商品生産者、すなわち農民、手工業者、漁民の営利協同体。基本的な生産手段は社会化されていて、全組合員が集団的労働に従事し、生産物を共同で販売し、その収益を一定の割合で分配していた。今日の社会主義的集団農業の基本形態もこれである。二二二

（一四一）**農民代表ソヴェト臨時全ロシア大会**——一九一七年一一月一一—二五日（一一月二四日—一二月八日）にペトログラードでひらかれた。大会には、県、郡、方面軍、軍、軍団、師団の各農民ソヴェトの代議員が出席した。一一月一八日（一二月一日）現在で、議決権をもつ代議員三三〇名が出席していたが、そのうちエス・エル左派一九五名、ボリシェヴィキ三七名、エス・エル右派および中間派六五名であった。大会では左右両派の激しい闘争がおこなわれ、その結果、エス・エル右派は大会を退場した。エス・エル右派にた

いするボリシェヴィキの闘争は、エス・エル左派の立場がしっかりしないために困難になった。

大会を分裂させようとするエス・エル右派の企ては失敗した。一一月一五（二八）日、大会議長団と全ロシア中央執行委員会とが共同で作成した、全ロシア中央執行委員会と農民執行委員会の合同条件についての議長団の報告が、大会会議で審議され、承認された。その夜ひらかれた全ロシア中央執行委員会、農民代表ソヴェト臨時大会、ペトログラード・ソヴェトの合同会議では、全ロシア中央執行委員会と農民執行委員会との合同についての報告が審議され、また講和と土地にかんする第二回ソヴェト大会の布告、および労働者統制についての全ロシア中央執行委員会の布告を承認する決議が採択された。大会は農業問題について、エス・エル左派から提出された、均等な土地用益の原則を基礎とする決議案を採択した。

大会は、農民代表ソヴェト第二回全ロシア大会を一一月二六日（一二月九日）にひらくことを議長団に委任した。

レーニンは大会の席上で、農業問題とヴィクジェリ（鉄道従業員全ロシア執行委員会）代表の声明とについて演説し（全集、第二六巻、三二九—三三〇、三三三—三三四ページを参照）、また農業問題について結語を述べた。レーニンの演説は、農業問題およびエス・エル左派との協定条件にたいするボリシェヴィキの見解を説明したもので、大会の活動に方向をあたえ、大会の左派を結束させるうえで大きな意義をもっていた。二三五

（四二）エス・エル左派——社会革命党左派（国際派）は、一九一七年の七月事件後、農民の左翼的気分の進展を反映して急速に成長しはじめた。十月革命当時の第二回全ロシア・ソヴェト大会で、エス・エル左派は、ボリシェヴィキとともに投票した。一九一七年一一月一九—二八日（一二月二—一一日）にひらかれた第一回全ロシア党大会で、エス・エル左派は独立の左派エス・エル党を結成した。

一九一七年一一月—一二月はじめ、ボリシェヴィキと左派エス・エルとの交渉の結果、後者の政府参加について協定が成立した。左派エス・エルは人民委員会議の共同政策を遂行する義務を負い、一連の人民委員部の参与会にはいった。ボリシェヴィキと協力するようになった左派エス・エルも、社会主義建設の根本問題についてボリシェヴィキと意見を異にし、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）に反対した。一九一八年夏以後、左派エス・エルのあいだに反ソヴェト権力の気分が高まり、同年七月彼らは武装反乱をおこし、ソヴェトから除名された。大衆の支持を失った左派エス・エルは、その後ソヴェト権力にたいする武装闘争の道をとった。左派のうちのボリシェヴィキと協力する立場をとった部分は、おおむね共産党に入党した。二三五

（四三）一八七五年五月五日付のマルクスのヴィルヘルム・ブラッケあての手紙、全集、第一九巻、一三ページを参照。二三三

（四四）「ねえ君、理論は灰色で、緑に萌えるのは永遠の生命の樹だ」——ゲーテの『ファウスト』第一部、書斎の場に出てくるメフィストフェレスのことばをいくらか言いかえたもの。二三三

（四五）これは、『勤労被搾取人民の権利の宣言』の草案であって、一九一八年一月三（一六）日の全ロシア中央執行委員会の会議に上程されたもの。草案は反対二票、棄権一票の大多数で『宣言』の基礎として採択され、成文作成のため調停委員会に回付された。『宣言』は、一月一二（二五）日、第三回全ロシア・ソヴェト大会で承認され、のちソヴェト憲法の基礎とされた。二三六

（四六）労働者統制法——労働者生産統制法の作成は、十月革命

が勝利した直後に始められた。レーニンの書いた『労働者統制規定草案』は、一九一七年一〇月二六日か二七日（一一月八日か九日）に、レーニンも参加してひらかれたペトログラード工場委員会中央評議会の会議で審議され、同会議で基本的に採択された。ついで一〇月二七日、草案は人民委員会議の審議にかけられた。レーニンの草案は、労働者統制法案にさらに手をくわえるための基礎になった。法案の最終の仕上げは、全ロシア中央執行委員会によって設置された特別委員会に一任された。一一月一四（二七）日、全ロシア中央執行委員会は特別委員会から提出された草案を審議し、『労働者統制規定』とよばれる布告を可決した。

この布告によって、労働者および職員の数五人以上または年間売上高一万ルーブリ以上のすべての鉱工業、商業、銀行、農業その他の企業に、いっさいの生産物および原料の生産、保管および売買にたいする労働者統制が実施された。

最高国民経済会議についての布告――最高国民経済会議を設置する問題は、十月革命が勝利した直後に提起された。前出のペトログラード工場委員会中央評議会の会議で、指導的経済機関の設置案が審議された。レーニンは、一一月九（二二）日にペトログラード労働組合評議会拡大会議で演説したとき、ソヴェト国家の経済管理機関を設置する必要に注意をうながし、このような機関を設置する準備はもう始まっている、と述べた。最高経済機関の設置案は、人民委員会議の設けた委員会で作成された。

全ロシア中央執行委員会のボリシェヴィキ委員団は、最高国民経済会議設置の問題を審議して、これに立法権をあたえて労働者独裁の戦闘的な機関にする必要がある、と強調した。一二月一（一四）日、同会議設置の問題は、全ロシア中央執行委員会の会議で審議され、『最高国民経済会議についての布告』が可決された。

レーニンは最高国民経済会議の活動の組織化に多大の注意をはらい、その活動を指導し、国民経済会議の各会議で演説した。最高国民経済会議の活動を軌道にのせる問題は、人民委員会議の会議で何度も審議された。大工業の国有化が完了するとともに、最高国民経済会議は国有工業の管理機関となった。三六

（一四七）　すべての銀行の国有化――国立銀行は一九一七年一〇月二五日（一一月七日）に占拠された。一二月一四（二七）日の朝、政府の命令により、ペトログラードのすべての銀行と信用機関が労働者および赤衛兵の部隊によって占拠された。この日、『銀行国有化について』と『銀行内ロッカーの検査について』の布告が、全ロシア中央執行委員会で採択された。三六

（一四八）　フィンランド、ペルシア、アルメニアにかんする人民委員会議の政策――一九一七年一二月六（一九）日、フィンランド国会はフィンランド独立宣言を採択した。

人民委員会議は一九一七年一二月一八（三一）日、フィンランドの国家的独立についての布告を採択した。一九一七年一二月二二日（一九一八年一月四日）、フィンランド独立についての布告は全ロシア中央執行委員会で承認された。

一九一七年一二月一九日（一九一八年一月一日）、一二月二（一五）日にブレストで締結された休戦協定（注一五六を参照）にしたがい、ソヴェト政府は、ペルシアからロシア軍部隊を引き揚げる総計画の作成をペルシア政府に申し入れた。

一九一七年一二月二九日（一九一八年一月一一日）、人民委員会議は『「トルコ領アルメニア」についての布告』を採択した。三七

（一四九）　ロシア共産党（ボ）第七回臨時大会――十月革命後最初の

党大会——は、一九一八年三月六—八日にペトログラードのタヴリーダ宮殿でひらかれた。大会が招集されたのは、ドイツとの講和条約締結の問題（注一五六を参照）を最終的にきめるためであった。

大会には、議決権をもつ代議員四七名と、評議権をもつ代議員五九名とが出席した。代議員は、モスクワ、ペトログラード、ウラル、ボヴォルジェなどの最大の党組織をふくむ一七万以上の党員を代表していた。大会当時の党員数は、全部で約三〇万人であった。だが、大会の招集が急であったため、あるいは一部の地方がドイツ軍に一時占領されていて集まることができなかったため、党組織のかなりの部分が代議員を送れなかった。

大会は次の議題を承認した——中央委員会の活動報告、戦争と講和の問題、綱領の改正と党名の変更、組織問題、中央委員会の選挙。レーニンは大会の議事全体を指導した。彼は中央委員会の政治報告をおこない、綱領改正と党名変更について報告し、すべての問題の審議に参加して一八回も大会で発言した。

中央委員会の政治報告のあとで「左翼共産主義者」の指導者ブハーリンが報告をおこない、対ドイツ戦争を主張した。レーニンの説得的な論拠の影響をうけて、「左翼共産主義者」の一部はその立場をあらためた。大会は、全員一致で中央委員会の報告を承認したのち、戦争と講和の問題についての決議案の審議に移った。大会は、「左翼共産主義者」から決議案として提出された『現在の情勢についてのテーゼ』を否決して、記名投票による賛成三〇票、反対一二票、棄権四票で、ブレスト講和の問題についてのレーニンの決議案を採択した。

ついで大会は、綱領改正と党名変更の問題を審議した。この問題についての報告は、レーニンがおこなった。報告の基礎は、すでに大会のはじめに代議員に配布されていた『綱領草案下書き』であった（全集、第二七巻、一五二—一五八ページを参照）。大会は、レーニンの提案した党名、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）を全員一致で採用した。新しい綱領を最終的に作成するため、大会は、レーニンをはじめとする七名の委員会を選出した。

大会は、委員一五名および候補八名からなる中央委員会を秘密投票で選出した。中央委員会に選出された「左翼共産主義者」のブハーリン、ローモフ（ゲ・イ・オポーコフ）、ウリツキーの三名は、中央委員会での仕事を拒否するむねを大会で声明し、数次にわたる中央委員会の厳重な申入れにもかかわらず、数ヵ月のあいだ仕事につこうとはしなかった。

第七回党大会は、大きな歴史的意義をもっていた。大会は、平和の息つぎをかちとるレーニンの方針が正しいことを確認し、「左翼共産主義者」およびトロツキー派を撃破し、共産党と労働者階級を社会主義建設の基本的任務の解決にむかわせた。

すこしあとに三月一四—一六日にひらかれた第四回臨時全ロシア・ソヴェト大会は、ブレスト講和条約を批准した。三八

（一五〇）カーメネフ、ジノヴィエフ、ルィコフ、その他党中央委員会とソヴェト政府の一部のメンバーの降伏主義的立場をさす。彼らは、十月革命のあとで、「同質の社会主義政府」を組織せよというエス・エルとメンシェヴィキの要求を支持した。三九

（一五一）レーニン『戦争についての決議を擁護する演説』、全集、第二四巻、二六八ページを参照。三九

（一五二）土地社会化にかんする布告——一九一八年一月一〇—一八（二三—三一）日にひらかれた第三回全ロシア・ソヴェト大会で可決され、二月一九日に公布された。第二回ソヴェト大会の土地に

かんする布告を確認して、土地の均等配分の具体的な手続を規定したもの。三三

（一五三）「ドイツ軍は攻勢に出ることはできないだろう」――一九一八年一月八（二一）日の党中央委員と党活動家の合同会議で、「左翼共産主義者」が言いだしたもの。ヴェ・ヴェ・オボレンスキー（エヌ・オシンスキー）は、「ドイツ軍は攻勢に出ないだろう」と主張し、イェ・ア・プレオブラジェンスキーは、ドイツ軍は「技術的に攻撃することはできまい。冬でもあり、道もないから……」と述べた。三五

（一五四）ヒュドラ――ギリシア語で「水蛇」の意。しかし、とくにギリシア神話の英雄ヘラクレスに退治された不死の怪物レルネの九頭のヒュドラをさす。三五

（一五五）「いつもきまってこの場所で」――イ・エフ・ゴルブノーフの短篇『郵便駅で』のなかの馭者のことば。山の斜面をすみずみまで知っていると言って自慢した馭者が、夜間馬車をひっくりかえしてしまい、「ほいほい、いつもきまってこの場所でひっくりかえる」と言ったという話。三五

（一五六）ブレスト講和交渉――党とソヴェト政府は、十月革命の最初の日から、講和のための積極的な闘争を展開した。一〇月二六日（一一月八日）に第二回全ロシア・ソヴェト大会で採択された『講和にかんする布告』のなかで、ソヴェト政府は全交戦国に、無併合・無賠償の公正な民主主義的講和の締結についてただちに話合いを始めることを申し入れた。しかし、連合国の帝国主義者は、ソヴェト政府の申入れを拒否した。ロシアを戦争からぬけださせることはさしせまった必要だったので、ソヴェト政府は、やむをえずドイツと単独講和交渉を始めることになった。一九一七年一一月一九日（一二月二日）、ソヴェト・ロシアの講和代表団は、ブルガリアおよびトルコの代表をもふくむオーストリア＝ドイツ・ブロックの代表団とブレスト－リトフスクで会見した。一九一七年一二月二（一五）日、休戦協定が調印された。休戦協定は講和会議の開催を予定していた。講和会議はブレスト－リトフスクで一九一七年一二月九（二二）日にひらかれた。ソヴェト・ロシアの代表団と四国同盟（ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、ブルガリア、トルコ）の代表団とが会議に参加した。講和会議の第一回会議の席上、ソヴェト代表団は講和条件についての宣言を読みあげた。一九一八年一月五（一八）日、四国同盟の代表は、各国政府の領土要求をソヴェト代表団に提示した。彼らの計画では、一五万平方キロメートル以上の領土（ポーランド、リトアニア、エストニアとラトヴィアの各一部、またウクライナ人と白ロシア人の居住する広大な地域）を、ロシアからドイツおよびオーストリア＝ハンガリーに割譲させることになっていた。

ドイツ帝国主義者のもちだした条件がまぎれもなく略奪的なものであったにもかかわらず、レーニンは講和の締結を主張した。なぜなら、ソヴェト権力の強化のためには息つぎが必要であり、住民全体が戦争に疲れきって、経済が崩壊し、軍隊が戦闘力をもたない状態で戦争をつづけるなら、ソヴェト権力はかならず破滅する、と考えたからであった。レーニンとその支持者の立場は、トロツキーからも、また「左翼共産主義者」のグループ（ブハーリン、ア・ローモフ・（ゲ・イ・オポーコフ）、ア・ア・ヨッフェ、ゲ・エリ・ピャタコーフ、エヌ・オシンスキー（ヴェ・ヴェ・オボレンスキー）その他）からも反対をうけた。「左翼共産主義者」は、交渉の打切りを要求し、冒険主義的な「革命戦争」のスローガンをかかげ、レ

ーニンとその支持者にたいして激しい闘争をおこなった。「左翼共産主義者」の見解には、モスクワ、ペトログラード、ウラルなどの一連の党組織内でもいくらかの支持があった。講和交渉の第二段でソヴェト代表団長であったトロツキーは、降伏主義の立場をとった。できるだけ交渉を引きのばしながらも、ドイツ側が最後通告を突きつけてきたなら講和条約に調印せよという、中央委員会の指令およびレーニンの指示にそむいて、トロツキーはブレスト＝リトフスクで、ソヴェト・ロシアは講和条約に調印しないが、戦争を停止し、軍隊を復員する、と声明した。この声明の結果、交渉は決裂した。二月一八日、ドイツ軍は全戦線にわたって攻勢を開始した。

二月一七日と一八日（朝）の中央委員会の会議では、ただちにドイツと交渉を始めようというレーニンの提案は、少数の賛成票しかえられなかった。ドイツ軍の攻勢が事実となった二月一七日の夕刻にひらかれた中央委員会の緊急会議では、トロツキーおよび「左翼共産主義者」との激しい闘争をおこなったのち、レーニンは講和条約の調印に賛成する多数票をはじめて獲得することができた。二月一九日の朝、ソヴェト政府から、ブレスト＝リトフスクでドイツ側から提示された条件にもとづいて講和条約に調印することに同意するという無線電報が、ドイツ政府に送られた。

二日二三日の朝、いっそう苛酷な講和条件を内容とするドイツ軍司令部の回答が到着した。二月二三日の党中央委員会でドイツの新たな最後通告を審議するさいにも、激しい闘争がおこなわれた。その結果、党中央委員会は大多数で、ドイツから提示された条件で講和条約にただちに調印しようというレーニンの提案に賛成した。二月二四日の夜半、全ロシア中央執行委員会は、ついで人民委員会議も、ドイツの講和条件を受諾することを決定し、これはただちにドイツ政府に通告された。

緊急に招集された第七回党大会は、講和の問題におけるレーニンの方針が正しいことを、大多数で確認した。三月一四―一六日にひらかれた第四回臨時ソヴェト大会は、ブレスト条約を批准した。

ドイツの十一月革命（一九一八年）が帝政を打倒したので、ソヴェト政府はブレスト条約を破棄することができた。三三六

（一五七）「戦争もせず、講和条約の調印もしない」――一九一八年一月二八日（二月一〇日）にトロツキーがブレスト＝リトフスクでドイツ軍司令部と交渉中におこなった声明をさす。三三六

（一五八）第三国会議員がツァーリへの忠誠宣誓書に署名させられたことをさす。宣誓を拒否すれば、国会の演壇を失うので、社会民主党の議員も、全議員といっしょに宣誓書に署名した。三四一

（一五九）国際的な戦場革命――オボレンスキー（エヌ・オシンスキー）が『戦争と講和の問題についてのテーゼ』のなかで使った用語。このテーゼは、中央委員会の一九一八年一月二一日（二月三日）の会議のために書かれ、三月一四日に「左翼共産主義者」の新聞『コムニスト』第八号に発表された。三四三

（一六〇）ティルジット講和条約――一八〇七年七月にフランスとプロイセンとのあいだに結ばれたもの。この条約で、プロイセンは広大な領土を失い、一億フランの賠償金を課された。また、その軍隊を四万に縮減し、ナポレオンの要求があれば援軍を提供し、イギリスとの通商を停止する義務を負わされた。三四三

（一六一）新聞『コムニスト』（『共産主義者』）――「左翼共産主義者」の日刊の機関紙。一九一八年三月五日から一九日まで、ロシア社会民主労働党ペテルブルグ委員会およびペテルブルグ周辺委員会の機関紙として、ペトログラードで発行された。全部で二号出た。

一九一八年三月二〇日のペトログラード全市党会議の決定により、同紙の発行は停止された。会議は、『コムニスト』の紙上に表明されたペトログラード委員会の政策は根本的にまちがっており、けっして党ペトログラード組織の立場を反映するものではないことを認めた。そして会議は、『コムニスト』ではなく『ペトログラーツカヤ・プラウダ』をペトログラード党組織の機関紙と宣言した。二四三

(一六二) **一一日戦争**——ドイツ軍部隊の攻勢が開始された二月一八日から、ソヴェト代表団がブレスト－リトフスクに到着した二月二八日までをさすらしい。ドイツ占領軍の攻撃は、講和条約が調印された三月三日までつづいた。二四五

(一六三) **フィンランド革命**——一九一八年一月二七日、フィンランド社会民主党指導部のよびかけに応じて開始された。スヴィンフヴドのブルジョア政府は打倒され、権力は労働者の手に移った。一月二九日、E・ギュリング、O・クーシネン、I・シロラ、A・タイミ、その他からなる人民全権代表会議というかたちでフィンランドの革命政府が樹立された。しかし、プロレタリア革命はフィンランドの南部でしか勝利しなかった。スヴィンフヴド政府は国の北部で地歩をかため、そこに全反革命勢力を集中しはじめ、ドイツ皇帝政府に援助を求めた。ドイツ軍が介入した結果、三ヵ月間つづいた激しい内戦ののち、五月二日にフィンランドの労働者革命は鎮圧された。国内に白色テロルが始まり、数千の革命的な労働者、農民が処刑され、獄中で虐殺された。二四五

(一六四) **ソヴェトの三つの発展段階**——第二回全ロシア・ソヴェト大会(一九一七年一〇月)までを第一期、第三回全ロシア大会までを第二期、第四回全ロシア大会(一九一八年三月)までを第三期とよんだものと思われる。

第三回全ロシア・ソヴェト大会は、一九一八年一月一〇―一八(二三―三一)日にペトログラードでひらかれた。一月一三(二六)日には、農民代表ソヴェト第三回全ロシア大会の参加者が合流し、大会の最終会議には一五八七名の代議員が出席した。大会はレーニンの書いた『勤労被搾取人民の権利の宣言』(本書、二二六―二二七ページを参照)を承認したが、これはのちにソヴェト国家の憲法の基礎となった。大会で採択された決議では、全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の政策が承認され、この両者に全面的な信頼が表明された。

大会は、ソヴェト共和国の連邦制度の原則およびソヴェト権力の民族政策についての民族人民委員スターリンの報告を聴取し、ロシア社会主義共和国が、ロシア諸民族の自由意志にもとづく同盟の基礎のうえにソヴェト諸共和国の連邦として樹立される、という決定を採択した。大会は、土地についての布告を基礎として作成された土地社会化法の基本的諸条項を確認した。

大会で選出された全ロシア中央執行委員会のメンバーは、ボリシェヴィキ一六〇名、左派エス・エル一二五名、国際派社会民主主義者二名、無政府共産主義者三名、エス・エル派マクシマリスト七名、右派エス・エル七名、それにメンシェヴィキ二名であった。二四五

(一六五) 一九一八年二月二四日の党モスクワ地方ビューローで採択された決議をさす。このころ、同ビューローは「左翼共産主義者」に乗っとられていて、事実上反党分派の中央部の役割をしていた。二四六

(一六六) レーニンの労作『ソヴェト権力の当面の任務』は、原稿では『ソヴェト権力の現在の任務についてのテーゼ』という表題であった。レーニンは論文の執筆にあたり、あらかじめいくつかの異

なったプランをつくった(全集、第五版、第三六巻、五四三―五五二ページを参照)。

レーニンの『テーゼ』は、一九一八年四月二六日の党中央委員会会議で審議された。中央委員会はこれを全員一致で承認し、論文として『プラウダ』と『イズヴェスチヤ』に発表すること、また単行の小冊子としても出版することを決定した。一九一八年にモスクワ、ペトログラード、サラトフ、カザン、タンボフ、その他ロシアの諸都市で、小冊子は一〇版以上も発行された。この年、小冊子の英語版がニューヨークで、フランス語版がジュネーヴで出版され、またドイツ語で翻訳に近い要約がチューリヒで発行された。三三〇

(一六七) 第四回臨時全ロシア・ソヴェト大会――ブレスト講和条約批准の問題を決定するために招集され、一九一八年三月一四―一六日にモスクワでひらかれた。大会には議決権をもつ代議員一二三二名が出席したが、そのうちボリシェヴィキ七九五名、左派エス・エル二八三名、エス・エル中間派二五名、メンシェヴィキ二一名、国際派メンシェヴィキ一一名、その他であった。

メンシェヴィキ、左右エス・エル両派、マクシマリスト、無政府主義者その他は、統一戦線をつくってブレスト条約の批准に反対した。激しい討論がおこなわれたのち、大会は記名投票による圧倒的多数で、レーニンの講和条約批准の決議案を採択した。賛成七八四票、反対二六一票、棄権一一五票であった。ブレスト条約の批准にともない、左派エス・エルは人民委員会議を脱退した。「左翼共産主義者」は表決に参加せず、特別声明を出して、講和締結は国防を破壊し、革命の成果をだいなしにすると声明した。これは、第七回党大会および第四回臨時全ロシア・ソヴェト大会共産党代議員団の決定にそむき、また党の諸決定に反対してはならないという、大会中に会議をひらいた中央委員会の決定を踏みにじるものであった。

大会は、首都をモスクワに移す決定を採択し、また二〇〇名からなる中央執行委員会を選出した。

なおここにふれられている大会のブレスト条約批准決議第四項については、全集、第二七巻、二〇三ページを参照。三三〇

(一六八) 人民委員会議は一九一七年一一月一八日(一二月一日)、レーニンの提案にもとづいて、『人民委員、高級職員および官吏の俸給について』という決定を採択した。決定の草案はレーニンが書いた(全集、第四二巻、三―四ページを参照)。この決定によって、人民委員の最高月額俸給は五〇〇ルーブリ、労働不能の家族一名ごとに一〇〇ルーブリ加俸すると定められた。これは、およそ労働者の平均賃金に等しかった。一九一八年一月二(一五)日、人民委員会議は、労働人民委員ア・ゲ・シリャプニコフの照会に答えて、右の布告は専門家にたいして所定の最高額以上を支払うことを禁止するものではないと説明した決定を採択し、こうして科学・技術専門家のより高い報酬を認可した。三三九

(一六九) 外国貿易の統制は、ソヴェト権力の当初から実施されはじめた。一九一七年一二月、レーニンは外国貿易の国家独占実施の問題を提起した。外国貿易の独占についての布告は、一九一八年四月二二日に人民委員会議で採択された。三六二

(一七〇) 一九一八年六月一七日、人民委員会議は『直接税の徴収にかんする一九一七年一一月二四日付布告の変更および補足にかんする布告』を承認した。この布告は所得税と財産税の厳密な課税手続を定めている。三六三

(一七一) 『消費組合にかんする布告』――一九一八年四月一〇日に人民委員会議で採択され、翌一一日に全ロシア中央執行委員会の会

議で承認された。レーニンはこの布告案に幾多の修正をくわえた。第一一、第一二、第一三条は、全文レーニンが書いたもの。二六四

（一七二）**カラブガーズ**——トルクメン共和国の西端、カスピ海に接する内海。ここの水は硫酸ソーダ、塩酸ソーダ、マグネシウムを含有し、化学工業原料となる。二六六

（一七三）**『労働規律にかんする規定』**——一九一八年四月三日に全ロシア労働組合中央評議会で採択された労働規律についての規定をさす。同評議会は、すべての国有企業に厳格な内規を設け、作業高ノルマを定め、労働生産性を測定し、出来高賃金制とノルマの超過遂行にたいする報奨制度とを制定し、労働規律違反者にたいしては厳重な懲罰措置をとることを提案した。全ロシア労働組合中央評議会で採択された決定にもとづき、金属労働組合中央委員会は四月に、出来高払い制度と報奨制度を金属工業に採用することを、すべての下部組織に指令した。出来高払いの原則は、一九一八年一二月に公布されたソヴェト労働法典によって最終的に確立された。二六七

（一七四）レーニン『第四回臨時全ロシア・ソヴェト大会。ブレスト条約の批准についての決議』、全集、第二七巻、二〇三ページを参照。二七一

（一七五）人民委員会議の布告**『線路の中央管理、保全およびその輸送能力について』**をさす。各種の機関は鉄道官庁の仕事に介入してはならないという交通人民委員部から提出された布告草案を、一九一八年三月一八日に検討した人民委員会議は、レーニンの次のような指示にもとづいて布告の修正を特別委員会に委任した。「（一）中央集権化をすすめること、（二）鉄道諸組織の選出にもとづいて各地方中心地にそれぞれ責任執行者を任命すること、（三）彼らの命令を絶対に遂行すること、（四）秩序維持を担当する警備隊の独裁的権限、（五）車両の数とその配置状況を即時調査する措置、（六）技術部を設置する措置、（七）燃料。」特別委員会から提出されて三月二一日の人民委員会議の会議で検討された草案に、レーニンは多くの重要な修正をくわえ、そのあとで政府はこれを承認した。メンシェヴィキと左派エス・エルの強い影響下にあった鉄道従業員全ロシア執行委員会（ヴィクジェリ）が布告に敵意をもった結果、交通人民委員部は三月二三日、布告変更の問題を人民委員会議の会議で提起した。レーニンは、布告に反対する連中の攻撃に反論して、サボタージュとだらしなさを鉄道から一掃するきわめて強硬な措置をとる必要を説明し、布告の絶対性を強化する修正をくわえた。こうして修正された布告は、三月二三日に政府で最終的に承認された。二七四

（一七六）**『フペリヨード』**（『前進』）——メンシェヴィキの日刊新聞。一九一七年三月からメンシェヴィキのモスクワ組織の機関紙として、のちにはロシア社会民主労働党（メンシェヴィキ）モスクワ組織委員会および中央地域委員会の機関紙として、モスクワで発行された。一九一八年四月二日からはメンシェヴィキ中央委員会の機関紙ともなった。十月革命後、反革命的活動のかどで二度停刊を命じられ、一九一九年二月、全ロシア中央執行委員会の決定によって最終的に閉鎖された。二七六

（一七七）**『ナーシ・ヴェーク』**（『わが世紀』）——カデットの中央機関紙『レーチ』（注七二を参照）の替え名のひとつ。二七六

（一七八）**一九〇五年の十月**——第一次ロシア革命の時期における一九〇五年一〇月の全国的政治ストライキをさす。一〇月ゼネストの参加者数は二〇〇万人をこえた。一〇月ストライキは、専制の打倒、ブルィギン国会の積極的ボイコット、憲法制定議会の招集、民

主的共和制の樹立というスローガンのもとにおこなわれた。全国的政治ストライキは、労働運動の威力を示し、農村と陸海軍内に革命的闘争を発展させた。一〇月ストライキは、プロレタリアートを一二月の武装蜂起（注二六を参照）にみちびいた。二七八

（一七九）　エンゲルス『反デューリング論』、全集、第二〇巻、二九二ページを参照。二八〇

（一八〇）　ドブロリューボフとチェルヌィシェフスキーにたいするトゥルゲーネフの態度については、チェルヌィシェフスキー自身が、一八六〇年代のはじめにトゥルゲーネフとかわした対談の内容を伝えている。二八一

（一八一）　雑誌『コムニスト』——「左翼共産主義者」の週刊機関誌。一九一八年四月二〇日から六月までモスクワで発行された。全部で四号出た。二八三

（一八二）　本書、二四五ページを参照。二八六

（一八三）「ノズドリョーフ式」——ノズドリョーフは、ゴーゴリの小説『死せる魂』に出てくる、たえず他人といざこざをおこす地主の名。二八九

（一八四）　本選集、第七巻、三〇一—三〇二ページを参照。二八九

（一八五）　レーニン『全ロシア中央執行委員会会議、一九一八年四月二九日。当面の任務についての報告の結語』、全集、第二七巻、三一三—三一四ページを参照。なおここにふれられているマルクスのことばについては、エンゲルス『フランスとドイツの農民問題』、選集、第八冊、一四九ページを参照。二八九

（一八六）　メンシェヴィキが社会主義革命とプロレタリアートの独裁に反対してもちだした基本的諸命題の一つをさしている。メンシェヴィキのこういう見解は、エヌ・スハーノフの著書『革命の記録』に集約的に表現されていた。レーニンの論文『われわれの革命について（エヌ・スハーノフの記録について）』（全集、第三三巻、四九六—五〇一ページ）を参照。三〇三

（一八七）　プーシキンの風刺詩からの引用。この詩には、自分の詩をポイボス（アポロン）に送った平凡な詩人のことが述べてある。風刺詩は次の数行で結ばれている。

読みながらポイボスはあくびをし、しまいにたずねた、
この詩人はいくつになる
そして大げさな頌詩をまえからつくっているのか、と。
「一五歳です」——エラトは答える。
「年齢（とし）はようやく一五だと？」——「それを出てはいません」
——「それなら鞭をくれてやれ！」三〇六

（一八八）　これからあとの引用文については、『国家と革命』、本書、七四—七五、八〇、八六、九〇、九一ページを参照。三〇九

（一八九）『アメリカの労働者への手紙』を合衆国へ送る仕事にあたったのは、ボリシェヴィキのエム・エム・ボロヂーンであった。外国が軍事干渉をおこない、資本主義諸国がソヴェト・ロシアを封鎖していたので、これは困難な仕事であった。『手紙』を合衆国へ送りとどける任務は、ペ・イ・トラーヴィン（スレトフ）が果たした。ロシア共和国憲法と、ウィルソン大統領あてに武力干渉の停止を要求したソヴェト政府の覚え書のテキストも、『手紙』といっしょに合衆国に送りとどけられた。これらの文書は、アメリカの有名な社会主義的ジャーナリスト、ジョン・リードの積極的な協力をえて、アメリカの各新聞に掲載された。

『アメリカの労働者への手紙』は、一九一八年一二月、ニューヨークで発行されていたアメリカ社会党左派の機関誌〈The Class

Struggle》(『階級闘争』)と、ジョン・リードおよび片山潜も参加してボストンで発行されていた週刊誌《The Revolutionary Age》(『革命時代』)とに英語で発表された(いくらか省略がある)。ついで単行の小冊子としても発行されたほか、アメリカと西ヨーロッパの定期刊行物に何度も転載された。

『アメリカの労働者への手紙』は、アメリカの左派社会主義者によって広く利用され、欧米諸国の労働運動、共産主義運動の発展に大きな役割を果たし、対ソ武力干渉にたいする抗議運動が合衆国内に強まるのをうながした。三一〇

(一九〇)　**アメリカのフィリピン圧殺**――アメリカ帝国主義者は、一八九八年四月、キューバおよびフィリピン諸島の反スペイン民族解放運動を自分の目的に利用しようとして、対スペイン戦争を始めた。独立フィリピン共和国を宣言したフィリピン国民を「援助する」という口実で、彼らは自国軍部隊をフィリピン諸島に上陸させた。一八九八年一二月一〇日にパリで調印された講和条約にしたがい、敗戦国スペインは、フィリピンを放棄して、アメリカ合衆国にゆだねた。一八九九年二月、アメリカ帝国主義者はフィリピン共和国にたいして軍事行動を開始した。ねばりづよい抵抗をうけたアメリカ軍部隊は、平和な住民の大量処刑や残忍な拷問を始めた。兵力と装備がまさっていたにもかかわらず、フィリピン人を征服することは容易でなかった。侵略軍にたいするゲリラ闘争が、フィリピン諸島で広く展開された。アメリカ帝国主義者は、フィリピン人内部の意見の相違を利用しようとした。農民は独立闘争と、土地獲得闘争、生活状態改善闘争とを結びつけたが、これに恐れをいだいたブルジョア＝地主的上層は、帝国主義者との妥協にはしった。一九〇一年、フィリピンの民族解放運動は鎮圧され、フィリピンはアメリカ合衆国の植民地になった。三一一

(一九一)　アメリカの経済学者H・C・ケアリの著書『アメリカ合衆国大統領への政治経済的書簡』にたいする批評のなかで、チェルヌィシェフスキーは、「歴史の道はネフスキー大通りの歩道ではない。それはすべて、ほこりっぽい野やぬかった原を通り、泥沼を通り、密林を通ってゆく。ほこりまみれになったり、靴をよごすのを恐れる者は、社会活動に手を出さないがよい」と書いている。三一五

(一九二)　**『理性へのよびかけ』**(『アピール・トゥ・リーズン』)――アメリカ社会主義者の新聞で、一八九五年にカンサス州ジラード市で創刊された。同紙は社会主義の思想を宣伝し、労働者のあいだで広く読まれた。第一次世界大戦中は国際主義の立場をとった。E・デブズの論文は、一九一五年九月一一日の同紙に発表された。レーニンは、《When I shall fight》(『私がたたかうとき』)という論文を、本文のように誤記している。三一七

(一九三)　レーニン『一九一六年二月八日のベルンの国際示威集会における演説』、全集、第二二巻、一四一ページを参照。三一七

(一九四)　**一六四九年と一七八九年**――前者はイギリスの、後者はフランスのブルジョア革命の高潮期にあたる。三一八

(一九五)　レーニン『全ロシア中央執行委員会、モスクワ労働者・農民・赤軍代表ソヴェトおよび労働組合の合同会議』、全集、第二七巻、四四七―四四八ページを参照。三一九

(一九六)　**ユピテルとミネルヴァ**――古代ローマの神々。ユピテルは天空、光、雨、雷電の神で、のちにローマ国家の最高神。ミネルヴァは戦争の女神で、工芸、科学、芸術の保護神。神話では、ミネルヴァがユピテルの頭から完全に武装した姿でとびだしたことになっている。三二一

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アウクセンチエフ、エヌ・デ（一八七八—一九四三）——エス・エル党員。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年、ケーレンスキー連立政府の内相。のち国外に亡命。

アレクシンスキー、ゲ・ア（一八七九生）——はじめボリシェヴィキ。第一次大戦中は排外主義者。一九一七年七月、レーニンやボリシェヴィキを中傷する偽造文書を発表。翌年、国外に亡命して極反動派に参加。

アレクセーエフ、エム・ヴェ（一八五七—一九一八）——ツァーリの将軍、君主主義者で反革命家。二月革命後、最高総司令官、ついで参謀総長。のち白衛派「義勇軍」を指揮した。

イスフ、イ・ア（一八七八—一九二〇）——メンシェヴィキ。一九〇七年に党中央委員。反動期には解党派。第一次大戦中は祖国防衛派。十月革命後、労働博物館で働く。

ヴァイデマイアー、ヨーゼフ（一八一八—一八六六）——ドイツの革命家、マルクスの友人で、共産主義者同盟員。一八四八年の革命に参加、のち亡命してアメリカの労働運動に参加した。

ヴァンデルヴェルデ、エミル（一八六六—一九三八）——ベルギー労働党および第二インタナショナルの指導者。極端な修正主義者で日和見主義者。

ウィルソン、ウッドロー（一八五六—一九二四）——アメリカ大統領（一九一三—一九二〇）。民主党首。第一次大戦中、「一四ヵ条」の講和条約を発表し、国際連盟組織案を起草した。

ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一）——ドイツ皇帝およびプロイセン国王（在位一八八八—一九一八）。

ウェッブ夫妻（夫シドニ、一八五九—一九四一、妻ビアトリス、一八五八—一九四三）——イギリスの改良主義的社会活動家、フェビアン協会の創立者、労働党員。イギリス労働運動史の著者。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇—一八九五）

オシンスキー、エヌ（**オボレンスキー、ヴェ・ヴェ**）（一八八七—一九三八）——一九〇七年入党。十月革命後、最高国民経済会議議長。一九一八年に「左翼共産主義者」の政綱起草者のひとり。一九二〇—二一年には「民主主義的中央集権派」、ついでトロツキー反対派に参加。

カヴェニャク、ルイ・ウジェーヌ（一八〇二—一八五七）——フランスの将軍、反動政治家。一八四八年の二月革命後、アルジェリア総督、ついで陸相。同年六月に軍事独裁の先頭に立ち、パリ労働者の六月蜂起を苛酷に鎮圧した。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八）——第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家、日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

ガガーリン、ア・ヴェ——ツァーリの将軍、公爵。二月革命後、カフカーズ原住民師団の旅団長、コルニーロフ反乱の積極的参加者。

カレーヂン、ア・エム（一八六一—一九一八）——ツァーリの将軍、ドン地方のカザックのアタマン（頭領）。コルニーロフ反乱の積極的な参加者。十月革命後、カザックの反革命を指導し、白衛派「義勇軍」の創設に参加。射殺された。

カレーリン、ヴェ・ア（一八九一—一九三八）——左派エス・エ

ル党の組織者、指導者のひとり。一九一七年一二月―一九一八年三月、財務人民委員。一九一八年にブレスト講和条約代表団のひとり。講和条約の調印に関連して人民委員会から脱退した。一九一八年七月の左派エス・エルの反乱の組織者のひとり。反乱鎮圧後、国外に亡命。

キーシキン、エヌ・エム（一八六四―一九三〇）――カデット党の指導者、医師。臨時政府最後の国家保護相。十月革命直前にペトログラードの「独裁官」に任命された。のち保健人民委員部で働く。

グヴォズデフ、カ・ア（一八八三生）――解党派メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者、中央軍事工業委員会の労働者グループの議長。二月革命後、ペテルブルグ・ソヴェト執行委員、ブルジョア臨時政府の労働次官、ついで労働相。

クーゲルマン、ルートヴィヒ（一八三〇―一九〇二）――ドイツの社会民主主義者、第一インタナショナル会員。マルクスの友人で『資本論』の発行、普及に協力した。

クスコーヴァ、イエ・デ（一八六九―一九五八）――ブルジョア政論家。一八九〇年代にはベルンシュタイン主義の影響をうけた。のちカデット左派。

グチコーフ、ア・イ（一八六二―一九三六）――大資本家、オクチャブリスト党の創立者で指導者。二月革命後、第一次臨時政府の陸海軍相、コルニーロフ反乱の組織に参加。十月革命後はソヴェト権力とたたかい、のち亡命。

グラーヴ、ジャン（一八五四―一九三九）――フランスの無政府主義者、アナルコ‐サンディカリスト。無政府主義の機関紙の編集者。第一次大戦中は社会排外主義者。

クラウゼヴィッツ、カール・フォン（一七八〇―一八三一）――ドイツの軍人、著名な軍事理論家。近代国民戦争の特質を明らかにした。主著――『戦争論』。

クラスノーフ、ペ・エヌ（一八六九―一九四七）――ツァーリ軍の将軍、一九一七年八月のコルニーロフ反乱の積極的参加者、同年一〇月末には、ケーレンスキーの命をうけてペトログラードに出動した。一九一八―一九一九年にはドン地方で白系カザック部隊を指揮、一九一九年に亡命、反ソ活動をつづけた。一九四一―一九四五年にはヒトラー一味と協力し、捕虜となって、死刑に処せられた。

クレンボフスキー、ヴェ・エヌ（一八六〇―一九二一）――ツァーリの将軍。二月革命後、北部方面軍総司令官、コルニーロフ反乱の積極的参加者。十月革命後、赤軍に勤務。反逆罪で銃殺された。

クロポトキン、ペ・ア（一八四二―一九二一）――無政府主義の主要な指導者、理論家のひとり。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後亡命したが、対ソ武力干渉に反対した。

ゲー、ア・ユ（一九一九死）――無政府主義者、十月革命後はソヴェト権力の支持者、全ロシア・ソヴェト中央執行委員。

ゲゲチコーリ、イエ・ペ（一八七九生）――メンシェヴィキ。一九一七年一一月以後、反革命的なザカフカーズ政府の首相、ついでグルジアのメンシェヴィキ政府の外務大臣および副首相。一九二一年以後は白系亡命者。

ゲード、ジュール（一八四五―一九二二）――フランスの社会主義運動および第二インタナショナルの組織者で指導者。マルクス主義思想の普及と社会主義運動の発展に貢献したが、セクト主義的な誤りをおかした。第一次大戦が始まると、社会排外主義の立場をとり、ブルジョア政府に入閣した。

ケーレンスキー、ア・エフ（一八八一生）――エス・エル党の指導者、第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、臨時政府の閣僚、ついで首相兼最高総司令官。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、一九一八年に国外へ亡命。

ゴーゴリ、エヌ・ヴェ（一八〇九―一八五二）――ロシアの大作家。批判的リアリズム文学の基礎をきずいた。喜劇『検察官』、小説『死せる魂』はその代表作。

ゴーツ、ア・エル（一八八二―一九四〇）――エス・エル党の指導者のひとり。二月革命後、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェトのメンバー。十月革命後、ソヴェト権力と積極的にたたかい、一九二二年にエス・エル右派の裁判で有罪判決をうけた。釈放後は経済活動に従事した。

コノヴァーロフ、ア・イ（一八七五生）――中央工業地域の最大の織維工場主、第四国会議員、進歩ブロックの有力者。ケーレンスキー内閣の商工大臣。

コルニーロフ、エリ・ゲ（一八七〇―一九一八）――ツァーリの将軍、帝政派。一九一七年七―八月、ロシア軍最高司令官、反革命的反乱の先頭に立った。反乱鎮圧後、逮捕されたが、ドン地方に逃亡し、白衛派「義勇軍」を組織した。戦死した。

コルネリッセン、フリスチアン――オランダの無政府主義者、第一次大戦中は排外主義者。

コルプ、ヴィルヘルム（一八七〇―一九一八）――ドイツ社会民主党員。極端な修正主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。

ゴンパーズ、サミュエル（一八五〇―一九二四）――アメリカ労働総同盟の創立者、その機関紙『アメリカン・フェダレイショニスト』の編集者、労資協調論者。第一次大戦中は主戦論者、戦後、パリ講和会議の活動に参加。ソヴェト・ロシア孤立化の政策を支持した。

サーヴィンコフ、ベ・ヴェ（ロープシン）（一八七九―一九二五）――エス・エル党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、陸軍次官、ついでペトログラード軍事総督。十月革命後は一連の革命的反乱の組織者。のち逮捕され、獄中で自殺。

サドゥル、ジャック（一八八一―一九五六）――フランス軍の将校、フランス社会党員。一九一七年にフランスの軍事使節団の一員としてロシアに派遣された、十月革命の影響をうけて共産主義の支持者となり。帝国主義者の対ソ干渉に激しく抗議した。コミンテルン第一回大会に参加。フランスの軍法会議によって欠席裁判で死刑の判決をうけたが、一九二四年帰国して無罪となる。平和と諸国民友好の闘士。

サンバ、マルセル（一八六二―一九二二）――フランス社会党の改良主義的指導者、ジャーナリスト、下院議員。第一次大戦中は社会排外主義者、公共事業相として帝国主義的「国防政府」に入閣した。

シャイデマン、フィリップ（一八六五―一九三三）――ドイツ社会民主党の日和見主義的極右派の指導者。一九〇三年から国会議員。第一次大戦中は猛烈な社会排外主義者。一九一八年一一月革命当時、スパルタクス団員虐殺の張本人。ドイツ労働運動の流血の弾圧の組織者。

シュティルナー、マックス（カスパル・シュミット）――ドイツの無政府主義者で、個人主義のイデオローグ。主著――『唯一者とその所有』。

ジョルダニア、エヌ・エヌ（一八七〇―一九五三）――カフカー

ズのメンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後グルジアの革命的メンシェヴィキ政府首班。のち亡命。

ジョレス、ジャン（一八五九―一九一四）――フランス社会党創立者のひとり、入閣主義者。同時に反戦、反軍国主義の闘士であった。第一次大戦の直前、反動派の手先に暗殺された。

シンガリョーフ、ア・イ（一八六九―一九一八）――カデット、ゼムストヴォ活動家。第二、第三、第四国会議員。二月革命後、ブルジョア臨時政府の農相、ついで蔵相。

スタウニング、トールヴァル・アウグスト・マリヌス（一八七三―一九四三）――デンマーク社会民主党および第二インタナショナルの右翼的指導者のひとり。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一六年からブルジョア政府の無任所相、のち首相。一九三〇年代以後ファシスト・ドイツに協力した。

ストルィピン、ペ・ア（一八六二―一九一一）――帝政ロシアの政治家、大地主。一九〇六―一九一一年に首相。革命運動を苛酷に弾圧し、いわゆるストルィピン反動期を出現させた。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇―一九四四）――ブルジョア経済学者、評論家、カデット党の指導者。「合法マルクス主義」の著名な代表者。ロシア帝国主義の思想的代弁者。十月革命後はソヴェト権力の狂暴な敵。

スピリドーノヴァ、エム・ア（一八八四―一九四一）――エス・エル党の指導者。二月革命後はエス・エル左派、同党中央委員。一九一八年七月の左派エス・エルの反革命的反乱に積極的に参加。のち政治活動から離れた。

スペンサー、ハーバート（一八二〇―一九〇三）――イギリスのブルジョア哲学者、社会学者、実証主義者。いわゆる社会有機体説の創始者。資本主義を弁護し、社会主義に反対した。

スミルノーフ、ヴェ・エム（一八八七―一九三七）――ボリシェヴィキ。十月革命後は最高国民経済会議幹部会員。一九一八年「左翼共産主義者」。一九二三年以後トロツキー反対派。のち除名。

ゼンジーノフ、ヴェ・エム（一八八一生）――エス・エル党の指導者のひとり。第一次大戦時には祖国防衛論者、一九一七年にはペトログラード・ソヴェト執行委員、エス・エルの機関紙『デーロ・ナローダ』編集者。十月革命後はソヴェト権力の敵。

ソコリニコフ（ブリリアント）、ゲ・ヤ（一八八八―一九三九）――一九〇五年からボリシェヴィキ。十月革命後財務人民委員、外務人民委員代理、党中央委員。一九二五年に「新反対派」に、ついでトロツキー＝ジノヴィエフ合同ブロックに参加。

ダーヴィット、エドゥアルト（一八六三―一九三〇）――ドイツの経済学者、社会民主党員、国会議員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九―一九二〇年、内相。

ダン（グールヴィチ）、エフ・イ（一八七一―一九四七）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員。第一次中央執行委員会幹部会員。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、国外へ追放された。

ダントン、ジョルジュ（一七五九―一七九四）――フランス大革命の指導者のひとり。ジャコバン派議長。のち、ジャコバン派とジロンド派の和解につとめ、反革命的列強の反フランス連合との和解を策し、一七九三年に処刑された。

チェルヌィシェフスキー、エヌ・ゲ（一八二八―一八八九）――ロシアの革命的民主主義者、ユートピア社会主義者。一八五〇―六〇年代の革命運動の指導者。一八六二年に逮捕、流刑に処され、赦

免直後に死んだ。
チェルノーフ、ヴェ・エム（一八七六―一九五二）――エス・エル党の指導者で理論家。一九一七年にブルジョア臨時政府の農相、地主の土地を占拠した農民にたいして苛酷な弾圧政策をとった。十月革命後、反ソ反乱の組織者。
チャイコフスキー、エヌ・ヴェ（一八五〇―一九二六）――ナロードニキ、のちエス・エル。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェトおよび全ロシア農民代表ソヴェト執行委員。十月革命後、反ソ暴動の組織者のひとり。一九一八年にアルハンゲリスクの反革命的な北部地方臨時政府の首班。
ツェレテーリ、イ・ゲ（一八八二―一九五九）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員、ブルジョア臨時政府の郵政相、ついで内相。十月革命後、グルジアの反革命的メンシェヴィキ政府の指導者。のち亡命。
デブズ、ユージン（一八五四―一九二六）――アメリカ社会党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義の立場をとり、アメリカの参戦反対の宣伝をおこなった。十月革命を歓迎した。一九一八年に一〇年の懲役に処せられたが、一九二一年に恩赦となった。
デューリング、オイゲン（一八三三―一九二一）――ドイツの経済学者で哲学者、講壇社会主義者。マルクスおよび科学的社会主義の反対者。
トゥガン－バラノフスキー、エム・イ（一八六五―一九一九）――「合法」マルクス主義者の代表者のひとり、カデット党員。十月革命後はウクライナで反革命の積極的活動家。白系のウクライナ中央ラーダ政府の蔵相。
ドゥートフ、ア・イ（一八六四―一九二一）――ツァーリ軍の大佐、オレンブルグ・カザーク部隊のアタマン（頭領）。十月革命後、メンシェヴィキおよびエス・エルとともにオレンブルグで反革命的な「祖国・革命救済委員会」を組織した。一九一八―一九一九年にはコルチャック軍のもとでたたかい、一九二〇年三月に中国国境を越えて逃亡した。
ドゥバーソフ――無党派の将校。
トゥラーティ、フィリッポ（一八五八―一九三二）――イタリア社会党の改良主義的右派の指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。
トゥルゲーネフ、イ・エヌ（一八一八―一八八三）――ロシアの大作家。代表作――『父と子』、『処女地』、『猟人日記』等。
ドブロリューボフ、エヌ・ア（一八三六―一八六一）――批評家、政論家、一八五〇―六〇年代の偉大な革命的民主主義者、唯物論哲学者。雑誌『ソヴレメンニク』（『同時代人』）の寄稿家。
トレーヴェス、クラウディオ（一八六八―一九三三）――イタリア社会党の改良主義的指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。
トロツキー（ブロンシテイン）、エリ・デ（一八七九―一九四〇）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、第六回党大会でボリシェヴィキ党に入党。つねに党の一般方針に反対する分派闘争をおこない、一九二七年に党から除名された。
ニキーチン、ア・エム（一八七六生）――メンシェヴィキ、弁護士、七月事件後ブルジョア臨時政府の郵政相、内相。
ニコライ二世・ロマノフ（一八六八―一九一八）――ロシア最後

のツァーリ（在位一八九四―一九一七）。

ハインドマン、ヘンリ・メアズ（一八四二―一九二一）――イギリスの社会主義者、改良主義者。イギリス社会党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命に敵意を示した。

バクーニン、エム・ア（一八一四―一八七六）――無政府主義者。一八四八―四九年のドイツ革命に参加。ナロードニキの運動に思想的な影響をあたえた。国際労働者協会内でマルクス主義の敵として行動し、一八七二年に分裂活動の理由で除名された。

バグラチオーン、デ・ペ（一八六三生）――公爵、将軍。二月革命後、カフカーズ原住民師団長、コルニーロフの反乱の積極的な参加者。

バザーロフ、ヴェ（ルドネフ、ヴェ・ア）（一八七四―一九三九）――一八九六年以来社会民主主義運動に参加、はじめボリシェヴィキ、反動期にはマッハ主義者、「創神主義」および経験批判論を宣伝した。一九一七年には国際派メンシェヴィキ。十月革命に反対したが、一九二一年以後ゴスプランで働いた。

パリチンスキー、ペ・イ（一九三〇死）――銀行界と密接なつながりをもっていた技師。二月革命後、ブルジョア臨時政府の商工次官。十月革命当時、冬宮防衛長官。

パンネクーク、アントン（一八七三―一九六〇）――オランダの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一八年からオランダ共産党員、コミンテルンの活動に参加。一九二一年に脱党、のち政治活動から離れた。

ビスマルク、オットー・エドゥアルト（一八一五―一八九八）――ドイツ帝国宰相（一八七一―一八九〇）、「血と鉄」をもってドイツを統一し、ユンカーと大ブルジョアジーの同盟を確保した。社会主義者取締法を制定したが、社会主義運動の圧殺に失敗した。

ビッソラーティ、レオーニダ（一八五七―一九二〇）――イタリア社会党の創立者、同党の改良主義的極右派の指導者。一九一二年、社会党から除名されて「社会改良党」を結成。第一次大戦中は社会排外主義者、参戦論者。一九一六―一九一八年、無任所相。

ピョートル一世・ロマノフ（一六七二―一七二五）――ロシアのツァーリ（在位一六八二―一七二五）。

ヒルファディング、ルードルフ（一八七七―一九四一）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの理論家、日和見主義者、経済学者。第一次大戦中は中央派。

フェオフィラクトフ、ア・イェ――エス・エル左派、一九一七年一一月に農民代表ソヴェト臨時大会の代議員、同大会で農業人民委員部参与会に選出された。

ブハーリン、エヌ・イ（一八八八―一九三八）――ボリシェヴィキ。第六回党大会で中央委員。十月革命後、党中央委員会政治局員、『プラウダ』編集者、コミンテルン執行委員。のち反党活動のために党から除名された。

ブラッケ、ヴィルヘルム（一八四二―一八八〇）――ドイツの社会主義者、ドイツ社会民主党の創立者のひとり。党出版物の主要な出版者、普及者。

ブランティング、カール・ヤルマル（一八六〇―一九二五）――スウェーデン社会民主党首、日和見主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九年に連立政府に入閣、対ソ軍事干渉を支持した。

ブリヤン、アリスティド（一八六二―一八九二）――フランスの政治家、はじめ社会主義者。第一次大戦中は連立内閣首相兼外相。

ブルィギン、ア・ゲ（一八五一—一九一九）——帝政ロシアの政治家。一九〇五—一九〇六年に内務大臣。一九〇五年八月六（一九）日に発表された国会法案の起草者。

プルードン、ピエール・ジョゼフ（一八〇九—一八六五）——フランスの小ブルジョア社会主義者。無政府主義の理論的創始者のひとり。

ブレシコ・ブレシコフスカヤ、イェ・カ（一八四四—一九三四）——一八七〇年代の「人民の中へ」運動当時に革命的活動を始めた。エス・エル党中央委員。二月革命後、老衰してシベリア流刑地から帰り、同党の最右翼に属した。十月革命後はソヴェト権力の敵。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六—一九一八）——ロシアおよび国際労働運動のすぐれた活動家、ロシア最初のマルクス主義宣伝家。メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者。

プロコポーヴィチ、エス・エヌ（一八七一—一九五五）——極右派の「経済主義者」。一九〇六年にはカデット党中央委員。二月革命後、ブルジョア臨時政府の食糧相。のち国外に亡命。

ヘーゲル、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ（一七七〇—一八三一）——ドイツの大哲学者、客観的観念論者。弁証法を深く研究し、全面的に仕上げた。

ペシェホーノフ、ア・ヴェ（一八六七—一九三三）——自由主義的ナロードニキ、人民社会党の指導者。一九一七年にはブルジョア臨時政府の食糧相。のち白系亡命者。

ベーベル、アウグスト（一八四〇—一九一三）——ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。

ベルケンゲイム、ア・エム（一八八〇—一九三二）——エス・エル、協同組合活動家。二月革命後、モスクワ食糧委員会議長。十月革命後は反ソ活動に従い、のち国外に亡命した。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇—一九三二）——ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極右日和見主義派の指導者。一八九〇年代末にマルクス主義の理論的基礎にたいする全面的な日和見主義的修正を試みた。

ペレヴェルゼフ、ペ・エヌ——弁護士、トルドヴィキ。二月革命後、第一次連立臨時政府の法相。

ペロルーソフ（ベレフスキー）、ア・エス（一八五九—一九一九）——ブルジョア政論家、ナロードニキ右派。一九一八年には地下の反革命的なモスクワ中央部の代表としてコルニーロフ将軍の「参与会」に参加、ついでコルチャックのもとで反革命的新聞の編集にあたった。

ヘンダソン、アーサー（一八六三—一九三五）——イギリス労働党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。ブルジョア政府に入閣。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

ボガエフスキー、エム・ペ（一八八一—一九一八）——ドンの反革命的カザークの指導者。一九一七年六月以後カレーヂン将軍のドン軍アタマン（頭領）の補佐官。一九一八年四月に銃殺。

ポクロフスキー、エム・エヌ（一八六八—一九三二）——歴史家、一九〇五年以来のボリシェヴィキ。第五回党大会で中央委員。十月革命後、モスクワ・ソヴェト議長。ブレスト講和の問題については「左翼共産主義者」。一九一八年以来教育人民委員代理。

ポトレソフ、ア・エヌ（一八六九—一九三四）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年、悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなう。十月革命後、国外に亡命。

ボナパルト、ナポレオン（ナポレオン一世）（一七六九―一八二一）――フランス皇帝（在位一八〇四―一八一四、一八一五）。
ボナパルト、ルイ（ナポレオン三世）（一八〇八―一八七三）――フランスの皇帝（在位一八五二―一八七〇）。一世の甥。
ホフマン、マックス（一八六九―一九二七）――ドイツの将軍。一九一六年九月東部方面軍参謀長、事実上の司令官、ブレスト講和に重要な役割を果たした。ドイツの軍国主義的反動勢力の積極分子。
ポミャロフスキー、エヌ・ゲ（一八三五―一八六三）――革命的民主主義作家。その作品で農奴制のロシアの圧制と腐敗を描いた。
マクラコーフ、ヴェ・ア（一八七〇生）――カデット、地主、弁護士。モスクワ選出の第二、第三、第四国会議員。二月革命後はブルジョア臨時政府のパリ駐在大使、のち白系亡命者。
マルクス、カール（一八一八―一八八三）
マルトフ、エリ（ツェーデルバウム、ユ・オ）（一八七三―一九二三）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキのグループを指導。十月革命後はソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命。
ミハイロフスキー、エヌ・カ（一八四二―一九〇四）――自由主義的ナロードニキ主義の理論家、実証論者、社会学の主観主義学派の代表者のひとり。マルクス主義の敵。
ミリュコーフ、ペ・エヌ（一八五九―一九四三）――カデット党首、ロシア帝国主義ブルジョアジーの代弁者。二月革命後、第一次臨時政府の外相。十月革命後、外国の対ソ武力干渉の組織者。
ミリューチン、ヴェ・ペ（一八八四―一九三八）――はじめメンシェヴィキ、のちボリシェヴィキ。十月革命後農業人民委員。一九一八―一九二一年最高国民経済会議副議長。
ミルラン、アレクサンドル・エティエンヌ（一八五九―一九四三）――フランスの政治家、はじめ社会党員。一八九九年ヴァルデック・ルソーの反動的ブルジョア政府に入閣。一九〇四年に除名され、「独立社会党」を創立。一九二〇―一九二四年フランス大統領。
メーリング、フランツ（一八四六―一九一九）――ドイツ社会民主党左派の指導者、理論家。第一次大戦中は国際主義者。十月革命を歓迎し、ドイツ共産党の創立に活躍した。
モンテスキュー、シャルル・ルイ（一六八九―一七五五）――フランスの著名な社会学者、一八世紀における啓蒙思想の代表者、立憲君主制の理論家。
ラサール、フェルディナント（一八二五―一八六四）――ドイツの小ブルジョア社会主義者。一八六三年に全ドイツ労働者協会を創立、大衆的労働運動の基礎をすえたが、ビスマルクと結んで労働運動を絶対君主制支持の方向へ向けようとした。
ラスプーチン（ノーヴイフ）ゲ・イェ（一八七二―一九一六）――ニコライ二世の宮廷で大きな影響力をもっていた山師、聖職者。帝政派の一団に殺された。
ラデック、カール（一八八五―一九三九）――一九〇〇年代のはじめからガリチア、ポーランドおよびドイツの社会民主主義運動に参加。第一次大戦中、国際主義の立場をとったが、中央派への動揺を示した。一九一七年からボリシェヴィキ党員、コミンテルンで活動した。のち反党活動のために除名された。
ラーリン、ユ（ルーリエ、エム・ア）（一八八二―一九三二）――一九一七年からの党員。一九二〇―一九二一年、最高輸送委員会副議長、ゴスプラン委員、ついで同幹部会員。
リープクネヒト、ヴィルヘルム（一八二六―一九〇〇）――ドイ

ツおよび国際労働運動の著名な活動家、ドイツ社会民主党の創立者で指導者。

リープクネヒト、カール(一八七一―一九一九)――ドイツの革命的社会主義者。第一次大戦中、国会でただひとり軍事予算に反対した。一九一五年にスパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルにたおれた。

リーベル(ゴリドマン)、エム・イ(一八八〇―一九三九)――ブンドの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後は臨時政府を支持した。十月革命に敵対したが、のち経済活動に従事。

リャブシンスキー、ペ・ペ(一八七一生)――モスクワの大資本家で銀行家。一九一七年八月、コルニーロフ反乱の鼓舞者、組織者のひとり。

リュベルサック、ジャン・ド――フランス軍の将校、伯爵、王党派。一九一七―一九一八年にロシアに派遣されたフランスの軍事使節団の一員。

ルクセンブルク、ローザ(一八七一―一九一九)――ポーランド生まれの婦人革命家、経済学者、ドイツ社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者、スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルにたおれた。

ルサーノフ、エヌ・エス(一八五九生)――政論家、「人民の意志」派、のちエス・エル。十月革命後は白系亡命者。

ルノデル、ピエール(一八七一―一九三五)――フランス社会党の改良主義的指導者。『ユマニテ』主筆。第一次大戦中は社会排外主義者。

ルバノーヴィチ、イ・ア(一八六〇―一九二〇)――エス・エルの指導者、国際社会主義ビューローの一員。第一次大戦中は社会排外主義者、十月革命後はソヴェト権力の敵。

レギーン、カール(一八六一―一九二〇)――ドイツの労働組合指導者、社会民主党国会議員、修正主義者。第一次大戦中は極端な社会排外主義者。戦後はブルジョアジーの政策を支持し、プロレタリアートの革命運動とたたかった。

レンナー、カール(一八七〇―一九五〇)――オーストリア社会民主党の修正主義の代表者。一九一九―一九二〇年首相兼外相。一九三一―一九三三年国民議会議長。第二次大戦後に大統領。

ローモフ、ア(オポーコフ、ゲ・イ)(一八八八―一九三八)――ボリシェヴィキ。十月革命後司法人民委員。一九一八年「左翼共産主義者」。のち最高国民経済会議副議長、ゴスプラン副議長、党中央委員。

レーニン10巻選集 (8)

1970年4月28日第1刷発行
1980年3月15日第12刷発行

¥1200

訳 者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者 平 智 享

発行所 株式会社 大 月 書 店

印刷 三晃印刷
製本 関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話 (813) 4651 振替東京 3-16387

大月書店